

東石井遺跡 西石井遺跡

— 1・2・3次調査地 —

— 本文編 —

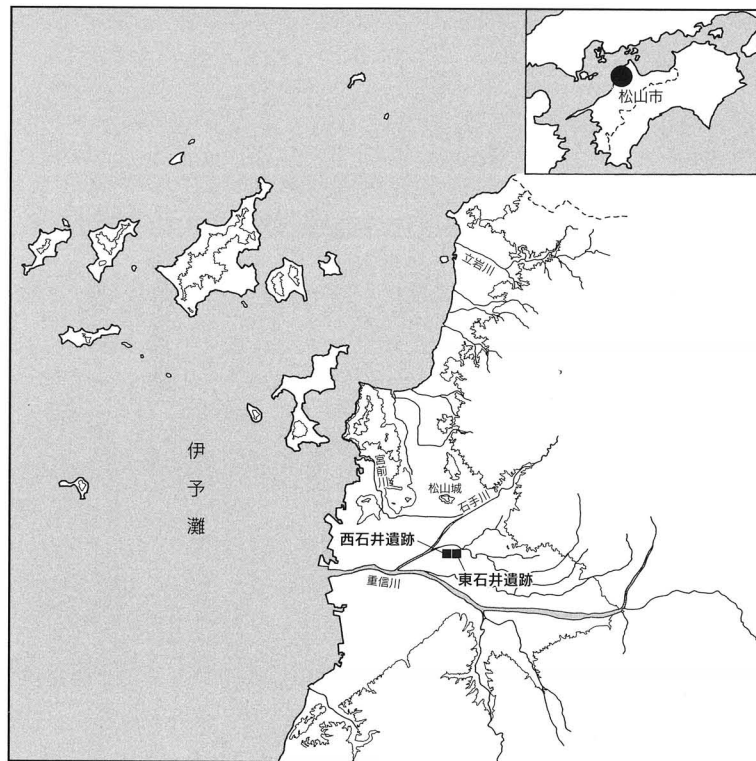
2005

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

ひがし いし い
東 石 井 遺 跡
にし いし い
西 石 井 遺 跡

— 1・2・3次調査地 —

— 本 文 編 —



2005

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



巻頭図版1 調査地遠景 (南より)



巻頭図版2 西石井遺跡1次調査地SD201遺物出土状況（北東より）

序

本書は、松山市南部の石井地区で実施した4遺跡の発掘調査報告書です。調査は松山市道『北久米和泉線』道路改良工事に伴うもので、平成13年度から15年度までの3年間にわたり実施しました。

遺跡からは、主に弥生時代中期から中世までの遺構や遺物が多数見つかりました。弥生時代中期では、西石井遺跡2次調査地において竪穴式住居址や溝が発見され、溝内からは大量の石器未成品が出土したことから、石器製作に携わる人々が遺跡周辺に暮らしていたことや、当時の石器製作の手法を知る手がかりを得ることができました。また、弥生時代後期では、松山平野内でも検出例の少ない井戸址が17基も見つかりました。これは、平野における井戸の構造や配置、さらには井戸の利用方法を知るうえで重要な資料となるものです。

古墳時代では、西石井遺跡1次調査地検出の溝内から、古墳時代初頭に時期比定される大量の土器が出土しました。この中には他地域の土器も含まれており、他地域との交流はもとより、当時の生活習慣や日常用具の様相を示す良好な資料を得ることができました。

これらの調査結果は、松山平野南部の弥生時代から中世までの集落様相を明らかにするとともに、景観を復元するうえで貴重な資料となるものです。

本書の刊行にあたり、ご指導、ご協力を頂きました関係各位ならびに関係機関に対し厚くお礼を申し上げます。

また、本書が埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、さらには文化財保護、生涯教育の向上に寄与できることを願っております。

平成18年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理事長 中村時広

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成13年度から平成15年度までに実施した松山市道北久米和泉線道路改良工事に伴う事前の発掘調査報告書である。
2. 本書報告の遺構は、呼称名を略号化して記述した。竪穴式住居址：S B、掘立柱建物址：掘立、溝：S D、自然流路：S R、土坑：S K、井戸：S E、土器棺墓：土器棺、土器溜まり及び、性格不明遺構：S X、ピット：S Pである。
3. 本書で使用した標高数値は海拔標高を示し、方位はすべて国土座標を基準とした真北である。
4. 遺構の実測は宮内慎一の責任のもと、水本完児、相原秀仁が中心におこない、遺構の撮影は水本、相原、大西朋子がおこなった。遺物撮影と図版作成は大西がおこなった。
5. 本書報告の遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
6. 遺物の実測・製図、遺構の製図は、宮内、水本、相原、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、西本三枝、木西嘉子、本多智絵、田崎真理、中村紫、宮内真弓、戸川安子、平岡華美、田中いづみ、吉岡智美、大西陽子、日之西美春がおこなった。
7. 本書の執筆は、第3・5・6章を相原が担当し、第4章は梅木謙一と水本が担当し、他は宮内が担当した。なお、浄書は宮内の指導のもと、平岡直美が担当した。
8. 第7章自然科学分析では、株式会社古環境研究所に珪酸体や樹種の分析・鑑定を頂いた。
9. 調査及び報告書作成においては、愛媛大学下條信行、田崎博之、徳島文理大学大久保徹也、田原本町教育委員会藤田三郎、財団法人広島県教育事業団伊藤実、総社市教育委員会平井典子の諸先生方にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。
10. 本書の編集は宮内慎一が行い、梅木謙一、水口あをいの協力を得た。
11. 本書で報告した遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
12. 報告書作成データは下記である。

製版	写真図版175線	用紙	本 文	マットアート系	62.5kg
印刷	オフセット印刷		折 図	マットアート系	62.5kg
製本	アジロ綴じ		巻頭図版	マットコート系	76.5kg

本文目次

第1章	はじめに	[宮内]	1
	1. 調査に至る経緯	2. 刊行組織	3. 環境
第2章	調査の概要	[宮内]	5
	1. 調査の経緯	2. 層位	
第3章	東石井遺跡	[相原]	13
	1. 調査の経緯	2. 層位	3. 弥生時代の遺構と遺物
	4. 古墳時代の遺構と遺物	5. 古代の遺構と遺物	6. その他の遺構と遺物
	7. 小結		
第4章	西石井遺跡1次調査地	[梅木・水本]	81
	1. 調査の経緯	2. 層位	3. 弥生時代の遺構と遺物
	4. 古墳時代の遺構と遺物	5. 古代の遺構と遺物	6. 中世の遺構と遺物
	7. その他の遺構と遺物	8. 小結	
第5章	西石井遺跡2次調査地	[相原]	263
	1. 調査の経緯	2. 層位	3. 弥生時代の遺構と遺物
	4. その他の遺構と遺物	5. 小結	
第6章	西石井遺跡3次調査地	[相原]	373
	1. 調査の経緯	2. 層位	3. 弥生時代の遺構と遺物
	4. 古墳時代の遺構と遺物	5. 中近世の遺構と遺物	6. その他の遺構と遺物
	7. 小結		
第7章	自然科学分析	[株式会社 古環境研究所]	453
	I. 西石井遺跡1次調査地1区における樹種同定		
	II. 西石井遺跡2次調査地における植物珪酸体(プラント・オパール)分析		
	III. 西石井遺跡2次調査地における植物珪酸体分析		
	IV. 西石井遺跡2次調査地における樹種同定		
第8章	調査の成果と課題	[宮内]	473

巻頭図版1 調査地遠景（南より）

巻頭図版2 西石井遺跡1次調査地S D201遺物出土状況（北東より）

挿図・表目次

第1章 はじめに

第1図 周辺の遺跡分布図（1）（縮尺1：50,000）	2
第2図 周辺の遺跡分布図（2）（縮尺1：25,000）	4

第2章 調査の概要

第3図 調査地位置図（縮尺1：6,000）	7
表1 検出遺構一覧	8
第4図 調査地位置図・土層模式図（1）（縮尺1：2,000）	9
第5図 調査地位置図・土層模式図（2）（縮尺1：2,000）	11

第3章 東石井遺跡

表2 調査区一覧	13
第6図 1区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	15
第7図 2A・2B区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	17
第8図 2C区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	18
第9図 2D・2E区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	19
第10図 3A・3B区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	20
第11図 3D区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	21
第12図 3C区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	23
第13図 S B201測量図（縮尺1：60）	24
第14図 S B201出土遺物実測図（1）（縮尺1：4）	25
第15図 S B201（2）・S B201内S K①出土遺物実測図（縮尺1：4）	26
第16図 S B304測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4・1：3）	28
第17図 S D102・103・105測量図（縮尺1：80）	29
第18図 S D105出土遺物実測図（1）（縮尺1：4）	30
第19図 S D105出土遺物実測図（2）（縮尺1：4）	31
第20図 S D104測量図（縮尺1：80）	32
第21図 S D104出土遺物実測図（1）（縮尺1：4）	33
第22図 S D104出土遺物実測図（2）（縮尺1：4）	34
第23図 S D104出土遺物実測図（3）（縮尺1：4・1：3）	35
第24図 S D203・204測量図（縮尺1：80）	37
第25図 S K301・306・307・309測量図（縮尺1：60）	
第26図 S K309出土遺物実測図（縮尺1：4）	38
第27図 S E103測量図（縮尺1：60）	39
第28図 S E103出土遺物実測図（縮尺1：4）	40

第29図	S E102測量図 (縮尺 1 : 60)	41
第30図	S E102出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	42
第31図	S E102出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4)	43
第32図	S E102出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 : 4)	44
第33図	S E101測量図 (縮尺 1 : 60)	45
第34図	S E101出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4)	46
第35図	S E301測量図 (縮尺 1 : 60)	47
第36図	S E301出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	48
第37図	S X101測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4 · 1 : 3)	50
第38図	S X102測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4 · 1 : 3)	51
第39図	S R201出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4)	52
第40図	掘立101測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	53
第41図	掘立301測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4 · 1 : 3)	54
第42図	掘立302測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4 · 1 : 3)	55
第43図	S D106測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 3)	56
第44図	S D202 · 205測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 3)	58
第45図	S D309測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 3)	59
第46図	S D311 · 304 · 305測量図 · S D311出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4 · 1 : 3)	60
第47図	S K302 · 308測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4 · 1 : 3)	62
第48図	S K305 · 304 · 303測量図 · S K305出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4 · 1 : 3)	63
第49図	S X301測量図 (縮尺 1 : 60)	
第50図	S D101測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4 · 1 : 3)	65
第51図	S D202出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	66
第52図	S D301 · 302 · 308測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4 · 1 : 3)	67
第53図	S D201 · 303 · 306 · 307 · 310測量図 (縮尺 1 : 80)	68
第54図	S K310測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 30 · 1 : 4 · 1 : 3)	69
第55図	S P出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	71
第56図	第Ⅱ層出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	72
第57図	第Ⅲ①層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4 · 1 : 3 · 1 : 2)	73
第58図	第Ⅲ②層出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4)	74
第59図	第Ⅲ②層出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	75
第60図	第Ⅳ層出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	76
第61図	出土地点不明遺物実測図 (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	77

第4章 西石井遺跡1次調査地

表3	調査区一覽	81
第62図	1区遺構配置図 · 土層図 (縮尺 1 : 150 · 1 : 50)	83
第63図	2区遺構配置図 · 土層図 (縮尺 1 : 150 · 1 : 50)	85
第64図	3区遺構配置図 · 土層図 (縮尺 1 : 150 · 1 : 50)	87
第65図	4区遺構配置図 · 土層図 (縮尺 1 : 150 · 1 : 50)	88
第66図	5区遺構配置図 · 土層図 (縮尺 1 : 150 · 1 : 50)	89

第67図	S B 101測量図 (縮尺 1 : 60)	92
第68図	S B 101出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	93
第69図	S B 101出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4)	94
第70図	S B 101出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 : 4)	95
第71図	S B 101出土遺物実測図 (4) (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	96
第72図	S B 101出土遺物実測図 (5) (縮尺 1 : 3)	97
第73図	S B 102測量図 (縮尺 1 : 60)	98
第74図	S B 102出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	99
第75図	S B 102出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4 · 1 : 2 · 1 : 1)	100
第76図	S B 202測量図 (縮尺 1 : 60)	102
第77図	S B 202出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	103
第78図	S B 202出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4)	104
第79図	S B 202出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 : 4)	105
第80図	S B 202出土遺物実測図 (4) (縮尺 1 : 4)	106
第81図	S B 202出土遺物実測図 (5) (縮尺 1 : 4)	107
第82図	S B 202出土遺物実測図 (6) (縮尺 1 : 4)	108
第83図	S B 202出土遺物実測図 (7) (縮尺 1 : 4)	109
第84図	S B 202出土遺物実測図 (8) (縮尺 1 : 4 · 1 : 2)	110
第85図	S B 202 · S K 201出土遺物実測図 (S B 202 · S K 201接合) (縮尺 1 : 4)	111
第86図	S B 203測量図 (縮尺 1 : 60)	112
第87図	S B 203出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4 · 1 : 3 · 1 : 2)	113
第88図	S B 205測量図 (縮尺 1 : 60)	114
第89図	S B 205出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	115
第90図	S B 205出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4)	116
第91図	S B 205出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 : 4)	117
第92図	S B 205出土遺物実測図 (4) (縮尺 1 : 4 · 1 : 3 · 1 : 2)	118
第93図	S B 206測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	119
第94図	S B 301測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4 · 1 : 3 · 1 : 2)	120
第95図	S B 303測量図 (縮尺 1 : 60)	121
第96図	S B 303出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	122
第97図	S B 401測量図 (縮尺 1 : 60)	123
第98図	S D 202測量図 (縮尺 1 : 80)	124
第99図	S D 202出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	125
第100図	S D 205測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4)	
第101図	S D 207測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4)	126
第102図	S D 402測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4 · 1 : 3)	127
第103図	S D 204 · 206 · 403 ~ 406測量図 (縮尺 1 : 80)	128
第104図	S D 503測量図 (縮尺 1 : 80)	130
第105図	S D 503出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	131
第106図	S D 503出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4)	132
第107図	S D 503出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 : 4)	133

第108図	S D503出土遺物実測図 (4) (縮尺1:4)	134
第109図	S D503出土遺物実測図 (5) (縮尺1:4)	135
第110図	S D503出土遺物実測図 (6) (縮尺1:4)	136
第111図	S D503出土遺物実測図 (7) (縮尺1:4)	137
第112図	S D503出土遺物実測図 (8) (縮尺1:4)	138
第113図	S D503出土遺物実測図 (9) (縮尺1:4)	139
第114図	S D503出土遺物実測図 (10) (縮尺1:4)	140
第115図	S D503出土遺物実測図 (11) (縮尺1:4・1:3)	141
第116図	S D503出土遺物実測図 (12) (縮尺1:3)	142
第117図	S D504測量図 (縮尺1:80)	143
第118図	S D504出土遺物実測図 (1) (縮尺1:4)	144
第119図	S D504出土遺物実測図 (2) (縮尺1:3)	145
第120図	S K101測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:60・1:4)	146
第121図	S K102出土遺物実測図 (縮尺1:4)	147
第122図	S K201測量図 (縮尺1:60)	148
第123図	S K201出土遺物実測図 (1) (縮尺1:4)	149
第124図	S K201出土遺物実測図 (2) (縮尺1:4)	150
第125図	S K201出土遺物実測図 (3) (縮尺1:4)	151
第126図	S K201出土遺物実測図 (4) (縮尺1:4)	152
第127図	S K201出土遺物実測図 (5) (縮尺1:4)	153
第128図	S K201出土遺物実測図 (6) (縮尺1:4)	154
第129図	S K201出土遺物実測図 (7) (縮尺1:4)	155
第130図	S K201出土遺物実測図 (8) (縮尺1:3・1:2)	156
第131図	S K201・S B202出土遺物実測図 (S K201・S B202接合) (縮尺1:4)	157
第132図	S K204測量図 (縮尺1:60)	158
第133図	S K204出土遺物実測図 (1) (縮尺1:4)	159
第134図	S K204出土遺物実測図 (2) (縮尺1:4)	160
第135図	S K204出土遺物実測図 (3) (縮尺1:4)	161
第136図	S K204他出土遺物実測図 (S K204・S K201・S B202接合) (縮尺1:4・1:3)	162
第137図	S K401測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:60・1:4・1:3)	163
第138図	S K403・404測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:60・1:4・1:3)	164
第139図	S K405・501測量図・S K405出土遺物実測図 (縮尺1:60・1:4)	165
第140図	S K502測量図・S K501内S K①・②・502出土遺物実測図 (縮尺1:60・1:4・1:3)	166
第141図	S K504測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:60・1:4)	167
第142図	S K505・507測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:60・1:4・1:3)	168
第143図	S K503・302・406・506測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:60・1:4)	170
第144図	S E502測量図・出土遺物実測図 (1) (縮尺1:60・1:4)	172
第145図	S E502出土遺物実測図 (2) (縮尺1:4・1:3)	173
第146図	S E501測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:60・1:4)	174
第147図	土器棺墓201測量図 (縮尺1:20)	

第148図	土器棺墓201出土遺物実測図 (縮尺1 : 4)	175
第149図	土器棺墓202測量図・出土遺物実測図 (縮尺1 : 20・1 : 4)	176
第150図	土器棺墓402測量図・出土遺物実測図 (縮尺1 : 20・1 : 4)	177
第151図	S B 204・204内炉測量図 (縮尺1 : 60・1 : 20)	179
第152図	S B 204出土遺物実測図 (縮尺1 : 4・1 : 3)	180
第153図	S B 302測量図・出土遺物実測図 (縮尺1 : 60・1 : 4・1 : 3)	181
第154図	S D 201測量図 (縮尺1 : 40)	184
第155図	S D 201遺物出土状況 (縮尺1 : 60・1 : 12)	185
第156図	S D 201出土遺物実測図 (0 - 1区間) (1) (縮尺1 : 4)	187
第157図	S D 201出土遺物実測図 (0 - 1区間) (2) (縮尺1 : 4)	188
第158図	S D 201出土遺物実測図 (0 - 1区間) (3) (縮尺1 : 4)	189
第159図	S D 201出土遺物実測図 (0 - 1区間) (4) (縮尺1 : 4)	190
第160図	S D 201出土遺物実測図 (2区) (1) (縮尺1 : 4)	191
第161図	S D 201出土遺物実測図 (2区) (2) (縮尺1 : 4)	192
第162図	S D 201出土遺物実測図 (2区) (3) (縮尺1 : 4)	193
第163図	S D 201出土遺物実測図 (2区) (4) (縮尺1 : 4)	194
第164図	S D 201出土遺物実測図 (2区) (5) (縮尺1 : 4)	195
第165図	S D 201出土遺物実測図 (2区) (6) (縮尺1 : 4)	196
第166図	S D 201出土遺物実測図 (3区) (1) (縮尺1 : 4)	197
第167図	S D 201出土遺物実測図 (3区) (2) (縮尺1 : 4)	198
第168図	S D 201出土遺物実測図 (3区) (3) (縮尺1 : 4)	199
第169図	S D 201出土遺物実測図 (3区) (4) (縮尺1 : 4)	200
第170図	S D 201出土遺物実測図 (3区) (5) (縮尺1 : 4)	201
第171図	S D 201出土遺物実測図 (3区) (6) (縮尺1 : 4)	202
第172図	S D 201出土遺物実測図 (3区) (7) (縮尺1 : 4)	203
第173図	S D 201出土遺物実測図 (3区) (8) (縮尺1 : 4)	204
第174図	S D 201出土遺物実測図 (3区) (9) (縮尺1 : 4)	205
第175図	S D 201出土遺物実測図 (3区(10)・4区) (縮尺1 : 4)	206
第176図	S D 201出土遺物実測図 (0 - 1区1層・2層(1)) (縮尺1 : 4)	207
第177図	S D 201出土遺物実測図 (0 - 1区2層) (2) (縮尺1 : 4・1 : 2)	208
第178図	S D 201出土遺物実測図 (0 - 1区3層) (1) (縮尺1 : 4)	209
第179図	S D 201出土遺物実測図 (0 - 1区3層) (2) (縮尺1 : 4)	210
第180図	S D 201出土遺物実測図 (0 - 1区3層) (3) (縮尺1 : 4)	211
第181図	S D 201出土遺物実測図 (0 - 1区3層(4)・4層・5層・層不明) (縮尺1 : 4)	212
第182図	S D 201出土遺物実測図 (2区1層) (縮尺1 : 4)	213
第183図	S D 201出土遺物実測図 (2区2層) (縮尺1 : 4)	214
第184図	S D 201出土遺物実測図 (2区3層) (1) (縮尺1 : 4)	215
第185図	S D 201出土遺物実測図 (2区3層) (2) (縮尺1 : 4)	216
第186図	S D 201出土遺物実測図 (2区3層) (3) (縮尺1 : 4)	217
第187図	S D 201出土遺物実測図 (3 - 4区1層・2層(1)) (縮尺1 : 4)	218
第188図	S D 201出土遺物実測図 (3 - 4区2層) (2) (縮尺1 : 4)	219

第189図	S D201出土遺物実測図 (3-4区3層) (1) (縮尺1:4)	220
第190図	S D201出土遺物実測図 (3-4区3層) (2) (縮尺1:4)	221
第191図	S D201出土遺物実測図 (3-4区3層) (3) (縮尺1:4)	222
第192図	S D201出土遺物実測図 (3-4区3層) (4) (縮尺1:6・1:4)	223
第193図	S D201出土遺物実測図 (3-4区3層) (5) (縮尺1:4)	224
第194図	S D201出土遺物実測図 (3-4区3層) (6) (縮尺1:4)	225
第195図	S D201出土遺物実測図 (3-4区4層・層不明・7区1・2層) (縮尺1:4・1:2)	226
第196図	S D201出土遺物実測図 (5-7区3層) (1) (縮尺1:4)	227
第197図	S D201出土遺物実測図 (5-7区3層) (2) (縮尺1:4)	228
第198図	S D201出土遺物実測図 (5-7区3層) (3) (縮尺1:4)	229
第199図	S D201出土遺物実測図 (5-7区3層) (4) (縮尺1:4)	230
第200図	S D201出土遺物実測図 (5-7区3層) (5) (縮尺1:4)	231
第201図	S D201出土遺物実測図 (5-7区3層) (6) (縮尺1:4)	232
第202図	S D201出土遺物実測図 (5-7区3層) (7) (縮尺1:4)	233
第203図	S D201出土遺物実測図 (5-7区3層) (8) (縮尺1:4)	234
第204図	S D201出土遺物実測図 (5-7区3層) (9) (縮尺1:4)	235
第205図	S D201出土遺物実測図 (5-7区3層) (10) (縮尺1:4)	236
第206図	S D201出土遺物実測図 (5-7区3層) (11) (縮尺1:4)	237
第207図	S D201出土遺物実測図 (5-7区4・5層他) (縮尺1:4)	238
第208図	S D201出土遺物実測図 (2層・地点不明) (縮尺1:4・1:2)	239
第209図	S D201出土遺物実測図 (0-1区) (1) (縮尺1:3・1:1)	240
第210図	S D201出土遺物実測図 (0-1区) (2) (縮尺1:3・1:1)	241
第211図	S D201出土遺物実測図 (2区・3区) (縮尺1:3)	242
第212図	S D201出土遺物実測図 (5-7区) (縮尺1:3)	243
第213図	S D507測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:80・1:4・1:3・1:1)	244
第214図	S D401・S K303測量図 (縮尺1:80・1:60)	245
第215図	S K202測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:60・1:4)	246
第216図	S X201測量図 (縮尺1:60)	247
第217図	S X201出土遺物実測図 (縮尺1:3・1:2・1:1)	248
第218図	S D501測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:80・1:4)	250
第219図	S D502測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:80・1:4・1:3)	251
第220図	S P出土遺物実測図 (1) (縮尺1:4)	252
第221図	S P出土遺物実測図 (2) (縮尺1:3)	253
第222図	包含層出土遺物実測図 (1区) (1) (縮尺1:4・1:3)	254
第223図	包含層出土遺物実測図 (2区) (2) (縮尺1:4)	255
第224図	包含層出土遺物実測図 (2区) (3) (縮尺1:4・1:3・1:2・1:1)	256
第225図	包含層出土遺物実測図 (3区・4区) (4) (縮尺1:4・1:3・1:1)	257
第226図	包含層出土遺物実測図 (4区) (5) (縮尺1:4・1:3・1:2)	258
第227図	包含層出土遺物実測図 (4区) (6) (縮尺1:4・1:3・1:2)	259
第228図	包含層出土遺物実測図 (5区) (7) (縮尺1:4・1:3・1:1)	260

第229図	包含層（6区）・表採遺物実測図（縮尺1：4・1：3）	261
-------	----------------------------	-----

第5章 西石井遺跡2次調査地

表4	調査区一覽	263
第230図	1区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	265
第231図	2A区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	266
第232図	2B区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	267
第233図	3区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	269
第234図	4区遺構配置図・土層図（縮尺1：150・1：50）	271
第235図	S B 201測量図（縮尺1：60）	273
第236図	S B 201内S K①～④測量図（縮尺1：30）	274
第237図	S B 201出土遺物実測図（縮尺1：4）	275
第238図	S B 203測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	276
第239図	S B 204測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	277
第240図	S B 205測量図（縮尺1：60）	278
第241図	S B 205出土遺物実測図（縮尺1：4）	279
第242図	S B 206測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	280
第243図	S B 209測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	281
第244図	S B 212測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	282
第245図	S B 304測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	283
第246図	S B 305測量図（縮尺1：60）	284
第247図	S B 305出土遺物実測図（1）（縮尺1：4・1：3）	285
第248図	S B 305出土遺物実測図（2）（縮尺1：6・1：3）	286
第249図	S B 307測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	287
第250図	S B 207測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	288
第251図	S B 302・302内炉測量図（縮尺1：60・1：20）	289
第252図	S B 302出土遺物実測図（縮尺1：4）	290
第253図	S B 303測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	291
第254図	掘立301測量図（縮尺1：60）	292
第255図	S D 304測量図（縮尺1：80）	294
第256図	S D 304出土遺物実測図（1）（縮尺1：4）	295
第257図	S D 304出土遺物実測図（2）（縮尺1：4・1：3）	296
第258図	S D 304出土遺物実測図（3）（縮尺1：3）	297
第259図	S D 304出土遺物実測図（4）（縮尺1：3）	298
第260図	北壁土層・S D 401・402断面測量図（縮尺1：80）	299
第261図	S D 402出土遺物実測図（1）（縮尺1：4）	302
第262図	S D 402出土遺物実測図（2）（縮尺1：4）	303
第263図	S D 402出土遺物実測図（3）（縮尺1：4）	304
第264図	S D 402出土遺物実測図（4）（縮尺1：4・1：3）	305
第265図	S D 402出土遺物実測図（5）（縮尺1：3）	306
第266図	S D 402出土遺物実測図（6）（縮尺1：3）	307

第267図	S D402出土遺物実測図 (7) (縮尺 1 : 3)	308
第268図	S D402出土遺物実測図 (8) (縮尺 1 : 3)	309
第269図	S D401出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	310
第270図	S D401出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	311
第271図	S D401出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 : 3)	312
第272図	S D401出土遺物実測図 (4) (縮尺 1 : 3 · 1 : 2)	313
第273図	S D101測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4 · 1 : 3)	314
第274図	S D201 · 202 · 204 · 301 · 302測量図 (縮尺 1 : 80)	316
第275図	S K101測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4 · 1 : 3)	317
第276図	S K204測量図 (縮尺 1 : 60)	318
第277図	S K302 · 306測量図 (縮尺 1 : 60)	319
第278図	S K207 · 210測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	320
第279図	S K211 · 212測量図 (縮尺 1 : 60)	321
第280図	S K408測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	323
第281図	S K409測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	324
第282図	S K203測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	325
第283図	S K303 · 304測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4 · 1 : 3)	326
第284図	S K305測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	327
第285図	S K410 · 301測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	328
第286図	S K414 · 401測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	329
第287図	S K205測量図 (縮尺 1 : 60)	330
第288図	S K205出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4)	331
第289図	S K209 · 202測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	333
第290図	S K402 · 403 · 405 · 412測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	334
第291図	S E301測量図 (縮尺 1 : 60)	335
第292図	S E301出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	336
第293図	S E301出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	337
第294図	S E401測量図 (縮尺 1 : 60)	339
第295図	S E401出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	340
第296図	S E401出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4)	341
第297図	S E401出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 : 4)	342
第298図	S E401出土遺物実測図 (4) (縮尺 1 : 4)	343
第299図	S E401出土遺物実測図 (5) (縮尺 1 : 4)	344
第300図	S E402測量図 (縮尺 1 : 60)	345
第301図	S E402出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	346
第302図	S E402出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4)	347
第303図	S E402出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 : 4)	348
第304図	S E402出土遺物実測図 (4) (縮尺 1 : 4)	349
第305図	S E404測量図 (縮尺 1 : 60)	
第306図	S E404出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	350
第307図	S E404出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	351

第308図	S E405測量図 (縮尺 1 : 60)	352
第309図	S E405出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4)	353
第310図	S E403測量図 (縮尺 1 : 60)	354
第311図	S E403出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	356
第312図	S E403出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4)	357
第313図	S E403出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 : 4)	358
第314図	S E403出土遺物実測図 (4) (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	359
第315図	S X201出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4)	360
第316図	S X202出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	361
第317図	S X202出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4)	362
第318図	S X202 (3) · 203出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4)	363
第319図	S P 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4)	365
第320図	第Ⅲ層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	366
第321図	第Ⅲ層出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 3 · 1 : 2)	367
第322図	第Ⅳ層出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4)	368
第323図	出土地点不明遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 6 · 1 : 4 · 1 : 3)	369
第324図	出土地点不明遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 3 · 1 : 2)	370

第 6 章 西石井遺跡 3 次調査地

表 5	調査区一覽	373
第325図	1 区遺構配置図 · 土層図 (縮尺 1 : 150 · 1 : 50)	375
第326図	2 区遺構配置図 · 土層図 (縮尺 1 : 150 · 1 : 50)	377
第327図	3 A 区 · 3 B 区遺構配置図 · 土層図 (縮尺 1 : 150 · 1 : 50)	379
第328図	3 C 区遺構配置図 · 土層図 (縮尺 1 : 150 · 1 : 50)	381
第329図	S B101測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	382
第330図	S B201測量図 (縮尺 1 : 60)	383
第331図	S B201出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 4)	384
第332図	S B201出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	385
第333図	S D117測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4)	387
第334図	S D112測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4)	388
第335図	S D107測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4)	
第336図	S D110 · 111測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4)	389
第337図	S D108 · 114 · 116測量図 (縮尺 1 : 80)	390
第338図	S D201 · 202測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4 · 1 : 3)	391
第339図	S D203 ~ 206測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4 · 1 : 3)	393
第340図	S D207 · 301 · 303 · 304測量図 (縮尺 1 : 80)	395
第341図	S D304出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4)	396
第342図	S K104測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 4)	397
第343図	S K105 · 201 · 117測量図 · 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 40 · 1 : 4)	398
第344図	S K102 · 103 · 119 · 202測量図 (縮尺 1 : 60 · 1 : 40 · 1 : 30)	399
第345図	S K202出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4)	400

第346図	S K 203・209測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	401
第347図	S K 209出土遺物実測図（縮尺1：4）	402
第348図	S K 212・114・120・121測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	403
第349図	S K 210・301・303・304・310測量図（縮尺1：60）	404
第350図	S E 101測量図（縮尺1：60）	405
第351図	S E 101出土遺物実測図（1）（縮尺1：4）	406
第352図	S E 101出土遺物実測図（2）（縮尺1：4）	407
第353図	S E 102測量図（縮尺1：60）	408
第354図	S E 102出土遺物実測図（1）（縮尺1：4）	409
第355図	S E 102出土遺物実測図（2）（縮尺1：4）	410
第356図	S E 102出土遺物実測図（3）（縮尺1：4）	411
第357図	S E 102出土遺物実測図（4）（縮尺1：4）	412
第358図	S E 301測量図（縮尺1：60）	413
第359図	S E 301出土遺物実測図（1）（縮尺1：4）	414
第360図	S E 301出土遺物実測図（2）（縮尺1：4）	415
第361図	S E 301出土遺物実測図（3）（縮尺1：4）	416
第362図	S E 103測量図（縮尺1：60）	417
第363図	S E 103出土遺物実測図（1）（縮尺1：4）	419
第364図	S E 103出土遺物実測図（2）（縮尺1：4）	420
第365図	S E 103出土遺物実測図（3）（縮尺1：4）	421
第366図	S E 103出土遺物実測図（4）（縮尺1：4）	422
第367図	S E 103出土遺物実測図（5）（縮尺1：4・1：3）	423
第368図	S E 104測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	424
第369図	土器棺墓101測量図（縮尺1：20）	425
第370図	土器棺墓101出土遺物実測図（縮尺1：6）	426
第371図	土器棺墓102測量図・出土遺物実測図（縮尺1：20・1：6・1：2）	427
第372図	S X 101・105出土遺物実測図（縮尺1：4・1：3）	428
第373図	S X 106・201・202出土遺物実測図（縮尺1：4）	429
第374図	S X 203・204・205出土遺物実測図（縮尺1：4）	430
第375図	掘立201測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4・1：3・1：1）	432
第376図	掘立202測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：4）	433
第377図	S D 103測量図（縮尺1：80）	434
第378図	S D 103出土遺物実測図（縮尺1：4・1：3）	435
第379図	S D 105測量図・出土遺物実測図（縮尺1：80・1：4・1：3）	436
第380図	S D 113測量図・出土遺物実測図（縮尺1：80・1：3）	437
第381図	S D 305・306測量図（縮尺1：80）	438
第382図	S K 112・118・311測量図（縮尺1：60）	
第383図	S D 101・104・106測量図（縮尺1：80）	439
第384図	S D 102測量図・出土遺物実測図（縮尺1：80・1：4・1：3）	440
第385図	S K 101測量図・出土遺物実測図（縮尺1：40・1：4・1：3）	441
第386図	S K 205・206測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：3・1：2）	442

第387図	S K113・207・208・306～309測量図（縮尺1：60）	443
第388図	S K106・108・110測量図・出土遺物実測図（縮尺1：40・1：4）	445
第389図	S K109測量図・出土遺物実測図（縮尺1：40・1：4・1：2）	446
第390図	S K115・111測量図・出土遺物実測図（縮尺1：40・1：4）	447
第391図	ピット出土遺物実測図（縮尺1：4・1：3）	448
第392図	包含層出土遺物実測図（1）（縮尺1：4・1：3）	449
第393図	包含層（2）・出土地点不明遺物実測図（縮尺1：4・1：3）	450

第7章 自然科学分析

表6	西石井遺跡1次調査地1区における樹種同定結果	454
第394図	西石井遺跡1次調査地出土の炭化材	455
表7	西石井遺跡2次調査地における植物珪酸体分析結果（1）	460
表8	西石井遺跡2次調査地における植物珪酸体分析結果（2）	461
第395図	西石井遺跡2次調査地S E401における植物珪酸体分析結果	
第396図	西石井遺跡2次調査地1区東壁における植物珪酸体分析結果	462
第397図	西石井遺跡2次調査地3A区東壁における植物珪酸体分析結果	
第398図	西石井遺跡2次調査地3B区南壁における植物珪酸体分析結果	463
第399図	西石井遺跡2次調査地における植物珪酸体分析結果	
第400図	西石井遺跡2次調査地における植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真	464
表9	西石井遺跡2次調査地における植物珪酸体分析結果	468
第401図	西石井遺跡2次調査地4区西壁における植物珪酸体分析結果	469
第402図	西石井遺跡2次調査地4区西壁北側における植物珪酸体分析結果	
第403図	西石井遺跡2次調査地S B201における植物珪酸体分析結果	
第404図	西石井遺跡2次調査地における植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真	470
表10	西石井遺跡2次調査地S B201における樹種同定結果	472
第405図	西石井遺跡2次調査地S B201出土の炭化材	

第1章 はじめに

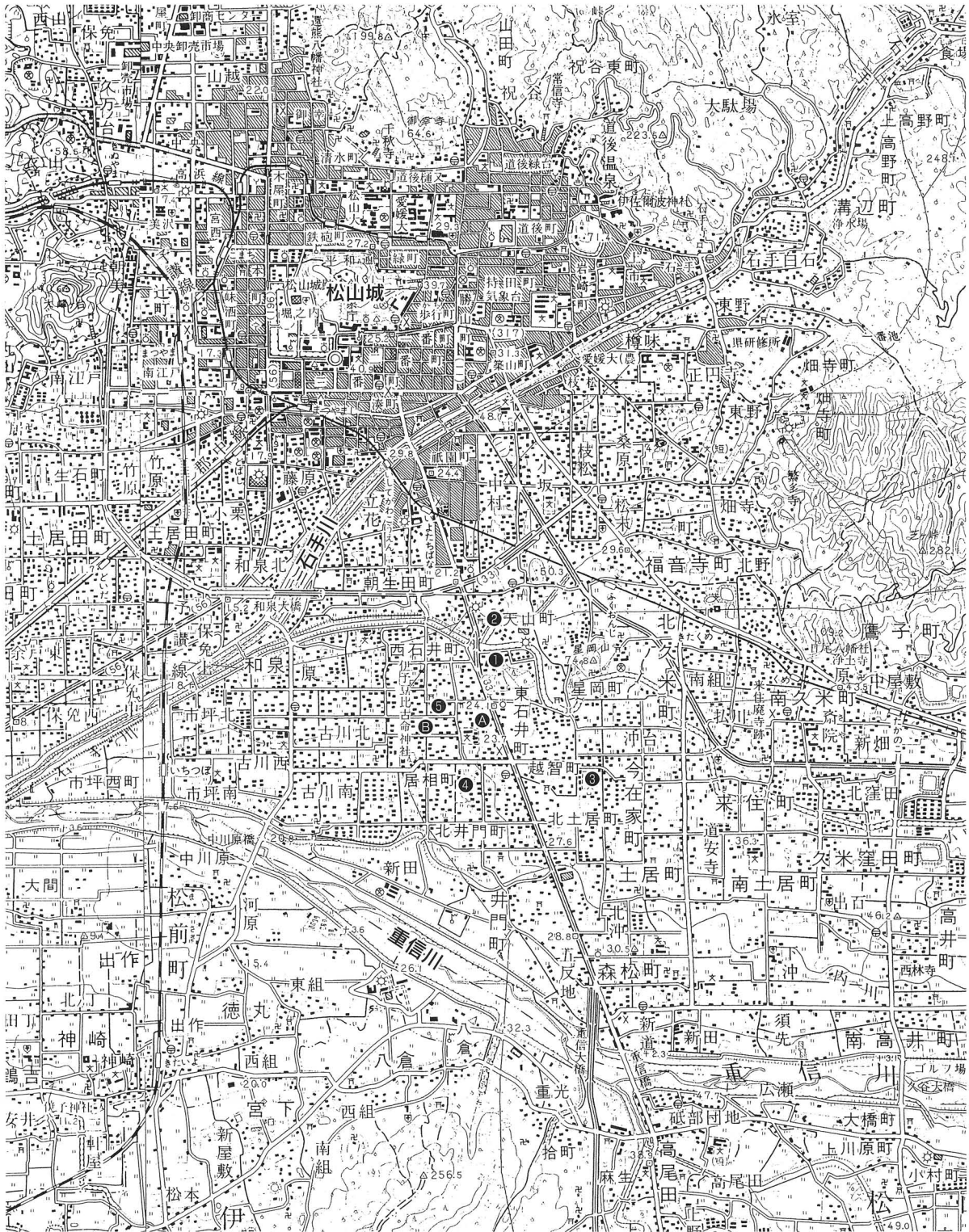
1 調査に至る経緯

2000（平成12）年11月、松山市都市整備部道路建設課より、松山市道北久米和泉線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地が所在する松山市東石井町、西石井町では、これまでに数回の発掘調査が実施されている。申請地北側には弥生時代後期の土坑墓を検出した西石井荒神堂遺跡や、古墳時代から中世までの遺構や遺物が検出された石井幼稚園遺跡1・2次調査地、さらに南側では弥生時代前期の溝を検出した南中学校構内遺跡などが存在する。これらのことから、文化財課と申請者は協議をおこない、申請者が年度ごとに工事対象地の確認願いを提出し、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が試掘調査及び発掘調査を実施することとなった。

工事は平成13年度から15年度までの3ヶ年計画で実施する予定であったため、埋蔵文化財調査は工事と併行しておこなうことになった。まず、平成13年度は申請地東端と西端を調査対象とし、試掘調査及び発掘調査を実施した。平成14年度には申請地中央部西寄り、平成15年度には申請地中央部東よりの地域を調査対象地とした。なお、申請地西側から東側に向けて、西石井遺跡、同遺跡2次調査地、同遺跡3次調査地、東石井遺跡として発掘調査を実施した。

2 刊行組織（平成18年3月31日現在）

松山市教育委員会	教 育 長	土 居 貴 美
事 務 局	局 長	石 丸 修
	企 画 官	松 本 義 文
	企 画 官	仙 波 和 典
	企 画 官	江 戸 通 敏
文 化 財 課	課 長	篠 原 忠 人
	主 幹	家 久 則 雄
	主 幹	田 城 武 志
	主 査	栗 田 正 芳
(財)松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中 村 時 広
	事 務 局 長	一 色 巧
	事 務 局 次 長	石 丸 允 良
	事 務 局 次 長	丹 生 谷 博 一
	事 務 局 調 査 監	杉 田 久 憲
埋蔵文化財センター	所 長	丹 生 谷 博 一
	次 長 兼 調 査 係 長	西 尾 幸 則
	次 長 兼 管 理 係 長	重 松 幹 夫
	学 芸 係 長	大 北 冬 彦
	調 査 員	宮 内 慎 一
		梅 木 謙 一
		水 本 完 児
		相 原 秀 仁



- A 東石井遺跡 ●B 西石井遺跡 (3次)
- 1 東山鷲が森古墳群 ●2 天山天王ヶ森遺跡 ●3 石井東小学校構内遺跡
- 4 南中学校構内遺跡 ●5 石井幼稚園遺跡

第1図 周辺の遺跡分布図(1) (S=1:50,000)

3 環 境 (第1・2図)

松山平野は、伊予灘と燧灘とに挟まれた高縄半島の南西部に位置する。高縄半島中央部には東三方ヶ森、伊之子山、北三方ヶ森、高縄山からなる高縄山系が形成されている。高縄山系は領家変成岩帯に属し、主に中生代に貫入した石英斑岩脈を伴う花崗閃緑岩より構成されている。松山平野は、高縄半島を南北に走る高縄山地に源を発する石手川と重信川とによって形成された沖積平野である。

調査地が所在する石井地区は、平野中央部にあり、石手川支流の小野川と、重信川支流の内川とに挟まれた沖積低地に立地している。

先土器～縄文時代

松山平野内では、先土器時代から縄文時代中期までの遺跡は稀薄であるが、石井地区周辺での採集例がある。同地区北側には独立丘陵があり、丘陵上には東山蔭が森古墳群や天山天王ヶ森遺跡からはサヌカイト製のナイフ形石器が、それぞれ1点ずつ採集されている(重松佳久1992)。

弥生時代

前期の資料は、調査地南東部にある石井東小学校構内遺跡において土坑と土器棺墓が確認されている。土坑出土品や土器棺(壺棺)は前期前半の良好な資料である(梅木謙一他1998)。また、調査地南方にある南中学校構内遺跡からは、前期後半の土器が出土した溝が検出されている。溝出土品は、松山平野の前期後半の土器編年における基準資料である(栗田茂敏1994)。

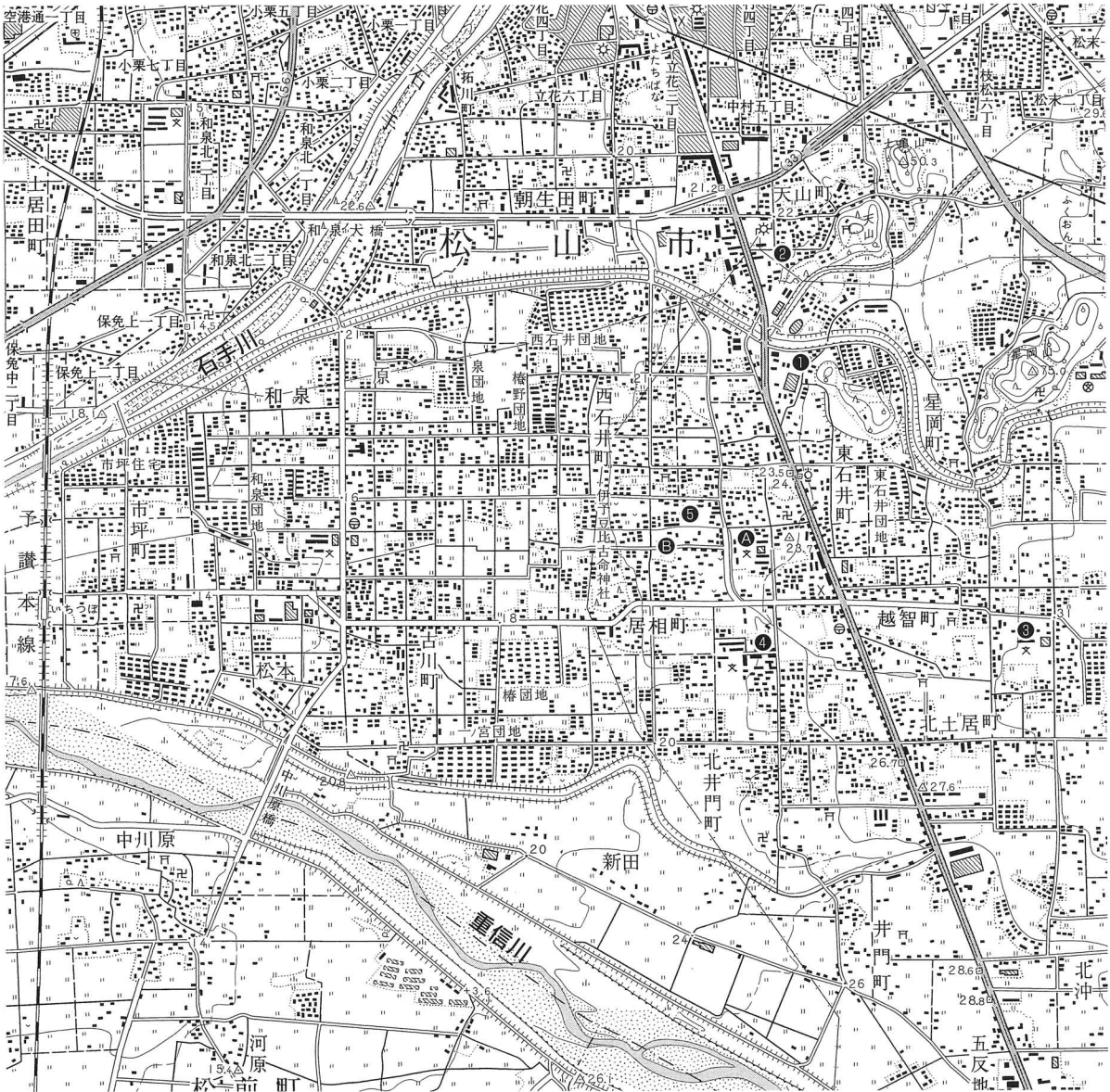
中期の資料はなく、後期以降、遺跡の広がりが認められる。後期前半では、唯一、石井幼稚園遺跡2次調査地において土坑が確認されている。後期後半から終末では、前述の石井東小学校構内遺跡より多数の竪穴式住居址が検出されているほか、調査地北方の西石井荒神堂遺跡では竪穴式住居址と土器棺墓(壺棺)が検出されている(森光晴1980)。

古墳時代

古墳時代では、石井幼稚園遺跡1次調査地(栗田茂敏1994)と同2次調査地から、古墳時代中期の竪穴式住居址がそれぞれ1棟ずつ確認されている。一方、古墳は石井東小学校構内遺跡において、周溝と思われる溝が検出されている。平野内においては数少ない沖積地上の古墳となり、平野における墳墓研究の視点を示す好資料である。

古代～中世

古代において、石井地区は久米郡石井郷に属している。石井郷内には、調査地南方に延喜式内社である「伊予豆比古命神社」が存在する。石井幼稚園遺跡1次調査地からは、平安時代の溝が検出されており、溝内からは大量の土師器、須恵器のほか、緑釉陶器や灰釉陶器が出土している。溝出土の土師器は、平野内における古代後半の土師器編年の基準資料になっている。また、石井幼稚園遺跡2次調査地からは古代から中世の掘立柱建物址や中世の土坑、同1次調査地からも中世の土坑が確認されている。



- A 東石井遺跡 ●B 西石井遺跡 (3次)
- 1 東山鶯が森遺跡郡 ●2 天山天王が森遺跡 ●3 石井東小学校遺跡
- 4 南中学校遺跡 ●5 石井幼稚園遺跡

第2図 周辺の遺跡分布図 (2) (S=1:25,000)

〔文献〕

重松 佳久1992 「石手川水系に於ける旧石器文化」『桑原地区の遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

梅木 謙一1998 「石井東小学校構内遺跡」『石井・浮穴の遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田 茂敏1994 『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡—第2次調査—』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

森 光晴1980 『浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡』松山市教育委員会

第2章 調査の概要

1 調査の経緯（第3図）

申請地は松山市東石井町527番地から古川北2丁目292番地までに位置し、道路幅16m、道路全長1,200m、申請面積は19,200m²である。試掘調査の結果、申請地西端の地域（面積2,800m²）は近現代の攪乱が著しく、発掘調査はこの地域以外を対象地とした。以下、発掘調査及び整理作業内容を説明する。

調査 発掘調査は平成13年度から15年度の3年間にわたって実施した。工事計画と調査の進行上、各調査地内に所在する生活道路によって区割りをおこなった。区割りは各調査地内を3～5箇所の区に分け、西側から順に1・2・・・5区とした。また、生活道路が多い区では、さらに細分区し2A区、3B区などの区名を付けた。調査は平成13年度に、西石井遺跡と東石井遺跡、14年度には西石井遺跡2次調査、15年度には西石井遺跡3次調査をそれぞれ実施した。また、国土座標第IV座標系基準点から調査地内に座標点を移動し、これを基準とした5m方眼のグリットを設定した。グリットは調査毎に西から東へ1・2・3・・・、北から南へA・B・C・Dとし、A1・A2・・・D60といった呼称名を付けた。なお、グリットは検出遺構の位置表示や包含層掘りさげ時の遺物取り上げなどに利用した。調査は重機により表土層を除去し、その後、人力で包含層を掘りさげながら遺構、遺物を検出し、測量及び写真撮影などの観察・記録作りをおこなった。さらに、上空からセスナ機による航空撮影も随時おこなった。

整理 整理作業は平成14年度から発掘調査と併行して遺構図の合成や、遺物復元、実測作業を実施した。平成16年度からは、埋蔵文化財センターにて整理作業と報告書作成作業をおこなった。

説明会 発掘調査中には2度の遺跡説明会を開催した。第1回の説明会〔平成14年1月19日〕は西石井遺跡を対象とし、竪穴式住居址や完形品が多数出土した溝の説明を中心におこない、地域住民をはじめ、松山市道路建設課や教育委員会の関係者など総勢500名に及ぶ参加者を得た。また、第2回の説明会〔平成15年3月15日〕では西石井遺跡2次調査地を対象に、井戸や土坑等の説明をおこなった。

調査指導 発掘調査及び整理作業中には、調査指導及び検討会を実施した。調査中は愛媛大学より2名の先生方（下條信行、田崎博之）、田原本町教育委員会藤田三郎氏を招へいし、西石井遺跡2次調査検出の井戸についての調査方法や、類例などの指導を請う。整理作業中には、報告書を作成するにあたり愛媛大学より前述の2名の先生方と徳島文理大学大久保徹也氏、総社市教育委員会平井典子氏、財団法人広島県教育事業団伊藤実氏の3名を招き、遺構、遺物の検討会を開催した。

2 層位

（1）基本層位（第4・5図）

本書では、申請地全体を通して基本層位を設定した。申請地の基本層位は、第I層表土、第II層灰褐色～褐色土、第III層オリーブ黒色～黒色土、第IV層黄灰色土、第V層暗灰黄色土、第VI層黄褐色～黄色土、第VII層黒色粘質土、第VIII層灰色砂礫層である。現況では申請地東側（東石井遺跡3区）が最も高く、徐々に低くなり申請地西側（西石井遺跡1区）が最も低くなる。標高を測量すると東側が24.2m、西側が19.8mとなる。

第Ⅰ層－近現代の造成に伴う客土と、農耕にかかわる耕作土である。地表下10～60cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層－土色の違いで2層に分層される。ただし、発掘調査時は重機により掘削をおこなったため遺物は分層せずに取り上げた。

第Ⅱ①層：灰褐色土で、西石井遺跡を除く地域で検出した。層厚4～20cmを測る。本層中からは土師器、須恵器、国産陶磁器、輸入陶磁器などが出土した。

第Ⅱ②層：褐色土で、東石井遺跡（1・2C・3B・3C区）と西石井遺跡2次調査地（4区）で検出した。層厚6～20cmを測る。東石井遺跡では、本層上面にて平安期の遺構を検出した。本層中からは主に土師器、須恵器が出土した。

第Ⅲ層－土色、土質の違いで3層に分層される。

第Ⅲ①層：オリーブ黒色土で、西石井遺跡、同2次調査地（1・2B・4区）、同3次調査地（1・2区）、東石井遺跡（1区）で検出した。層厚3～40cmを測り、東石井遺跡が最も厚い堆積をなす。なお、西石井遺跡では、本層上面にて古墳期の遺構を検出した。本層中からは土師器、須恵器が出土した。

第Ⅲ②層：黒褐色土で、西石井遺跡（1・5区）、同2次調査地（4区）、同3次調査地（1・2区）、東石井遺跡（2A～2C・3区）で検出した。層厚4～35cmを測る。東石井遺跡では、本層上面にて、主に古墳時代の遺構を検出した。本層中からは弥生土器、土師器、須恵器、石器等が出土した。

第Ⅲ③層：黒色土で、東石井遺跡のみで検出した。層厚3～30cmを測る。本層中からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

第Ⅳ層－黄灰色土で、西石井遺跡2次調査地（2A区以外）、同3次調査地（2・3A・3B区）、東石井遺跡（1・2A～2C区）で検出した。層厚6～35cmを測る。調査地からは、本層上面にて主に弥生時代後期の遺構を検出した。本層中からは、弥生土器、石器等が出土した。

第Ⅴ層－暗灰黄色土で、西石井遺跡2次調査地（4区）、同3次調査地（1・2・3B区）で検出した。層厚10～30cmを測る。本層中からは、主に弥生時代中期後半から後期の遺物が出土した。

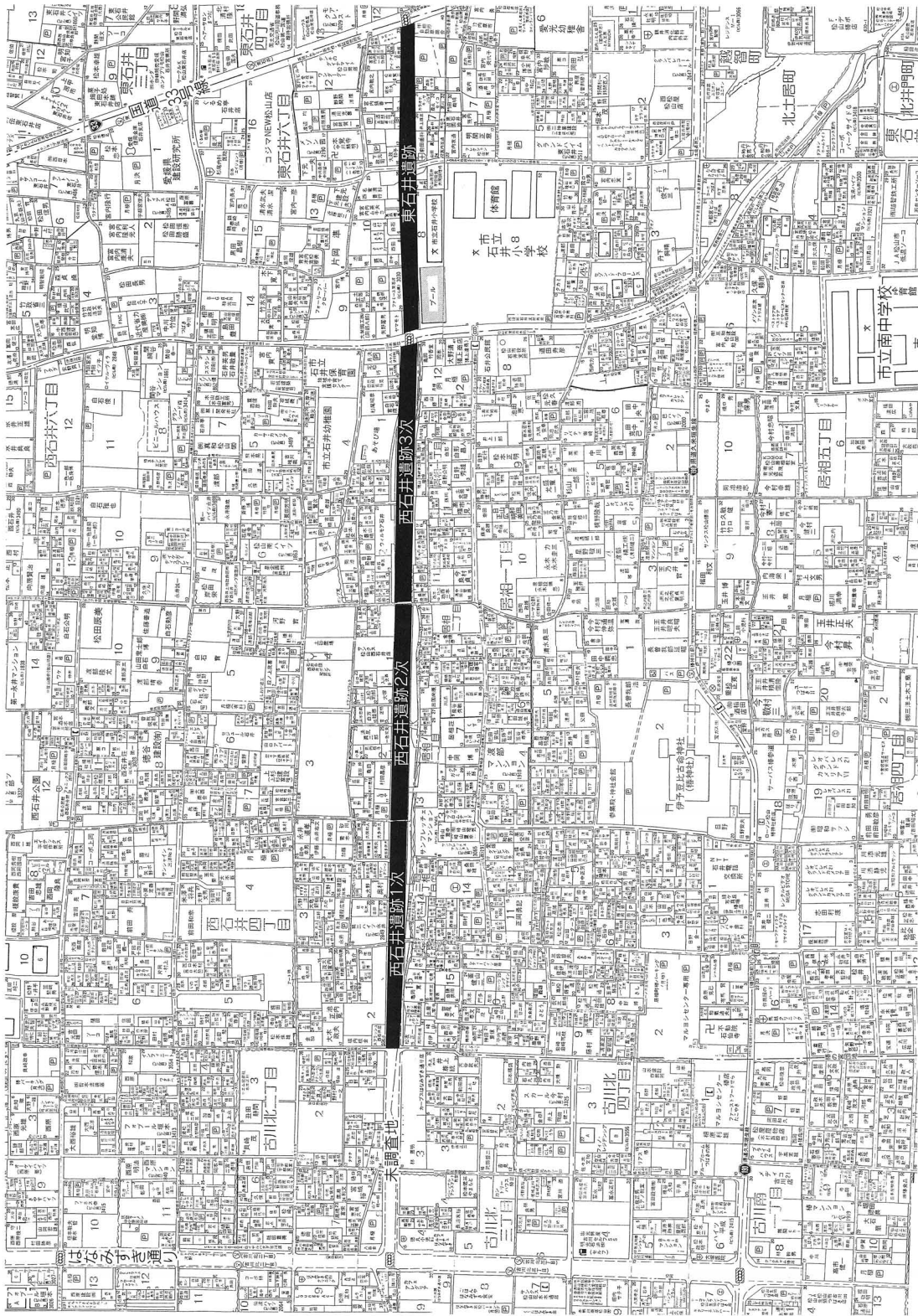
第Ⅵ層－土色・土質の違いで2層に分層される。

第Ⅵ①層：黄褐色土で、申請地ほぼ全域で検出した。層厚4～150cm以上を測り、西石井遺跡2次調査地（4区）が最も厚い堆積をなす。本層上面にて多数の遺構を検出した。

第Ⅵ②層：粘性の強い黄色土で、西石井遺跡（2・3区）、同2次調査地（4区）、同3次調査地（1・2・3A区）、東石井遺跡（1・2A～2C・3D区）にて検出した。層厚8～30cm以上を測る。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅶ層－黒色粘質土で、粘性が著しく強い。申請地中央部東寄り、西石井遺跡3次調査地と東石井遺跡（1・2A・2C区）にて検出した。層厚8～25cm以上を測る。本層からの遺物の出土はない。

第Ⅷ層－小野川、内川の氾濫に起因する河川氾濫堆積物で、灰色粗砂と最大径5×10cm、最小径2×3cmの礫で構成される。本層上面の標高を測量すると、東石井遺跡（3D区）が最も高く、標高23.6m、西石井遺跡（1区）が最も低く標高19.3mとなる。なお、西石井遺跡1次調査地と2次調査地内では、本層上面に凹凸が認められた。



第3図 調査地位位置図 (S=1:6,000)

(2) 遺構・遺物

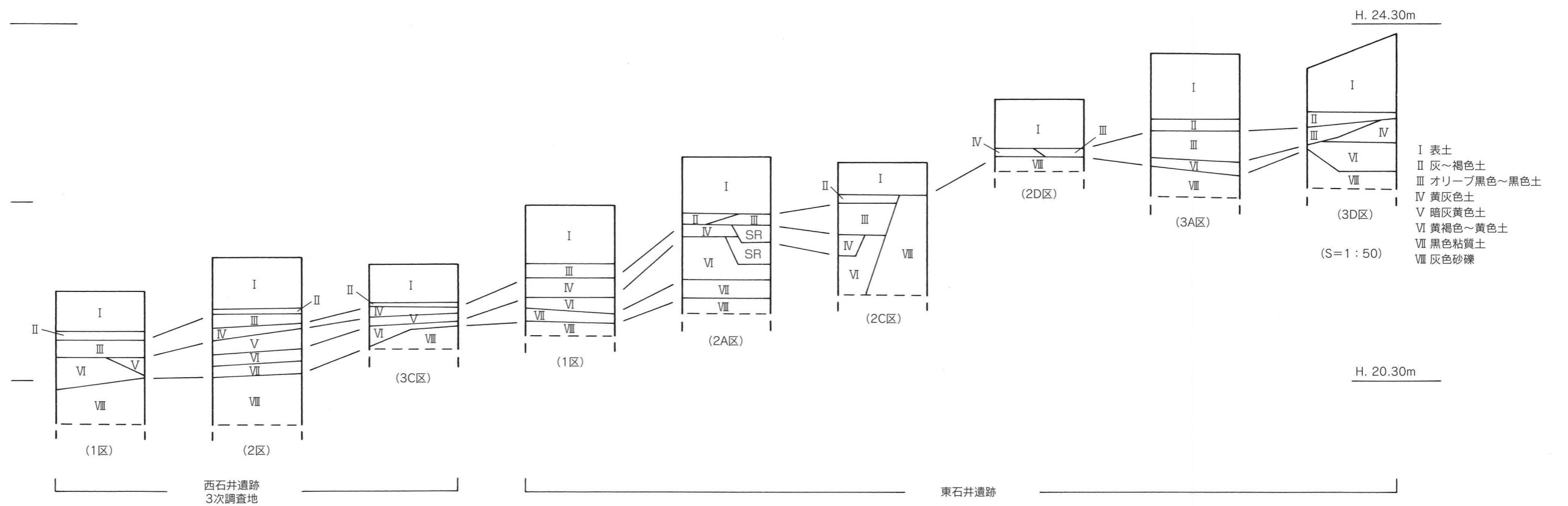
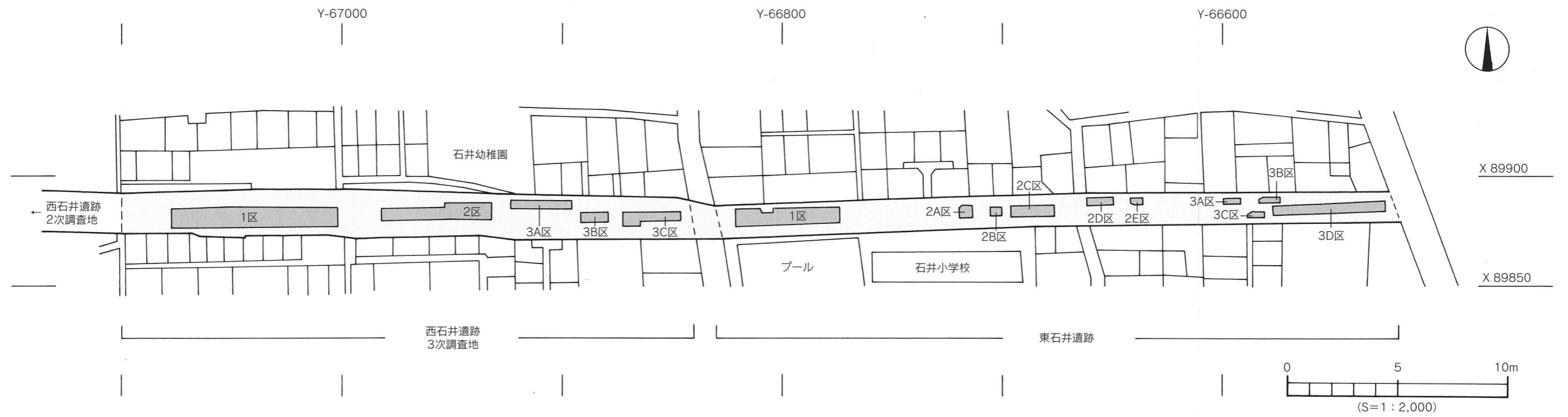
調査では、弥生時代前期から中近世までの遺構や遺物を確認した。弥生時代前期の遺構は未検出であるが、時期の異なる遺構や表面採集資料の中に、該期の遺物が含まれている。中期では前半の資料はなく、遺構は中葉から末に時期比定されるものである。申請地中央部、西石井遺跡2次調査地に該期の遺構が集中している。後期になると、遺構、遺物共に最も多くなり、広がり調査地全域で認められる。古墳時代では西石井遺跡1次調査地において、前期の良好な資料が検出され、古代では東石井遺跡に該期の遺構が集中している。中世では西石井遺跡3次調査地を中心に溝や土坑のほか、土坑墓が検出されている。調査で検出した遺構は、以下のとおりである。

竪穴式住居址：28棟、掘立柱建物址：6棟、溝：74条、土坑：88基、井戸：17基、土器棺墓：5基、土坑墓：6基、自然流路：2条、性格不明遺構：12基

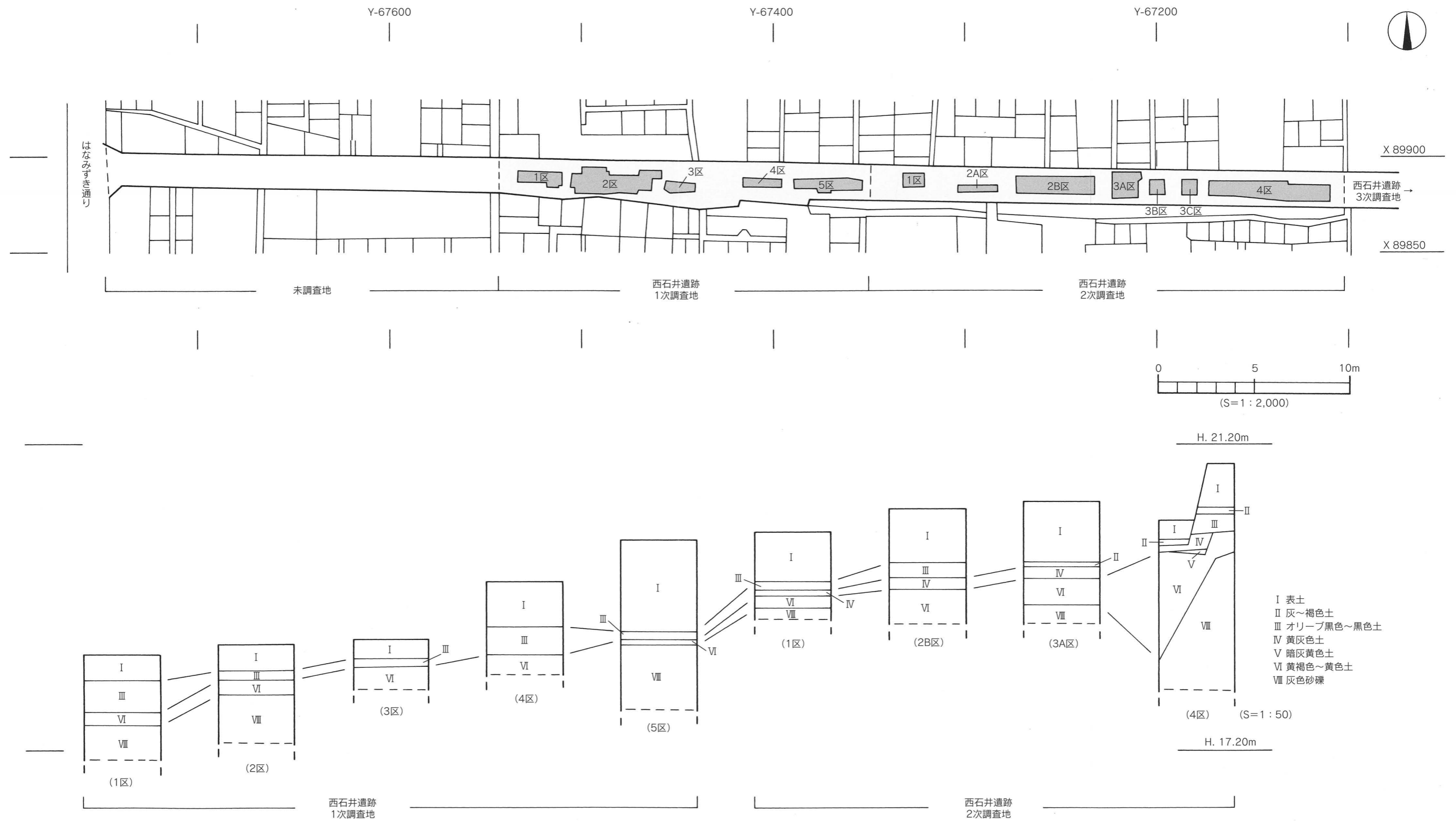
遺物は、遺構及び包含層等から、弥生土器、土師器、須恵器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦のほか、石器、鉄器、玉類、骨、種子などが出土した。土製品では、分銅形土製品、匙形土製品、紡錘車のほか、線刻土器（絵画土器）等が出土している。なお、弥生土器や土師器の中には、近畿地方や瀬戸内海沿岸地域及び西南四国地方からの搬入品や外来系土器が比較的に数多く出土している。各調査地で検出した遺構は、表1にまとめた。

表1 検出遺構一覧

時 期	遺跡名	東石井遺跡	西石井遺跡(1次)	西石井遺跡(2次)	西石井遺跡(3次)
弥生時代中期			溝 1条 土坑 2基	竪穴 4棟 溝 2条 土坑 15基	溝 1条
弥生時代後期	竪穴 2棟 溝 6条 土坑 3基 井戸 4基 流路 2条 不明 2基	竪穴 9棟 溝 13条 土坑 16基 井戸 2基 土器棺墓 3基	竪穴 9棟 掘立 1棟 溝 7条 土坑 10基 井戸 6基 不明 3基	竪穴 2棟 溝 16条 土坑 19基 井戸 5基 土器棺墓 2基 不明 5基	
古墳時代前期		竪穴 2棟 溝 1条 土坑 1基			
古墳時代中～後期	掘立 3棟 溝 6条 土坑 6基 不明 1基	溝 2条 土坑 2基		掘立 2棟 溝 5条 土坑 3基	
古 代	溝 10条 土坑 1基		不明 1基		
中 世			溝 2条	溝 4条 土坑 10基 土坑墓 6基	



第4図 調査位置図・土層模式図 (1)



第5図 調査地位置図・土層模式図 (2)

第3章 東石井遺跡

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

2000（平成12）年11月28日、松山市都市整備部道路建設課より、松山市道「北久米・和泉線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は松山市東石井町527番地から595番地までの間で、東端は国道33号線に接続する。道路幅16m、全長300m、面積は4,800m²である。

財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、申請地内における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、2001（平成13）年1月22日～1月26日の間に試掘調査を実施することとなった。その結果、弥生時代から古代までの遺構や遺物包含層が存在することを確認した。

この結果を受け、埋文センター及び文化財課と申請者の三者は協議を重ね、発掘調査を実施することになった。調査は埋文センターが主体となり、文化財課と申請者の協力のもと、2001（平成13）年6月1日より開始した。

(2) 調査の経緯（第3・4図）

発掘調査は、調査地内に生活道路がある関係上、3つの区に分けて実施した。調査区は西側より1区・2区・3区とし、2区と3区は細分区し、2A区、2B区・・・2E区、3A区、3B区・・・D区とした。また、調査地内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは区毎に北から南へA・B・C・D、西から東へ1・2・3・・・とした。

調査は1区・2区・3区の順で西側から東側に向けて進めた。調査は重機により表土層を除去し、その後、人力で包含層を掘り下げながら遺構と遺物を検出し、測量及び写真撮影などの記録作業を実施した。さらには、上空からセスナ機による航空撮影をも実施した。遺物は、主な遺構に限り測量図（縮尺1/20）を作成し、このほか土壌サンプル採取なども行った。なお、各調査区の調査期間や調査面積は表2のとおりである。

また、発掘調査中には地元の小学生と住民を対象に現場説明会と考古学講座を開催した。説明会は1区を対象とし、発掘調査の進め方や検出した遺構や遺物などについての説明を行い、総勢160名に及ぶ参加者があった。そのほか、中学生を対象に2回の体験学習を行った。学習内容は検出した遺構や遺物の説明と、発掘現場で包含層の掘り下げや測量機器の取り扱いを行い、14名の男子生徒が参加した。

表2 調査区一覧

調査区	調査面積	調査期間
1区	1,760m ²	平成13年6月1日～平成13年9月25日
2区	1,408m ²	平成13年7月18日～平成13年11月30日
3区	1,632m ²	平成13年10月30日～平成14年2月28日

2. 層位 (第6～12図)

調査地は、松山平野の南部にあり、小野川と内川に挟まれた沖積低地に位置する。調査以前は既存宅地であった。現況は調査地東部の1区で標高22.30m、中央部の2E地区で22.60m、東部の3D地区で23.90mを測る。基本層位は第I層表土、第II層褐灰色～褐色土、第III層オリーブ黒色～黒色土、第IV層黄灰色土、第V層暗灰黄色土、第VI層黄褐色～黄色土、第VII層黒色粘質土、第VIII層灰色砂礫層である。なお、第VI層以下の土層については2D地区、2E地区、3A地区、3B地区、3C地区を除く地区において、南北方向もしくは東西方向の深掘りトレンチを設定し、土層観察を行ったものである。

第I層－近現代の造成土や農耕にかかわる客土である。調査区全域で検出し、地表下30～80cmまで開発が行われている。第I①層造成土、第I②層耕作土、第I③層旧耕作土、第I④層水田床土に分かれる。

第II層－古代から中世の遺物を含む包含層である。色調や土色の違いから2層に分層した。第II①層は褐灰色土、第II②層は褐色土である。

第II①層：2A・2C・3A・3B・3D区で検出した。層厚6～20cmを測る。本層中からは古代から中世までの土師器、陶磁器類が出土した。

第II②層：1区、2C区、3B・3C区で検出した。層厚6～20cmを測る。本層中からは古代、主に奈良時代から平安時代までの土師器、須恵器、瓦などが出土した。なお、2C区では本層上面にて遺構を検出した。

第III層－弥生時代から古代の遺物を含む包含層である。色調や土色の違いから3層に分層した。第III①層オリーブ黒色土、第III②層黒褐色土、第III③層黒色土である。

第III①層：1区のみで検出した。層厚6～16cmを測る。本層中からは、古墳時代後期から奈良時代までの遺物が出土した。

第III②層：2A～2C区、及び3区全域で検出した。層厚4～25cmを測る。本層中からは、弥生時代末から古墳時代までの遺物が出土した。なお、2C区と3C区では本層上面にて遺構を検出した。

第III③層：2B～2E区、3A区、3B区で検出した。層厚3～30cmを測る。本層中からは弥生時代後期から末までの遺物が出土した。

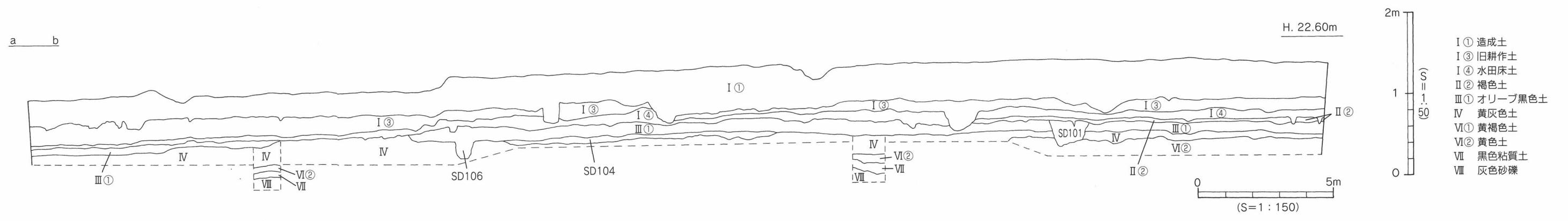
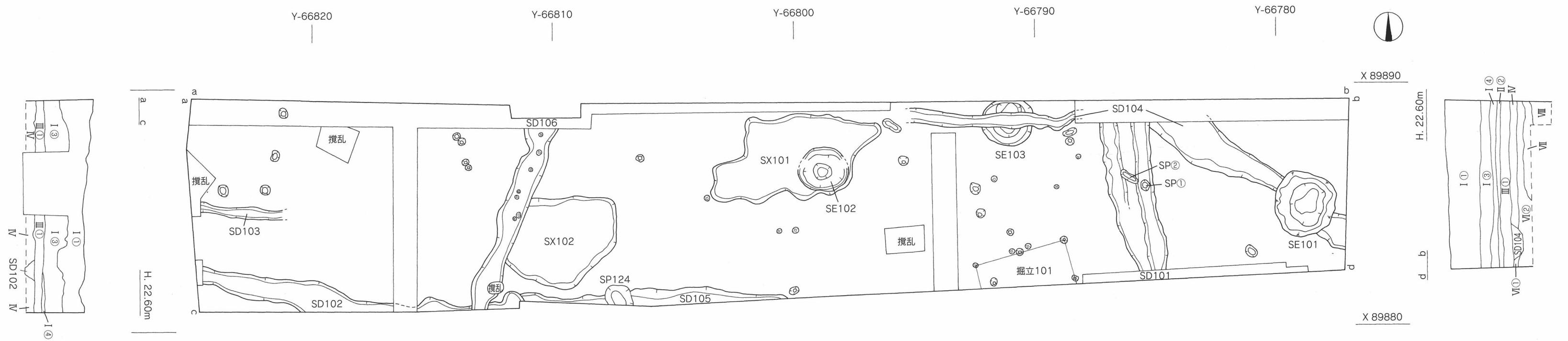
第IV層－弥生時代中期後半から後期前半までの遺物を含む包含層である。黄灰色土で、1区、2A～2C区、3D区で検出した。層厚6～35cmを測る。1区、2A・2B区及び3D区では、本層上面にて遺構を検出した。

第V層－本調査地では未検出である。

第VI層－色調や土質の違いから2層に分層した。第VI①層黄褐色土、第VI②層黄色土で、粘性の強い土壌である。

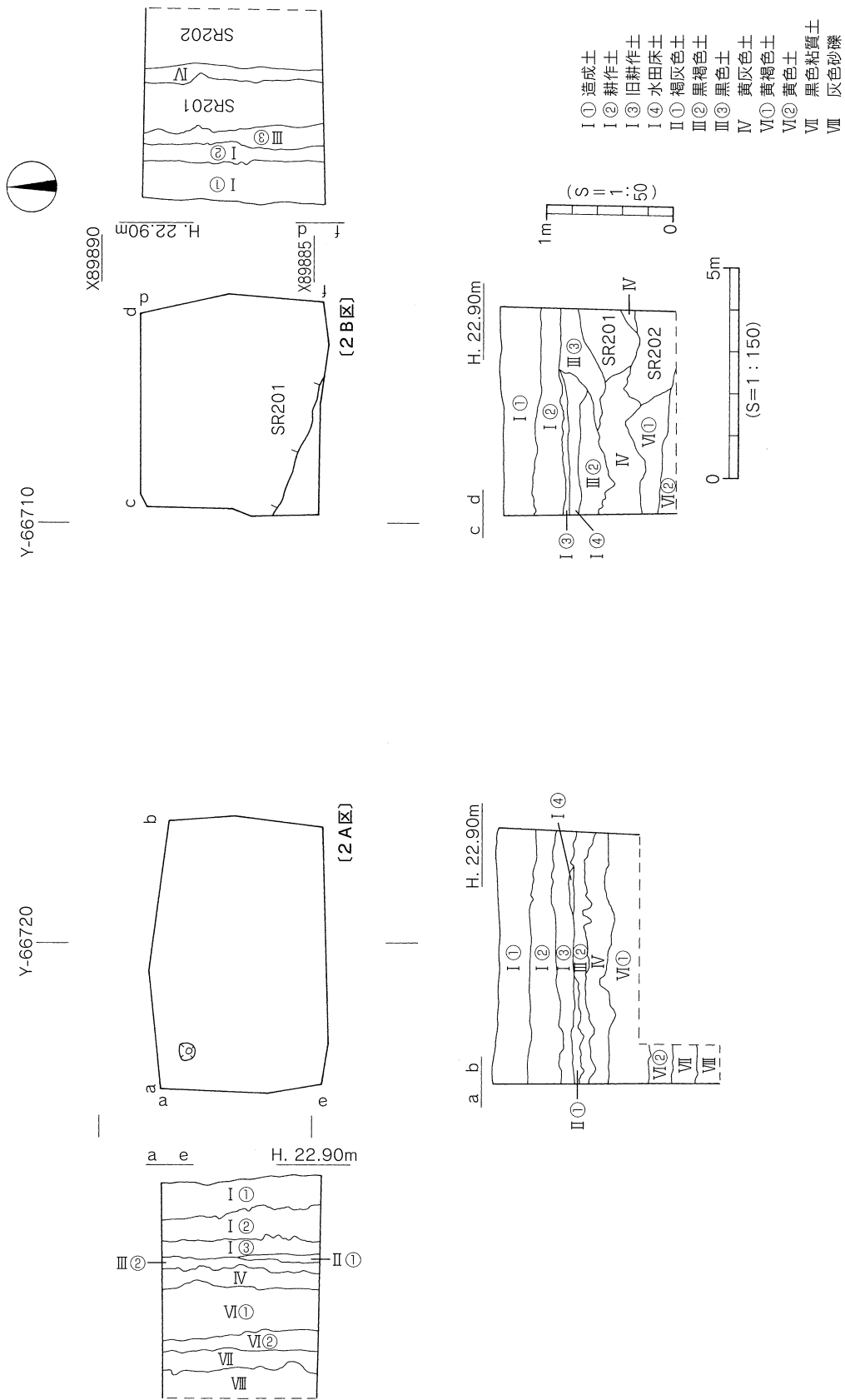
第VI①層：2A～2C区、及び3区全域で検出した。層厚10～45cmを測る。本層上面が調査における最終遺構検出面である。

第VI②層：1区、2A～2C区、3D区で検出した。層厚10～25cmを測る。本層中からの遺物の出土はない。

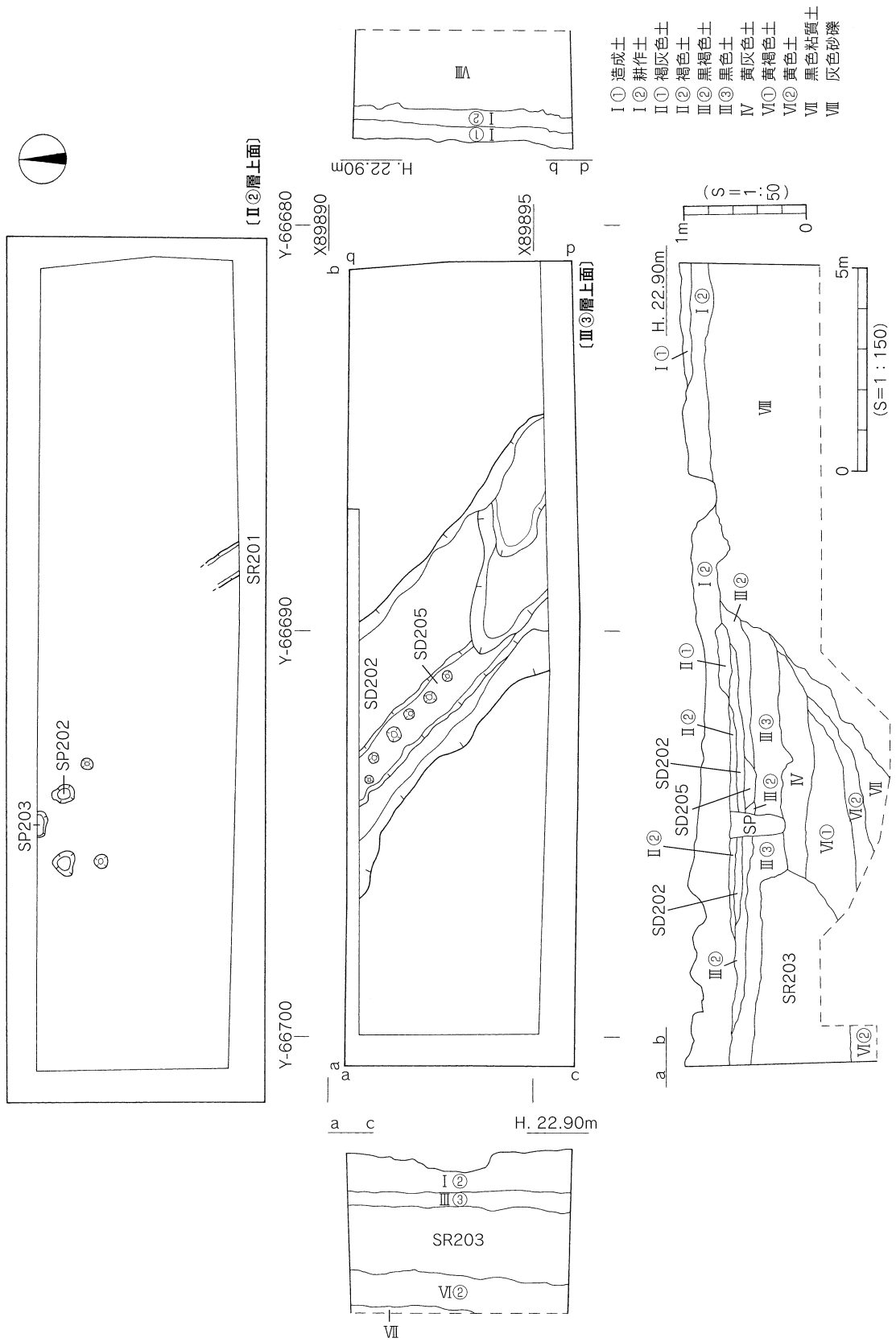


- I ① 造成土
- I ③ 旧耕作土
- I ④ 水田床土
- II ② 褐色土
- III ① オリーブ黒色土
- IV 黄灰色土
- VI ① 黄褐色土
- VI ② 黄色土
- VII 黑色粘質土
- VII 灰色砂礫

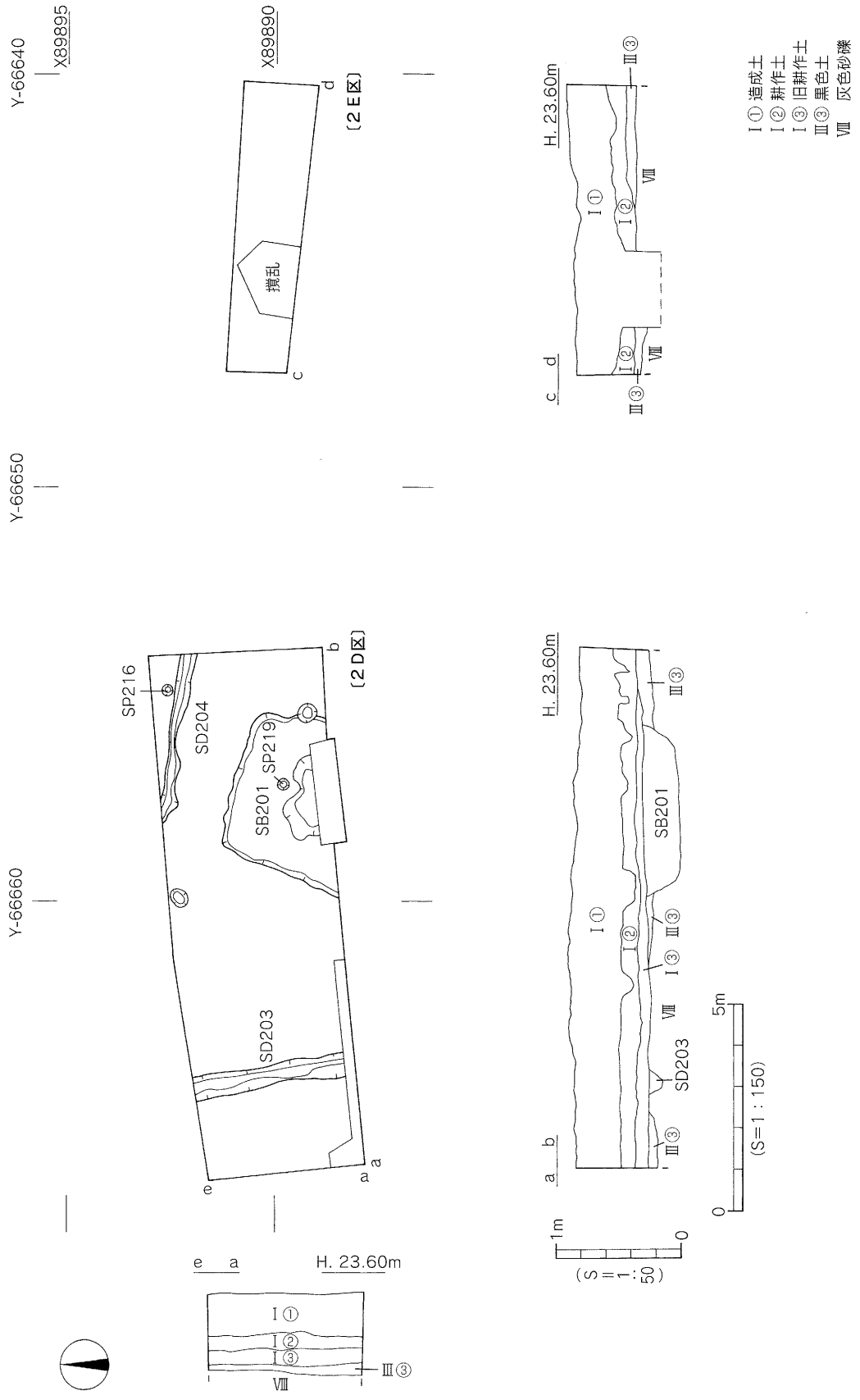
第6図 1区遺構配置図・土層図



第7図 2A・2B区遺構配置図・土層図

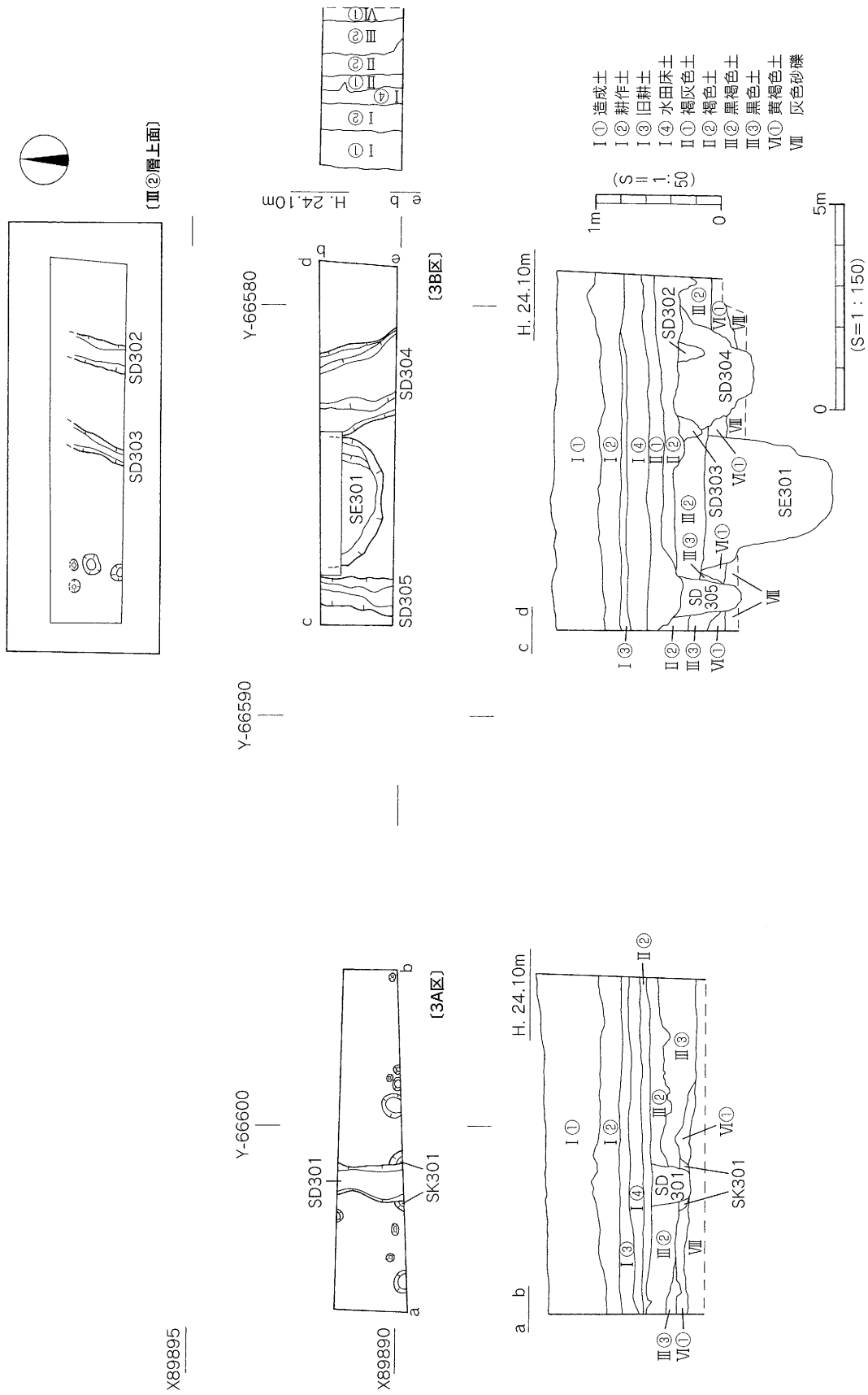


第8図 2C区遺構配置図・土層図

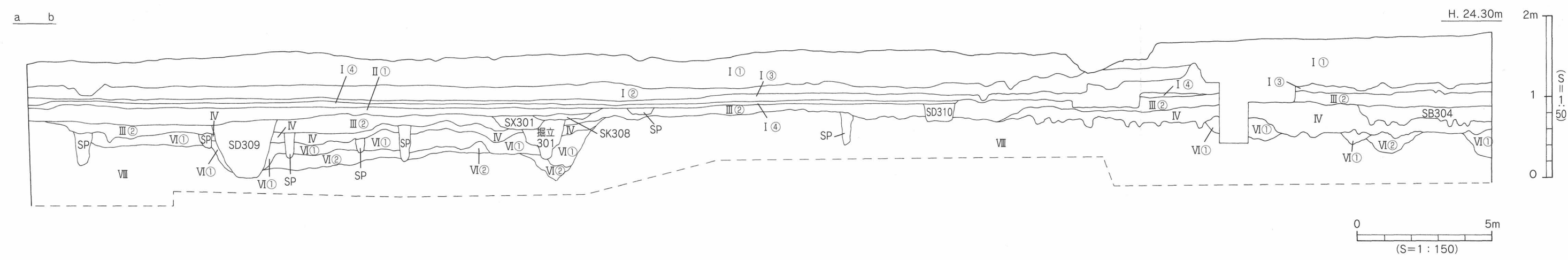
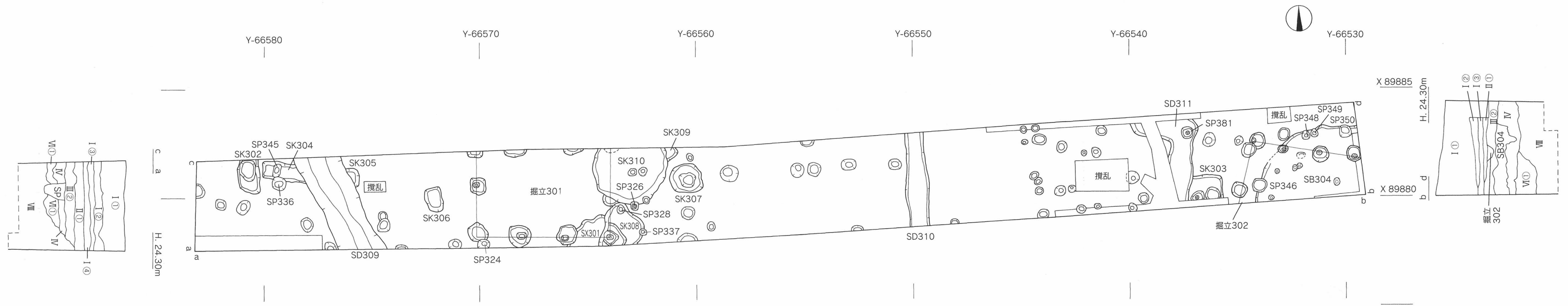


第9图 2D・2E区遺構配置図・土層図

東石井遺跡

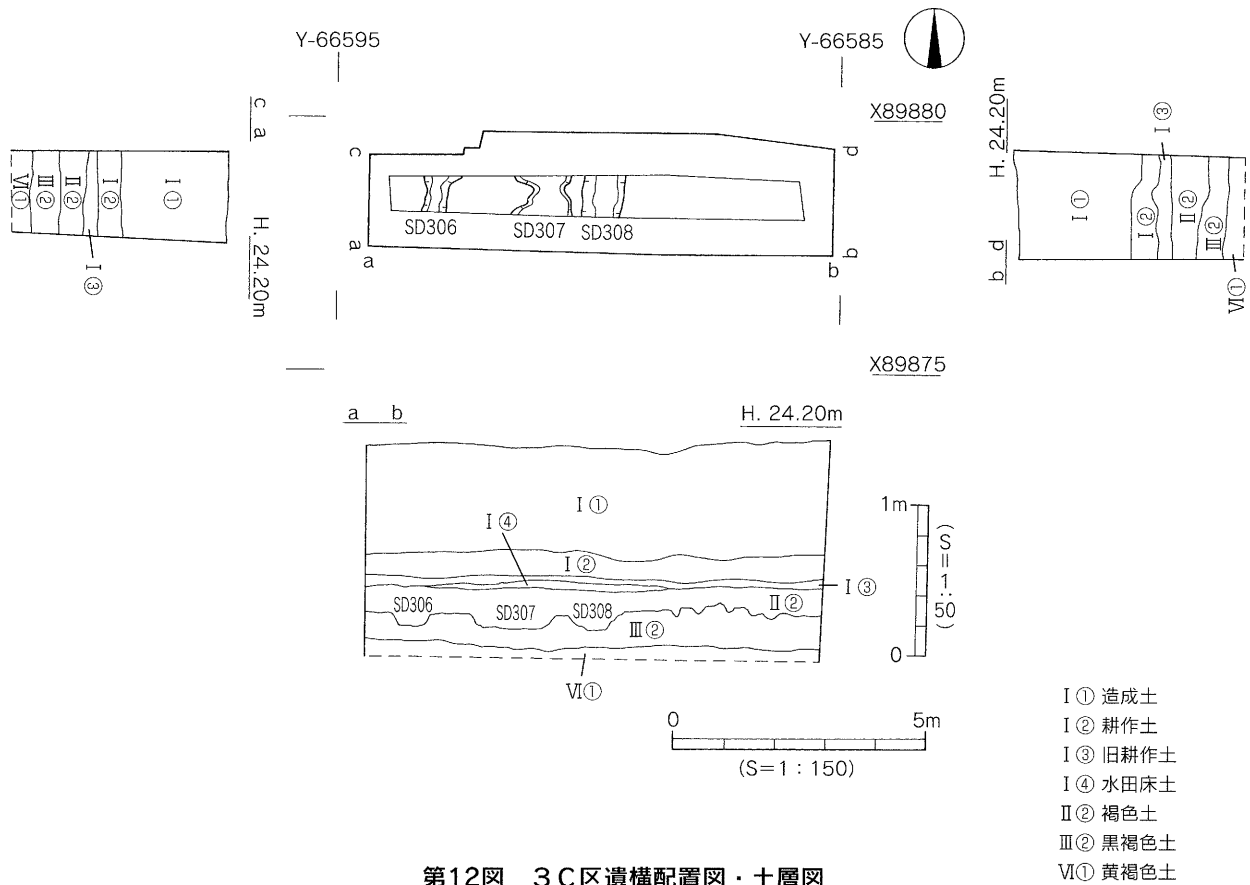


第10図 3A・3B区遺構配置図・土層図



第11図 3D区遺構配置図・土層図

層 位



第12図 3C区遺構配置図・土層図

第Ⅶ層－1区、2A・2C区の深掘トレンチにて検出した粘性の強い土壤で、無遺物層である。本層は調査地の北西に位置する石井幼稚園遺跡1次、2次調査地でも確認している。

第Ⅷ層－小野川、内川の氾濫に起因する砂礫層である。調査区全域で検出した。本層上面は2D・2E区が最も高く標高23.0mを測り、2D区では本層上面が遺構検出面になる。また、深掘りトレンチの土層観察では、本層上面にて自然流路を確認したが、平面調査は実施していない。

遺構は第Ⅱ②層、Ⅲ②層及び第Ⅵ①層上面にて検出した。そのほか、トレンチの土層観察により第Ⅴ層堆積以前の自然流路を検出した。遺物は遺構及び包含層中から、弥生土器、土師器、須恵器、瓦などの土製品のほか、石製品、鉄製品、動物骨他が出土した。

3. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴式住居址2棟、溝6条、土坑3基、井戸4基、土器溜まり(SX)2基、自然流路2条である。

(1) 竪穴式住居址

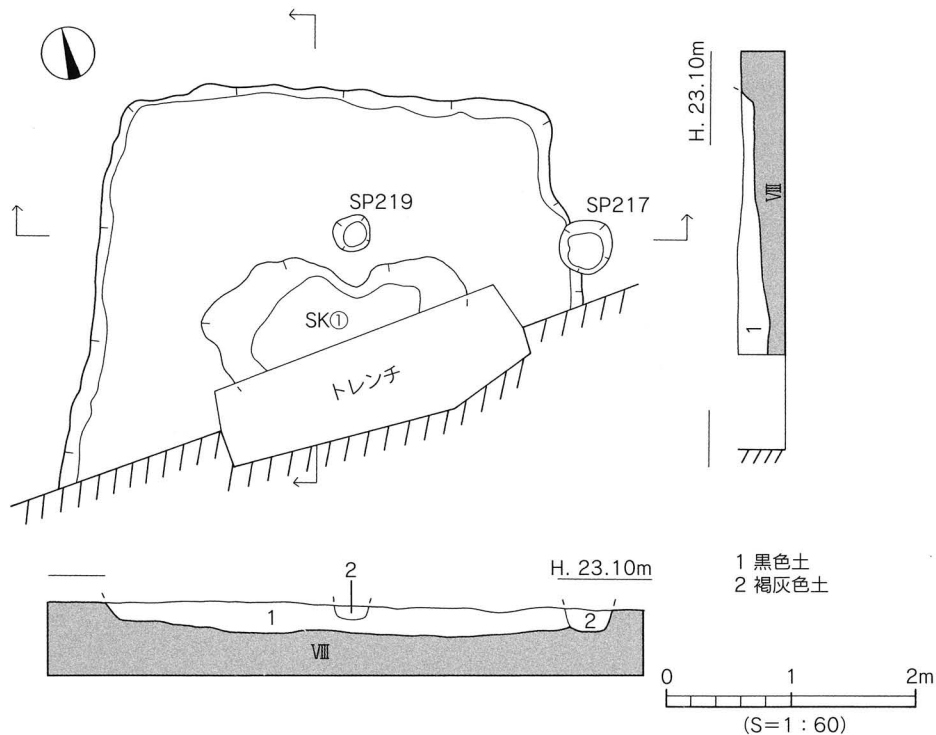
SB201(第13図、図版5)

2D区の東部南寄り、B・C36区に位置する。第Ⅷ層上面での検出である。住居址東側はSP217、中央部はSP219、南側はトレンチに切れ調査区外に続く。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長3.2m、東西長3.9m、壁高は25cmを測る。埋土は黒色土単層である。住居址中央部にて土坑SK①を検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は、東西検出長2.0m、南北検出長0.7m、深さ12cmを測る。土坑埋土は住居址埋土と類似する。遺物は住居址埋土、及びSK①埋土中から弥生土器片が出土した。

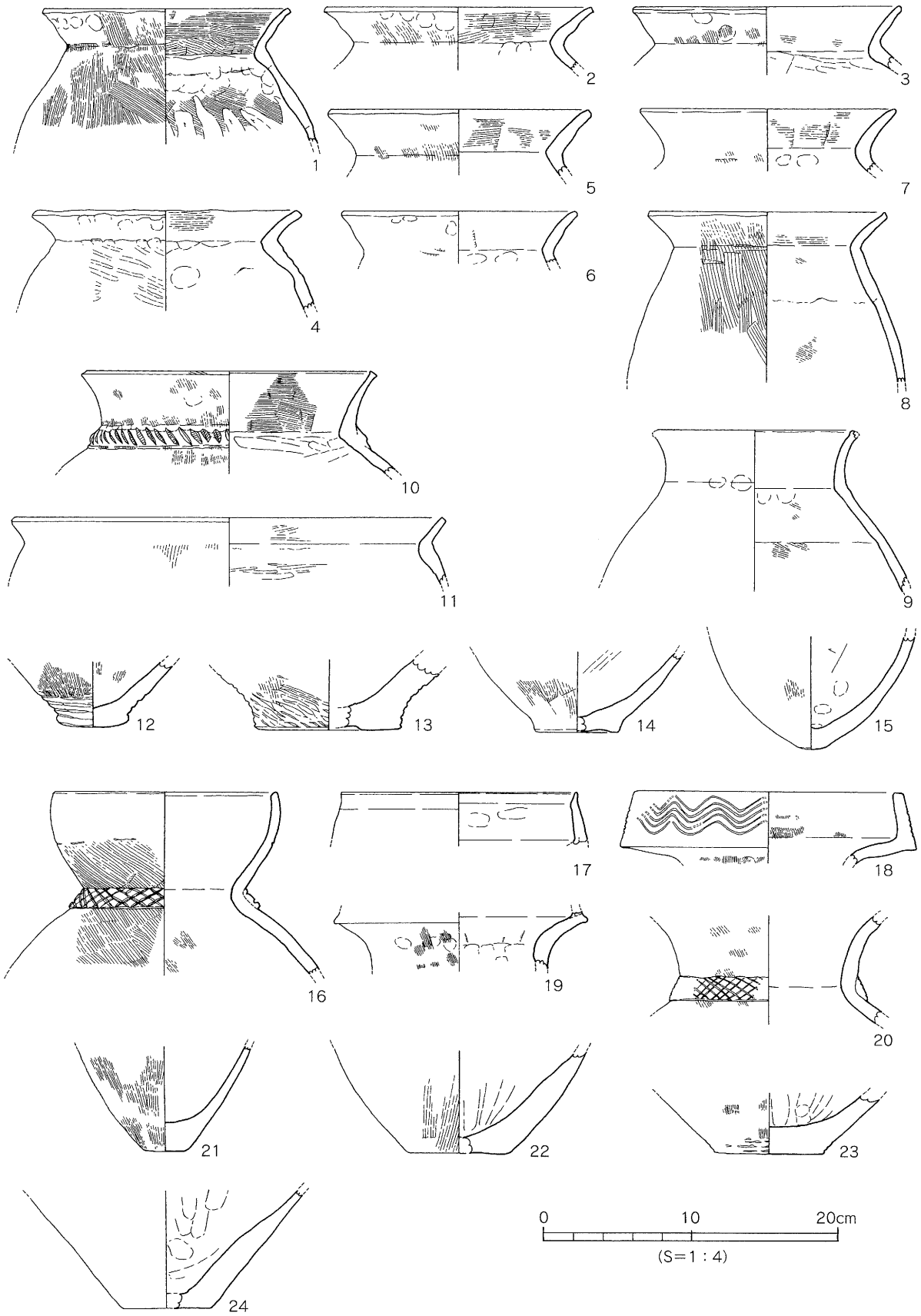
出土遺物(第14・15図、図版7)

1～15は甕形土器。4の胴部外面にはタタキ調整を施す。8～10は口縁端部をやや上方に拡張し、10は刻目凸帯文を施す。11は口径25cmを超える大型品である。12～15は胴底部で、12・13の胴部外面にはタタキ調整を施す。16～24は壺形土器。16～20は複合口縁壺。16は口縁部がやや袋状となる。25～29は鉢形土器で、26は脚付鉢の脚部である。30・31は高坏形土器、32・33は支脚形土器である。32は受部中央部が凹む。34～42はSK①出土品。34～37は甕形土器。37は頸部に格子目状の凸帯文を施す。38・39は複合口縁壺。接合部はタガ状を呈し、短い頸部をもつ。40は鉢形土器で、器壁は薄い。41は壺形土器、42は鉢形土器の底部である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代末とする。

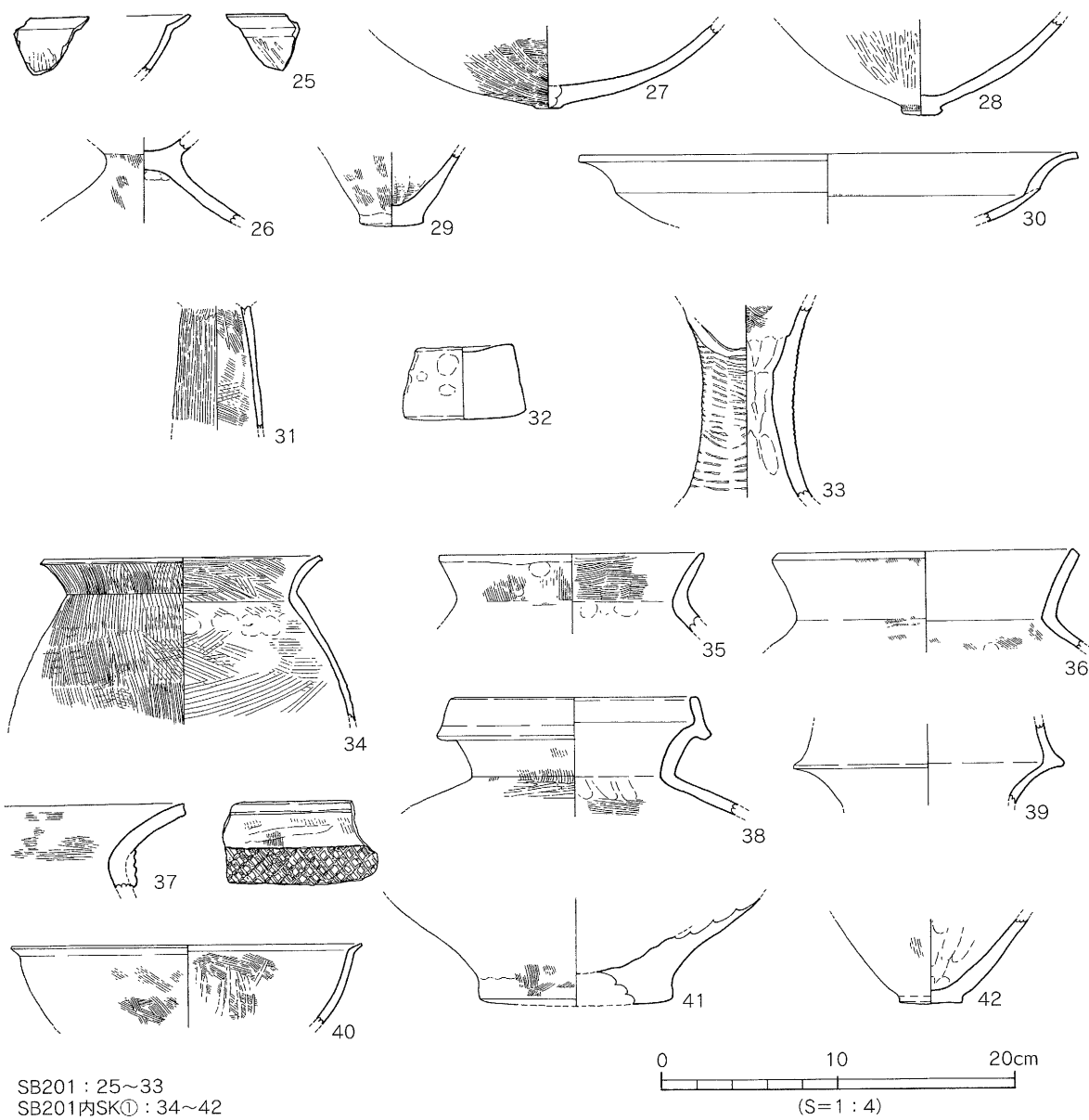


第13図 SB201測量図



第14図 SB201出土遺物実測図(1)

東石井遺跡



第15図 SB201(2)・SB201内SK①出土遺物実測図

S B 304 (第16図、図版5)

3 D区の東部南寄り、D61～E61区に位置する。第Ⅳ層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。掘立302、S P 346、S P 348、S P 349、S P 350に切られ、住居址東側と南側は調査区外に続く。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長5.1m、南北検出長3.4m、深さ15cmを測る。埋土は上下2層(1・2層)に分層され、1層は黒色土、2層は黒色土に黄色土が混入するものである。なお、2層は床面修築のための貼床土であり厚さ6cmを測る。床面にて土坑S K①を検出した。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.9m、南北検出長0.25m、深さ10cmを測る。土坑埋土は黒色土単層である。このほか、径20～30cm、深さ5～15cmのピット7基と、径6～10cm、深さ5～8cmの小ピットが多数検出された。いずれもピット埋土は黒色土に黄色土が混入するものである。遺物は1層中より弥生土器と石器が出土した。また、貼床土上面及び1層上位より炭化物、2層中より焼土が出土した。

出土遺物(第16図、図版7)

43は複合口縁壺で、口縁接合部はタガ状を呈し、下外方にのびる。44～46は鉢形土器。44は直口口縁を呈し、体底部外面にはタタキ調整を施す。45は内外面共に丁寧なヘラミガキ調整を施す。47は緑色片岩製の石庖丁で、両側部に抉りをもつ。48は器種不明品である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期末とする。

(2) 溝

S D 102 (第17図)

1区西部南寄り、D2・3区に位置する東西方向の溝である。第Ⅳ層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。溝東測はS D 105を切り、S D 106に切られ、溝両端は調査区外に続く。規模は検出長13.8m、幅1.34m、深さ8cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝底面は西から東に向けて傾斜する(比高差12cm)。埋土は黒色土単層である。遺物は埋土中から弥生土器片が数点出土した。

時期：出土遺物の特徴とS D 105を切ることから、弥生時代後期後半以降とする。

S D 103 (第17図)

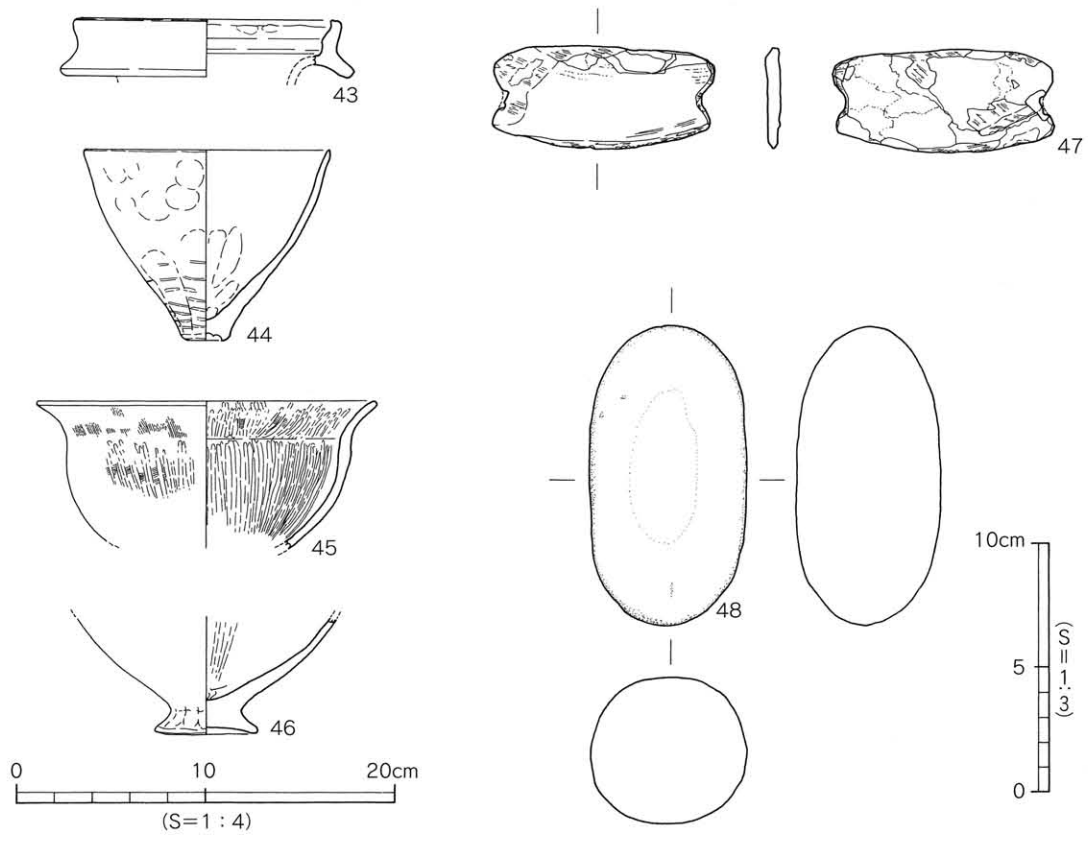
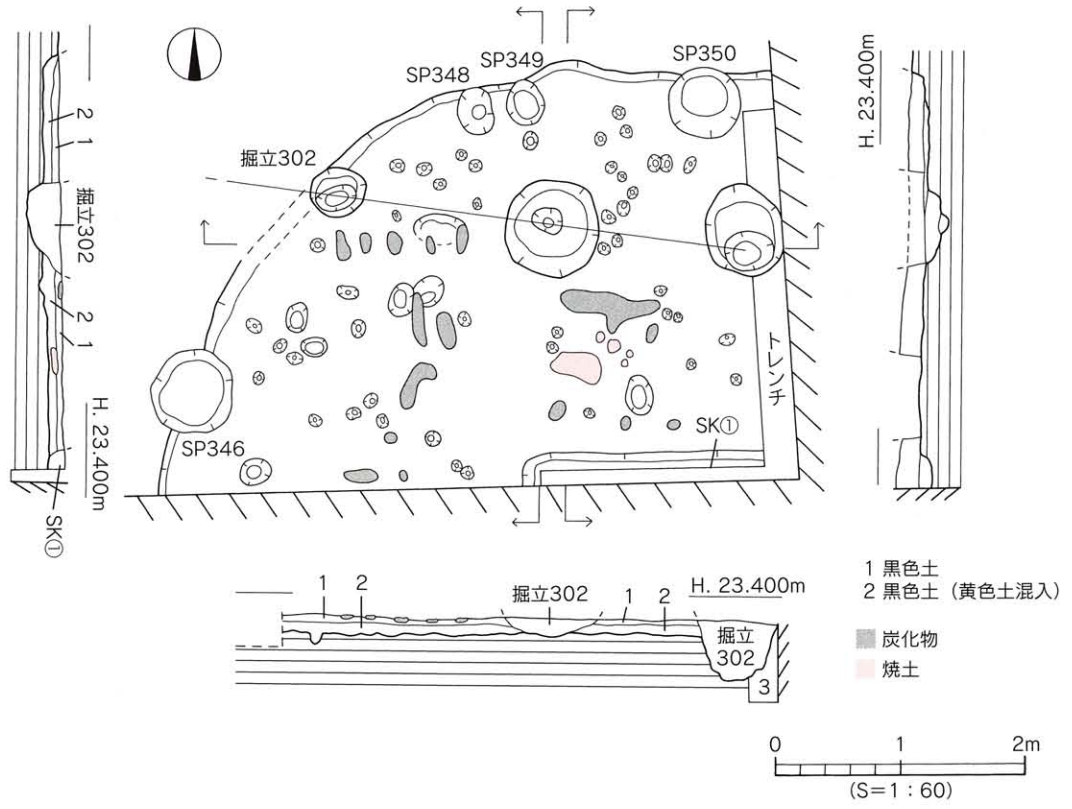
1区西部中央、D2区に位置する東西方向の溝である。第Ⅳ層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。溝東端は消失し、西端は調査区外に続く。規模は検出長3.84m、幅0.52m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝底面は東から西に向けて傾斜する(比高差13cm)。埋土は黒色土単層である。遺物は埋土中より弥生土器片が少量出土した。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

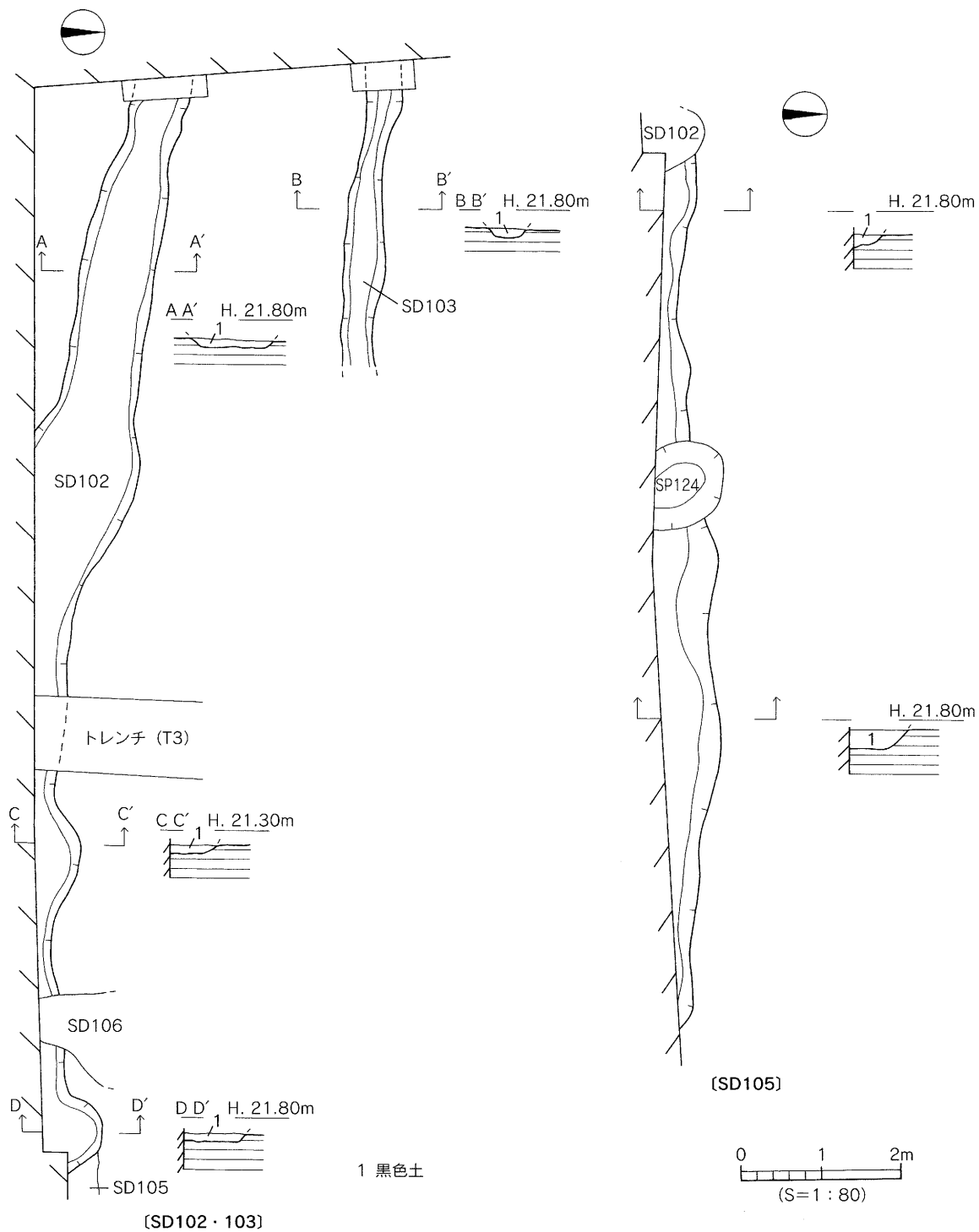
S D 105 (第17図)

1区中央部の南端、D4～D6区に位置する東西方向の溝である。第Ⅳ層上面で検出した。溝西端はS D 102、中央部をS P 124に切られ、東端は調査区外に続く。規模は検出長10.92m、幅0.8m、深さ24cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝底面は東から西に向けて傾斜する(比高差19cm)。埋土は黒色土単層である。遺物は埋土中より弥生土器が出土した。

東石井遺跡

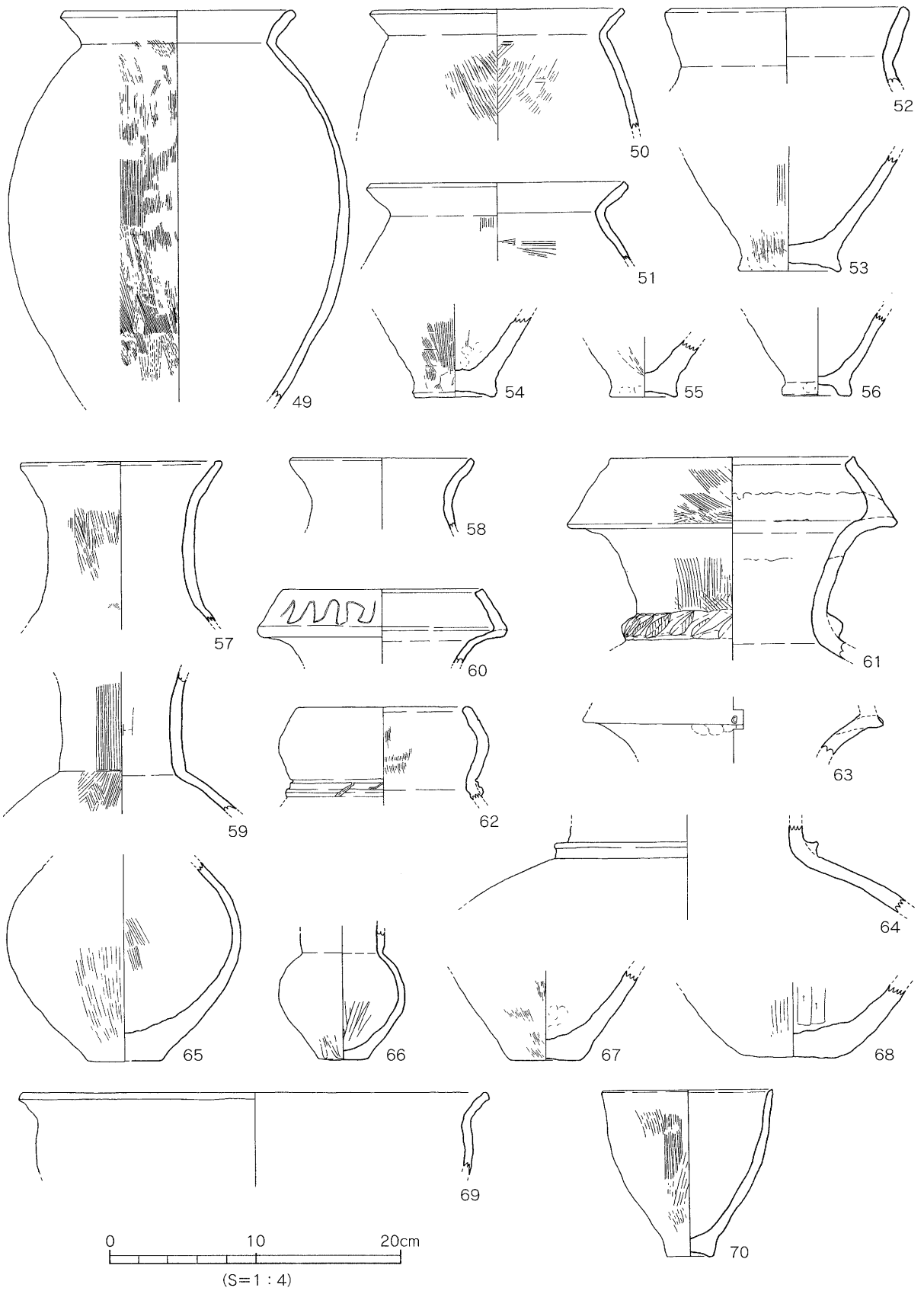


第16図 SB304測量図・出土遺物実測図

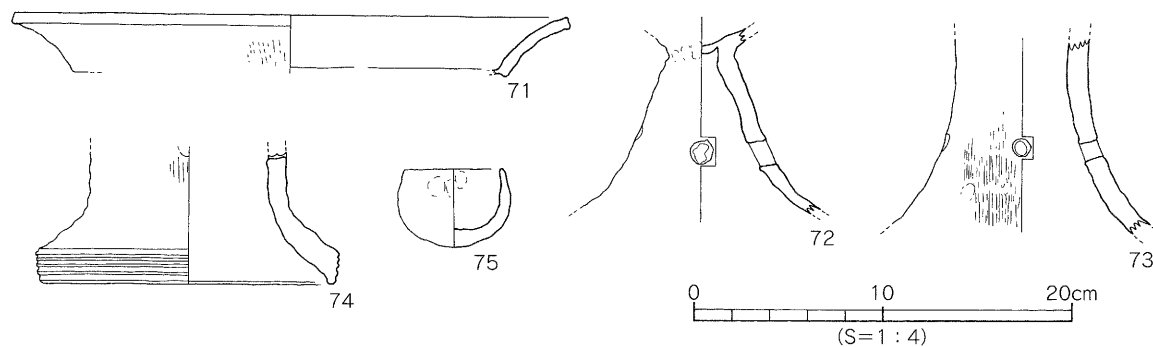


第17図 SD102・103・105測量図

東石井遺跡



第18図 SD105出土遺物実測図(1)



第19図 SD105出土遺物実測図(2)

出土遺物(第18・19図、図版8)

49~56は甕形土器、57~68は壺形土器である。57~59は直口壺、60~63は複合口縁壺である。62は口縁部がやや袋状となる。64は頸肩部片で、断面三角形の凸帯文を施す。65~68は底部片で、65・66は平底、67・68は上げ底となる。69・70は鉢形土器。69は口径30cmを超える大型品である。71~73は高坏形土器。72・73は柱部中位に円孔を穿つ。74は器台形土器の脚部片で、裾部端面に凹線文を施す。75はミニチュア品である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

SD104(第20図)

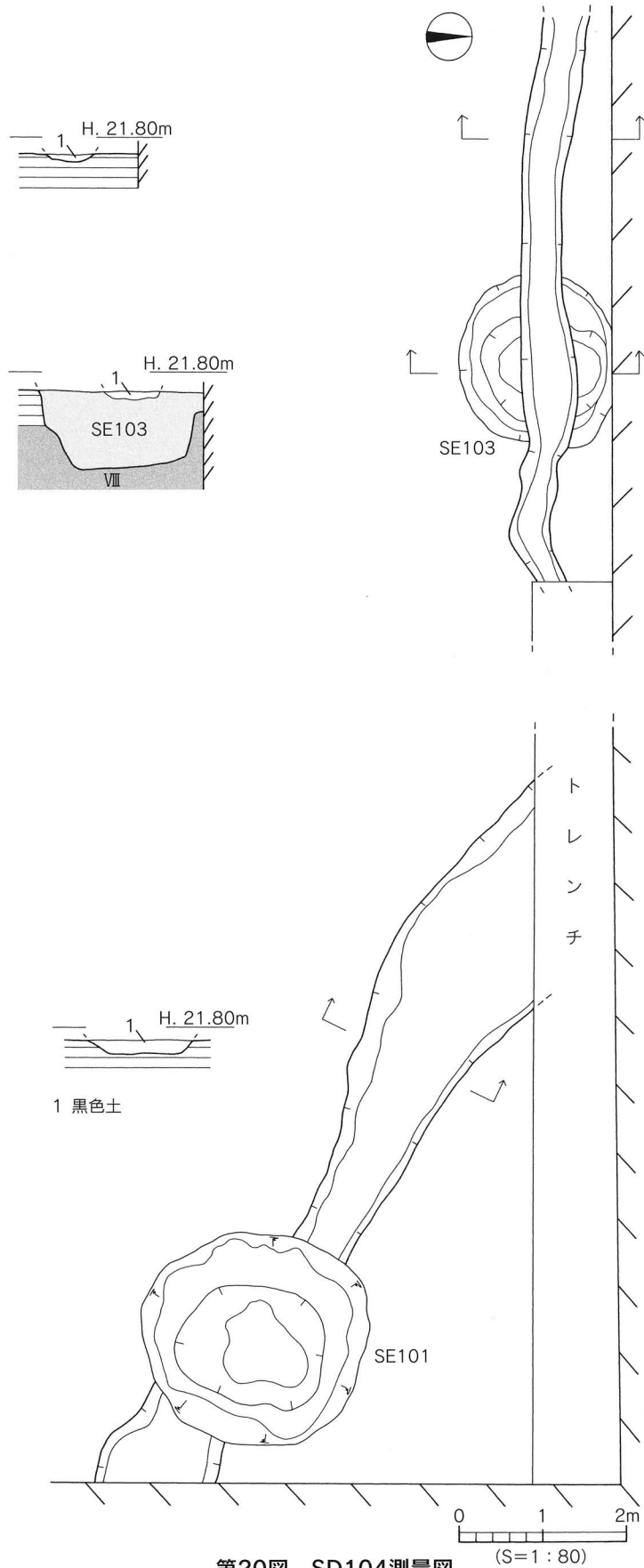
1区東部北寄り、C7~D11区に位置する東西方向の溝で、途中、南東方向に屈曲する。第IV層上面での検出であり、第III①層が覆う。溝中央部はSD101、東側はSE101に切れ、西側はSE103を切る。溝西端は消失し、東端は調査区外に続く。規模は検出長16.2m、幅2.7m、深さ16cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝底面は西から東に向けて傾斜する(比高差12cm)。埋土は黒色土単層である。遺物は埋土中から弥生土器、石庖丁が出土した。

出土遺物(第21~23図、図版8・9)

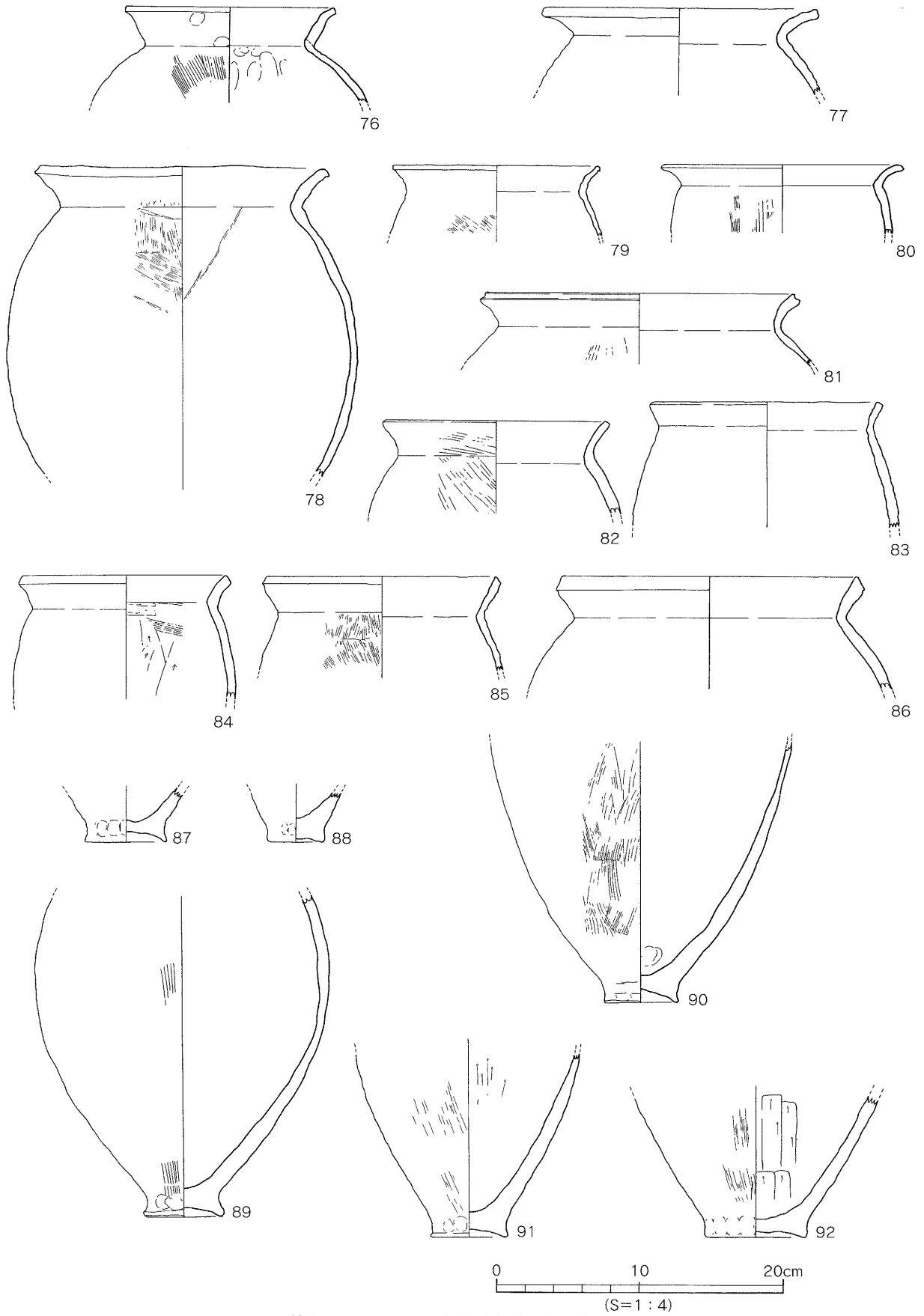
76~92は甕形土器。76~86は「く」の字状口縁を呈し、85・86は口縁端部が尖り気味となる。87~92は底部で上げ底となる。93~114は壺形土器。93~96は直口壺、97は長頸壺、98~100は広口壺、101~104は複合口縁壺である。98は口縁端面に凹線文2条が巡る。105~114は胴底部片で、105の胴部にはヘラ状工具による2本の線刻を施す。113の底部外面には「×」状の線刻が残る。115~118は鉢形土器で、117・118は脚付鉢の柱部片である。119~121は高坏形土器、122はミニチュア品、123は器種不明品である。124は緑色片岩製の石庖丁で、両側部に抉りをもつ。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期中葉とする。

東石井遺跡

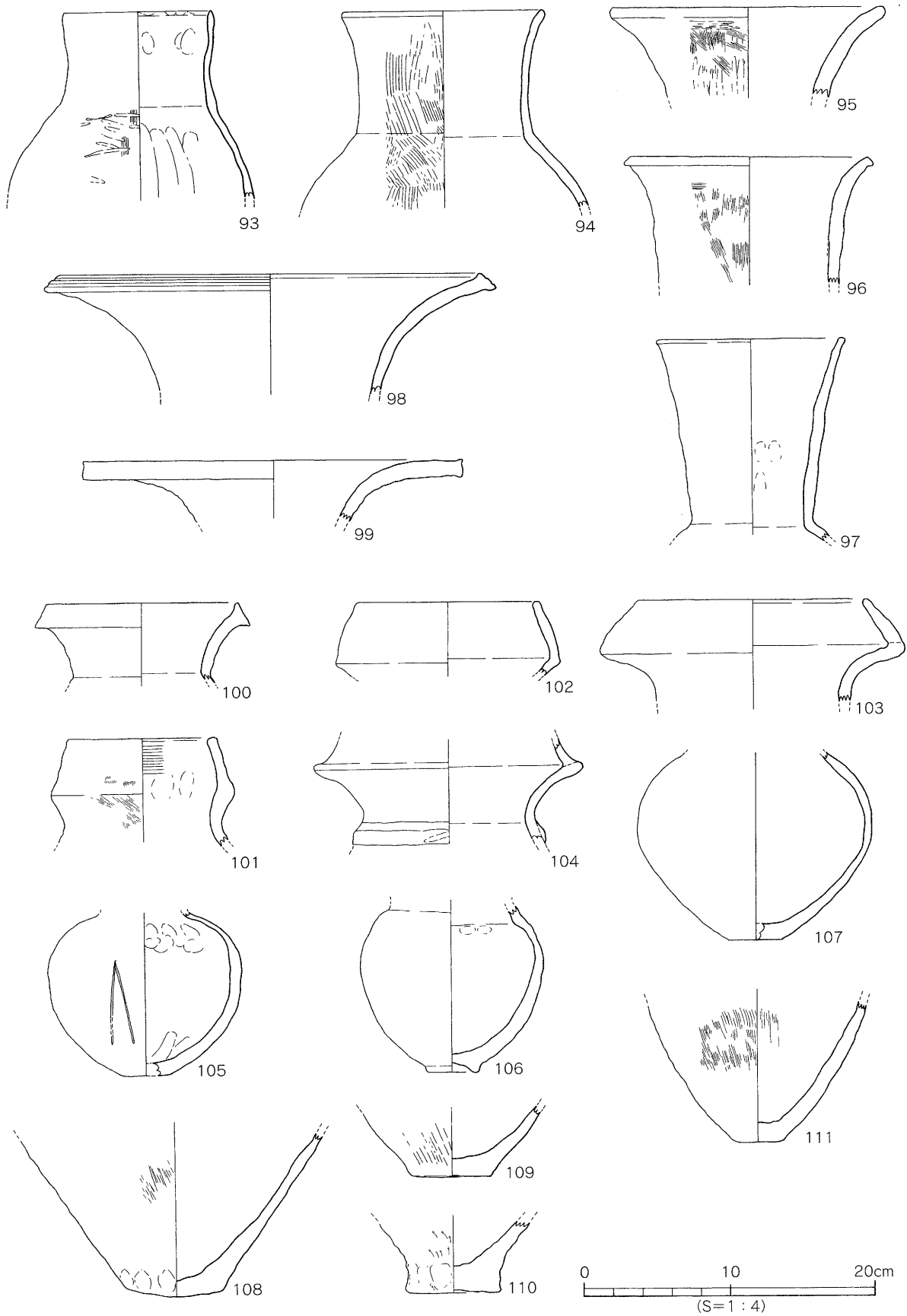


第20図 SD104測量図

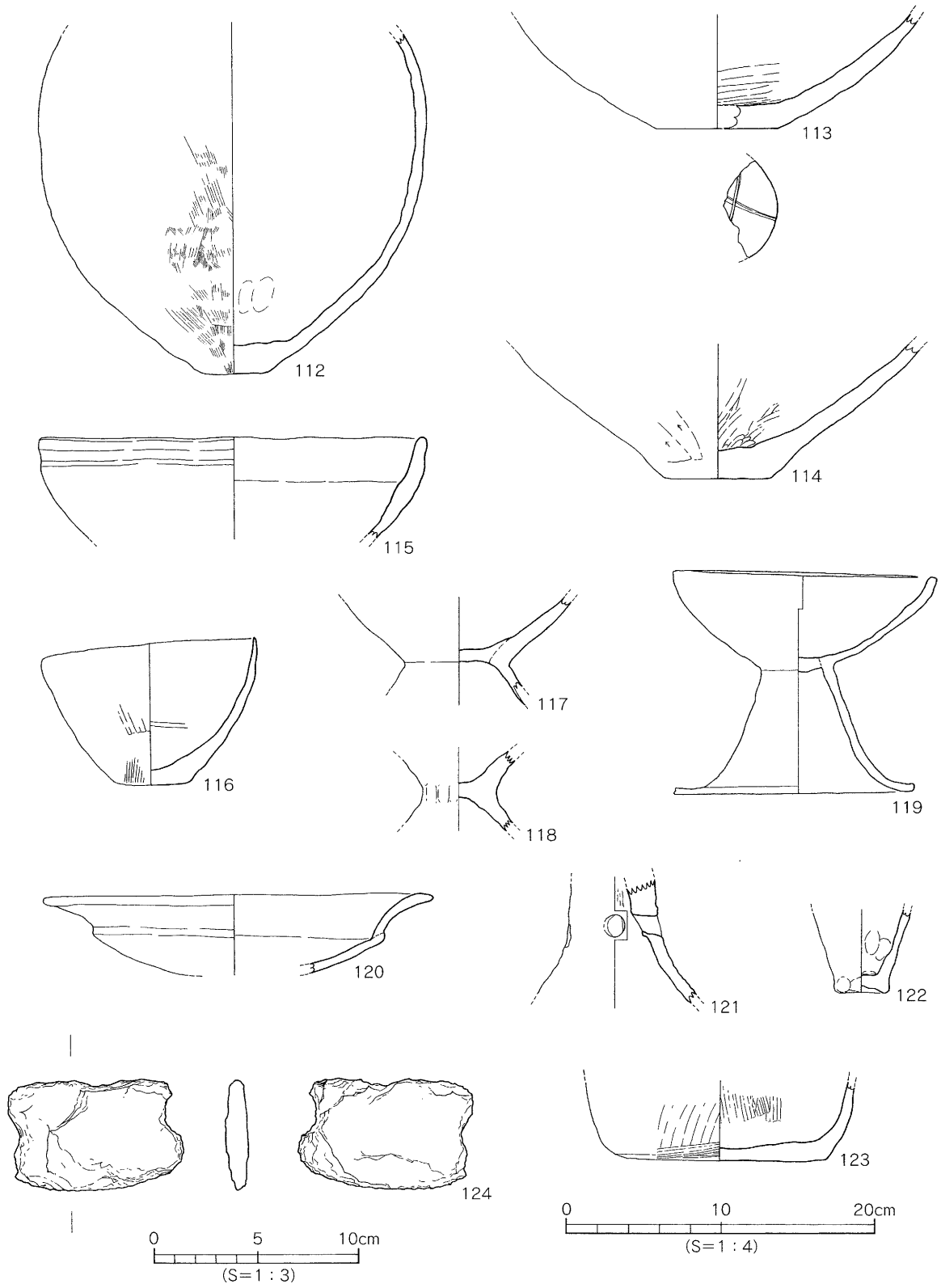


第21図 SD104出土遺物実測図(1)

東石井遺跡



第22図 SD104出土遺物実測図(2)



第23図 SD104出土遺物実測図 (3)

S D203 (第24図)

2 D区の西部、B・C35区に位置する南北方向の溝である。第Ⅷ層上面で検出した。溝両端は調査区外に続く。規模は検出長3.6m、幅0.6m、深さ8cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。溝底面はほぼ平坦である。埋土は黒色土単層である。溝内からの遺物の出土はない

時期：埋土がS D104に酷似することから、概ね弥生時代後期中葉頃とする。

S D204 (第24図)

2 D区の北東隅、B36・37区に位置する東西方向の溝である。第Ⅷ層上面で検出した。溝両端は調査区外に続く。規模は検出長4.4m、幅0.4m、深さ8cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。溝底面は東から西に向けて緩傾斜する（比高差5cm）。埋土は黒色土単層である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS D104、S D203に酷似することから、概ね弥生時代後期中葉頃とする。

(3) 土坑

S K307 (第25図)

3 D区の中央部西寄り、D55区に位置する。第Ⅳ層上面での検出である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.45m、短径1.35m、深さ25cmを測る。断面形態は船底状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。埋土上位より炭化物を検出した。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代後期後半とする。

S K306 (第25図)

3 D区の西側、D・E53区に位置する。第Ⅳ層上面での検出である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.15m、短径0.75m、深さ27cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代後期とする。

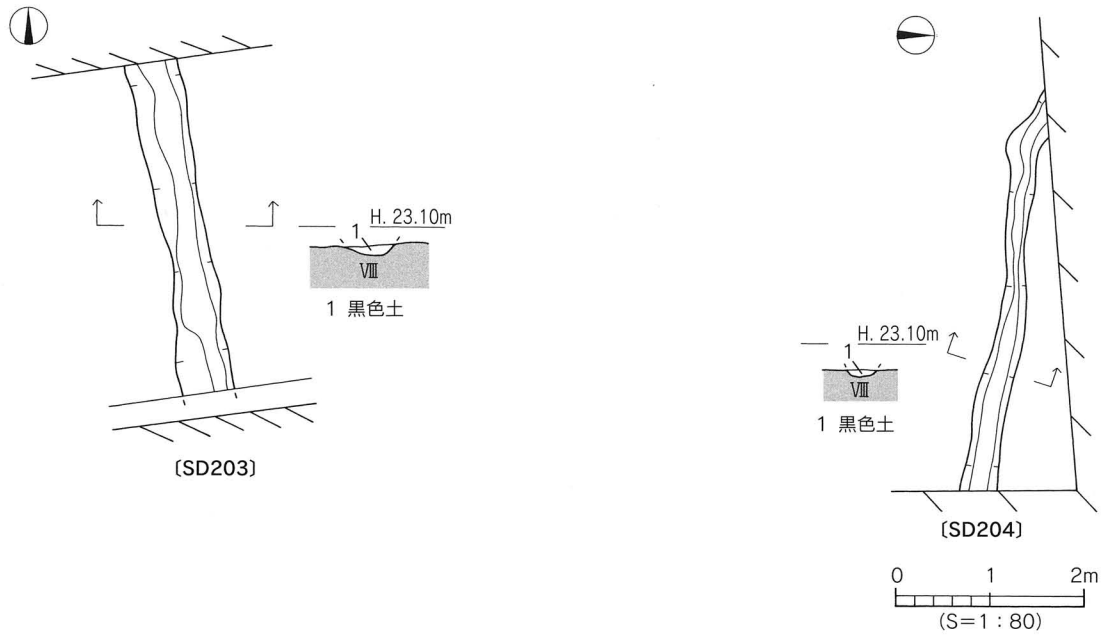
S K301 (第25図)

3 A区中央部西寄り、B47区に位置し、土坑中央部はS D301(10世紀)に切られる。第Ⅵ①層上面での検出であるが、土層観察により第Ⅲ②層上面から掘り込まれた遺構である。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.45m、南北検出長0.30m、深さ10cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土に黄色土が混入するものである。土坑底面は第Ⅷ層砂礫層となる。土坑内から遺物の出土はない。

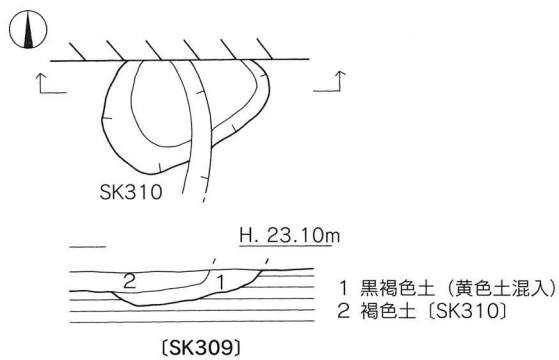
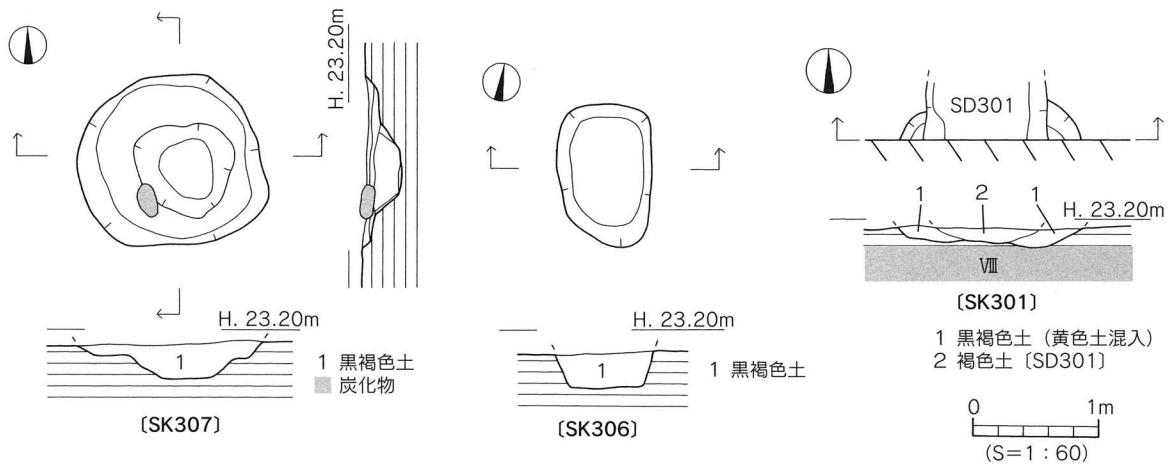
時期：検出状況と埋土がS K309と酷似することから、概ね弥生時代後期とする。

S K309 (第25図)

3 D区の中央部西寄り、D55区に位置し、S K310に切れ北側は調査区外へ続く。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.25m、南北検出長0.75m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色土に黄色土が混入する。遺物は埋土中から弥生土器片が出土した。



第24図 SD203・204測量図

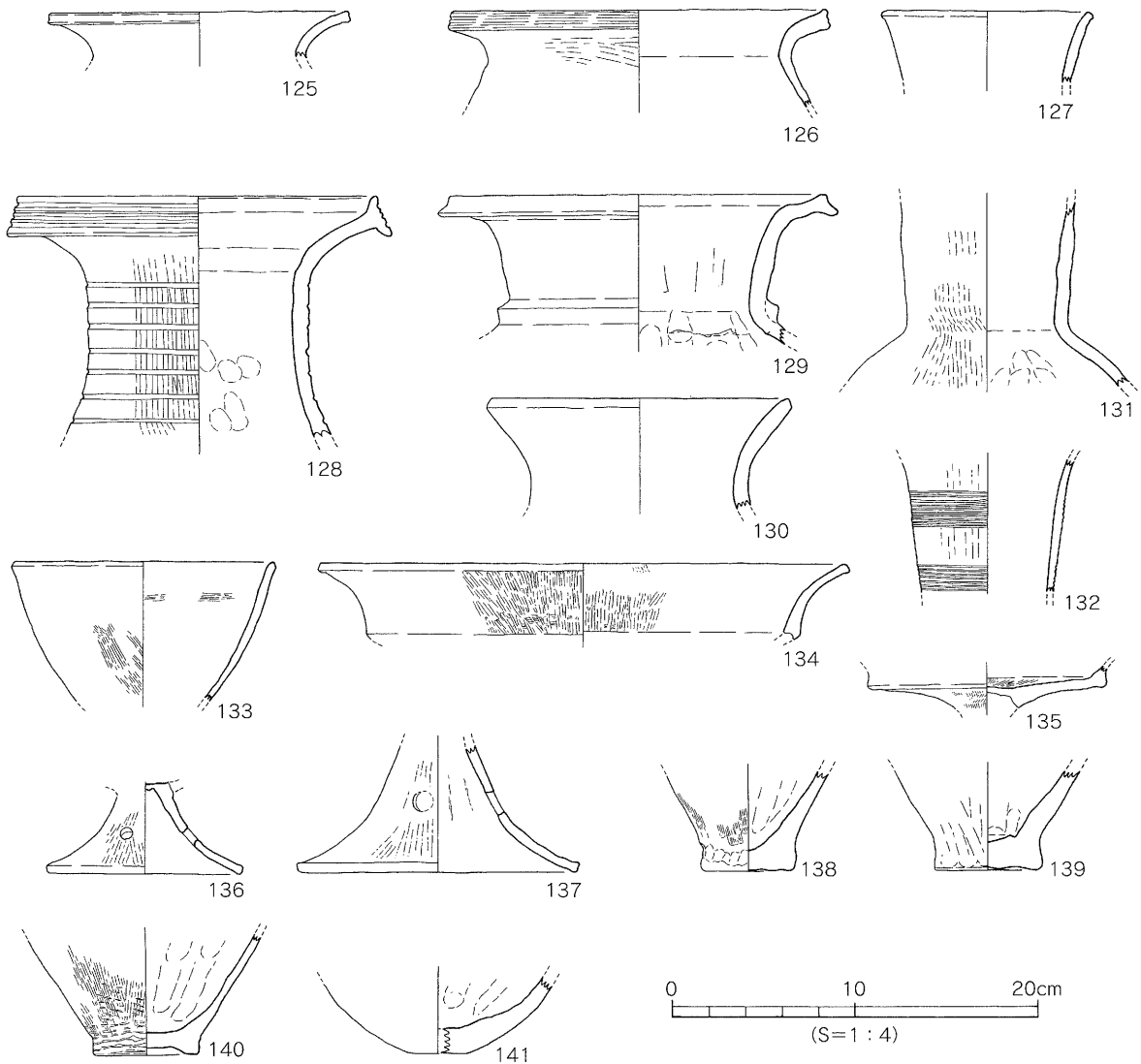


第25図 SK301・306・307・309測量図

出土遺物（第26図、図版10）

125・126は甕形土器で、126は口縁端面に凹線文2条を施す。127～132は壺形土器。127は直口壺、128～130は広口壺である。128は口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文4条、頸部には凹線文7条以上を施す。外来系。131・132は長頸壺で、132の頸部外面には細沈線文を施す。133は鉢形土器、134～137は高坏形土器である。138～140は甕形土器の底部で、やや上げ底となり、140の外面にはタキ調整を施す。141は壺形土器の底部である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期とする。



第26図 SK309出土遺物実測図

(4) 井戸

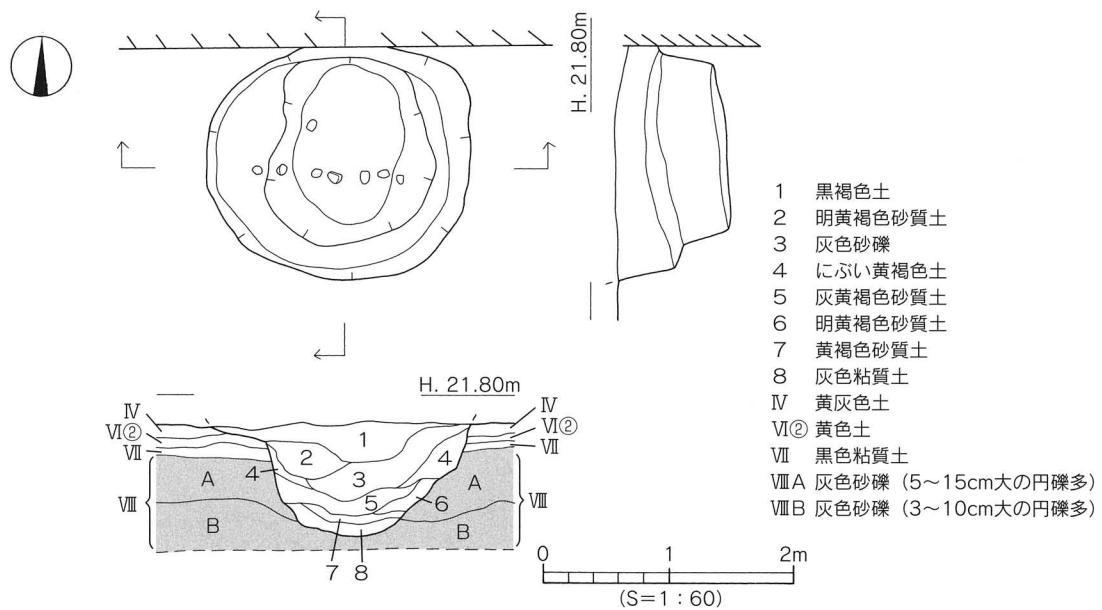
SE103 (第27図、図版4・5)

1区中央部北東寄り、C8区に位置する。中央部はSD104に切られ、北側の一部は調査区外に続く。第IV層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.10m、短径1.85m、深さは最深部で90cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、井戸西壁上位はテラス状となり、中央部は二段掘り構造となる。井戸は地面に穴を掘っただけの素掘りのもので、壁体上位から底面にかけては第Ⅷ層砂礫層である。埋土は8層に分層され、1層黒褐色土、2層明黄褐色砂質土、3層灰色砂礫、4層にぶい黄褐色土、5層灰黄褐色砂質土、6層明黄褐色砂質土、7層黄褐色砂質土、8層灰色粘質土である。堆積状況は1～3層が船底状、5・7・8層が水平堆積をなしており、3層堆積時に再掘削された可能性がある。出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、高坏形土器とミニチュア品である。遺物は、主に1～3層中から完形品を含む弥生土器のほか、匙形土製品(158)が出土した。

出土遺物 (第28図、図版10)

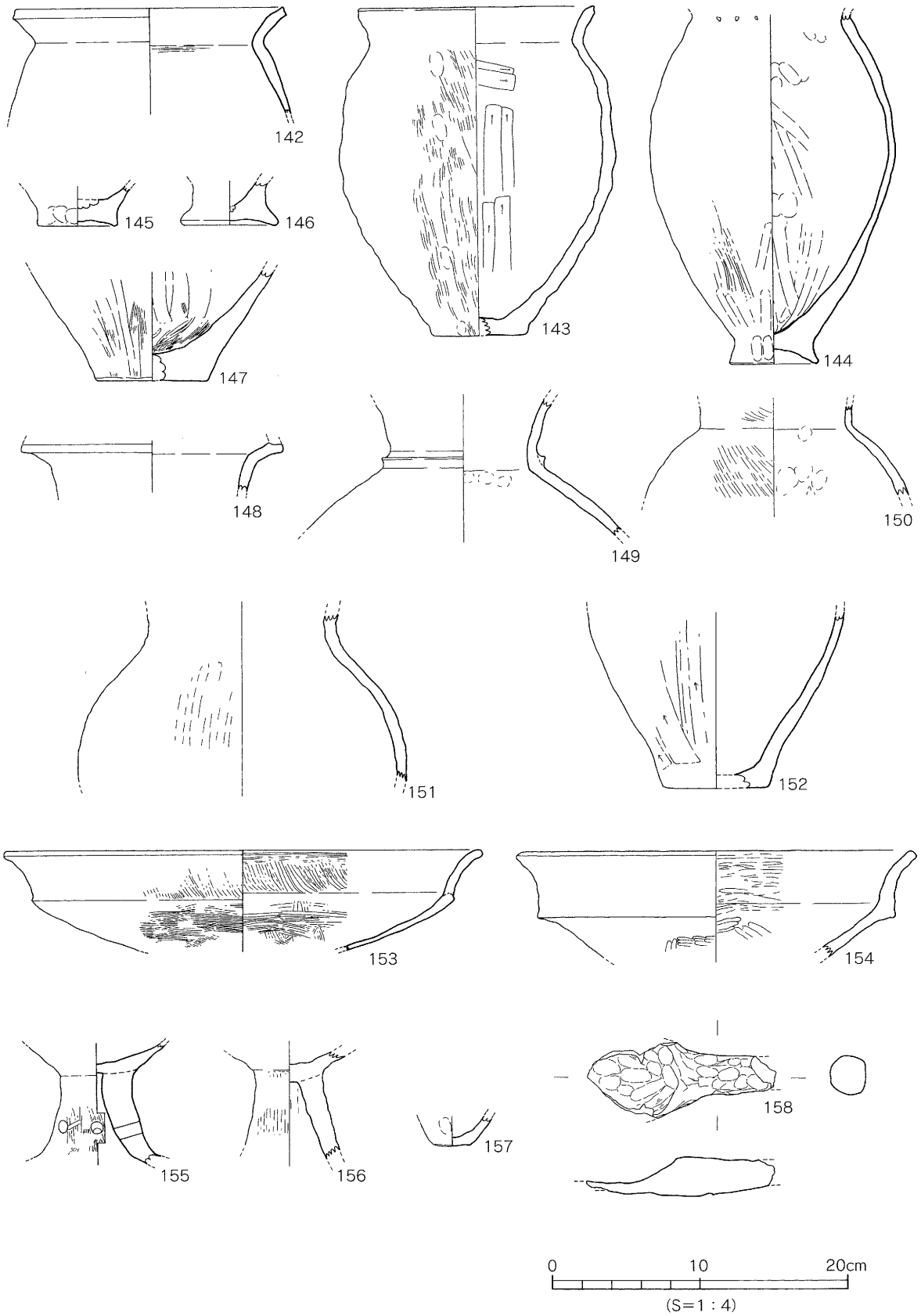
142～147は甕形土器。142・143は「く」の字状口縁を呈し、144は頸部外面に工具痕を残す。145～147は底部片である。148～152は壺形土器。148は複合口縁壺、149～151は頸胴部片で、149の頸部には、断面三角形の凸帯文を施す。153～156は高坏形土器、157はミニチュア品である。155・156は脚部片で、155は円孔を穿つ。158は匙形土製品で、体部は円形又は楕円形を呈するものと考えられ、断面形態は皿状を呈する。柄部は中実で、断面形態は円形となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期中葉～後半とする。



第27図 SE103測量図

東石井遺跡



第28図 SE103出土遺物実測図

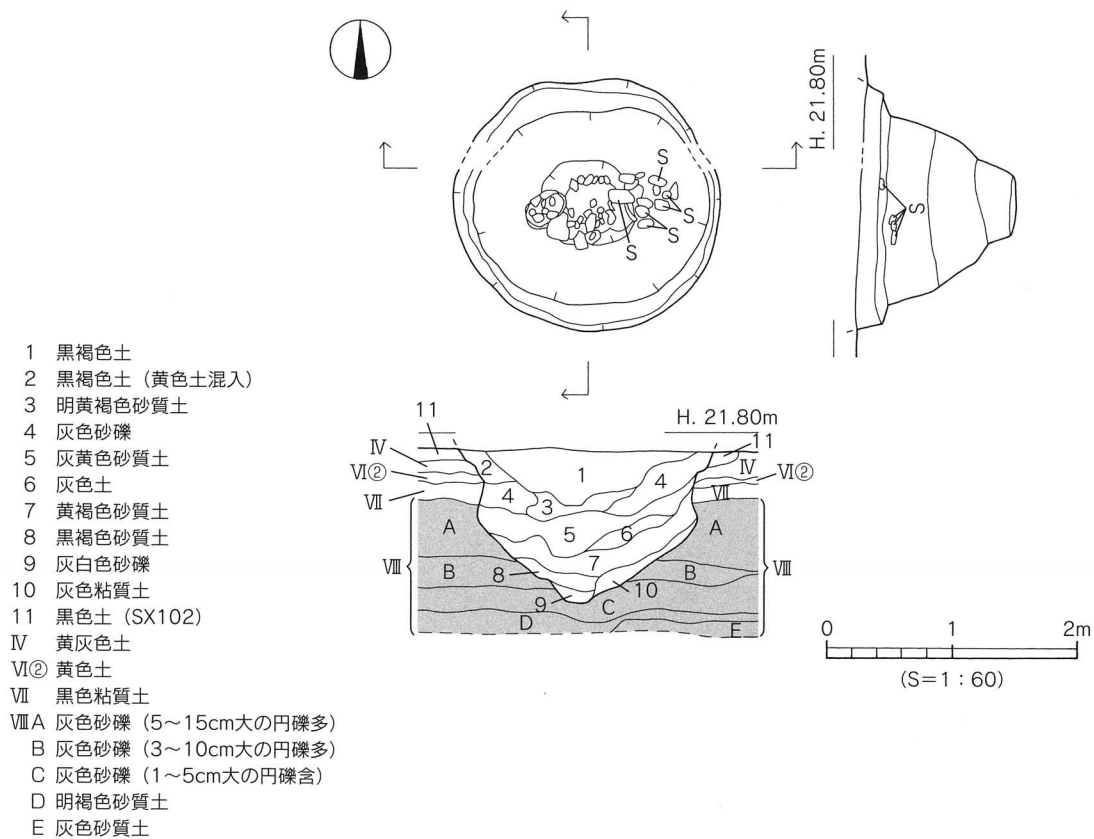
SE102 (第29図、図版5・6)

1区中央部やや北寄り、C6・7区に位置し、SX101を切る。第IV層上面での検出であり、第III①層が覆う。平面形態は円形を呈し、規模は径2.0~2.1m、深さは最深部で1.2mを測る。断面形は逆台形状を呈するが、東西壁体は袋状となる。井戸は地面に穴を掘っただけの素掘りのもので、壁体中位から底面にかけては第VIII層砂礫層である。埋土は10層に分層され、1層黒褐色土、2層黒褐色土(黄色土混入)、3層明黄褐色砂質土、4層灰色砂礫、5層灰黄色砂質土、6層灰色土、7層黄褐色砂質土、8層黒褐色砂質土、9層灰白色砂礫、10層灰色粘質土である。堆積状況は斜堆積をなしているが、3層堆積時に再掘削された可能性がある。遺物は、主に1層中から復元完形品の甕形土器(159・161・168)や壺形土器(179)を含む多数の弥生土器と、径10~15cm大の河原石が出土した。

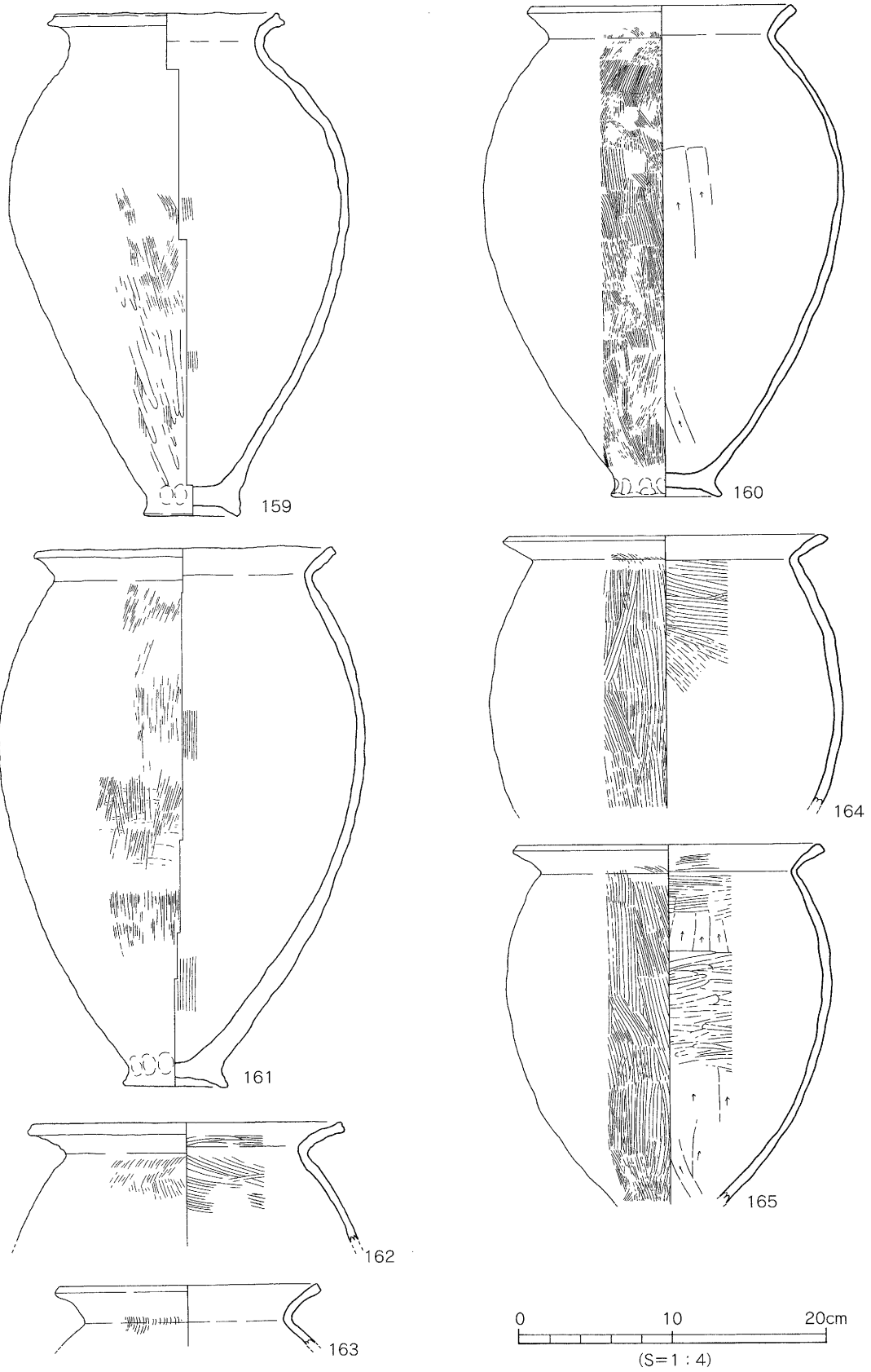
出土遺物 (第30~32図、図版11・12)

159~172は甕形土器。159~161は完形品で、口縁部は「く」の字状を呈し、底部は上げ底となる。胴部外面はハケメ調整を施すが、159の胴部下位はタテ方向のヘラミガキ調整となる。169は胴部片で、ヘラ状工具による線刻を施す。173~181は壺形土器。173~175は直口壺、176~179は複合口縁壺である。180・181は胴底部片で、平底となる。182~185は鉢形土器。182は直口口縁、183は外反口縁を呈する。184・185は底部で、上げ底となる。

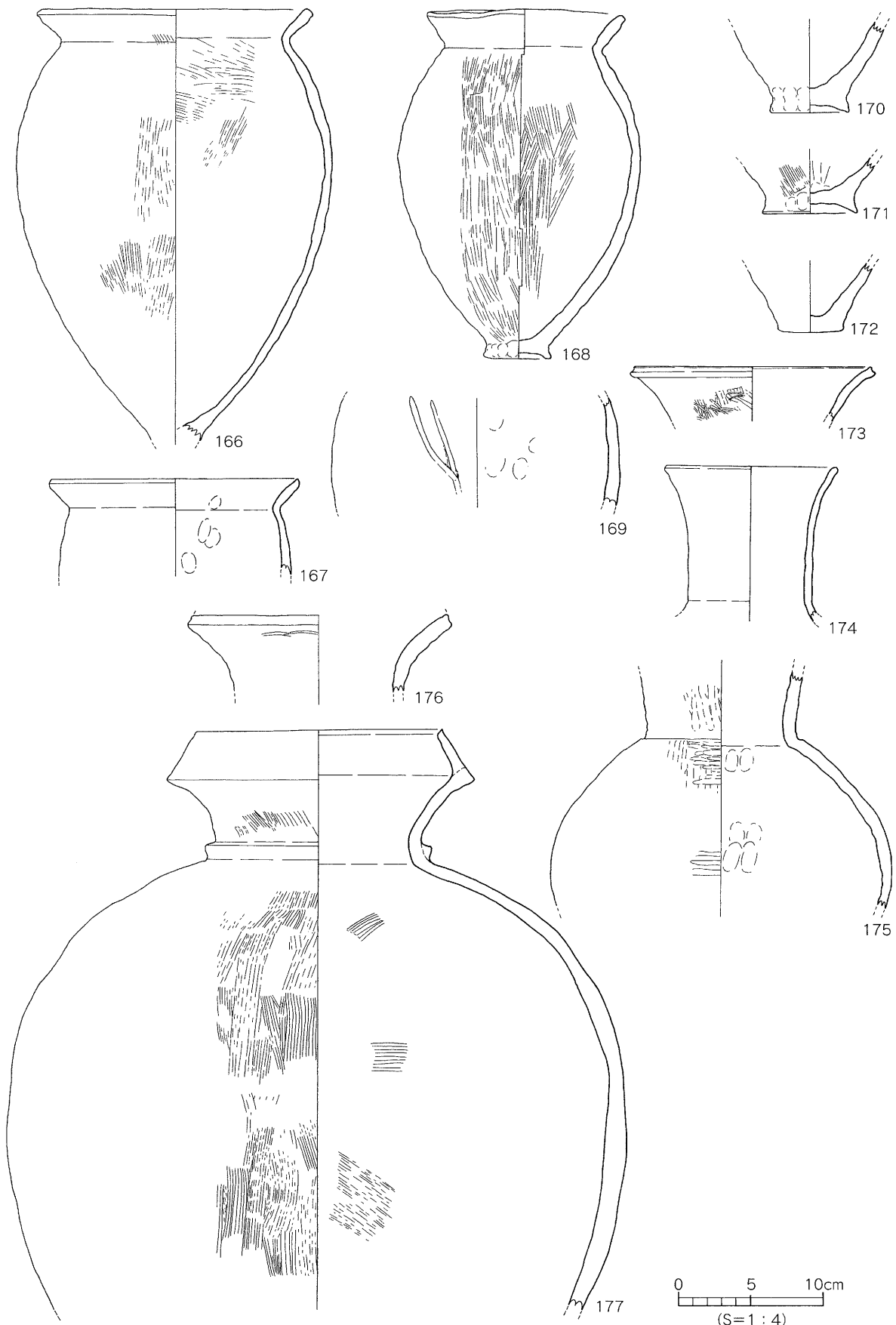
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期中葉~後半とする。



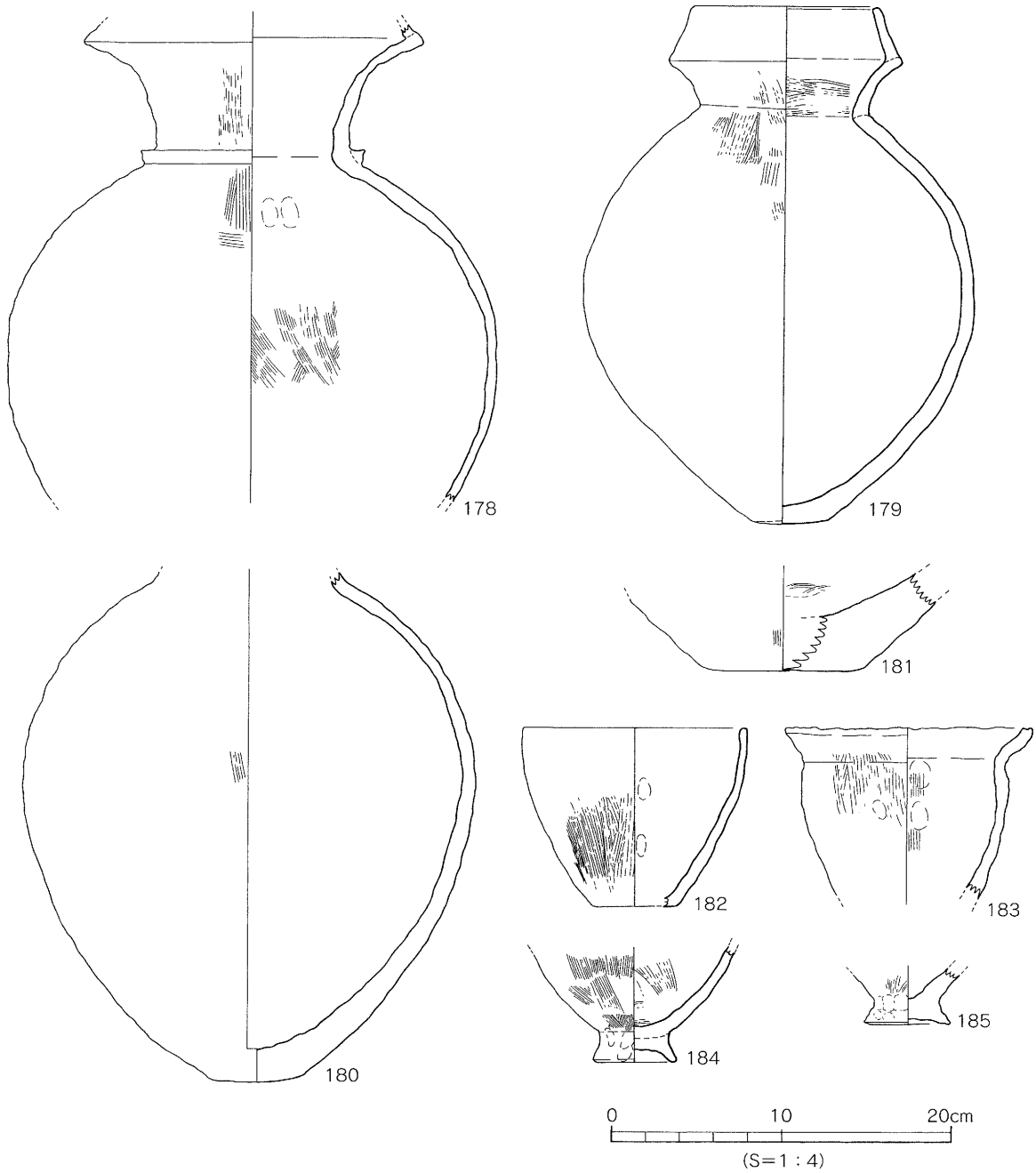
第29図 SE102測量図



第30図 SE102出土遺物実測図(1)



第31図 SE102出土遺物実測図 (2)



第32図 SE102出土遺物実測図 (3)

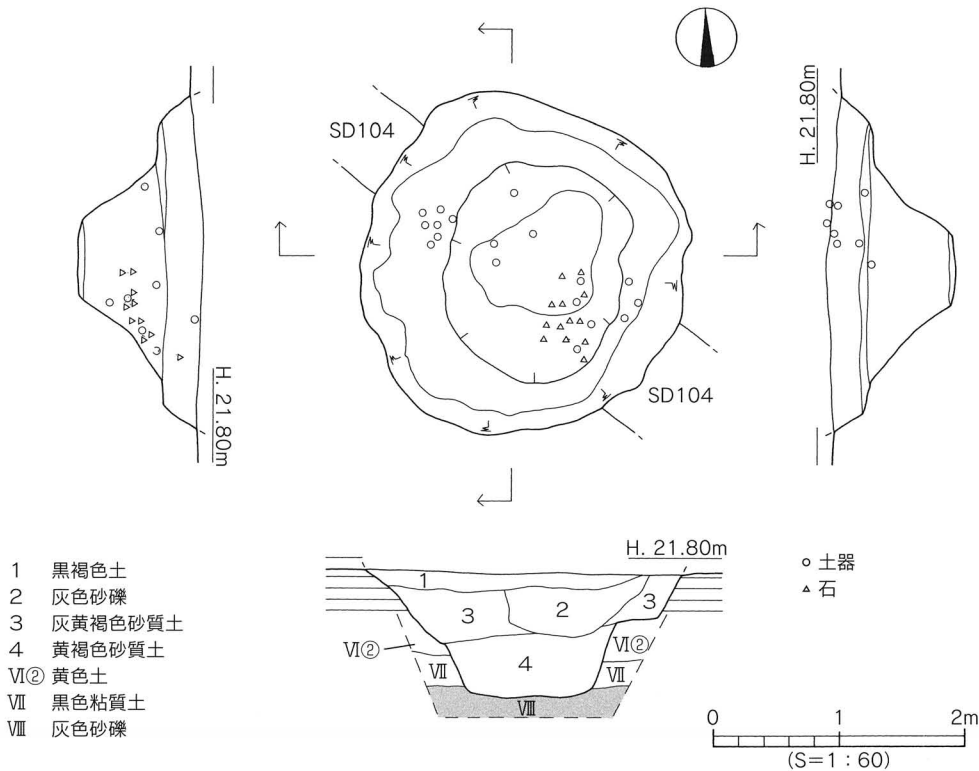
S E 101 (第33図、図版6)

1区東側、C10~D11区に位置し、SD104を切る。第IV層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。平面形態は円形を呈し、規模は径2.6~2.7m、深さは最深部で1mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体上位は二段掘り構造となる。井戸は地面に穴を掘っただけの素掘りのもので、底面は第Ⅷ層砂礫層に及ぶ。埋土は4層に分層され、1層黒褐色土、2層灰色砂礫、3層灰黄褐色砂質土、4層黄褐色砂質土となる。堆積状況は水平堆積をなしているが、3層堆積時に再掘削された可能性がある。遺物は、主に2・3層中から弥生土器と、径10~20cm大の河原石が30点余り出土した。出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、支脚形土器である。

出土遺物 (第34図、図版12)

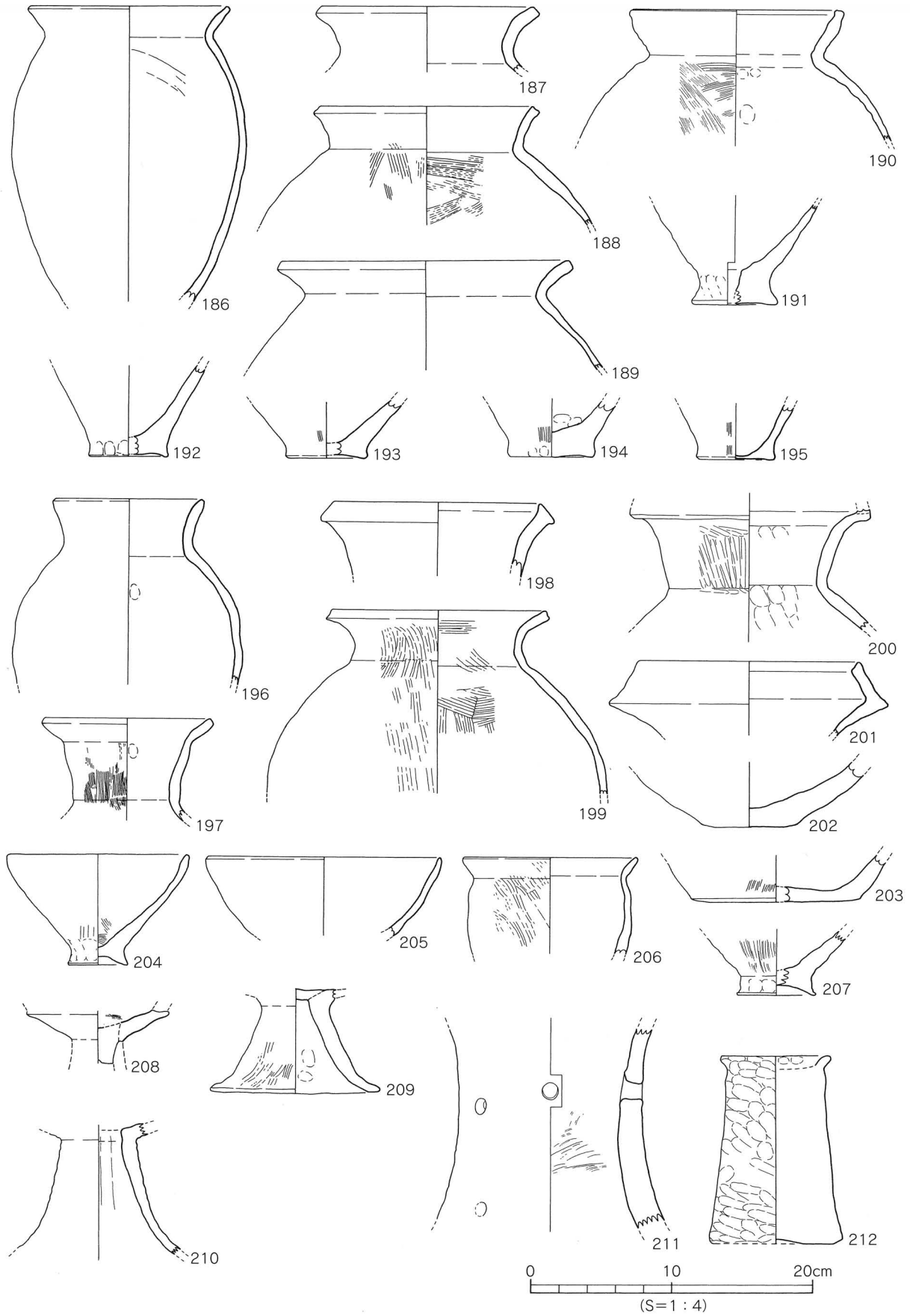
186~195は甕形土器。186~189は「く」の字状口縁を呈し、190は口縁端部を内方に拡張する。191~195は底部片で、わずかに上げ底となる。196~203は壺形土器。196・197は直口壺、198・199は広口壺、200・201は複合口縁壺である。198は口縁端部を上下方に拡張する。202・203は底部片で、平底となる。204~207は鉢形土器。204・205は直口口縁、206は外反口縁を呈する。208~210は高坏形土器、211は器台形土器、212は支脚形土器である。212は中実で、受部及び底部は凹む。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期中葉~後半とする。



第33図 SE101測量図

東石井遺跡



第34図 SE101出土遺物実測図

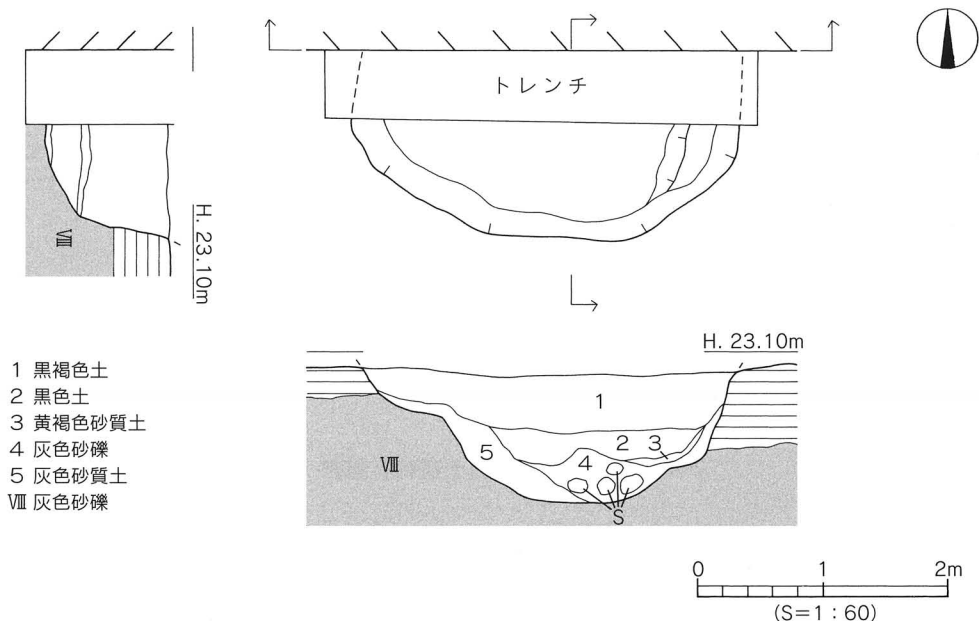
S E 301 (第35図)

3 B区中央部、B50・51区に位置し、北半分は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.05m、南北検出長0.90m、深さは最深部で1mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東西壁体は二段掘り構造となる。井戸は地面に穴を掘っただけの素掘りのもので、壁体中位から底面にかけては第Ⅷ層灰色砂礫層となる。埋土は5層に分層され、1層黒褐色土、2層黒色土、3層黄褐色砂質土、4層灰色砂礫、5層灰色砂質土である。堆積状況は斜～水平堆積をなす。遺物は1層中から弥生土器と石器のほか、底面付近から径15～20cm大の河原石が数点出土した。出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、支脚形土器とミニチュア品である。

出土遺物 (第36図、図版13)

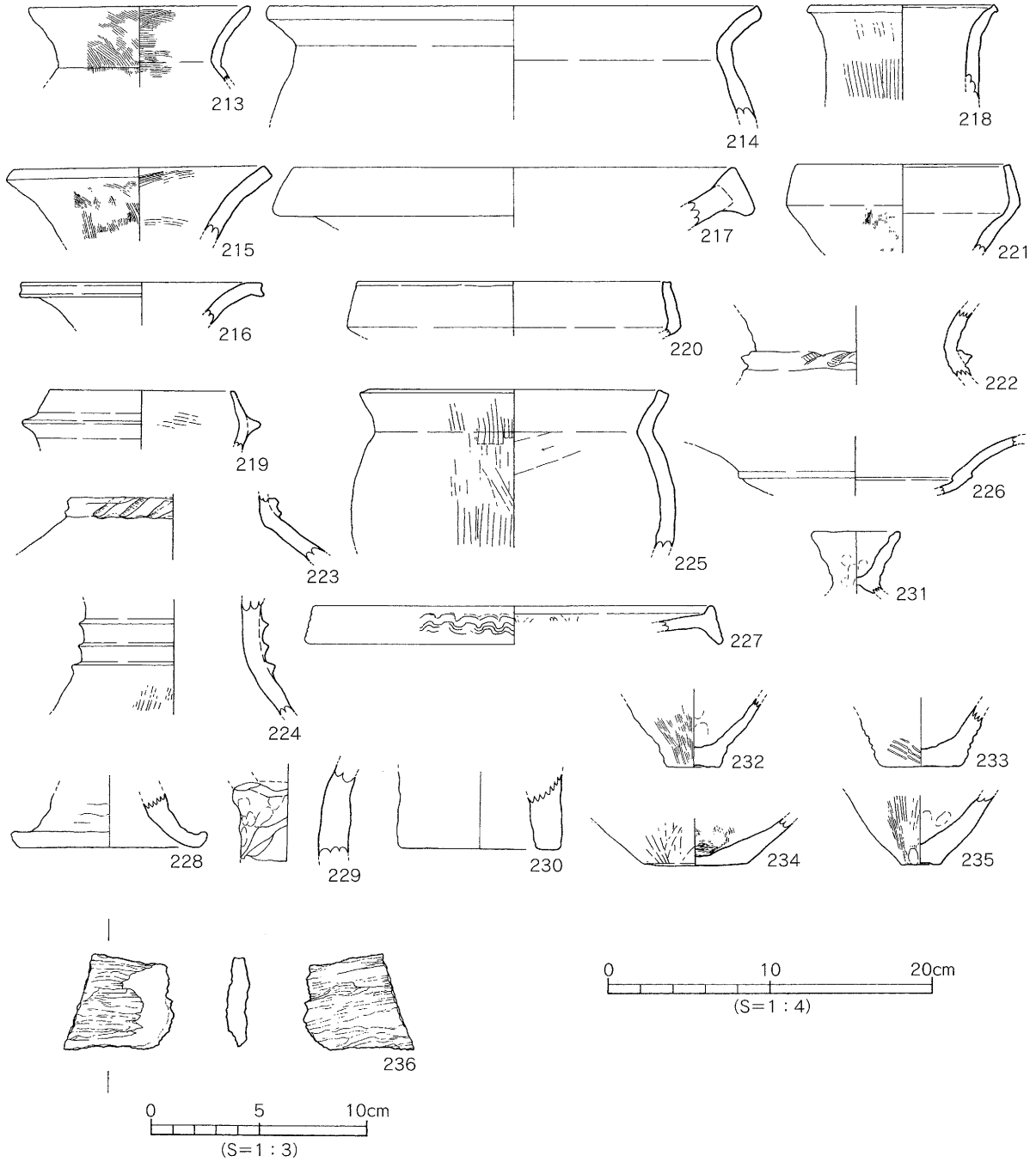
213・214は甕形土器。214は口径30cmを超える大型品である。215～224は壺形土器。215～217は広口壺で、215の内面には粘土補修痕が残る。218は直口壺、219～221は複合口縁壺である。219の口縁接合部はタガ状となる。222～224は頸部片で、224は断面三角形の凸帯文を施す。225は鉢形土器で、体部外面に粗いハケメ調整を施す。226は高坏形土器、227は器台形土器である。227は口縁端面に櫛描き波状文を施す。228～230は支脚形土器、231はミニチュア品で、230は小円孔を穿つ。232・233・235は甕形土器の底部で、233の外面にはタタキ調整を施す。234は壺形土器の底部で、平底となる。236は石庖丁の未成品である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期末とする。



第35図 SE301測量図

東石井遺跡



第36図 SE301出土遺物実測図

(5) 土器溜まり

S X101 (第37図)

1区中央部北寄り、C6・7区に位置し、南東側はSE102に切られる。第IV層上面での検出である。平面形態は不整形を呈し、規模は長さ5.6m、幅3.5m、深さ20cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土中から弥生土器片と石器が出土した。

出土遺物 (第37図、図版13)

237・238は甕形土器で、口頸部境が凹む。239～242は壺形土器。239は広口壺で、口縁端部を上下方に拡張する。240は複合口縁壺の口縁部、241・242は頸胴部片である。243・244は高坏形土器で、244は柱部内面にシボリ痕を残す。245・246は甕形土器の底部で、245は上げ底、246は平底となる。247・248は石庖丁の完形品で、両側部に抉りをもつ。緑色片岩製。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期中葉とする。

S X102 (第38図、図版5)

1区中央部西寄り、C5～D5区に位置し、西側はSD106に切られる。第IV層上面での検出である。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は東西検出長4.10m、南北検出長3.75m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土中から弥生土器と石庖丁が出土した。

出土遺物 (第38図)

249・250・255・256は甕形土器で、249は口縁部が内湾する。254は壺形土器の底部で、内面にヘラケズリ調整を施す。252は鉢形土器で、脚付鉢の脚部片である。253は高坏形土器の口縁部片で、口縁端部をわずかに上方に拡張する。257は緑色片岩製の石庖丁である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期末とする。

(6) 自然流路

S R201 (第7図)

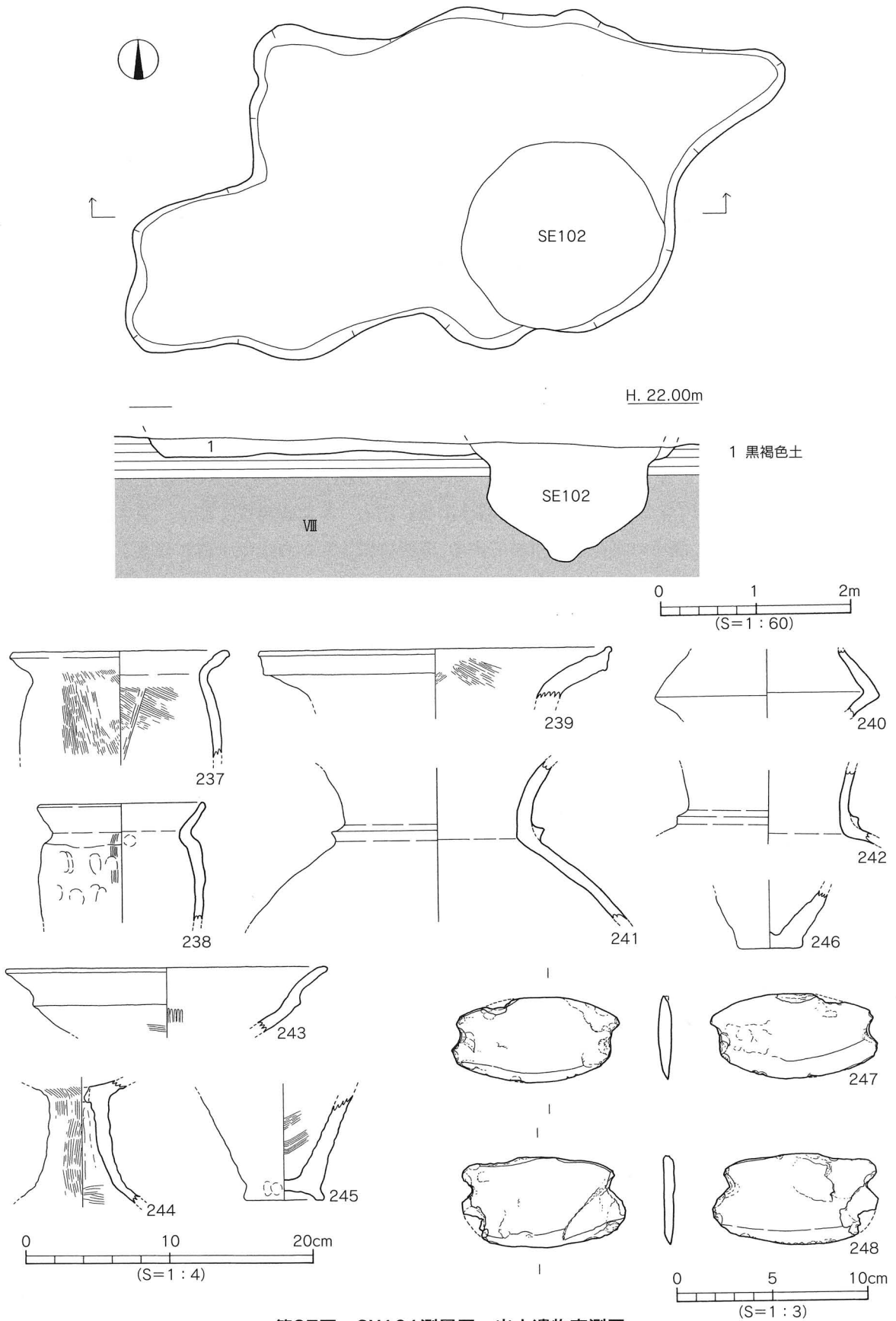
2B区のはほぼ全域、C26～D27区に位置する東西方向の流路である。第IV層上面で検出し、第Ⅲ③層が覆う。流路の両端と北側は調査区外に続く。規模は検出長5.6m、検出幅4.0m、深さ45cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。流路底面は北から南に向けて傾斜する(比高差20cm)。埋土は灰色砂礫層である。流路内から弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第39図)

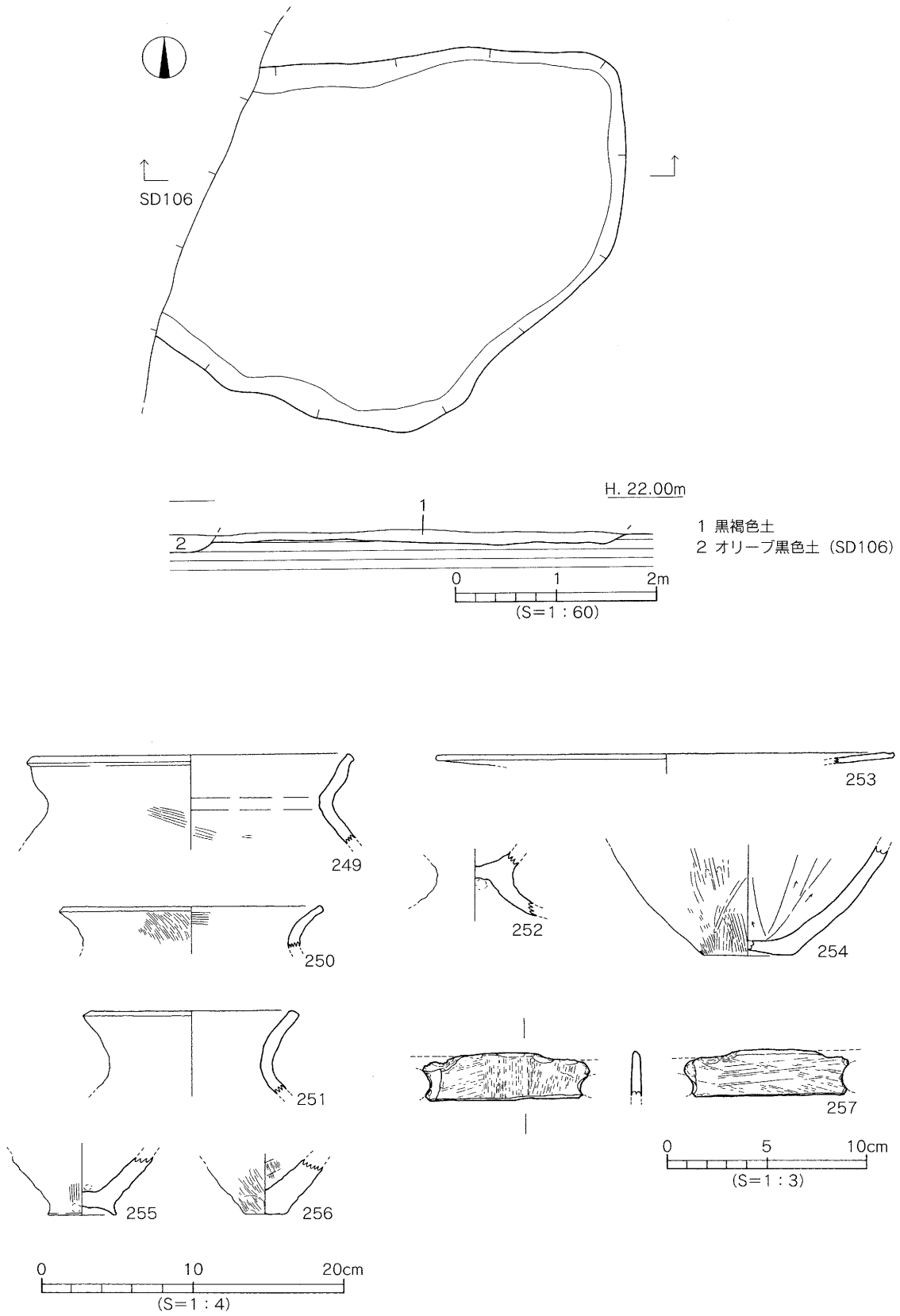
258は甕形土器で、口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端面はナデ凹む。259・260・263・264は壺形土器。259は広口壺で、口縁端部を上方に拡張する。261・262は支脚形土器の脚部片である。

時期：出土遺物の特徴と検出状況から、弥生時代後期とする。

東石井遺跡



第37図 SX101測量図・出土遺物実測図

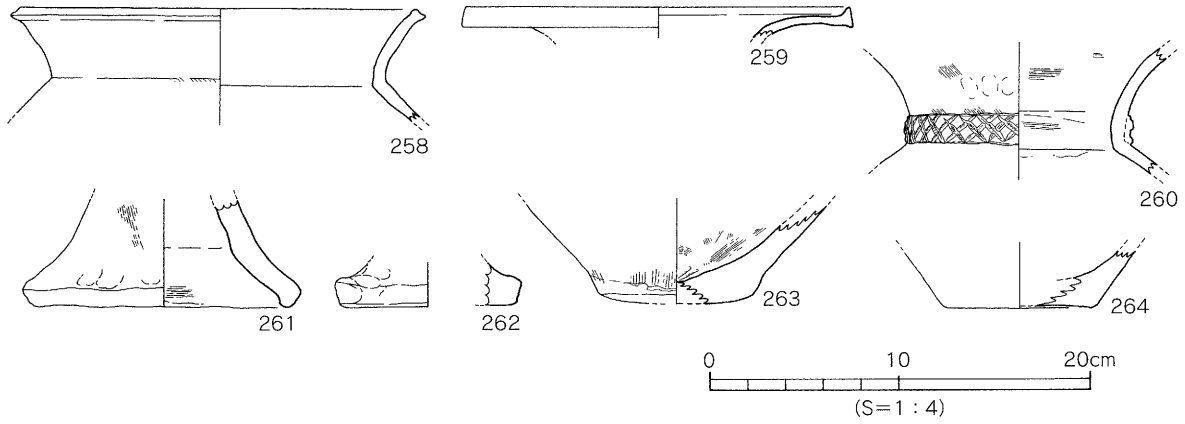


第38図 SX102測量図・出土遺物実測図

S R 202 (第7図)

2 B区のほぼ全域、C 26～D 27区に位置する東西方向の流路である。第VI①層上面での検出であり第IV層が覆う。流路両端と北側は調査区外に続く。規模は検出長5.6m、検出幅4.0m、深さ45cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は灰色砂礫層である。流路内から弥生土器片が数点出土した。

時期：出土遺物の特徴と検出状況から、弥生時代中期以前とする。



第39図 SR201出土遺物実測図

4. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、掘立柱建物址3棟、溝6条、土坑6基、性格不明遺構（SX）1基である。

(1) 掘立柱建物址

掘立101（第40図）

1区東部南寄り、D8・9区に位置する。第IV層上面での検出である。2間×1間以上の建物址で、建物南側は調査区外に続く。建物方位は真北よりやや東に振る。規模は桁行長3.79m、梁行長1.68m、柱穴間隔は1.68～1.94mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径30～40cmを測る。柱痕は3基の柱穴（SP②～④）で検出され、径10～15cm、深さ30～35cmを測る。柱穴掘り方埋土はオリーブ黒色土、柱痕埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器や土師器の小片が数点出土した。

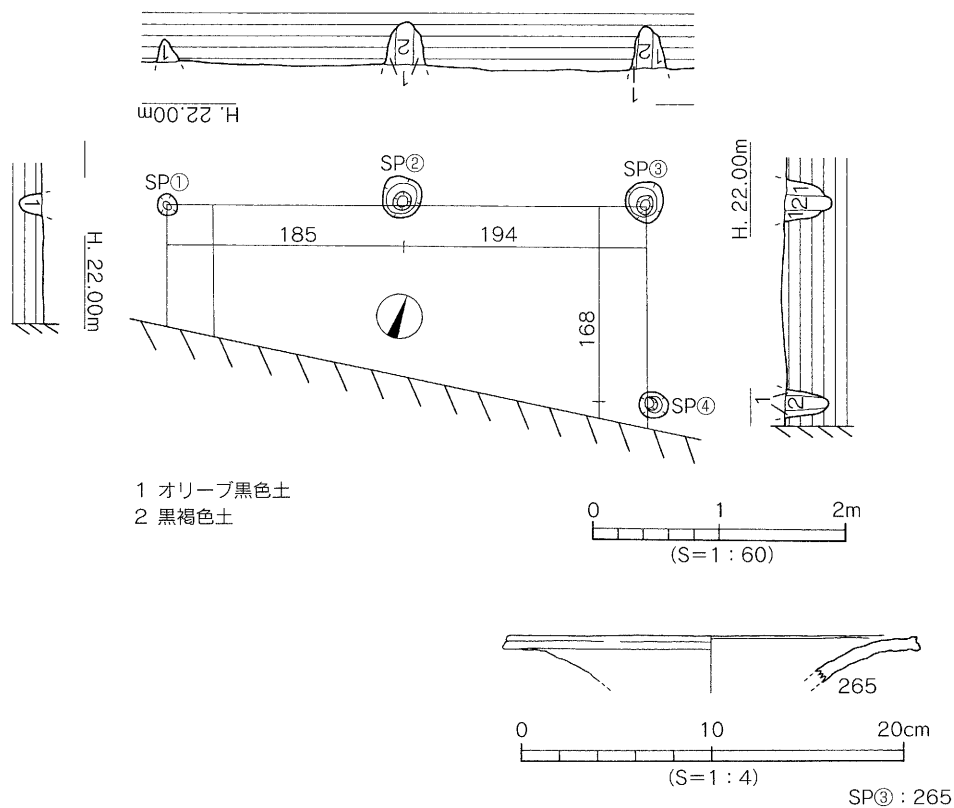
出土遺物（第40図）

265は弥生土器の壺形土器。口縁端部は上下方に拡張し、口縁端面はナデ凹む。

時期：柱穴掘り方埋土が第Ⅲ①層と酷似することから、概ね古墳時代とする。

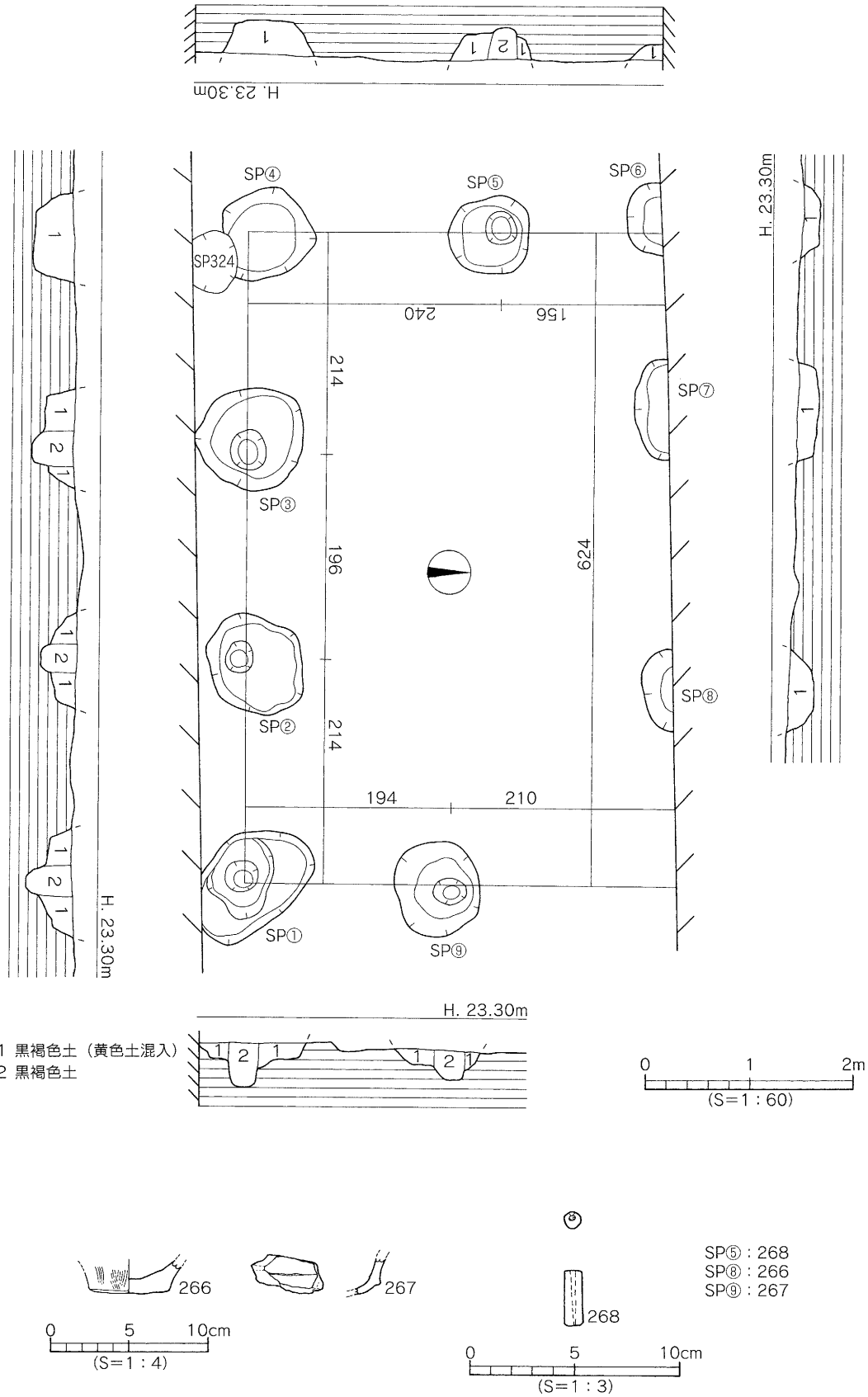
掘立301（第41図）

3D区中央部西寄り、D53～E55区に位置する。第IV層上面での検出である。3間×2間以上の建物址で、SK310、SP324、SK308（古墳時代末）に切られる。建物北側は調査区外に続く。建物方位はほぼ真北である。規模は桁行長6.24m、梁行長4.04m、柱穴間隔は1.94～2.14mを測る。各柱



第40図 掘立101測量図・出土遺物実測図

東石井遺跡



第41図 掘立301測量図・出土遺物実測図

穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は、径0.8～1mを測る。柱痕は5基の柱穴(S P①～③、⑤、⑥)で確認され、径25～40cm、深さ30～42cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色土に黄褐色土が混入するものであり、柱痕埋土は黒褐色土である。遺物はS P⑧、⑨内から土師器片と弥生土器片、S P⑤内から管玉が出土した。

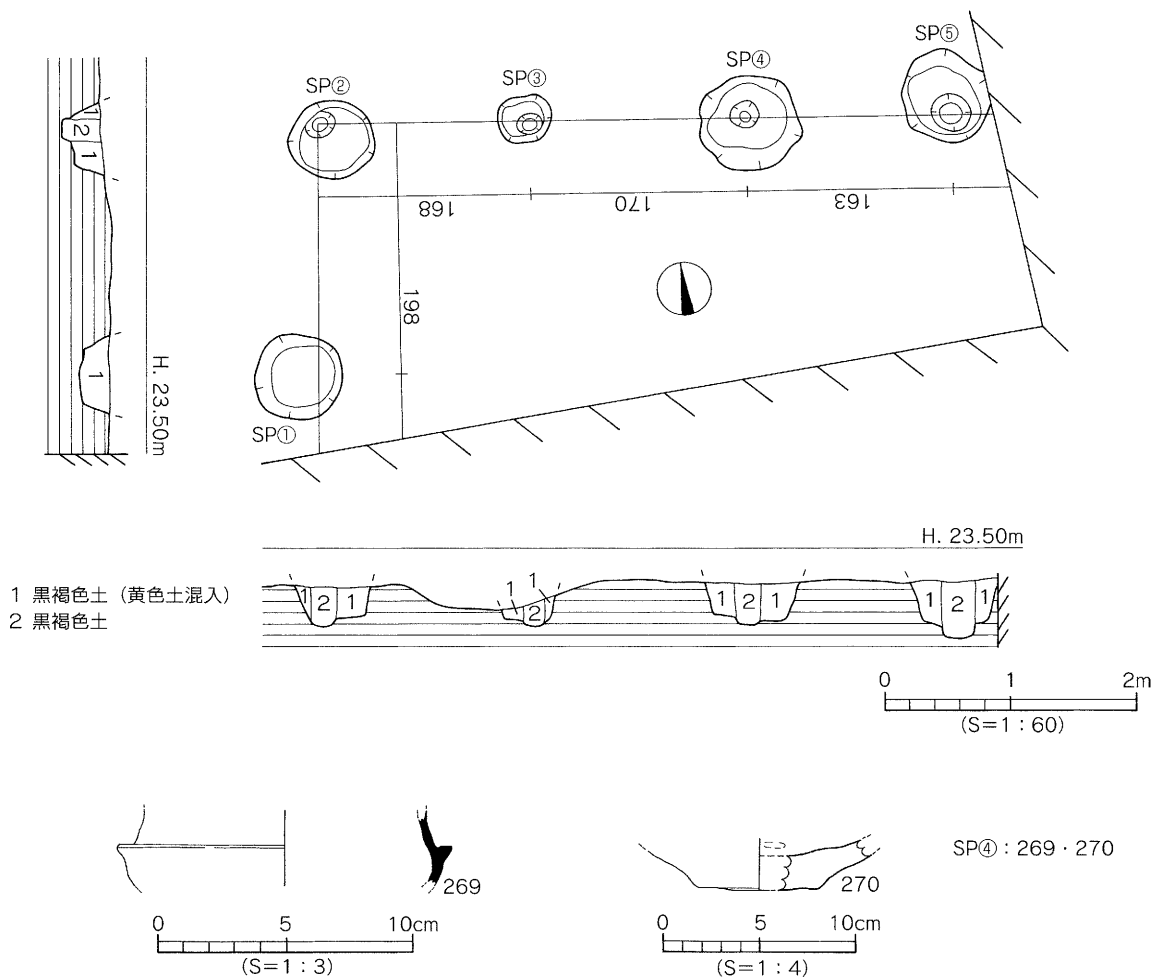
出土遺物 (第41図、図版13)

266・267は弥生土器。266は甕形土器の底部、267は高坏形土器の坏部片である。268は碧玉製の管玉である。

時期：出土遺物の特徴とS K308に切られることから、概ね古墳時代以前とする。

掘立302 (第42図)

3 D区東端、D61～E62に位置する。第Ⅲ②層上面での検出であり、第Ⅱ①層が覆う。3×1間以上の建物址で、S B304を切る。建物東側と南側は調査区外に続く。建物方位は真北よりわずかに東に振る。規模は桁行長5.00m、梁行長1.98m、柱穴間隔は1.63～1.98mを測る。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は、径40～70cmを測る。柱痕は4基の柱穴(S P②～⑤)で検出され、径18～30cm、



第42図 掘立302測量図・出土遺物実測図

深さ30~45cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色土に黄褐色土が混入するものであり、柱痕埋土は黒褐色土である。遺物は須恵器片、土師器片、弥生土器片が出土した。

出土遺物（第42図）

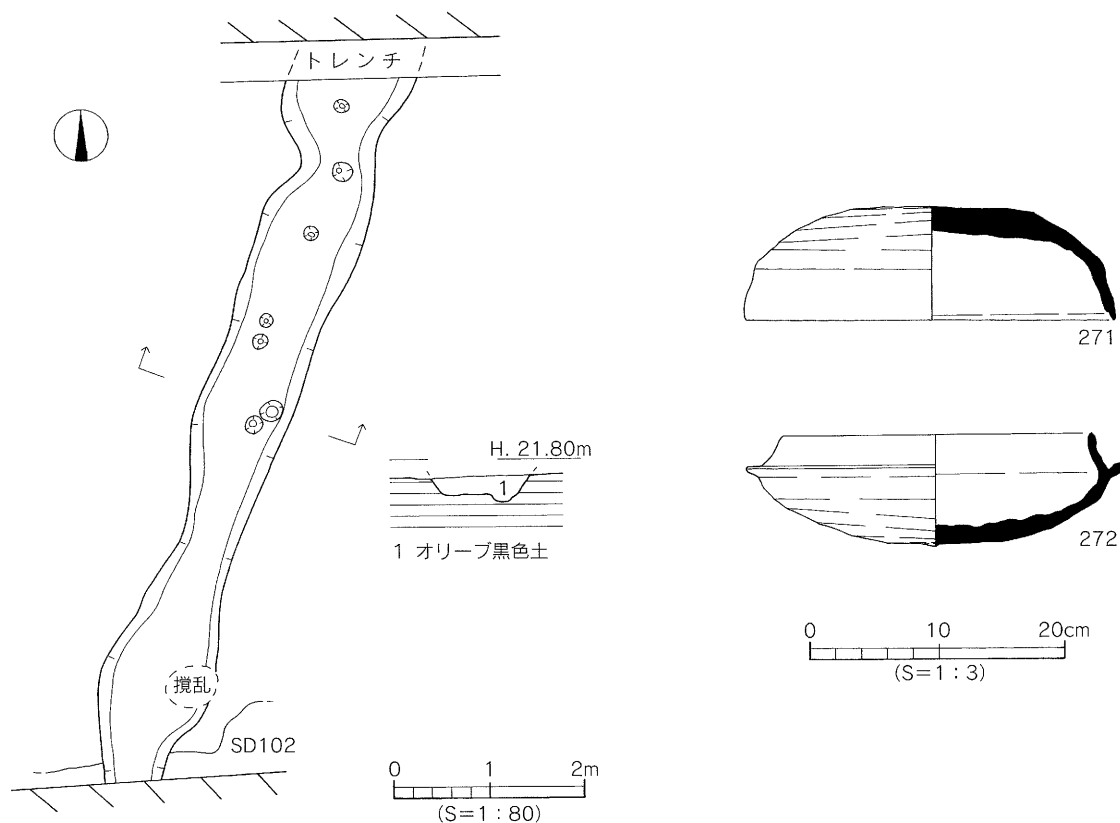
269は須恵器坏身で、たちあがりは欠損する。270は壺形土器の底部で、突出する平底となる。

時期：出土遺物の特徴とS B 304を切ることから、概ね古墳時代後期以降とする。

(2) 溝

SD106（第43図、図版6）

1区中央部西寄り、C・D4区に位置する南北方向の溝である。第IV層上面で検出した。溝の南端はSD102、中央部はSX101を切り、両端は調査区外に続く。規模は検出長7.72m、幅1.36m、深さ20cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝底面は北から南に向けて傾斜する（比高差8cm）。埋土はオリーブ黒色土単層である。溝底面にて径16~22cm、深さ10~30cm大の小ピットを多数検出した。ピット埋土はいずれも、溝埋土と同様オリーブ黒色土である。遺物は埋土中位付近から完形の須恵器坏身と坏蓋が重なり合って出土し、坏身の中からは幅2~3cm、長さ3~5cm大の円礫を数点検出した。



第43図 SD106測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第43図、図版13）

271は須恵器坏蓋、272は坏身である。271は扁平な天井部から、なだらかに下がり口縁部にいたり、口縁端部は内傾する。272はたちあがり内傾し、たちあがり端部は丸く仕上げる。受部は上外方に短くのび、受部端に沈線状の凹みが巡る。

時期：出土遺物の特徴から、古墳時代後期後半とする。

S D 205（第44図）

2 C 区の中央部、C 28～31区に位置する南北方向の溝である。S D 202底面で検出した溝で、溝両端は調査区外に続く。規模は検出長6.4m、検出幅1.0m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝底面は北から南に向けて緩傾斜する（比高差2cm）。埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土中から須恵器片が出土した。

出土遺物（第44図）

273は須恵器の甗である。肩部に沈線と刺突列点文が巡る。

時期：出土遺物の特徴から、古墳時代後期前半とする。

S D 309（第45図）

3 D 区西側、D 53～E 53区に位置する南北方向の溝である。第Ⅲ②層上面での検出であり、第Ⅱ①層が覆う。溝西側はS K 304、東側はS K 305を切り、両端は調査区外に続く。規模は検出長4.80m、幅2.20m、深さ32cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。溝底面は北から南に向けて緩傾斜する（比高差6cm）。溝底面は第Ⅷ層灰色砂礫層に及ぶ。埋土は2層に分層され、1層黒褐色土、2層褐色土である。遺物は埋土中から須恵器片や石器が出土した。

出土遺物（第45図、図版13）

274は須恵器坏身である。たちあがりは短く内傾し、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。275は緑色片岩製の石錘である。

時期：出土遺物の特徴から、古墳時代後期後半とする。

S D 311（第46図）

3 D 区東側、B・C 60区に位置する南北方向の溝で、途中、西側へ屈曲する。第Ⅳ層上面での検出である。溝南側はS K 303を切り、両端は調査区外に続く。規模は検出長3.80m、幅2.90m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝底面は北から南に向けて緩傾斜する（比高差3cm）。溝底面にてピット1基（S P ①）を検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径60cm、短径50cm、深さ10cmを測る。ピット埋土は黒色土単層であるが、ピット内からの遺物の出土はない。溝内からは、埋土中より須恵器片、土師器片が数点出土した。

出土遺物（第46図）

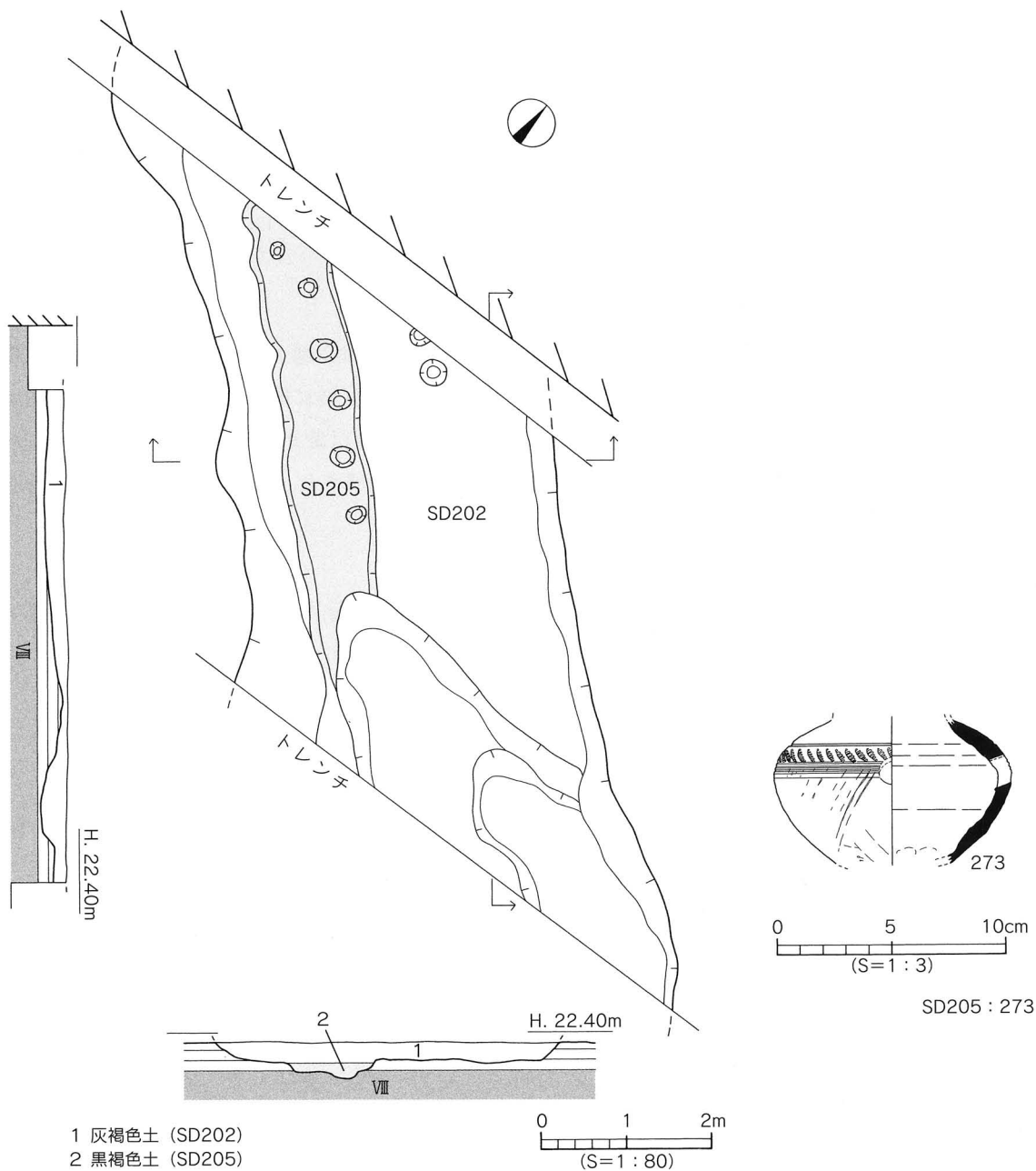
276・277は須恵器坏蓋、278・279は須恵器坏身である。276は天井部外面にヘラ状工具による格子状の線刻を施す。坏身はたちあがり短く内傾し、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。280は土師器甗の把手である。断面楕円形を呈し、ほぼ水平にのびる。

時期：出土遺物の特徴から、古墳時代末とする。

S D304 (第46図)

3 B区東側、B51区に位置する南北方向の溝である。第Ⅲ②層上面で検出であり、第Ⅱ②層が覆う。溝両端は調査区外に続く。規模は検出長18.40m、幅19.60m、深さ34cmを測る。断面形態は船底状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝底面は北から南に向けて傾斜する(比高差10cm)。溝底面は第Ⅷ層砂礫層となる。溝内から遺物の出土はない。

時期：検出状況と埋土がS D311と酷似することから、概ね古墳時代末とする。



第44図 SD202・205測量図・出土遺物実測図

S D305 (第46図)

3 B区西側、B50区に位置する南北方向の溝である。第Ⅲ②層上面での検出であり、溝両端は調査区外に続く。規模は検出長1.80m、幅0.92m、深さ26cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝底面はほぼ平坦であり、第Ⅷ層となる。溝内から遺物の出土はない。

時期：検出状況と埋土がS D311と酷似することから、概ね古墳時代末とする。

(3) 土坑

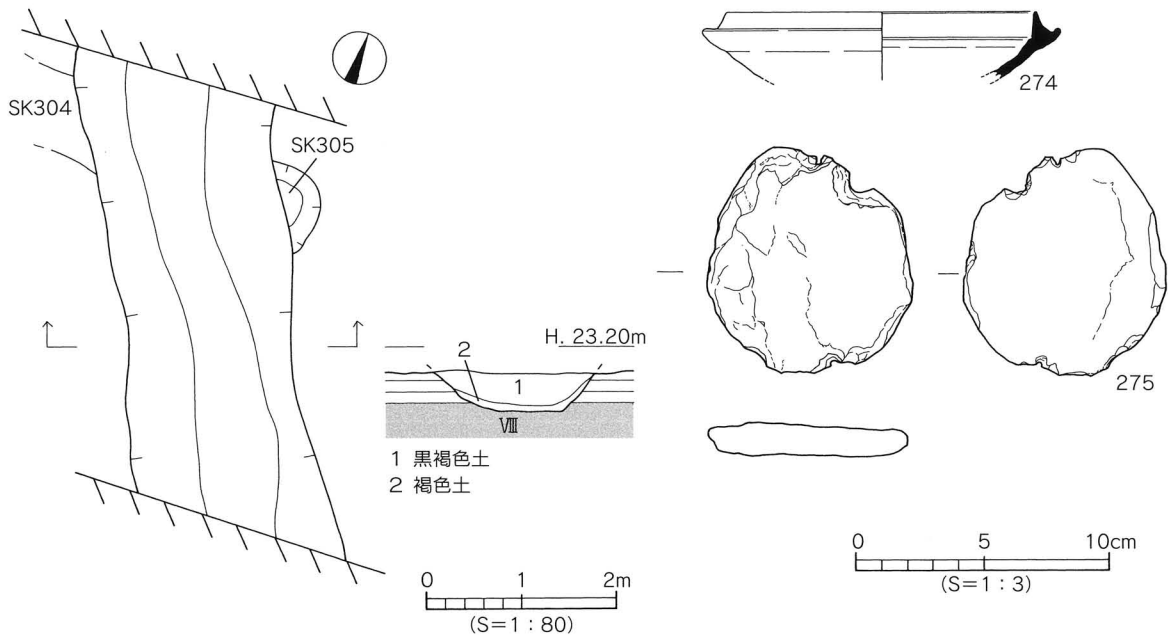
S K302 (第47図)

3 D区西端、D51・52区に位置し、北側は調査区外に続く。第Ⅳ層上面での検出である。平面形態は不整楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西長0.96m、南北検出長1.66m、深さ55cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、二段掘り構造となる。埋土は黒褐色土に黄色土が混入するものである。土坑底面は自然流路(灰色砂)となる。遺物は埋土上位から須恵器片、土師器片、石器が出土した。そのほか埋土上位から焼土が点在して出土した。

出土遺物 (第47図)

281は器種不明品で、石材は安山岩である。282は大型の鉢形土器で、口縁端部は「コ」字状となる。283は土師器碗である。口縁部は直立気味に立ち上がり、体部内面には指頭痕が顕著に残る。284は須恵器高坏で、柱部に沈線と貫通しない透かしを3方向に施す。

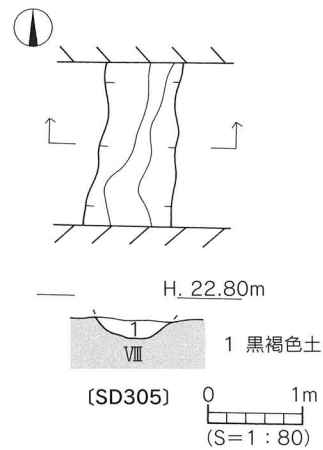
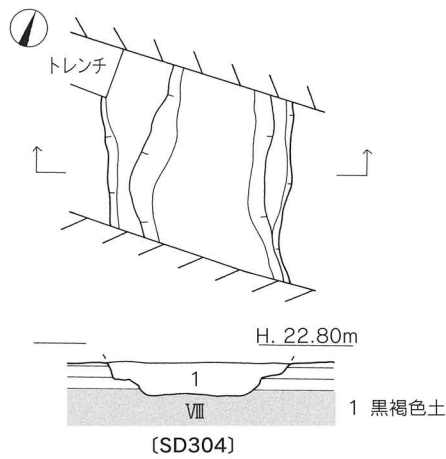
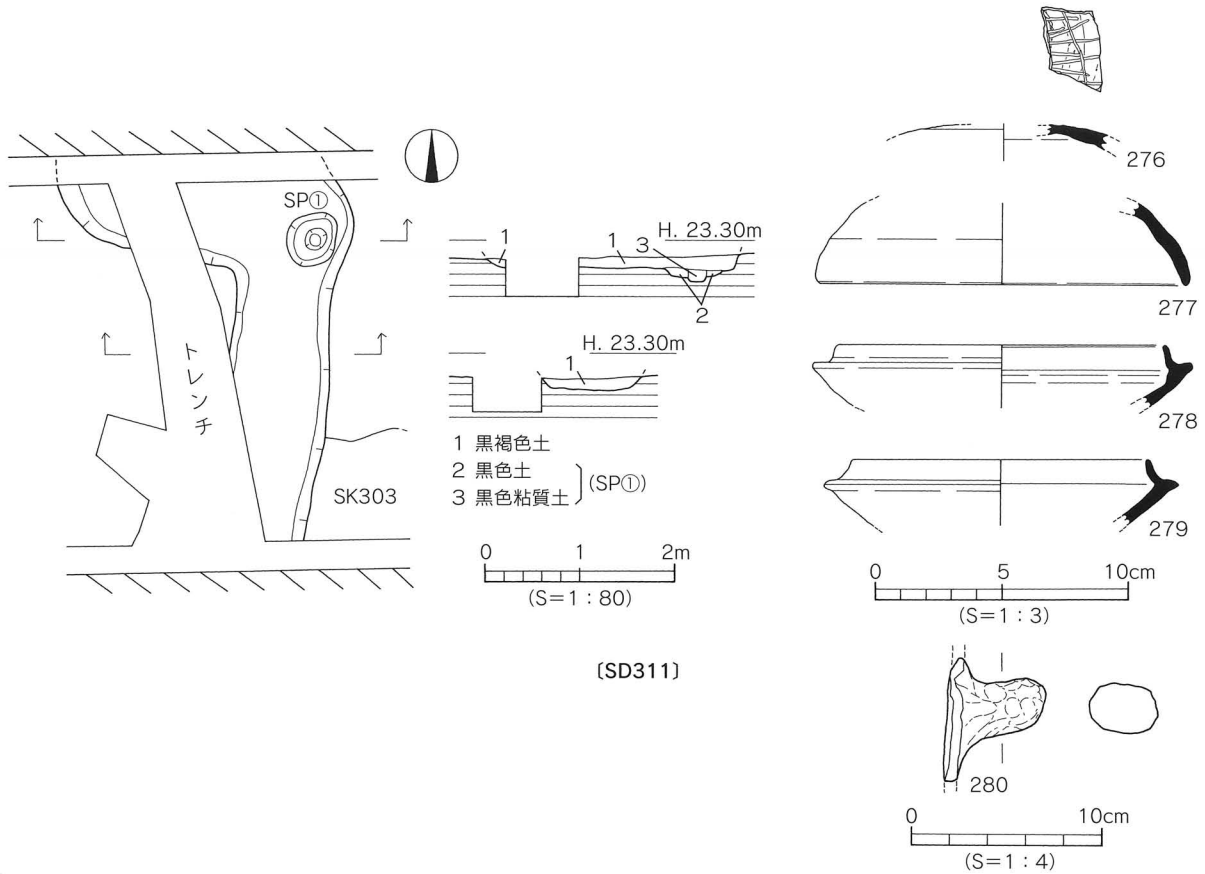
時期：出土遺物の特徴から、古墳時代末とする。



第45図 SD309測量図・出土遺物実測図

S K308 (第47図)

3 D区中央部西寄り、E 55区に位置する。掘立301、S K310、S P328、S P337に切られ、S X301を切る。土坑南側は調査区外へ続く。第Ⅲ②層上面での検出であり、第Ⅱ②層が覆う。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は、南北検出長1.95m、東西検出長1.75m、深さ10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色土に黄色土が混入する。遺物は埋土中から須恵器片が数点出土した。



第46図 SD311・304・305測量図・SD311出土遺物実測図

出土遺物（第47図）

285は須恵器坏、286は壺の底部である。285は口縁部がわずかに外反し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。

時期：出土遺物の特徴から、古墳時代末とする。

S K 305（第48図）

3 D区西側、D52区に位置し、西側はS D309に切られる。第IV層上面での検出である。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長0.80m、南北検出長0.50m、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土に黄色土が混入するものである。遺物は埋土中から須恵器片と弥生土器片が出土した。

出土遺物（第48図）

287は須恵器坏蓋、288・289は須恵器坏身、290は土師器坏である。288は、たちあがり短く内傾し、たちあがり端部は尖り気味に丸く仕上げる。291は弥生土器の鉢形土器である。

時期：出土遺物の特徴から、古墳時代末とする。

S K 304（第48図）

3 D区西側、D52区に位置し、S D309、S P336、S P345に切られる。第IV層上面での検出である。平面形態は長方形を呈し、規模は東西検出長1.80m、南北長0.80m、深さ13cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土に黄色土が混入するものである。土坑内からは埋土中より土師器片と、径20cm大の角石が1点出土した。

時期：埋土がS K305と酷似することから、古墳時代末とする。

S K 303（第48図）

3 D区東寄り、B・C60区に位置する。西側はS D311に切れ、南側は調査区外に続く。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.12m、南北検出長1.25m、深さ8cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土に黄色土が混入するものである。土坑底面にてピット2基（S P①・②）を検出した。ピット埋土は黒色土単層である。ピット内からの遺物の出土はない。土坑内からは土師器片、須恵器片が数点出土した。

時期：出土遺物の特徴と、埋土がS K305と酷似することから、概ね古墳時代末とする。

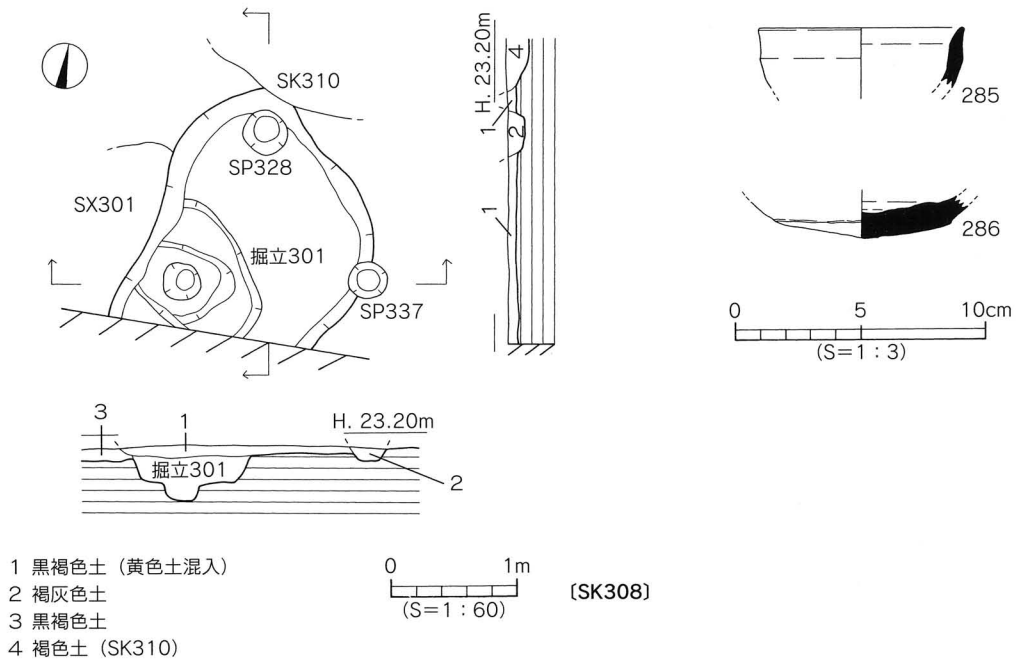
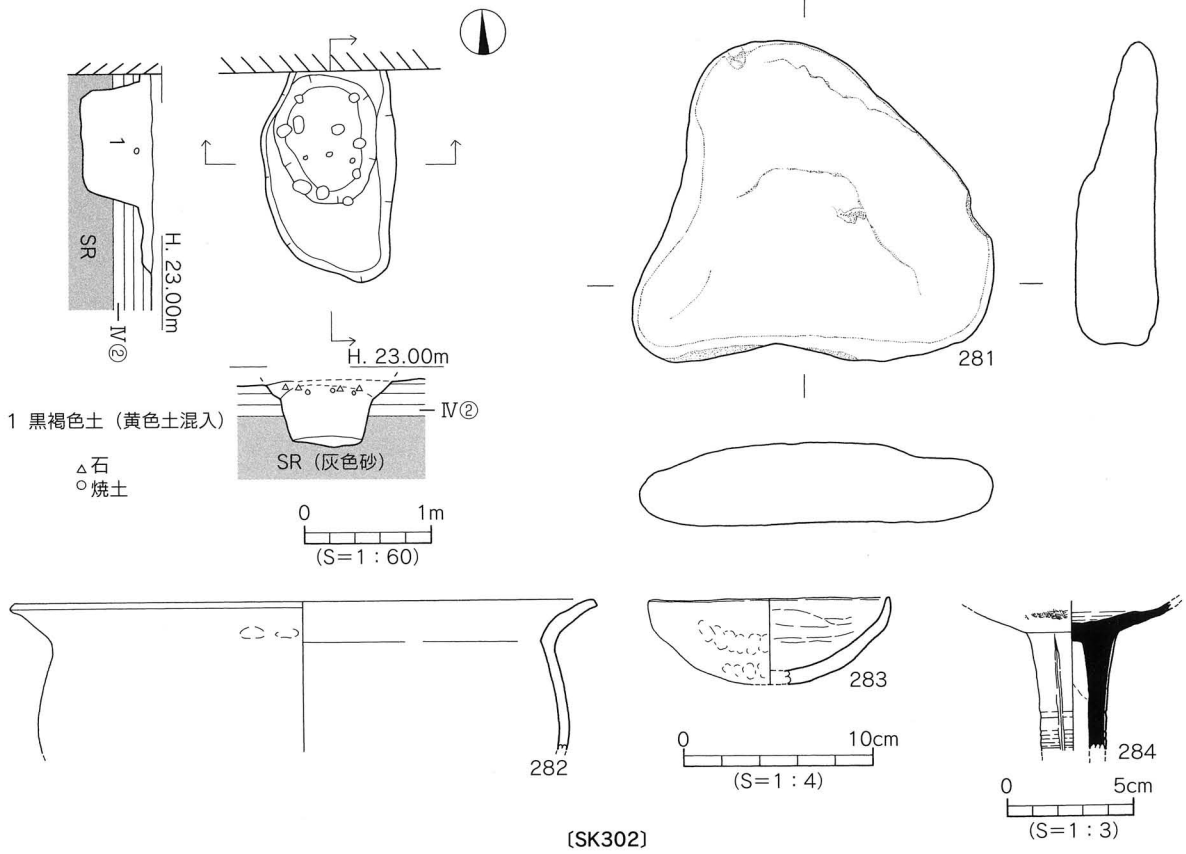
（4）性格不明遺構

S X 301（第49図）

3 D区中央部西寄り、E54・55区に位置する。掘立301、S K308に切れ、南側は調査区外に続く。第IV層上面での検出であるが、土層観察により第Ⅲ②層上面から掘り込まれた遺構である。平面形態は不整形を呈し、規模は長さ1.50m、幅1.35m、深さ15cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。床面上面より、炭化物と焼土を検出した。遺構内からは土師器片が少量出土した。

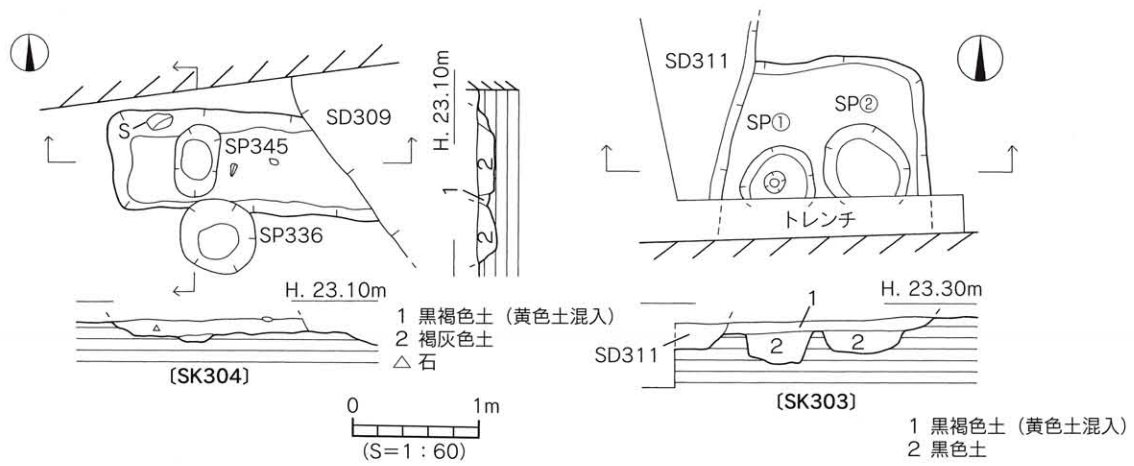
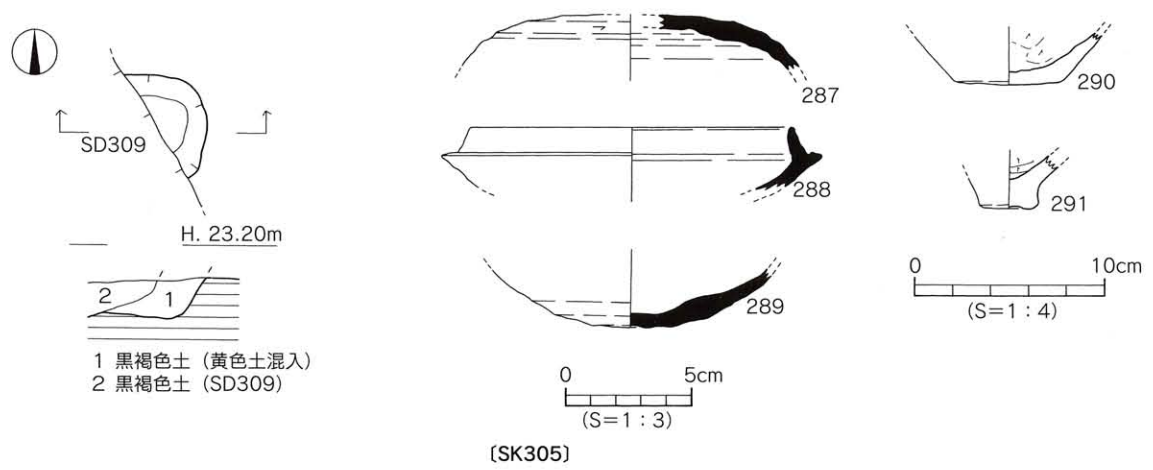
時期：遺物の特徴と、埋土がS K305などと酷似することから、概ね古墳時代末以前とする。

東石井遺跡

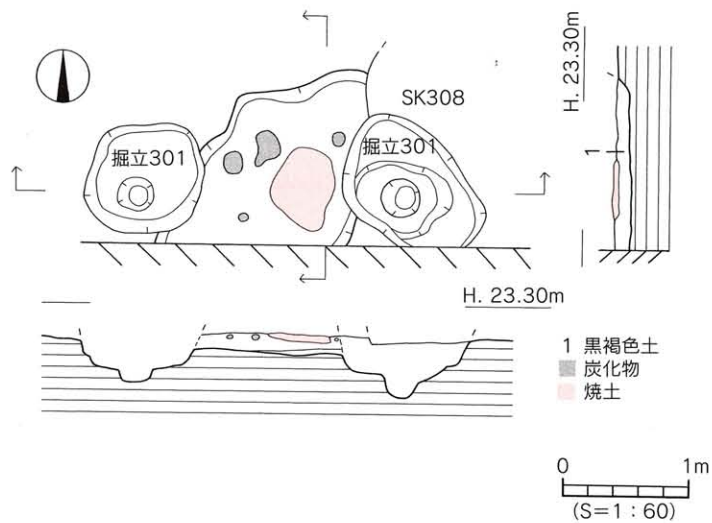


第47図 SK302・308測量図・出土遺物実測図

古墳時代の遺構と遺物



第48図 SK305・304・303測量図・SK305出土遺物実測図



第49図 SX301測量図

5. 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、溝10条、土坑1基である。

(1) 溝

S D101 (第50図)

1区東部、C9～D10区に位置する南北方向の溝である。第Ⅲ①層上面で検出し、第Ⅱ②層が覆う。溝北側はS D104を切り、両端は調査区外に続く。規模は検出長6.20m、幅2.12m、深さ16cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝基底面は北から南に向けて傾斜し(比高差11cm)、底面は2本の溝に分かれている。埋土は灰褐色土単層である。溝底面にて2基のピット(S P①・②)を検出した。規模は径40～80cm、深さ10cmを測る。S P②の埋土は溝埋土と同様である。ピット内からの遺物の出土はない。遺物は埋土中から須恵器片と石庖丁が出土した。

出土遺物 (第50図、図版13)

292～295は須恵器坏蓋。口縁部は下内方に屈曲し、口縁端部は丸く仕上げるもの(294)と、尖り気味なもの(292・293・295)とがある。296～300は須恵器坏。297～300は高台付きの坏で、高台は297～299が直立し、300は外方に開く。301は土師器坏蓋、302は坏である。301は口縁部が下方に屈曲し、口縁端部は尖る。303は緑色片岩製の石庖丁である。両側部に抉りをもつ。

時期：出土遺物の特徴から、8世紀前半とする。

S D202 (第44図)

2C区中央部、C28～D31区に位置する南北方向の溝である。第Ⅲ②層上面での検出であり、第Ⅱ②層が覆う。溝両端は調査区外に続く。規模は検出長5.60m、幅4.00m、深さ24cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝底面は北から南に向けて緩傾斜する(比高差2cm)。埋土は灰褐色土単層である。遺物は土師器、須恵器、瓦片のほか土錘が出土した。

出土遺物 (第51図、図版13)

304～307は土師器。304は甕の口縁部片で、口縁端部は内傾する面をもつ。305～307は坏で、305・306の底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。308～310は須恵器。308は高台付きの坏で、高台は低く外方に開く。309は壺の胴部片、310は甕の肩部片である。310の外面には回転カキメ調整を施す。311・312は丸瓦で、凹面には布目痕が残る。313は土錘である。

時期：出土遺物の特徴から、10世紀代とする。

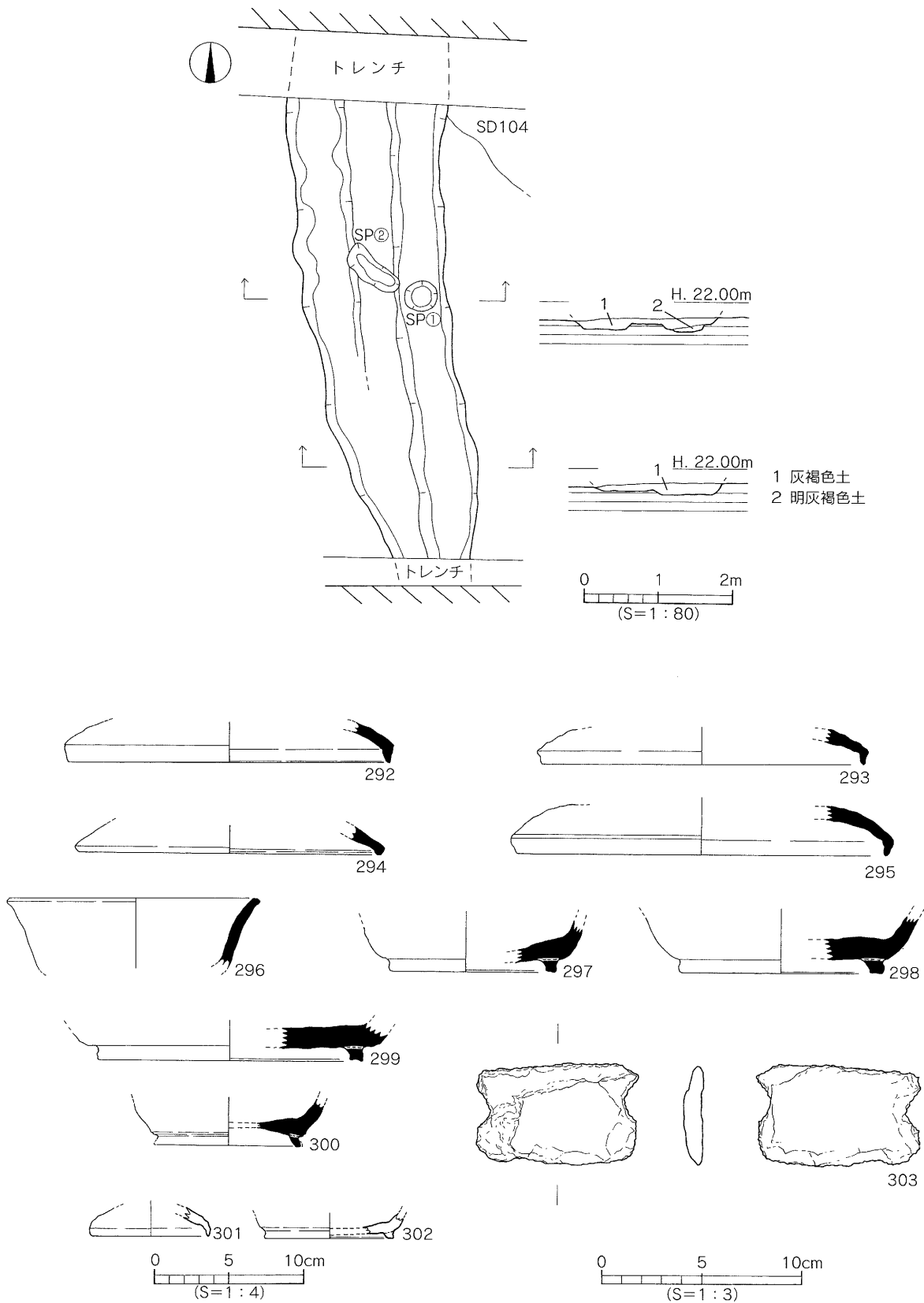
S D301 (第52図)

3A区中央部、B47区に位置する南北方向の溝である。第Ⅲ②層上面での検出であり、第Ⅱ②層が覆う。溝の南側はS K301を切り、両端は調査区外に続く。規模は検出長1.64m、幅1.00m、深さ24cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色土単層である。遺物は埋土中から須恵器片、土師器片が少量出土した。

出土遺物 (第52図)

314・315は土師器坏。底部は突出し、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。

時期：出土遺物の特徴から、10世紀代とする。



第50図 SD101測量図・出土遺物実測図

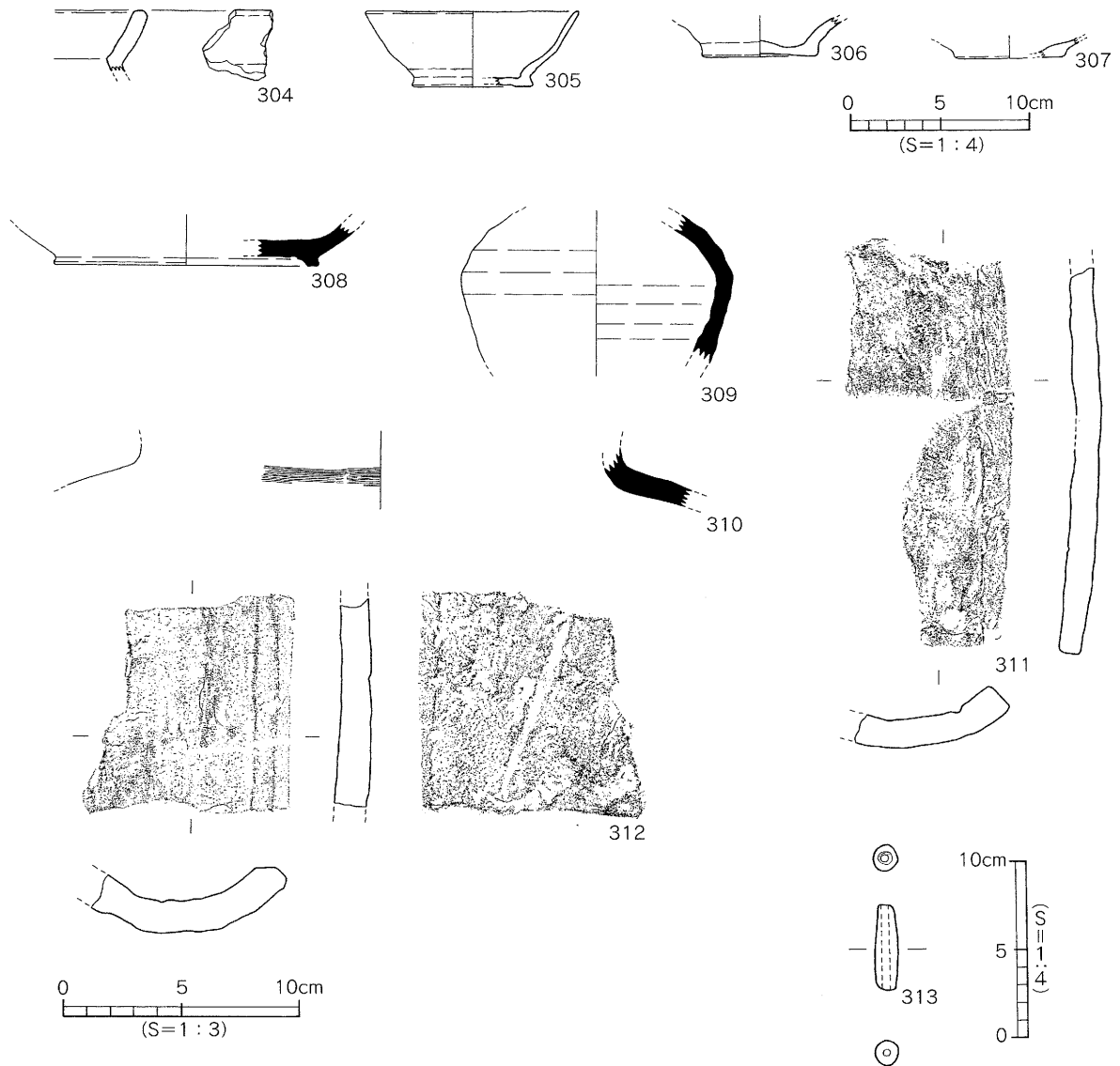
S D302 (第52図)

3 B区東側、D51区に位置する南北方向の溝である。溝S D304上面で検出した。第Ⅱ②層が覆う。溝両端は調査区外に続く。規模は検出長1.24m、幅0.68m、深さ26cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝底面は北から南に向けて緩傾斜する（比高差4 cm）。埋土は褐色土単層である。遺物は埋土中から須恵器片と土師器片が少量出土した。

出土遺物 (第52図)

316は土師器甕の口縁部片で、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。317は須恵器坏身の底部で、平底風となる。

時期：出土遺物の特徴から、7世紀代とする。



第51図 SD202出土遺物実測図

S D308 (第52図)

3 C区中央部、E49・50区に位置する南北方向の溝である。第Ⅲ②層上面で検出した。溝両端は調査区外に続く。規模は検出長0.80m、幅1.04m、深さ4cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は褐灰色土単層である。溝底面は平坦である。溝内から須恵器片が少量出土した。

出土遺物 (第52図)

318は須恵器坏蓋、319は須恵器甕である。318は口縁部が下方に屈曲し、口縁端部は尖る。

時期：出土遺物の特徴から、8世紀代とする。

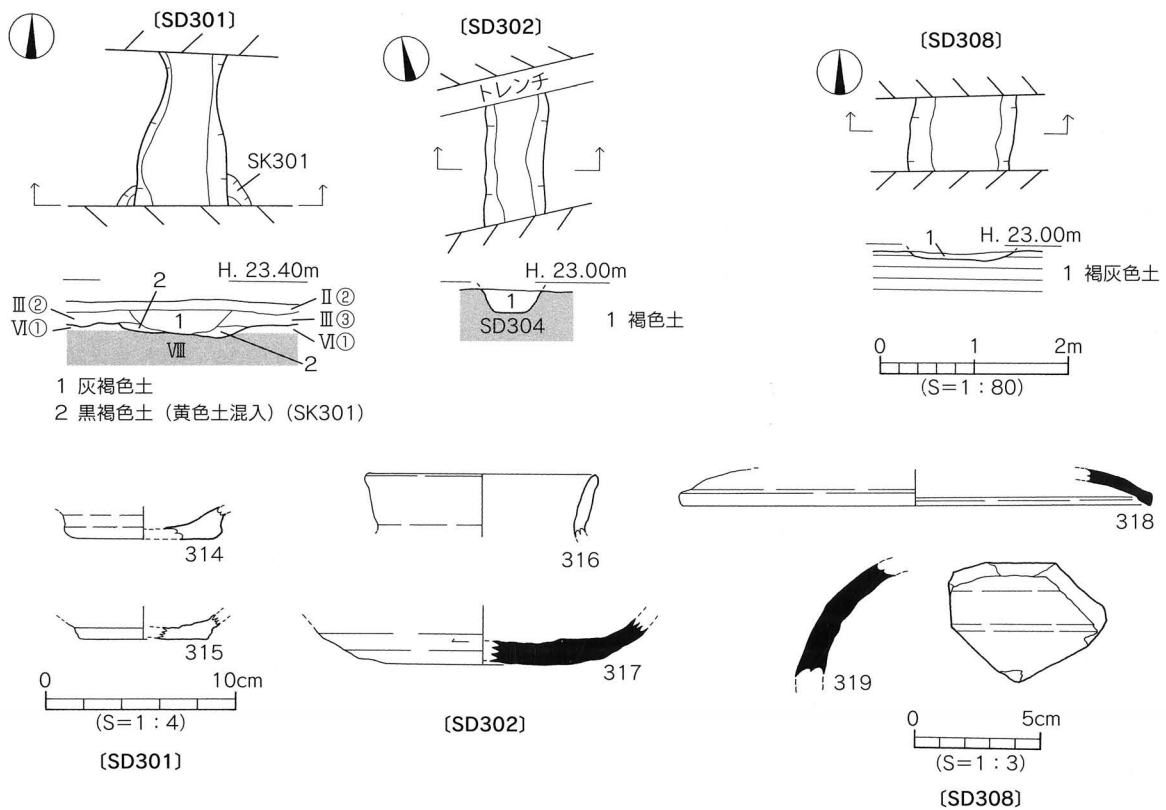
S D201 (第53図)

2 C区中央部南寄り、C・D30区に位置する南北方向の溝である。第Ⅱ②層上面で検出した。溝の北端は途中消滅し南端は調査区外に続く。規模は検出長0.70m、幅8.40m、深さ6cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土単層である。溝底面は平坦である。溝内から遺物の出土はない。

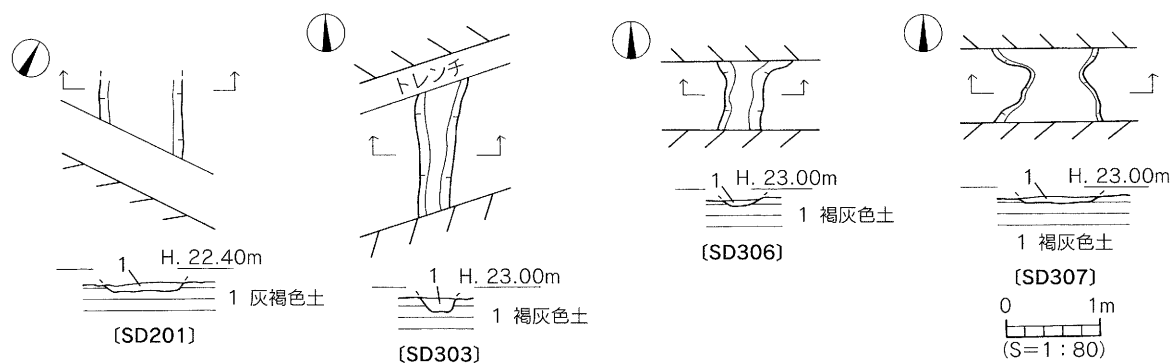
時期：検出状況と埋土がS D301と酷似することから、概ね10世紀以降とする。

S D303 (第53図)

3 B区中央部、B51区に位置する南北方向の溝である。第Ⅲ②層上面での検出であり、第Ⅱ②層が覆う。溝両端は調査区外に続く。規模は検出長1.40m、幅0.60m、深さ19cmを測る。断面形態は皿状



第52図 SD301・302・308測量図・出土遺物実測図



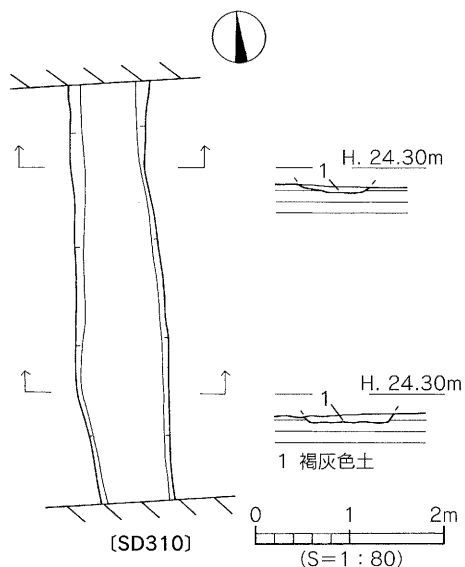
を呈する。溝基底面は北から南に向けて傾斜する（比高差6cm）。埋土は褐灰色土単層である。溝内から遺物の出土はない。

時期：埋土がSD308と酷似することから、概ね8世紀代とする。

SD306（第53図）

3C区西側、E49区に位置する南北方向の溝である。第Ⅲ②層上面で検出した。溝両端は調査区外に続く。規模は検出長0.80m、幅0.30m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝基底面は平坦である。埋土は褐灰色土単層である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がSD308と酷似することから、概ね8世紀代とする。



第53図 SD201・303・306・307・310測量図

SD307（第53図）

3C区西側、E49区に位置する南北方向の溝である。第Ⅲ②層上面で検出した。溝両端は調査区外に続く。規模は検出長0.76m、幅1.16m、深さ6cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝基底面は平坦である。埋土は褐灰色土単層である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がSD308と酷似することから、概ね8世紀代とする。

SD310（第53図）

3D区中央部、D・E58区に位置する南北方向の溝である。第Ⅵ①層上面での検出であるが、土層観察により第Ⅲ②層上面から掘り込まれた遺構である。溝両端は調査区外に続く。規模は検出長4.44

m、幅0.92m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は褐灰色土単層である。溝底面は平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS D308と酷似することから、概ね8世紀代とする。

(2) 土坑

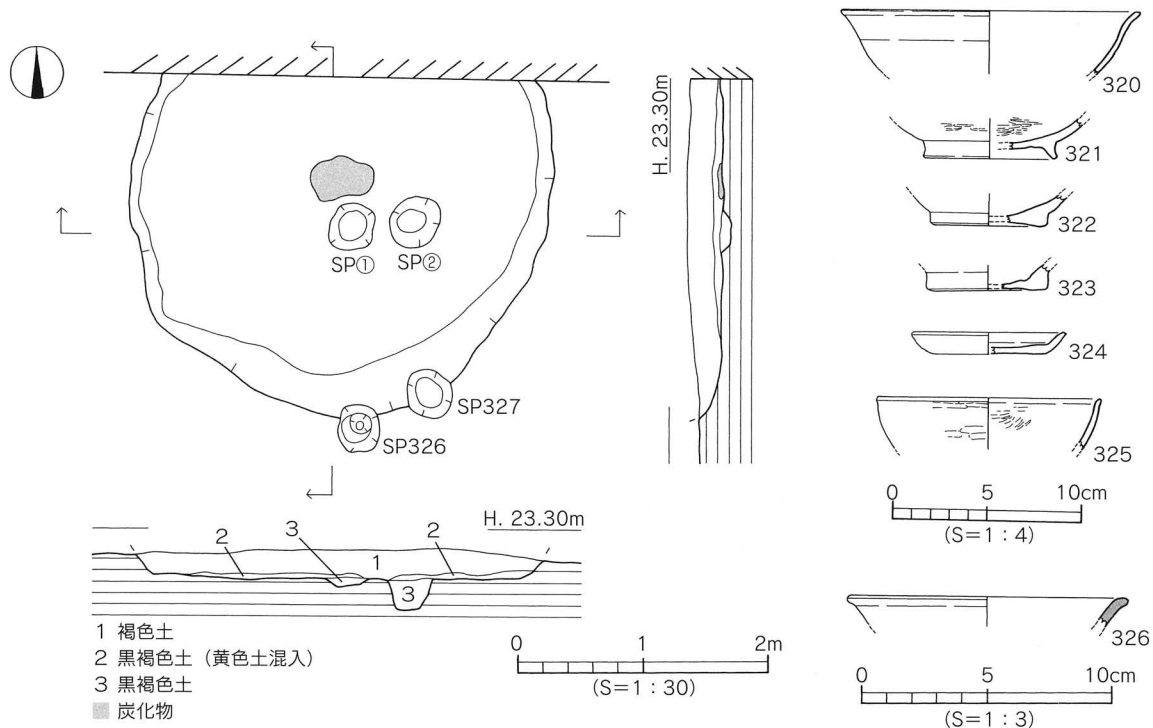
S K310 (第54図)

3 D区中央部西寄り、D・E55区に位置する。第Ⅲ②層上面での検出であり、第Ⅱ②層が覆う。南側は掘立301、S K308を切り、S P326、S P327に切られ、北側S K309を切り、調査区外に続く。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西長1.62m、南北検出長1.37m、深さ12cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、1層褐色土、2層黒褐色土に黄色土が混入するものである。土坑底面中央部からピット2基(S P①、②)を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径18~20cm、深さ3~10cmを測る。ピット埋土は黒褐色土である。また土坑底面中央部から炭化物を検出した。遺物は埋土中から土師器片と緑釉陶器片が出土した。

出土遺物 (第54図)

320・321は土師器椀。口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味となる。322・323は土師器坏。突出する底部で、底部の切り離しは回転糸切り技法による。325は黒色土器の椀、326は緑釉陶器の皿である。

時期：出土遺物の特徴から、10世紀代とする。



第54図 SK310測量図・出土遺物実測図

6. その他の遺構と遺物

(1) ピット

本調査で確認されたピットは115基である。内訳は1区：30基、2区：16基、3区：69基ある。ピット埋土は灰褐色土、黒緑色土、黒褐色土の3グループに分けられ、出土遺物から灰褐色土は古代、黒緑色土は古墳時代、黒褐色土は弥生時代に時期比定される。柱穴内から出土した遺物は大半が小片であるが、実測可能な遺物を掲載した。

出土遺物（第55図、図版14）

327は甕形土器で、口縁端部はわずかに上方に拡張する。328・329は複合口縁壺の口縁部、330は底部である。弥生後期。331は土師器坏で、底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。10世紀。332は土師器甕で器壁は厚い。8世紀。333は土師器土鍋または土釜の脚部片である。15世紀。334・335は須恵器坏蓋。334は口縁部を尖り気味に仕上げる。7世紀前半。335は口縁部が下方に屈曲する。8世紀前半。336は須恵器坏で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。10世紀。337・338は砂岩製の砥石で、3面に使用痕を残す。

(2) 包含層

本調査では第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層の遺物包含層を確認した。各調査区で出土した遺物の実測図を掲載する。

第Ⅱ層出土遺物（第56図、図版14）

339～342は須恵器坏。339・340は円盤高台状の底部で、底部切り離しは、すべて回転ヘラ切り技法による。343は灰釉陶器の坏、344・345は中国産の白磁碗である。346～350は土師器坏、351～355は土師器椀、356・357は内黒椀である。354の底部外面には「×」印の線刻を施す。358・359は平瓦である。凹面に布目痕を残す。

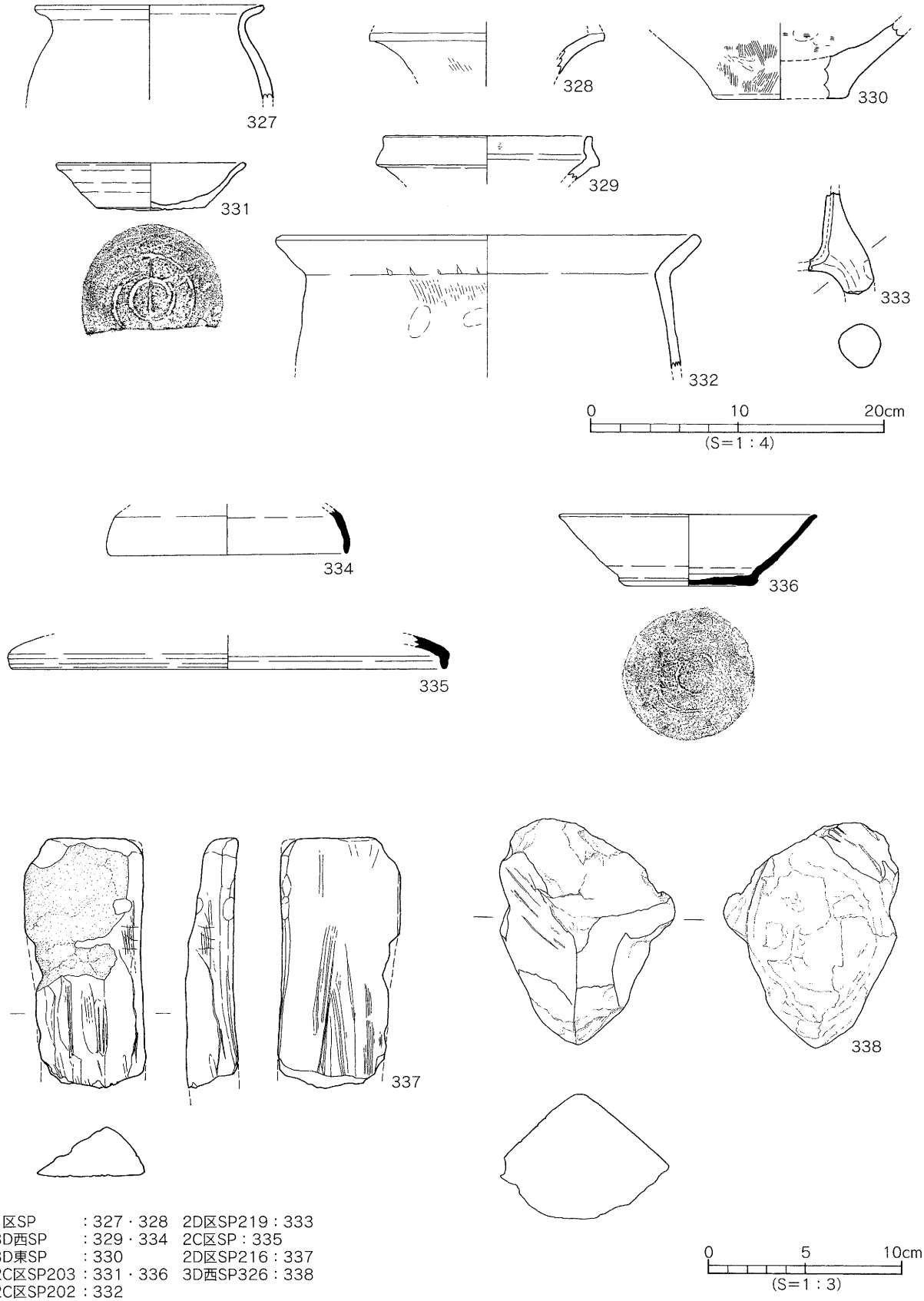
第Ⅲ層出土遺物（第57～59図、図版14）

360～362は須恵器坏蓋、363～367は須恵器坏である。368は灰釉陶器である。369は壺の肩部片、370は甕の口縁部片である。371・372は須恵器高坏。373・374は土師器甕の口縁部片である。373の外面には粗いハケメ調整を施す。375は土師器高坏、376は甌である。376は断面長方形の把手が付く。377・378は平瓦で、凹面に布目痕を残す。379は鉄鏃、380～426は弥生土器である。380～390は甕形土器で、390の外面にはタタキ調整を施す。391～406は壺形土器。391～394は広口壺、395～398は複合口縁壺である。401・402は長頸壺の頸部で、細沈線文を施す。405は底部で、外面に「×」印の線刻を施す。407～411は鉢形土器、412・413は高坏形土器である。414～416は器台形土器で、414の口縁部には半截竹管文、415には棒状浮文を施す。417～425は支脚形土器、426はミニチュア品である。427～429は石庖丁で、427は成品、428は未成品である。

第Ⅳ層出土遺物（第60図、図版14）

430～436は弥生土器。430は甕形土器、431～433は壺形土器である。431は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文2条を施す。435・436は甕形土器の底部片で、上げ底となる。437は緑色片岩製の石庖丁である。

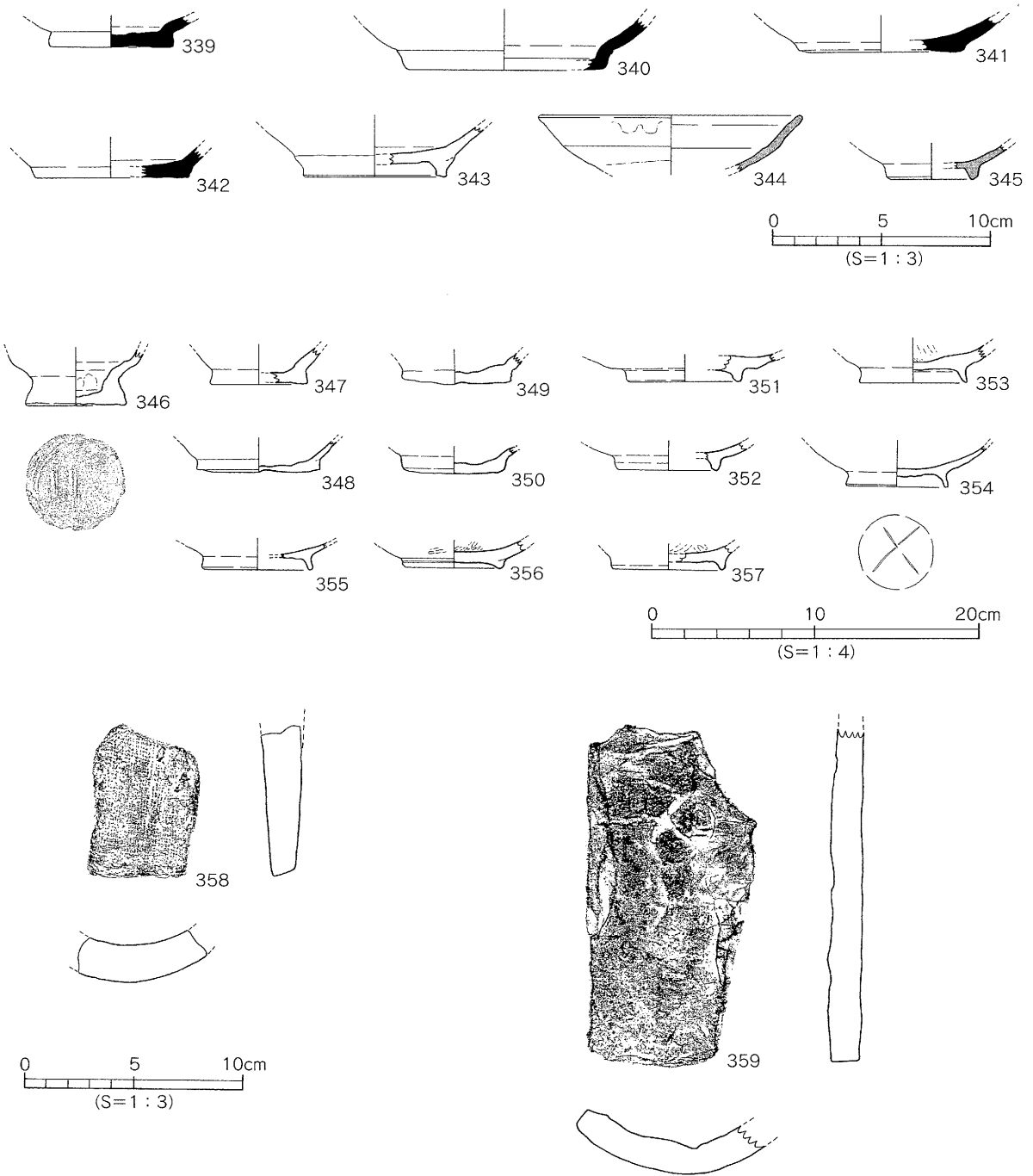
その他の遺構と遺物



- | | | | |
|----------|-------------|----------|-------|
| 1区SP | : 327 · 328 | 2D区SP219 | : 333 |
| 3D西SP | : 329 · 334 | 2C区SP | : 335 |
| 3D東SP | : 330 | 2D区SP216 | : 337 |
| 2C区SP203 | : 331 · 336 | 3D西SP326 | : 338 |
| 2C区SP202 | : 332 | | |

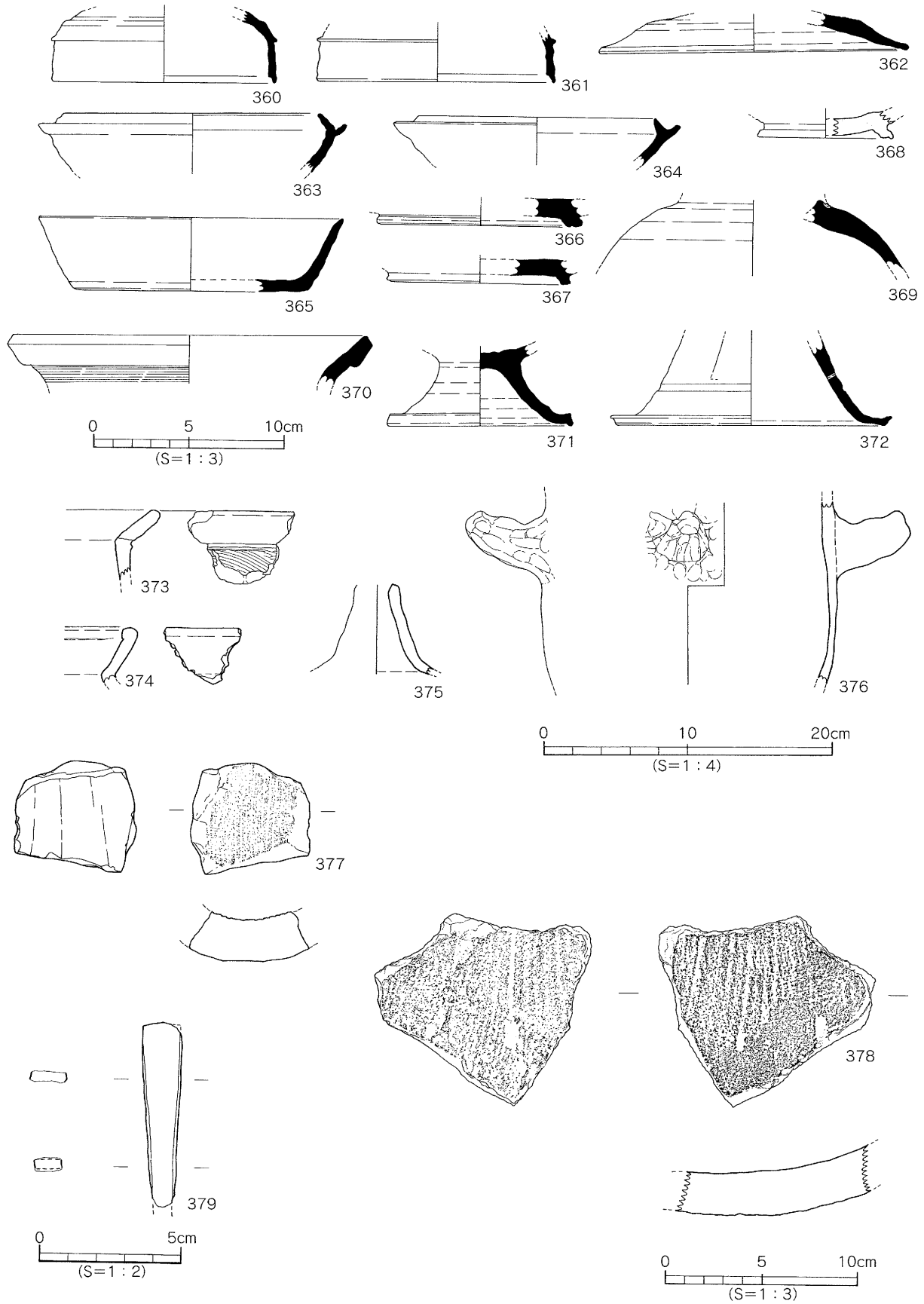
第55図 SP出土遺物実測図

東石井遺跡



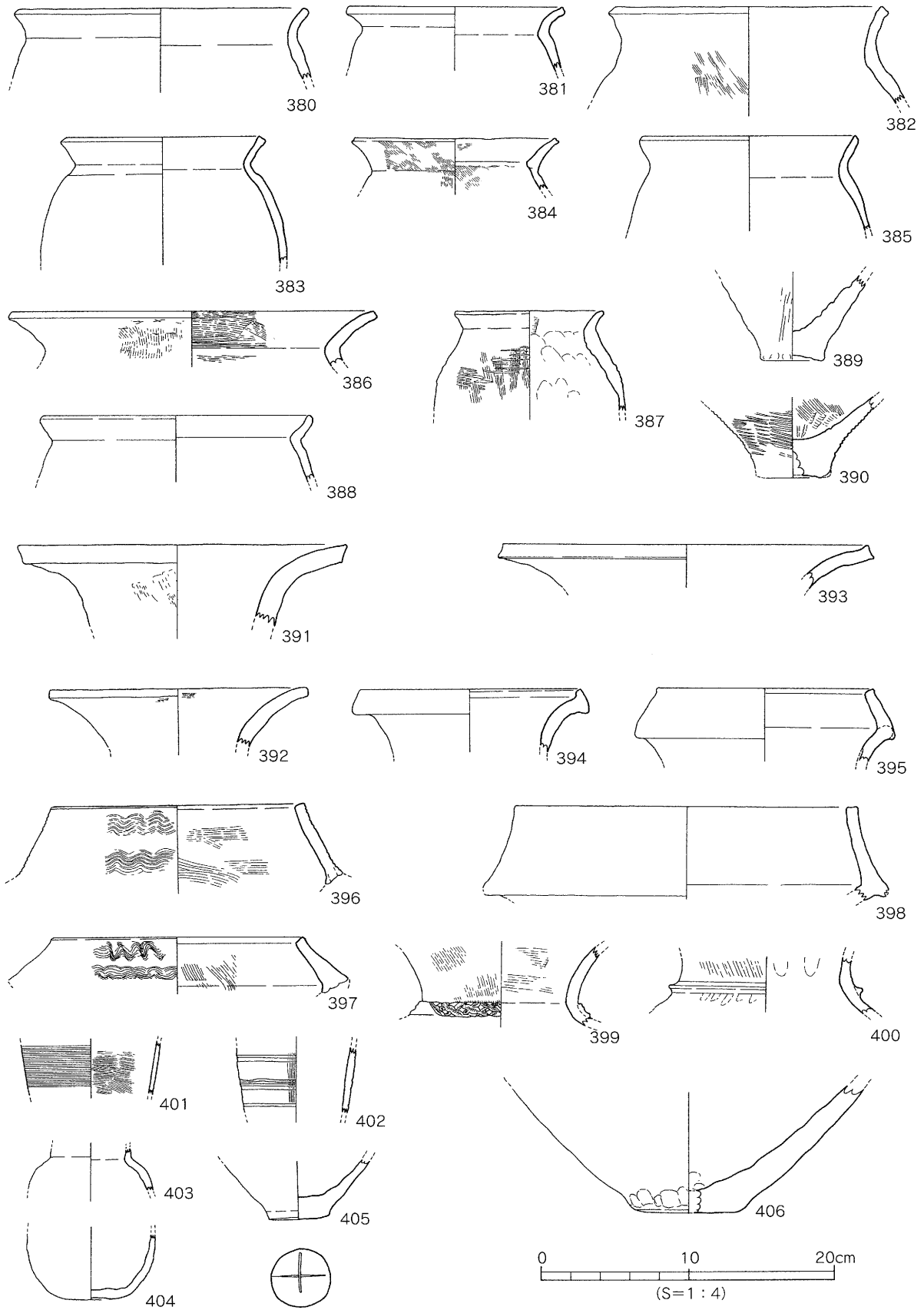
第56図 第Ⅱ層出土遺物実測図

その他の遺構と遺物



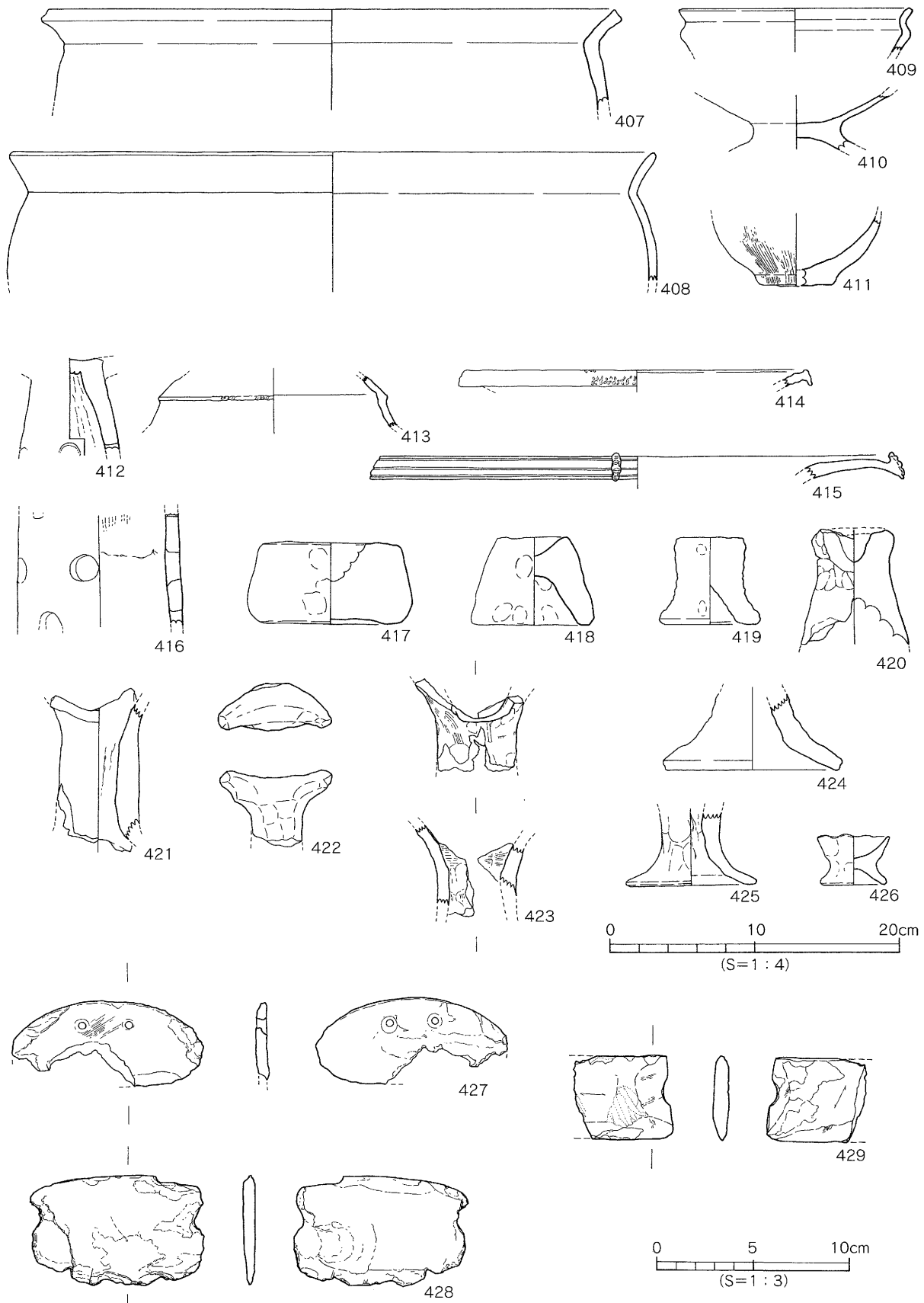
第57図 第Ⅲ①層出土遺物実測図

東石井遺跡

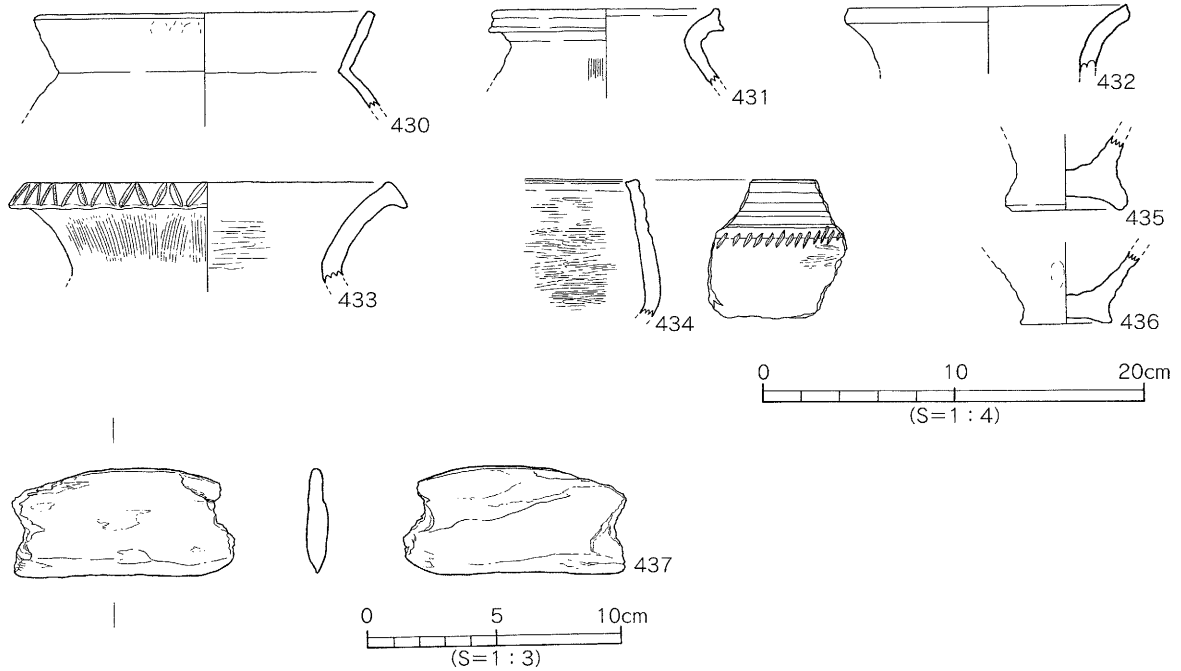


第58図 第Ⅲ②層出土遺物実測図(1)

その他の遺構と遺物



第59図 第Ⅲ②層出土遺物実測図(2)



第60図 第IV層出土遺物実測図

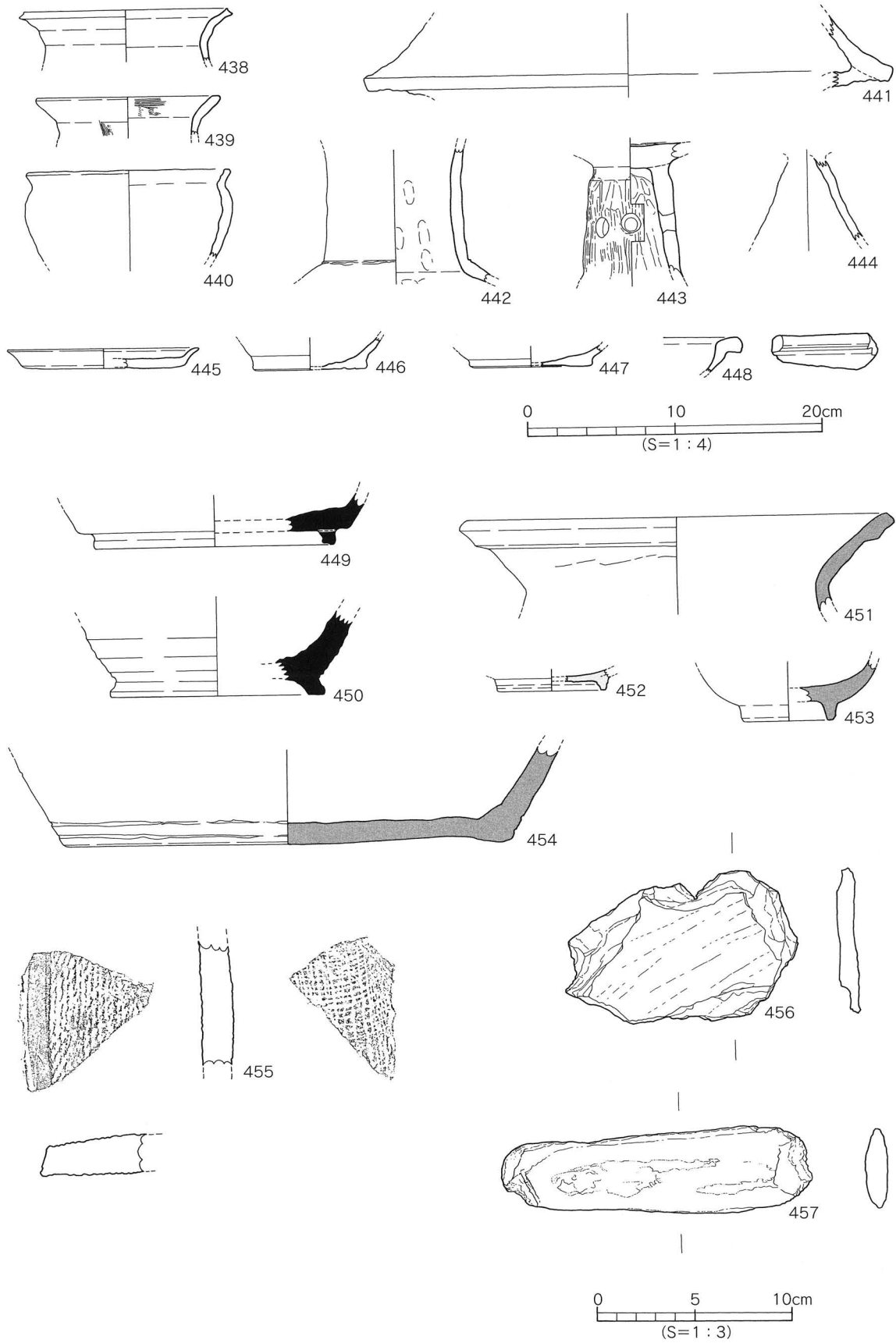
(3) 出土地点不明遺物

本調査では重機で掘削中や廃土中から出土した遺物がある。出土層位や地点が不明なため、出土地点不明遺物として報告する。

出土遺物 (第61図)

438～444は弥生土器。438・439は甕形土器、440は鉢形土器、441・442は壺形土器、443・444は高坏形土器である。445～448は土師器。445は皿、446・447は坏、448は土釜の口縁部である。449・450は須恵器。449は坏、450は壺の底部である。451・453は国産陶器、452は灰釉陶器である。455は瓦片で凹面に格子叩き、凸面に細縄叩きが残る。456・457は石器素材である。

その他の遺構と遺物



第61図 出土地点不明遺物実測図

7. 小 結

本調査では、弥生時代から中世までの遺構と遺物を確認した。層位は第Ⅴ層が未検出であるが、それ以外の土層を検出した。

(1) 層 位

調査地の全域で第Ⅷ層を検出した。調査地北側には石手川の支流である小野川、南側には重信川の支流である内川が流れており、第Ⅷ層はこの二つの河川の氾濫によって堆積した砂礫層と考えられる。第Ⅷ層上面を測量すると、調査地西半部1区から2A区までは標高21.20mとなり、ほぼ水平に堆積するが、調査地中央部2E区では標高22.80mとなり最も高くなる。そして、調査地東半部3A区から3C区では標高22.30m～22.40mとやや低くなり、3D区で22.70mと高くなる。さらに第Ⅷ層上面は起伏に富んでおり、2B区から2C区、及び3B区から3C区の間はやや凹んでいる。この箇所には第Ⅵ層が安定して堆積している。

第Ⅷ層は調査地西半部、1区から2C区で検出した黒色粘質土で無遺物層である。本層は石井幼稚園遺跡1・2次調査地でも確認されている。第Ⅵ層は調査地ほぼ全域で検出した。第Ⅵ②層黄色土は河川の氾濫に伴うものと考えられ、その上面に第Ⅵ①層黄褐色土が堆積している。検出した遺構から、第Ⅵ層堆積時に安定した地面を形成したと考えられる。

以上のことから、第Ⅰ層から第Ⅷ層までの堆積状況を見ると、第Ⅷ層上面の状況に応じて、第Ⅷ層から第Ⅵ層までが堆積して、地面を形成したと考えられる。さらに、第Ⅵ層堆積以降、人々が調査地及び周辺地域に集落を営むようになったものと推測される。

(2) 遺構と遺物

本調査では、弥生時代後期から中世までの遺構と遺物を検出した。

1) 弥生時代

① 竪穴式住居址

竪穴式住居址は2棟を検出した。このうち3D区検出のSB304は、径7mを測る円形住居址である。内部施設は貼床と主柱穴を検出した。床面及び埋土中より炭化物や焼土を多数検出したため、焼失家屋の可能性がある。住居址の廃棄、埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。

② 溝

溝は6条を検出した。1区検出のSD104は、幅1.8m、深さ14cmを測る溝で、溝内から多量の弥生土器の破片が出土したことから、土器を廃棄した可能性がある。また、SD104は、井戸SE101及びSE103と切り合い関係にあるが、出土した弥生土器に時期差があまり認められないことから同時期に併存した可能性もある。

③ 井戸

井戸は4基を検出した。出土遺物から、1区検出の3基(SE101～103)は弥生時代後期中葉、3区検出のSE301は弥生時代末に時期比定される。4基共に、地面に穴を掘っただけの素掘り井戸で、平面形態は円形もしくは楕円形を呈し、深さは検出面下90～120cmを測る。規模を見ると、径2.0m前後の井戸(SE102・103)と、径2.6m以上の井戸(SE101・301)の2種類がある。断面形態は逆台形状を呈するが、井戸中位付近で2段掘り構造となる。いずれの井戸も基底面は第Ⅷ層灰色砂礫層

に達しており、調査中も湧水が確認された。埋土の堆積状況は、ほぼ水平堆積をなすが、S E 101～S E 103の3基は中位付近で再掘削された状況を確認した。遺物は完形品を含む土器片と、径10～30cm大の河原石が30点余り出土しており、井戸の廃棄に伴い土器捨て場として使用された可能性が考えられる。なお、S E 103からは匙形土製品が1点出土している。

2) 古墳時代～古代

古墳時代の遺構は掘立柱建物址3棟、溝6条、土坑6基、古代では溝10条と土坑1基を検出した。古墳時代では、1区検出の溝S D 106が目される。規模は、幅1.0m、深さ15cm、断面形態が皿状を呈する南北方向の溝で、溝内からは6世紀後半に時期比定される完形の須恵器坏蓋と坏身が重なって出土した。坏身の中からは、厚さ2～3cm、長さ3～5cmの河原石が数点出土しており、祭祀行為に伴う遺物と考えられる。

古代では、1区検出の溝S D 101があげられる。規模は幅2m、深さ6cm、断面形態が皿状を呈する南北方向の溝で、溝内からは奈良時代に時期比定される須恵器や土師器が出土した。そのほか、3区では同時期の溝が6条検出されているが、いずれも南北方向を指向する。

また、平安時代では3区検出の土坑S K 310と溝があげられる。S K 310は径1.6mを測る円形土坑で、土坑内からは多数の土師器片と緑釉陶器片が出土している。このほか、2区では溝S D 202が同時期の遺構である。

(3) まとめ

本調査では、弥生時代後期から古代にかけての集落関連遺構を検出した。弥生時代では、竪穴式住居址が2区と3区とで検出され、井戸や溝、土坑などの生活関連遺構も点在して検出された。このことから、弥生時代後期においては調査地が集落の中心ではなく、調査地東方または西方に中心があるものと推測される。古墳時代では竪穴式住居址は未検出であるが、掘立柱建物址や溝、土坑などが検出された。とりわけ、3区に遺構が集中していることから、調査地東方に古墳時代集落が展開している可能性が高い。古代では、奈良時代に時期比定される2条の溝S D 101とS D 301が方位を真北方向にとることから、条里に伴う区画溝の可能性が考えられる。また、平安時代においては土坑や溝が検出されており、奈良時代から平安時代を通じて、調査地周辺に古代集落が営まれていたことが明らかになった。

これまで、調査地が所在する石井地区では発掘調査事例が少なく、集落様相の不明な点が多い地域であった。今回の調査により弥生時代集落の存在が確定となり、さらには古墳時代から古代にかけての集落が存在する可能性が高いものとなった。なお、今後の周辺調査結果を待ち、石井地区における集落経営や動態を検討していかねばならないであろう。末尾に、調査にあたり松山市都市整備部道路建設課の職員の方々には多大の協力を得た。記して感謝申し上げます。

第4章 西石井遺跡1次調査地

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

2000（平成12）年11月28日、松山市都市整備部道路建設課より、松山市道「北久米・和泉線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は松山市古川北2丁目292番地外で、道路幅16m、全長280m、面積4480m²である。

財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、申請地内における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、2001（平成13）年3月13日～3月14日の間に試掘調査を実施することとなった。その結果、弥生時代から古代までの遺物包含層を検出し、弥生土器と土師器とが出土した。

試掘調査の結果を受け、文化財課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについて協議を重ね、道路工事によって消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。なお、試掘調査の結果、申請地西側は近現代の攪乱により遺跡の存在が確認されなかったため、発掘調査はその地域を除く地域を対象とした。発掘調査は、文化財課と申請者の協力のもと、埋文センターが主体となり、2001（平成13）年10月15日より本格調査を開始した。

(2) 調査の経緯（第3・5図）

発掘調査は、調査地内に生活道路がある関係上、5つの区に分けて実施した。調査区は西側から1・2・3・・・5区とした。また、調査地内を5m四方のグリットに分け、グリットは北から南へ1・2・3、西から東へA・B・C・・・Zとした。調査は1区から順に東側へ向けて進めた。まず、重機により表土層を除去し、その後、人力により包含層を掘り下げながら遺構、遺物を検出し、測量及び写真撮影等の記録作業をおこなった。測量作業では、主な遺構に対して測量図（縮尺1/20）を作成し、このほか分析用の土壌サンプル採取などもおこなった。なお、各調査区の調査期間や面積は表3のとおりである。

また、発掘調査中には、2002（平成14）年1月19日に一般市民対象の現地説明会を開催した。説明会は1～3区を対象とし、検出遺構や出土品の説明をおこない、総勢500名に及ぶ参加者を得た。

表3 調査区一覧

調査区	面積(m ²)	調査期間	所在地
1区	432	平成13年10月15日～平成14年3月29日	松山市西石井町504-1
2区	752	平成13年10月15日～平成14年3月29日	松山市西石井町505-1
3区	416	平成13年11月1日～平成14年3月29日	松山市西石井町506-1
4区	704	平成13年11月1日～平成14年5月31日	松山市西石井町356-1外
5区	648	平成13年11月1日～平成14年6月28日	松山市西石井町355-1外
6区	168	平成13年6月3日～平成14年6月28日	松山市西石井町356-8外

2. 層位 (第62～66図)

調査地は、松山平野の南部に立地する。調査以前は水田と既存宅地であった。現況では、調査地西側 1 区が標高18.5m、東側 5 区は19.9m前後となる。全体の基本層位の中では、本調査地は第Ⅱ層、第Ⅲ③層、第Ⅳ層、第Ⅴ層及び第Ⅶ層が未検出である。

第Ⅰ層－近現代の造成土や、農耕にかかわる耕作土である。

第Ⅰ①層：造成土で、厚さ18～106cmを測る。調査区 1 区～ 5 区の全域で検出した。

第Ⅰ②層：耕作土で、厚さ 2～63cmを測る。調査区 1 区～ 5 区の全域で検出した。

第Ⅰ③層：旧耕作土。

第Ⅰ④層：水田床土。

第Ⅱ層－本調査地では未検出である。

第Ⅲ層－弥生時代から古代までの遺物を含む包含層である。色調、土質の違いにより 2 層に分層される。

第Ⅲ①層：オリーブ黒色土で、調査地全域で検出した。厚さ 4～40cmを測る。本層中からは、主に古墳時代から古代までの遺物が出土した。なお、4・5区では本層上面にて遺構を検出した。

第Ⅲ②層：黒褐色土で 1 区と 5 区で検出した。層厚10～35cmを測る。本層中からは、弥生時代後期から古墳時代までの遺物が出土した。

第Ⅲ③層：本調査地では未検出である。

第Ⅳ層－本調査地では未検出である。

第Ⅴ層－本調査地では未検出である。

第Ⅵ層－色調、土質の違いで 2 層に分層される。

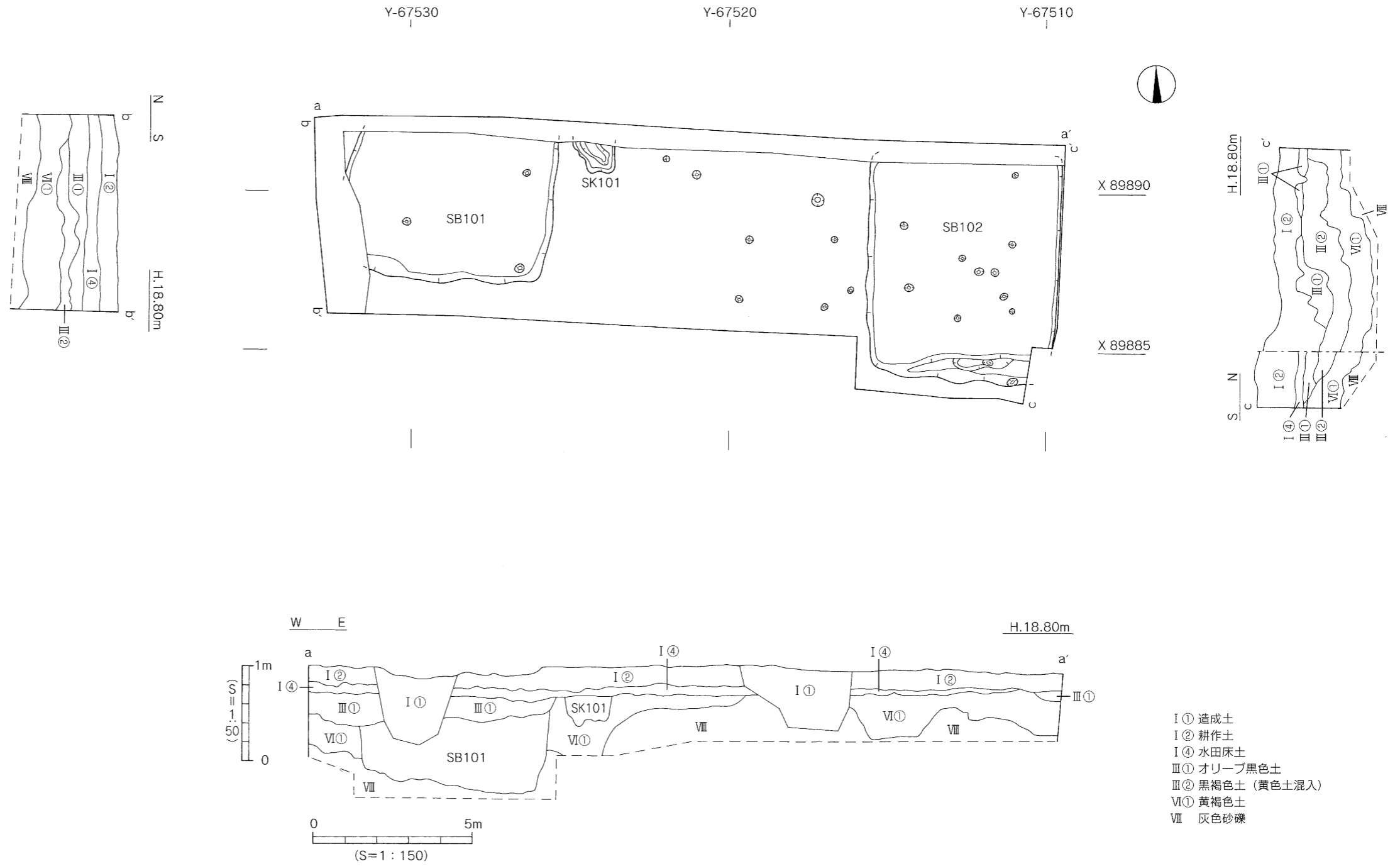
第Ⅵ①層：黄褐色土で、調査地全域で検出した。層厚10～85cmを測り、5区が最も厚い堆積をなす。なお、本層上面は調査における最終遺構検出面である。

第Ⅵ②層：粘性の強い黄色土で、2・3区で検出した。層厚10～30cmを測る。

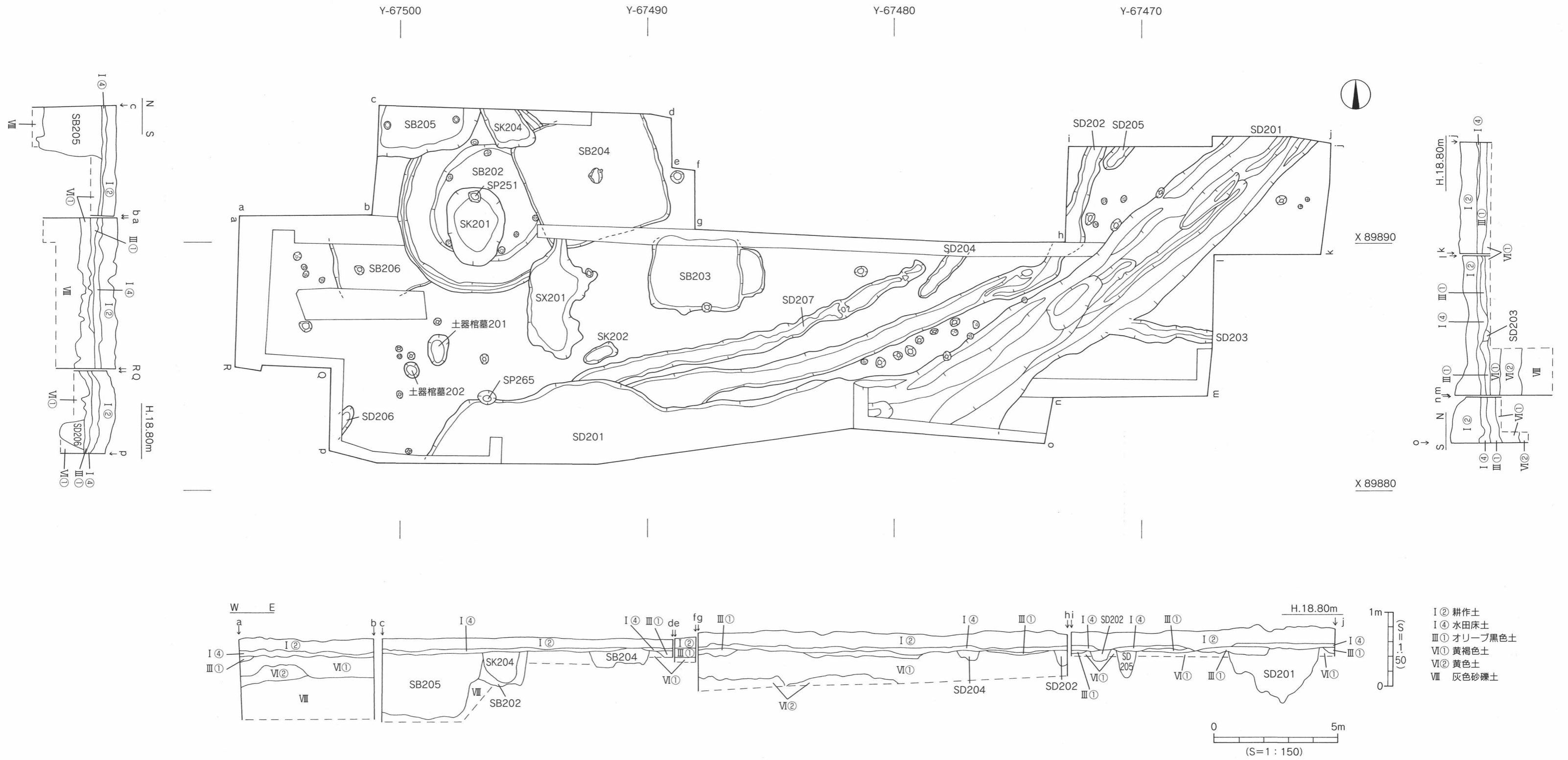
第Ⅶ層－本調査地では未検出である。

第Ⅷ層－小野川、内川の氾濫に起因する砂礫層である。1・2・5区の深掘トレンチにより検出した。本層上面では、1区が最も低く標高17.5m、5区が最も高く標高18.6mを測る。

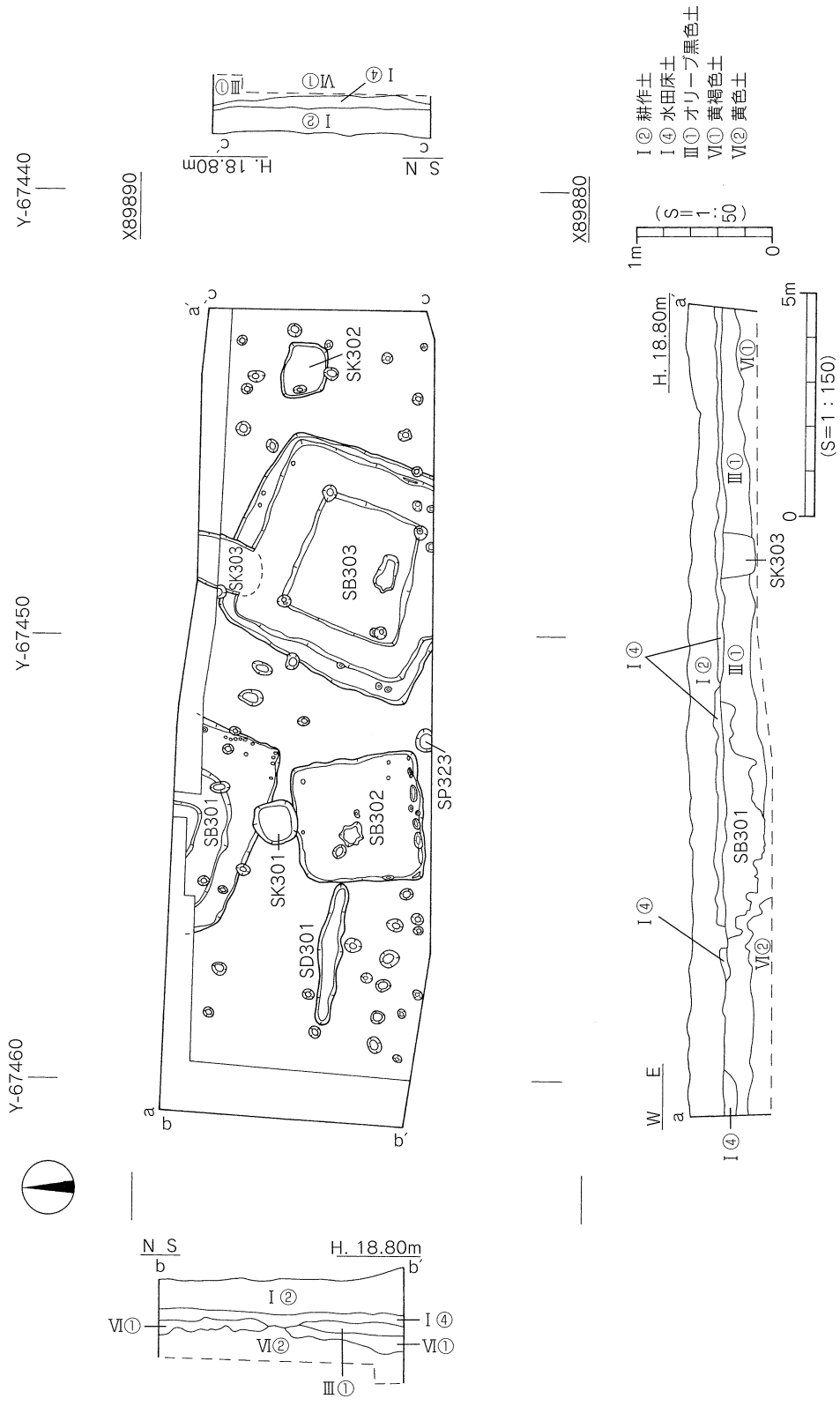
遺構は第Ⅲ①層及び第Ⅵ①層上面で検出した。検出した遺構は弥生時代中期から中世までのもので、竪穴式住居址11棟、溝17条、土坑21基、井戸 2 基、土器棺墓 3 基である。遺物は遺構及び包含層等から弥生土器、土師器、須恵器、瓦のほか、分銅形土製品や紡錘車が出土した。また、石器や鉄器、玉類、骨等が出土した。なお、弥生土器や土師器の中には、広島県や岡山県などからの搬入品が含まれている。



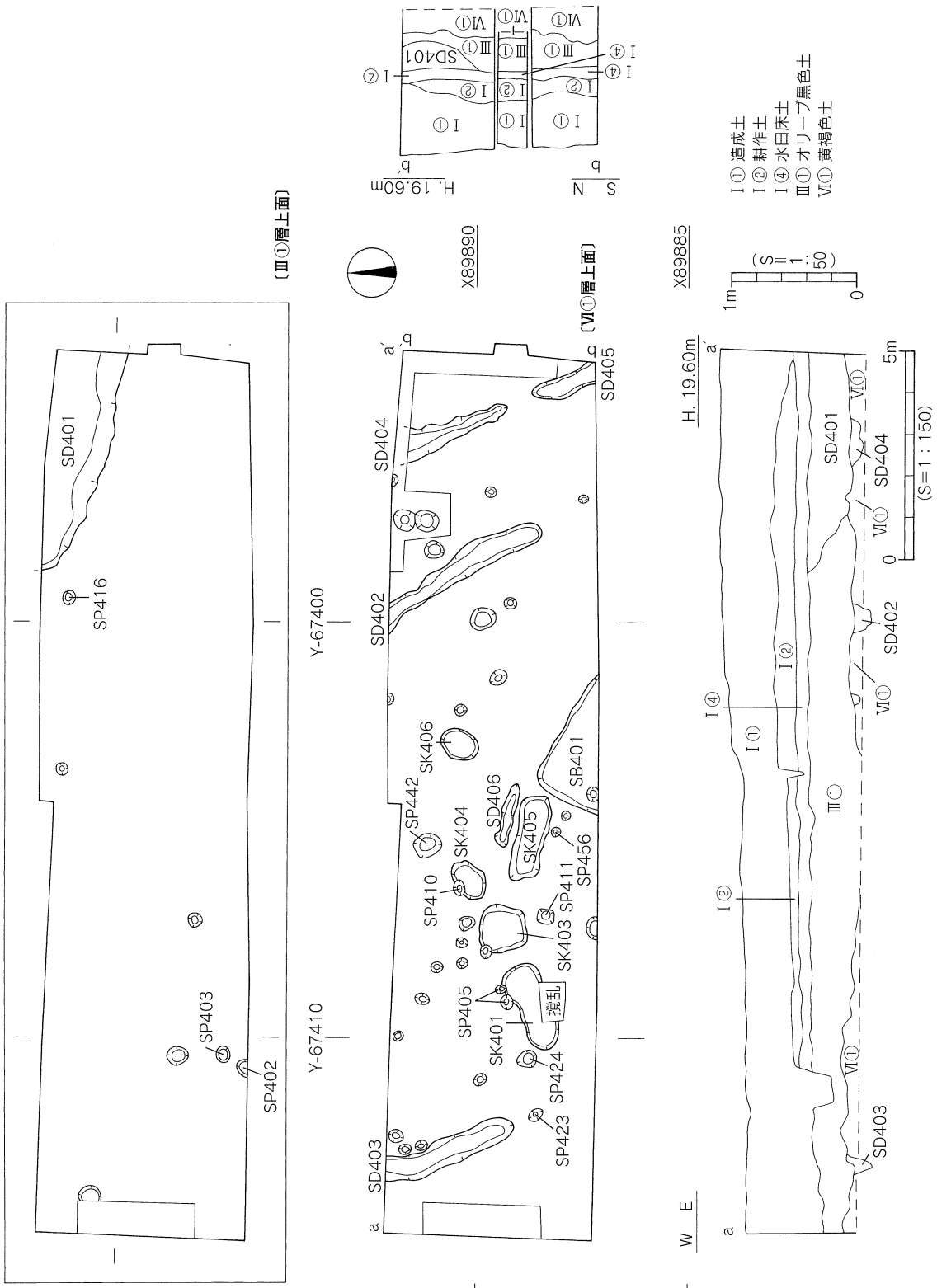
第62図 1区遺構配置図・土層図



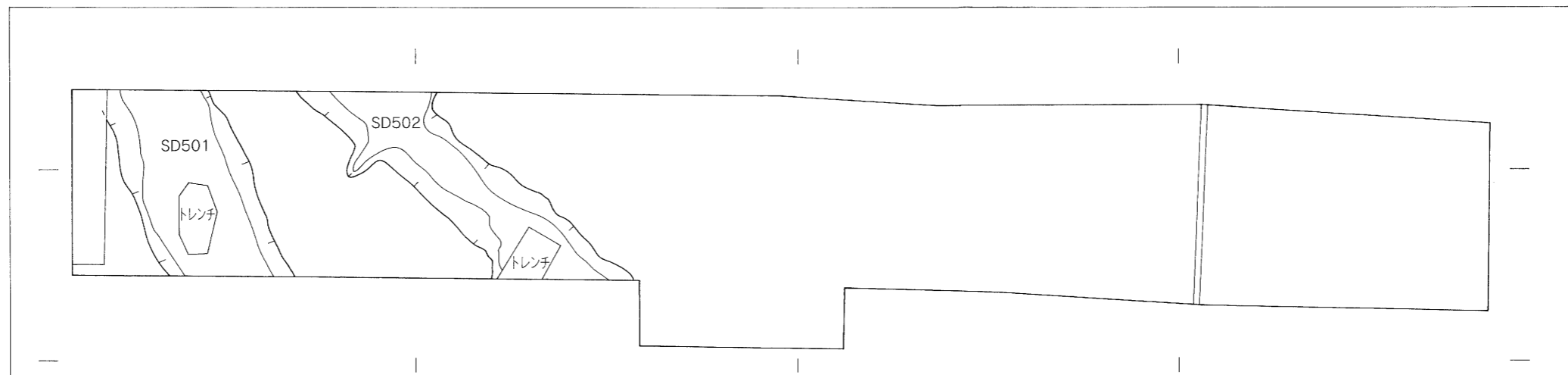
第63図 2区遺構配置図・土層図



第64図 3区遺構配置図・土層図



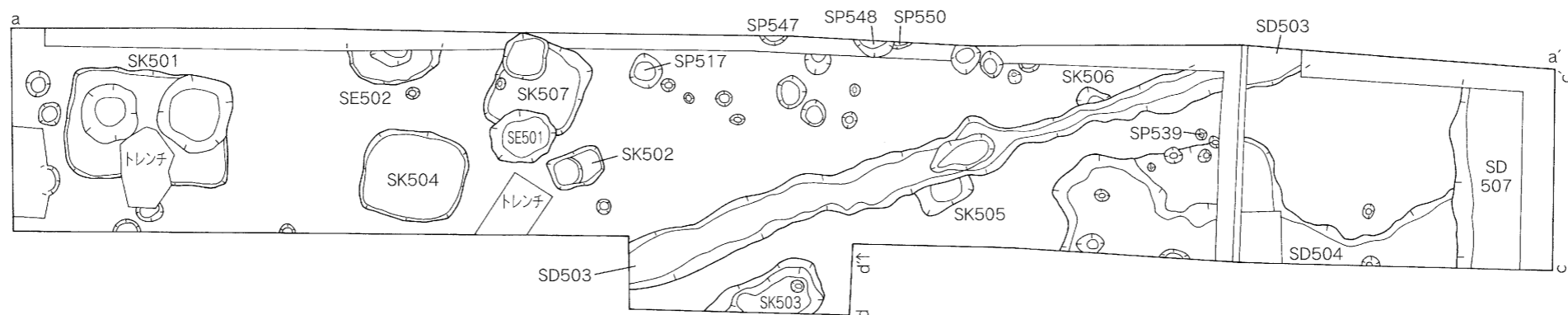
第65図 4区遺構配置図・土層図



Y-67380

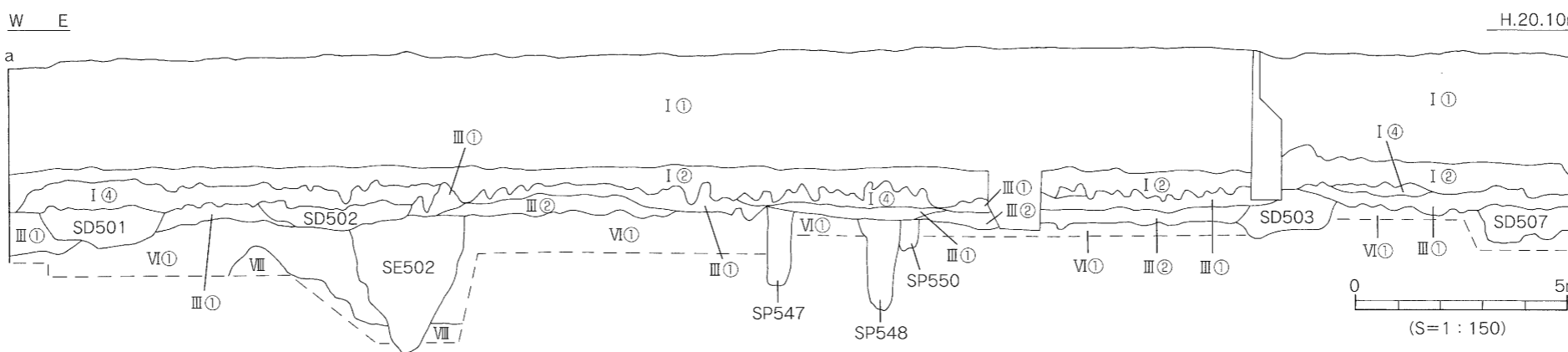
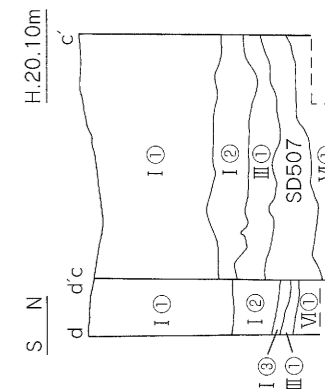
Y-67370

Y-67360



X 89890

X 89885



- I ① 造成土
- I ② 耕作土
- I ③ 旧耕作土
- I ④ 水田床土
- III ① オリーブ黒色土
- III ② 黒褐色土
- VI ① 黄褐色土
- VII 灰色砂礫

第66図 5区遺構配置図・土層図

3. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴式住居址9棟、溝13条、土坑18基、井戸2基、土器棺墓3基である。

(1) 竪穴式住居址

S B 101 (第67～72図、図版17・21)

S B 101は1区西部、A 1・2区に位置し、北側は調査区外に続き、南西隅はトレンチに切られる。第Ⅵ①層上面で検出し、第Ⅲ①層が覆う。平面形態は方形を呈し、規模は東西長6.60m、南北検出長5.10m、壁高は0.60～0.80m、床面積は33.2㎡を測る。埋土は18層に分層される。1層暗褐色土に黄色土が混じるもの、2層灰黄褐色土、3層褐灰色シルト、4層鈍い黄色土で3～5mm大の小礫を多量に含むもの、5層黄灰色土で1～3cm大の小礫を多量に含むもの、6層黄褐色土で1～3cm大の礫を含むもの、7層暗灰黄色土で1～3cm大の礫を含むもの、8層灰オリーブ色土で3～5cm大の小礫を多量に含むもの、9層鈍い黄色土、10層鈍い黄色土で1～3cm大の礫を多量に含むもの、11層黒褐色シルト、12層浅黄色砂質土、13層鈍い黄色微砂、14層灰色微砂、15層灰オリーブ色土で1～3cm大の礫を多量に含むもの、16層黄灰色微砂、17層焼土・炭・黄色砂ブロック、18層暗灰色シルトである。住居址床面にてピット3基(S P ①～③)を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径15～25cm、深さ3～5cmを測る。ピット埋土は暗灰色土である。遺物は住居址埋土中より、復元完形品を含む弥生土器、石器、焼土、炭化物が出土している。

出土遺物(1～82) 1～20は甕で、在地の叩き甕に混じって近畿系(18)、讃岐の下川津B類(19)がある。21～44は壺で、在地の複合口縁壺(21～23)、近畿系の二重口縁壺(35～40)、頸部が内傾する外来系壺(41・42)、角閃石を含む外来系壺(43)、中国地方系壺(44)等がある。45～56は鉢、57～61は高坏、62は注口土器片、63～67は支脚である。68・70～74は弥生前期～中期、69は縄文晩期のもので、74は形状が西南四国型土器に似る。75～82は石器で、81は紡錘車の未製品である。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。

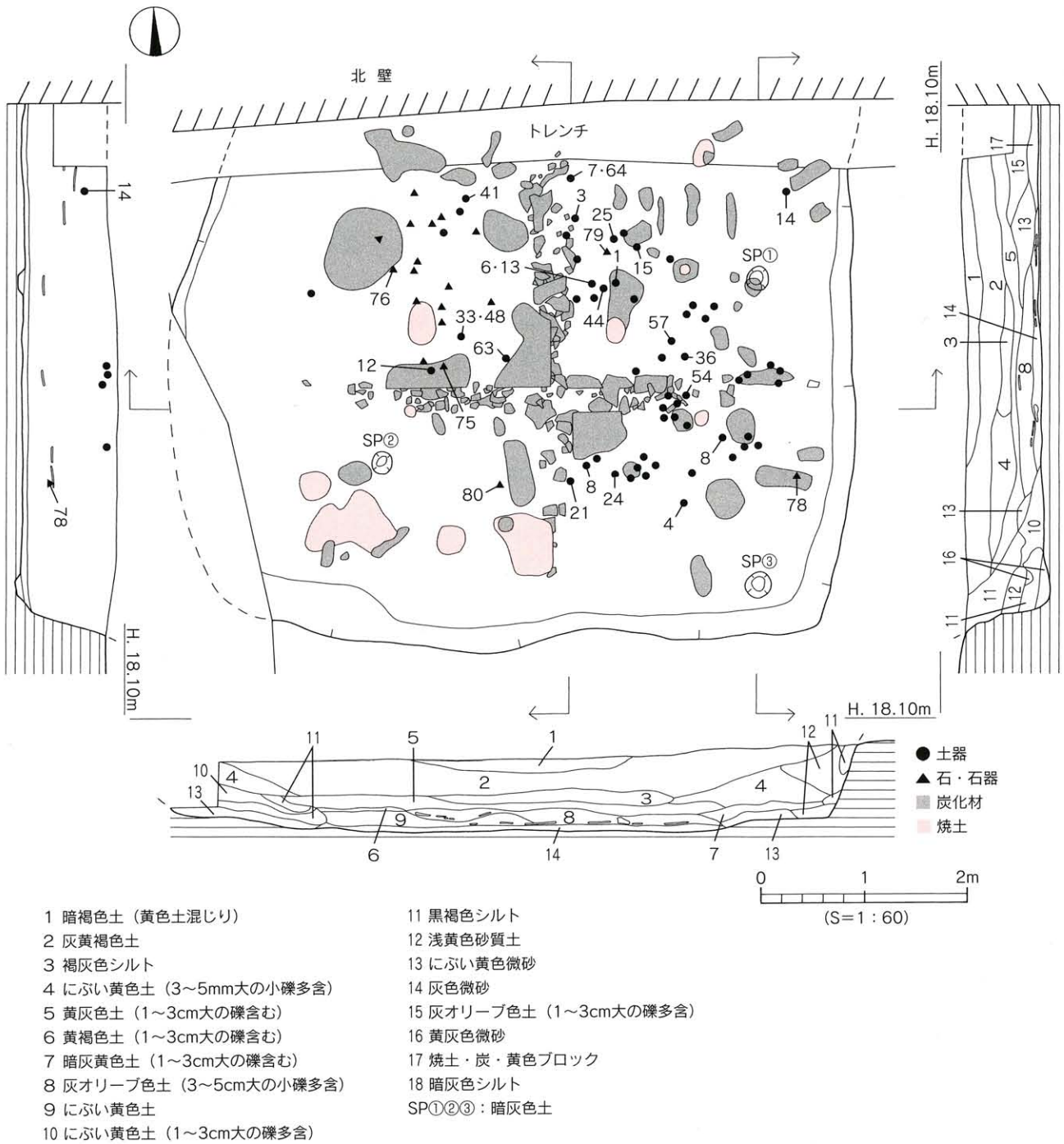
S B 102 (第73～75図、図版17・21)

S B 102は1区東部、B 1～C 2区に位置し、北側はトレンチに切られる。第Ⅵ①層上面で検出し、第Ⅲ①層が覆う。平面形態は南北に長い長方形を呈し、規模は東西長6.24m、南北長7.00m、壁高は0.72～1.02m、床面積は43.1㎡を測る。埋土は9層に分層される。1層暗褐色土、2層暗褐色土に黄色ブロック・3～10cm大の円礫を微かに含むもの、3層褐灰色シルトで浅黄色土が混じるもの、4層灰黄褐色土、5層褐灰色シルトで黄色土が混じるもの、6層褐灰色シルト、7層暗灰色砂礫で3～10cm大の円礫を少量と0.5～1cm大の小礫を多量に含むもの、8層灰黄褐色微砂、9層褐灰色土で3～5cm大の円礫を微かに含むものである。住居址床面にてピット10基(S P ①～⑩)を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径0.15～0.25m、深さ0.03～0.08mを測る。ピット埋土は茶色粘質土である。遺物は住居址埋土中より復元完形品を含む弥生土器、石器、焼土、炭化物が出土した。

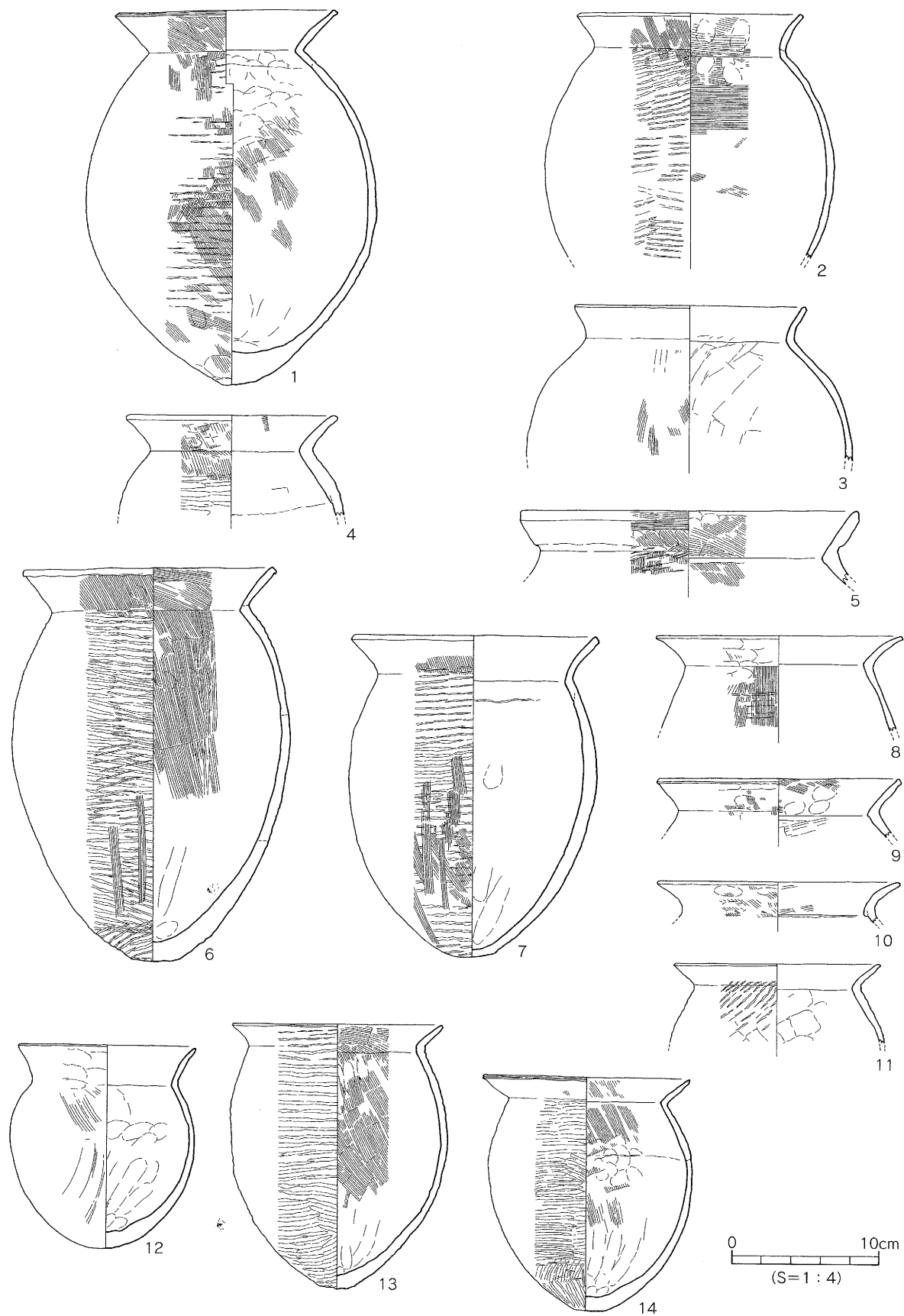
出土遺物(83～133) 83～90は甕、91～104は壺、105～122は鉢、123～126は高坏、127～129は支脚である。このうち、高坏125は加飾が著しく、吉備の装飾高坏と関係するだろう。130は弥生前期土器、131は西南四国型土器である。132は鉄鏃、133は石鏃である。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。

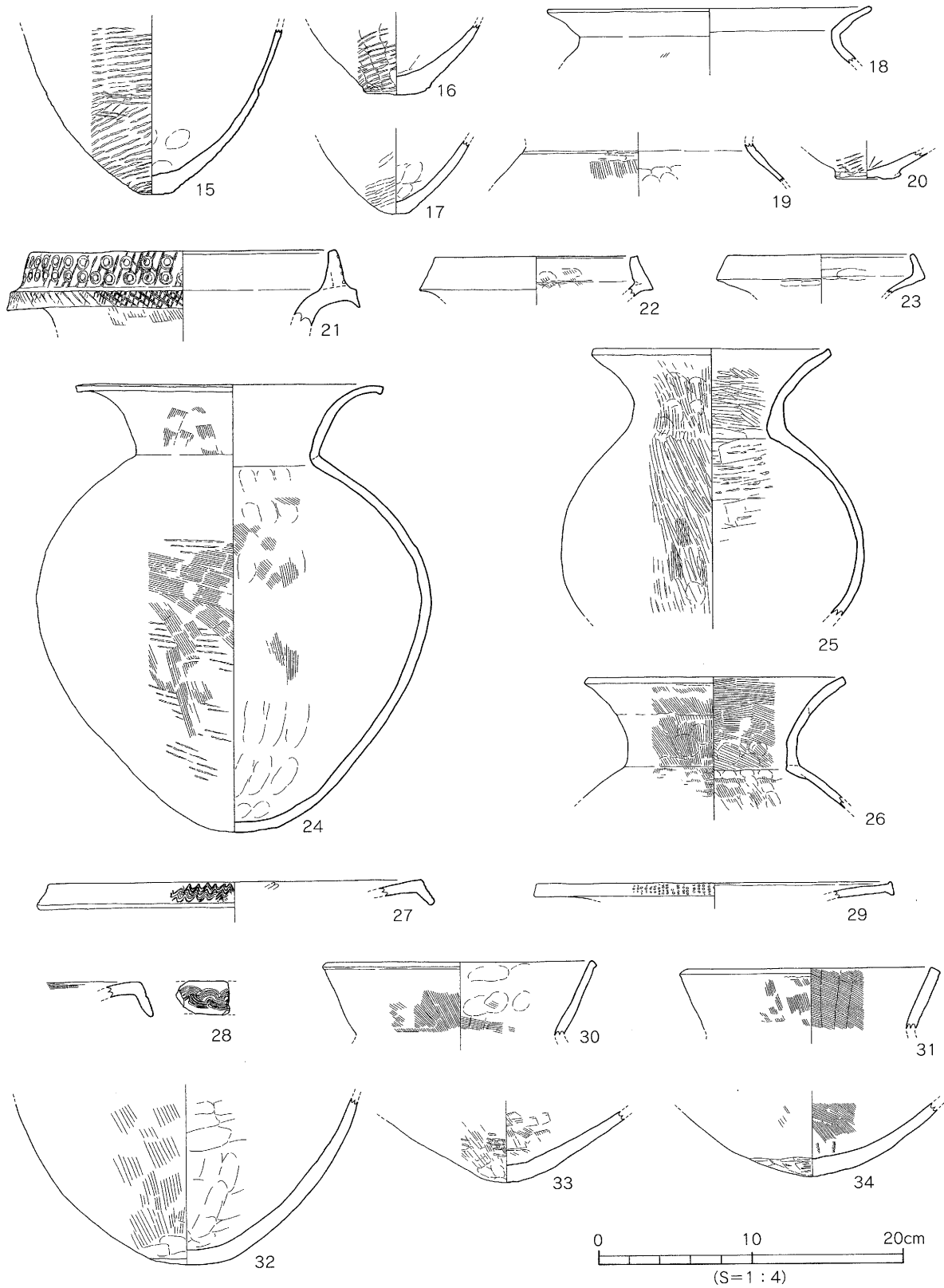
西石井遺跡 1次調査地



第67図 SB101測量図

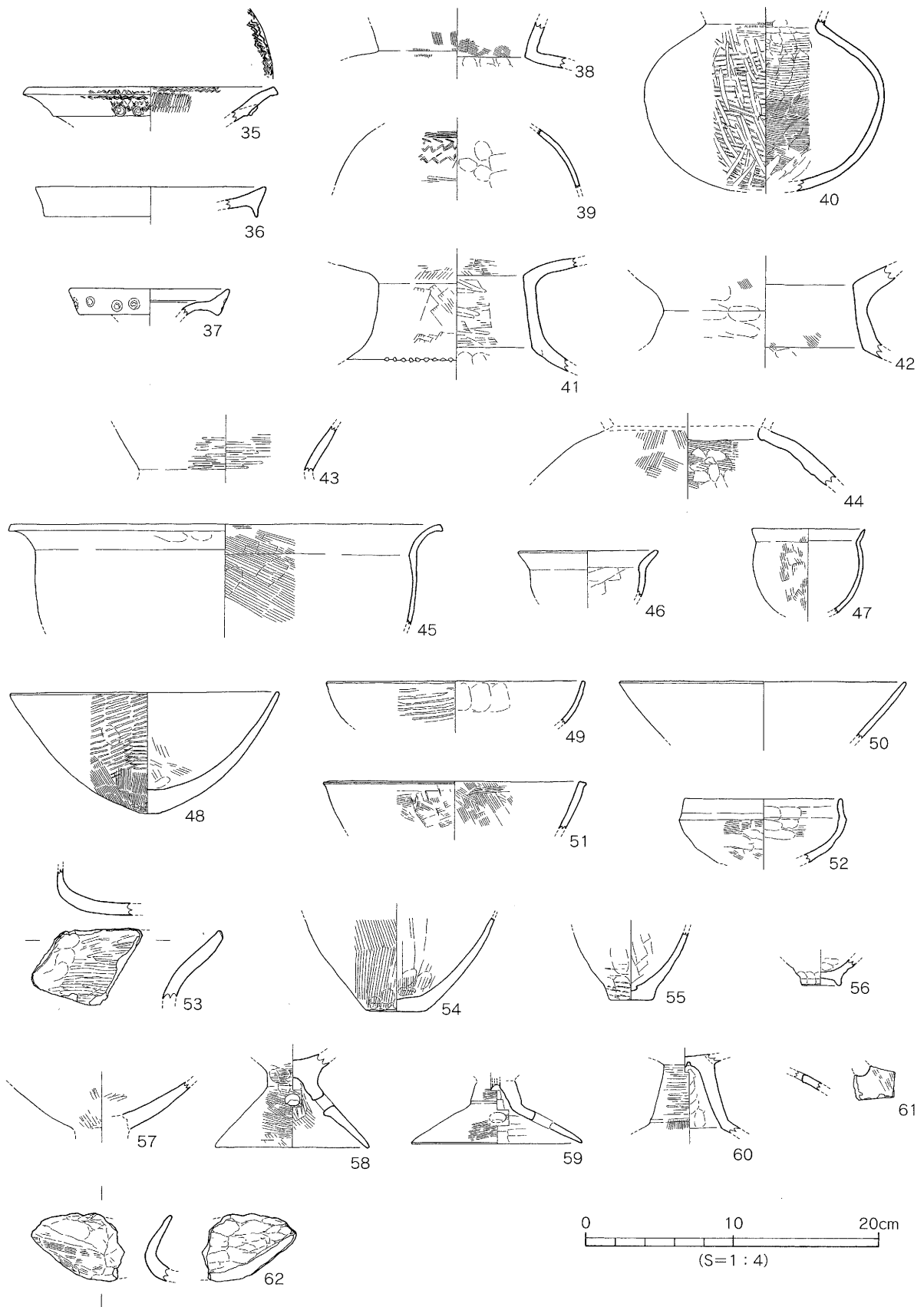


第68図 SB101出土遺物実測図 (1)

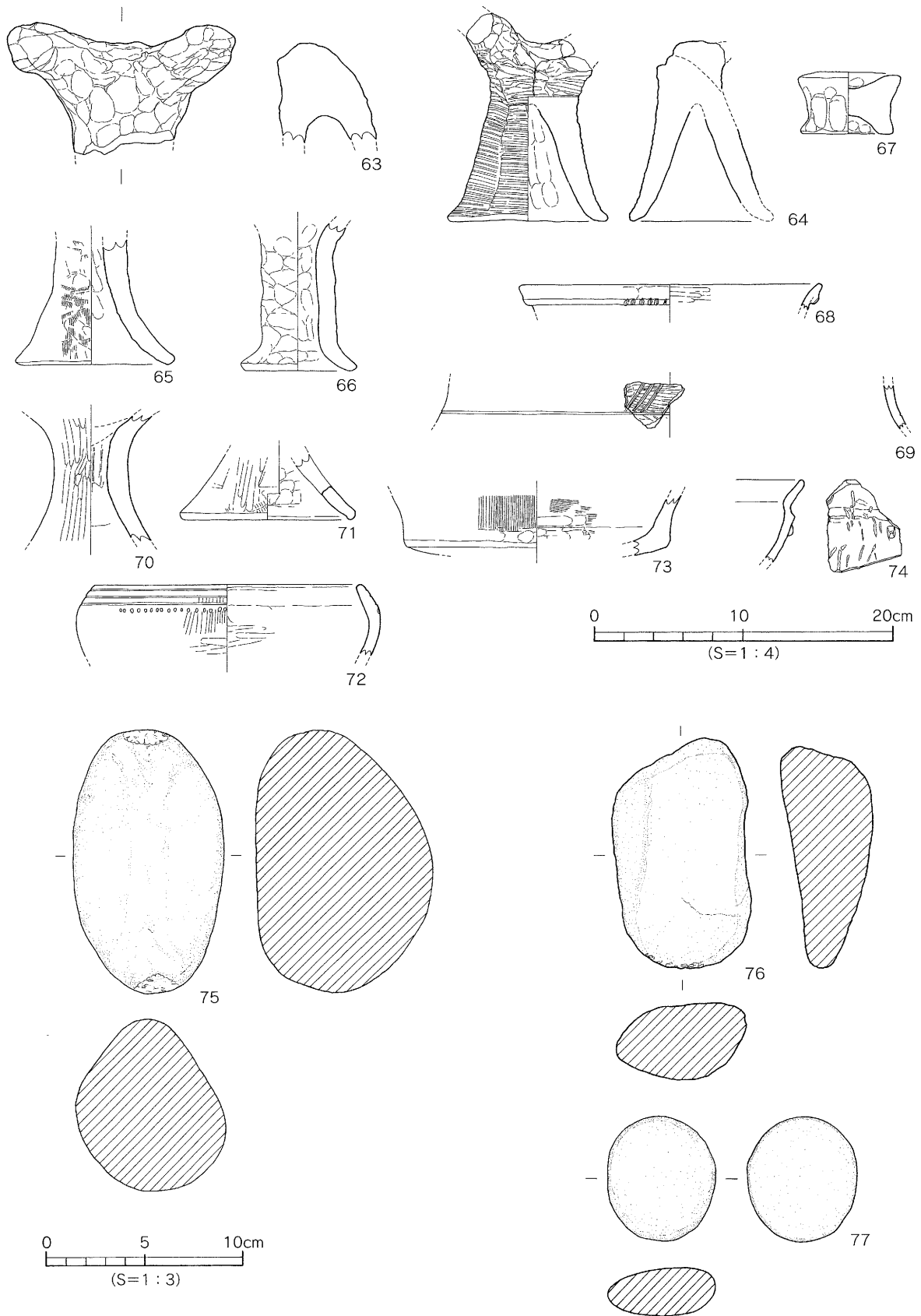


第69図 SB101出土遺物実測図(2)

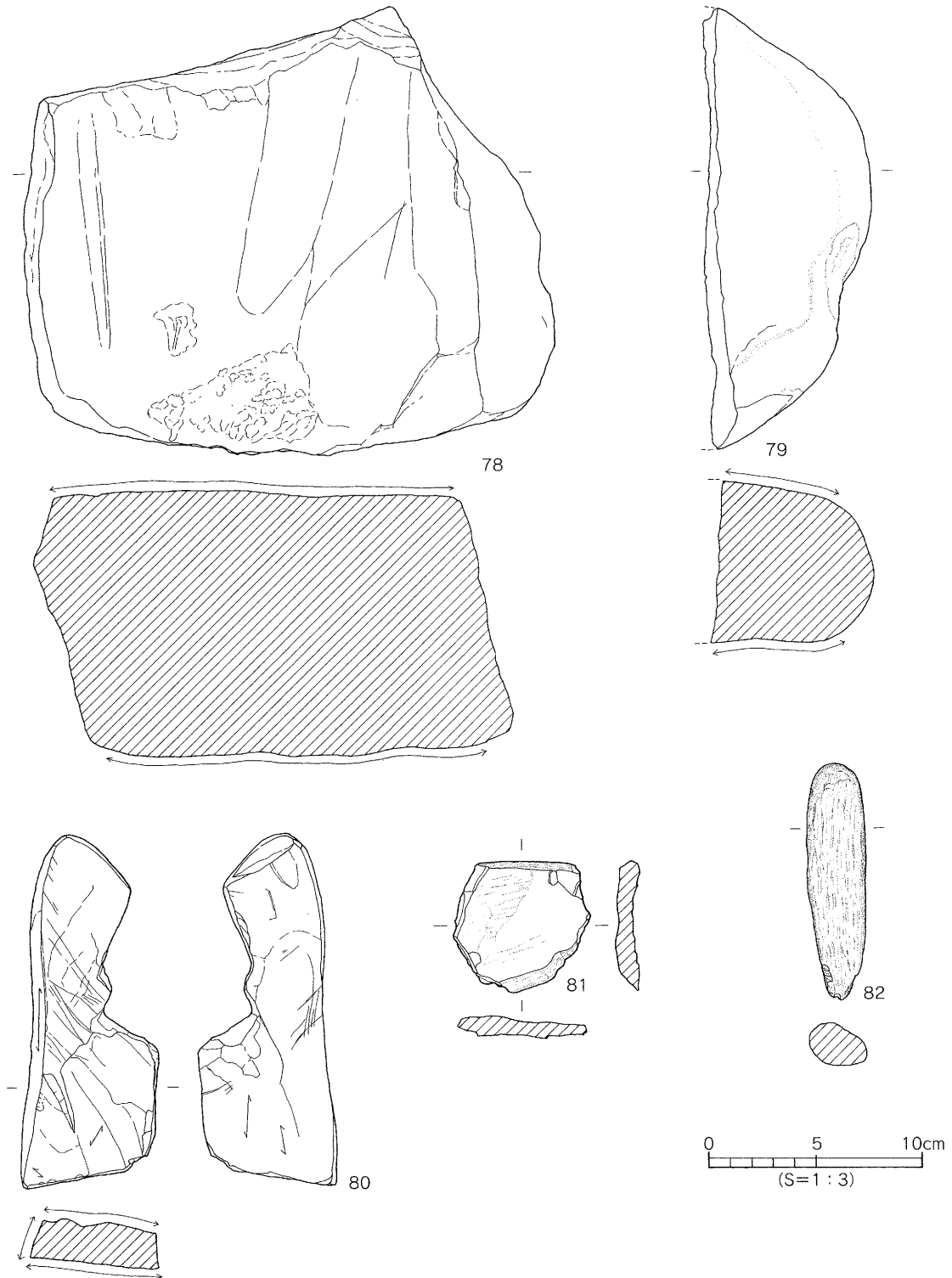
弥生時代の遺構と遺物



第70図 SB101出土遺物実測図 (3)

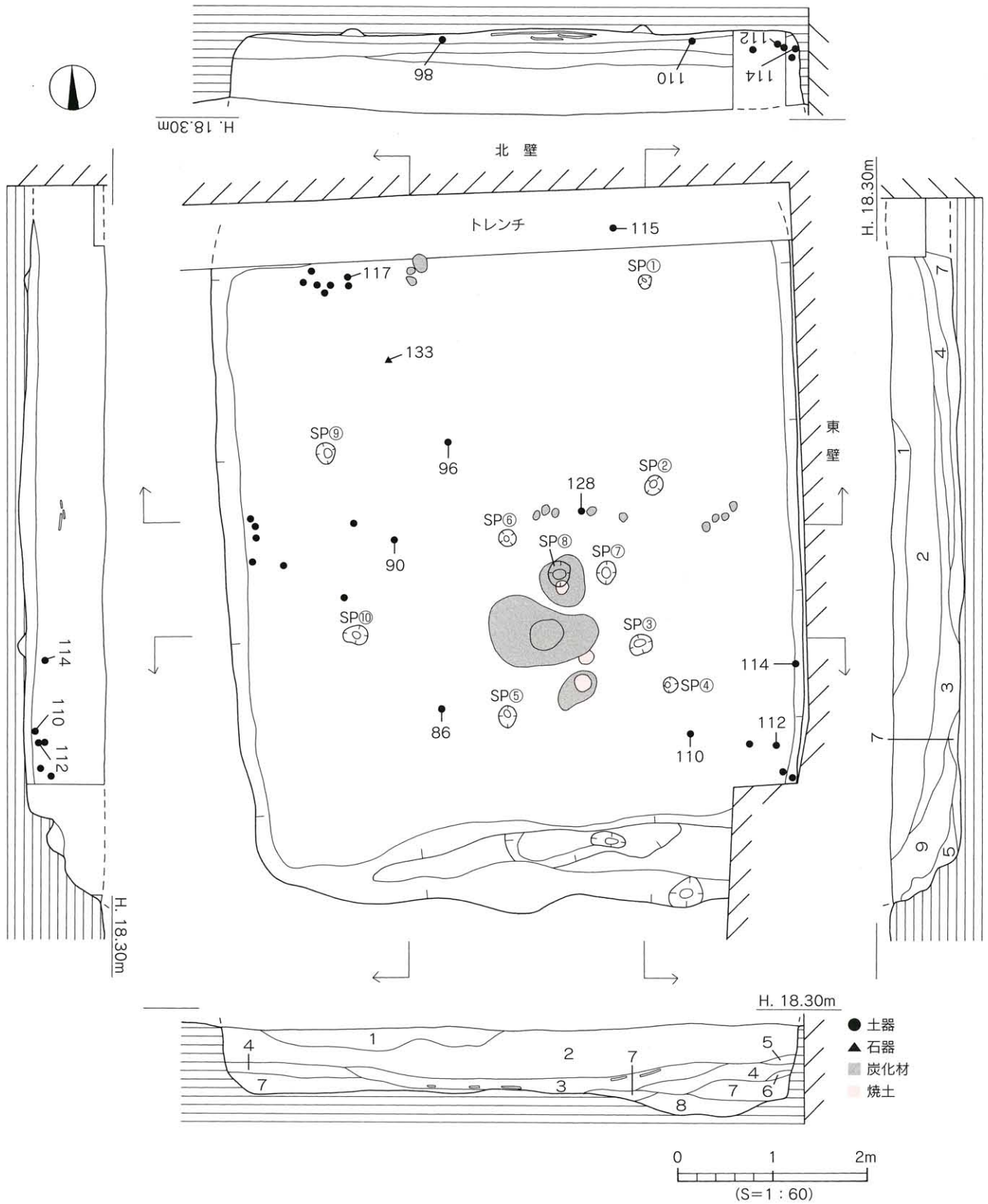


第71図 SB101出土遺物実測図(4)



第72図 SB101出土遺物実測図 (5)

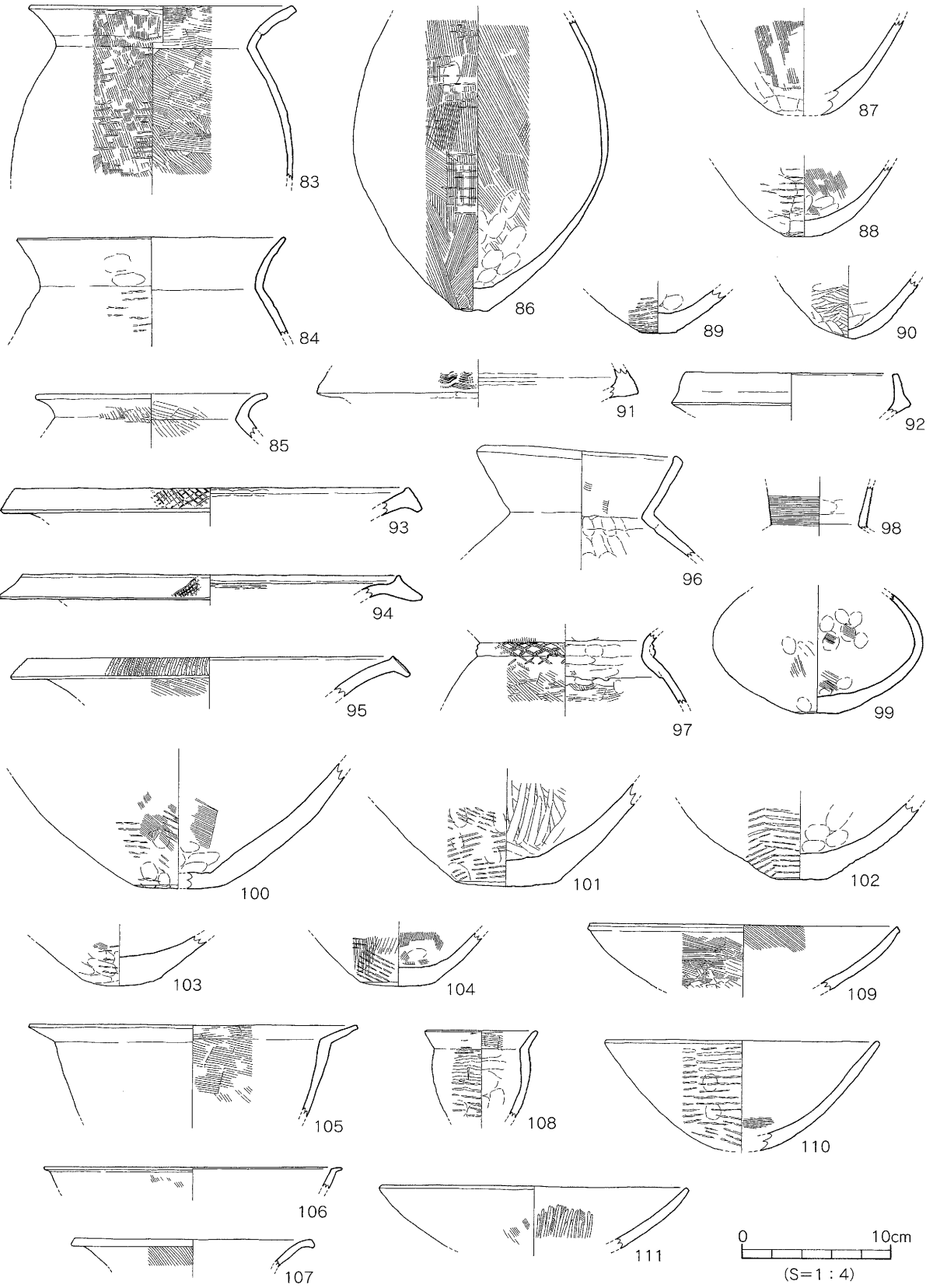
西石井遺跡 1次調査地



- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 (黄色ブロック・3~10cm大の円礫少量含)
- 3 褐灰色シルト (浅黄色土混じり)
- 4 灰黄褐色土
- 5 褐灰色シルト (黄色土混じり)

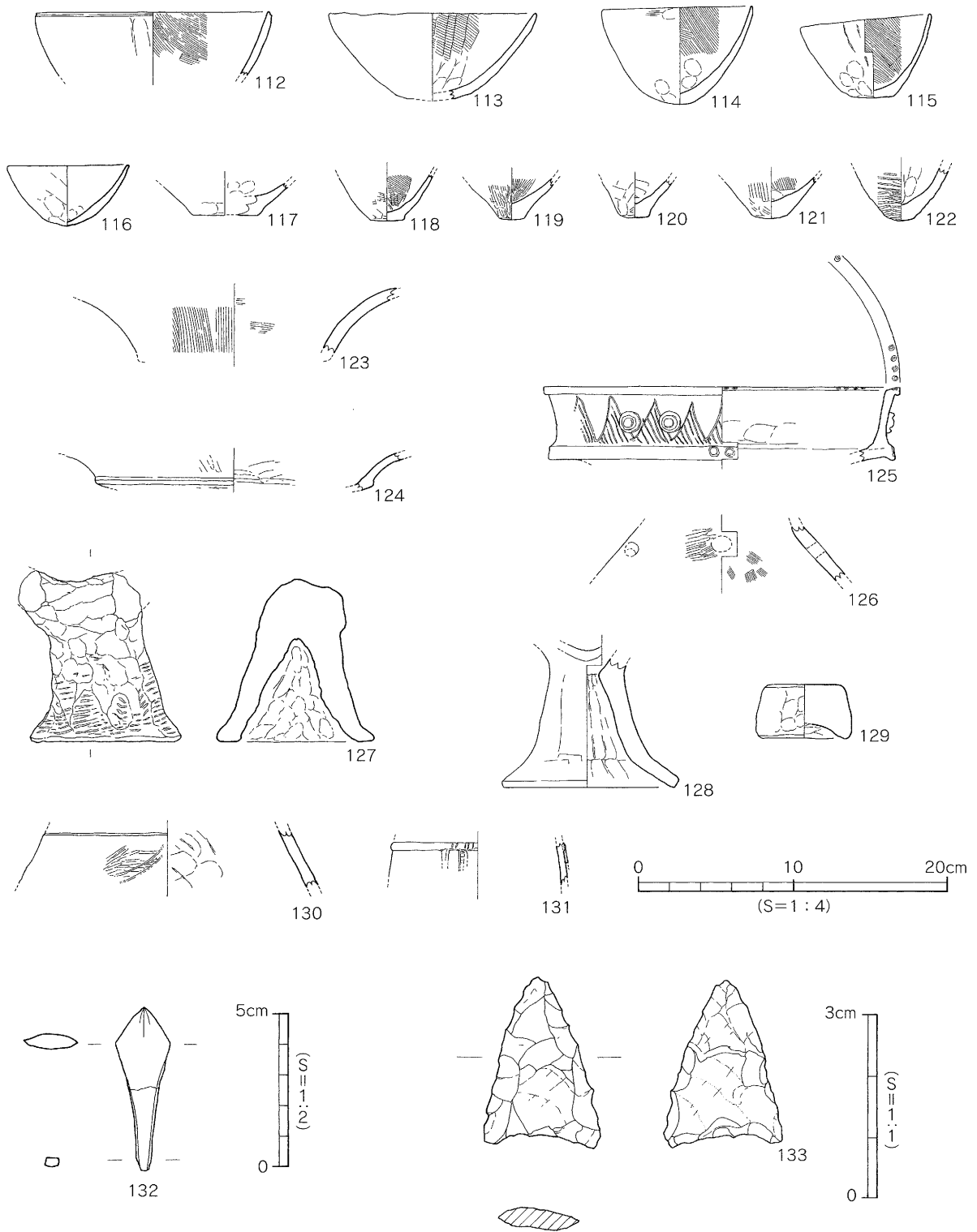
- 6 褐灰色シルト
- 7 暗灰色砂礫 (3~10cm大の円礫少量・0.5~1cm大の小礫多量に含)
- 8 灰黄褐色微砂
- 9 褐灰色土 (3~5cm大の円礫少量含)
- SP①~⑩: 茶色粘土

第73図 SB102測量図



第74図 SB102出土遺物実測図(1)

西石井遺跡1次調査地



第75図 SB102出土遺物実測図(2)

S B 202 (第76～85図、図版17・21・22)

S B 202は2区北西部、D・E 1区に位置し、南西側はS B 206を切り、東半分はS K 204・S B 204・S X 201に、西半分はS B 205に、中央はS K 201に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径7.30～7.40m、壁高は0.42～1.05m、床面積は54.0m²を測る。埋土は11層に分層される。1層暗褐色土に礫と土器が混じるもの、2層暗褐色土に礫と土器が混じるもので1層より明るい、3層暗褐色土に小礫と砂が混じるもの、4層黄色粘質土のブロック、5層黄色粘質土に礫と砂が混じるもの、6層黄色土に灰色土と炭が混じるもの、7層黄褐色粘質土に炭が混じるもの、8層黄褐色粘質土に砂が混じるもの、9層黄褐色粘質土に砂と礫が混じるもの、10層茶色粘質土に砂と礫が混じるもの、11層灰色砂に礫が混じるものである。住居址床面にてピットと周壁溝とを検出した。主柱穴はS P ①・③・④・⑥・⑧・⑨の6本と考えられ、規模は径20～40cm、深さ20～30cmを測る。柱穴掘り方埋土は暗褐色土である。周壁溝は床面全域で検出し、規模は幅0.10～0.22m、深さ0.17～0.28mを測る。遺物は住居址埋土中より完形品を多く含む弥生土器、石器、焼土、炭化物が出土している。

出土遺物 (134～304) 134～182は甕で、在地の甕に混じって讃岐の下川津B類土器2点(181・182)が含まれる。183～221は壺、222～270は鉢、271～279は高坏、280は器台である。このうち、270には赤色顔料が見られる。281～283は甌、284は蓋、285は片口状の異形品、286～289は線刻土器、290～299は支脚である。300・301は弥生前期土器。302～304は鉄器片である。また、S B 202とS K 201が接合する土器(305～314)があり、そのうち314は讃岐の下川津B類土器である。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。

S B 203 (第86・87図、図版17)

S B 203は2区北西部、E 1・2区に位置し、北側はトレンチ、南側は柱穴S P 216に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は東西長4.70m、南北検出長2.90m、壁高は0.27～0.48m、床面積は13.6m²を測る。住居址東側はテラス状の高まりをもつ。埋土は4つに分層される。1層暗褐色土、2層暗茶褐色土、3層黄茶色粘質土、4層茶褐色土のブロックである。遺物は住居址埋土中及び床面より、弥生土器、石器、鉄器、炭化物が出土した。

出土遺物 (315～337) 315～321は甕、322・323は壺、324～329は鉢、330～333は高坏で、334は高坏の可能性をもち、335は弥生中期の高坏である。336は鉄器、337は石器である。

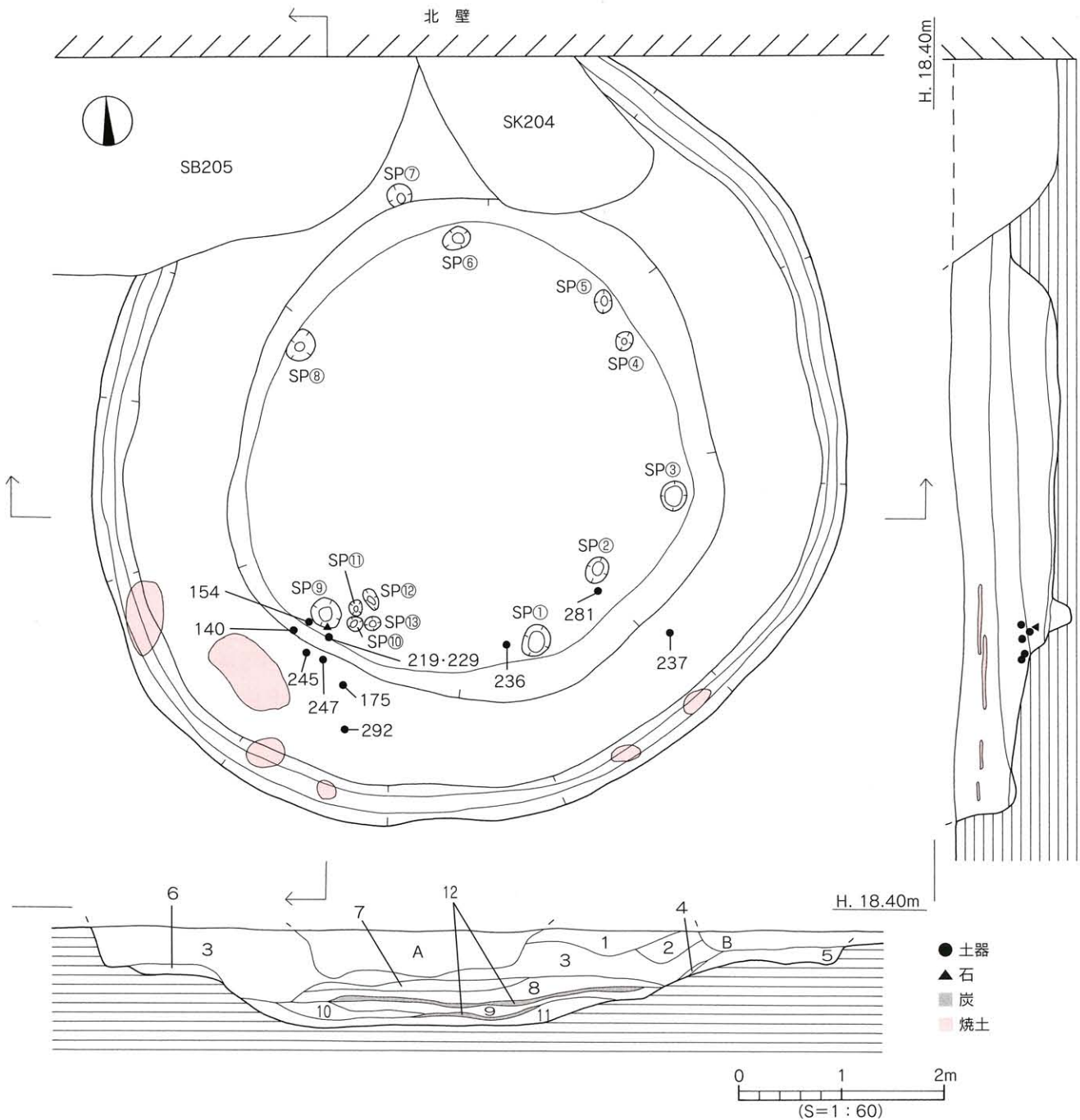
時期：出土遺物から弥生時代末とする。

S B 205 (第88～92図、図版17)

S B 205は2区北西部、D 1区に位置し、南側はS B 202を切り、東側はS K 204に切られ、北側と西側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.00m、南北検出長2.10m、壁高は0.75～0.96m、床面積は8.4m²を測る。埋土は16層に分層される。1層暗褐色土に礫が混じるもの、2層明茶褐色土に礫が混じるもの、3層黄茶色土に礫が混じるもの、4層暗茶褐色土に礫が混じるもの、5層黄褐色土に礫と砂が混じるもの、6層黄褐色粘土、7層茶褐色土に礫が混じるもの、8層黄茶色粘質土に礫が混じるもの、9層黄褐色粘質土、10層茶褐色粘土に炭が混じるもの、11層茶褐色粘質土に礫と炭が混じるもの、12層黄色粘質土に礫が混じるもの、13層黄茶褐色土に礫が混じるもの、14層炭、15層茶色粘土、16層黄褐色土である。住居址

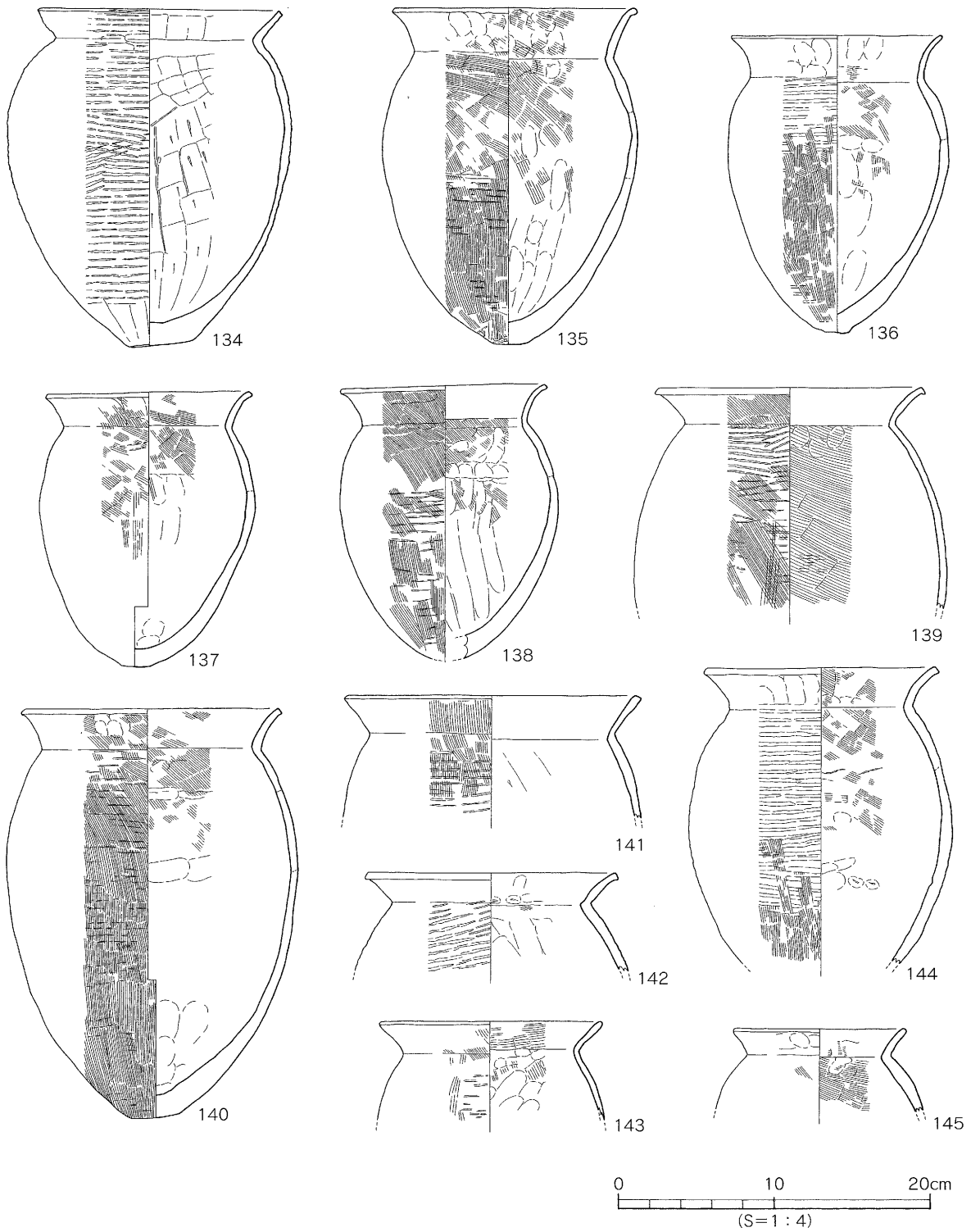
西石井遺跡 1次調査地

床面にてピット2基 (SP①・②) を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径0.20~0.30m、深さ0.06~0.12mを測る。ピット埋土は灰色粘質土である。遺物は住居址埋土中より、弥生土器と炭化物とが出土した。

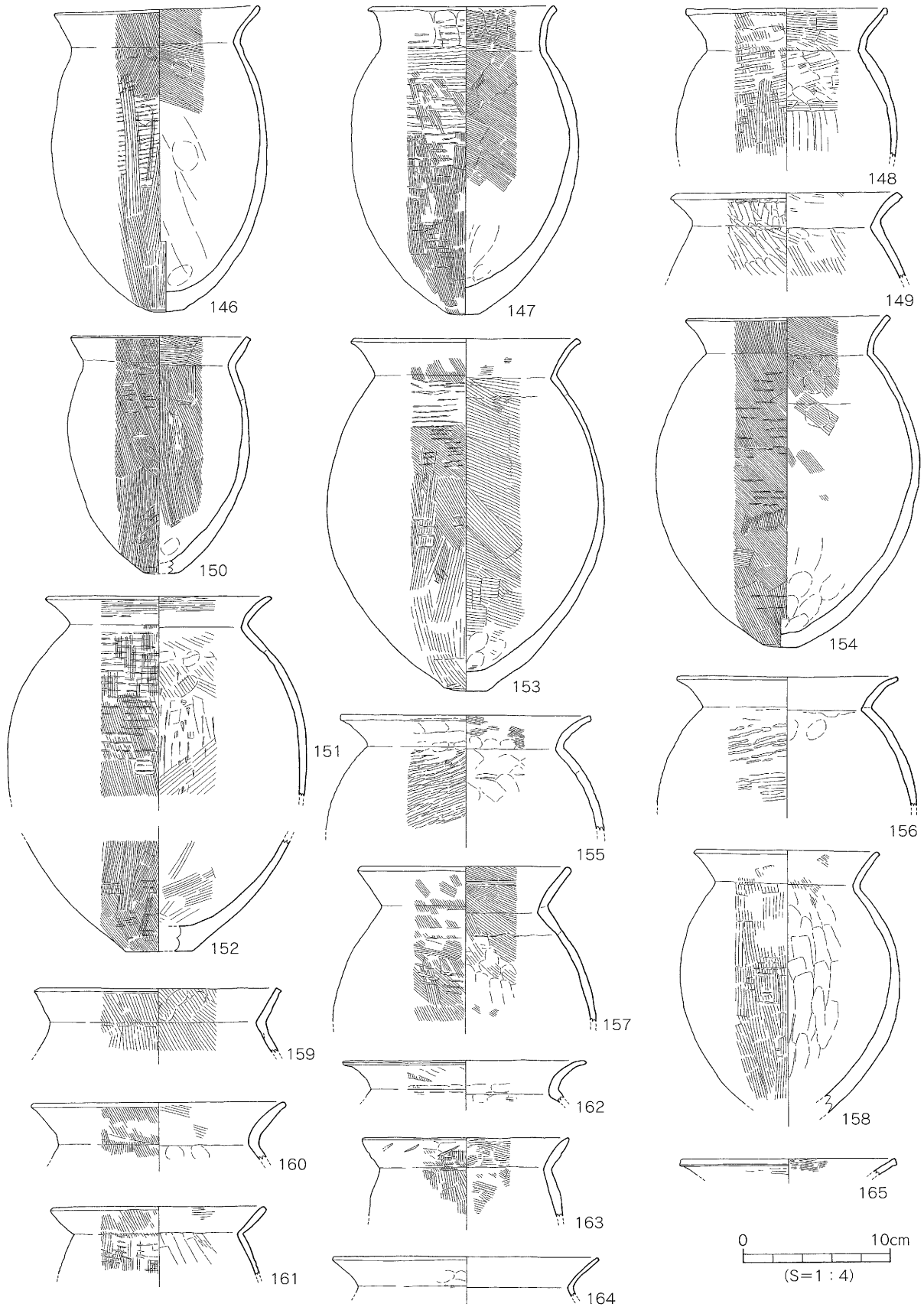


- | | | |
|-----------------|------------------|---------------------|
| A SK201 | 7 黄褐色粘質土 (炭混入) | SP①~③ 砂礫土 (土器混入) |
| B SB204 | 8 黄褐色粘質土 (砂混入) | SP④⑤ 暗褐色粘土 |
| 1 暗褐色土 (礫・土器混入) | 9 黄褐色粘質土 (砂・礫混入) | SP⑥⑦ 茶色粘土 |
| 2 1より明るい | 10 茶色粘質土 (砂・礫混入) | SP⑧ 暗褐色土 |
| 3 暗褐色土 (小礫・砂混入) | 11 灰色砂土 (礫混入) | SP⑨~⑬ 暗褐色土 (砂・土器混入) |
| 4 黄色粘質土 (ブロック) | 12 炭 | |
| 5 黄色粘質土 (礫・砂混入) | | |
| 6 黄色土 (灰色土・炭混入) | | |

第76図 SB202測量図



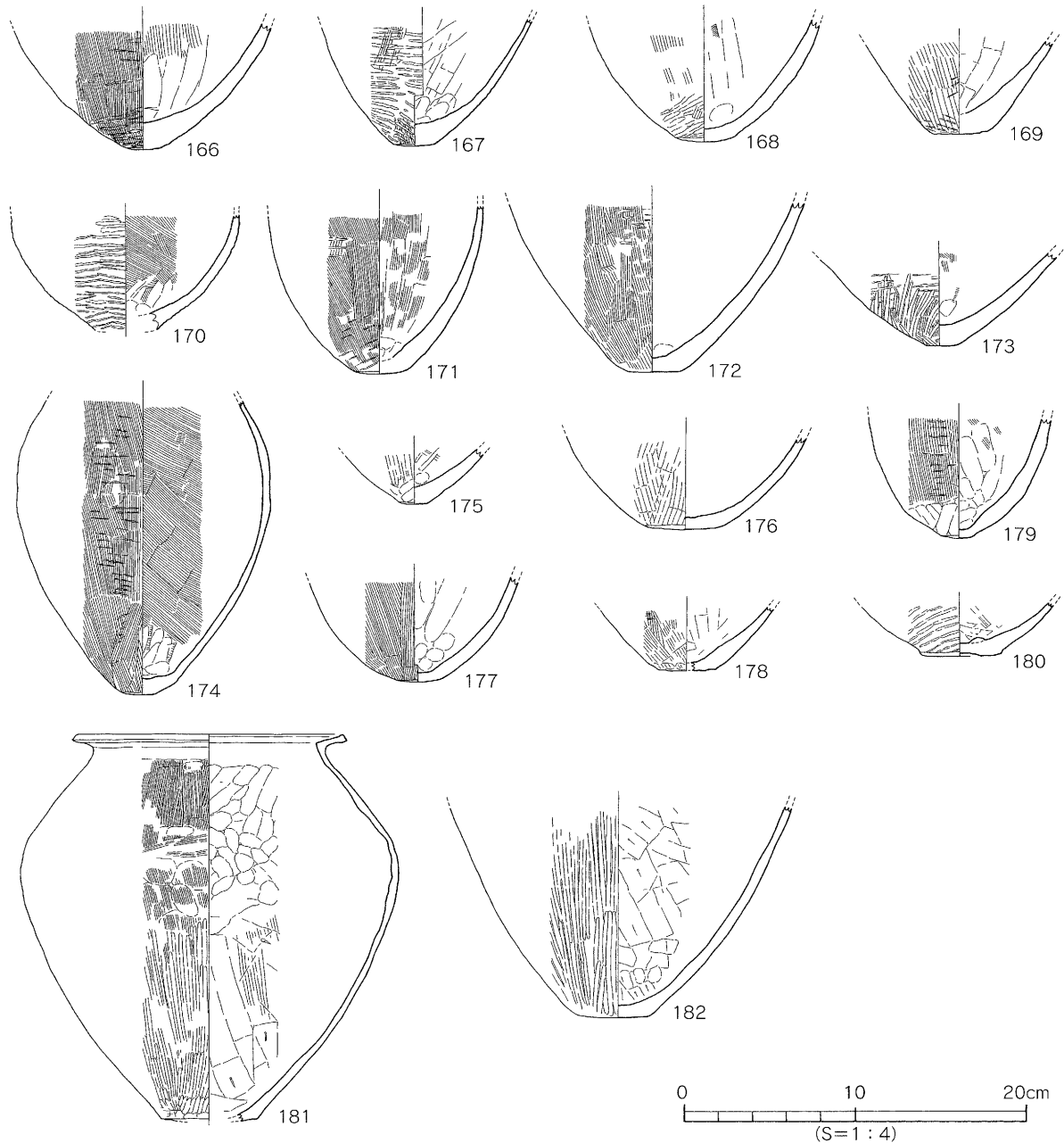
第77図 SB202出土遺物実測図(1)



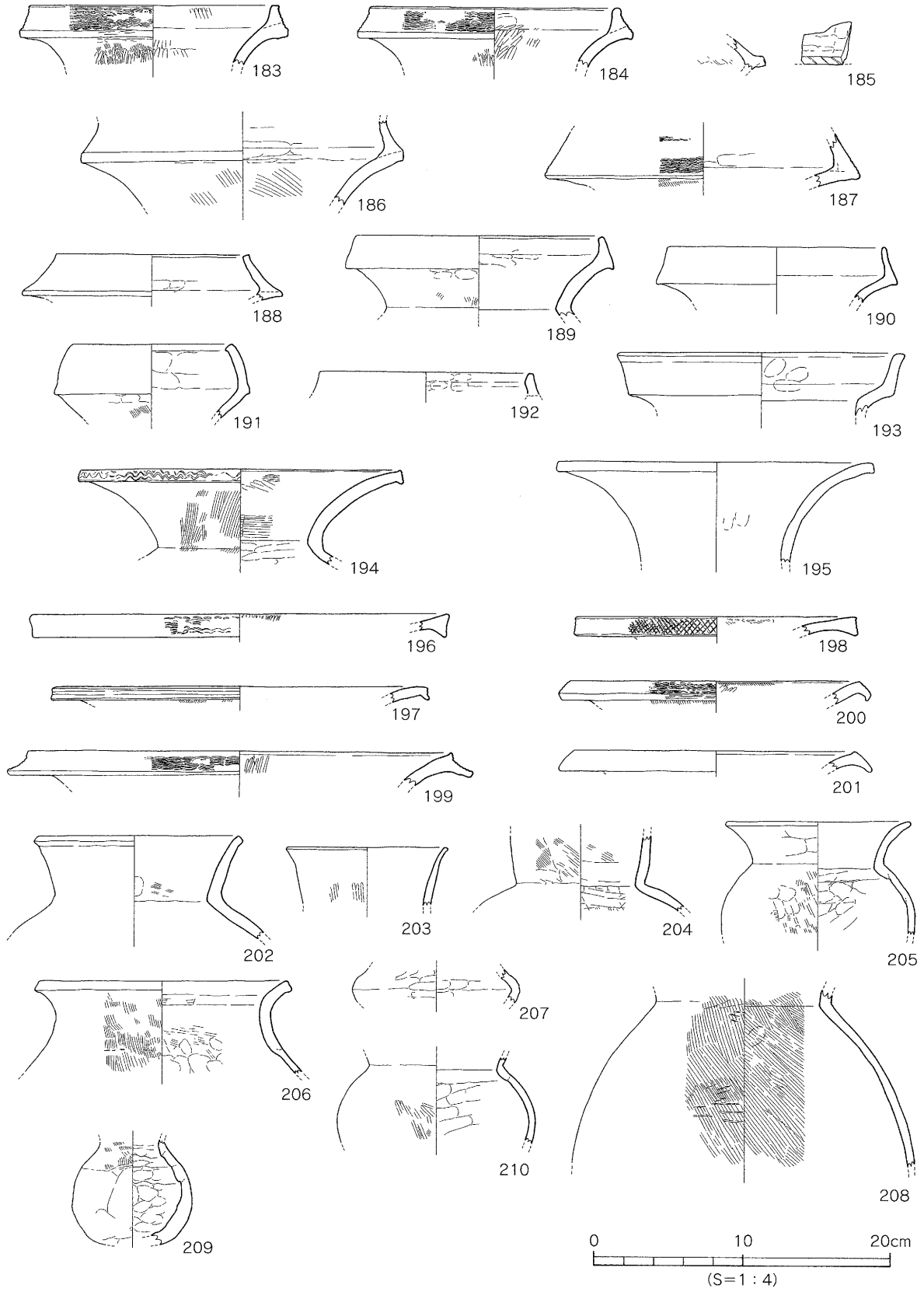
第78図 SB202出土遺物実測図(2)

出土遺物（338～432）338～357は甕で、356・357は讃岐の下川津B類土器である。358～381は壺で、374は器台の可能性もあり、380は弥生中期である。382～416は鉢で、413は中国地方系大型鉢、414は東阿波型土器、415は赤色顔料が付き、416は異形の外来系土器である。417～419は高坏、427は甌、420～426は支脚である。428は筒状土器、429は加飾の著しい壺もしくは高坏になり、吉備との関係を考えたい。430・431は鉄器片、432は石器である。

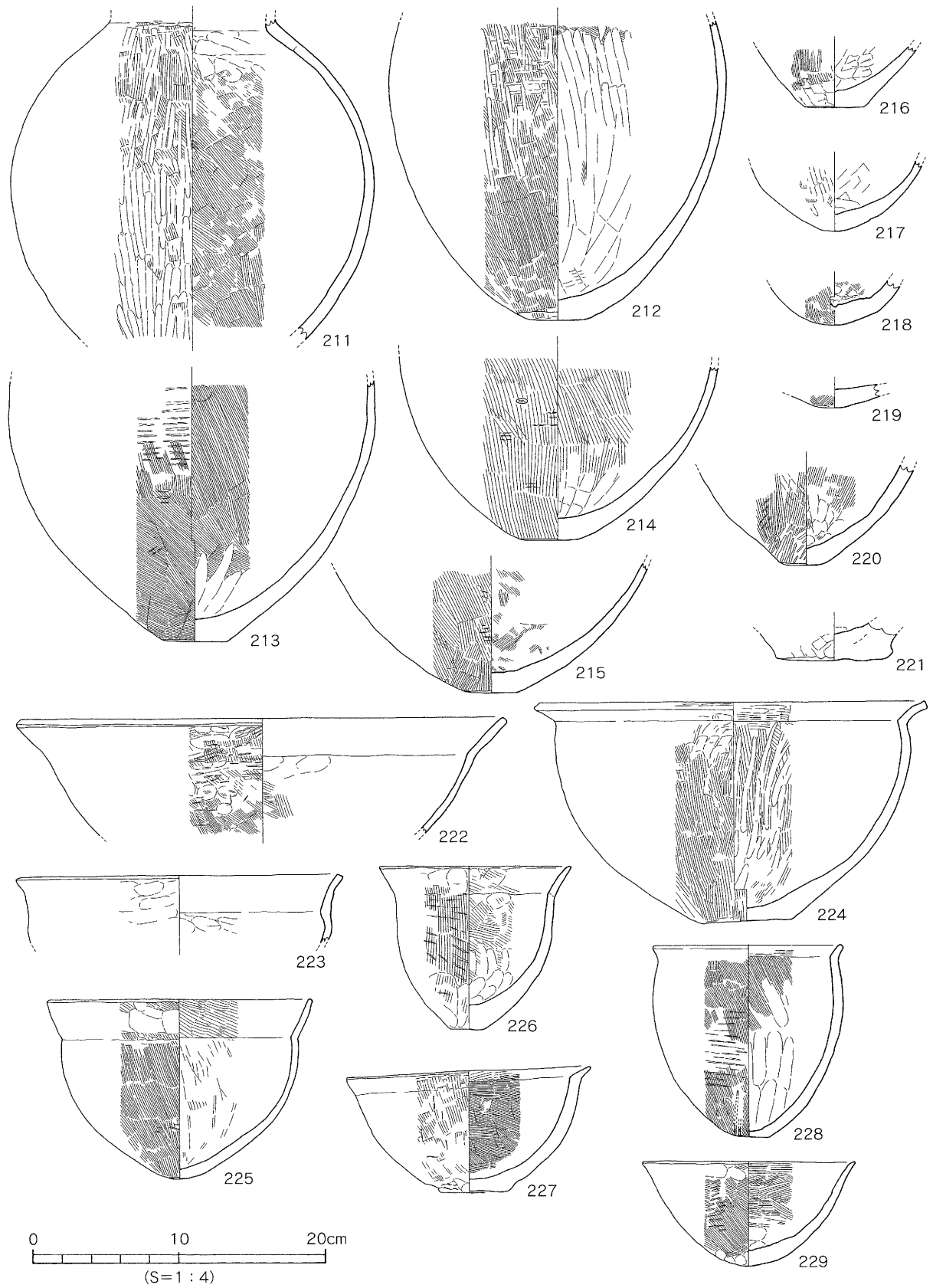
時期：出土遺物から弥生時代末とする。



第79図 SB202出土遺物実測図（3）

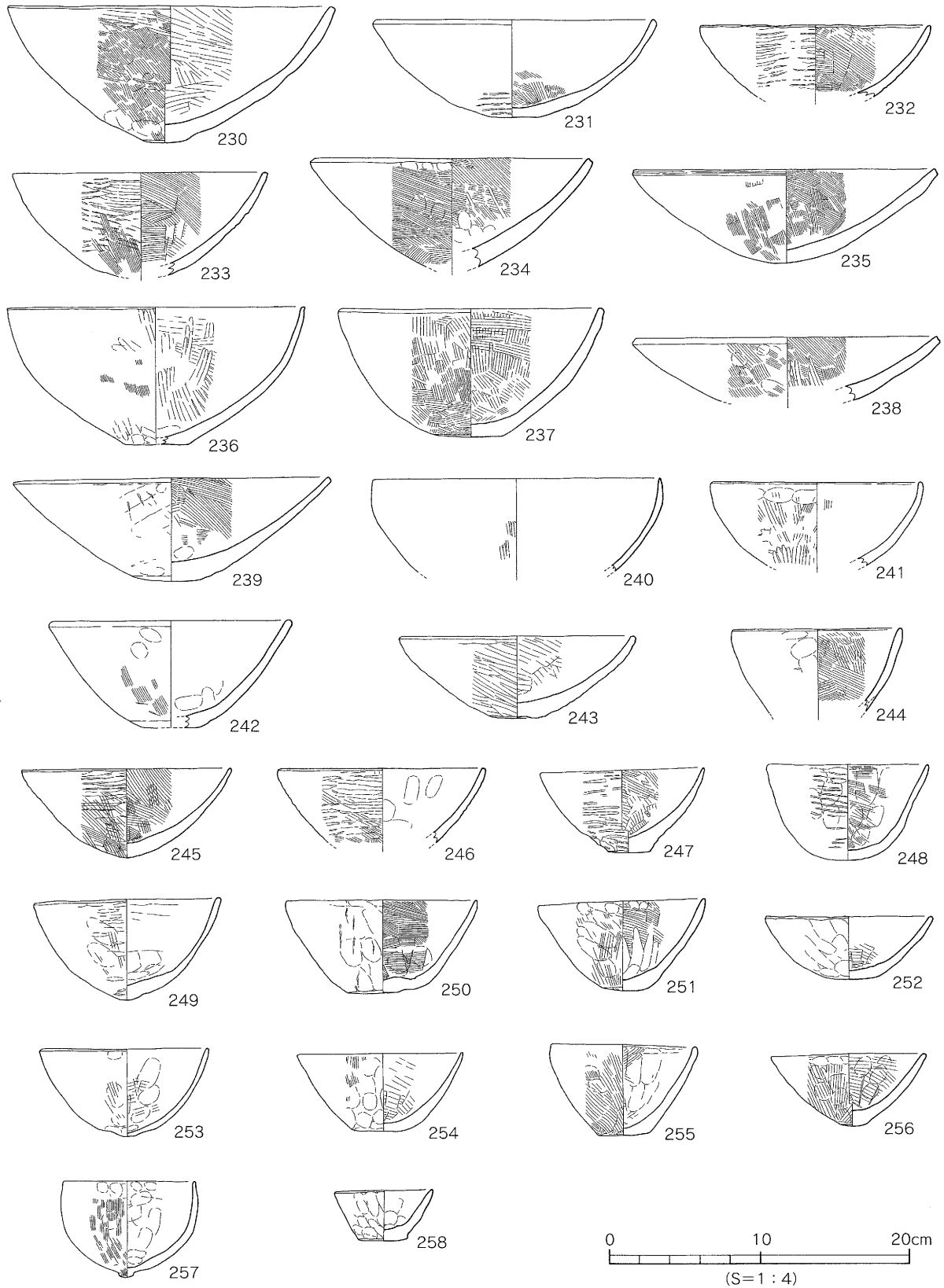


第80図 SB202出土遺物実測図 (4)

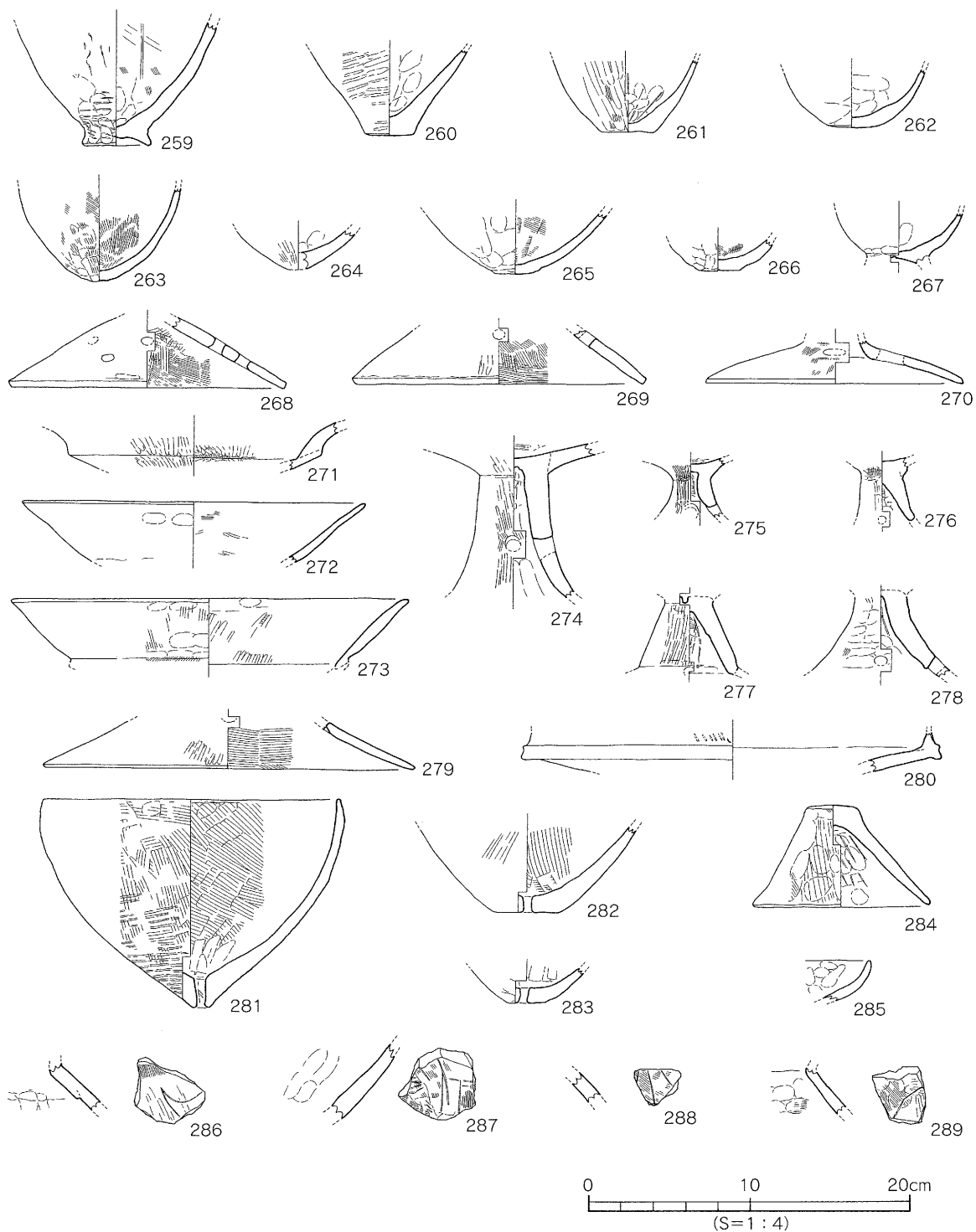


第81図 SB202出土遺物実測図 (5)

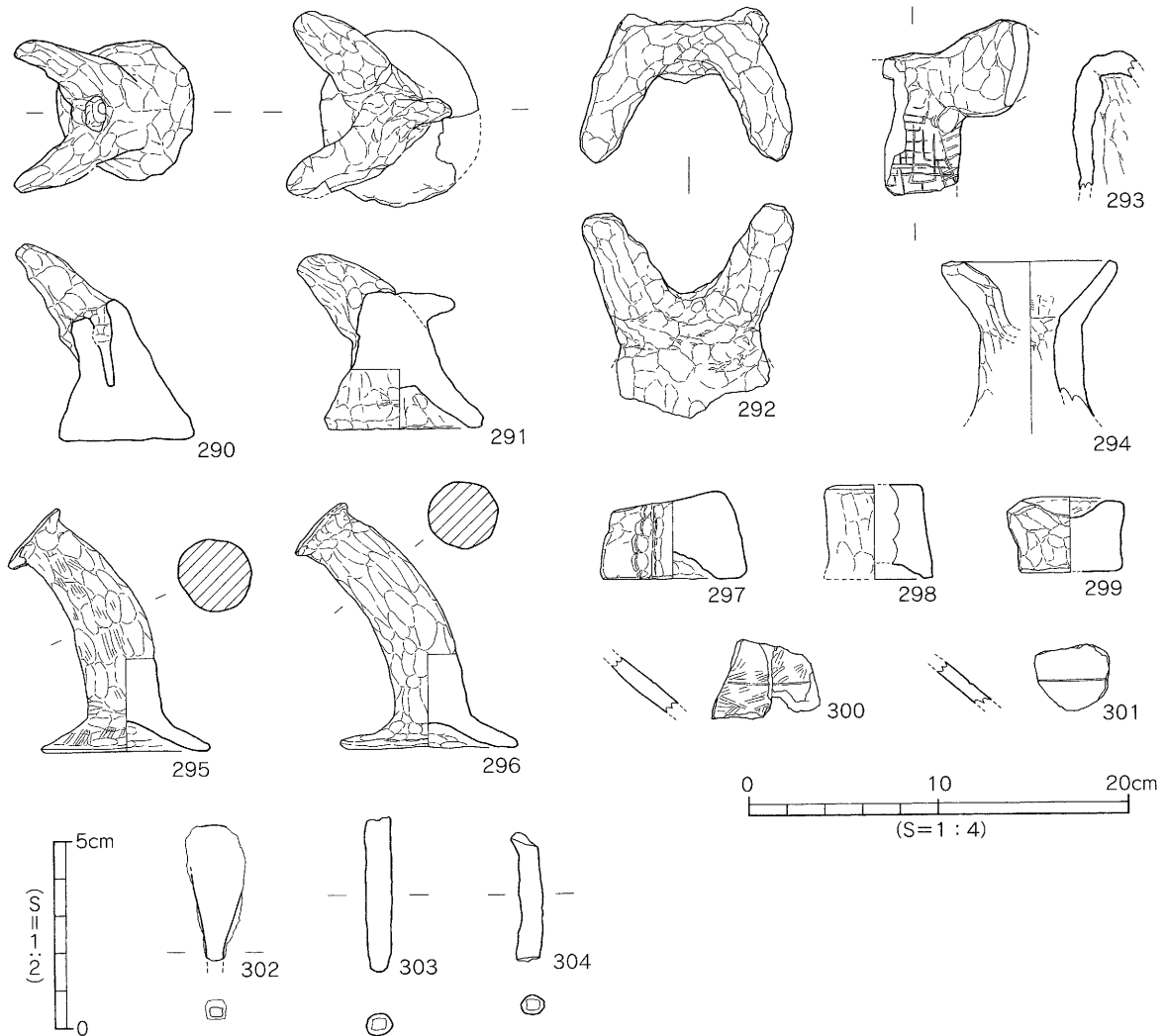
西石井遺跡 1次調査地



第82図 SB202出土遺物実測図 (6)



第83図 SB202出土遺物実測図 (7)



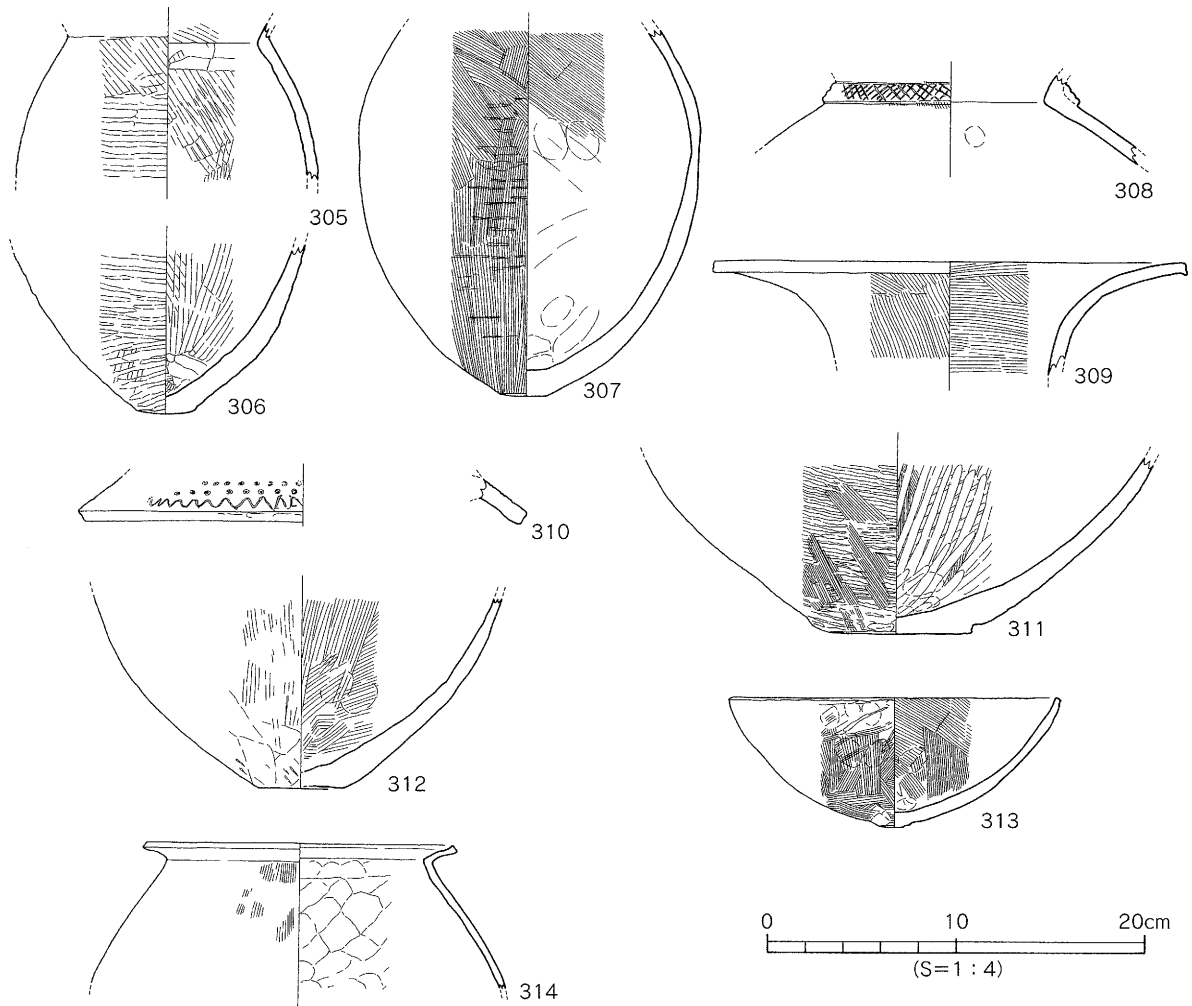
第84図 SB202出土遺物実測図 (8)

S B 206 (第93図)

S B 206は2区西部D 1区に位置し、中央部はS P 205に、東側はS B 202に、西側は柱穴に、南側と北側はトレンチに切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.12m、南北検出長1.80m、壁高は0.12~0.30m、床面積は5.6m²を測る。埋土は4層に分層される。1層黄褐色土、2層炭、3層茶褐色土、4層暗茶褐色土である。遺物は住居址埋土中より弥生土器、石器、焼土、炭化物が出土した。

出土遺物 (433~443) 433は甕、434・435は壺、436~439は鉢である。440は土器片再利用の紡錘車、441は弥生中期の甕の胴部片、442・443は弥生前期の壺である。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。



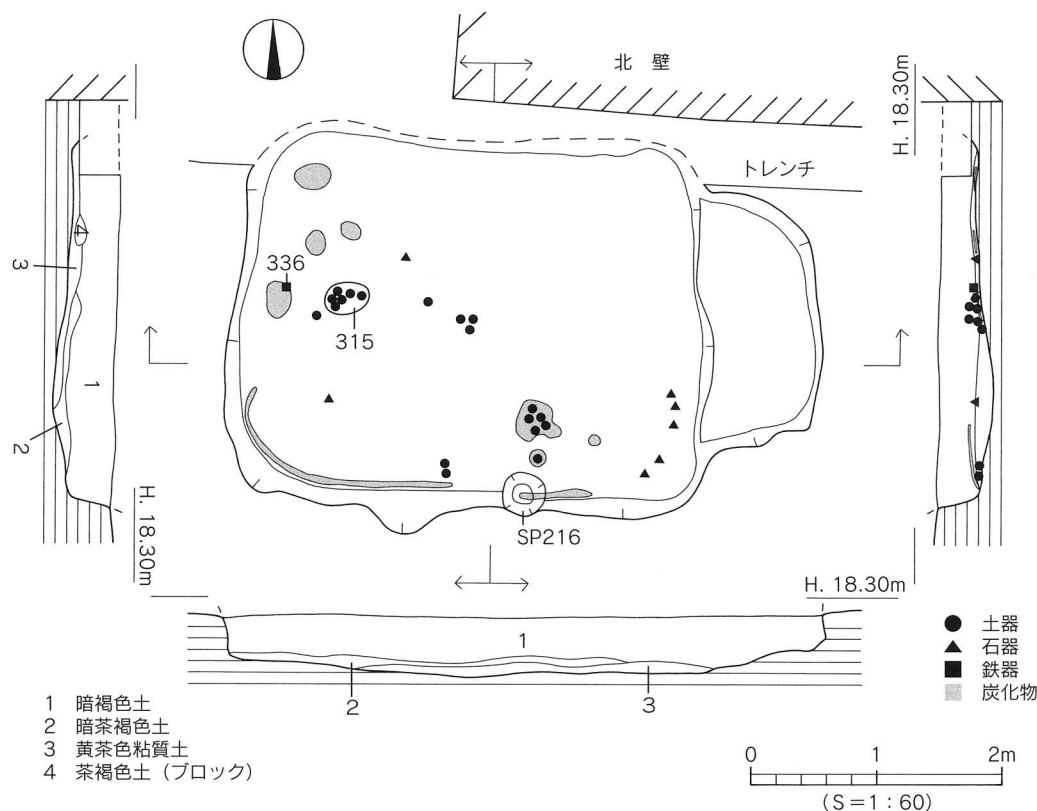
第85図 SB202・SK201出土遺物実測図 (SB202・SK201接合)

S B 301 (第94図)

S B 301は3区北西部、H 1～I 2区に位置する。東側は柱穴、南側はS K 301・柱穴・トレンチ、北側はトレンチに切れ調査区外へ続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長5.20m、南北検出長2.20m、壁高は0.04～0.32m、床面積は11.4m²を測る。埋土は9層に分層される。1層灰黄褐色土、2層褐灰色土、3層褐灰色シルトに焼土が混じるもの、4層炭、5層炭と焼土の混じるもの、6層褐灰色シルトに浅黄色土が混じるもの、7層褐灰色シルトに灰白色シルトが混じるもの、8層焼土、9層褐灰色シルトに焼土と炭が混じるものである。壁体から内側に向けて幅60～100cmのベッド状の高まりがあり、さらに住居址中央部には土坑状の凹みをもつ。住居址床面にてピット2基 (S P ①・②) を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径0.15～0.25m、深さ0.05～0.10mを測る。ピット埋土は褐灰色土である。遺物は住居址埋土中より、弥生土器、石器、炭化物が出土した。

出土遺物 (444～453) 444・445は甕、446は壺、447～449は鉢で、450・451は近畿系甕である。452は鉄器片、453は石器である。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。



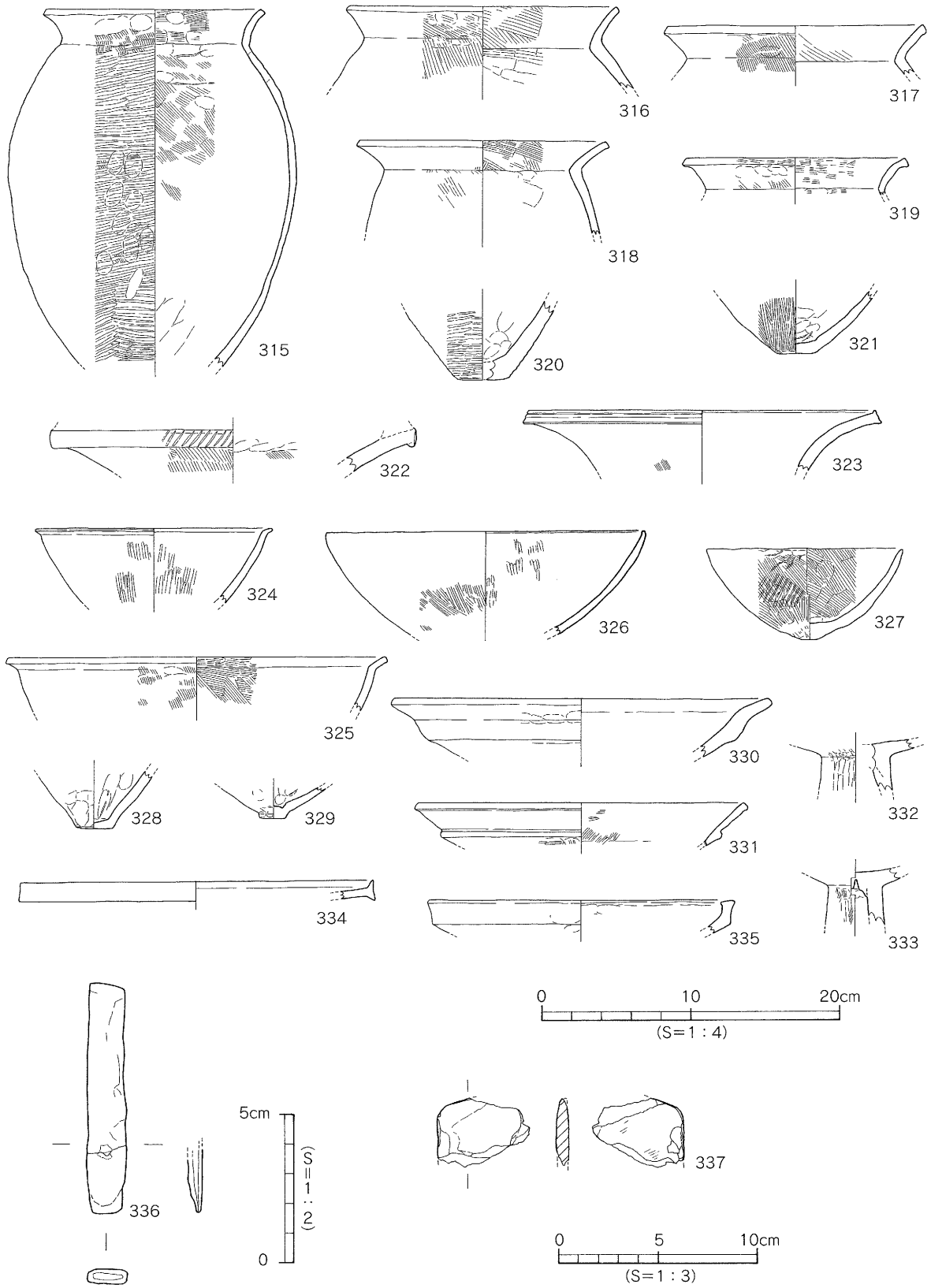
第86図 SB203測量図

S B 303 (第95・96図、図版17)

S B 303は3区東部、I 1・2区に位置し、東側と西側は柱穴に、北側は柱穴とS K 303に切れ、南側は調査区外へ続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は方形を呈し、規模は東西長4.90m、南北長5.00m、壁高は0.03~0.25m、床面積は24.5㎡を測る。埋土は9層に分層される。1層灰褐色土、2層灰黄褐色土、3層褐灰色シルト(硬質)に灰白色砂質土が混じるもの、4層灰白色粘土、5層褐灰色シルトに浅黄色砂質土、6層褐灰色シルト(硬質)ブロック、7層黒褐色土に炭化物が混じるもの、8層灰白色土、9層褐灰白色土である。壁体から内側に向けて幅20~50cmのベッド状の高まりがあり、さらにその内側には一辺2.6~2.9mの方形状の凹みをもつ。住居址床面にて炉址とピット5基を検出した。炉址は、住居址床面中央部で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は東西長1.02m、南北長0.48m、深さ0.10mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土に炭化物が混じるものである。主柱穴はS P ①~④の4基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径0.20~0.35m、深さ0.40~0.65mを測る。柱穴掘り方埋土は褐灰色シルトである。遺物は住居址埋土中より、弥生土器、石器、焼土、炭化物が出土した。

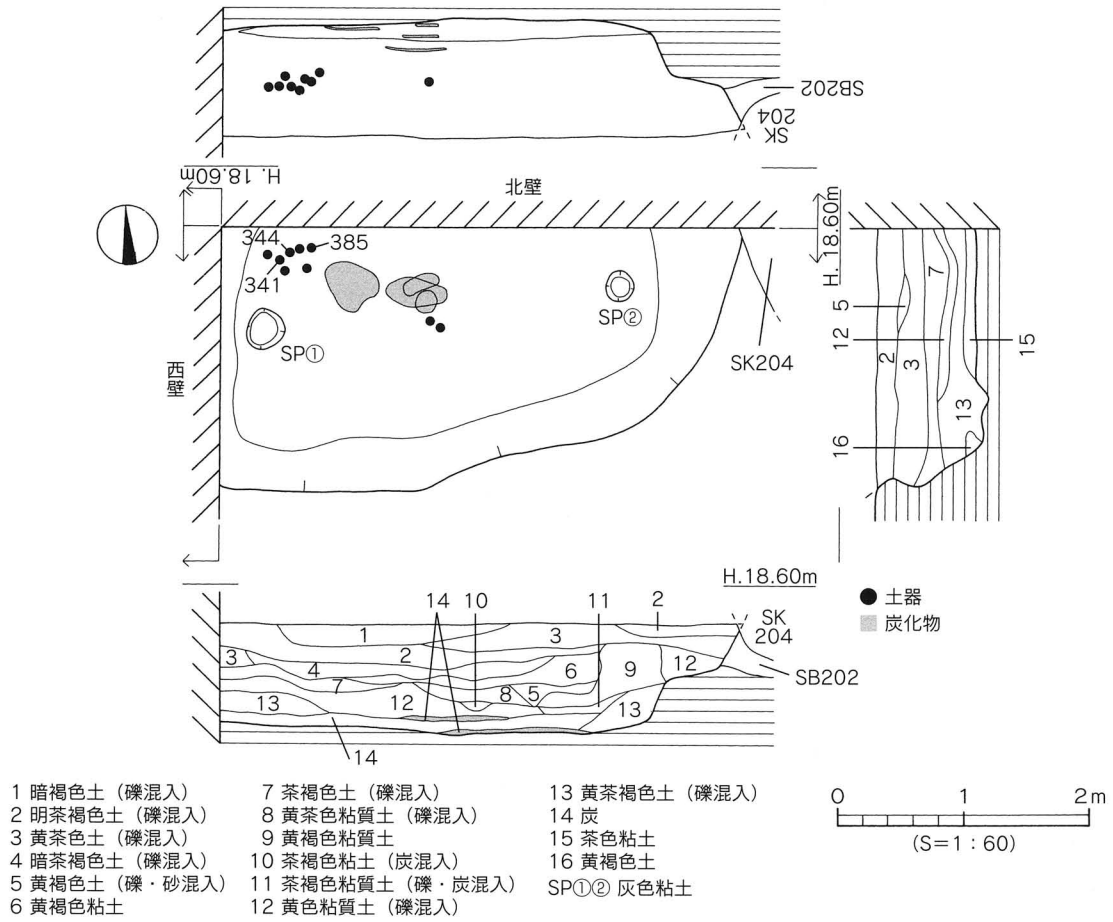
出土遺物(454~475) 454~458は甕、459~463は壺、464~467は鉢、468・469は支脚、470・471はミニチュア土器である。472~474は弥生中期土器であり、472・473は貝殻文、474は吉備の高坏である。475は石器である。

時期：出土遺物から弥生時代後期後半とする。



第87図 SB203出土遺物実測図

西石井遺跡 1次調査地

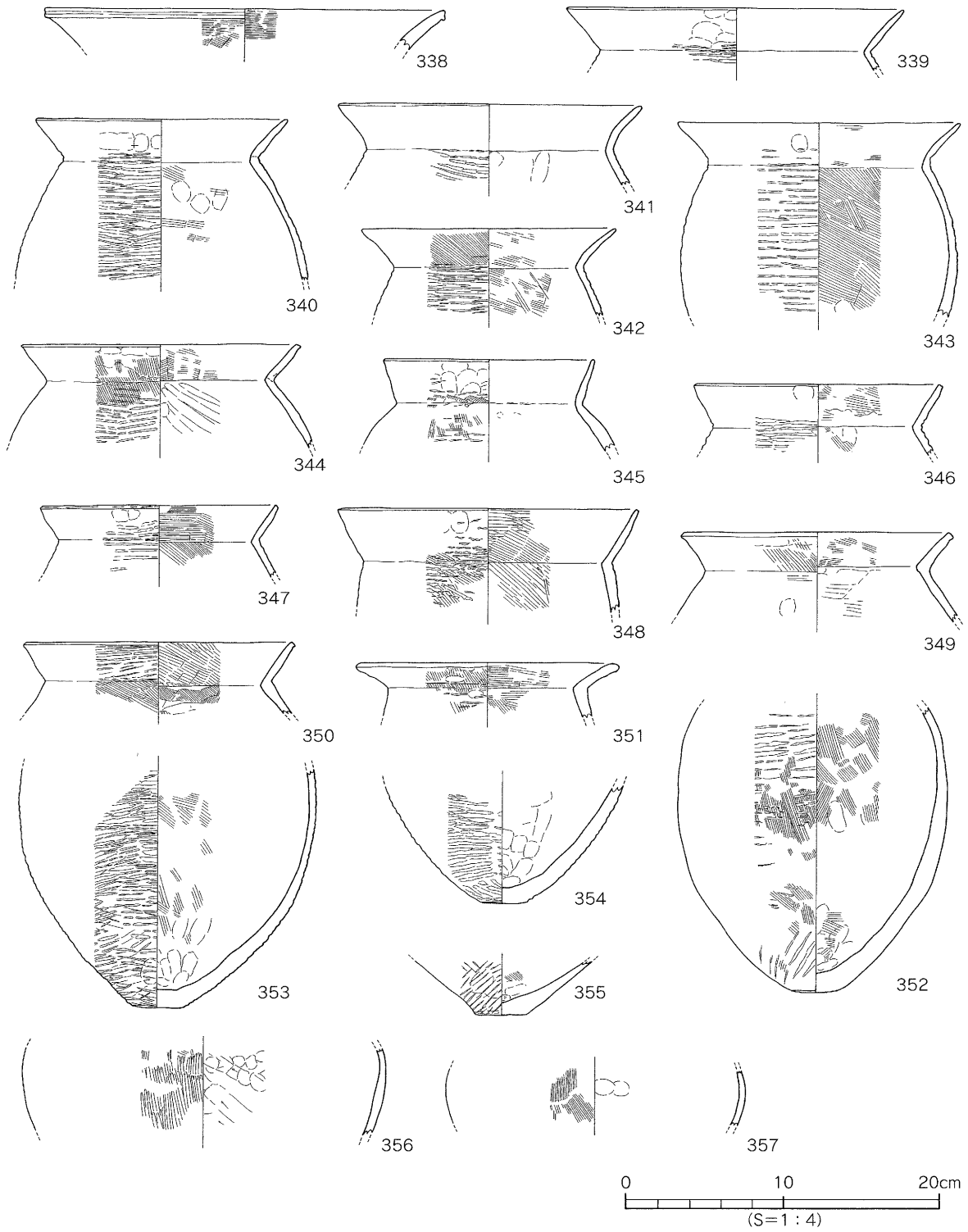


第88図 SB205測量図

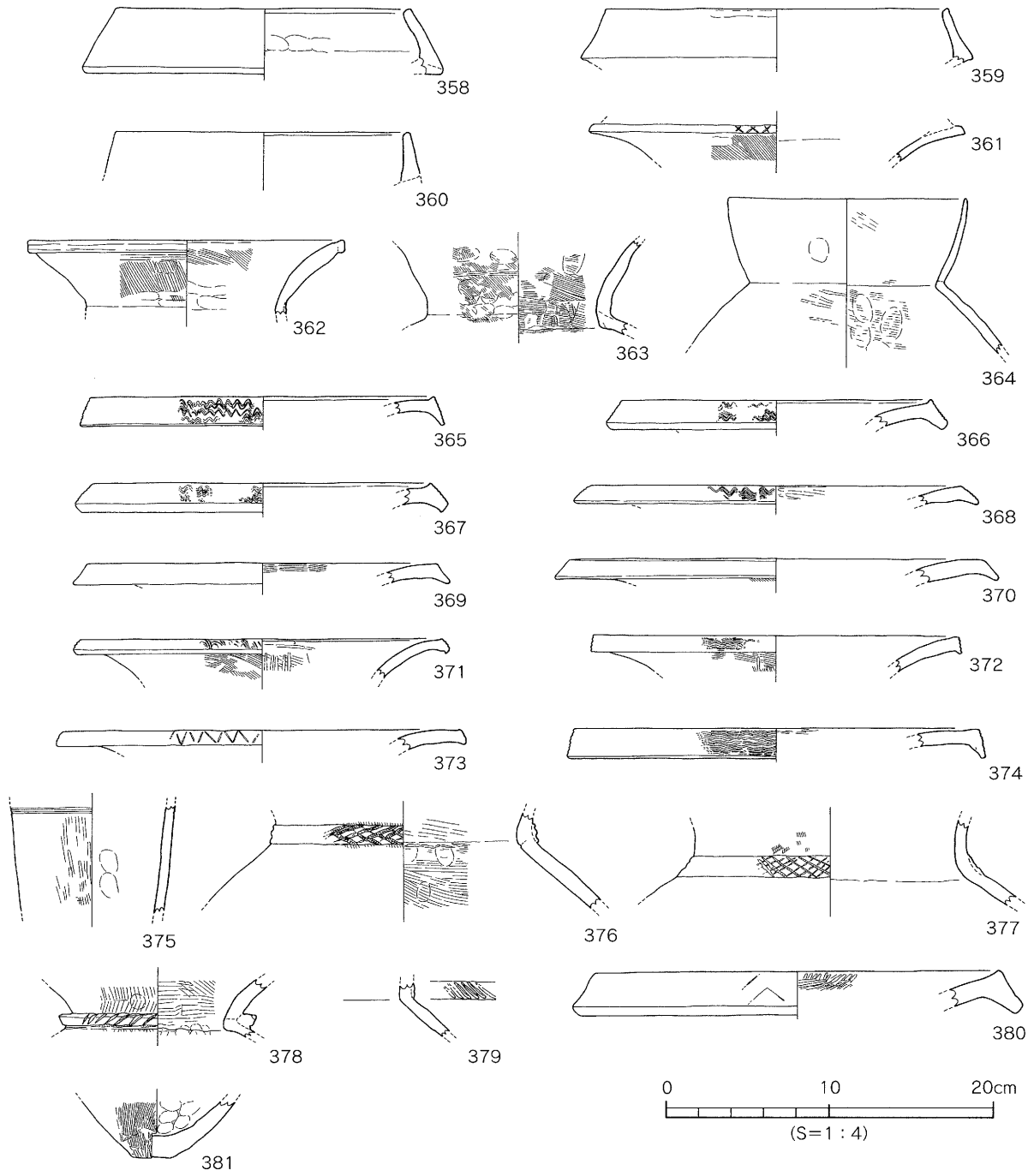
SB401 (第97図)

SB401は4区中央部南側、N1・2区に位置し、南側は調査区外へ続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.50m、南北検出長1.40m、壁高は0.02~0.24m、床面積は4.9m²を測る。埋土は暗褐色土に灰色土が混じるものである。遺物は住居址埋土中より弥生土器が少量出土したが、実測資料はない。

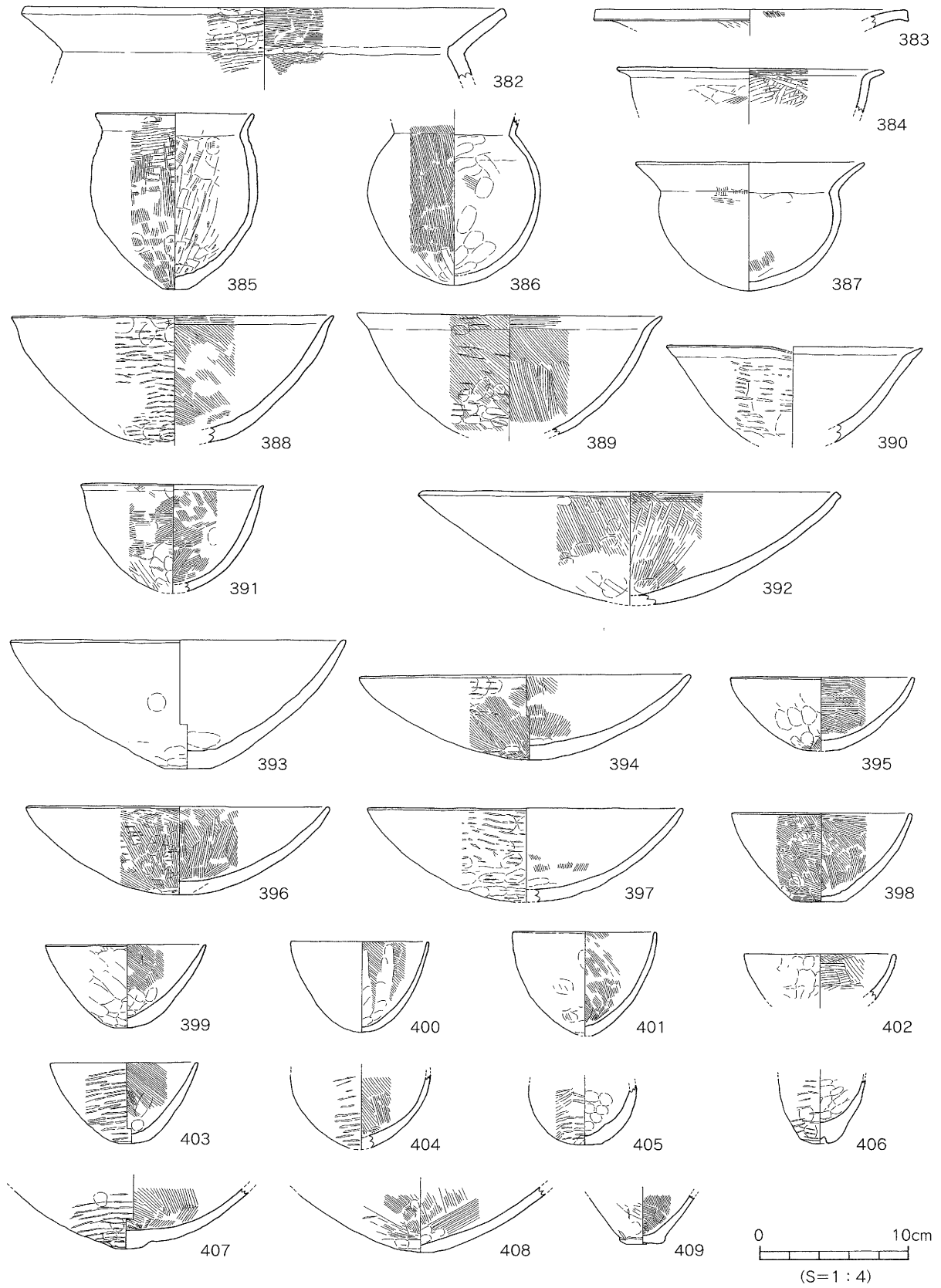
時期：出土遺物から弥生時代後期後半とする。



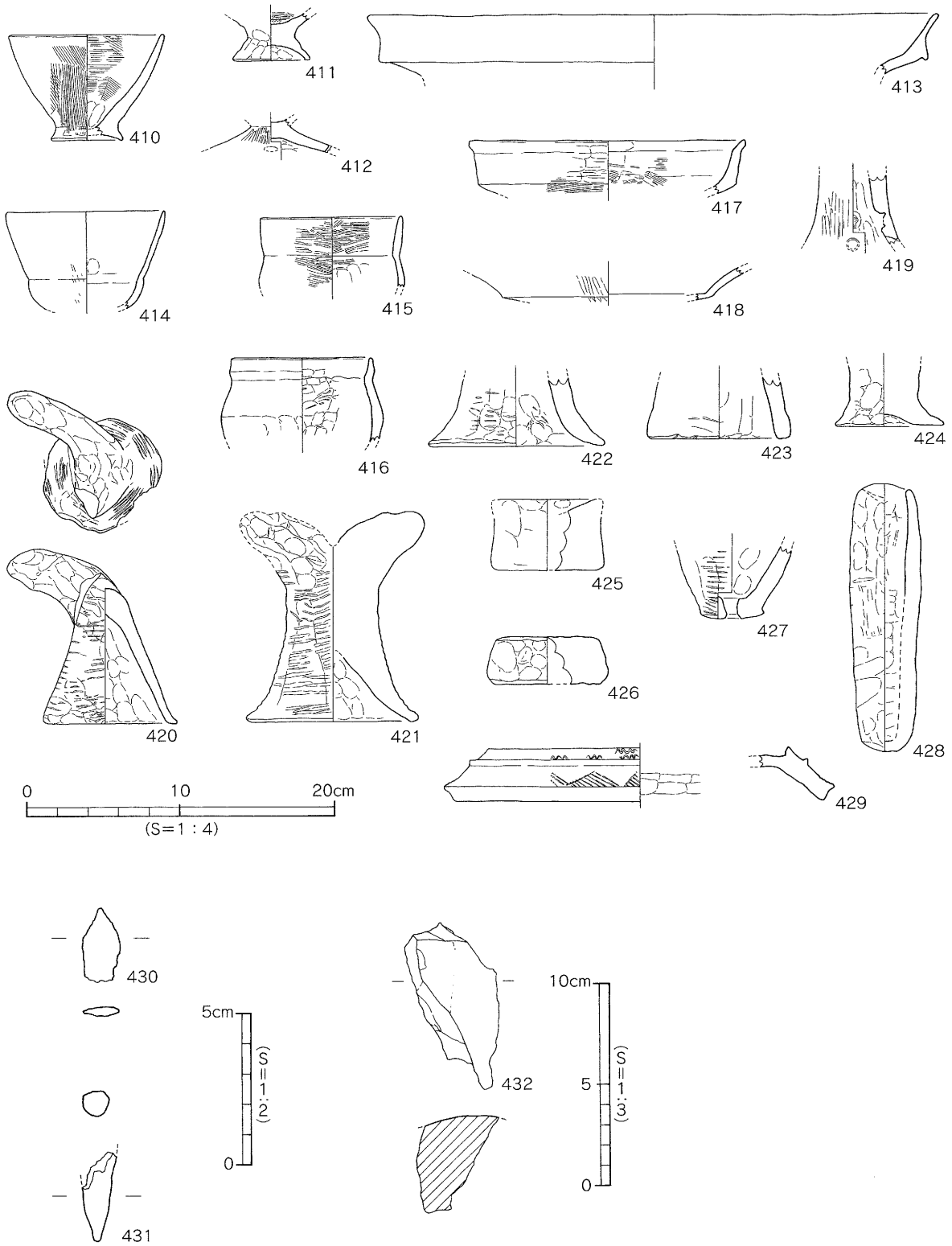
第89図 SB205出土遺物実測図(1)



第90図 SB205出土遺物実測図 (2)

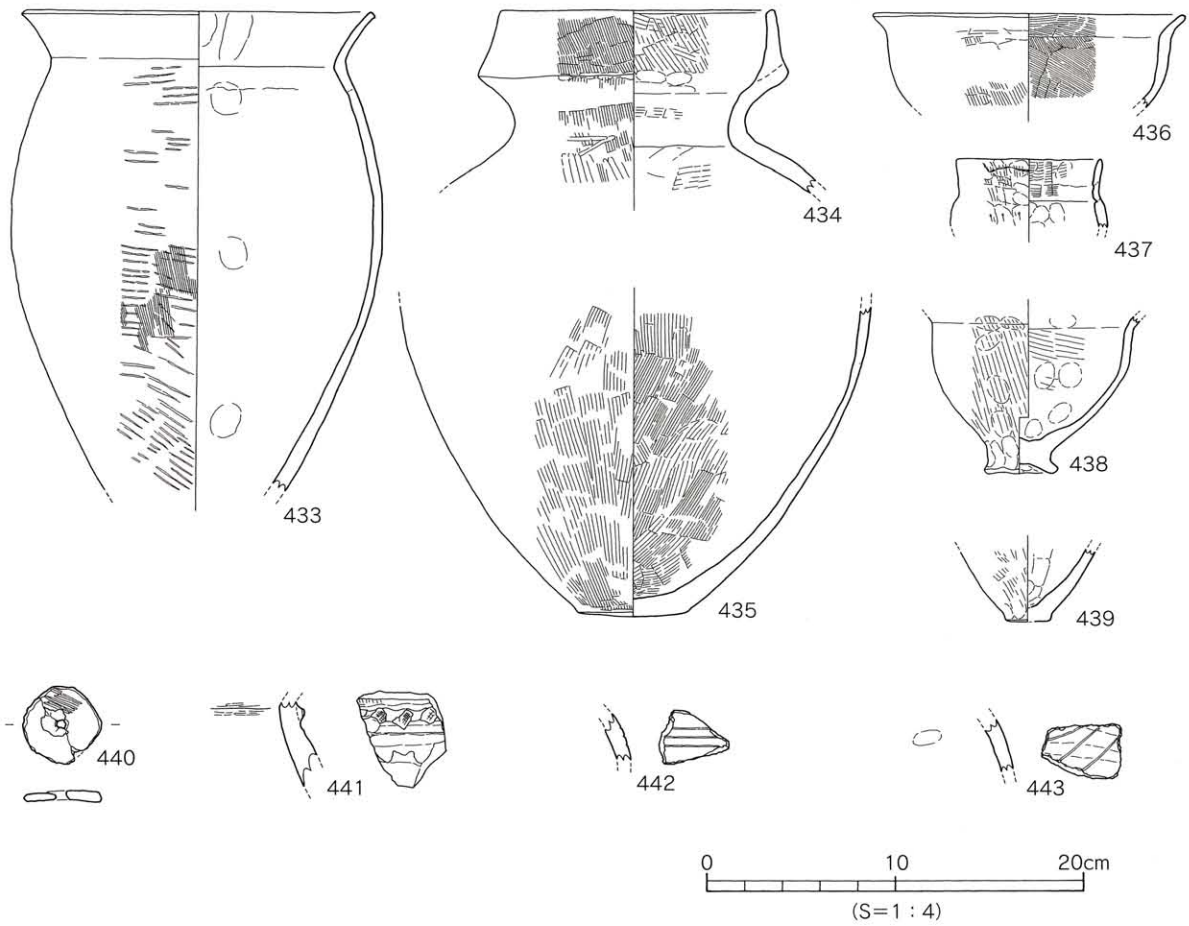
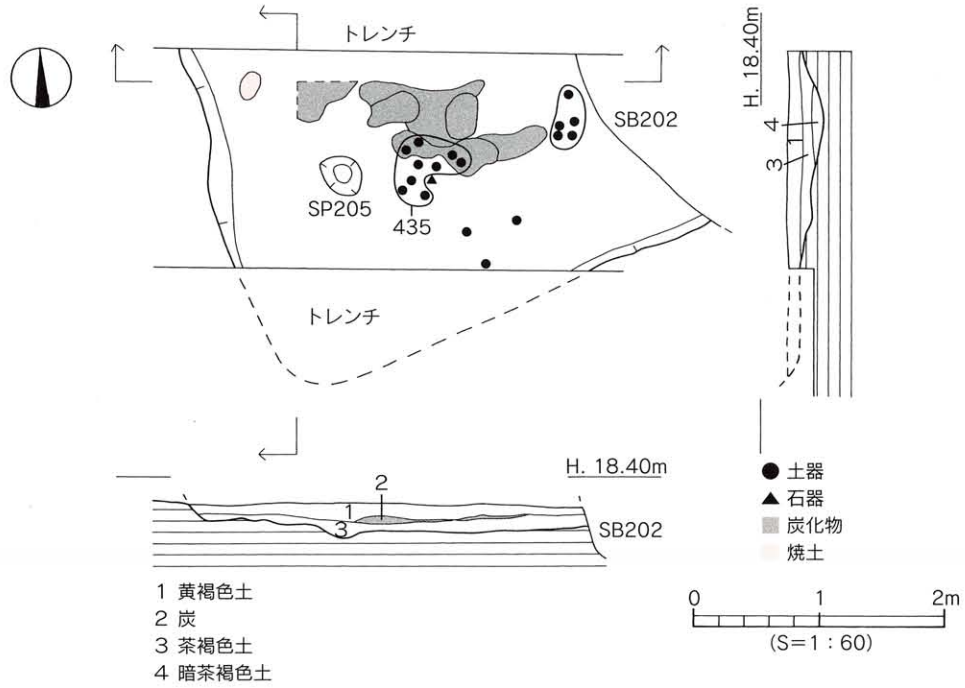


第91図 SB205出土遺物実測図 (3)



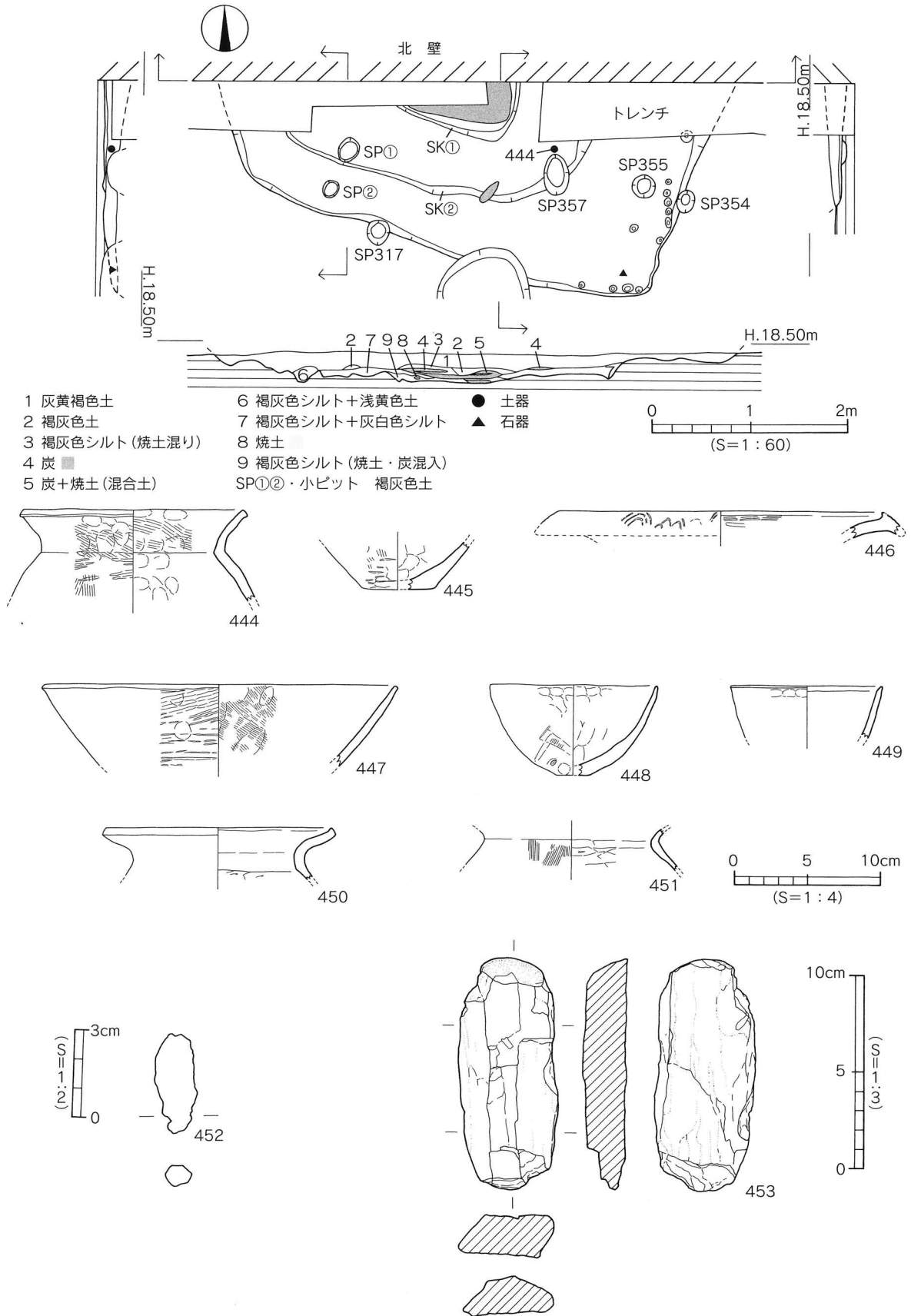
第92図 SB205出土遺物実測図 (4)

弥生時代の遺構と遺物



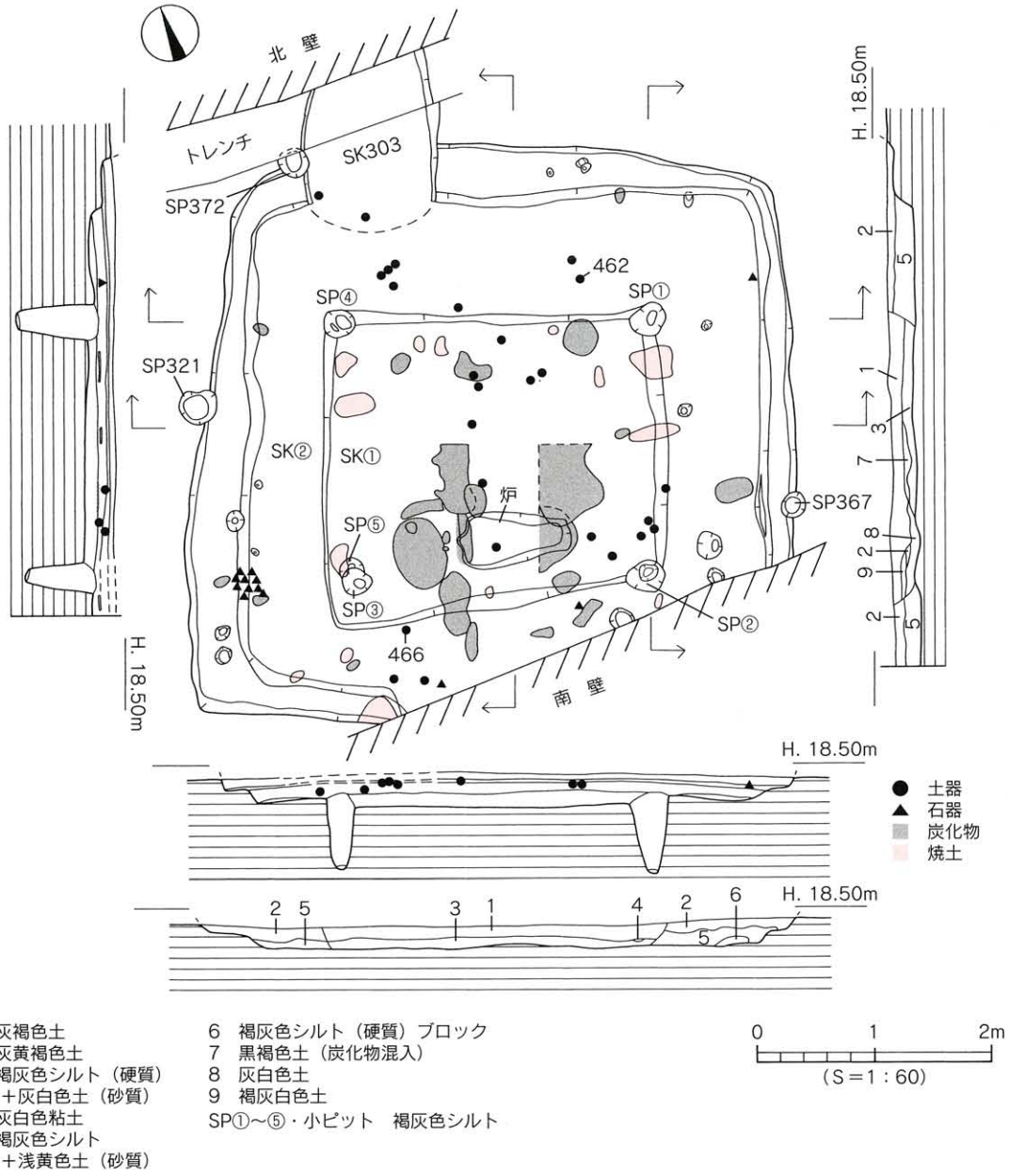
第93図 SB206測量図・出土遺物実測図

西石井遺跡 1次調査地



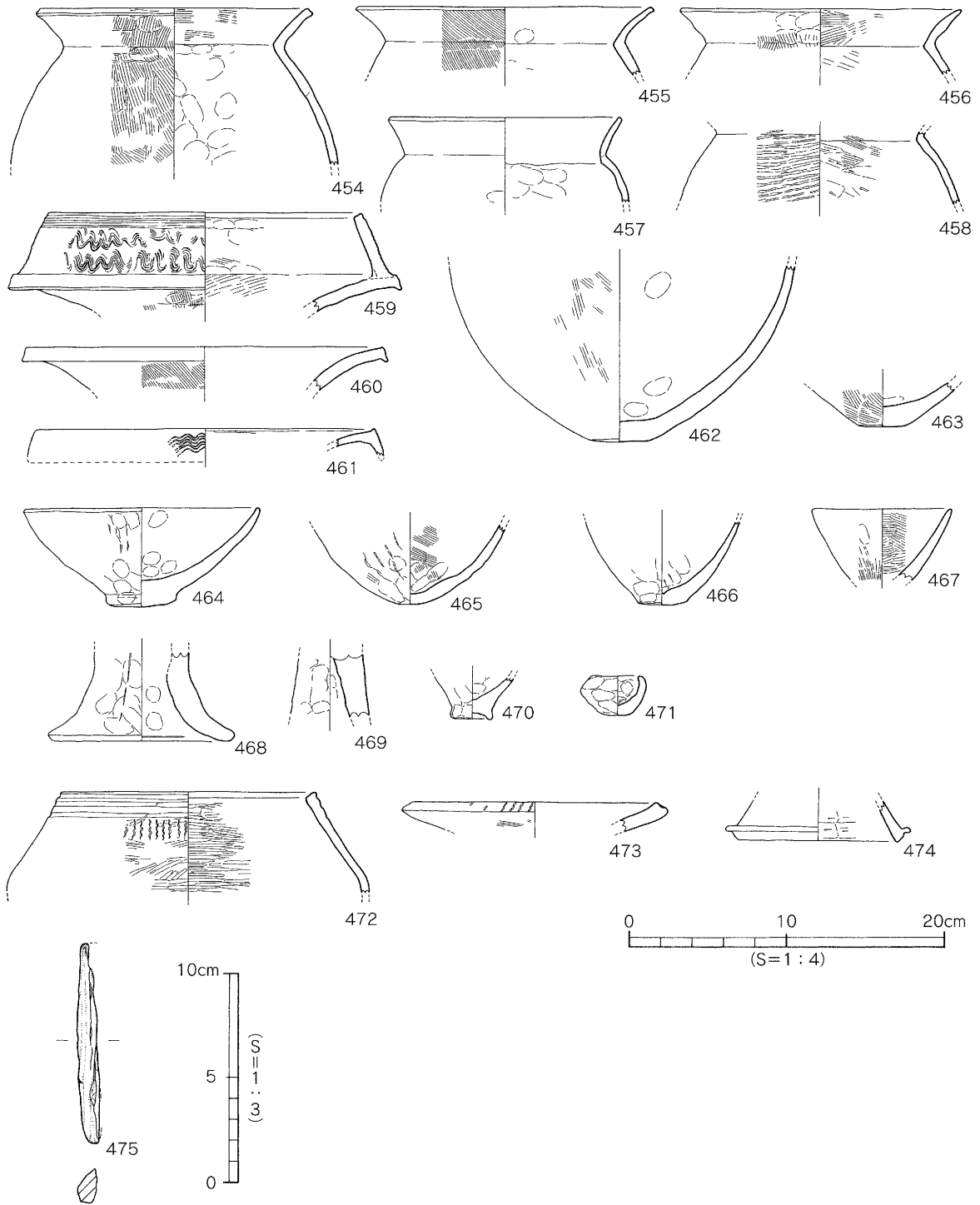
第94図 SB301測量図・出土遺物実測図

弥生時代の遺構と遺物

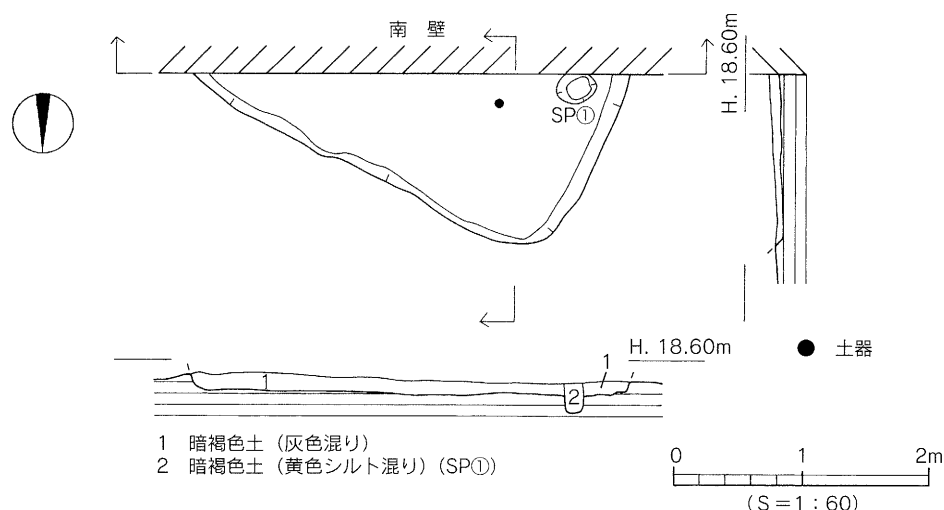


第95図 SB303測量図

西石井遺跡 1次調査地



第96図 SB303出土遺物実測図



第97図 SB401測量図

(2) 溝

S D202 (第98・99図)

S D202は2区北東部、E 2～G 2区に位置し、南西側はS D201に切れ、北東端は調査区外へ続く。第VI①層上面で検出した。規模は検出長22.90m、幅0.64～1.04m、深さ0.14～0.31mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。溝底面は北東部から南西部に向けて緩傾斜をなす(比高差8cm)。遺物は埋土中より、弥生土器片と石器が出土した。

出土遺物(476～481) 476は甕、477～479は高坏、480・481は石器である。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。

S D205 (第100図)

S D205は2区北東部、G 1区に位置し、北側は調査区外へ続く。第VI①層上面で検出した。規模は検出長1.20m、幅0.64～0.88m、深さ0.04～0.36mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。溝底面は、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物(482～486) 482は甕、483・484は壺、485・486は高坏である。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。

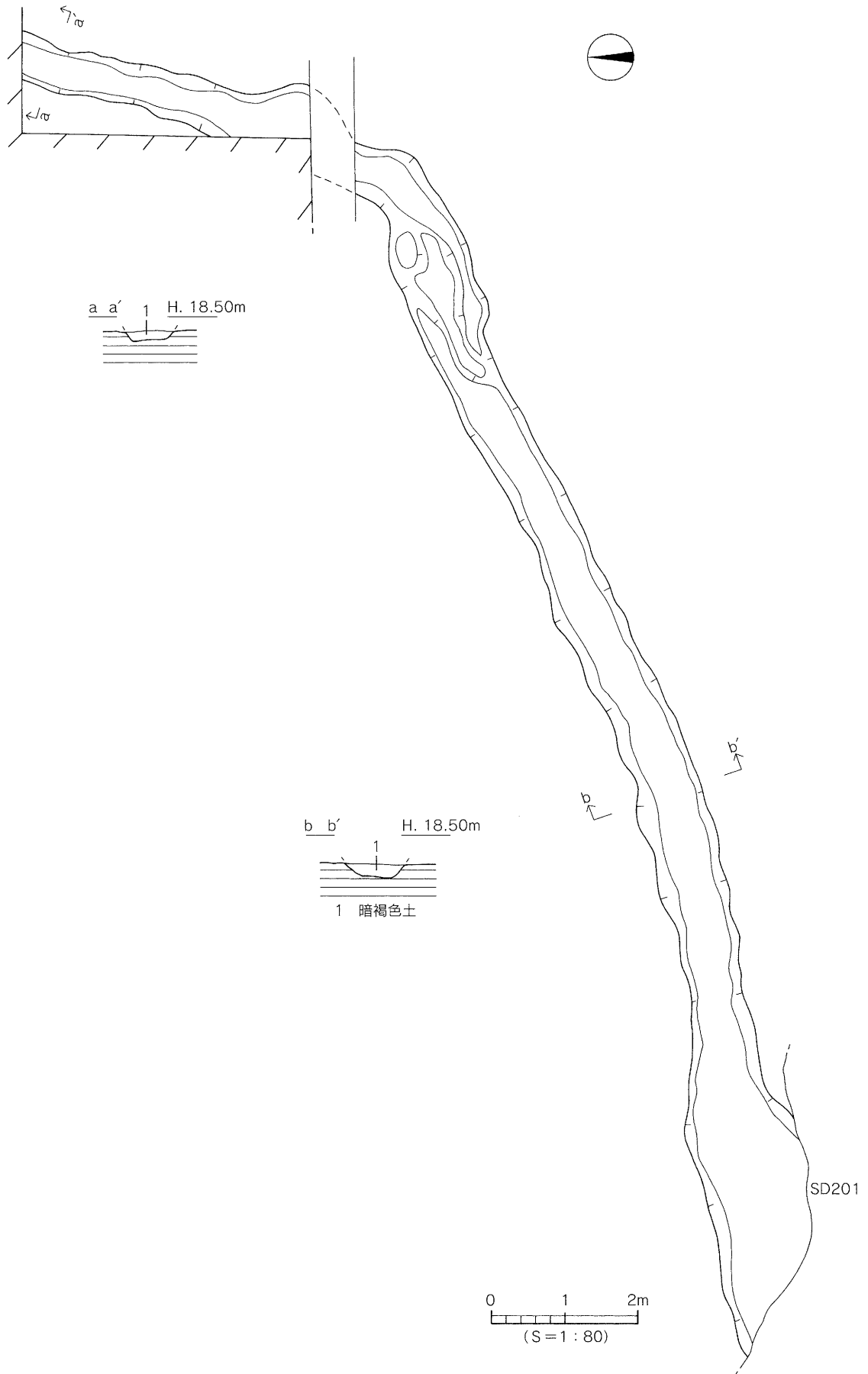
S D207 (第101図)

S D207は2区中央部、E 2～F 2区に位置し、南西側はS D201に切られる。第VI①層上面で検出した。規模は検出長14.32m、幅0.20～0.80m、深さ0.06～0.12mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土に砂が混じるものである。溝底面は北東部から南西部に向けて緩傾斜をなす(比高差5cm)。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物(487～492) 487・488は甕、489・491は鉢、490は支脚、492は器台である。

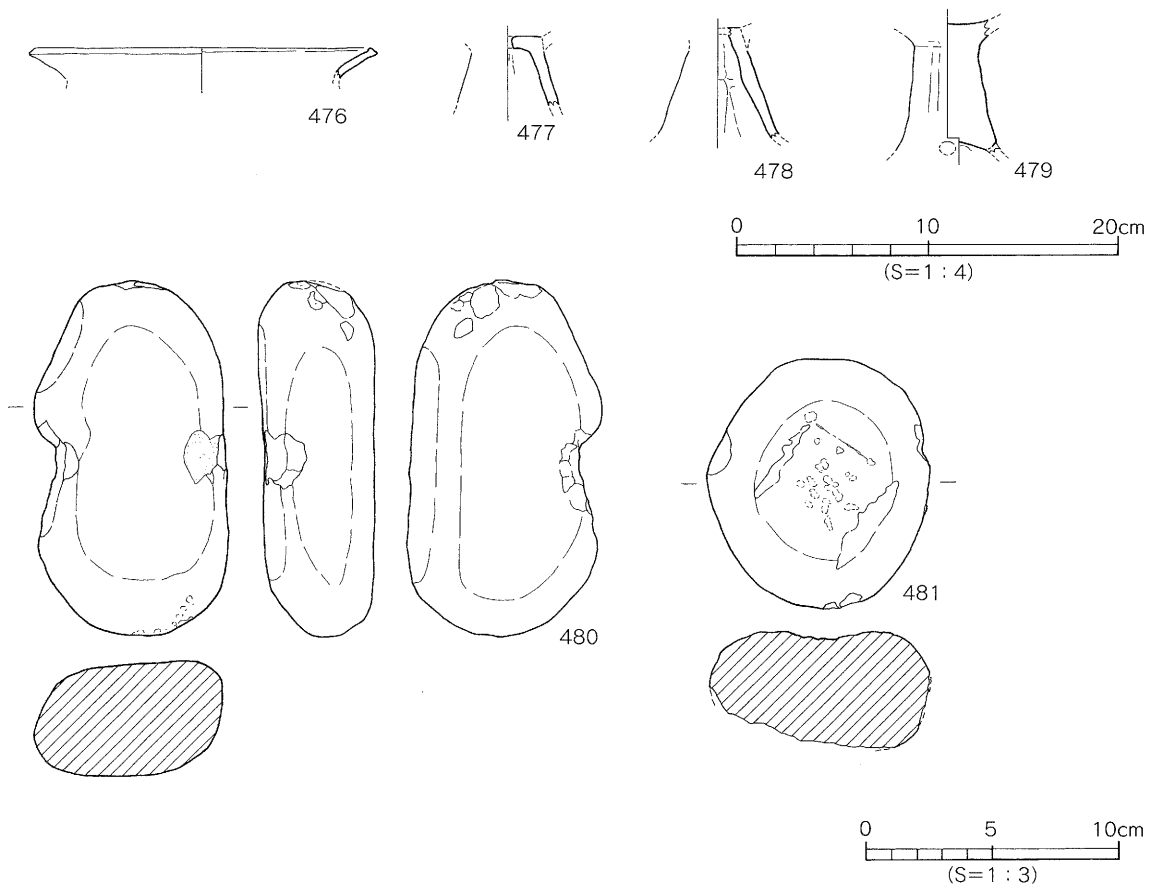
時期：出土遺物から弥生時代後期後半とする。

西石井遺跡 1次調査地

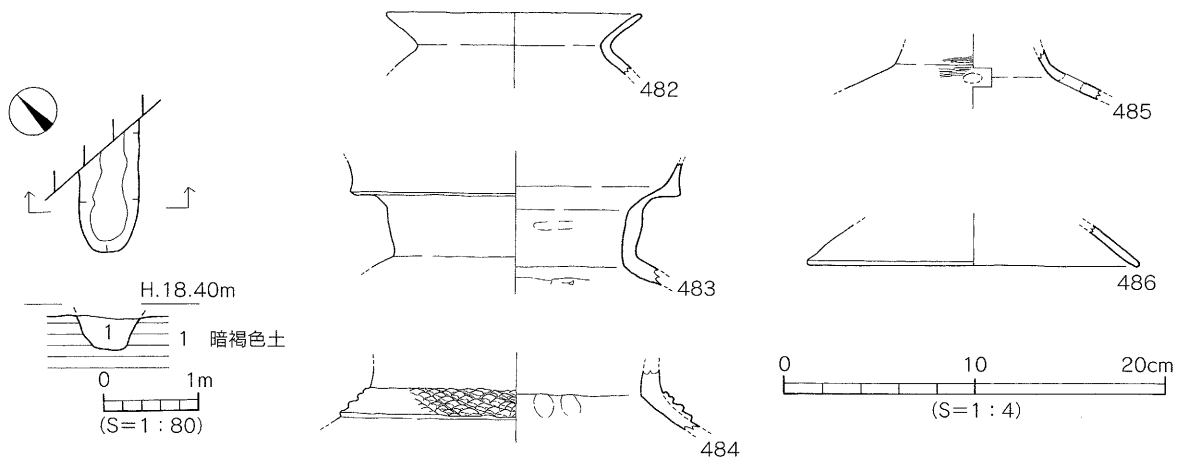


第98図 SD202測量図

弥生時代の遺構と遺物



第99図 SD202出土遺物実測図



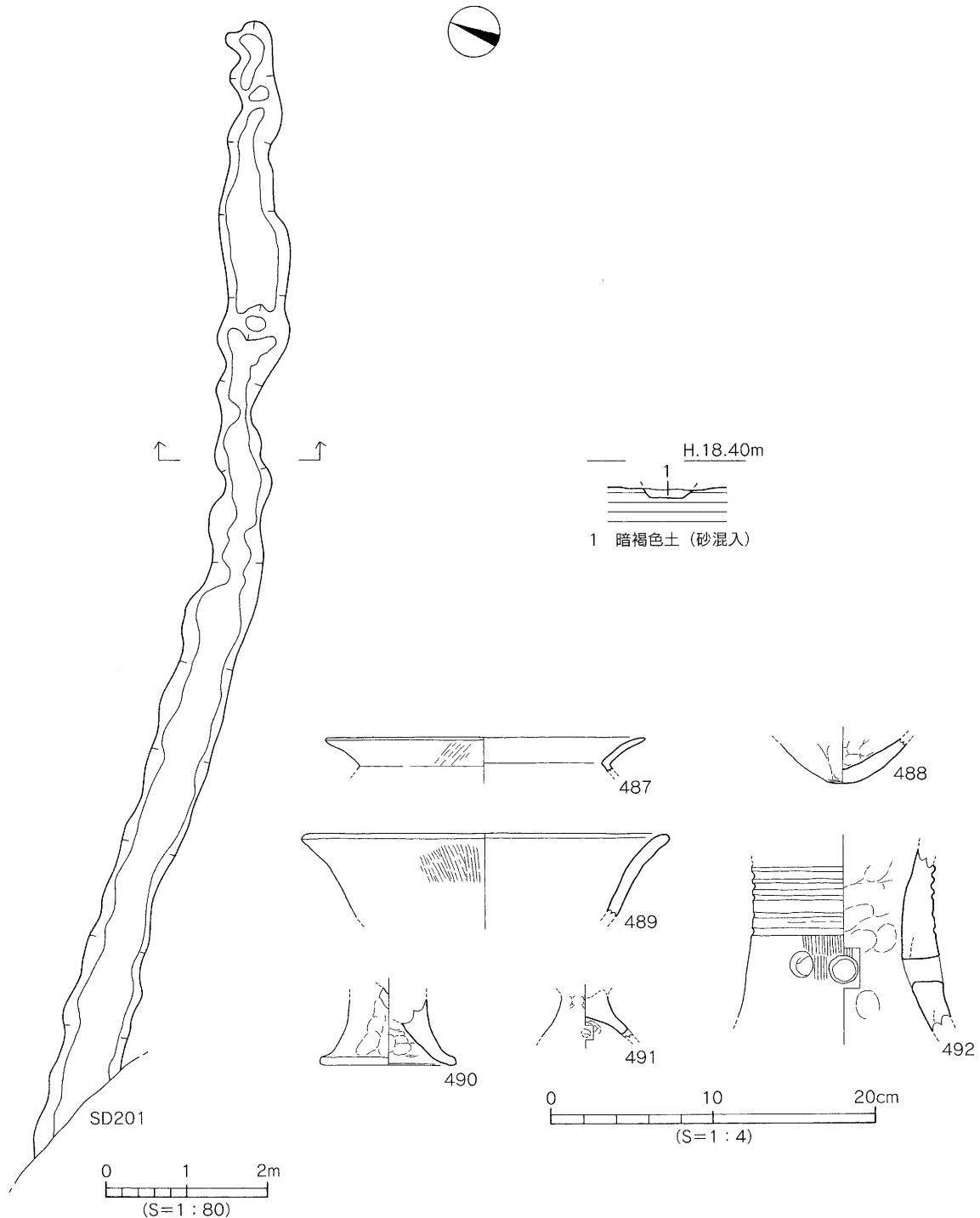
第100図 SD205測量図・出土遺物実測図

S D402 (第102図)

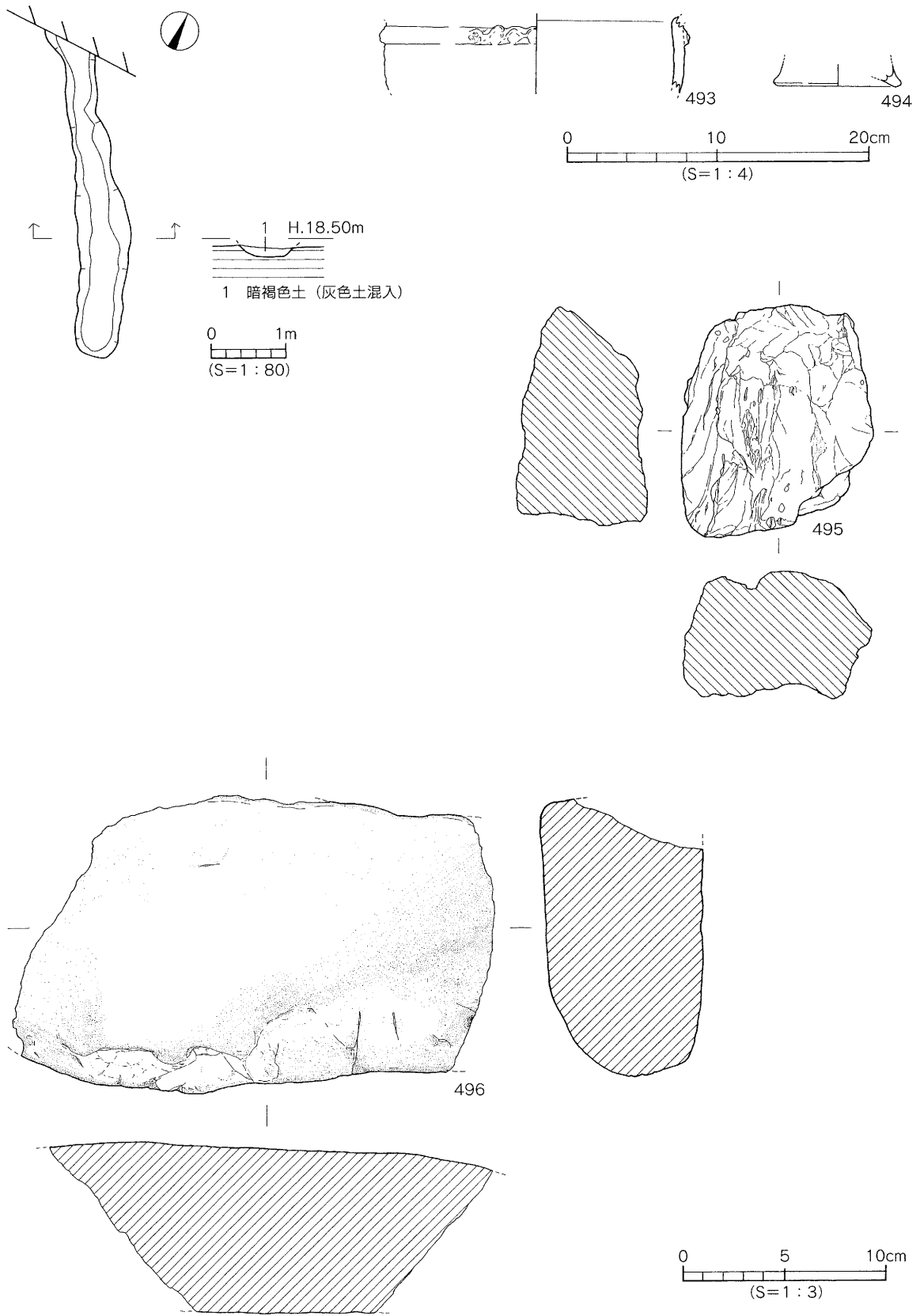
S D402は4区中央部東側、N1区に位置し、北側は調査区外へ続く。第VI①層上面で検出し、第III①層が覆う。規模は検出長4.20m、幅0.40~0.80m、深さ0.04~0.14mを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は暗褐色土に灰色土が混じるものである。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片と石器が少量出土した。

出土遺物 (493~496) 493・494は甕、495・496は石器である。

時期：出土遺物から弥生時代後期後半とする。



第101図 SD207測量図・出土遺物実測図



第102図 SD402測量図・出土遺物実測図

S D 206 (第103図)

S D 206は2区南西部、D 2区に位置し、南西側は調査区外へ続く。第VI①層上面で検出し、第III①層が覆う。規模は検出長1.20m、幅0.64~1.20m、深さ0.24~0.32mを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は2層に分層される。1層は暗褐色土に黄色土が混じるもの、2層は暗褐色土である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

時期：出土遺物と埋土から、弥生時代末とする。

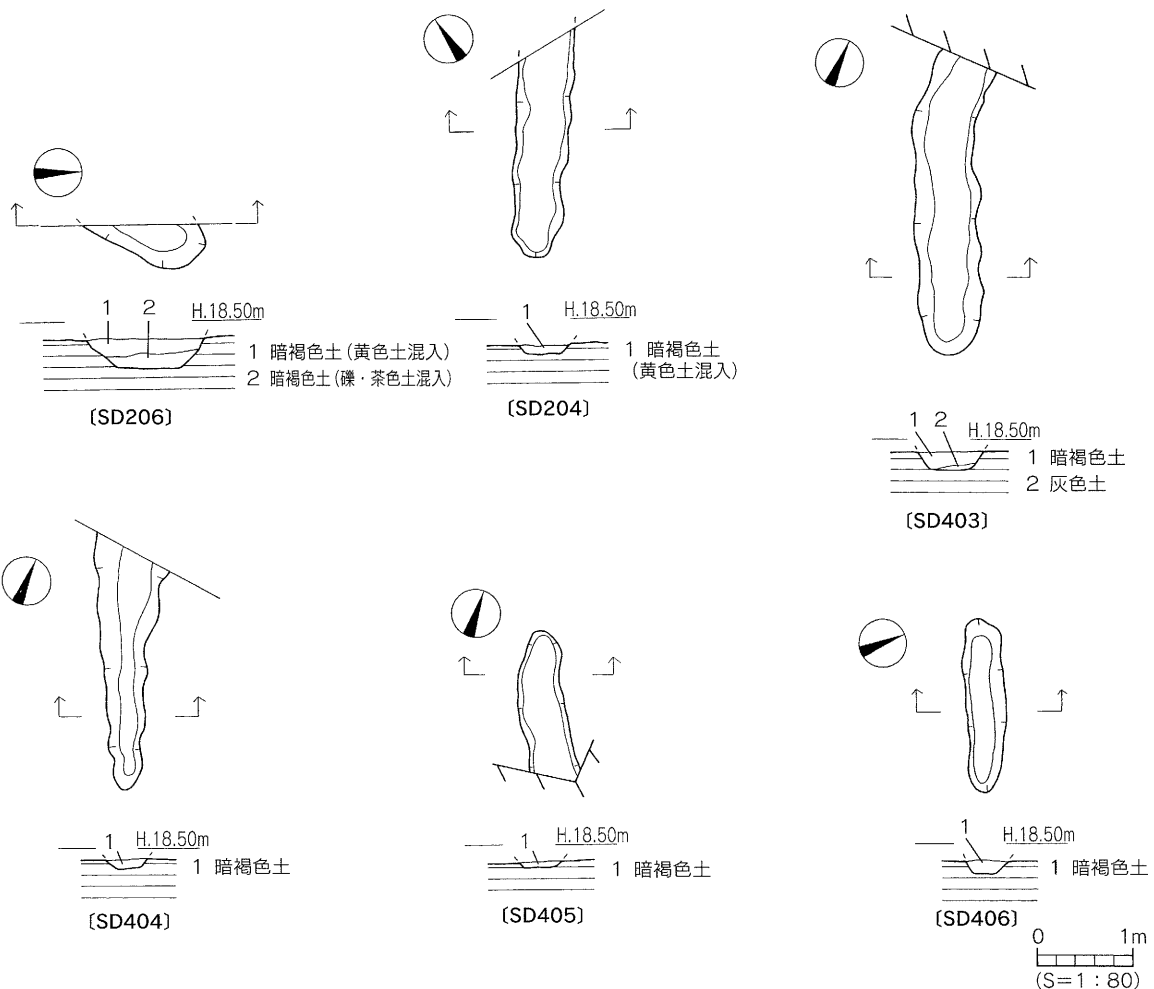
S D 204 (第103図)

S D 204は2区北東部、D 5区に位置し、北東部は調査区外へ続く。第VI①層上面で検出した。規模は検出長2.60m、幅0.40~0.65m、深さ0.03~0.05mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土に黄色土が混入するものである。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

時期：出土遺物と埋土から、弥生時代末とする。

S D 301 (第64図)

S D 301は3区南西部、H 2区に位置する。第VI①層上面で検出した。規模は検出長3.20m、幅0.20~0.50m、深さ0.04~0.10mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土に黄色土が混入するも



第103図 SD204・206・403~406測量図

のである。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

時期：出土遺物と埋土から、弥生時代末とする。

S D403 (第103図)

S D403は3区北西部、M1区に位置し、北側は調査区外へ続く。第Ⅵ①層上面で検出し、第Ⅲ①層が覆う。規模は検出長3.40m、幅0.50～0.70m、深さ0.15～0.18mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は2層に分層され、1層は暗褐色土、2層は灰色土である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

時期：出土遺物と埋土から、弥生時代後期後半とする。

S D404 (第103図)

S D404は4区北東部、N・O1区に位置し、北側は調査区外へ続く。第Ⅵ①層上面で検出し、溝S D401が一部覆う。規模は検出長3.00m、幅0.20～1.10m、深さ0.03～0.06mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

時期：出土遺物と埋土から、弥生時代末とする。

S D405 (第103図)

S D405は4区南東部、O1・2区に位置し、南側は調査区外へ続く。第Ⅵ①層上面で検出した。規模は検出長1.60m、幅0.30～0.50m、深さ0.02～0.08mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

時期：出土遺物と埋土から、弥生時代末とする。

S D406 (第103図)

S D406は4区中央部西側、M・N1区に位置する。第Ⅵ①層上面で検出した。規模は検出長1.90m、幅0.40m、深さ0.07～0.16mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が出土した。

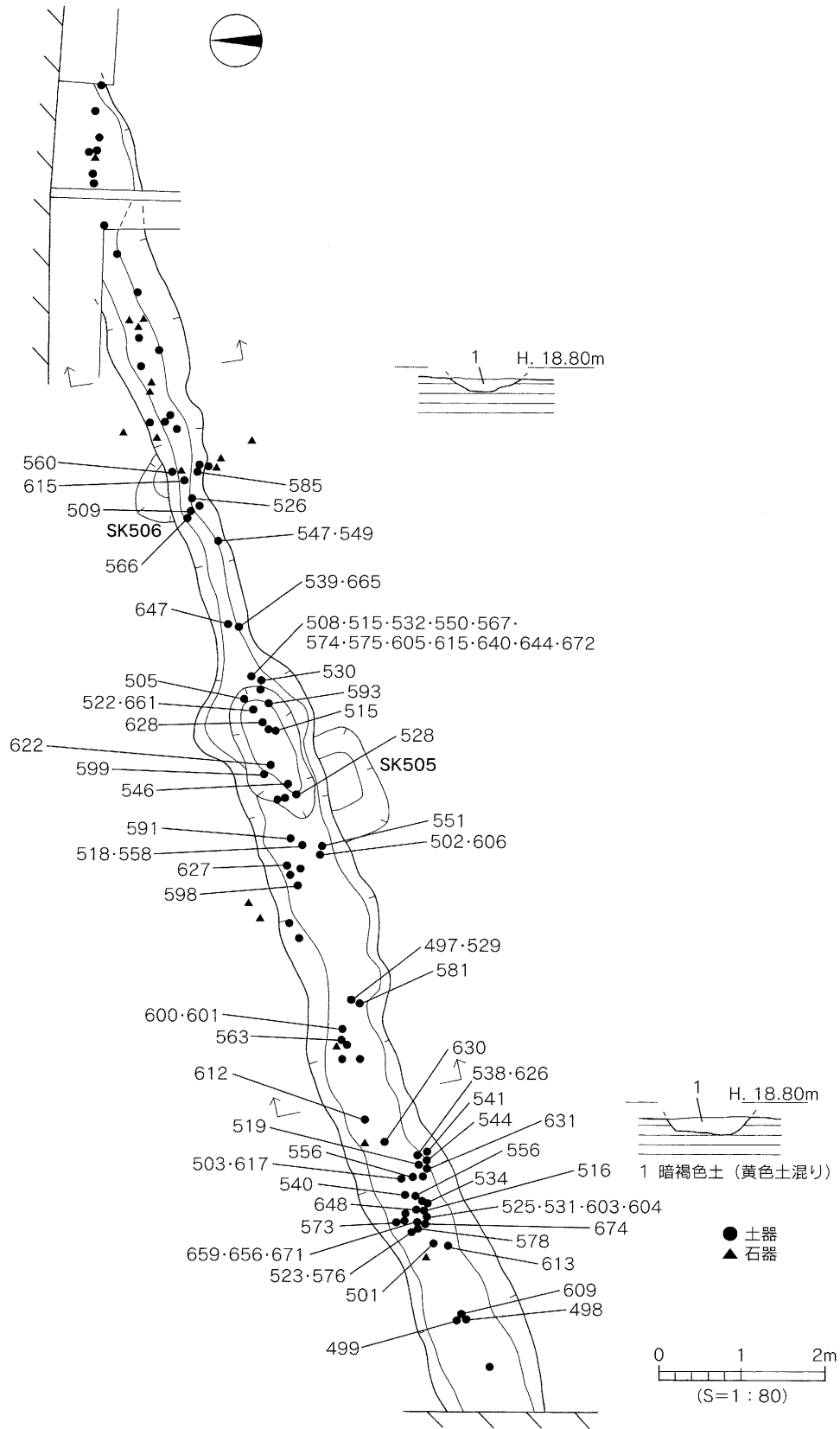
時期：出土遺物と埋土から、弥生時代末とする。

S D503 (第104～116、図版18・23)

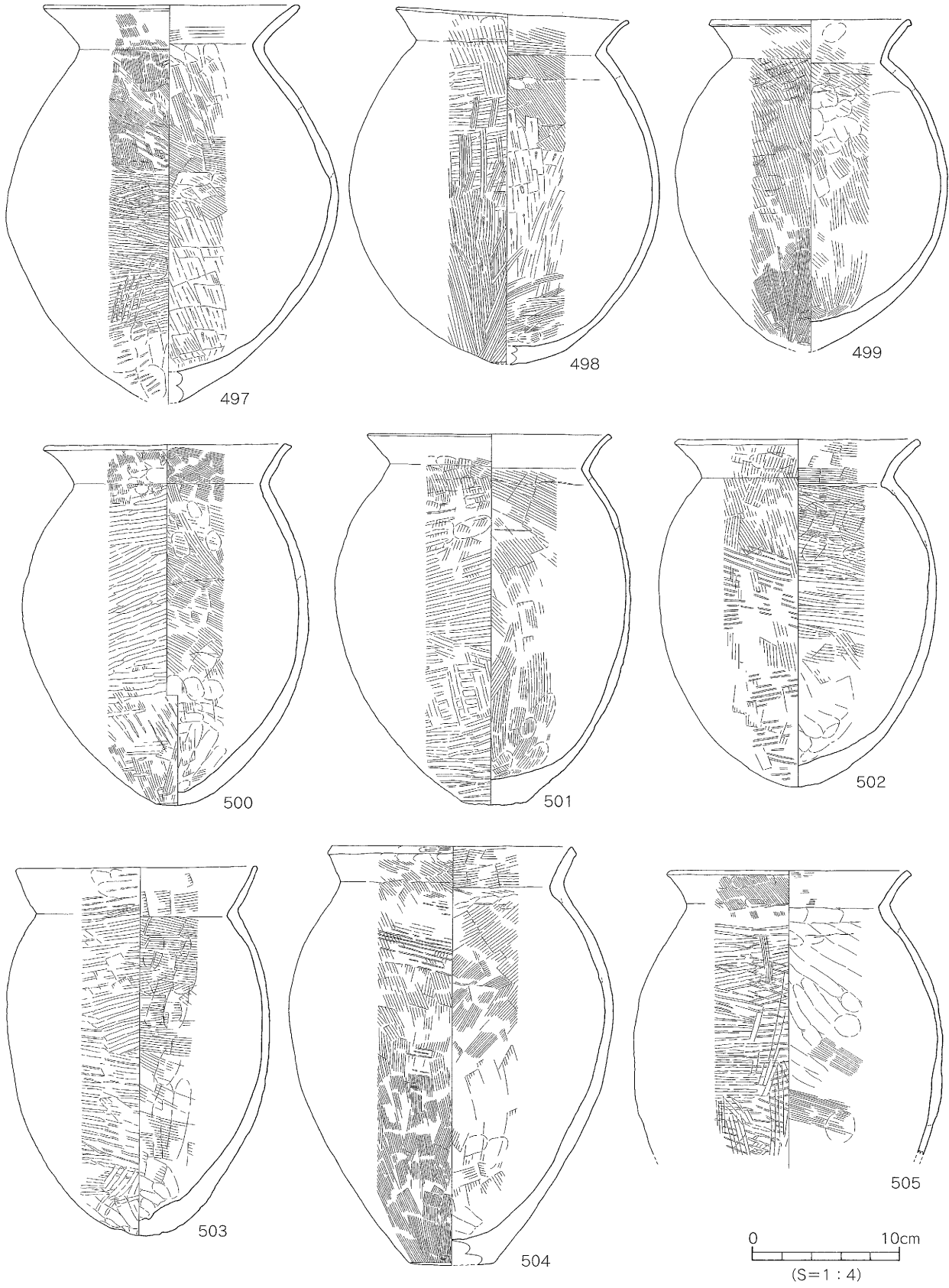
S D503は5区東部、Q1～R1区に位置する。中央部はS K505・S K506を切り、溝両端は調査区外へ続く。第Ⅵ①層上面で検出し、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長17.60m、幅0.50～1.60m、深さ0.04～0.24mを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は暗褐色土に黄色土が混じるものである。溝底面は北東部から南西部に向けて傾斜をなす(比高差10cm)。遺物は埋土中より、弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。

出土遺物(497～693) 497～551は甕で、在地系タタキ甕である。552～609は壺で、552～565は複合口縁壺である。610～630は鉢、631～640は高坏、641～644は器台、645～655は支脚である。656は焼成後穿孔、657は焼成前穿孔で、658は製塩土器の可能性があり、659は讃岐の下川津B類土器、660は

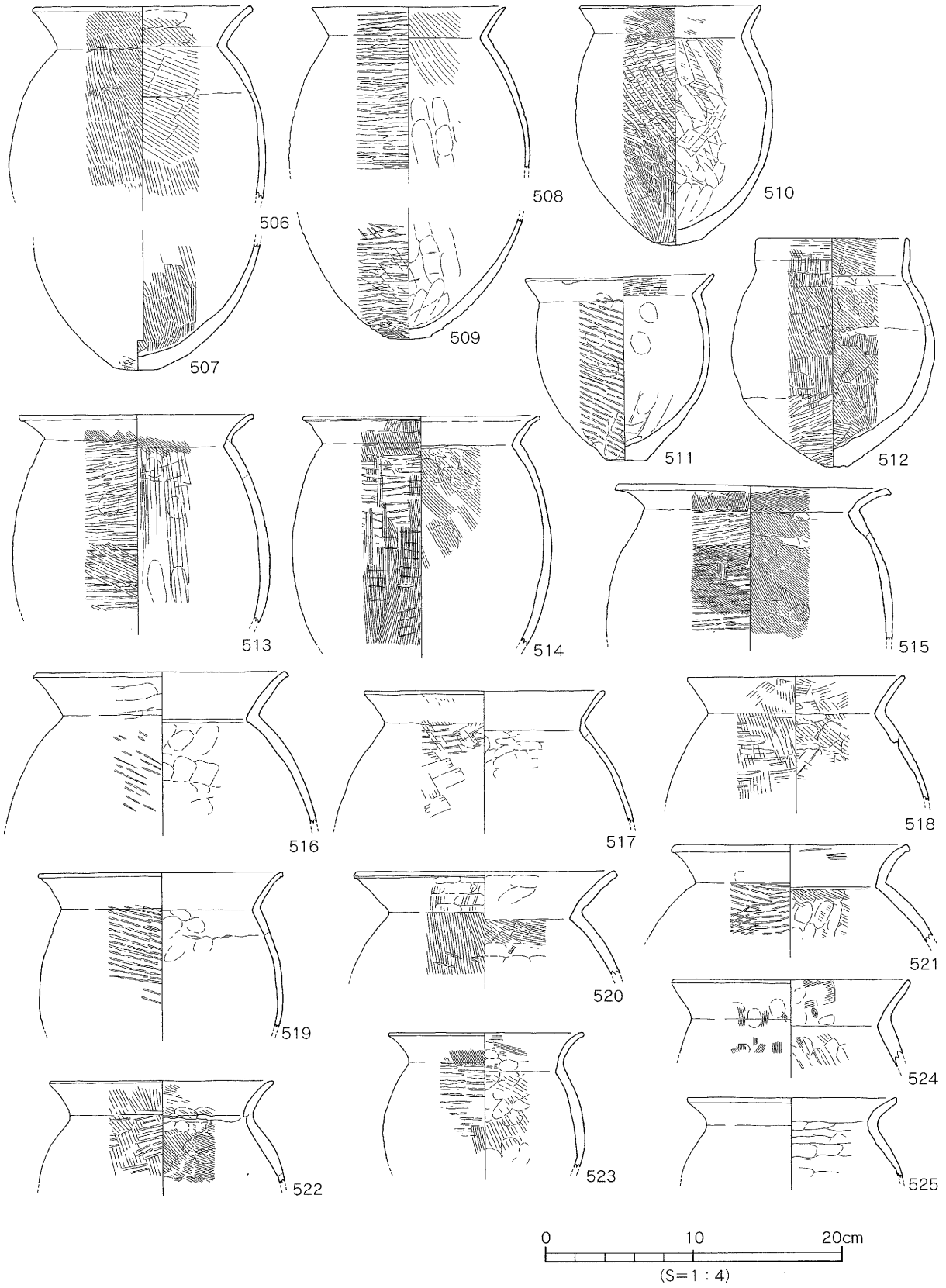
西石井遺跡 1次調査地



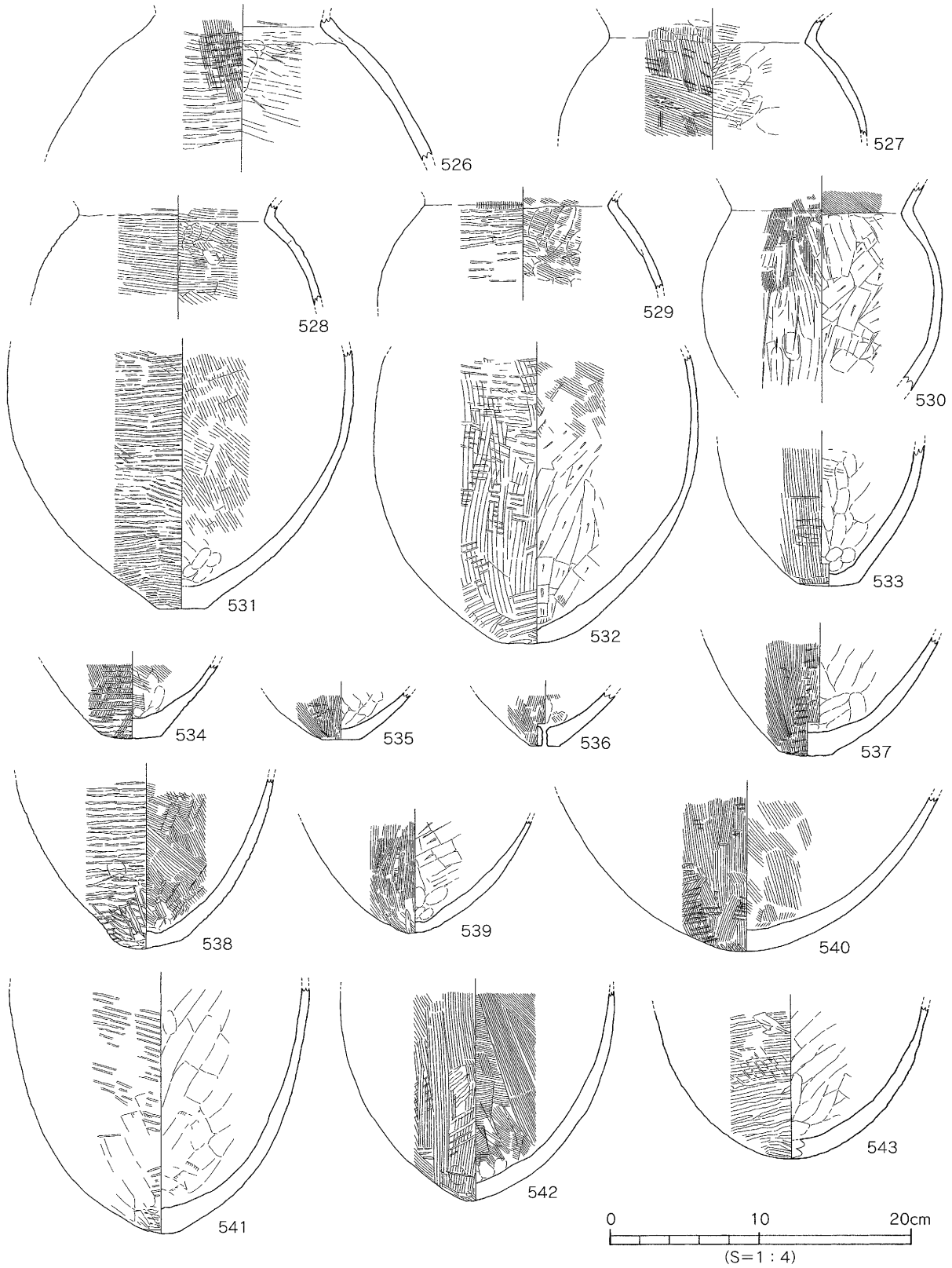
第104図 SD503測量図



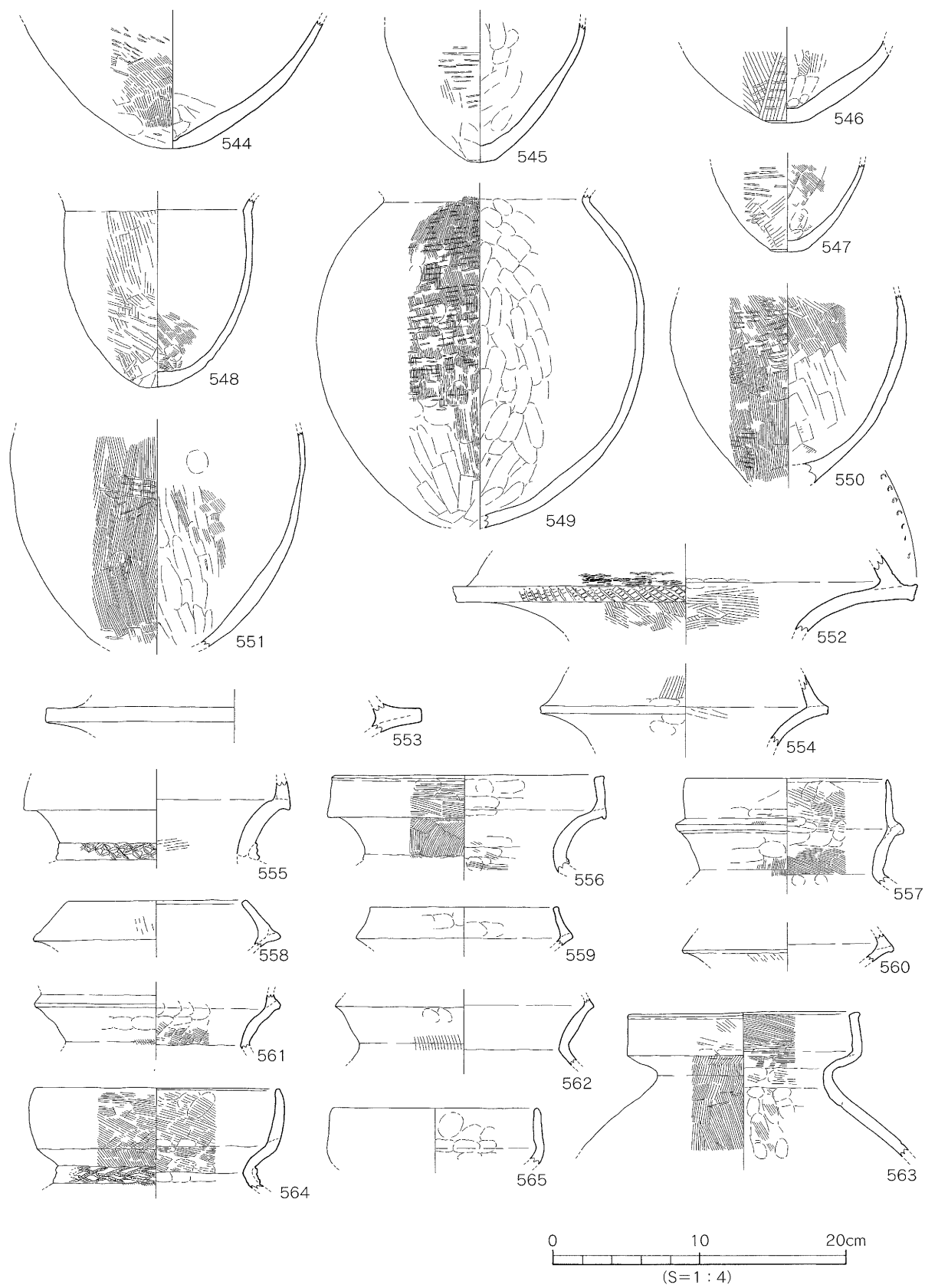
第105図 SD503出土遺物実測図 (1)



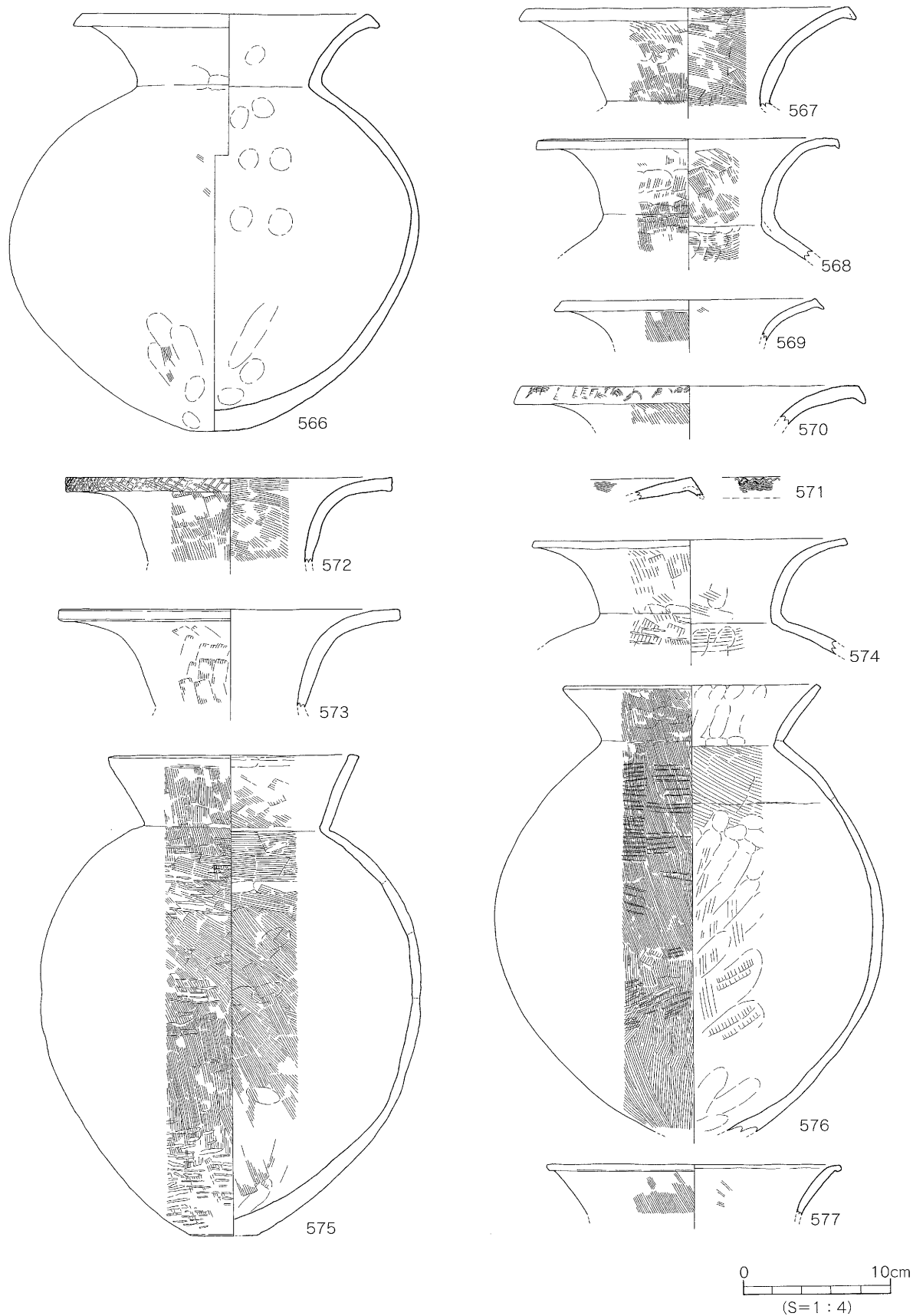
第106図 SD503出土遺物実測図 (2)



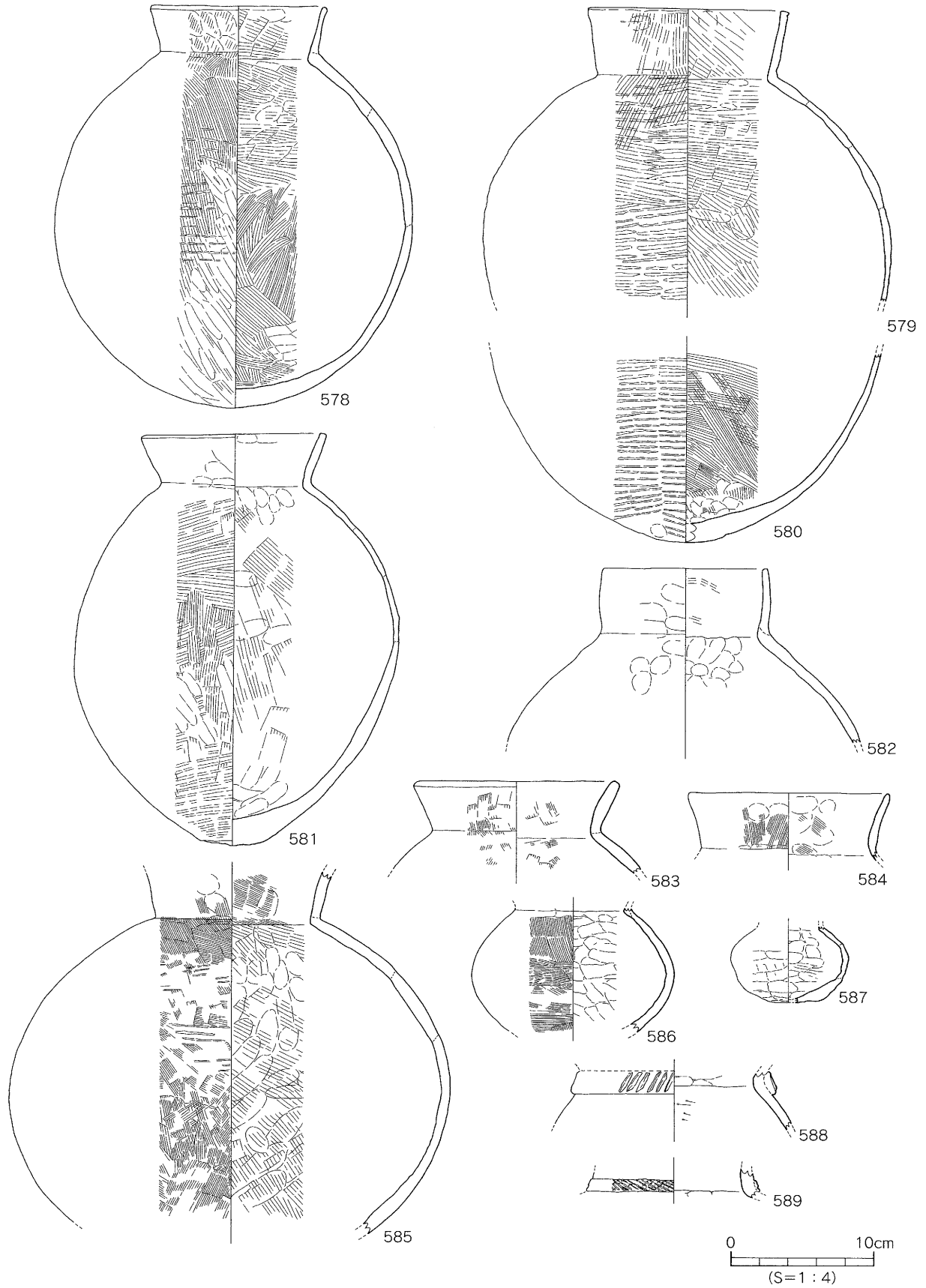
第107図 SD503出土遺物実測図 (3)



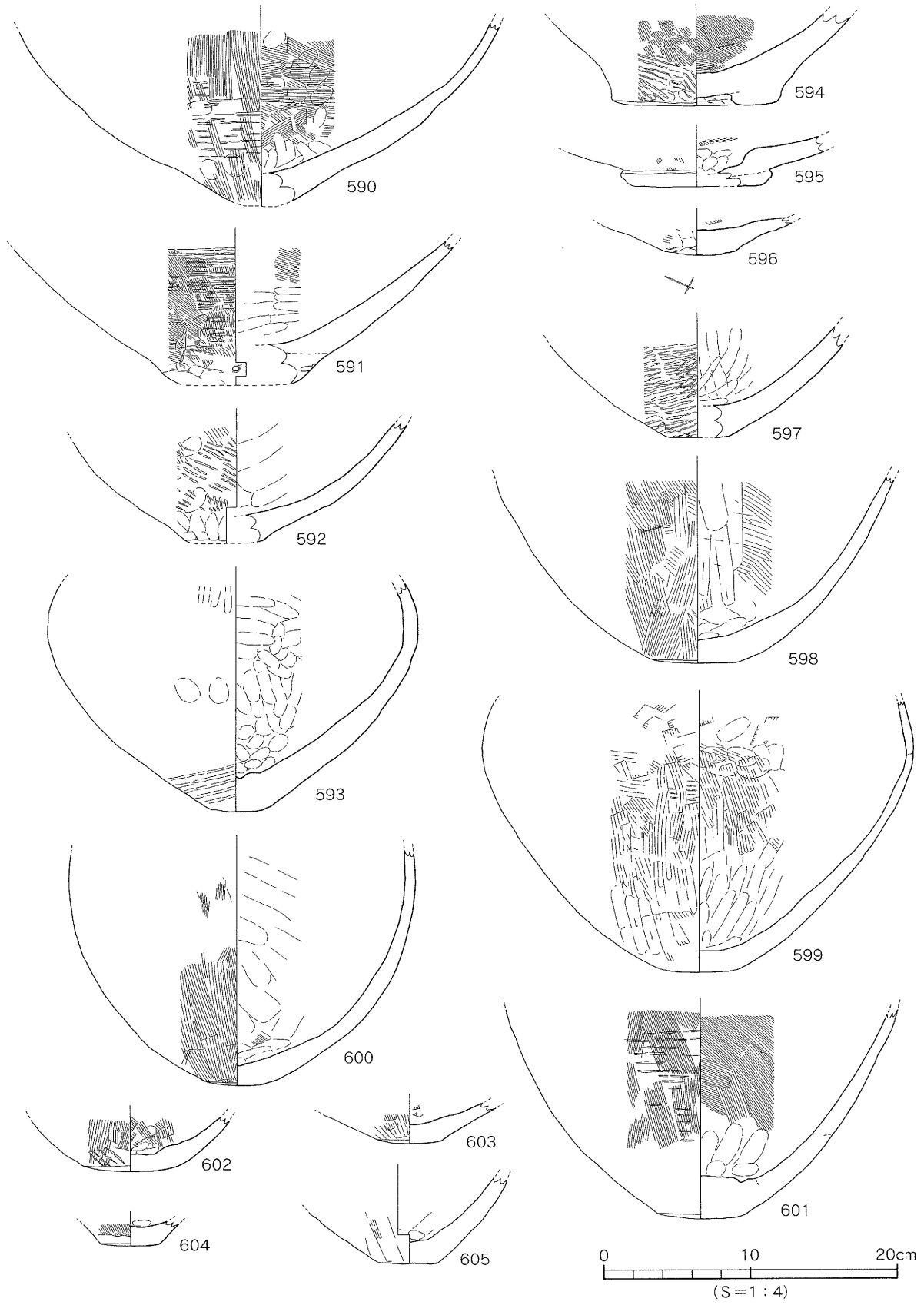
第108図 SD503出土遺物実測図(4)



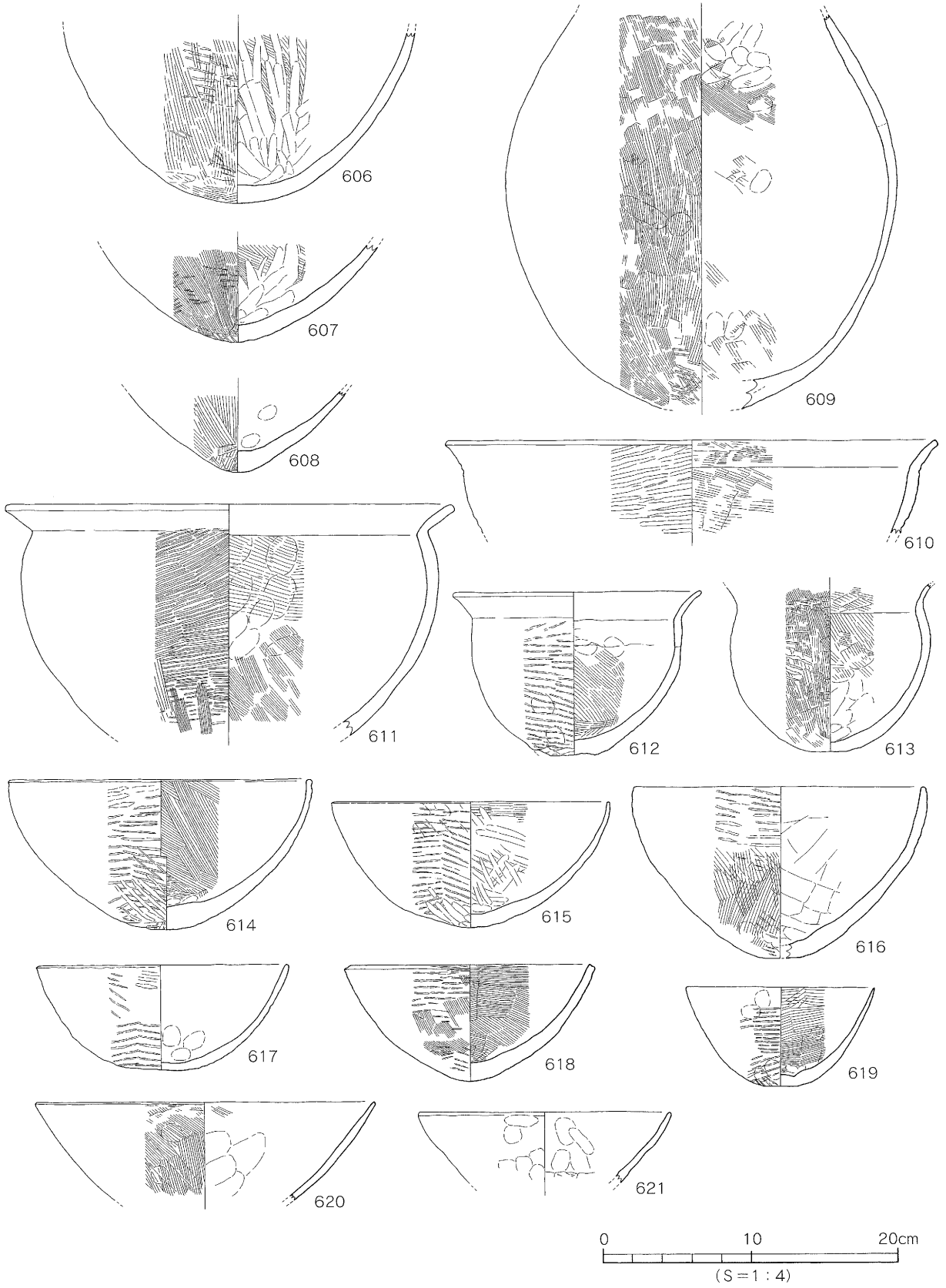
第109図 SD503出土遺物実測図 (5)



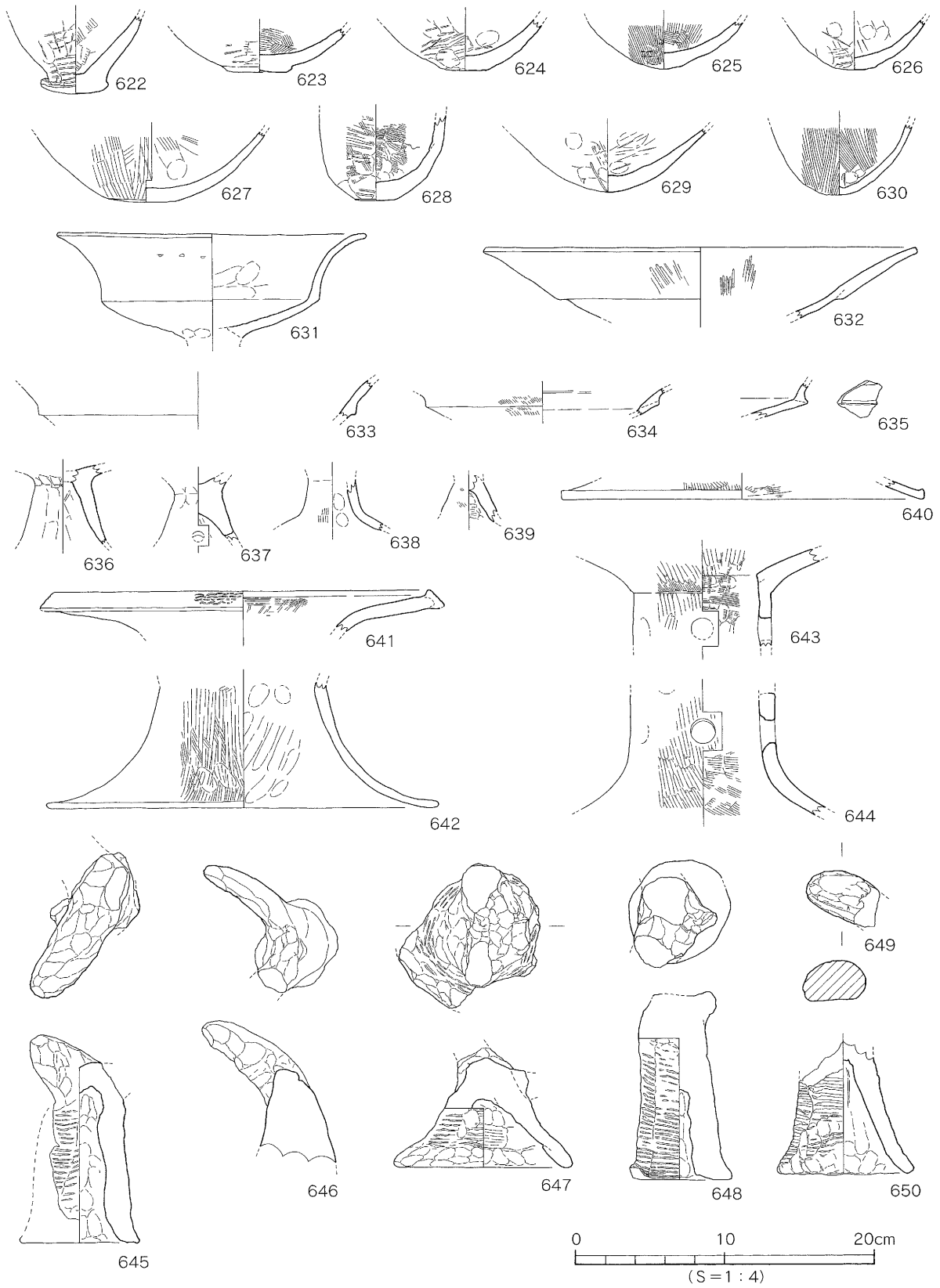
第110図 SD503出土遺物実測図 (6)



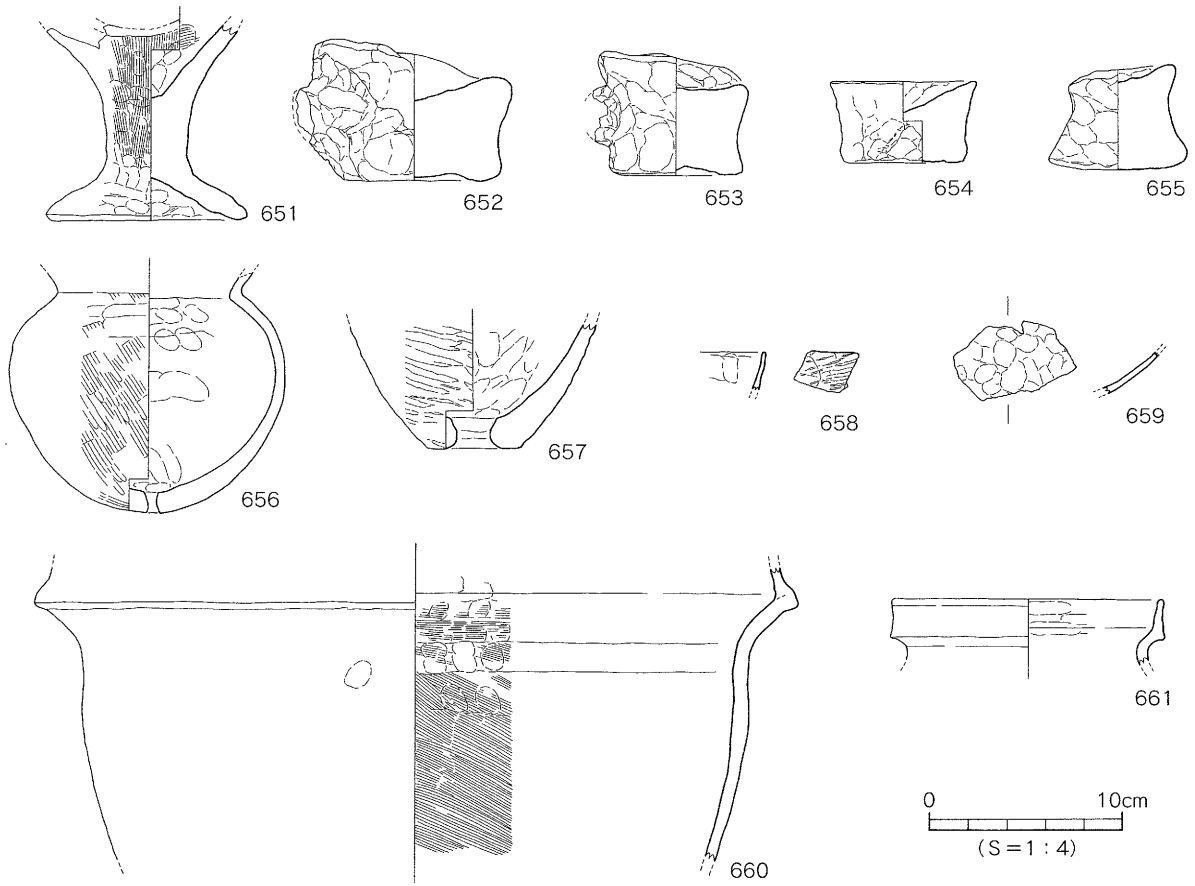
第111図 SD503出土遺物実測図 (7)



第112図 SD503出土遺物実測図 (8)



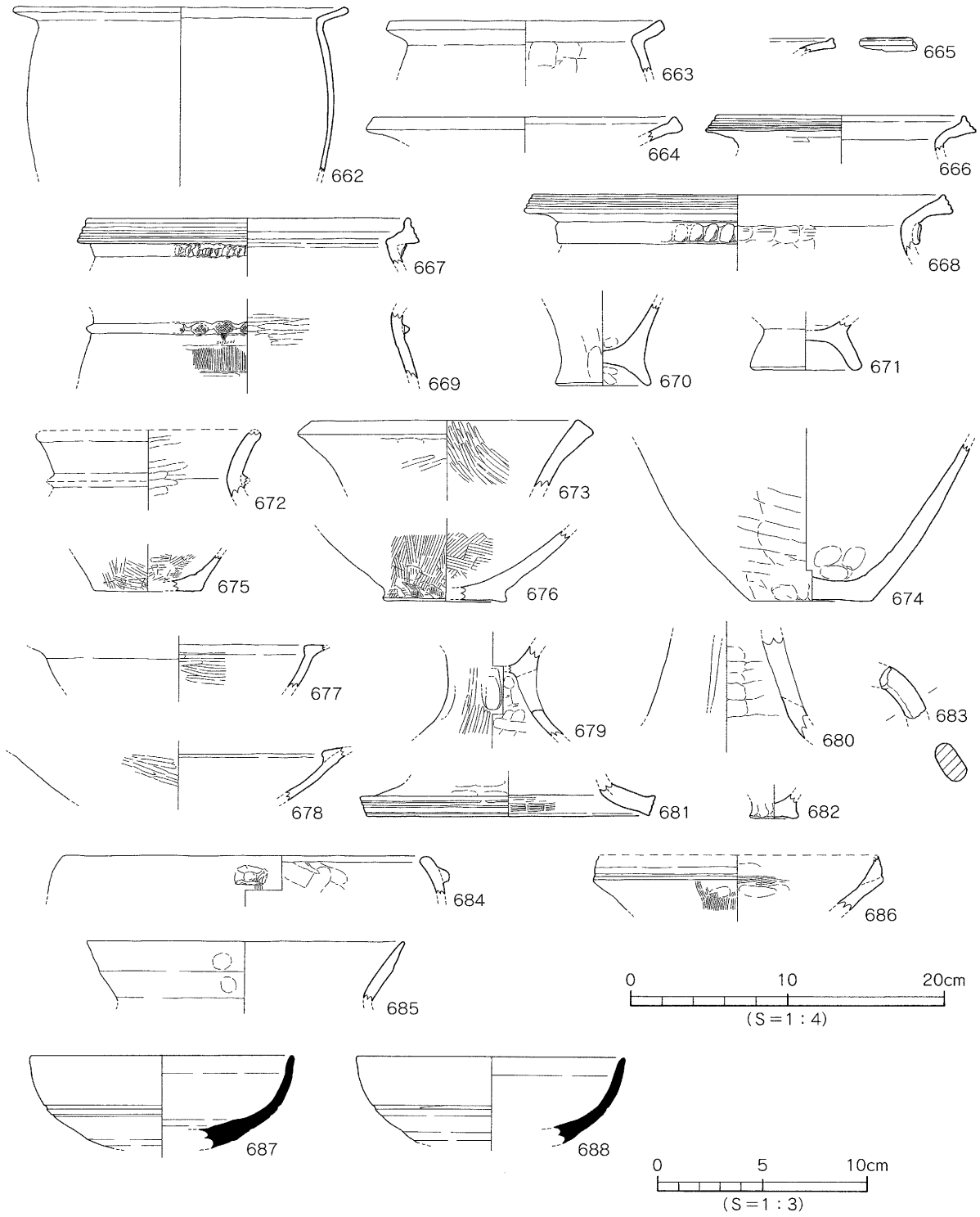
第113図 SD503出土遺物実測図 (9)



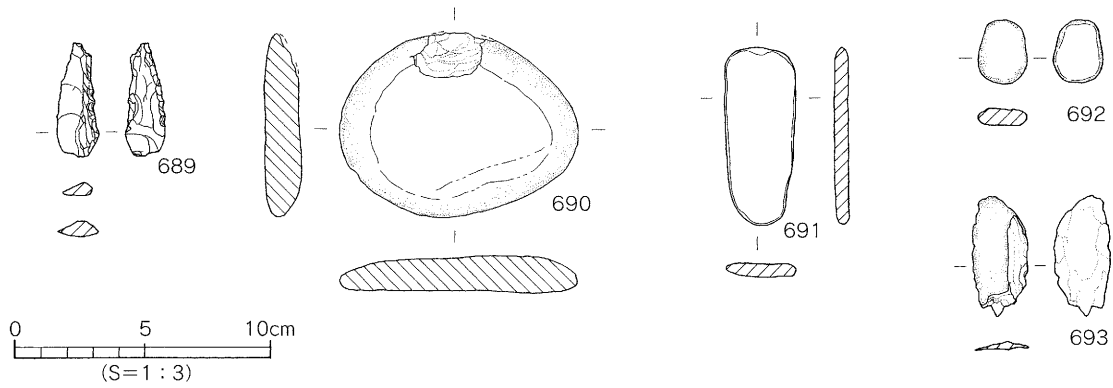
第114図 SD503出土遺物実測図(10)

大鉢で片岩を含む。661は備後系土器である。662～688は異時期の土器で、662～686は弥生土器、687・688は古墳時代の土器である。689～693は石器である。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。



第115図 SD503出土遺物実測図(11)



第116図 SD503出土遺物実測図(12)

S D 504 (第117～119図、図版24)

S D 504は5区南東部、R 1～S 2区に位置する。溝東側は溝S D 507に切られ、南側は調査区外へ続く。第VI①層上面で検出した。規模は検出長12.24m、幅0.50～3.20m、深さ0.06～0.55cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は2層に分層される。1層は暗褐色粘質土、2層は褐灰色土に砂礫が混じるものである。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。

出土遺物(694～718) 694～704は弥生中期の土器で、694～697は甕、698～703は壺、704は台付き鉢である。705～712は弥生終末～古墳初頭の土器片で、712は中国地方系の土器である。713・714は須恵器、715～718は石器である。

時期：検出状況と出土遺物から、弥生時代中期後半とする。

(3) 土 坑

S K 101 (第120図)

S K 101は1区北西部、B 1区に位置し、北側はトレンチに切られ調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.70m、南北検出長1.60m、深さは0.18～0.36mを測る。断面形態は逆台形状で、埋土は2層に分層される。1層暗褐色土、2層は1層より暗い暗褐色土である。遺物は埋土中より、弥生土器と石器とが出土した。

出土遺物(719～725) 719・720は甕、721は壺、722は鉢、723～725は高坏である。

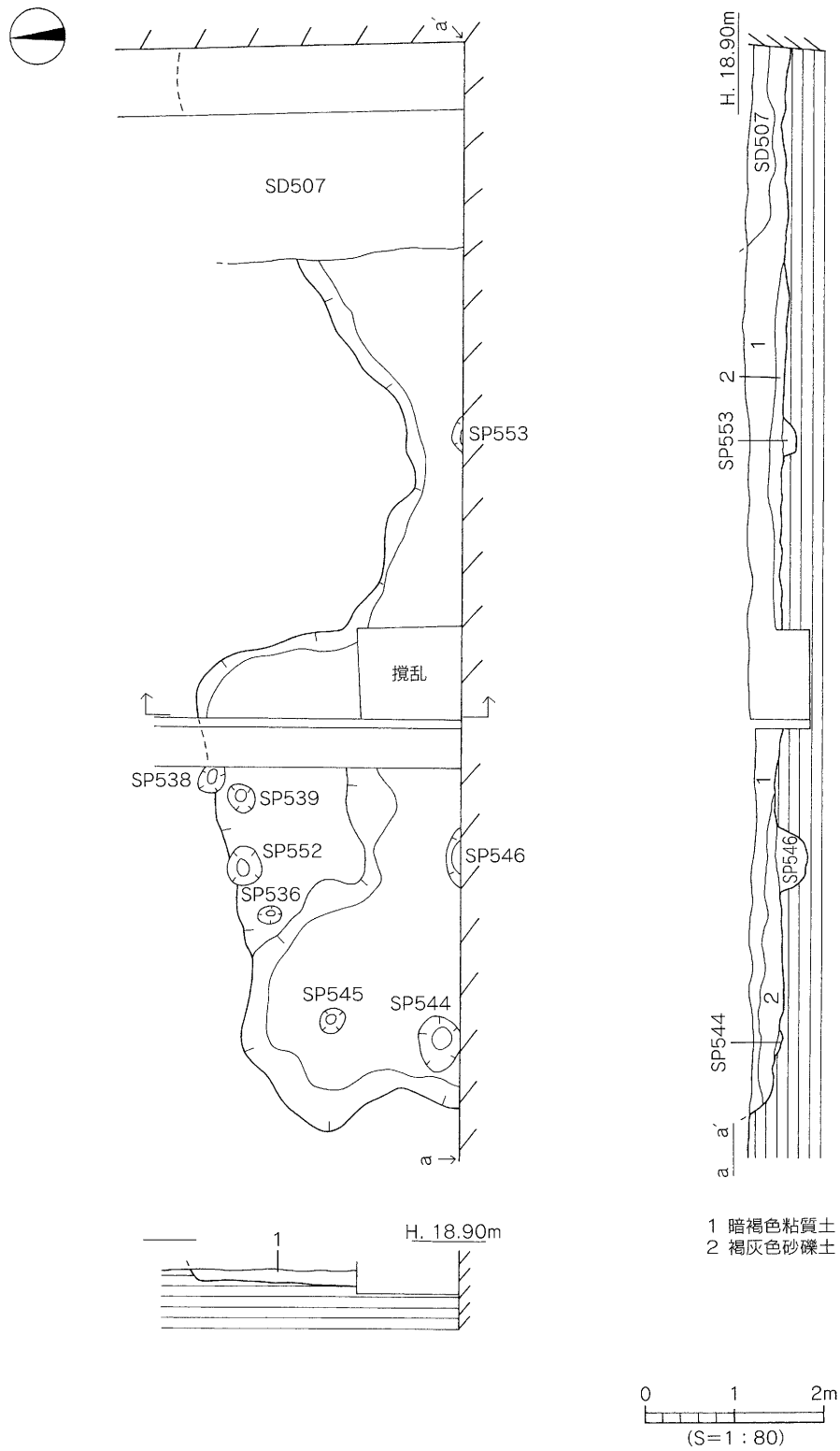
時期：出土遺物から弥生時代末とする。

S K 102 (第62・121図、図版18)

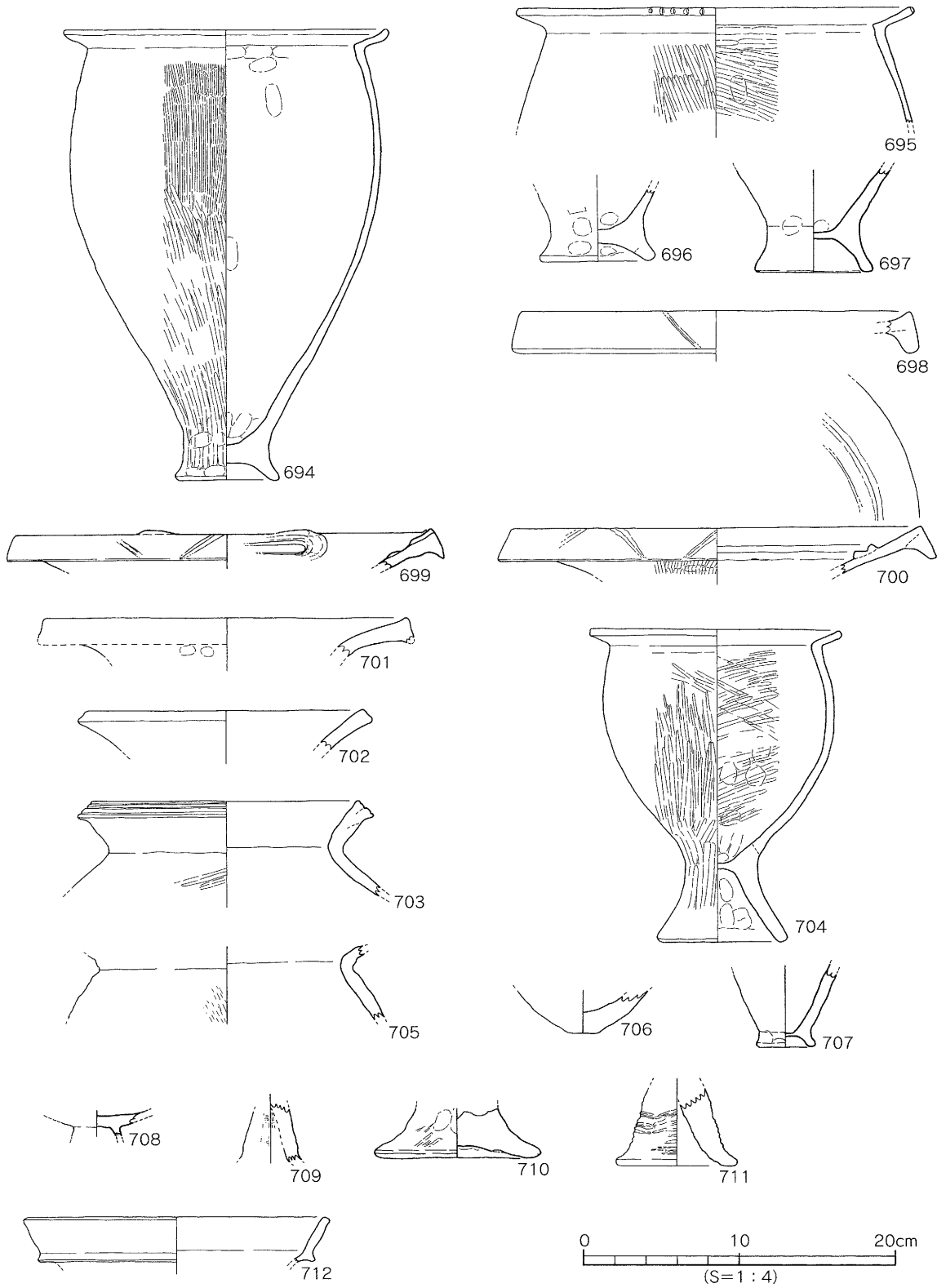
S K 102は1区北西部、北壁の土層観察とトレンチ調査により検出した土坑である。トレンチ調査のため平面形態や規模は不明であり、遺物のみ土坑出土品として取り上げた。

出土遺物(726～737) 726～729は甕、730～734は壺、735～737は鉢である。

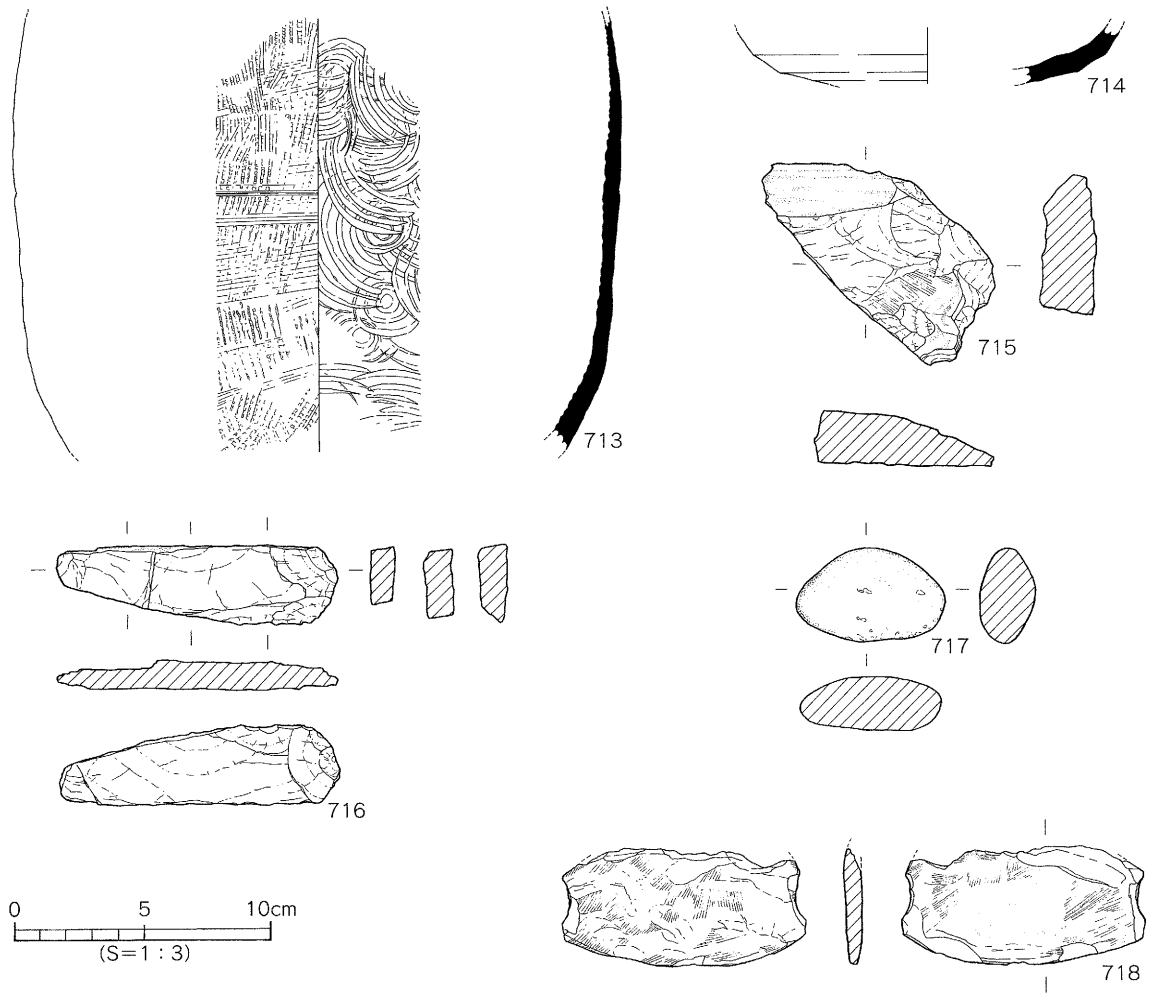
時期：出土遺物から弥生時代末とする。



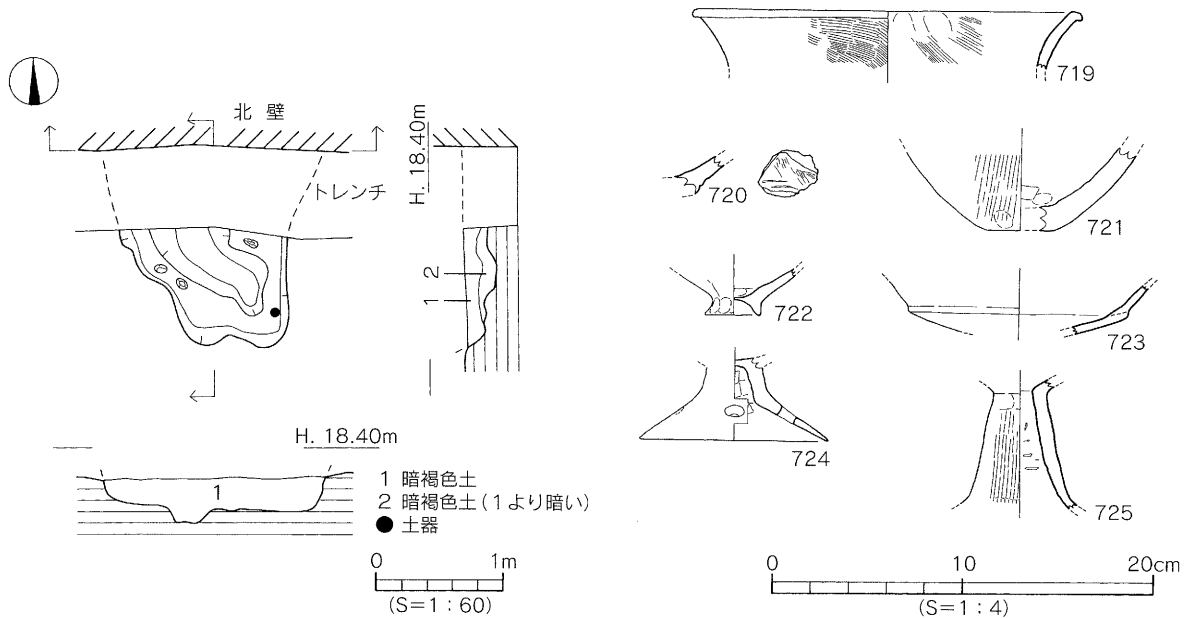
第117図 SD504測量図



第118図 SD504出土遺物実測図(1)



第119図 SD504出土遺物実測図(2)



第120図 SK101測量図・出土遺物実測図

S K 201 (第122～131図、図版24)

S K 201は2区北西部、D 1区に位置し、S B 202を切り北側は柱穴に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.40m、短径3.10m、深さは0.54～0.60mを測る。断面形態は舟底状を呈し、埋土は6層に分層される。1層礫層、2層黄色粘質土に茶色土・炭が混じるもの、3層茶色土、4層茶色粘質土に炭が混じるもの、5層茶色粘質土に黄色土が混じるもの、6層茶色土に黄色土が混じるものである。遺物は埋土中より、弥生土器、石器、鉄器が出土した。

出土遺物 (738～875) 738～771は甕、772～817は壺、818～843は鉢、844～849は高坏、850・851は器台、852～860は支脚である。861は器形品で、焼成前穿孔を持つ。862～865は石器で、866・867は鉄器である。868～875は、S K 201とS B 202が接合するもので、868～870は甕、871～873は壺、874は鉢である。また、875はS K 201ないしS B 204に帰属する壺である。

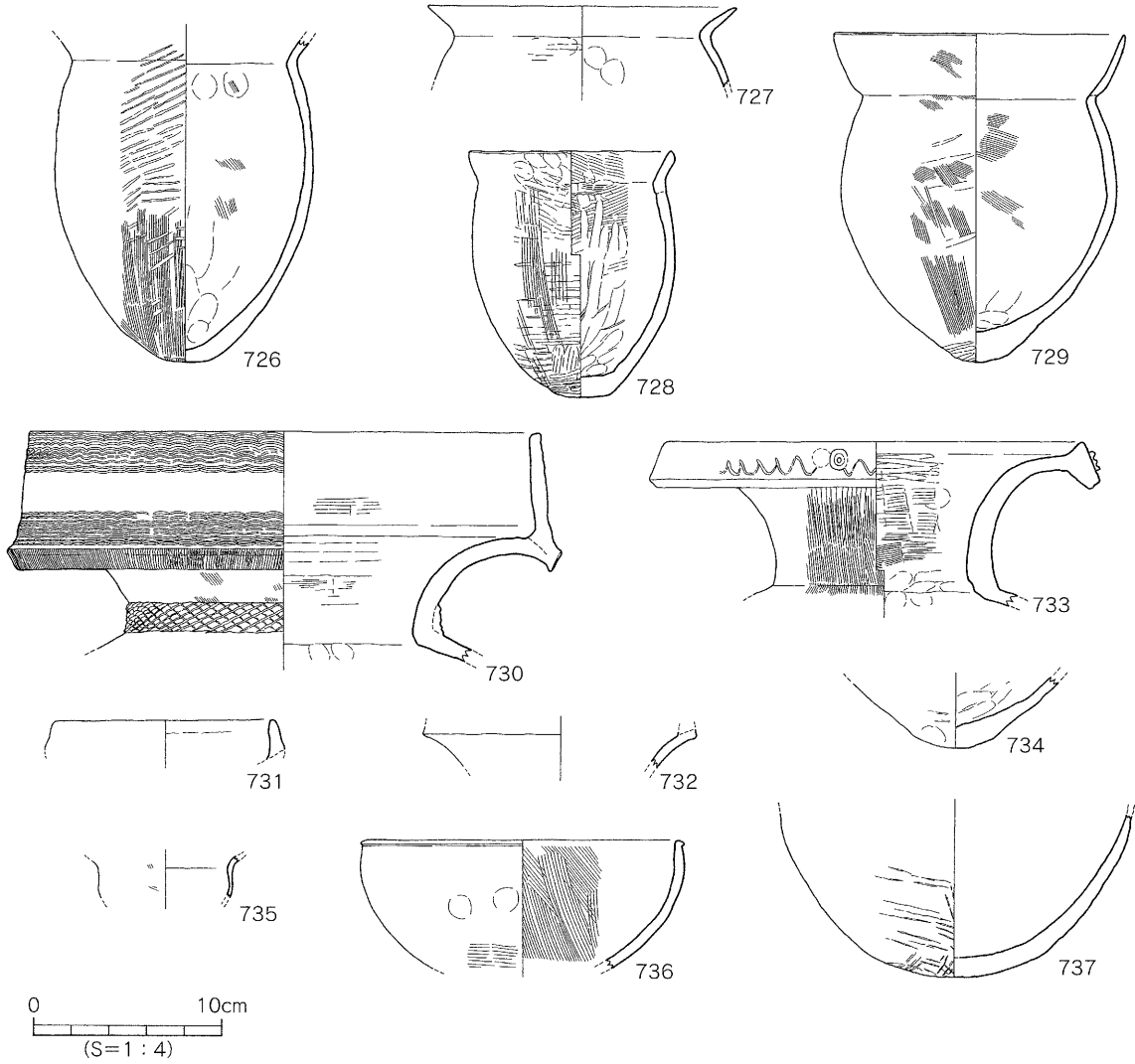
時期：出土遺物から弥生時代末とする。

S K 204 (第132～136図)

S K 204は2区北西部、D・E 1区に位置する。S B 202・S B 204・S B 205を切り、北側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.50m、南北検出長1.50m、深さ0.14～0.42mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器、土師器、石器が出土した。

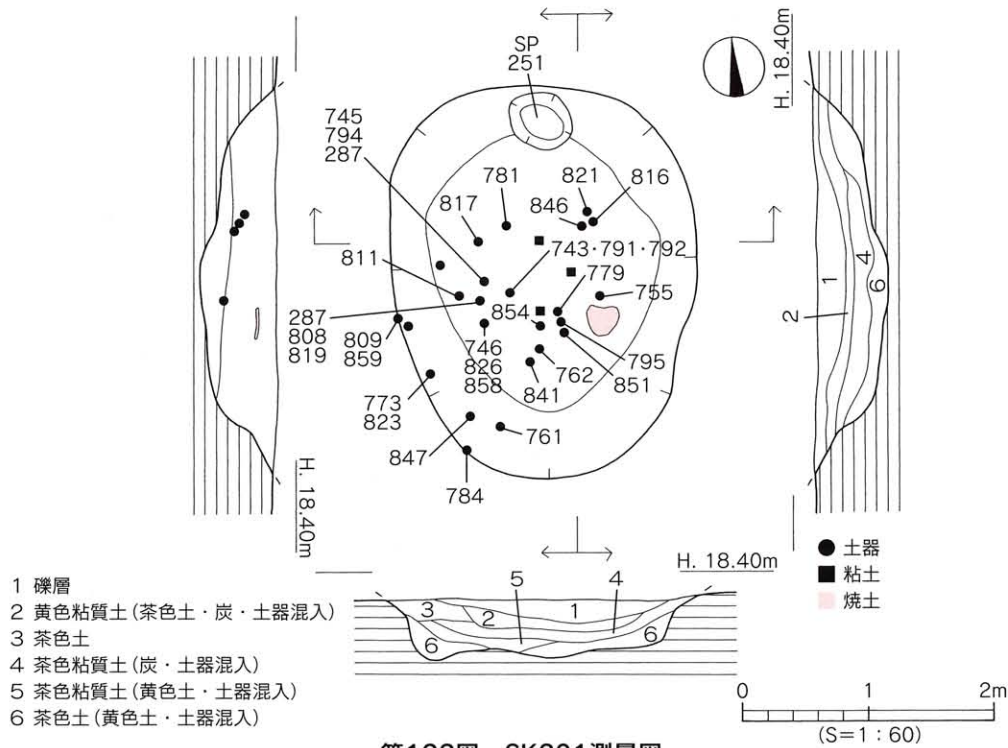
出土遺物 (876～957) 876～906は甕、907～930は壺、931～939は鉢、940～948は支脚である。949は器種不明品、950は讃岐の下川津B類土器の細長頸壺、951は弥生中期土器である。952・953は石器である。954～957はS K 201・S B 202・S K 204のいずれかに帰属する土器であり、954は片口鉢である。

時期：出土遺物より弥生時代末とする。



第121図 SK102出土遺物実測図

西石井遺跡 1次調査地



S K401 (第137図)

S K401は4区西部、M1区に位置し、南側は攪乱に北側は柱穴に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は東西検出長2.10m、南北検出長0.90m、深さ0.06~0.18mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗茶褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器と石器が出土した。

出土遺物(958~968) 958・959は甕、960~962は壺、963~965は器台で、966・967は弥生中期、968は石器である。

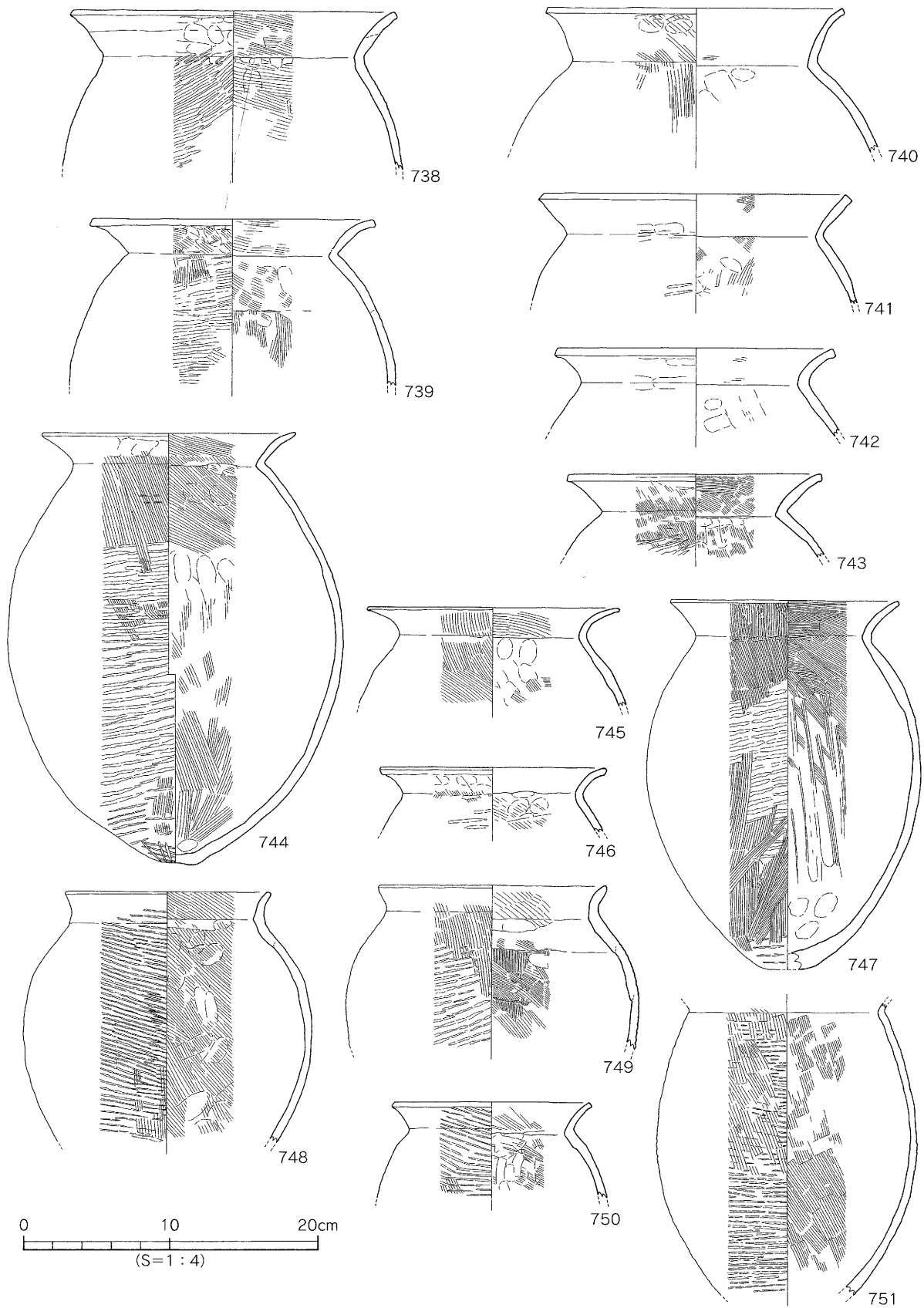
時期：出土遺物から弥生時代末とする。

S K403 (第138図)

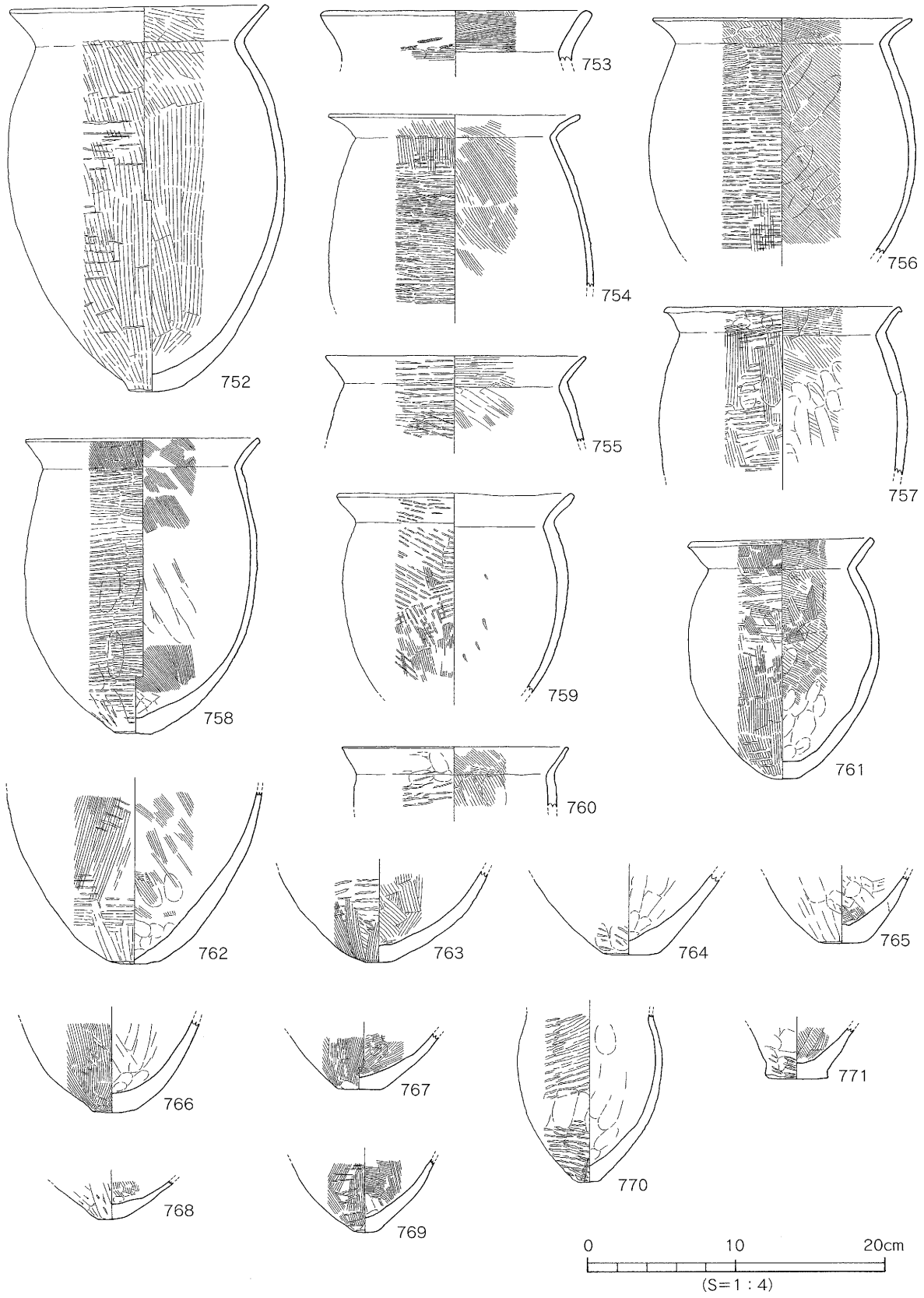
S K403は4区西部、M1区に位置し、北西部は柱穴に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.30m、短径1.20m、深さ0.06~0.18mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗茶褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物(969~973) 969は壺、970は支脚、971・972は器台、973は弥生中期の土器である。

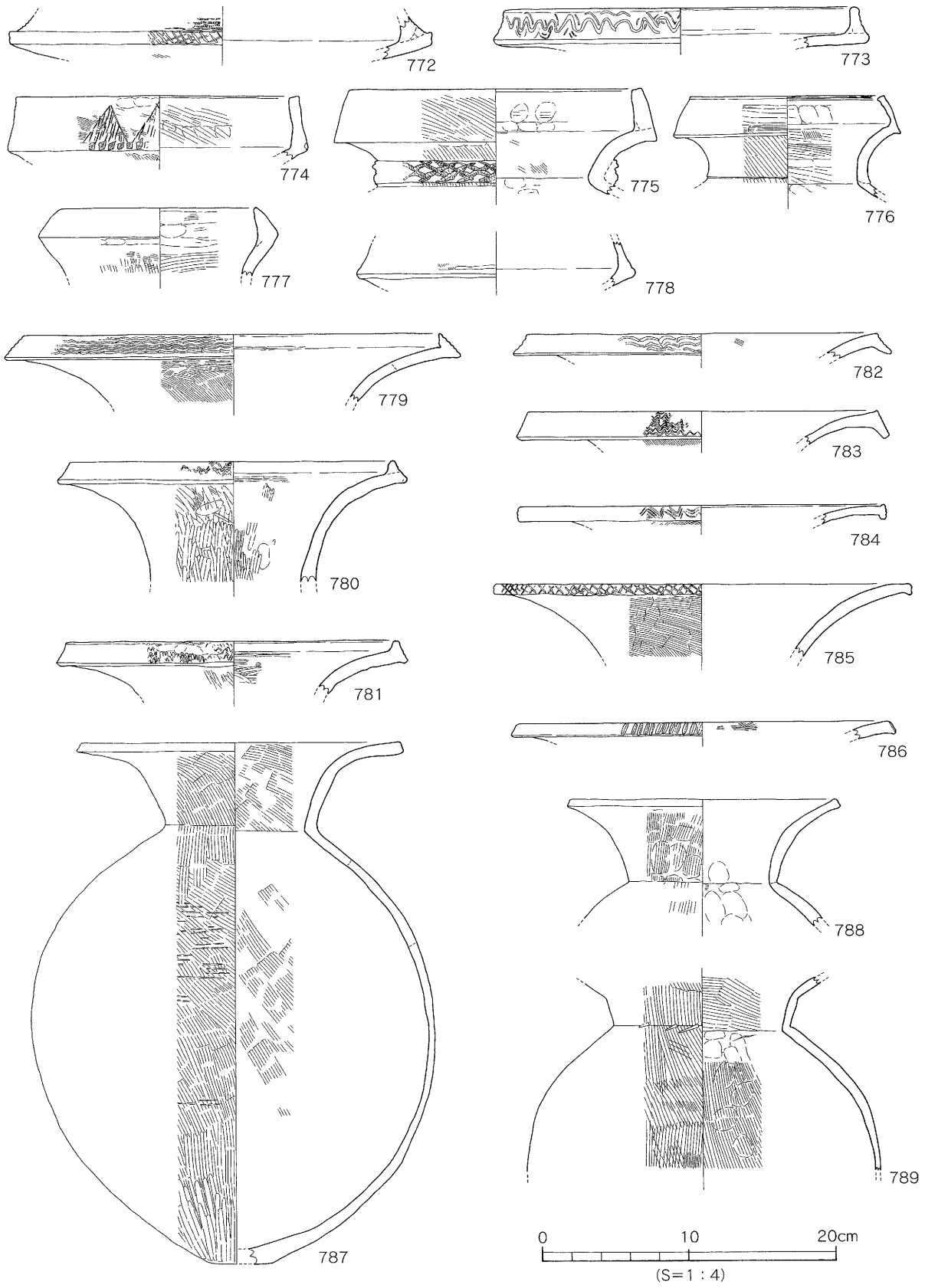
時期：出土遺物から弥生時代後期後半とする。



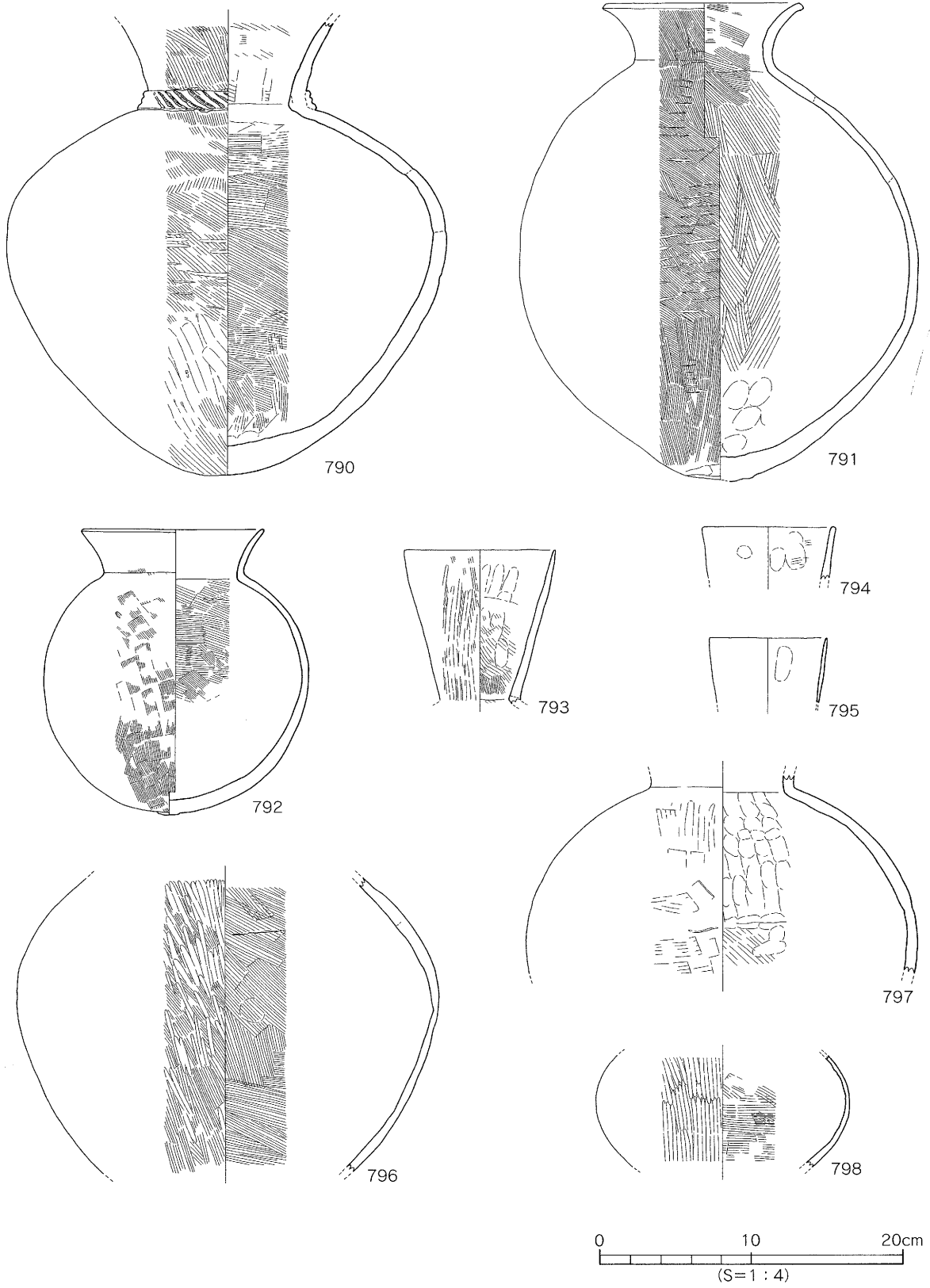
第123図 SK201出土遺物実測図(1)



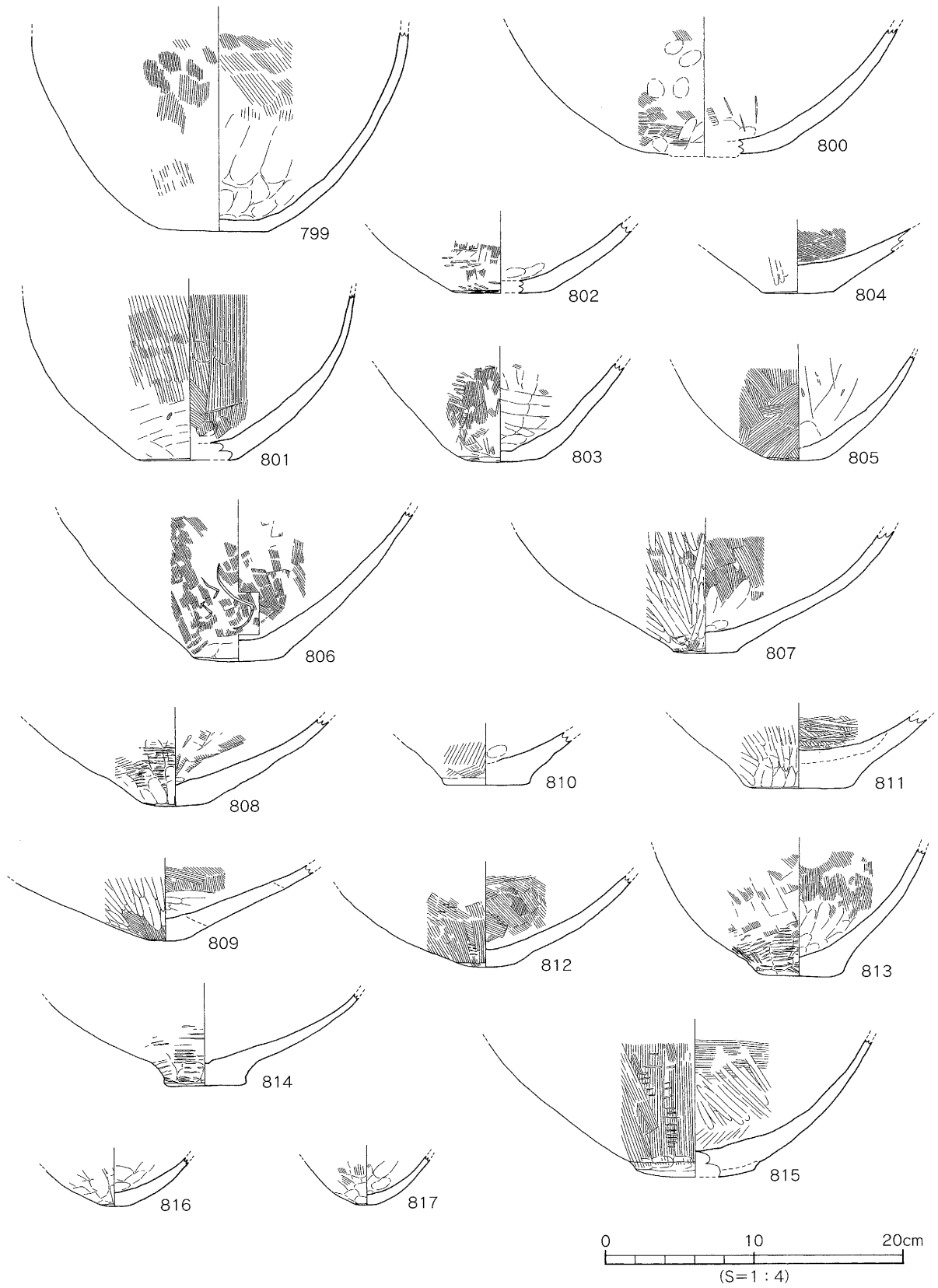
第124図 SK201出土遺物実測図(2)



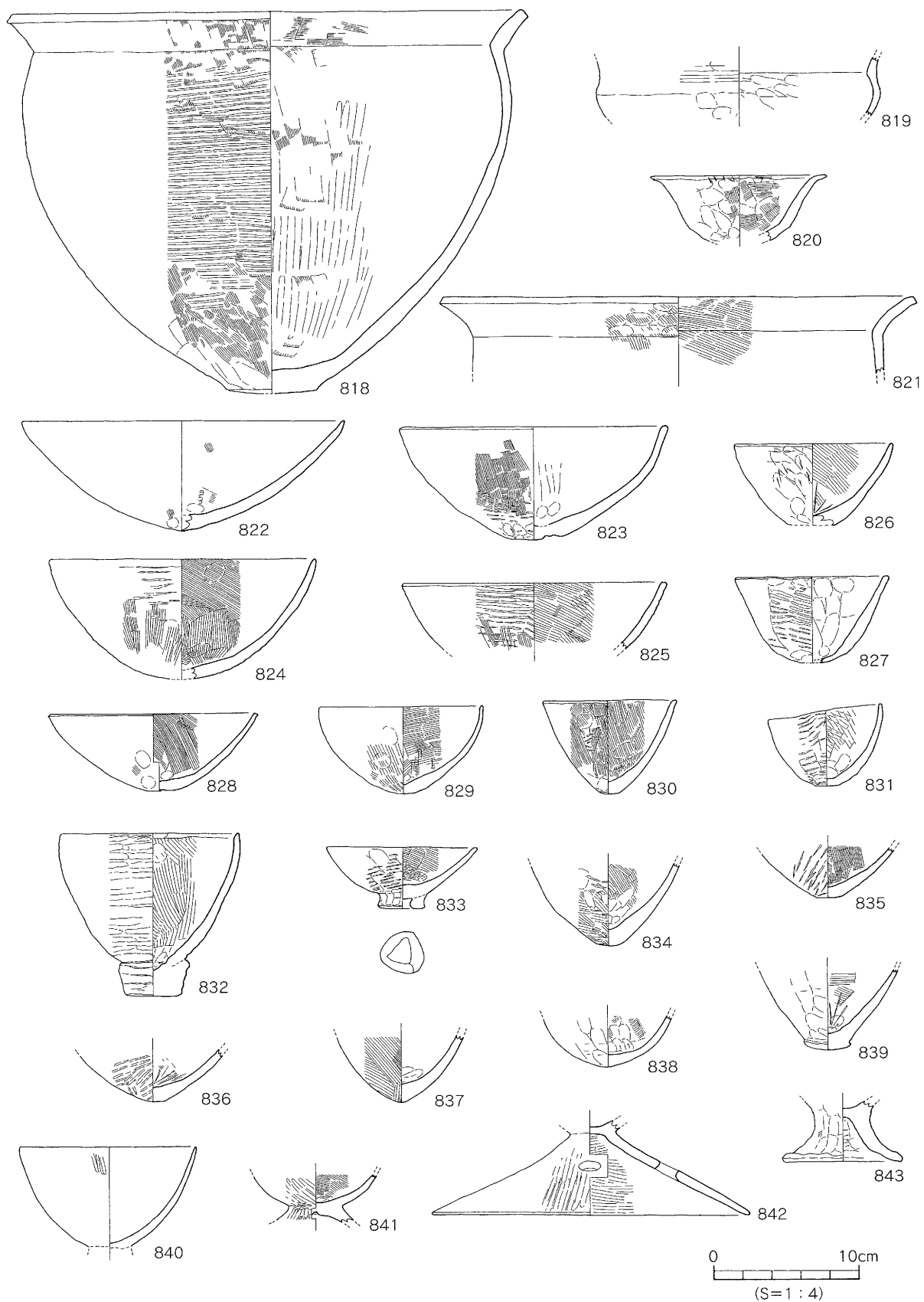
第125図 SK201出土遺物実測図 (3)



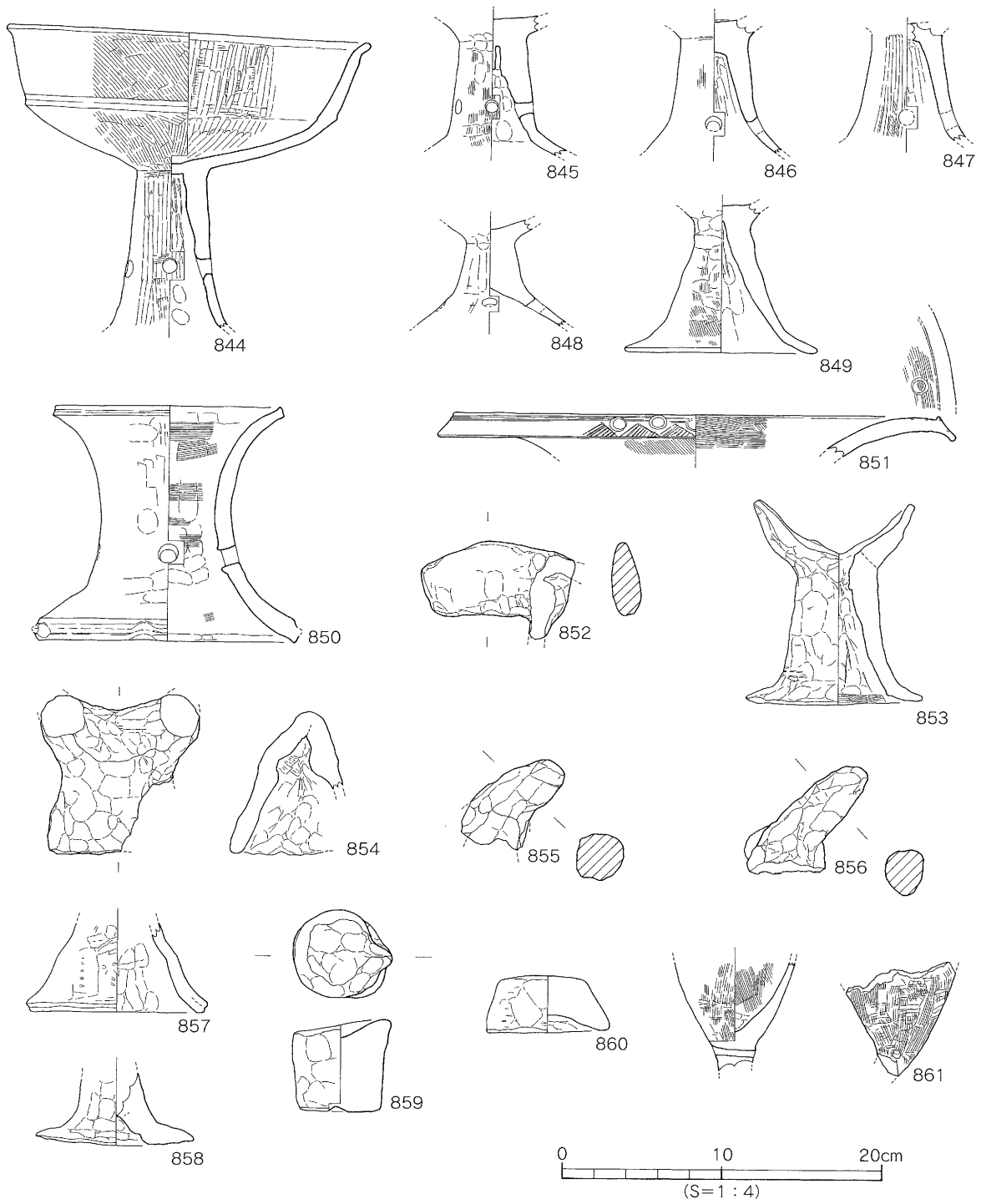
第126図 SK201出土遺物実測図 (4)



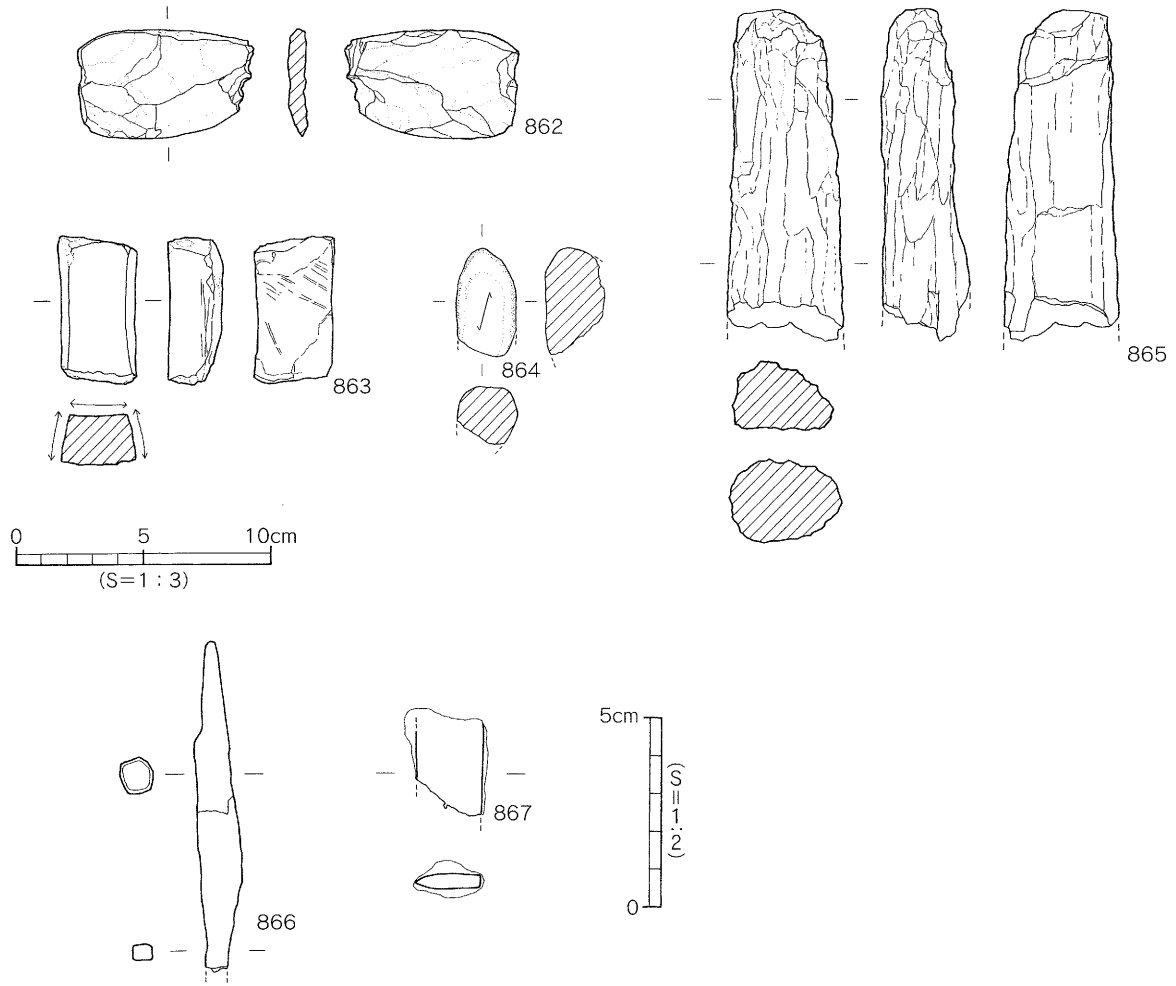
第127図 SK201出土遺物実測図 (5)



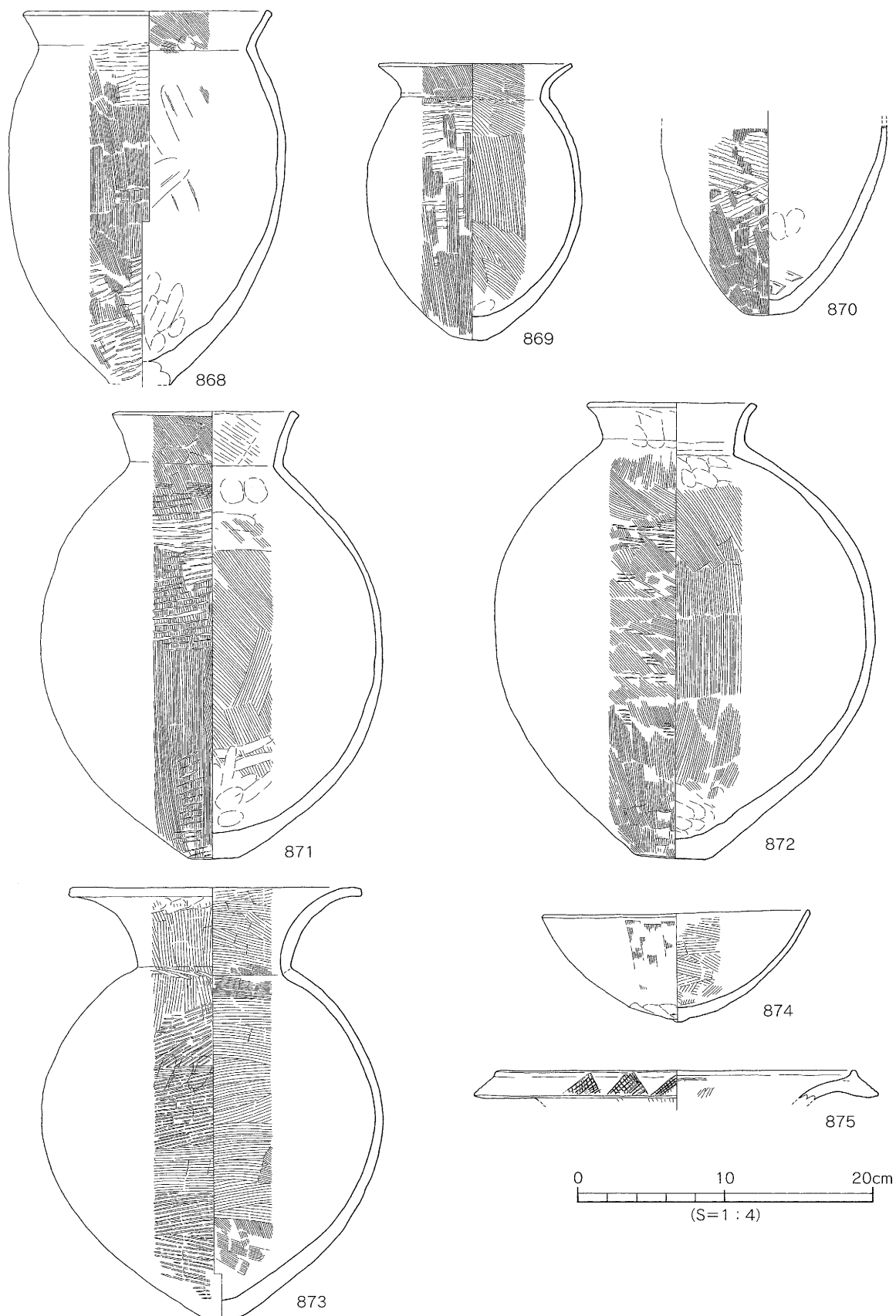
第128図 SK201出土遺物実測図 (6)



第129図 SK201出土遺物実測図 (7)



第130図 SK201出土遺物実測図 (8)



第131図 SK201・SB202出土遺物実測図 (SK201・SB202接合)

S K404 (第138図)

S K404は4区中央部西側、M1区に位置し、北西部は柱穴に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.00m、短径0.70m、深さ0.14~0.22mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器と石器が出土した。

出土遺物(974~981) 974~976は甕、977は鉢、978は異形品、979・980は高坏、981は石器である。

時期：出土遺物から弥生時代後期後半とする。

S K405 (第139図)

S K405は4区中央部西側、M・N1区に位置し、第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.00m、短径0.70m、深さ0.16~0.22mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器が少量出土した。

出土遺物(982~985) 982は甕、983~985は壺である。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。

S K501 (第139・140図、図版18)

S K501は5区西部、O・P1区に位置し、南側は柱穴と攪乱に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ3.70m、幅2.60m、深さ0.03~0.64mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側はテラス状となる。埋土は5層(1・7・11・12・13層)に分かれる。土坑内からは弥生土器が少量出土した。S K501内からは2基の土坑(S K①・②)を検出した。

S K①は平面形態が円形を呈し、規模は径1.40m、深さ0.45~0.49mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は4層(1・8・9・10層)に分層される。遺物は埋土中より弥生土器(986・987)が出土した。S K②は平面形態が円形を呈し、規模は径1.80m、深さ0.54~0.64mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は4層(1・2・3・5層)に分層される。遺物は、埋土中より弥生土器と石器とが出土した。988~994は出土品で、988~992は弥生中期土器、993・994は石器である。

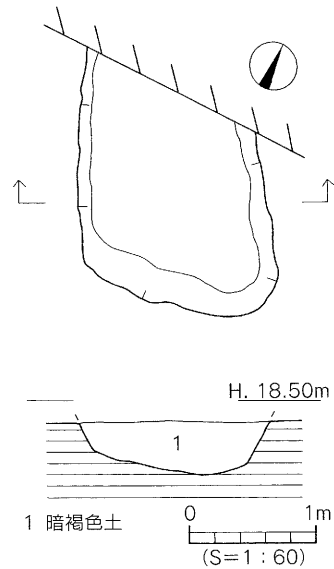
時期：出土遺物から、概ね弥生時代中期後半から後期とする。

S K502 (第140図、図版18)

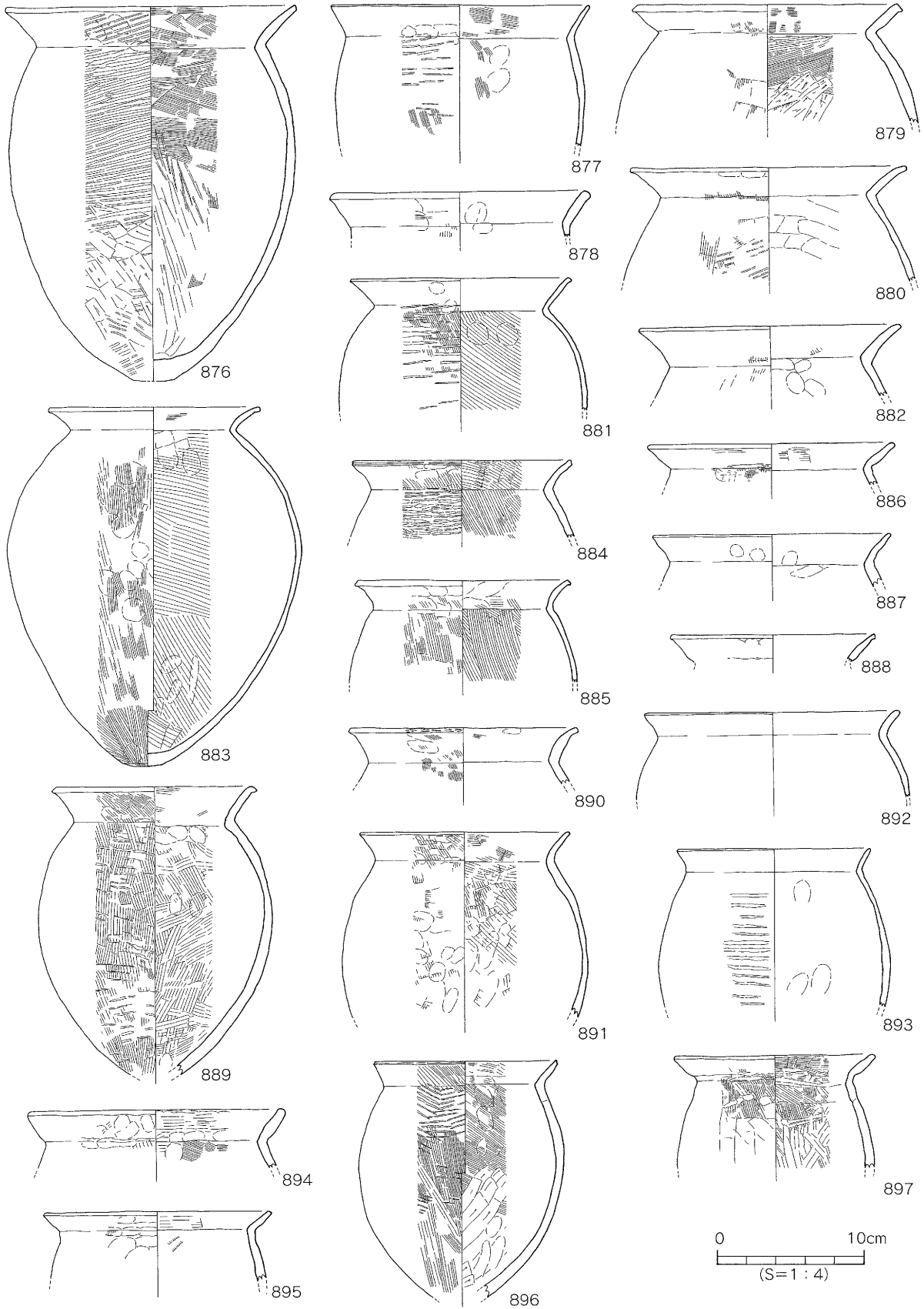
S K502は5区中央部、P・Q1区に位置する。第VI①層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.20m、幅0.90m、深さ0.28~0.40mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は2層に分層される。1層暗褐色土、2層褐色土である。土坑底面は西測が凹み、東測底面にて焼土を検出した。遺物は埋土中より弥生土器が少量出土した。

出土遺物(995・996) 995は甕、996は壺である。

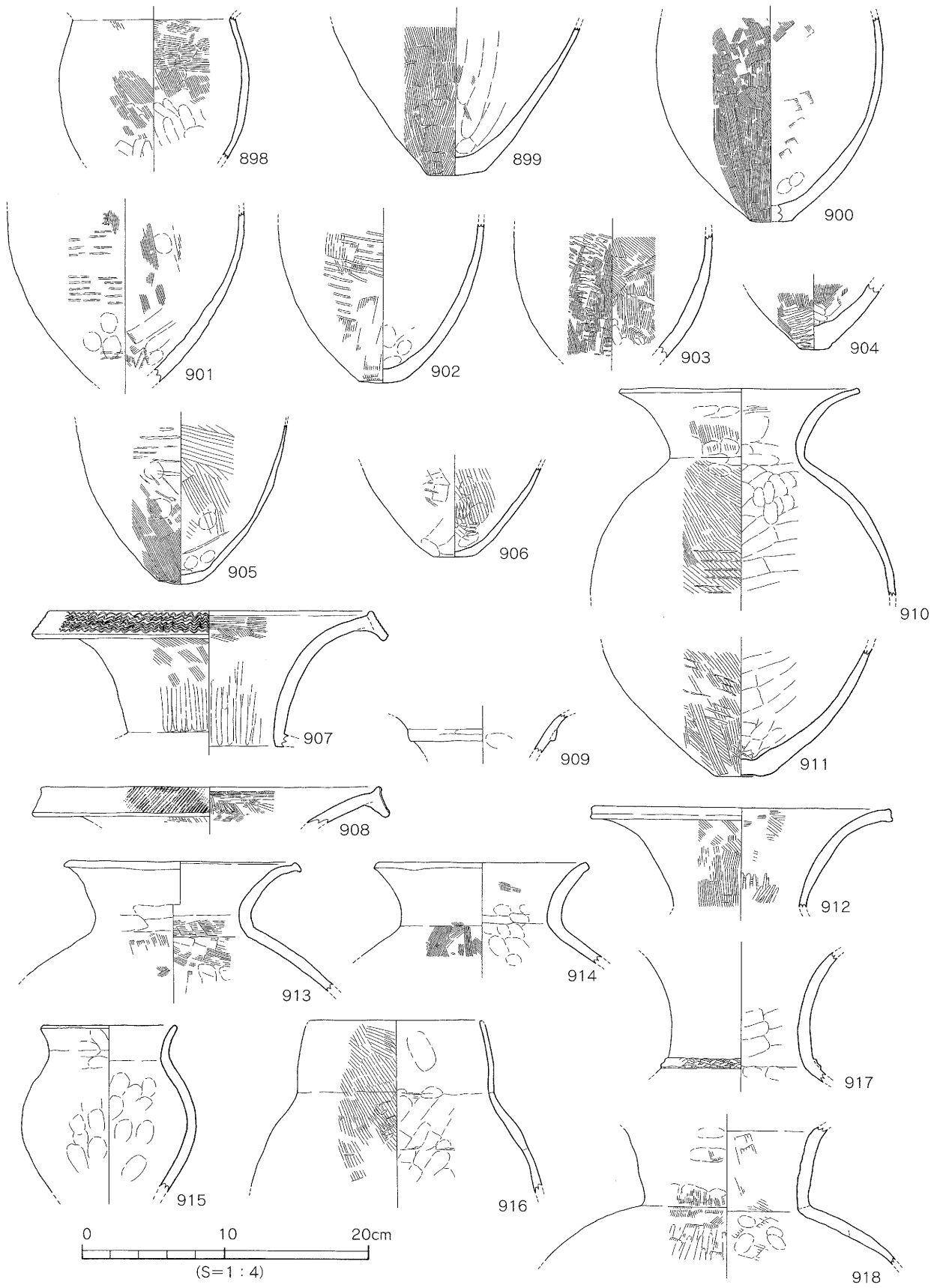
時期：出土遺物から弥生時代中期後半から後期とする。



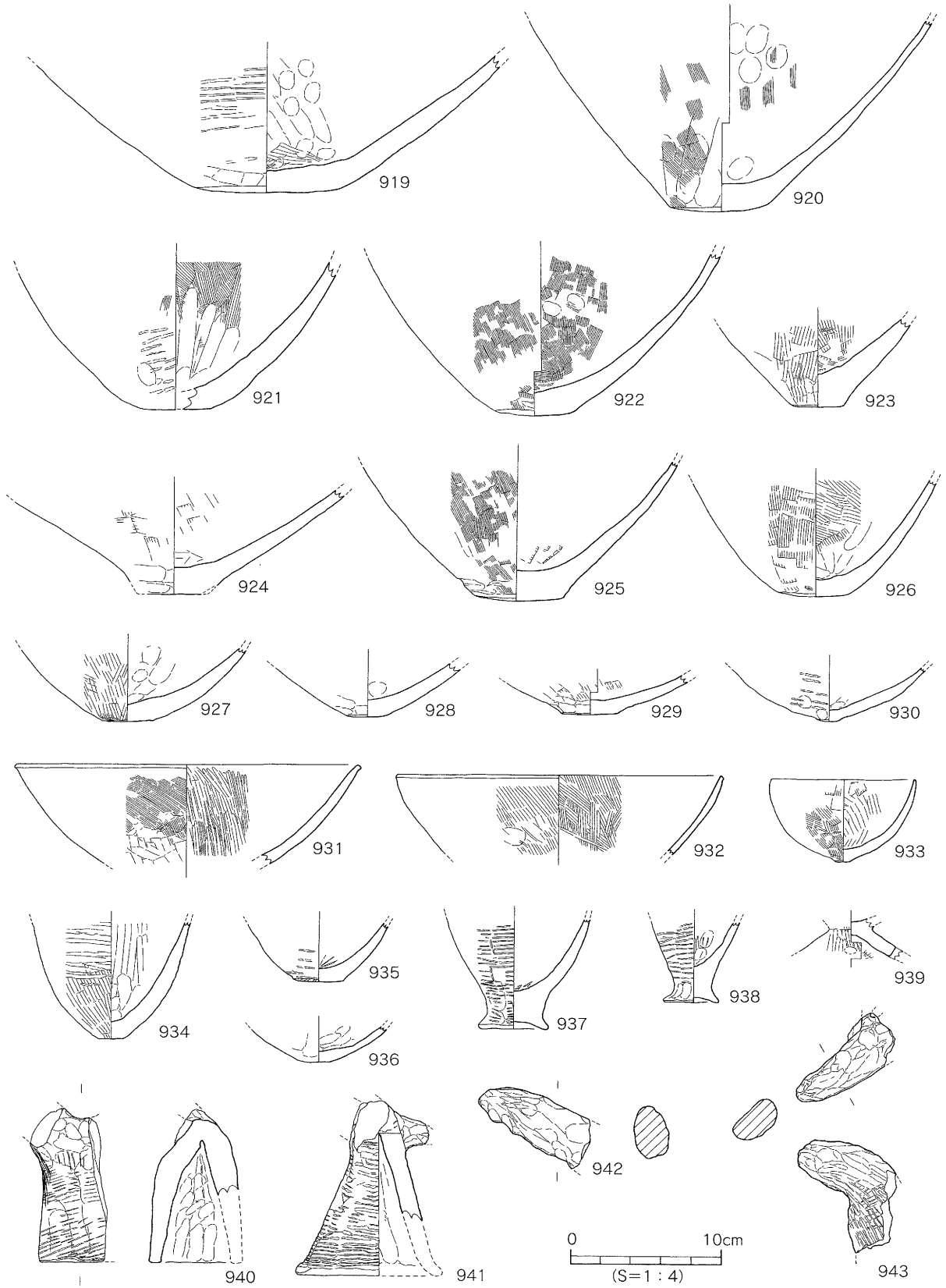
第132図 SK204測量図



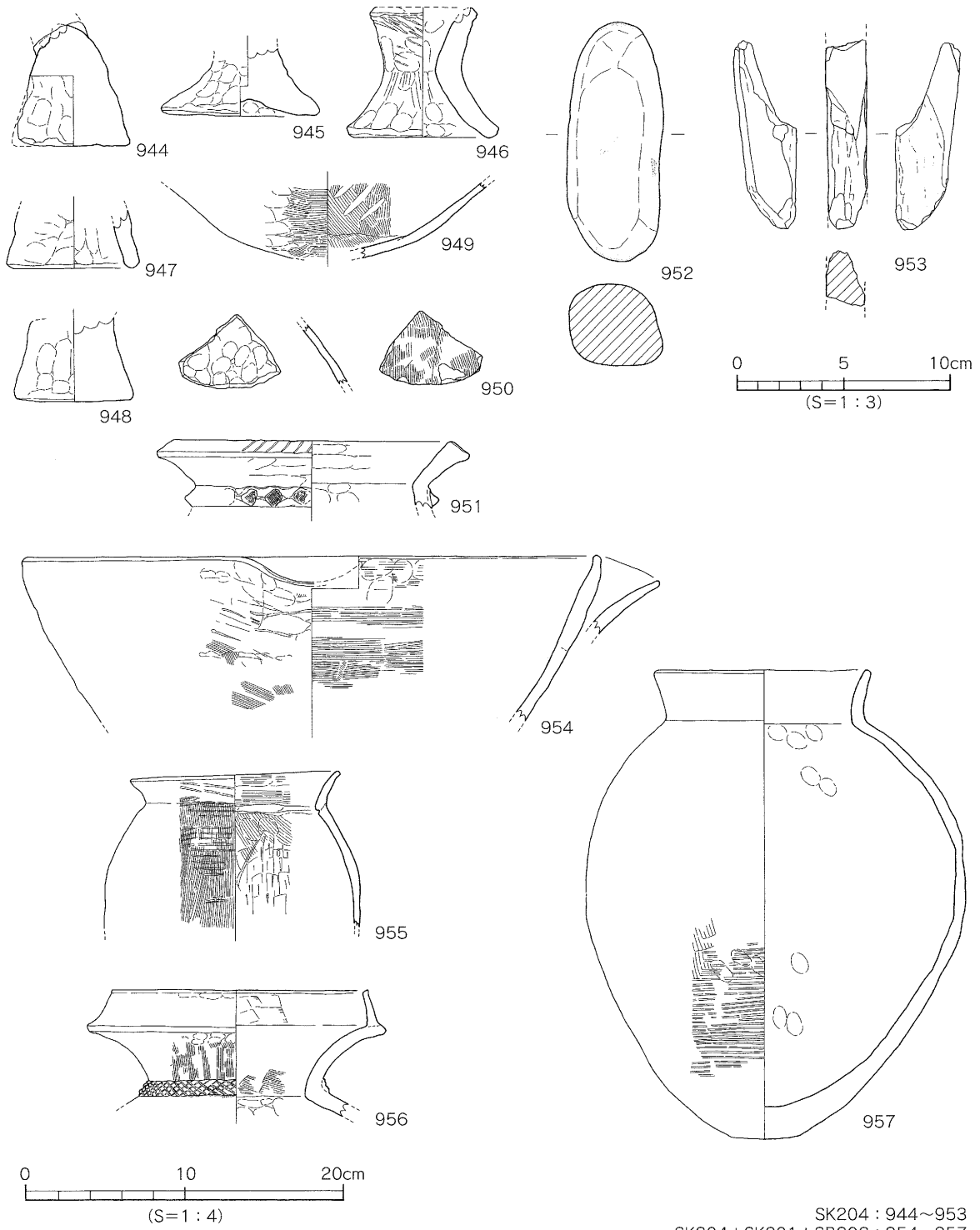
第133図 SK204出土遺物実測図(1)



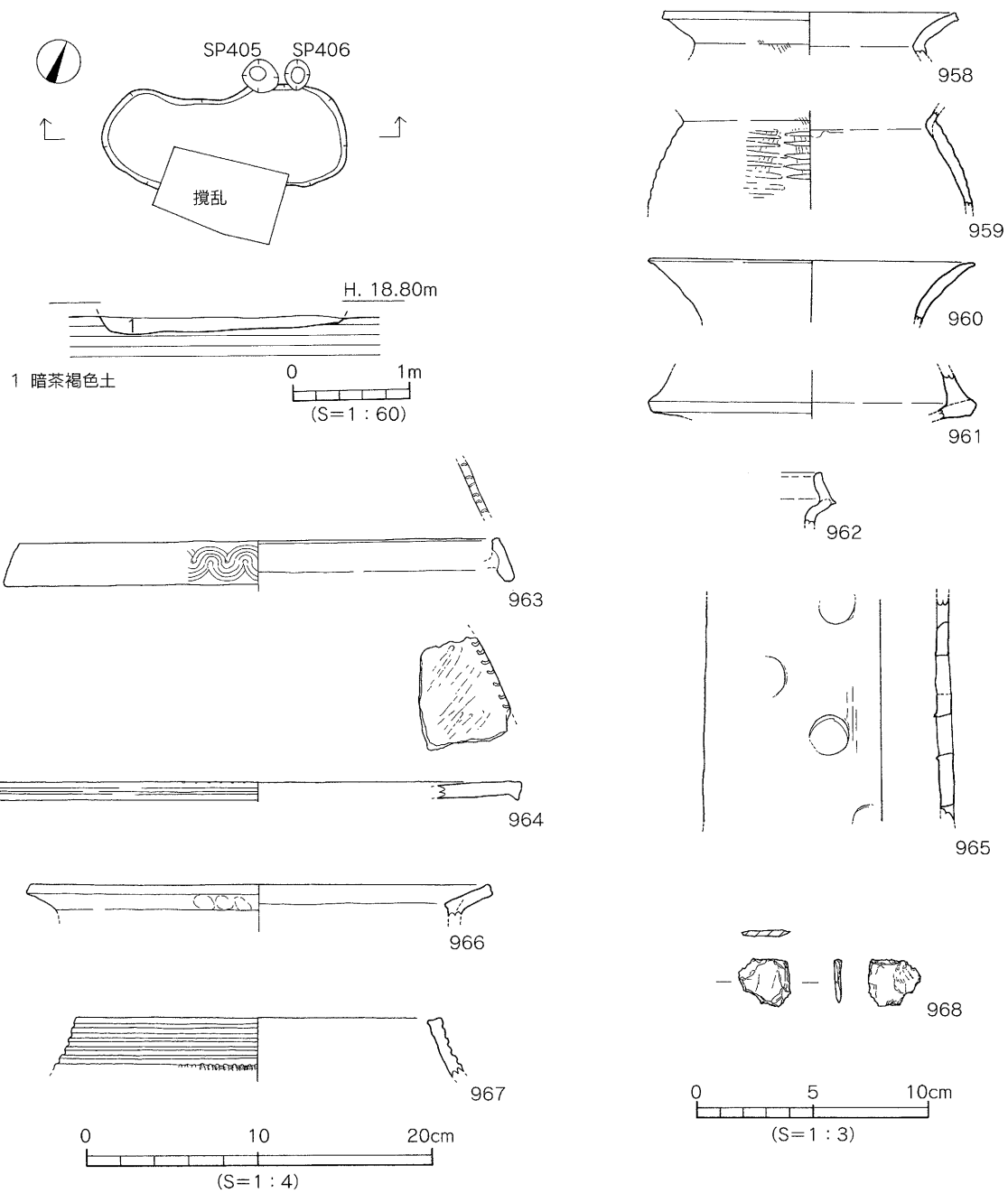
第134図 SK204出土遺物実測図(2)



第135図 SK204出土遺物実測図(3)

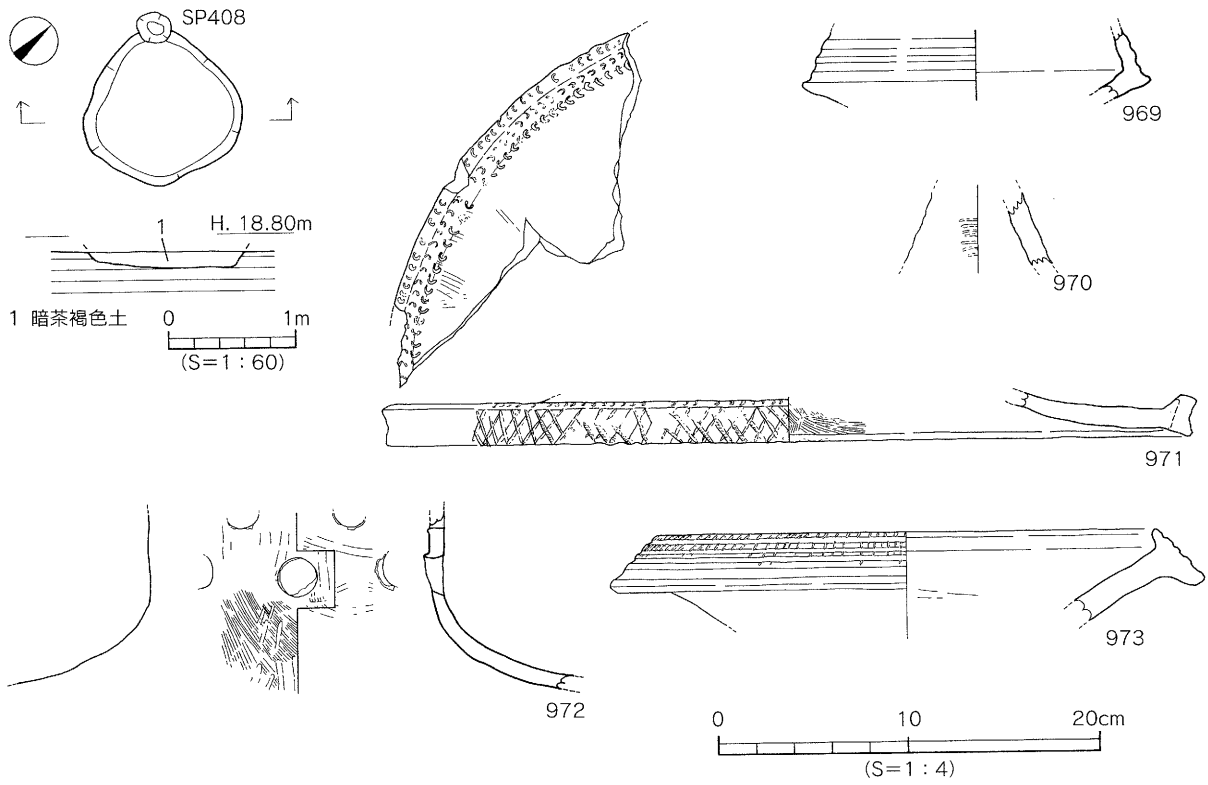


第136図 SK204他出土遺物実測図 (SK204・SK201・SB202接合)

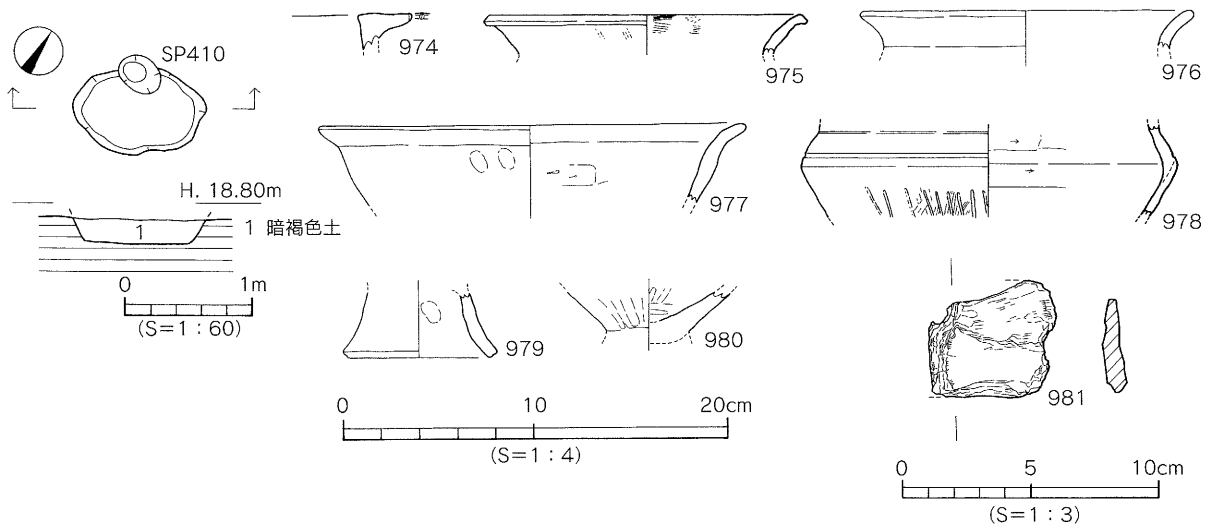


第137図 SK401測量図・出土遺物実測図

西石井遺跡 1 次調査地



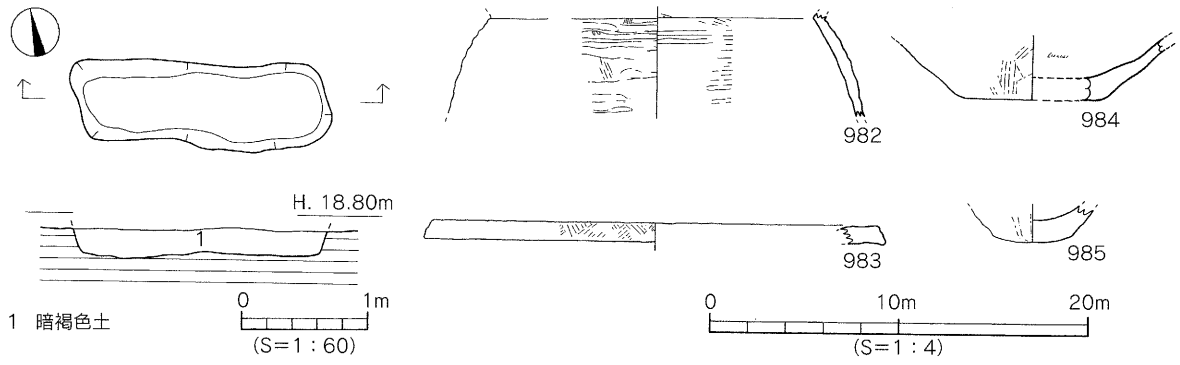
[SK403]



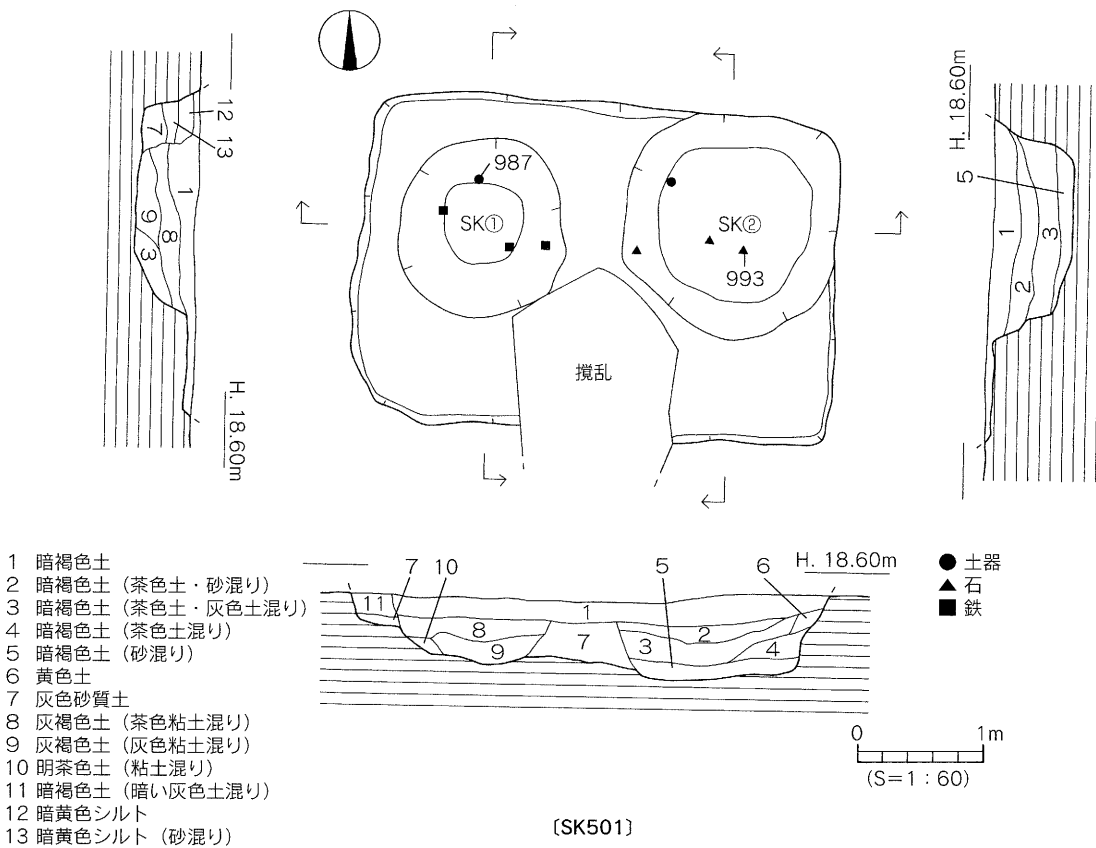
[SK404]

第138図 SK403・404測量図・出土遺物実測図

弥生時代の遺構と遺物

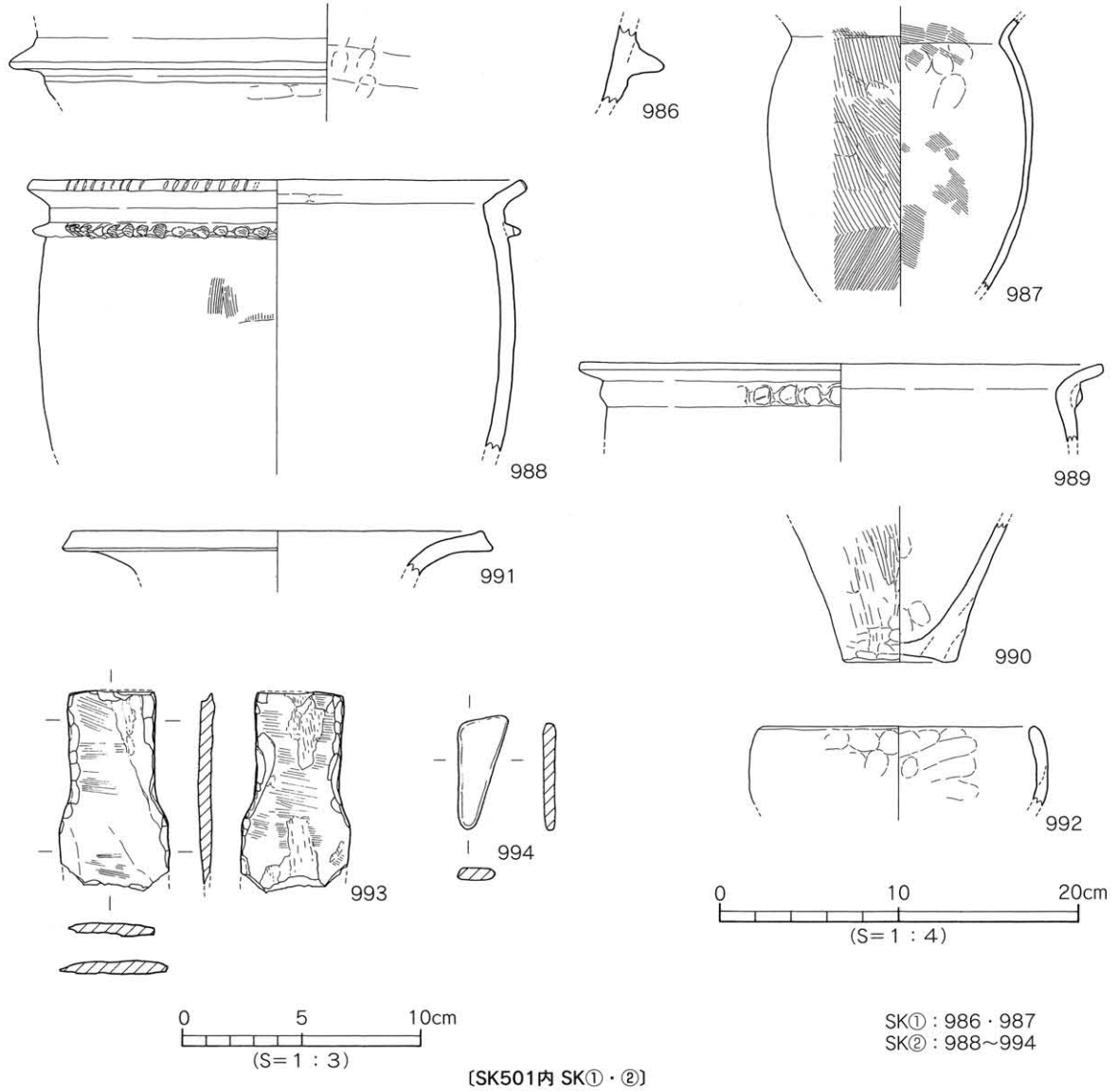


[SK405]

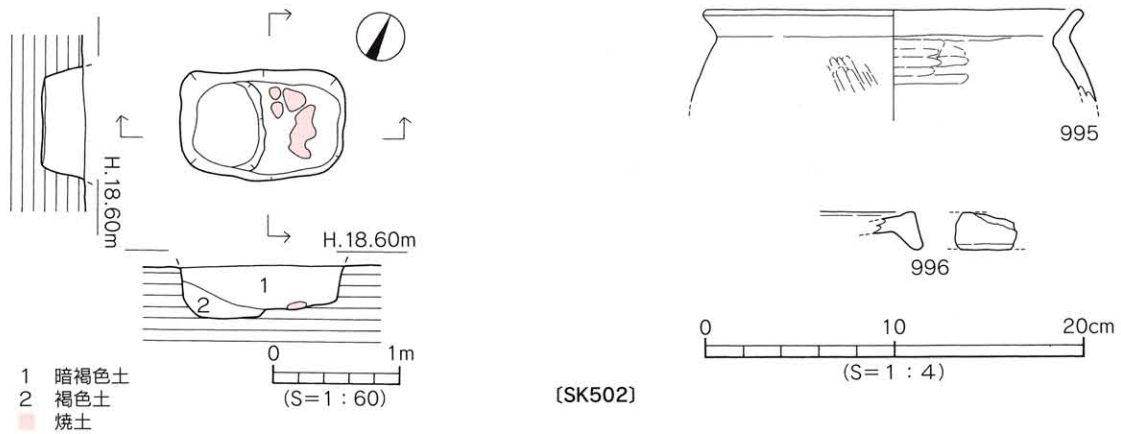


[SK501]

第139図 SK405・501測量図・SK405出土遺物実測図



[SK501内 SK①・②]



[SK502]

第140図 SK502測量図・SK501内SK①・②・502出土遺物実測図

S K 504 (第141図)

S K 504は5区中央部西側、P 1・2区に位置する。第VI①層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.50m、幅2.10m、深さ0.12~0.16mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は4層に分層される。1層暗褐色土、2層黄色シルト、3層暗褐色土に砂が混じるもの、4層暗褐色土である。遺物は4層中より、弥生土器と石が出土した。

出土遺物 (997・998) 997・998は壺である。

時期：出土遺物から、概ね弥生時代後期とする。

S K 505 (第142図)

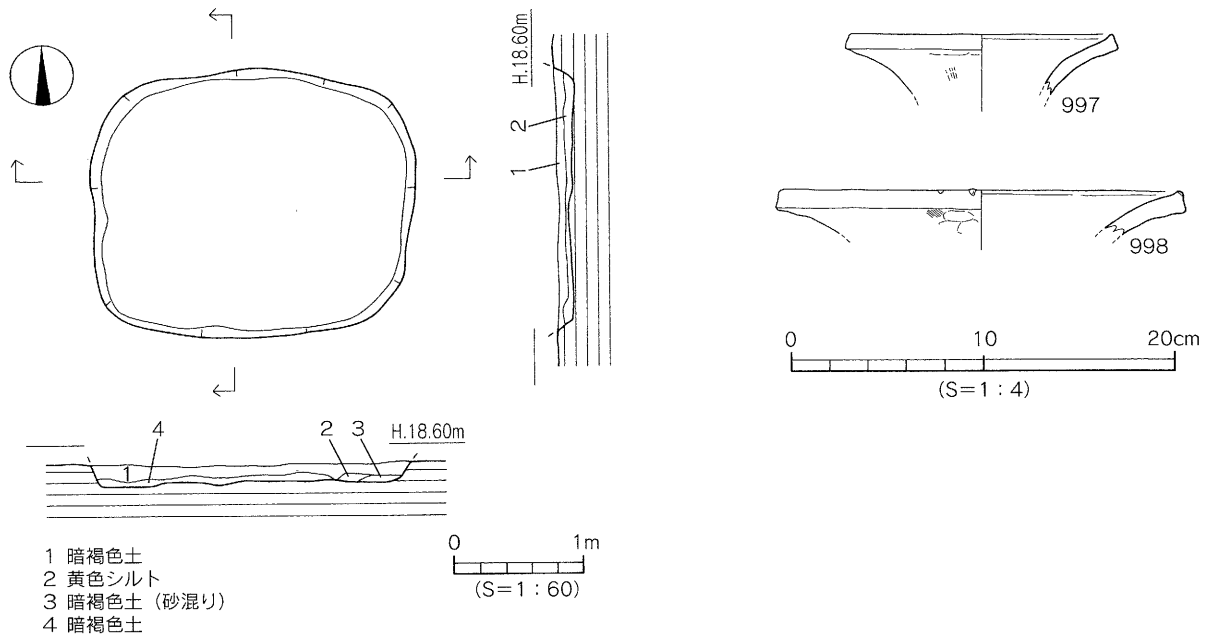
S K 505は5区東部、Q 1・2区に位置し、北側は溝S D 503に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は長方形を、規模は長さ1.40m、幅1.00m、深さ0.72~0.82mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が出土した。

出土遺物 (999~1002) 999は甕、1000は鉢、1001は甕小片、1002は文様付きの壺小片である。

時期：出土遺物から、1001は後世の混入品と認め、弥生時代中期後半とする。

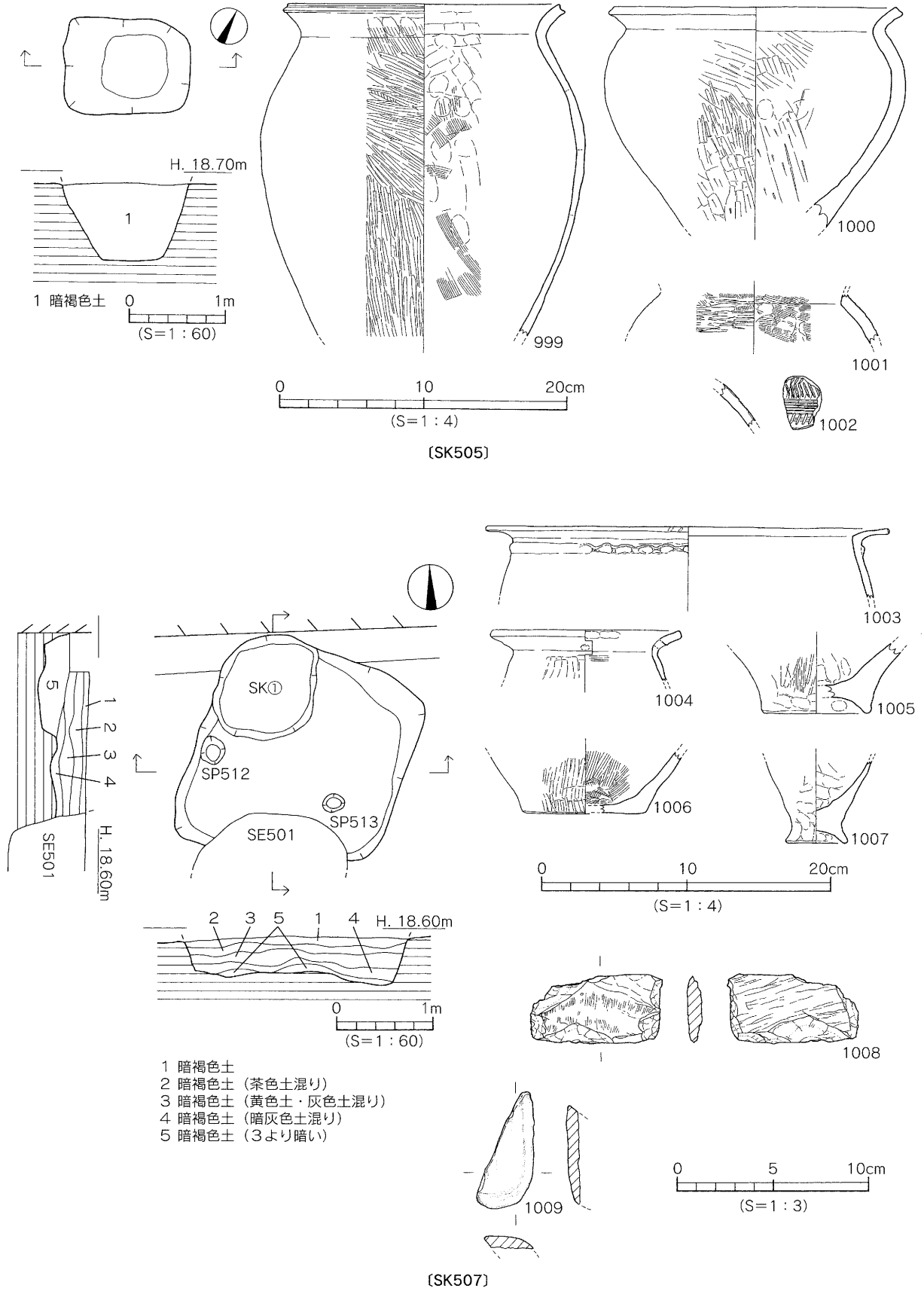
S K 507 (第142図)

S K 507は5区中央部、P 1区に位置し、南側はS E 501に中央部は柱穴に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.34m、幅2.00m、深さ0.21~0.58mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は5層に分層される。1層暗褐色土、2層暗褐色土に茶色土が混じるもの、3層暗褐色土に茶色土と灰色土が混じるもの、4層暗褐色土に暗灰色土が混じるもの、5層暗褐色土で3層より暗いものである。遺物は埋土中より、弥生土器が出土した。



第141図 SK504測量図・出土遺物実測図

西石井遺跡 1次調査地



第142図 SK505・507測量図・出土遺物実測図

土坑北西部にてS K①を検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.10m、短径1.00m、深さ0.15～0.40mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器と石器が出土した。

出土遺物（1003～1009）1003～1007は弥生中期土器で、1003～1005は甕、1006は壺、1007は鉢である。1008・1009は石器である。

時期：出土遺物から弥生時代中期後半とする。

S K 503（第143図、図版25）

S K 503は5区中央部南東側、Q 2区に位置し、北側は柱穴に切られ、南側は調査区外へ続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は東西検出長2.70m、南北検出長1.30m、深さ0.46～0.65mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器、土師器が出土した。

出土遺物（1010～1019）1010～1013は弥生中期の土器で、1014～1019は古墳時代初頭の土器である。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。

S K 302（第143図）

S K 302は3区東部、J 2区に位置し、S P 370・389に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.30m、短径1.00m、深さ0.02～0.08mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。

S K 406（第143図）

S K 406は4区中央部、N 1区に位置し、第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.80m、短径0.70m、深さ0.02～0.06mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

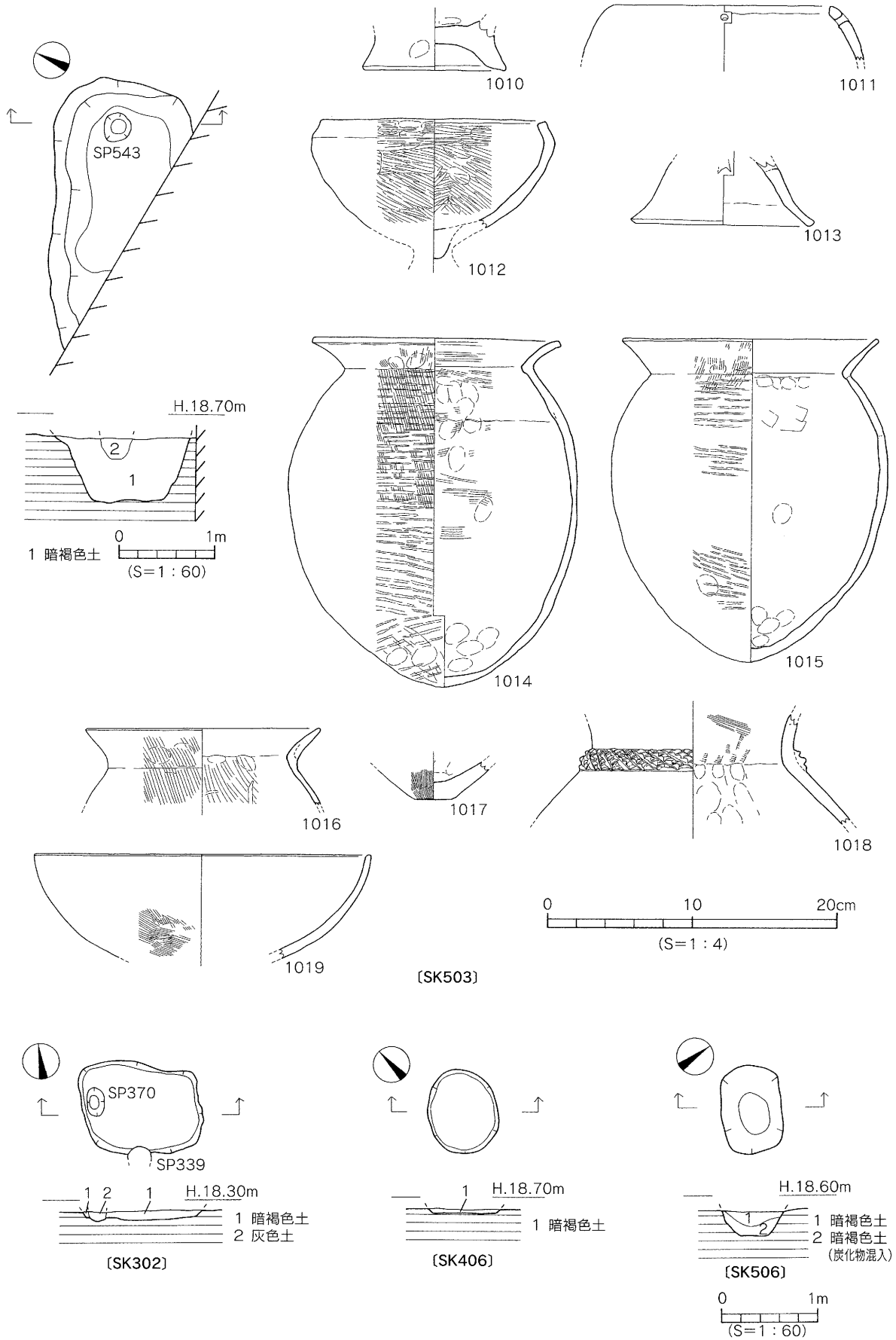
時期：出土遺物から弥生時代末とする。

S K 506（第143図）

S K 506は6区東部、R 1区に位置し、南東側はS D 503に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.90m、短径0.60m、深さ0.17～0.29mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は2層に分層される。1層暗褐色土、2層暗褐色土に炭化物が混じるものである。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。

西石井遺跡 1次調査地



第143図 SK503・302・406・506測量図・出土遺物実測図

(4) 井戸

S E 502 (第144・145図、図版26)

S E 502は5区中央部西側、P 1区に位置する。第VI①層上面で検出し、第III①層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.73m、南北検出長1.20m、深さは最深部で1.10mを測る。断面形態はすり鉢状を呈し、埋土は6層に分層される。1層暗褐色土、2層暗褐色土に黄色土が混じるもの、3層暗褐色砂質土、4層暗褐色土に灰黄色土が混じるもの、5層灰色粘質土、6層灰黄色砂である。井戸底面は第VIII層砂礫層に及ぶ。遺物は2・3・4層中より、弥生土器と石器のほか、径10~20cmの河原石が出土した。

出土遺物(1020~1035) 1020~1025は甕、1026~1030は壺、1031・1032は鉢、1033は高坏、1034は支脚であり、1020・1023~1026・1031・1032は備後からの搬入品、1027・1033は外来品である。1035は石器である。

時期：出土遺物から弥生時代末とする。

S E 501 (第146図、図版18)

S E 501は5区中央部、P 1区に位置し、北側はS K 507を切る。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.50m、短径1.30m、深さは最深部で0.82mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東・西壁はやや袋状となる。埋土は3層に分層される。1層暗褐色土、2層暗褐色土に黄色土が混じるもの、3層暗褐色土に小礫が混じるものである。遺物は2層中より、弥生土器が出土した。

出土遺物(1036) 1036は小片で、弥生中期の壺である。

時期：出土遺物と埋土から、概ね弥生時代後期とする。

(5) 土器棺墓

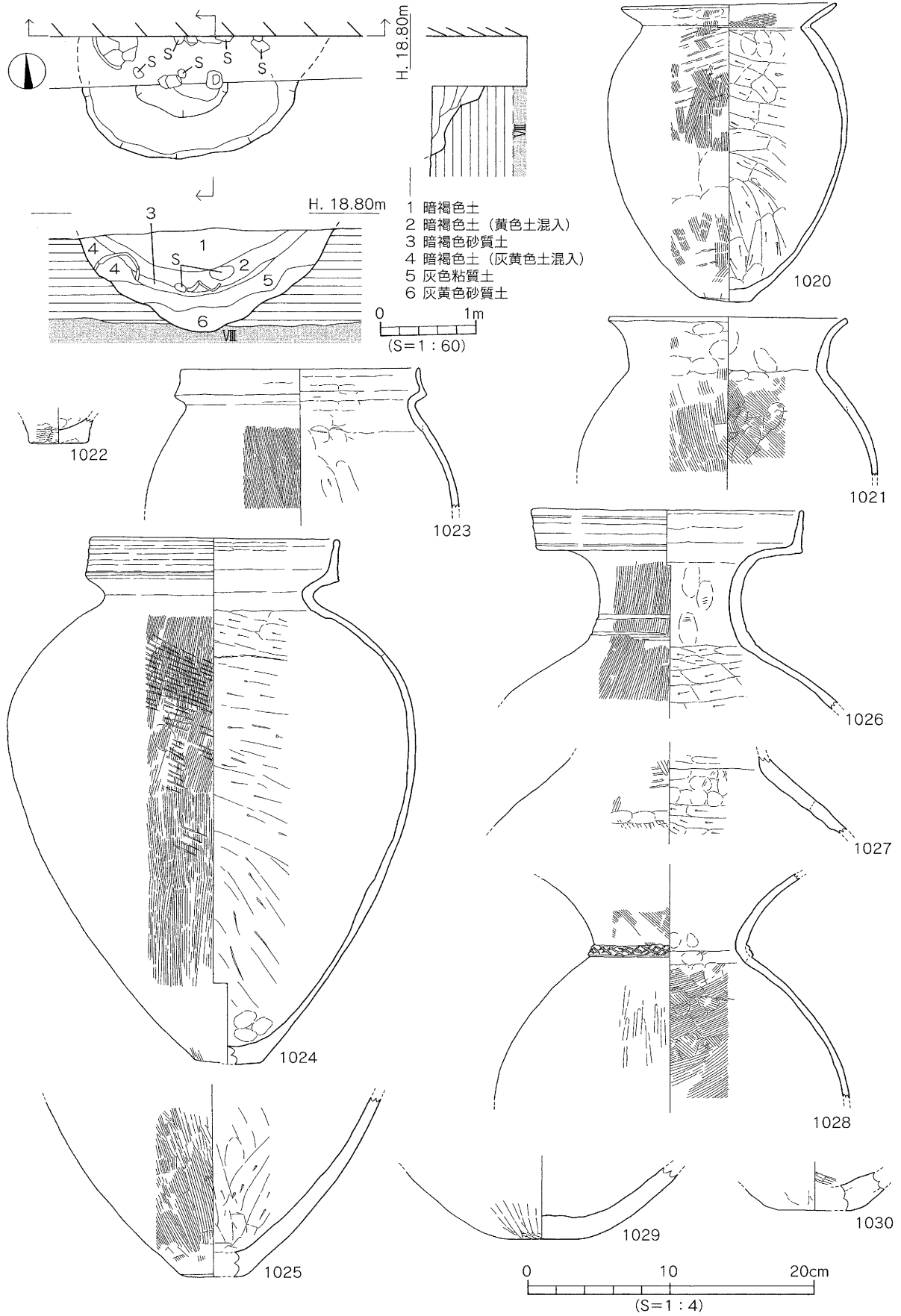
土器棺墓201 (第147・148図、図版18・25)

土器棺墓201は2区南西部、D 2区に位置する。第VI①層上面で検出した。墓坑掘り方の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.30m、短径0.80m、深さ0.11~0.30mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、南壁は垂直気味に立ち上がり、北壁は立ち上がりが緩やかである。埋土は3層に分層され、1層茶色土に暗褐色土が混じるもの、2層茶色土、3層茶色土で2層より暗いものである。棺蓋には鉢形土器を用い、棺身には複合口縁壺を使用する。棺身の下からは径10~30cm大の石が検出され、掘り方底面と棺身とが固定されていた。

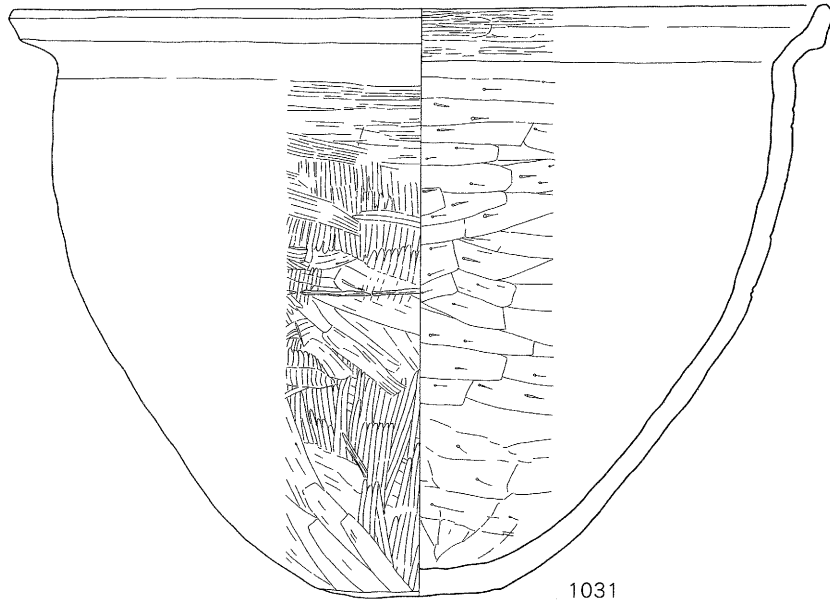
出土遺物(1037~1040) 1037は棺身で、大型の複合口縁壺である。1038は棺蓋で、大型鉢である。1039は鉢の小片、1040は複合口縁壺の小片である。

時期：出土遺物から弥生時代後期後半から末とする。

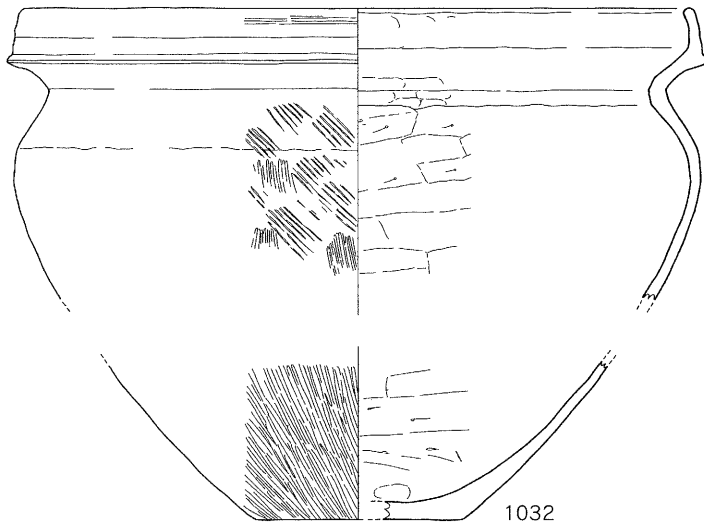
西石井遺跡 1 次調査地



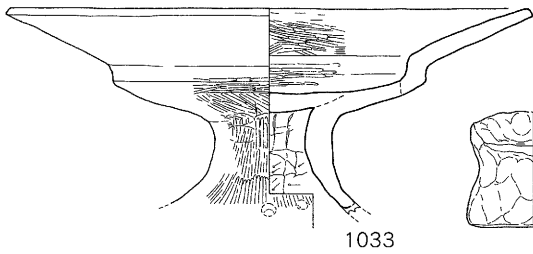
第144図 SE502測量図・出土遺物実測図(1)



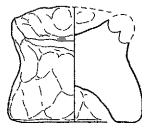
1031



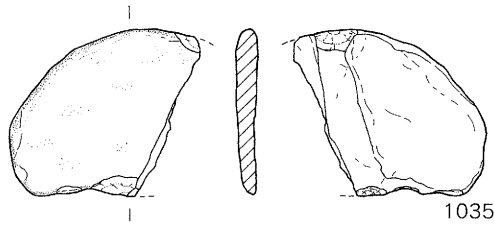
1032



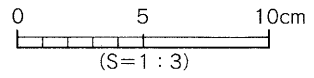
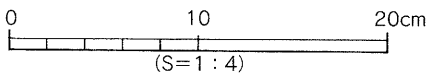
1033



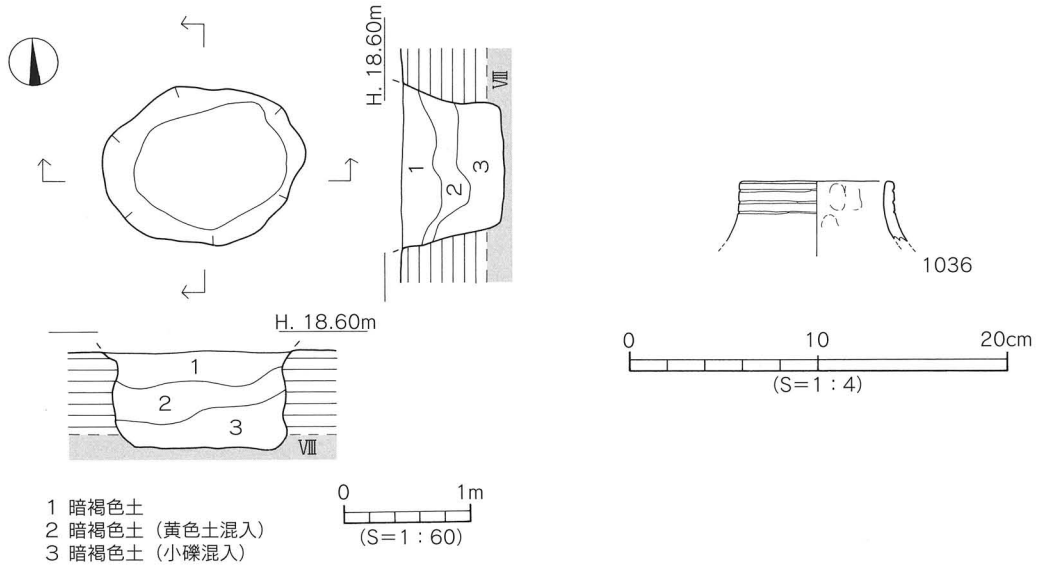
1034



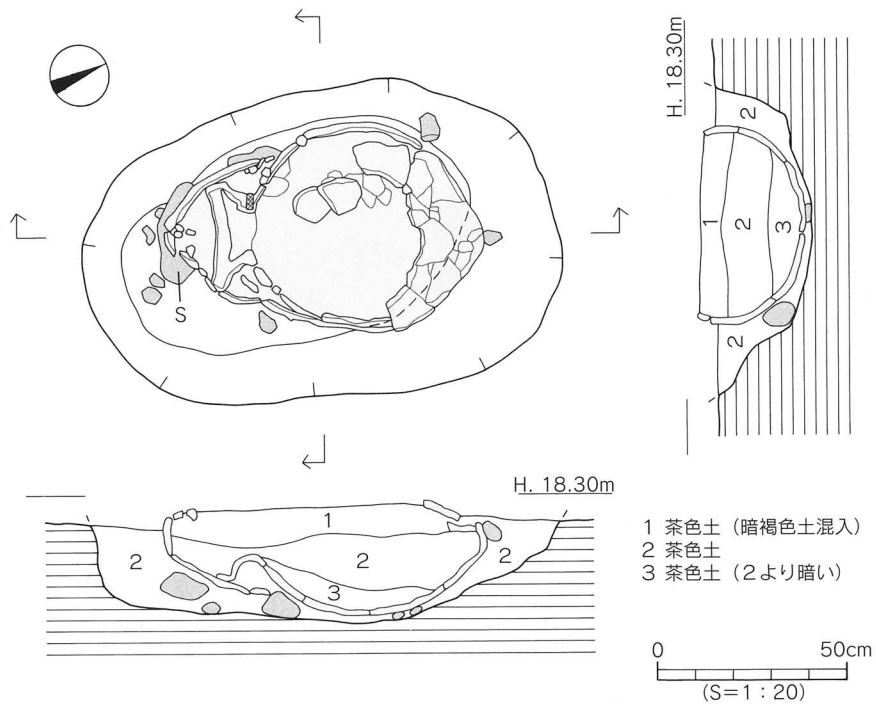
1035



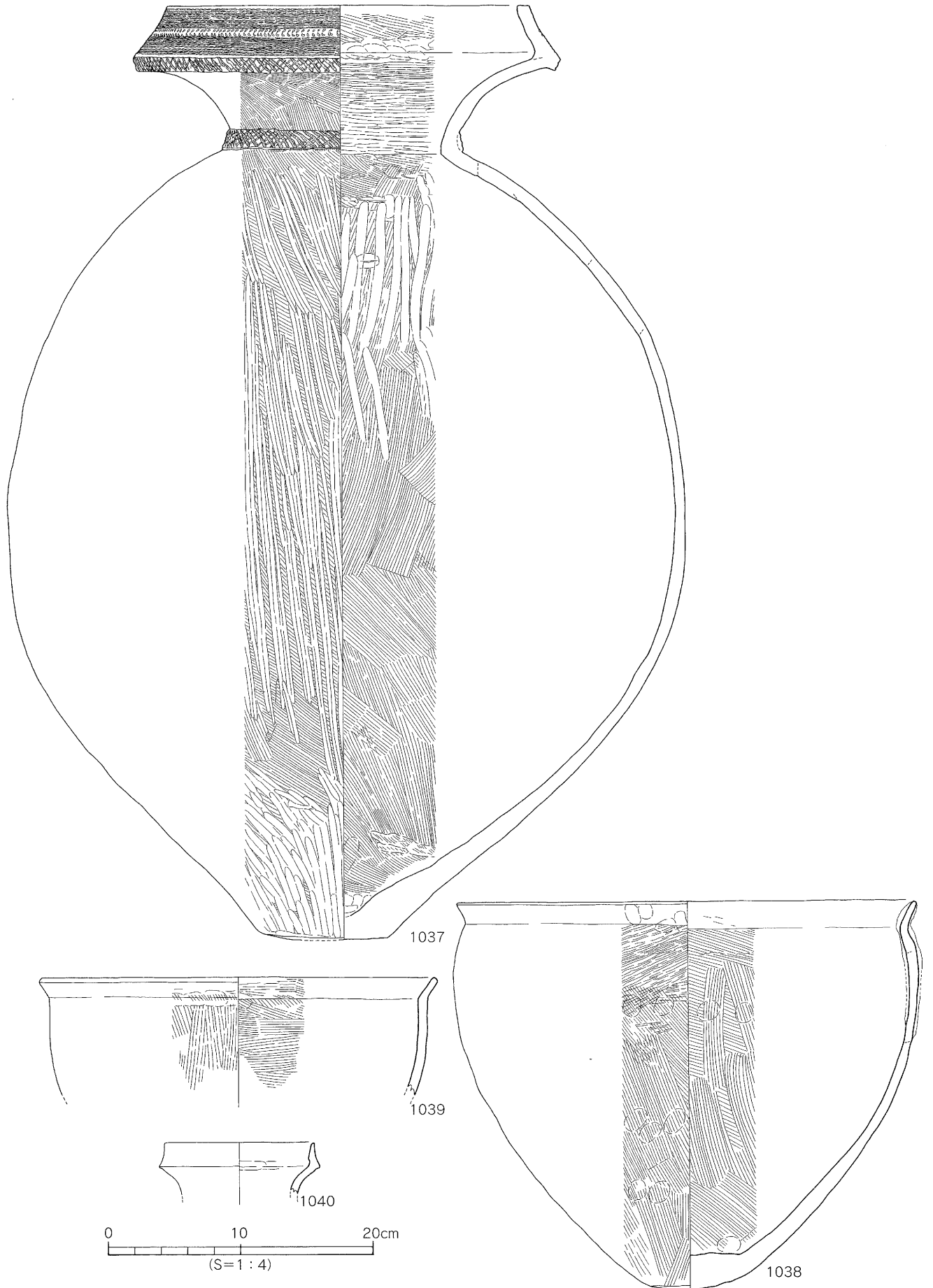
第145図 SE502出土遺物実測図 (2)



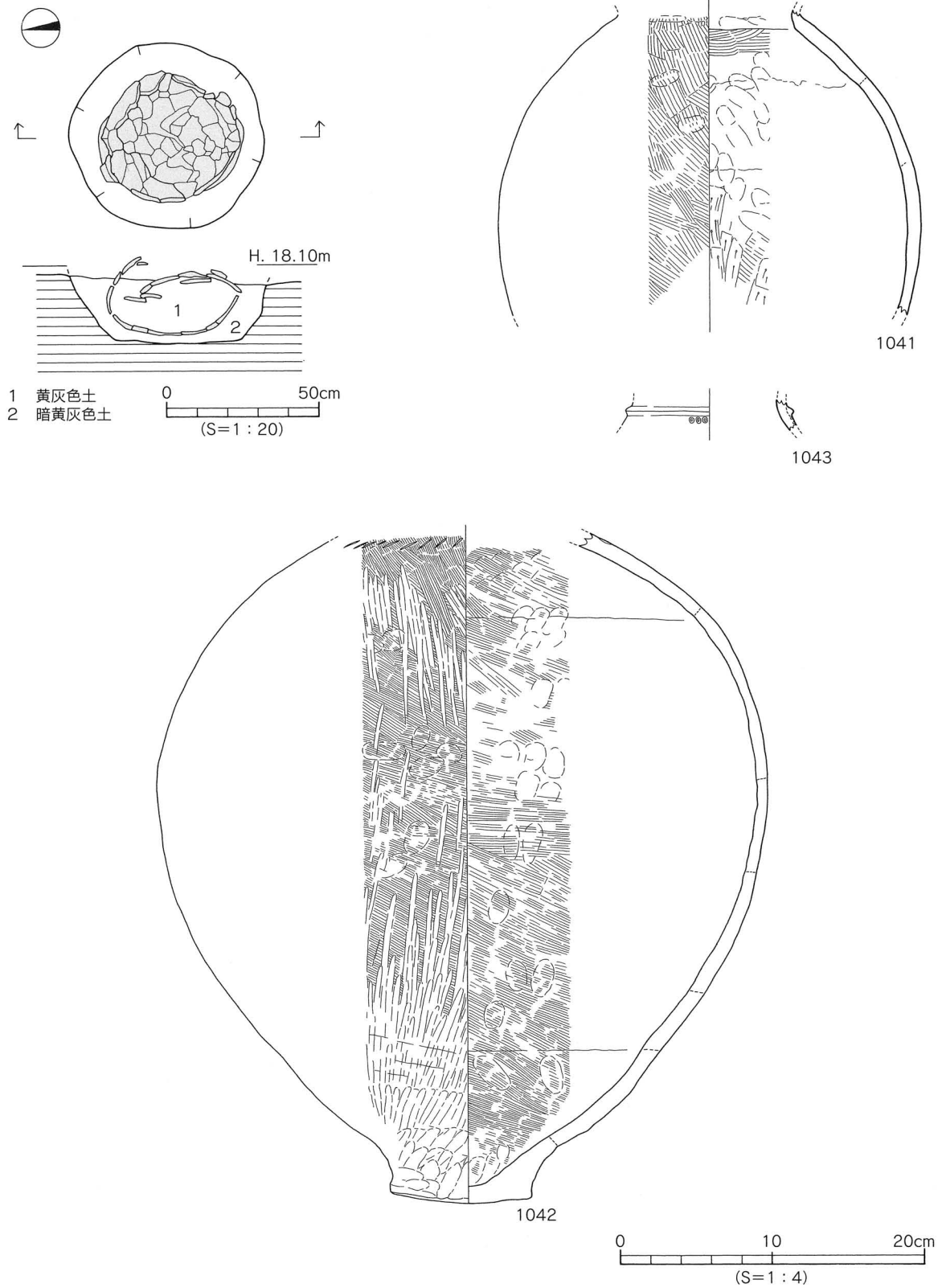
第146図 SE501測量図・出土遺物実測図



第147図 土器棺墓201測量図



第148図 土器棺墓201出土遺物実測図



第149図 土器棺墓202測量図・出土遺物実測図

土器棺墓202（第149図、図版25）

土器棺墓202は2区南西部、D2区に位置する。第VI①層上面で検出した。墓坑掘り方の平面形態は円形を呈し、規模は径0.60m、深さ0.22~0.24mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、南壁は垂直気味に立ち上がり、北壁は立ち上がりが緩やかである。埋土は2層に分層され、1層黄灰色土、2層暗黄灰色土である。棺身には壺形土器を使用する。遺物は棺身内の埋土中より鉄鏃が1点出土した。

出土遺物（1041~1043）1041は棺蓋、1042は棺身で、大型の複合口縁壺である。1043は壺の小片である。

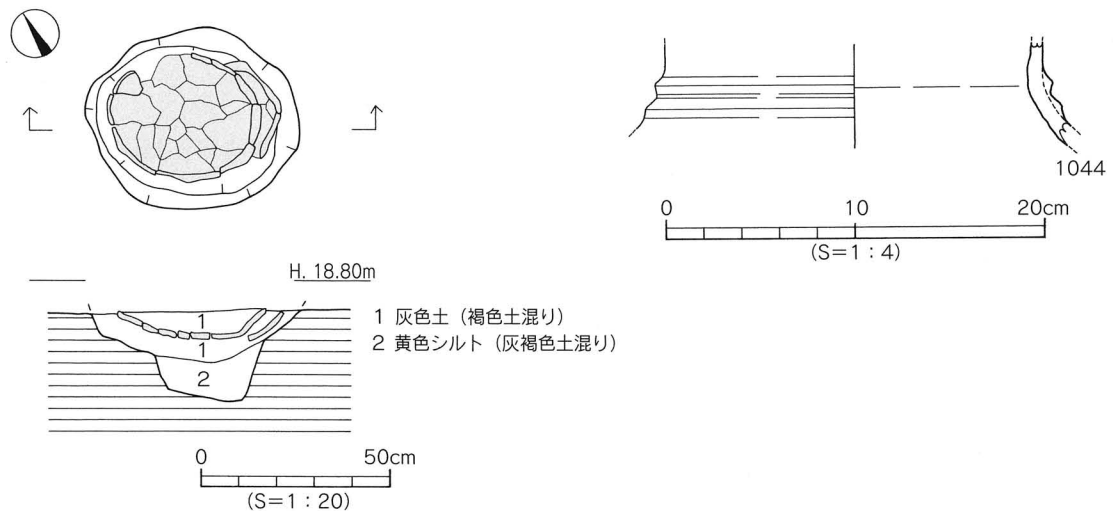
時期：出土遺物から弥生時代後期後半から末とする。

土器棺墓402（第150図）

土器棺墓402は4区東部、O1区に位置し、第VI①層上面で検出した。墓坑掘り方の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.60m、短径0.50m、深さ0.06~0.24mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は2層に分層される。1層灰色土に褐色土が混じるもの、2層黄色シルトに灰褐色土が混じるものである。棺身には壺形土器を使用する。

出土遺物（1044）1044は壺の頸部片である。

時期：出土遺物から弥生時代後期後半とする。



第150図 土器棺墓402測量図・出土遺物実測図

4. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴式住居址 2 棟、溝 3 条、土坑 3 基である。

(1) 竪穴式住居址

S B 204 (第151・152図、図版17)

S B 204は 2 区北西部、D・E 1 区に位置し、南西側は S X 201 に、北西側は S K 204 に切られ、西側は S B 202 を切り、北東側は調査区外に続く。第 VI ①層上面で検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西長 5.40m、南北長 5.00m、壁高は 0.18~0.30m、床面積は 27.0m² を測る。埋土は 4 層に分層される。1 層暗褐色土に黄色土が混じるもの、2 層黄色粘質土、3 層鈍い黄褐色土、4 層褐灰色シルトに黄色土と炭化物が微かに混じるものである。なお、2 層は床面修築のための貼床土である。内部施設は、炉址と周壁溝を検出した。炉址は住居址中央部の貼床土 (2 層) 上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径 0.54m、短径 0.49m、深さ 0.12m を測る。埋土は 3 層に分層される。1 層鈍い黄褐色土、2 層褐灰色シルトに黄色土と炭化物が微かに混じるもので、3 層は焼土である。周壁溝は北壁の土層観察で確認したが、平面では確認できなかった。規模は幅 0.14m、深さ 0.24m を測る。埋土は、暗褐色土に黄色土と茶色土とが混じるものである。遺物は住居址埋土中より、弥生土器、土師器、石器が出土した。

出土遺物 (1045~1076) 1045~1051 は甕で、1050 は近畿系、1051 は外来系である。1052~1061 は壺で、1062~1064 は鉢、1065~1068 は高坏、1069~1072 は支脚である。1073・1074 は弥生中期土器、1075 は陶器である。1076 は石器である。

時期：出土遺物から古墳時代前期とする。

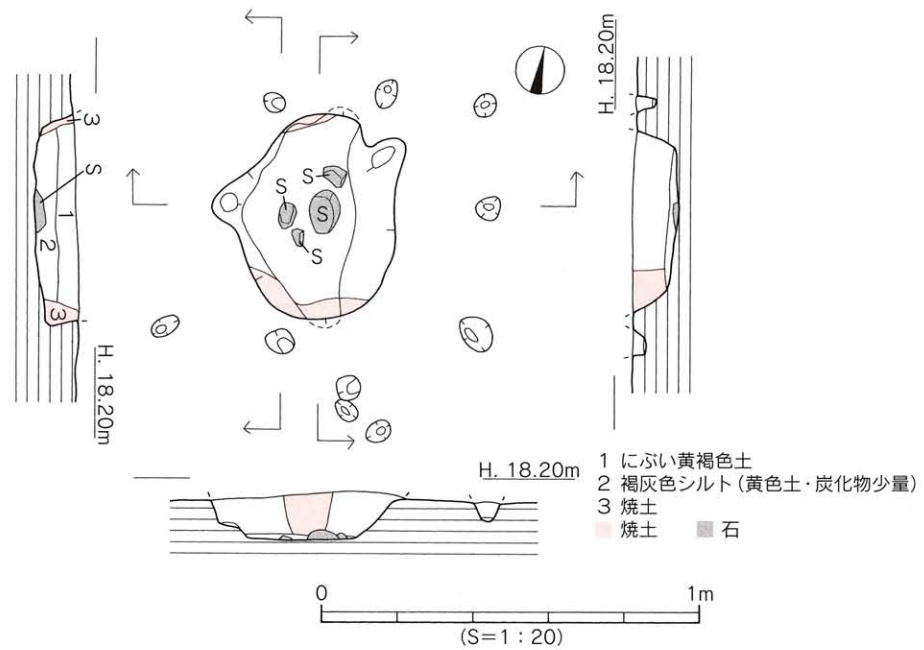
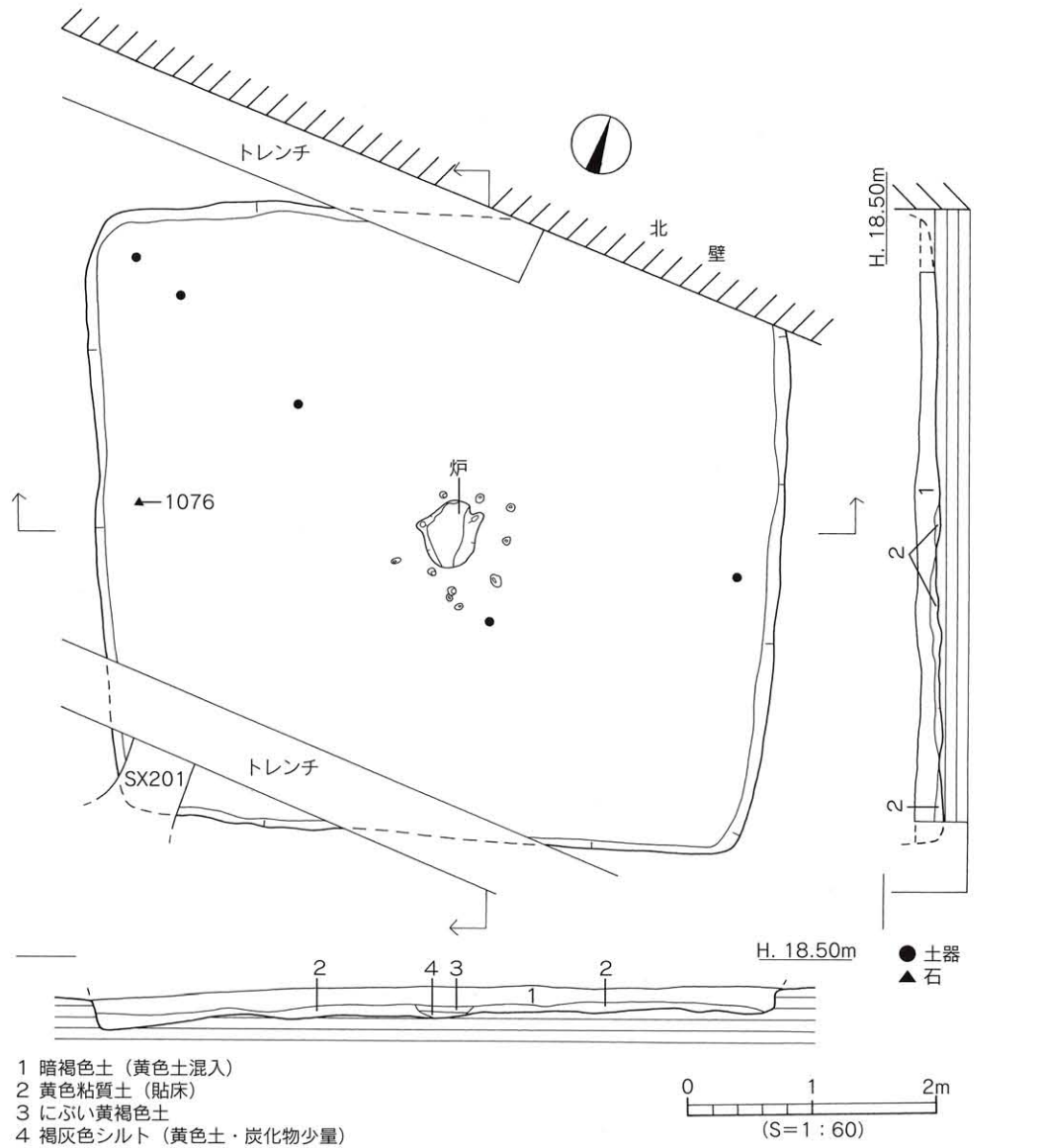
S B 302 (第153図)

S B 302は 3 区南西部、H・I 2 区に位置し、南側は柱穴に切られ、北側は S K 301 に切られる。第 VI ①層上面で検出した。平面形態は方形を呈し、規模は東西長 2.80m、南北長 2.90m、壁高は 0.07~0.15m、床面積は 8.1m² である。埋土は灰黄褐色土単層である。内部施設は炉址、周壁溝、柱穴 1 基を検出した。炉址は、床面中央部で検出した。平面形態は不整円形で、規模は径 0.45m~0.48m、深さ 0.06m を測る。埋土は、褐灰色シルトに焼土・炭が混じるものである。周壁溝は、住居址南側で検出し、規模は検出長 0.24~0.42m、幅 0.06~0.15m、深さ 0.03~0.12m を測る。埋土は褐灰色シルトである。柱穴 (S P ①) は、住居址北西部床面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径 0.24~0.30m、深さ 0.03~0.12m を測る。柱穴埋土は褐灰色シルトである。遺物は埋土中及び床面より、弥生土器、土師器、石器が出土した。

出土遺物 (1077~1086) 1077~1080 は近畿系甕、1081 は複合口縁壺、1082・1083 は鉢、1084・1085 は脚台、1086 は石器である。

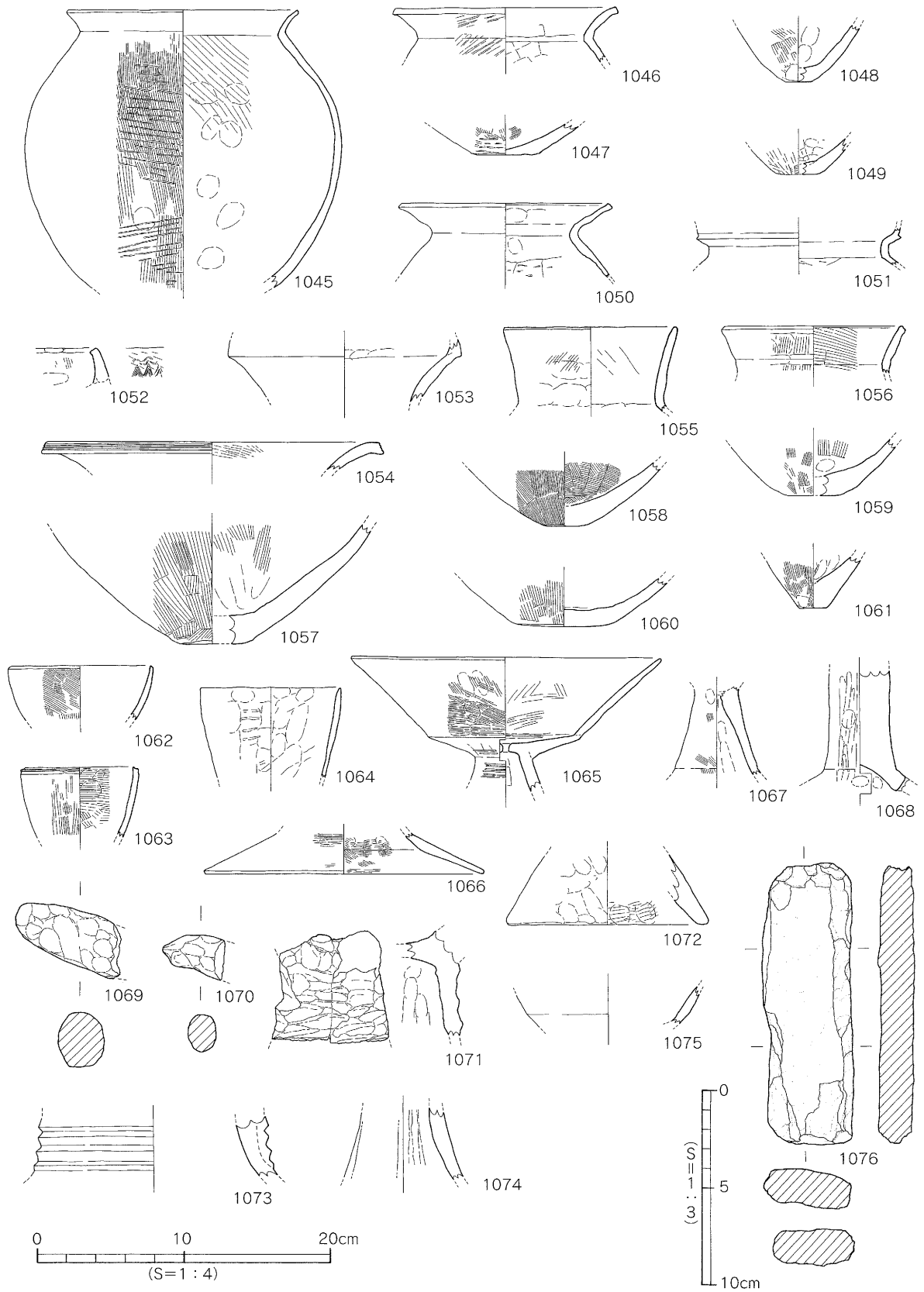
時期：出土遺物から古墳時代前期とする。

古墳時代の遺構と遺物



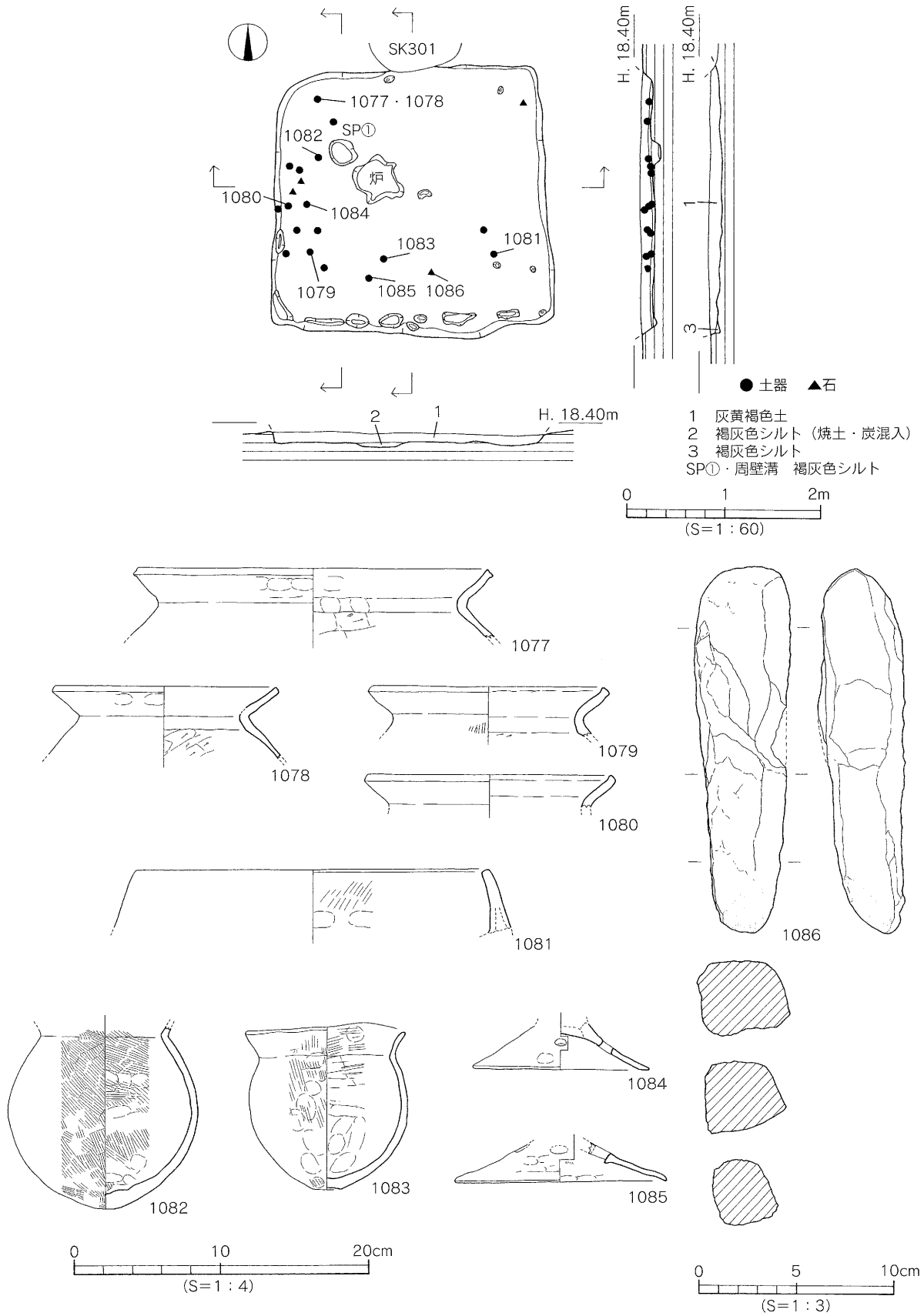
第151図 SB204・204内炉測量図

西石井遺跡 1次調査地



第152図 SB204出土遺物実測図

古墳時代の遺構と遺物



第153図 SB302測量図・出土遺物実測図

(2) 溝

S D 201 (第154～212図、図版19・20・27～38)

S D 201は2区北東部から南西部、D 2～H 1区に位置し、S D 202・S D 207を切り、S D 203に切られ、溝両端は調査区外へ続く。第Ⅵ①層上面で検出し、第Ⅲ①層が覆う。規模は検出長39.00m、幅2.80～4.35m、深さ0.15～1.10mを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は6層に分層される。1層褐色土に砂が混じるもの、2層褐色土、3層灰色粘質土、4層暗灰色粘質土、5層灰色粘質土に砂が混じるもの、6層黒色粘質土である。遺物は、2・3・4層内に集中しており、溝中央部付近に完形品を含む大量の土器が並べられた状態で出土した。以下、発掘調査時の経緯と整理作業及び遺物掲載方法をふまえて説明をおこなう。

取り上げ方法：資料の重要性を鑑み、遺物の出土状況と作業の進行状況とを記しておく。

出土品は、コンテナ約400箱分に達した。調査当初の検出時には、幾つかの土器片が散布するに過ぎなかった。そこで、一部は番号を付け取り上げを行ったが、多くは小グリッドを設定して遺物の取り上げを行った。その後、掘り下げを進むと、完形品ないしそれに近い遺存の良い土器が列状に検出された。作業は調査期間の制約から、写真撮影をし、写真に撮った遺物に番号を付け、平板測量でドットとレベルを記録しながら、取り上げを行った。取り上げ後には、溝の基底面が小さく溝状に窪むことを確認し、その埋土を掘り完掘とした。

また、遺物の出土が良好であったので、調査対象地の境まで調査地を南に拡張し(5～7区)、土層と遺物の関係を確認しながら、遺物の取り上げをした。この作業でも時間の制約があったので、詳細な記録は取れなかった。

出土品は調査と整理の結果から、大量の土器は、遺存する溝の中位付近に並べられたような状況で出土していることが分かった。具体的には、第154図の土層図の3層に大量の遺物があり、1層には小片が、2層には大型片が含まれ、4層には南の3～4区あたりで遺物が少しある。5～7区では、4・5層とした土層にも大型の土器片が含まれるが、1～4区の土層との関係が整理時点では確かでなく、注意を要する。この状況から、少なくとも1～4区の溝の堆積土は、上層・中層・下層に3大別され、土層1層が上層、2・3層が中層、4・5層が下層として比定する。この区分は、土層図から見ても分かるように、それぞれの境界線が、埋土の自然堆積に不整合が読み取れる所でもある。したがって、時間差のあることは判明するが、出土土器を見る限りには、型式差が生じるほどの時期差でない。

掲載方法：このような出土状況と作業状況から、遺物の掲載は、出土位置が詳細に判明する番号付き(図化したもの)の取り上げ資料と、土層・グリッドを確認して取り上げ資料とに大別し、それぞれでは、グリッドや層位の違いに基づいて、区別して掲載した。

1) 取り上げ番号付き資料(1087～1337)：中層の出土遺物である。

① 0～1区(1087～1131)：調査地の北・東の端にあたる。

甕(1087～1104)には、在地甕と外来系甕とがある。在地甕には、外面がハケメ調整と、タタキとがある。外来系には、近畿系の1101～1103と吉備産の1104とがある。壺(1105～1115)と鉢(1116～1122)は在地系ものである。高坏(1123～1127)には、外来系多く、赤色顔料の付く1124や加飾の著しい1127は吉備系で、1125は備中産の可能性がある。支脚(1129～1131)には、高低の二種がある。

② 2区(1132～1215)：調査地中央部の東側部分にあたる。

甕（1132～1159）には、在地甕と外来系甕とがある。在地甕には、外面がハケメ調整と、タタキとがある。外来系には、吉備産の1154～1156、讃岐の下川津B類の1157、近畿系の1158・1159がある。壺（1160～1174）には、在地系の中に近畿系の二重口縁壺1172、赤色顔料付きの1171がある。鉢（1175～1197）には、在地系、吉備系1194・1195、外来的な1196、製塩土器状の1197がある。甗（1198～1200）は焼成前穿孔である。高坏（1201～1209）には、外来系の1201・1202、吉備系の1206、赤色顔料付きの1208がある。支脚（1210～1212）は受部に二種ある。ミニチュアには1213・1214、縄文系突帯文甕には1215がある。

③3区（1216～1336）：調査地中央部の西側部分にあたる。

甕（1216～1259）には、在地甕と外来系甕とがある。在地甕には、外面がハケメ調整と、タタキとがある。外来系には、吉備産の1253・1254、備後産の1255、讃岐・下川津B類の1256、近畿系の1257～1259がある。壺（1260～1294）には、赤色顔料付きの1272、在地系の中に近畿系の二重口縁壺1273、吉備産の1294がある。鉢（1295～1312）には、在地系、吉備系1310、脚台付き1311・1312がある。高坏（1313～1320）には、近畿系の1316、吉備系の1315・1317、赤色顔料付きの1320がある。支脚（1321～1331）には、高低の二種がある。甗（1332・1333）は焼成前穿孔である。異形品には1334、蓋には1335、鳥形注口土器には1336がある。

④4区（1337）：調査地の南端にあたる。甕1337がある。

2) 土層・グリッドで取り上げた土器（1338～1989）

①0～1区（1338～1474）：調査地の北・東の端にあたる。

1層出土品：1338～1351があり、1338・1339は近畿系甕、1340は近畿系二重口縁壺、1344は中国系鉢ないし甕、1347は讃岐・下川津B類土器の胴部片である。

2層出土品：1352～1382があり、1352～1356は近畿系甕、1373は赤色顔料付き高坏、1374は外来系高坏、1381は縄文系突帯文甕、1382は鉄器である。

3層出土品：1383～1458があり、1397～1399は近畿系甕、1400～1424は壺、1425～1429は鉢、1430～1437は脚台付鉢である。うち1435は外来的坏部、1437は赤色顔料付き脚部。1438は近畿系小型器台、1439・1440は網籠目付き。1441～1453は高坏で、1441・1143・1446・1447は赤色顔料付き、1442は讃岐・下川津B類、1443は吉備系、1444は外来系、1452は赤色顔料付きである。

4層出土品：1459～1466である。

5層出土品：1467～1470があり、1470は孤帯紋付きのミニチュア品である。

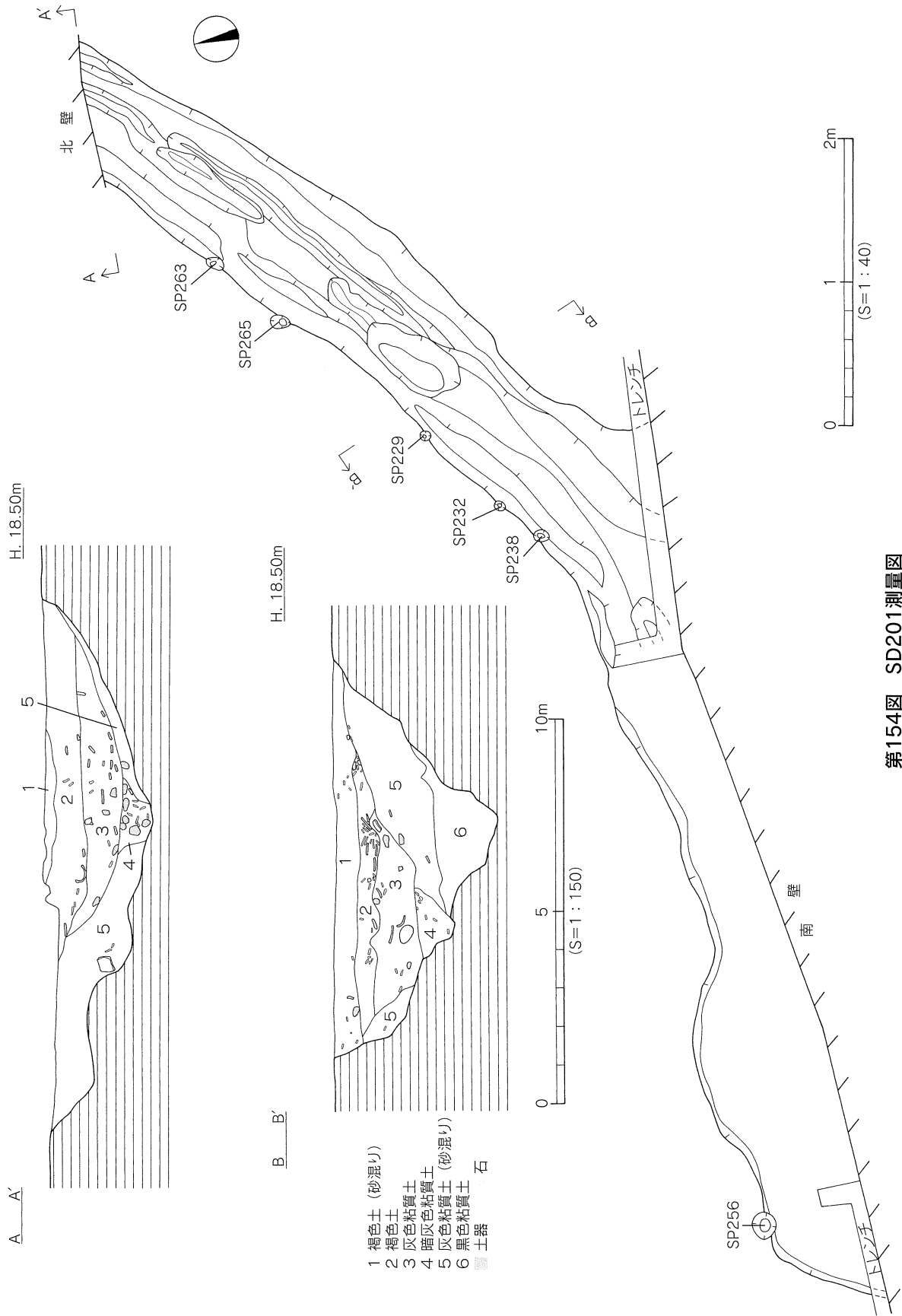
層不明出土品：1471～1474があり、1474は弥生中期土器である。

②2区（1475～1561）：調査地中央部の東側部分にあたる。

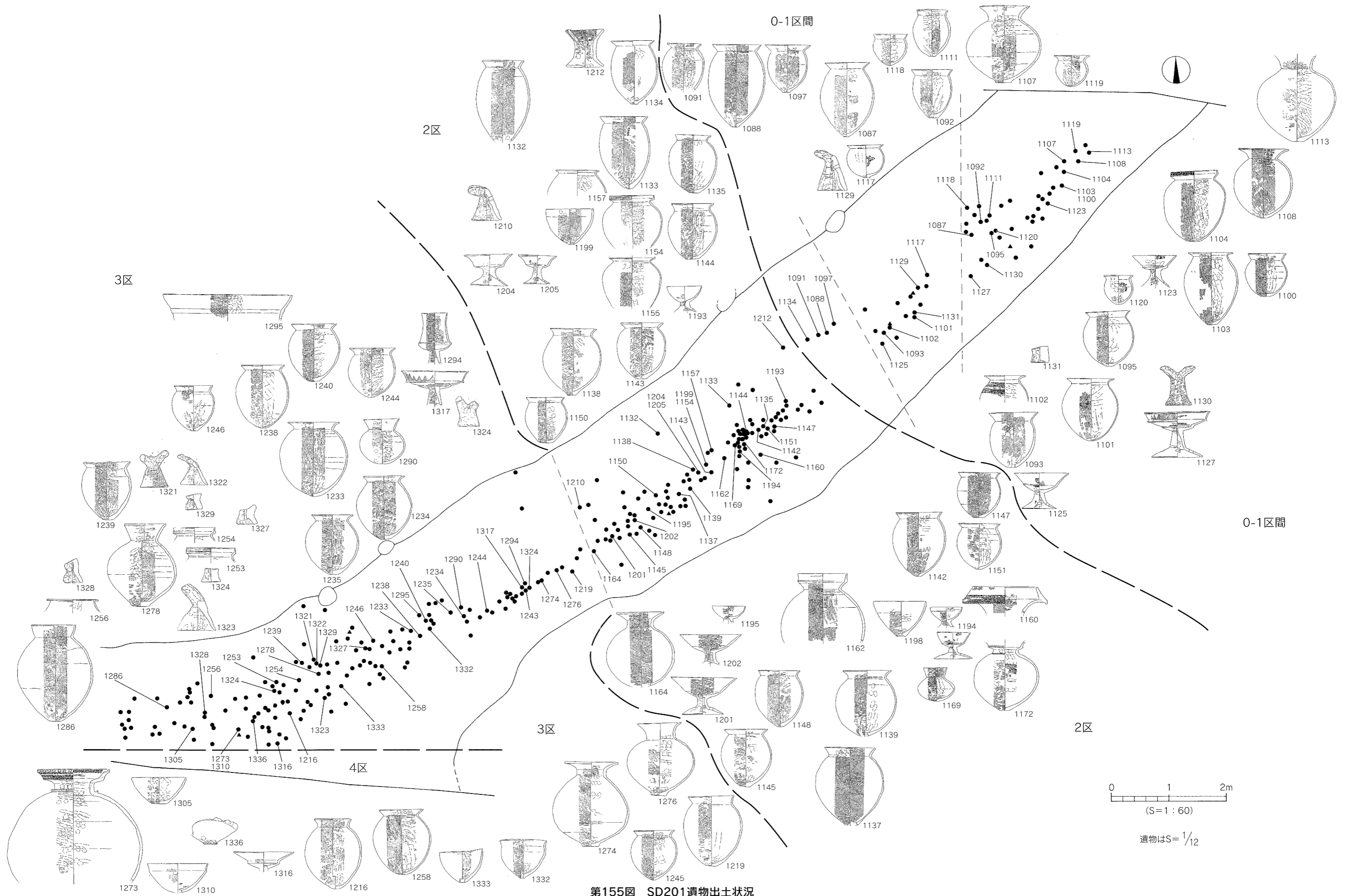
1層出土品：1475～1482があり、1477・1478は外来系壺、1479・1480は中国系鉢である。

2層出土品：1483～1508があり、1483・1484は近畿系甕、1485・1486は二重口縁壺、1487は外来系壺、1488・1489は近畿系壺、1493・1494は線刻土器、1500は中国系鉢、1503～1505は有段高坏、1507は吉備系脚である。

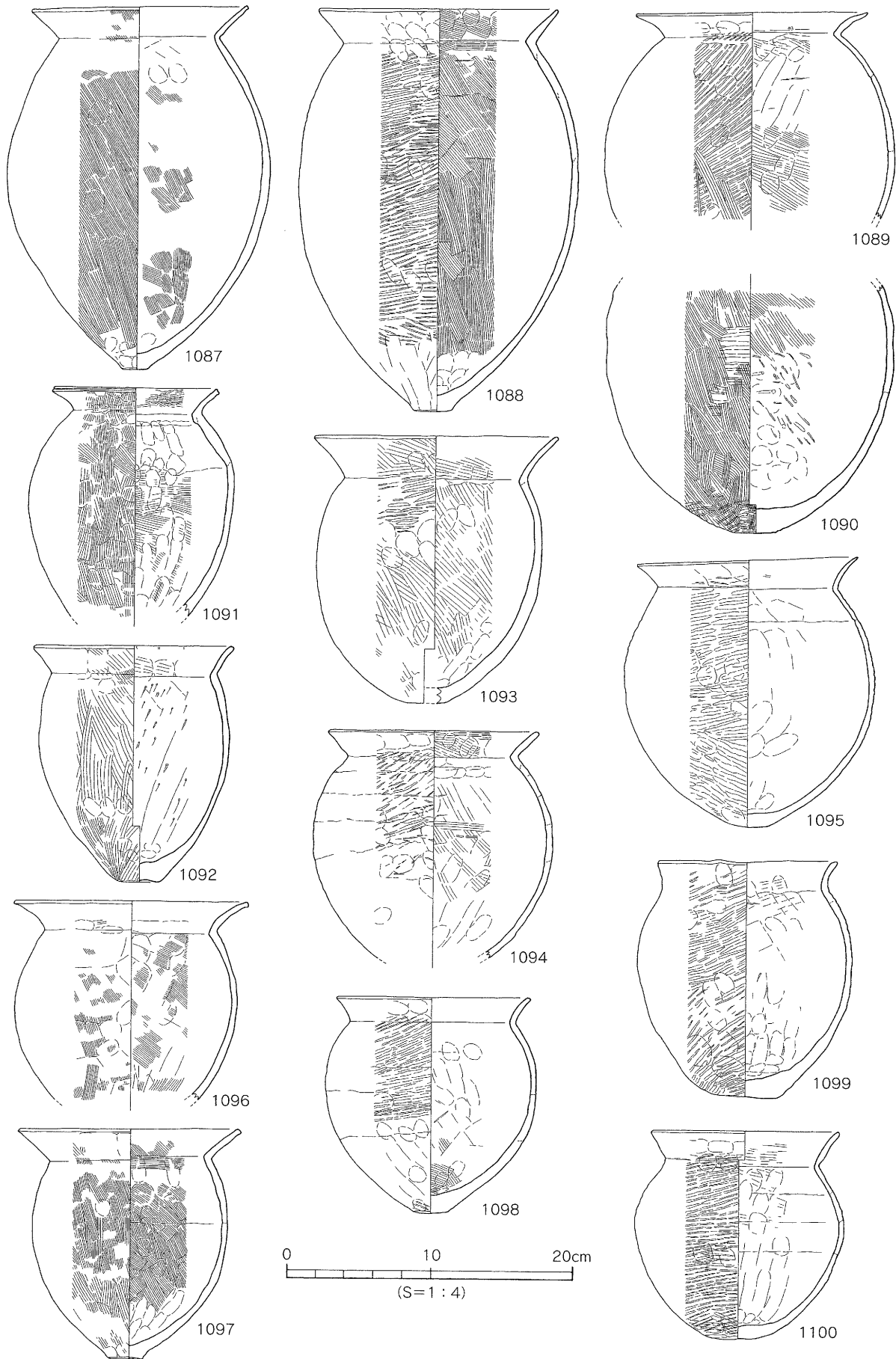
3層出土品：1509～1561があり、1514・1515は吉備産甕、1516は讃岐・下川津B類の甕、1517～1520は近畿系甕、1525は広島県瀬戸内沿岸産の壺、1526は近畿系二重口縁壺、1529は外来系壺、1533・1534は近畿系二重口縁壺、1552は吉備系鉢、1556は赤色顔料付き脚部である。



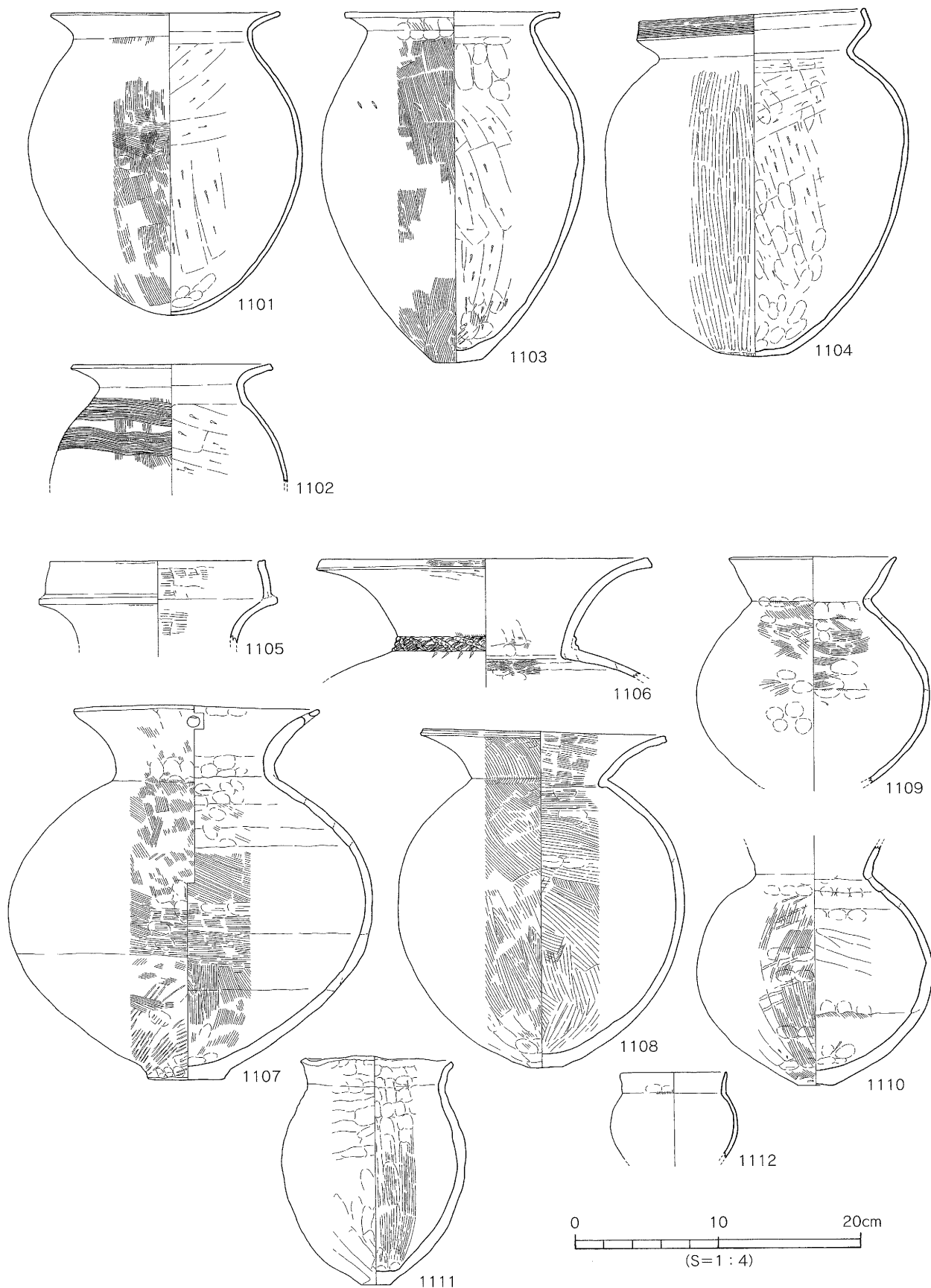
第154図 SD201測量図



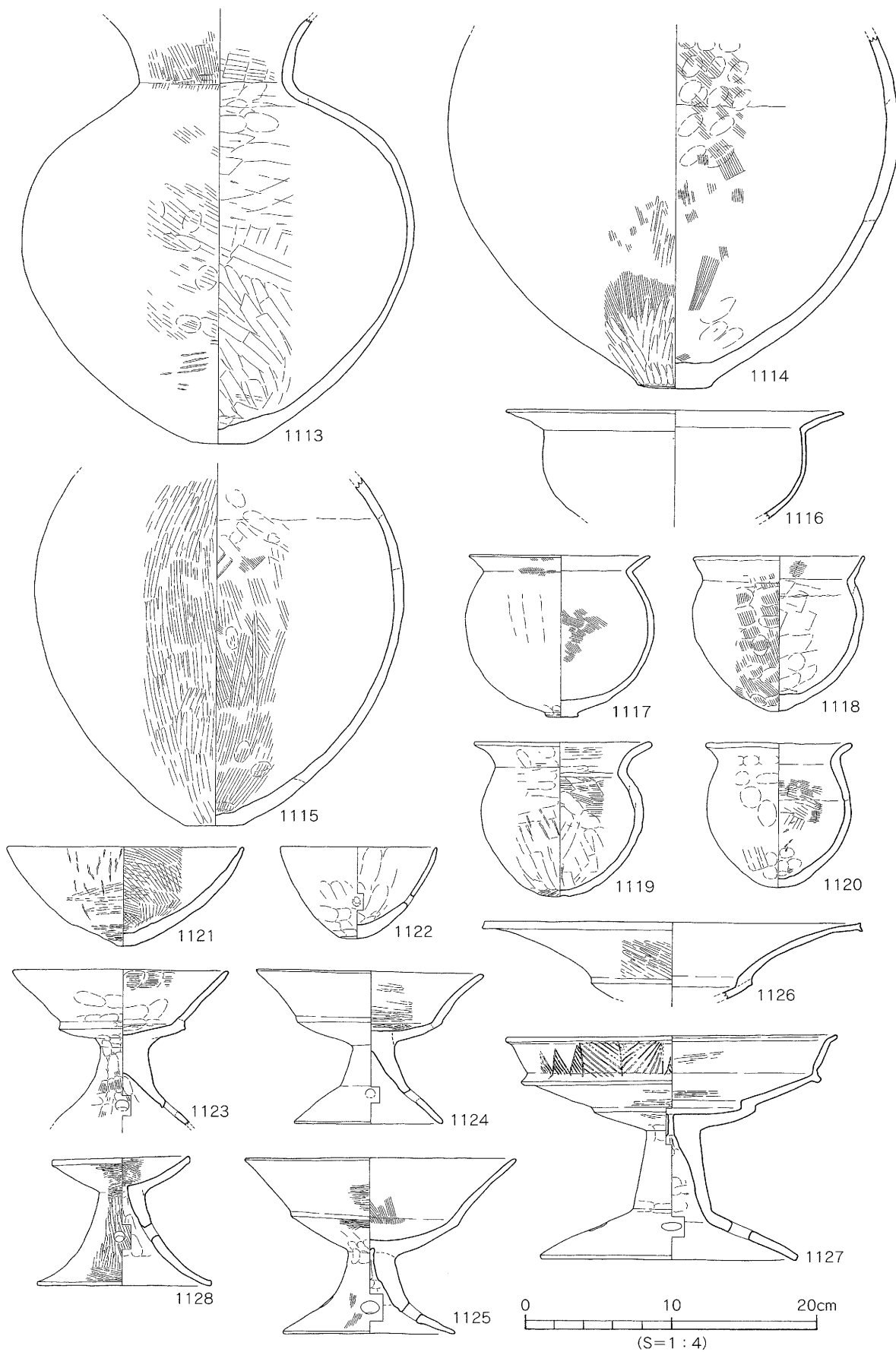
第155図 SD201遺物出土状況



第156図 SD201出土遺物実測図(0-1区間) (1)



第157図 SD201出土遺物実測図(0-1区間)(2)



第158図 SD201出土遺物実測図(0-1区間)(3)

③3～4区(1562～1763)：調査地中央部の西側～南端部にあたる。

1層出土品：1562～1564があり、1563・1564は外来系壺である。

2層出土品：1565～1604があり、1566・1567は近畿系甕、1575は近畿系二重口縁壺、1576・1577は線刻土器、1578・1579は備後系壺、1580～1583は近畿系二重口縁壺である。1584は大型の二重口縁壺で、口縁部外面・頸部・胴部上半部に波状文を施す。形状や文様には、類例がないが、胎土からは香川県東部に近似する。1585は赤色顔料が付着する。1586は中国系大鉢、1591は吉備系鉢、1592は外来系鉢、1593は赤色顔料と見られるものが付く高坏。

3層出土品：1605～1743があり、1624～1631は近畿系甕、1632は讃岐・下川津B類の甕、1642は外来系壺、1659～1664は近畿系二重口縁壺、1665は外来系壺、1666は豊後産壺、1667は弥生中・後期の壺、1668は大型の複合口縁壺、1673は弥生中期の無頸壺である。1675は線刻土器で、①～⑥は同一個体品である。1677は赤色顔料付き鉢、1693・1694は中国系鉢、1697は赤色顔料付き高坏、1701・1702は近畿系有段高坏、1719～1724は赤色顔料付き高坏、1742・1743は弥生中～後期初頭土器である。

4層出土品：1744～1746である。

層不明出土品：1747～1763があり、1749は外来系壺、1750は香川県東部に似た形状の壺、1751近畿系直口壺、1752～1754は近畿系二重口縁壺、1756は外来系壺、1761・1762は線刻土器、1763は鉄器である。

④5～7区(1764～1936)：調査地西部にあたり、短時間で調査した地点である。

1・2層出土品：1764～1766がある。

3層出土品：1767～1926があり、1815～1818は近畿系甕、1826は片岩を含む壺、1855は備後産壺、1856は西南四国系壺、1865は記号的文様が付く。1925は赤色顔料付き(?)鉢である。

4層出土品：1927がある。

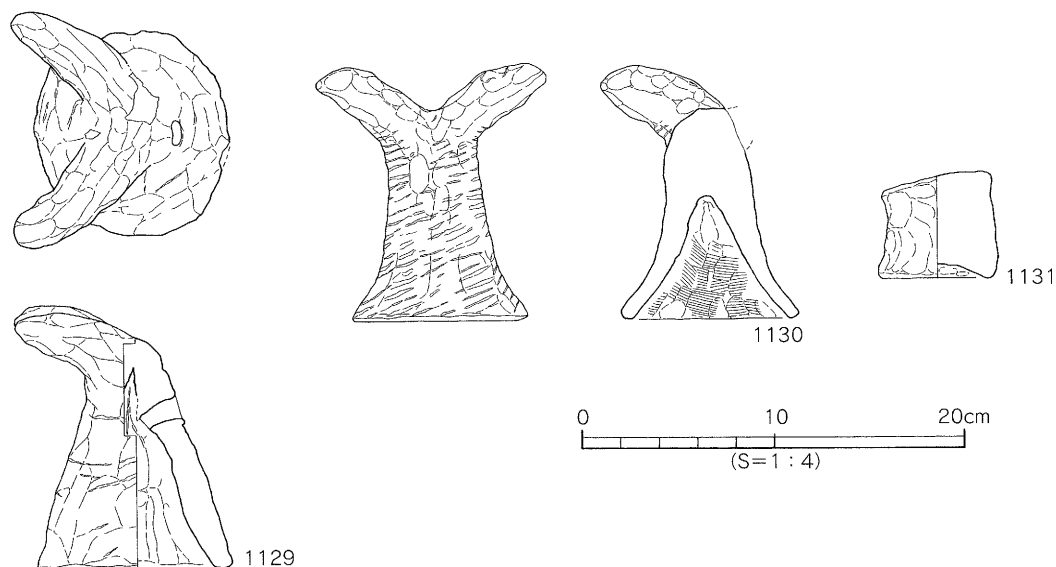
5層出土品：1928～1935がある。

層不明出土品：1936の弥生中期の高坏がある。SB204出土片と接合。赤色顔料付着。

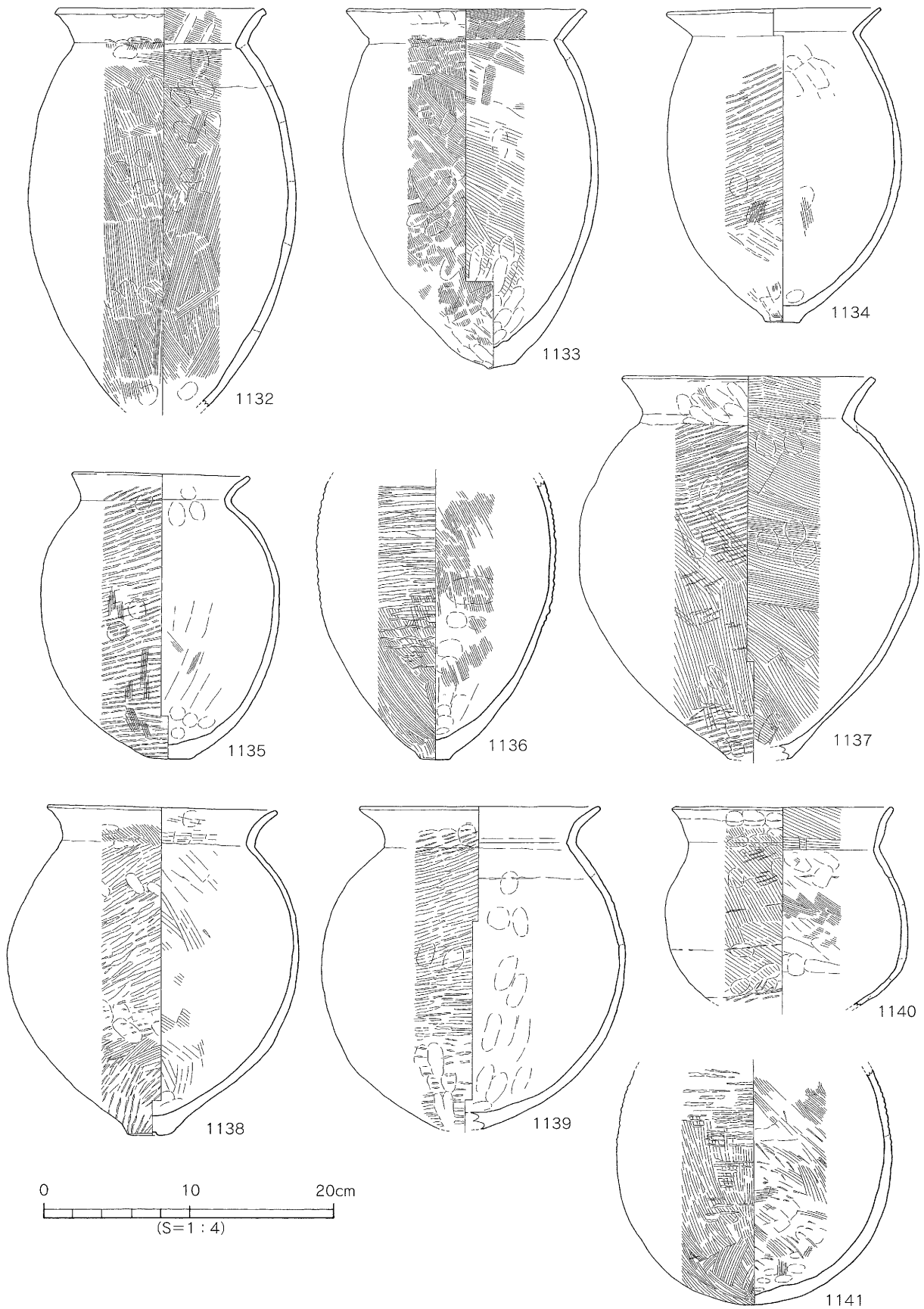
⑤その他の資料(1937～1951)：出土グリッドが不明なものである。

2層出土品：1937～1948があり、1937は外来系甕、1938・1939は外来系壺、1940は中国系鉢である。

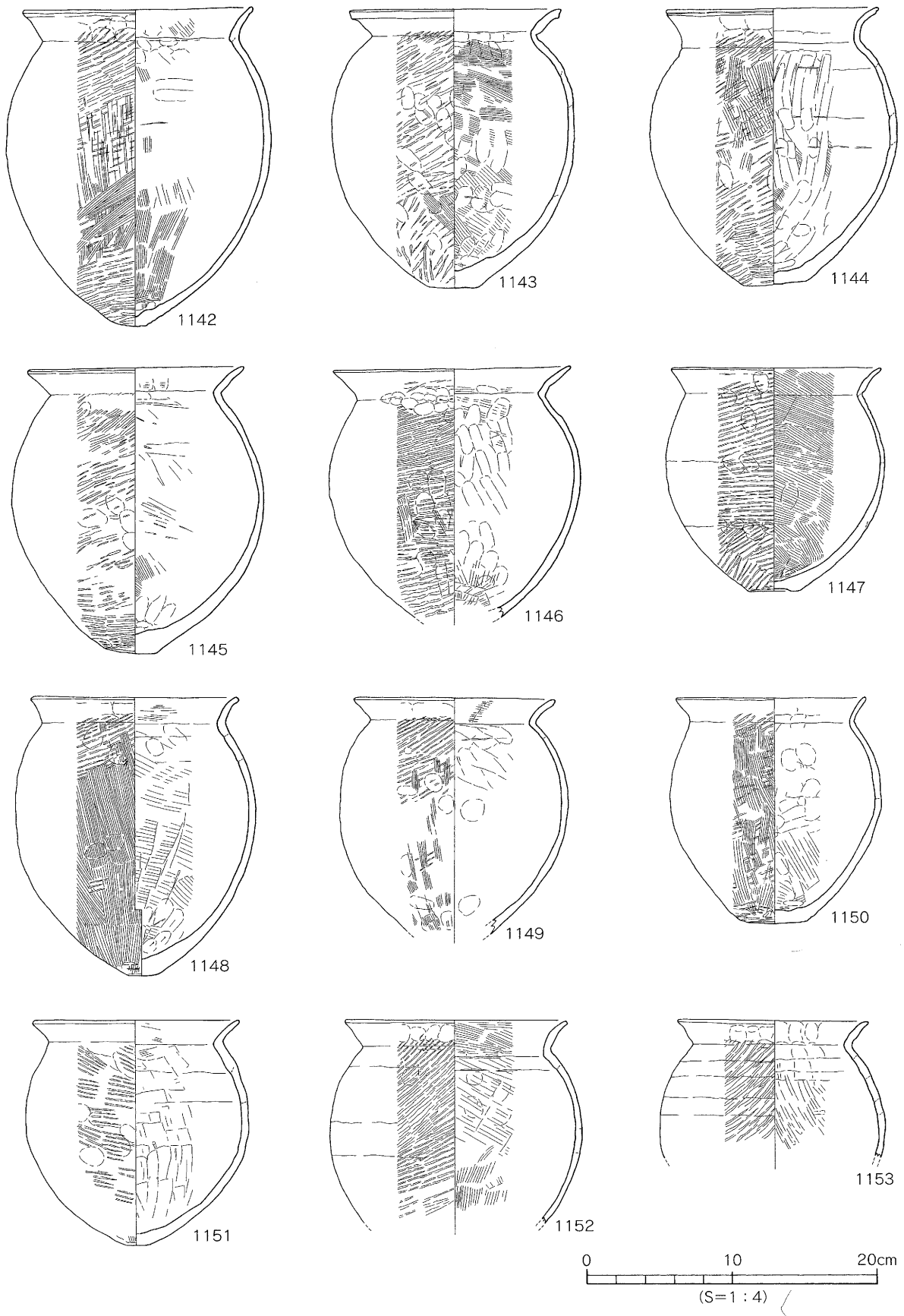
地点不明遺物：1949～1951があり、1949は線刻土器、1950は土玉、1951は転用紡錘車である。



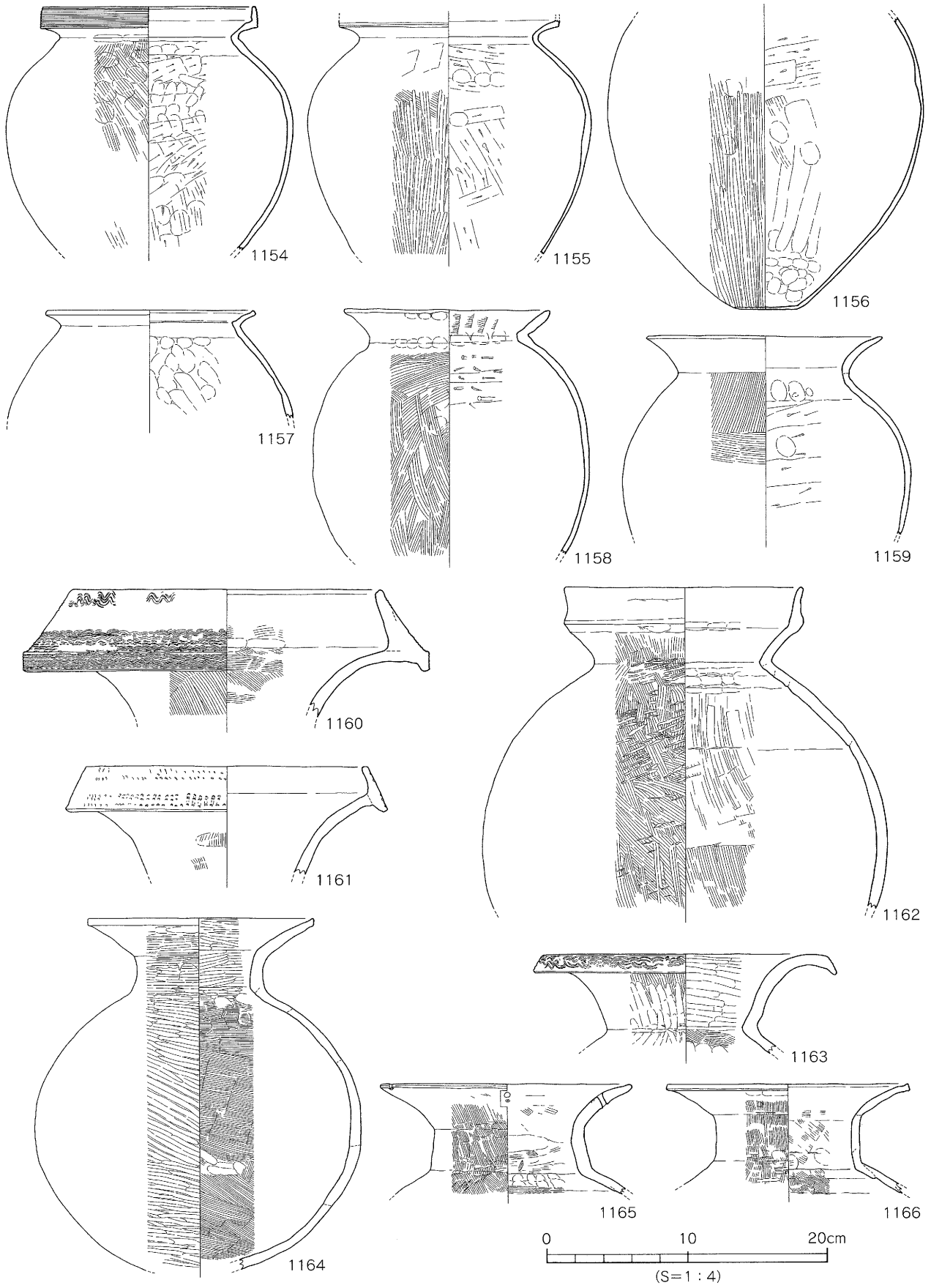
第159図 SD201出土遺物実測図(0-1区間)(4)



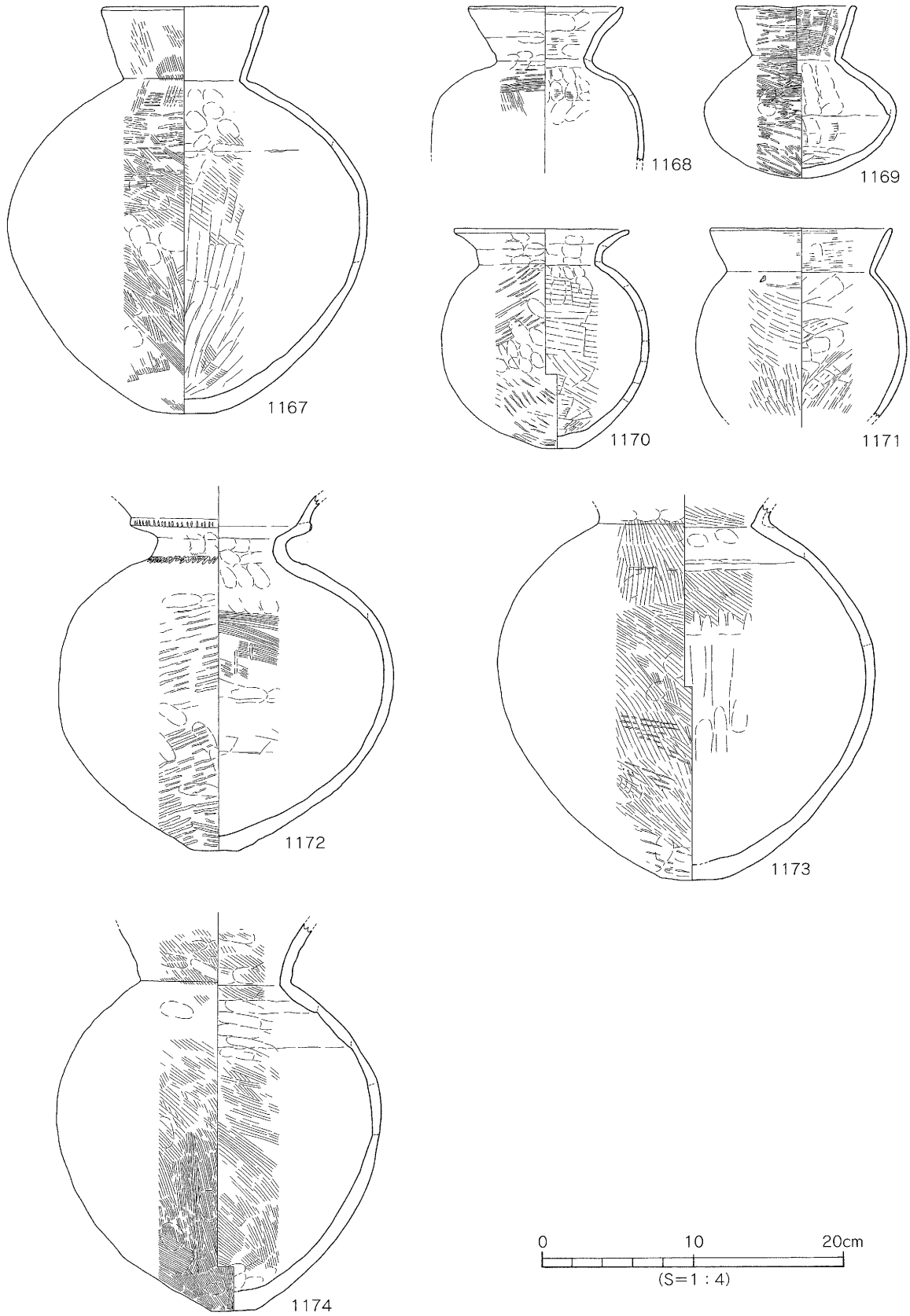
第160図 SD201出土遺物実測図(2区)(1)



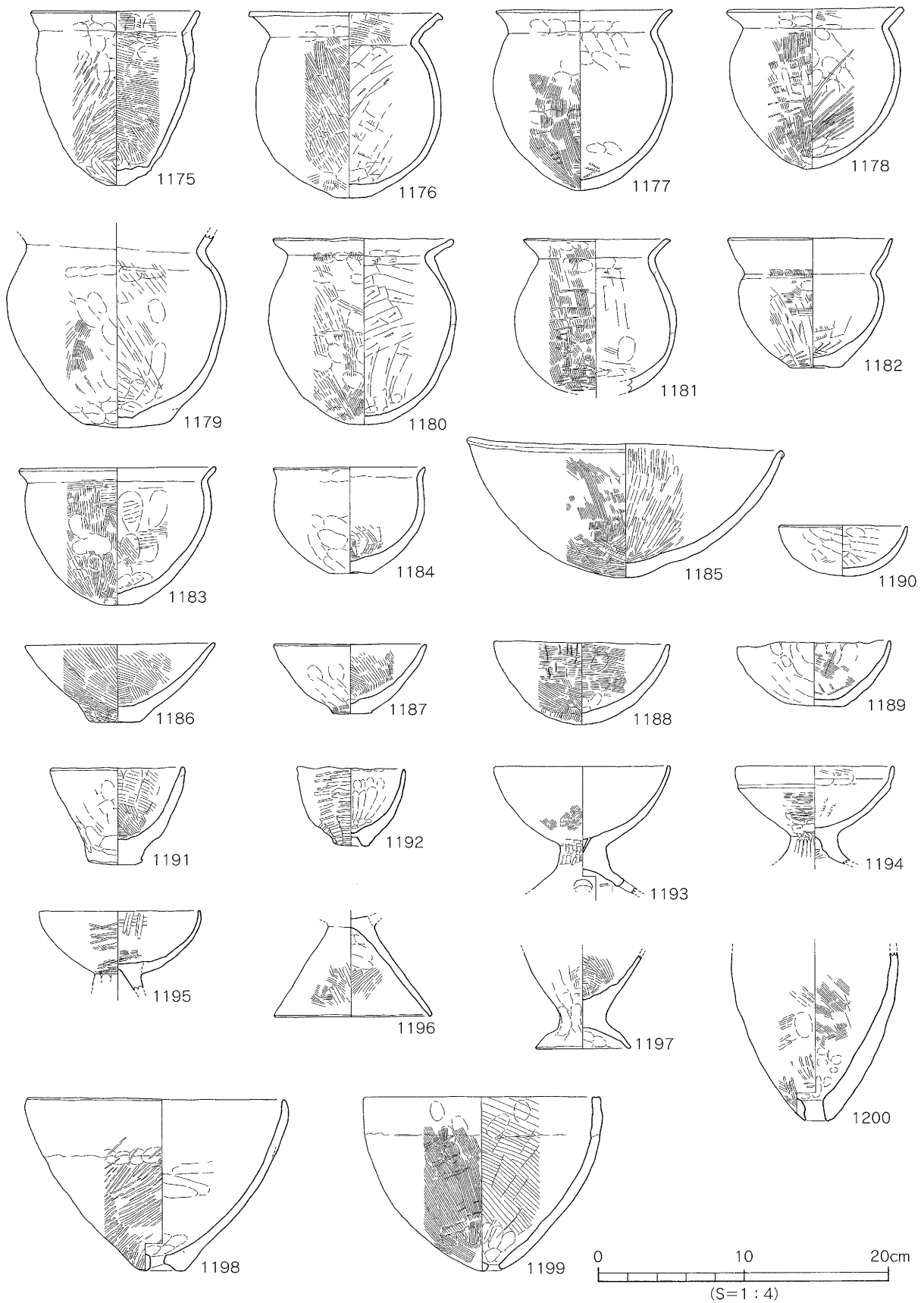
第161図 SD201出土遺物実測図(2区)(2)



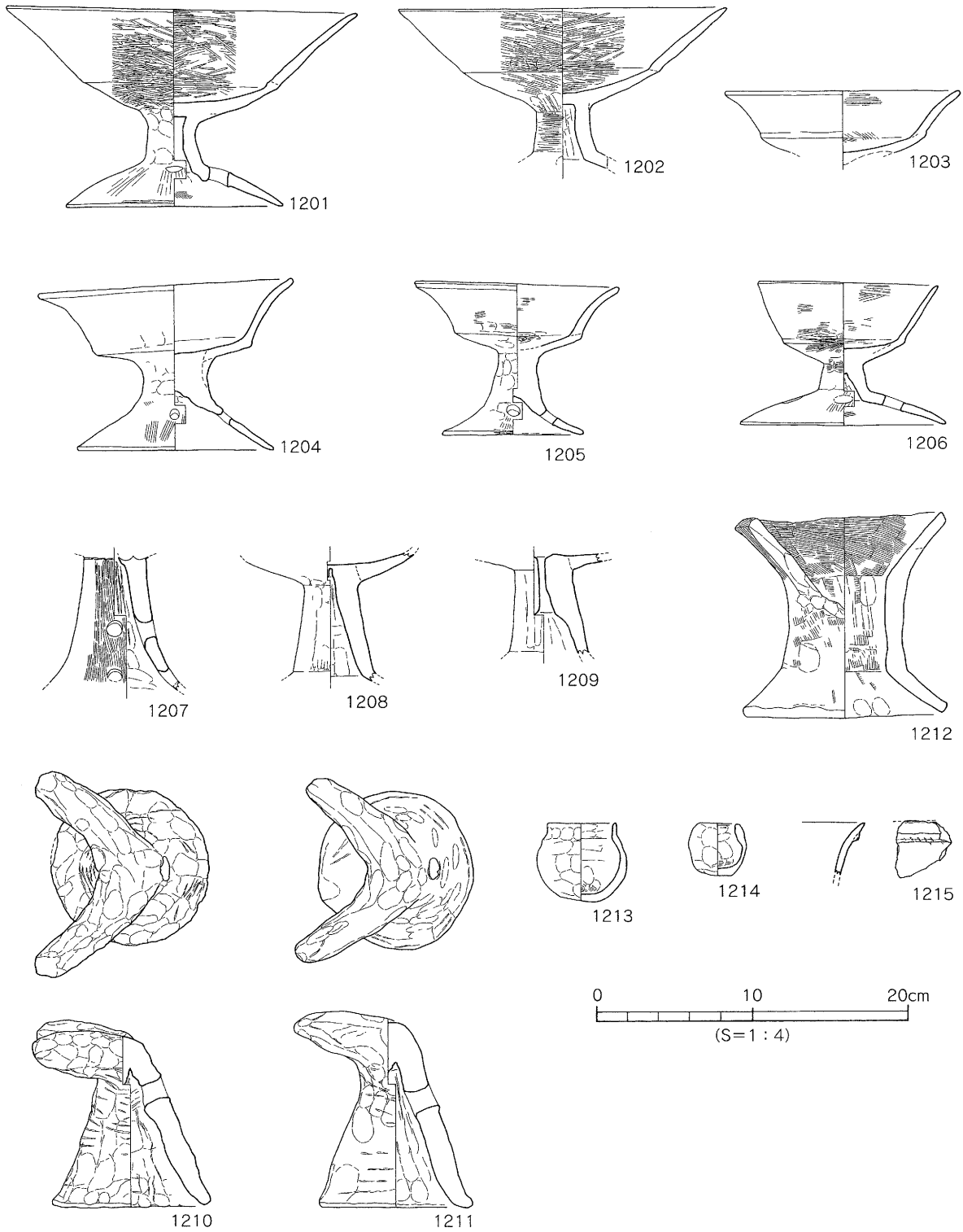
第162図 SD201出土遺物実測図(2区)(3)



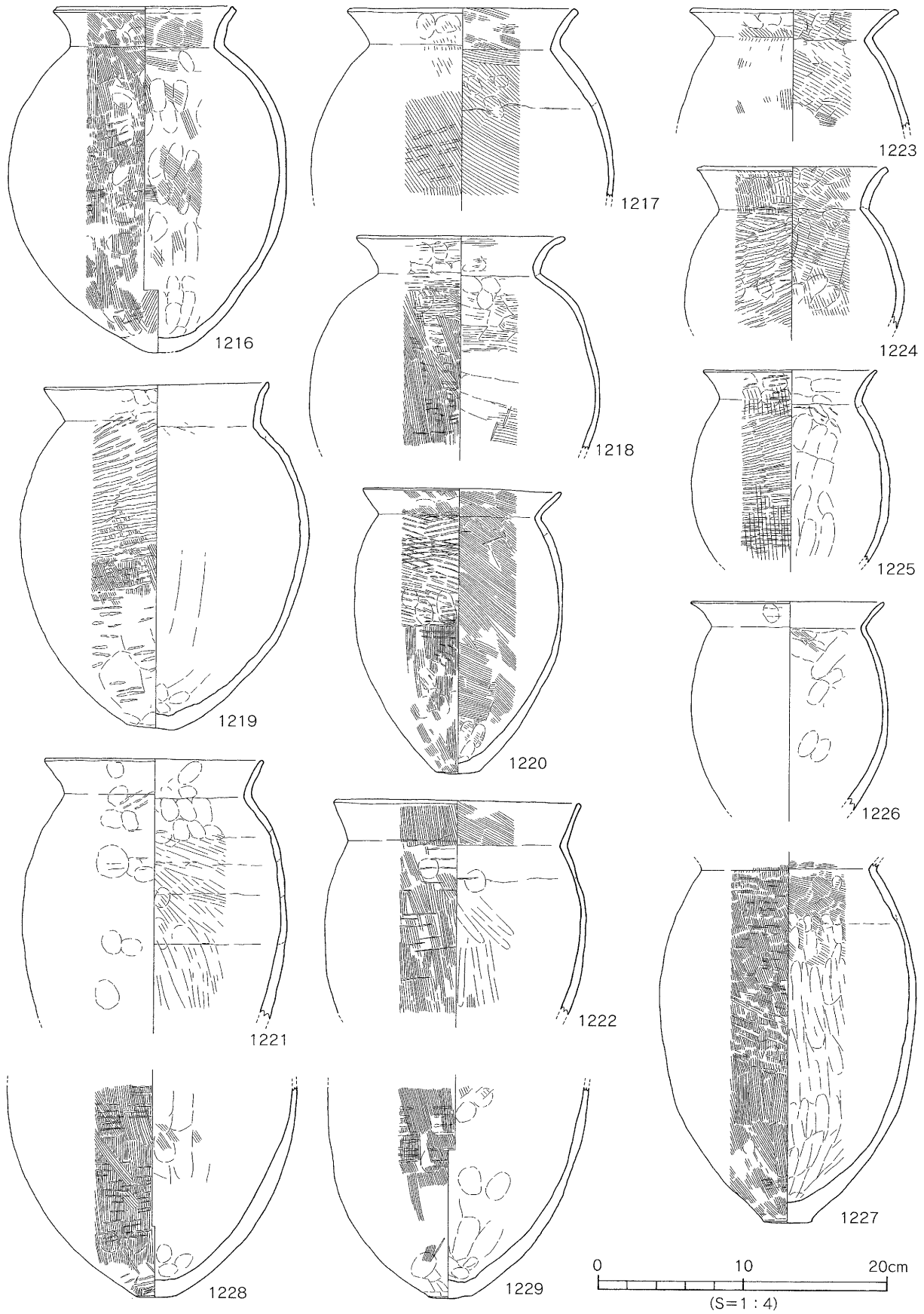
第163図 SD201出土遺物実測図(2区)(4)



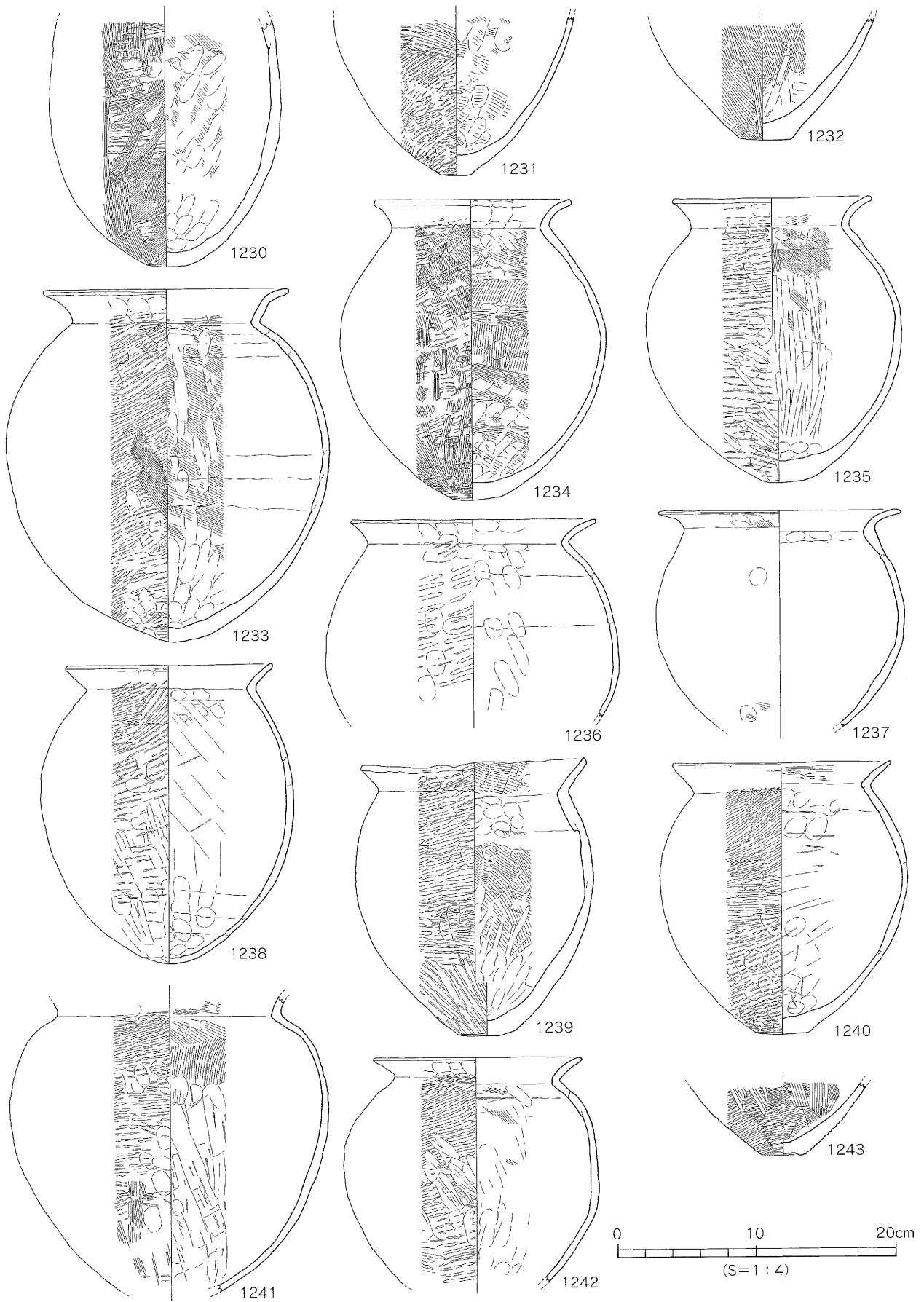
第164図 SD201出土遺物実測図(2区) (5)



第165図 SD201出土遺物実測図(2区)(6)

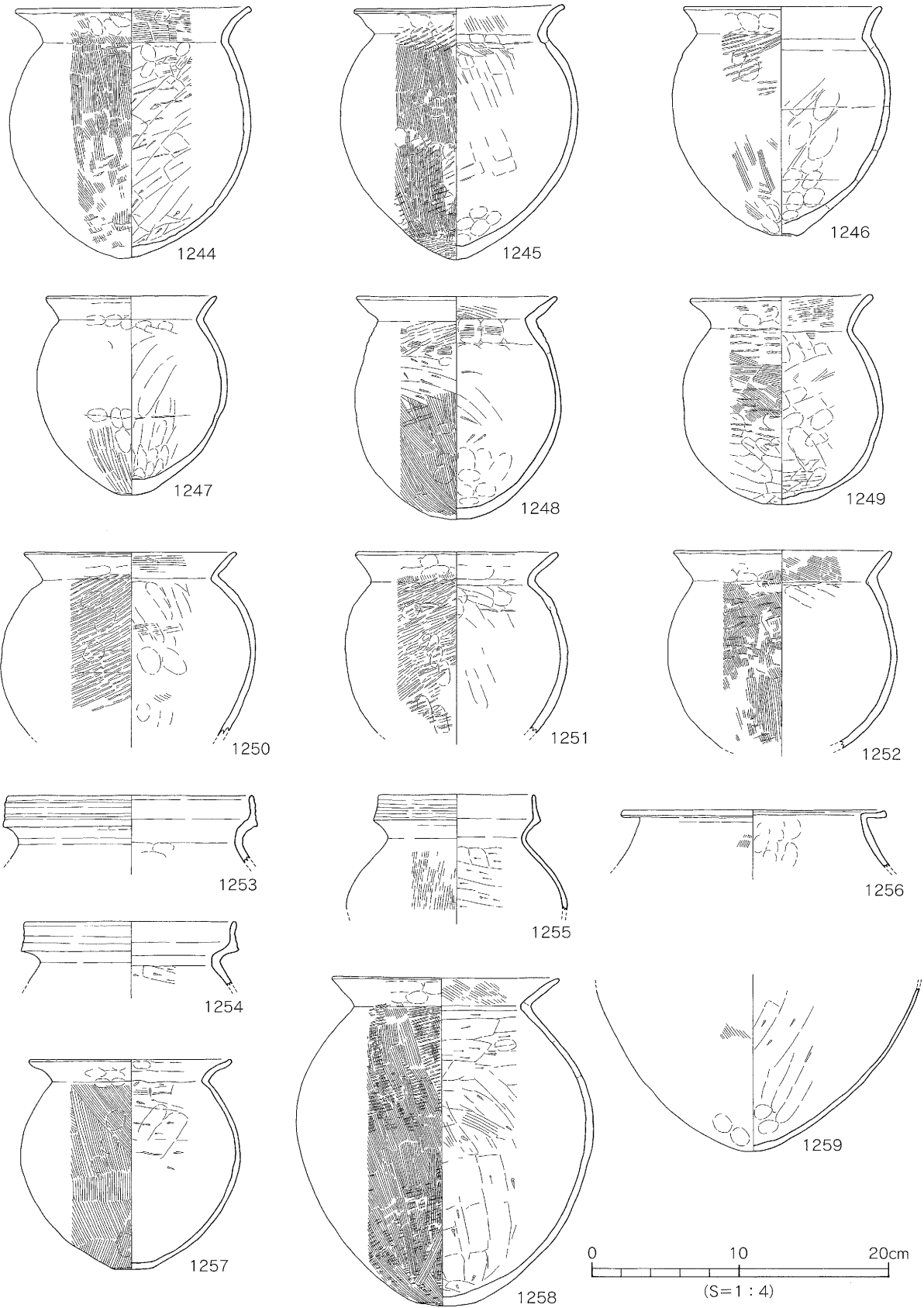


第166図 SD201出土遺物実測図(3区) (1)

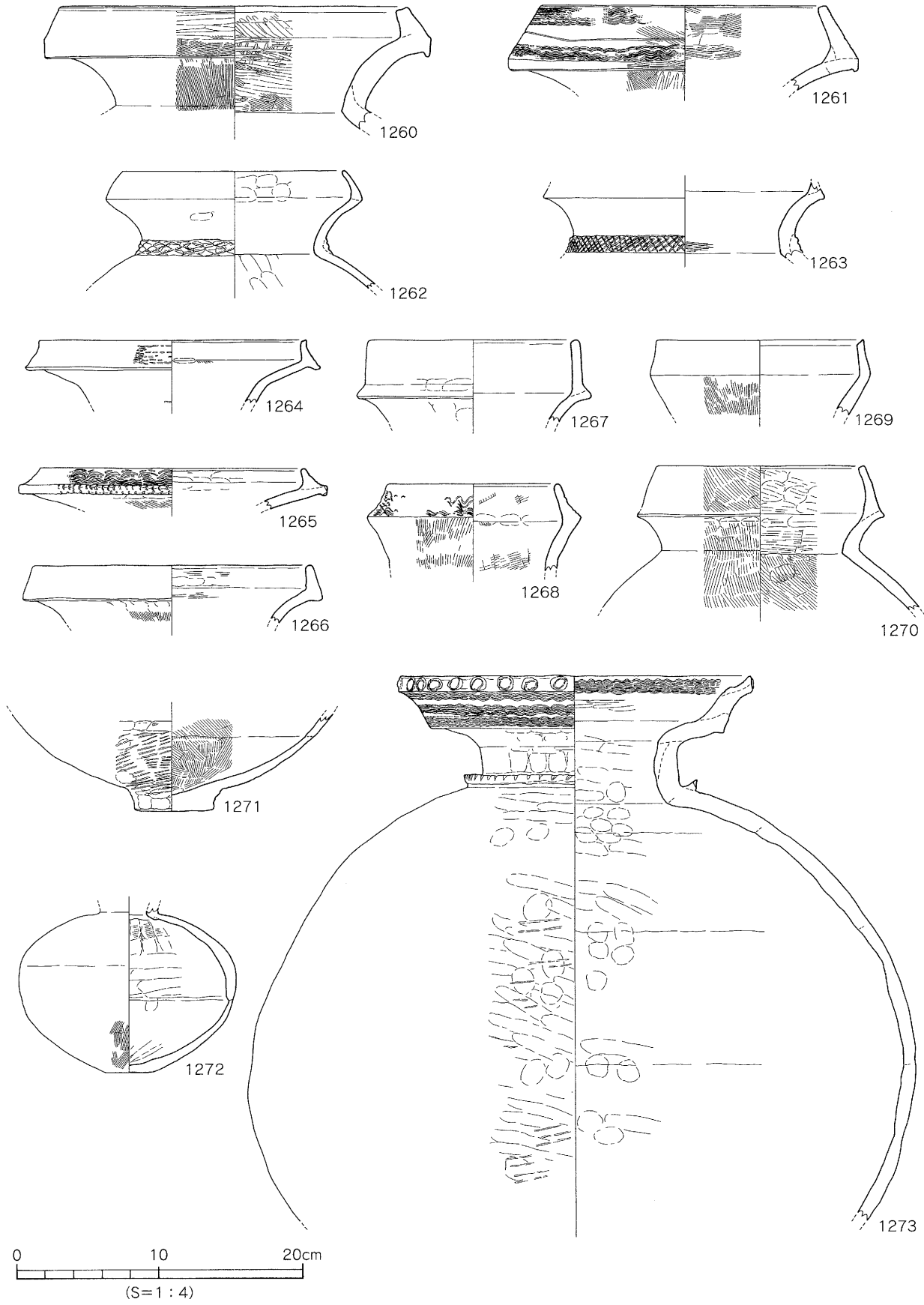


第167図 SD201出土遺物実測図(3区)(2)

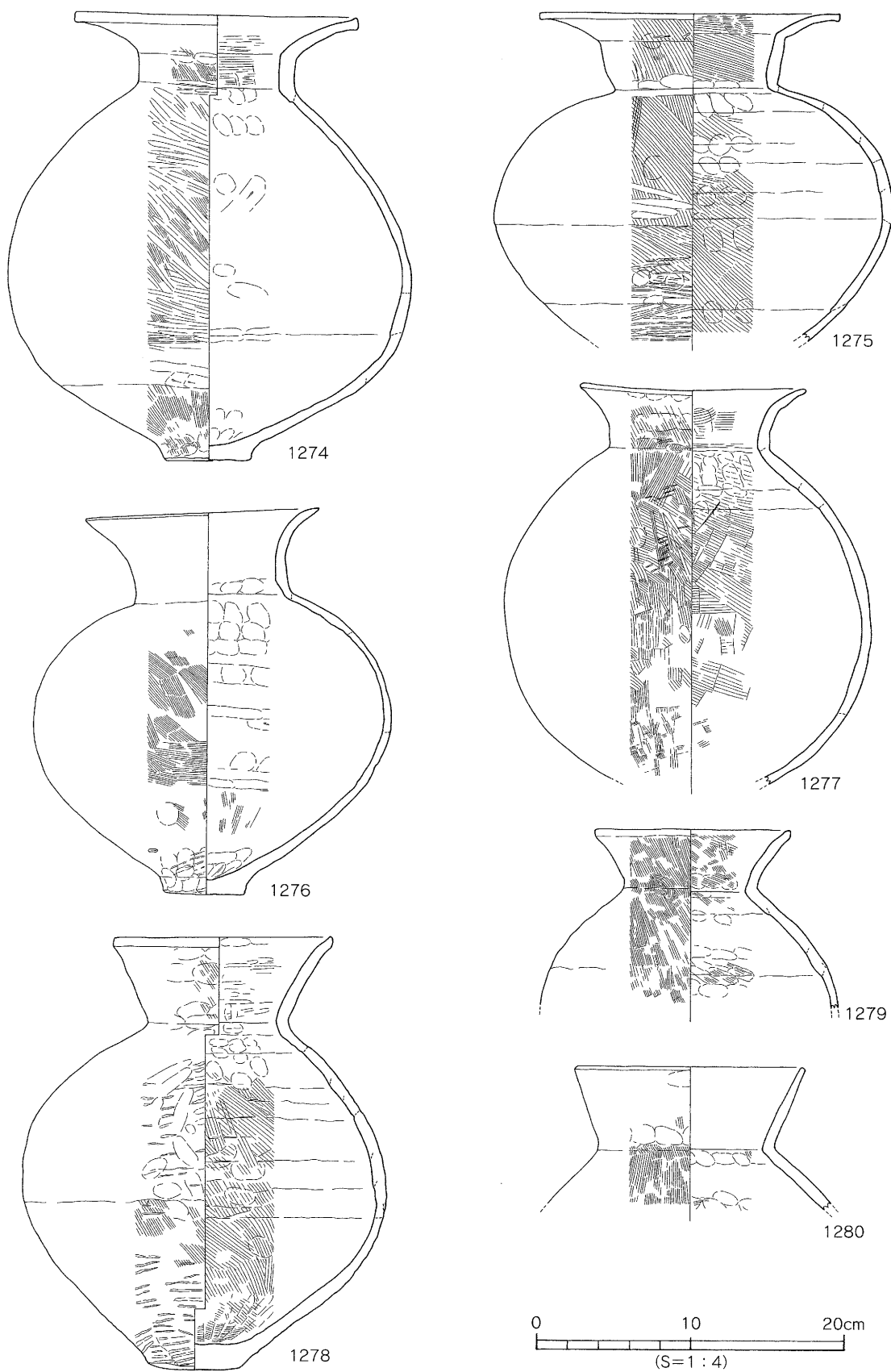
古墳時代の遺構と遺物



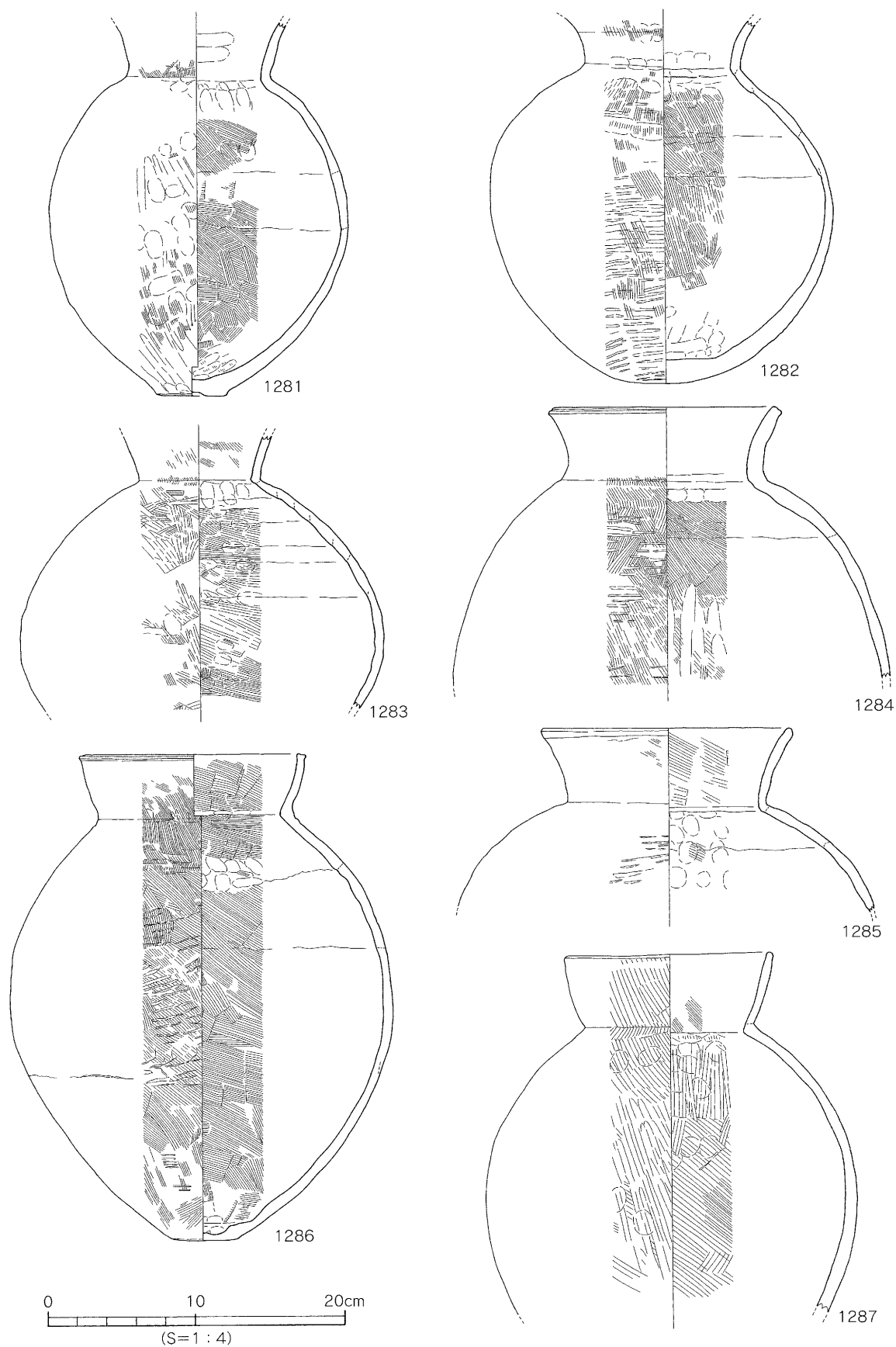
第168図 SD201出土遺物実測図(3区)(3)



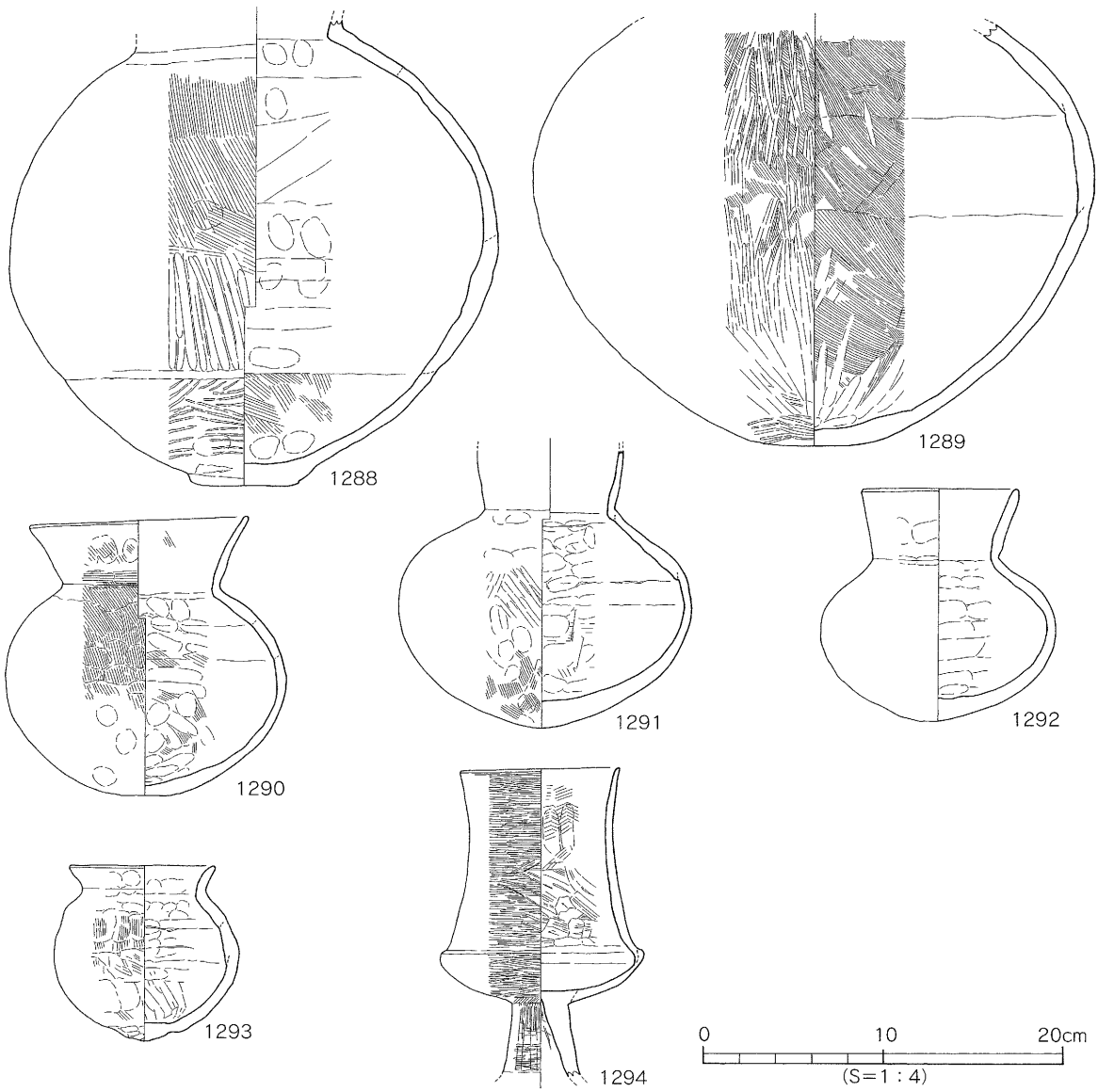
第169図 SD201出土遺物実測図 (3区) (4)



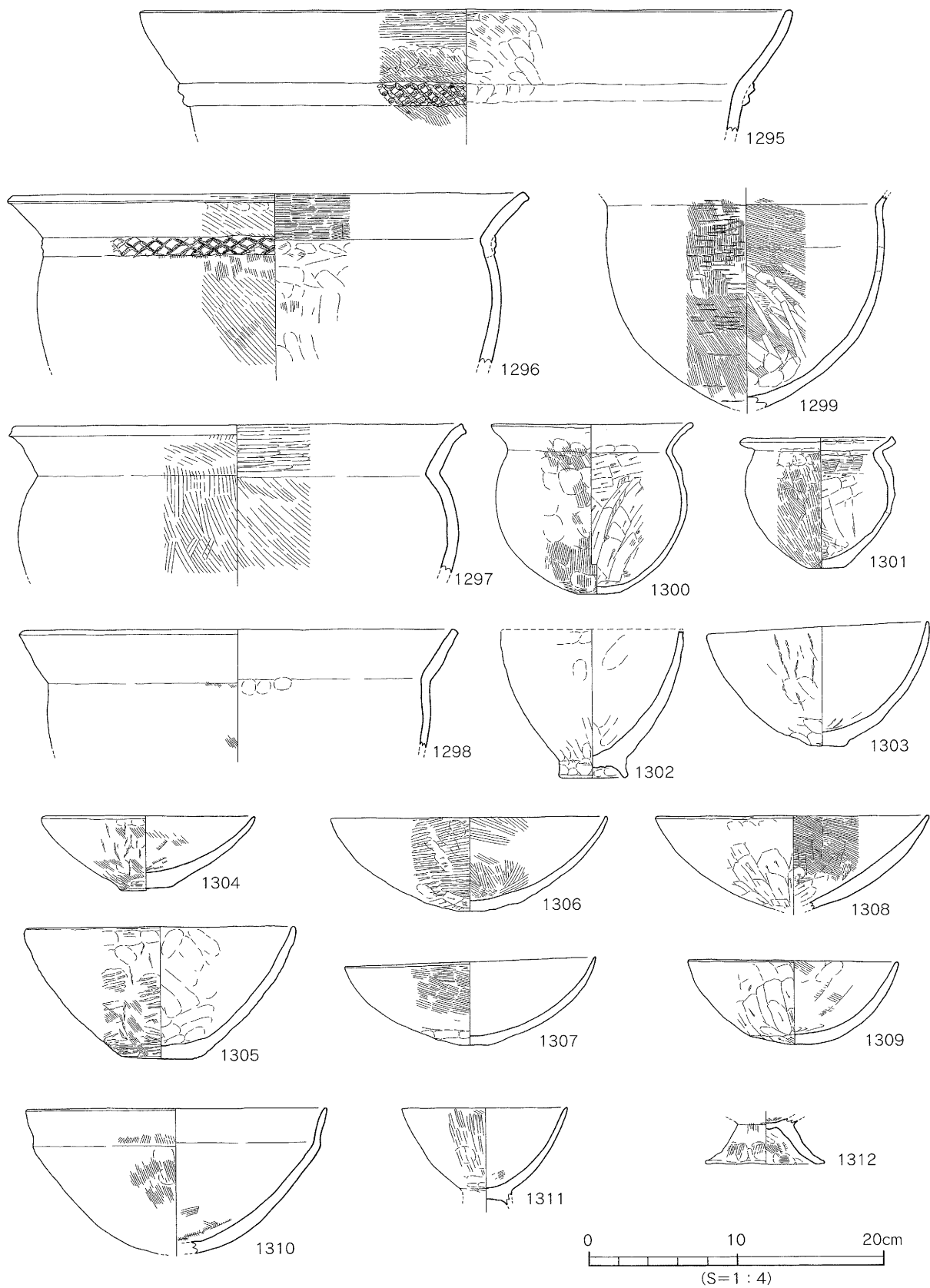
第170図 SD201出土遺物実測図(3区) (5)



第171図 SD201出土遺物実測図(3区) (6)

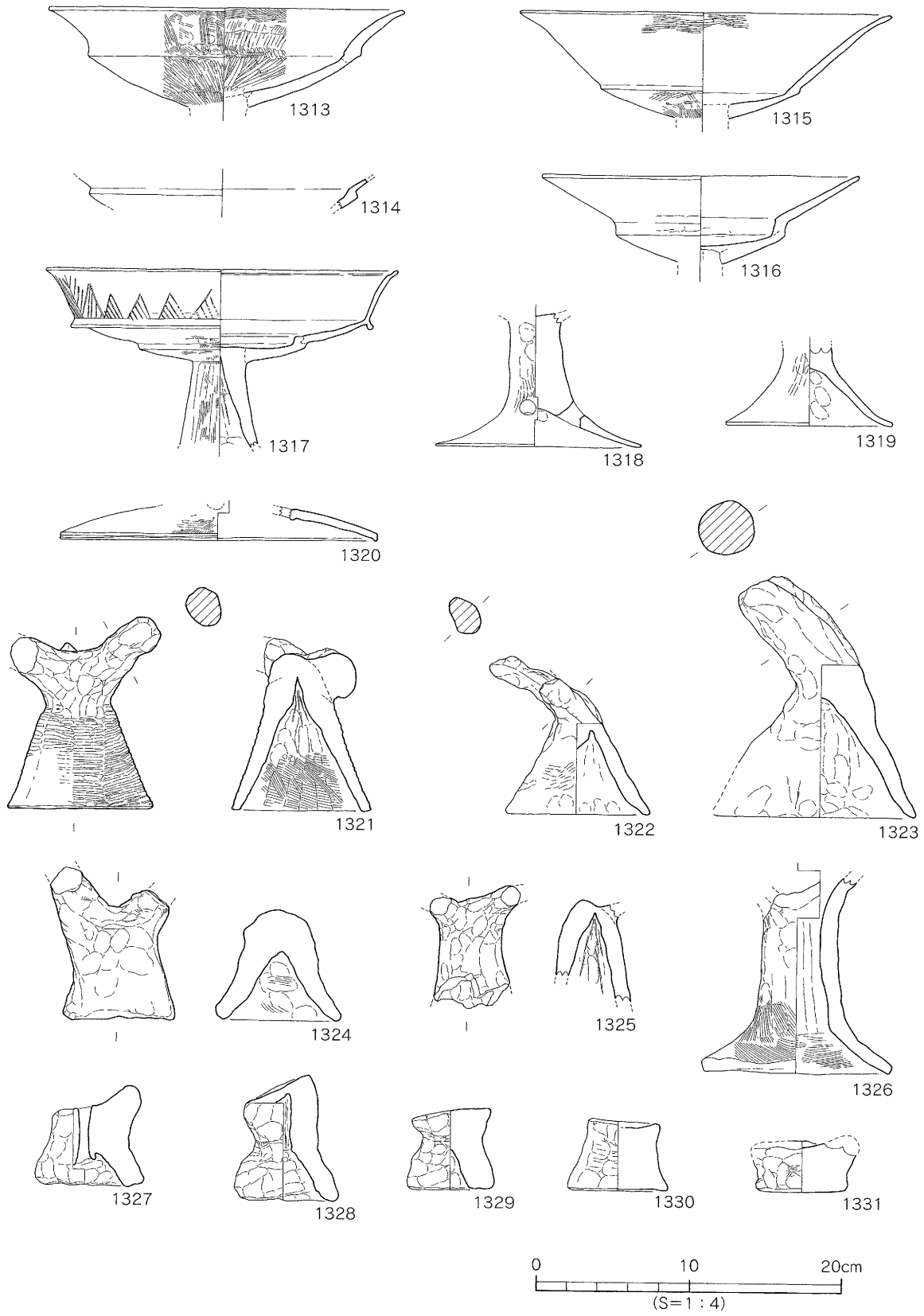


第172図 SD201出土遺物実測図(3区)(7)

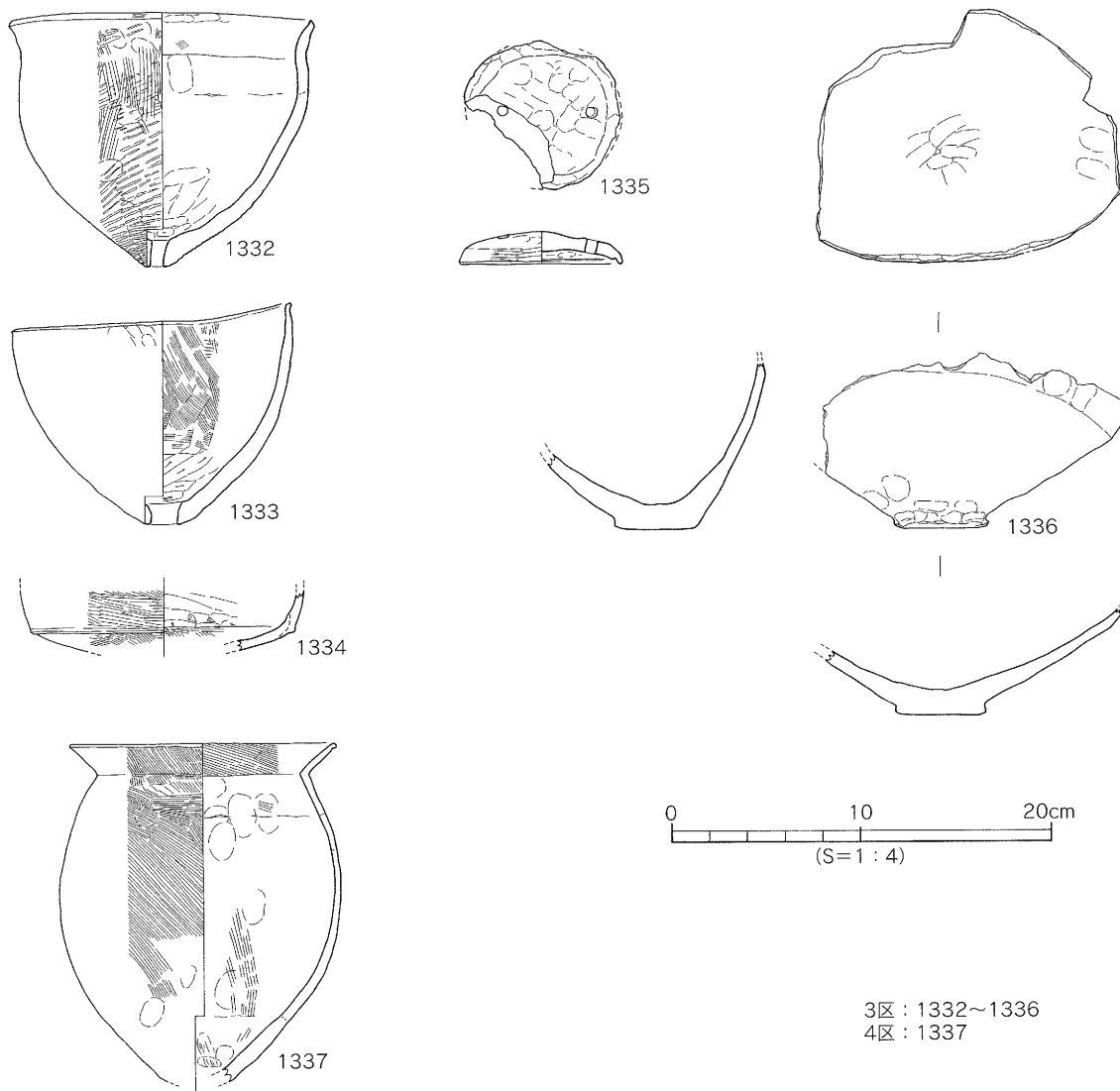


第173図 SD201出土遺物実測図 (3区) (8)

古墳時代の遺構と遺物

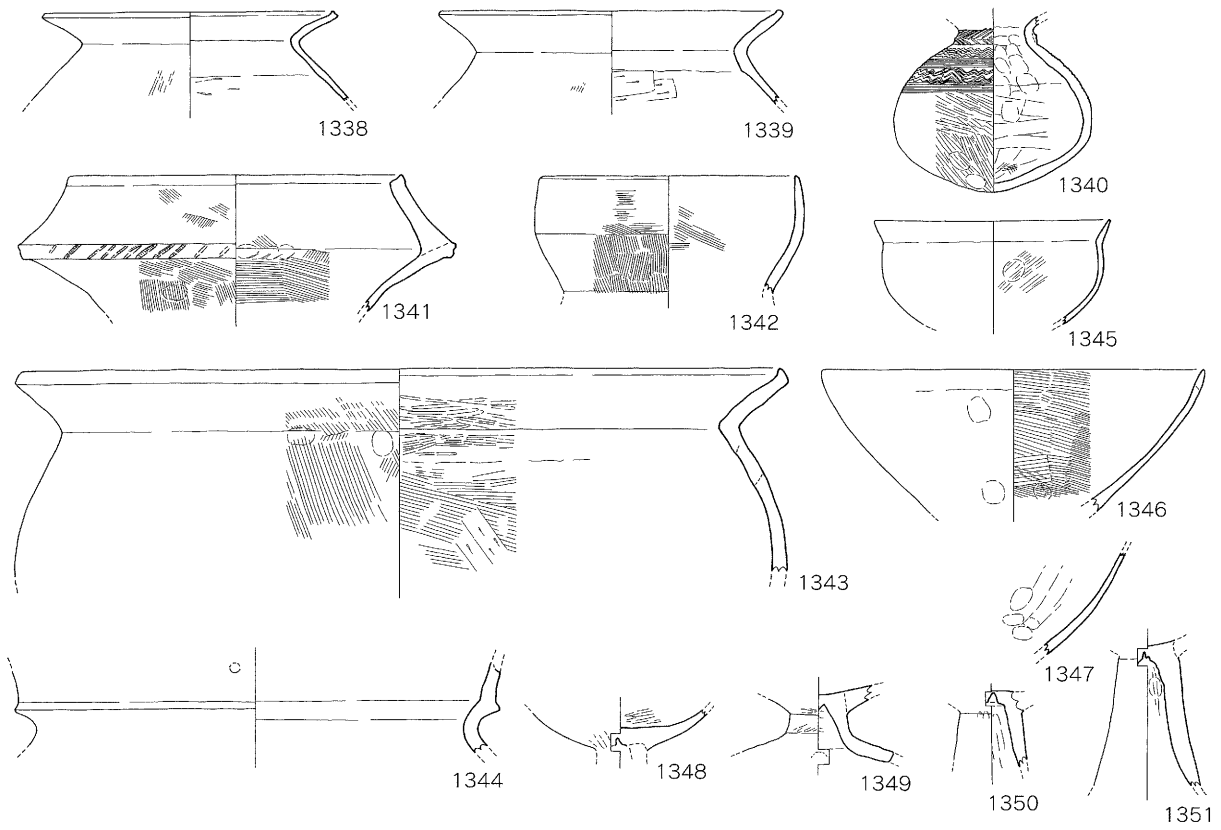


第174図 SD201出土遺物実測図(3区) (9)

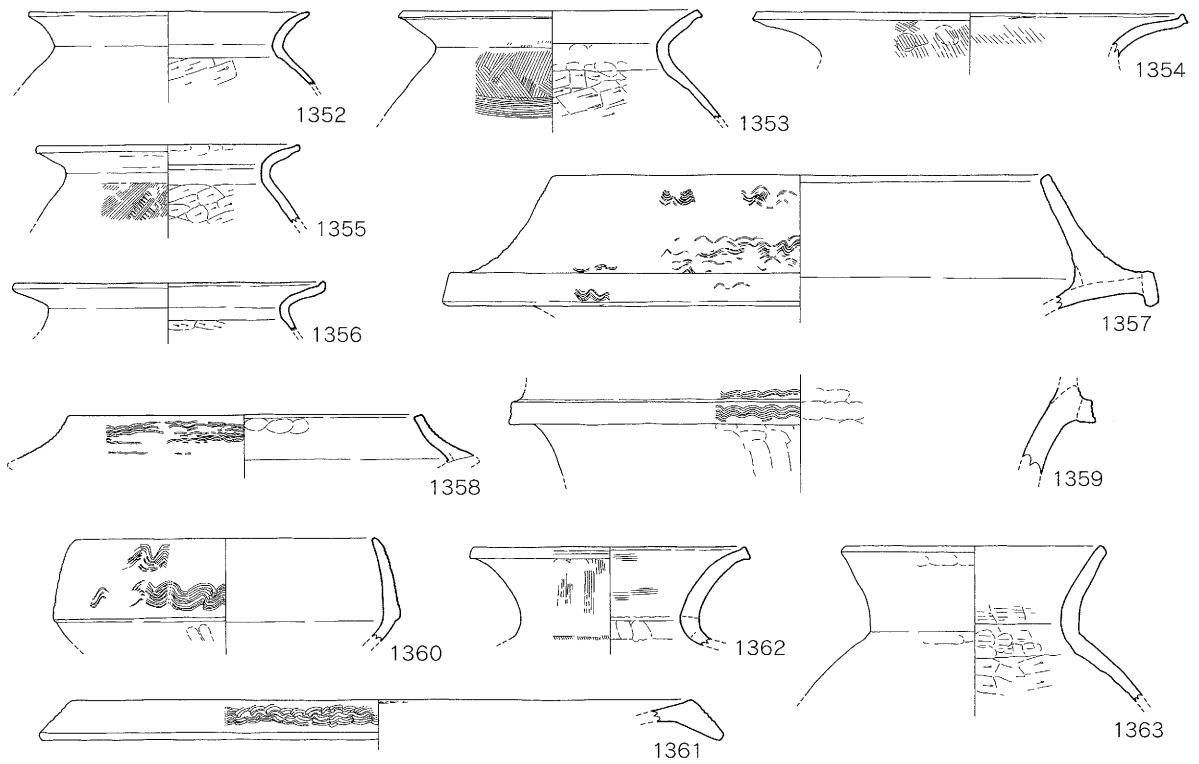


第175図 SD201出土遺物実測図 (3区(10)・4区)

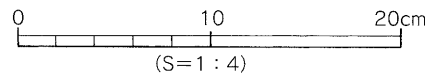
古墳時代の遺構と遺物



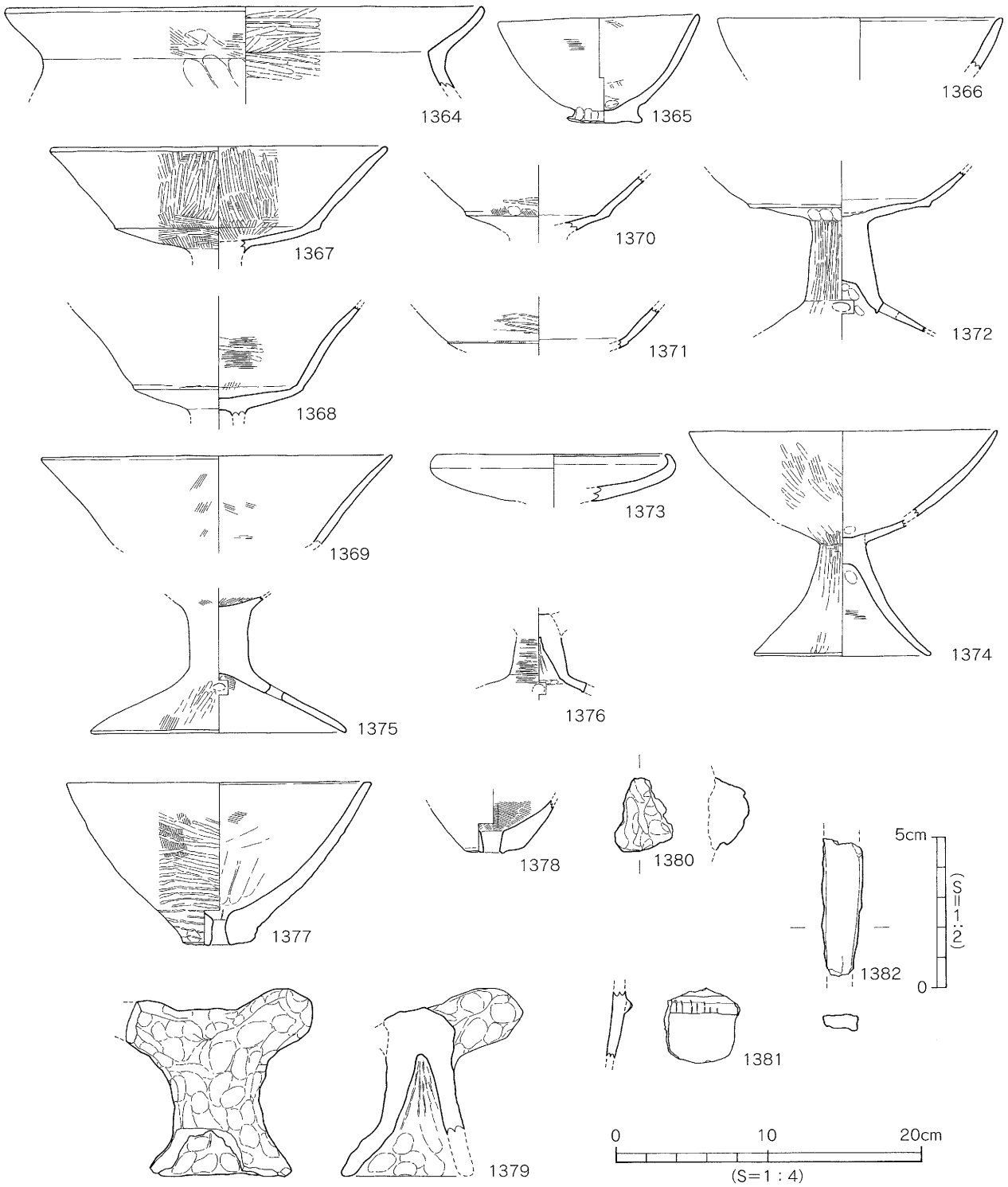
1層 : 1338~1351



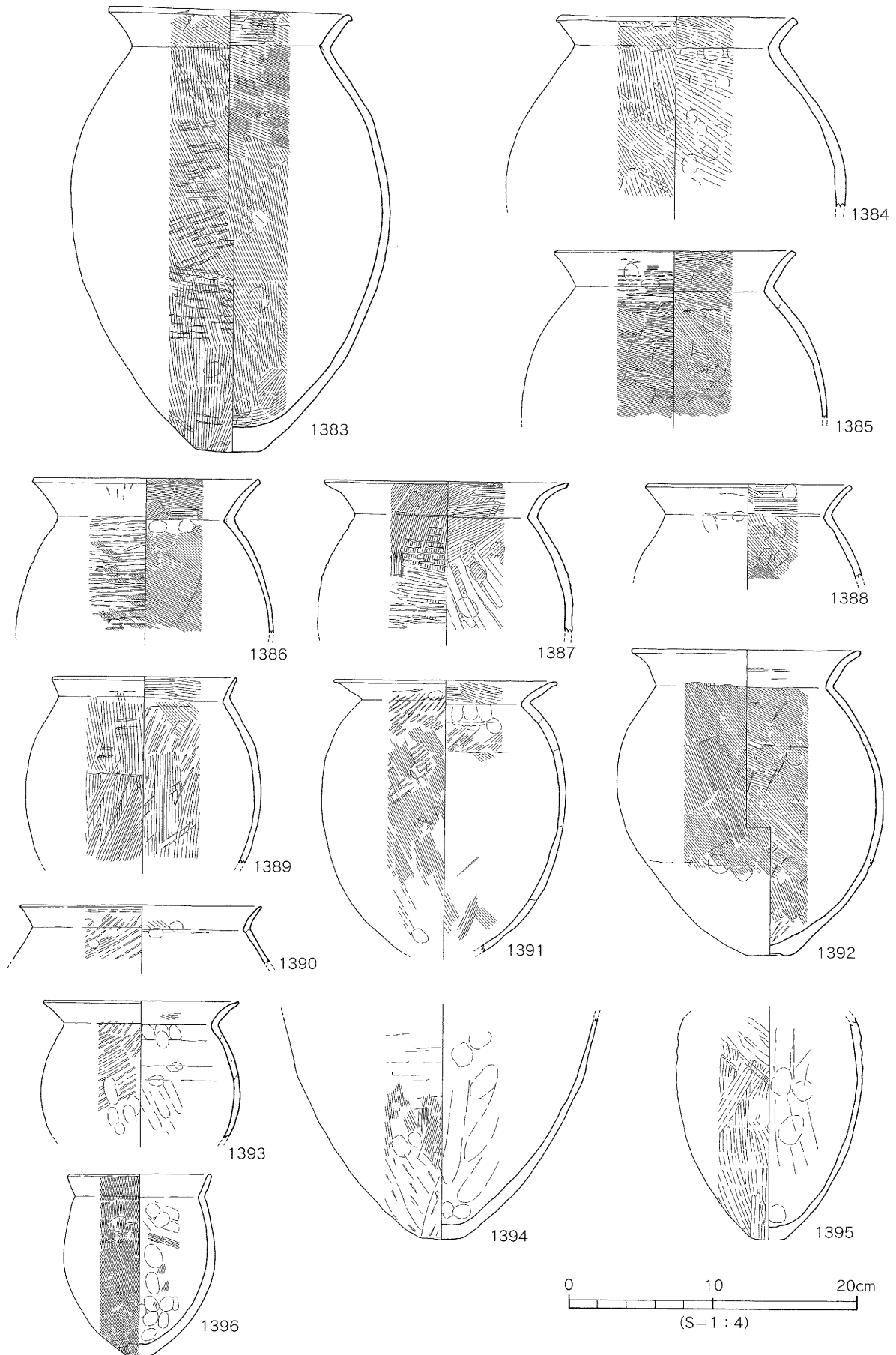
2層 : 1352~1363



第176図 SD201出土遺物実測図 (0-1区1層・2層(1))

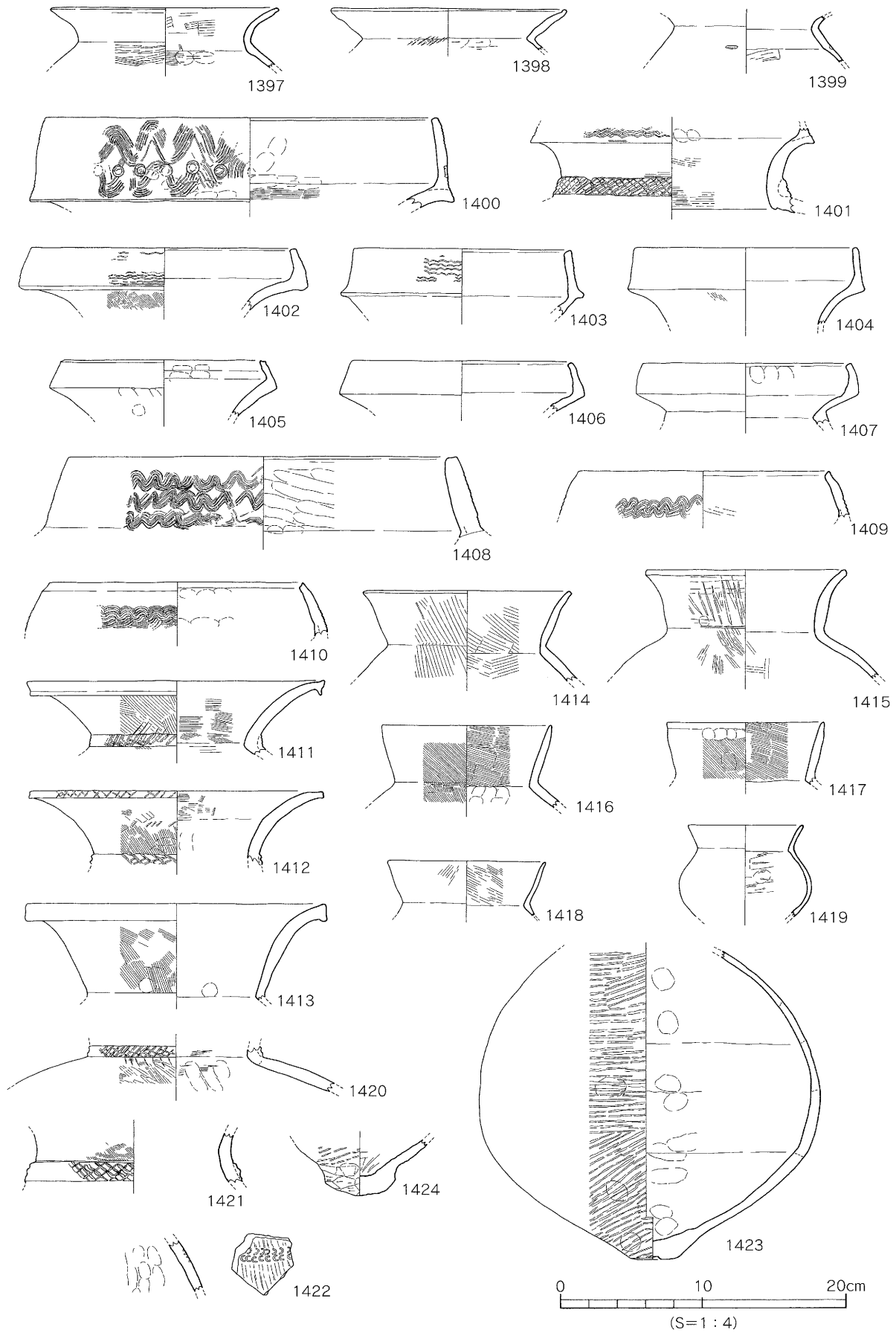


第177図 SD201出土遺物実測図(0-1区2層)(2)

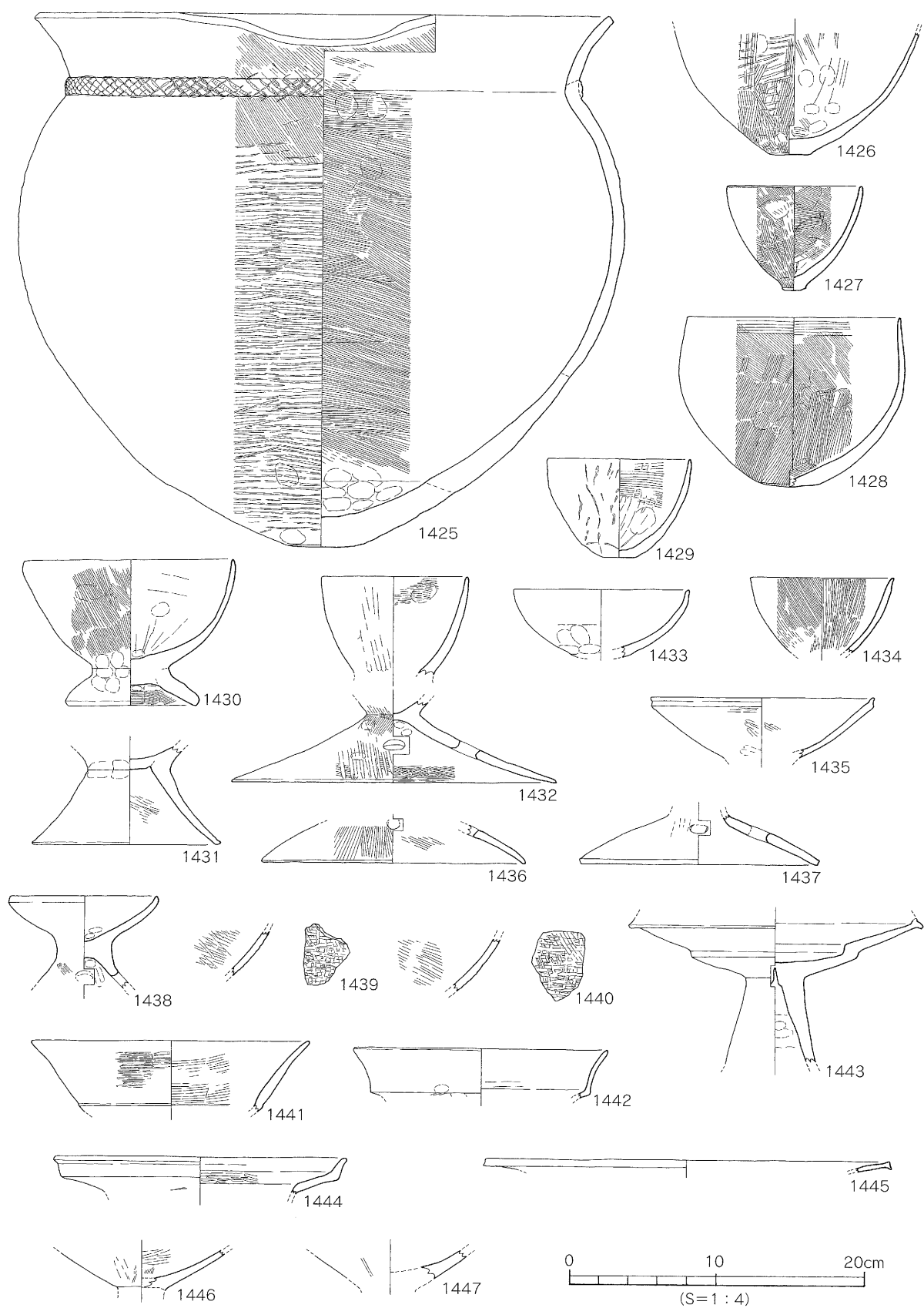


第178図 SD201出土遺物実測図(0-1区3層) (1)

西石井遺跡 1 次調査地

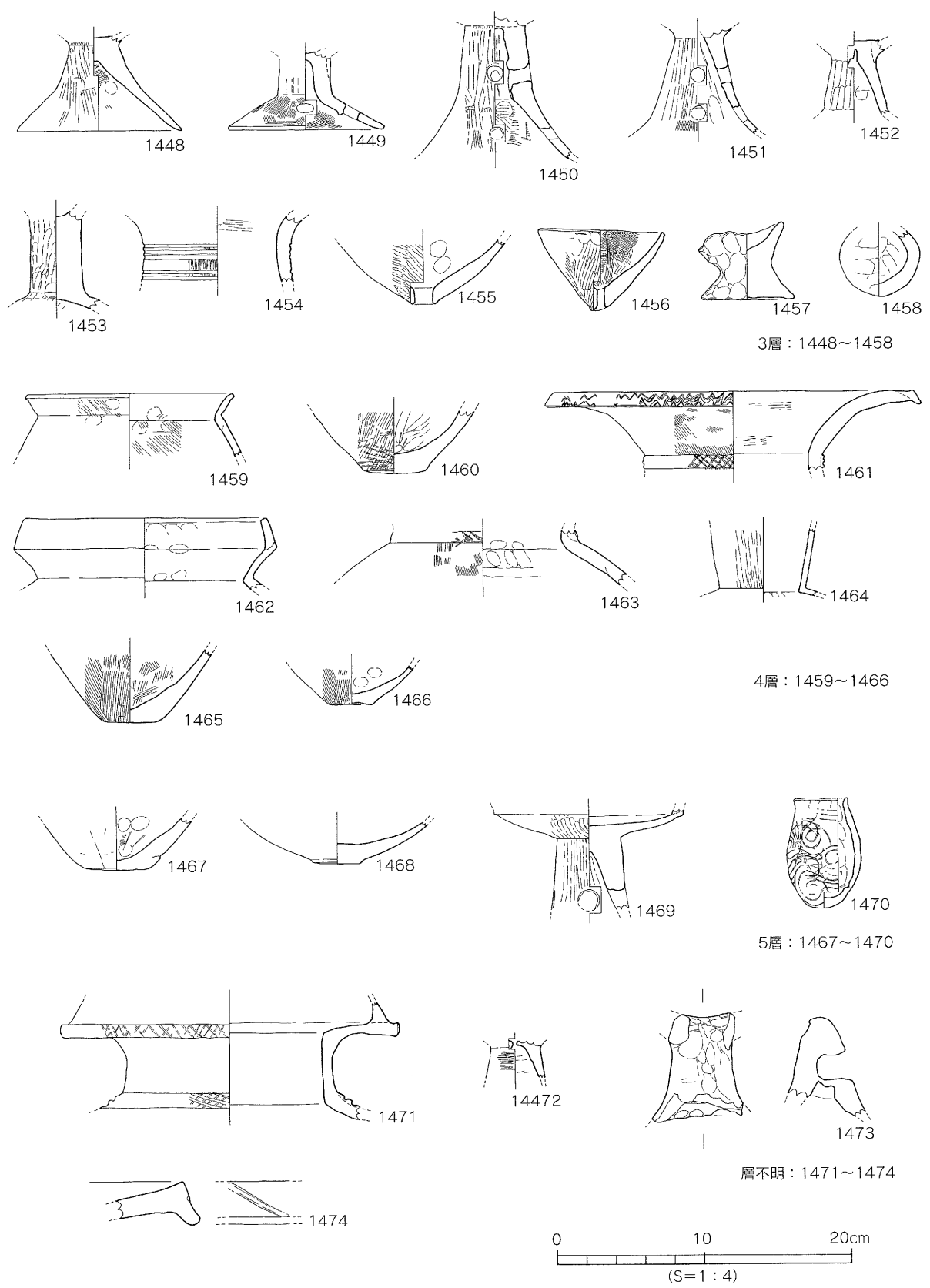


第179図 SD201出土遺物実測図 (0-1区3層) (2)

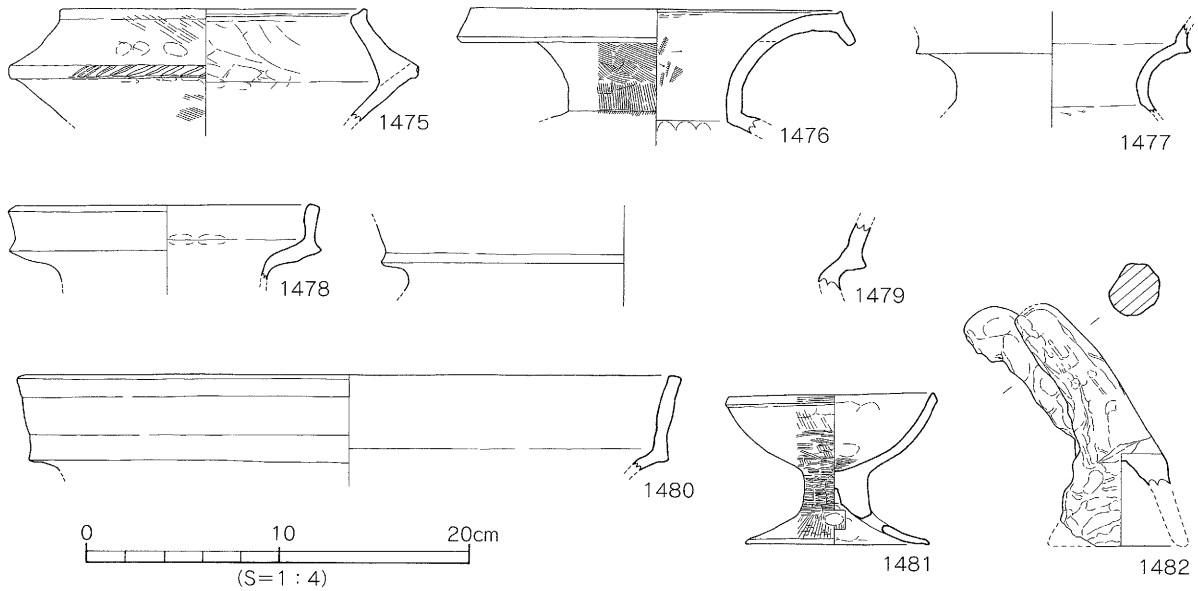


第180図 SD201出土遺物実測図 (0-1区3層) (3)

西石井遺跡1次調査地



第181図 SD201出土遺物実測図 (0-1区3層(4)・4層・5層・層不明)



第182図 SD201出土遺物実測図（2区1層）

3) 土層・グリッドで取り上げた石器（第209～212図、図版38）

① 0～1区（1952～1967）：調査地の北・東の端にあたる。

1層出土品：1952の管玉がある。

2層出土品：1953～1958があり、1954は未成品である。

3層出土品：1959～1964があり、1959は柱状片刃石斧の未成品、1960も未成品、1961は砥石である。

5層出土品：1965・1966がある。

層不明出土品：1967がある。

② 2区（1968～1976・1982）：調査地中央部の東側部分にあたる。

1層出土品：1968・1969がある。

2層出土品：1970～1973・1982があり、1970は未成品、1972は砥石である。

3層出土品：1974～1976があり、1974は砥石と見られる。

③ 3区（1977～1980）：調査地中央部の西側にあたる。

1層出土品：1977の砥石がある。

2層出土品：1978～1980があり、1978は石庖丁の未成品である。

④ 4区（1981）

3層出土品：1981の紡錘車の素材がある。

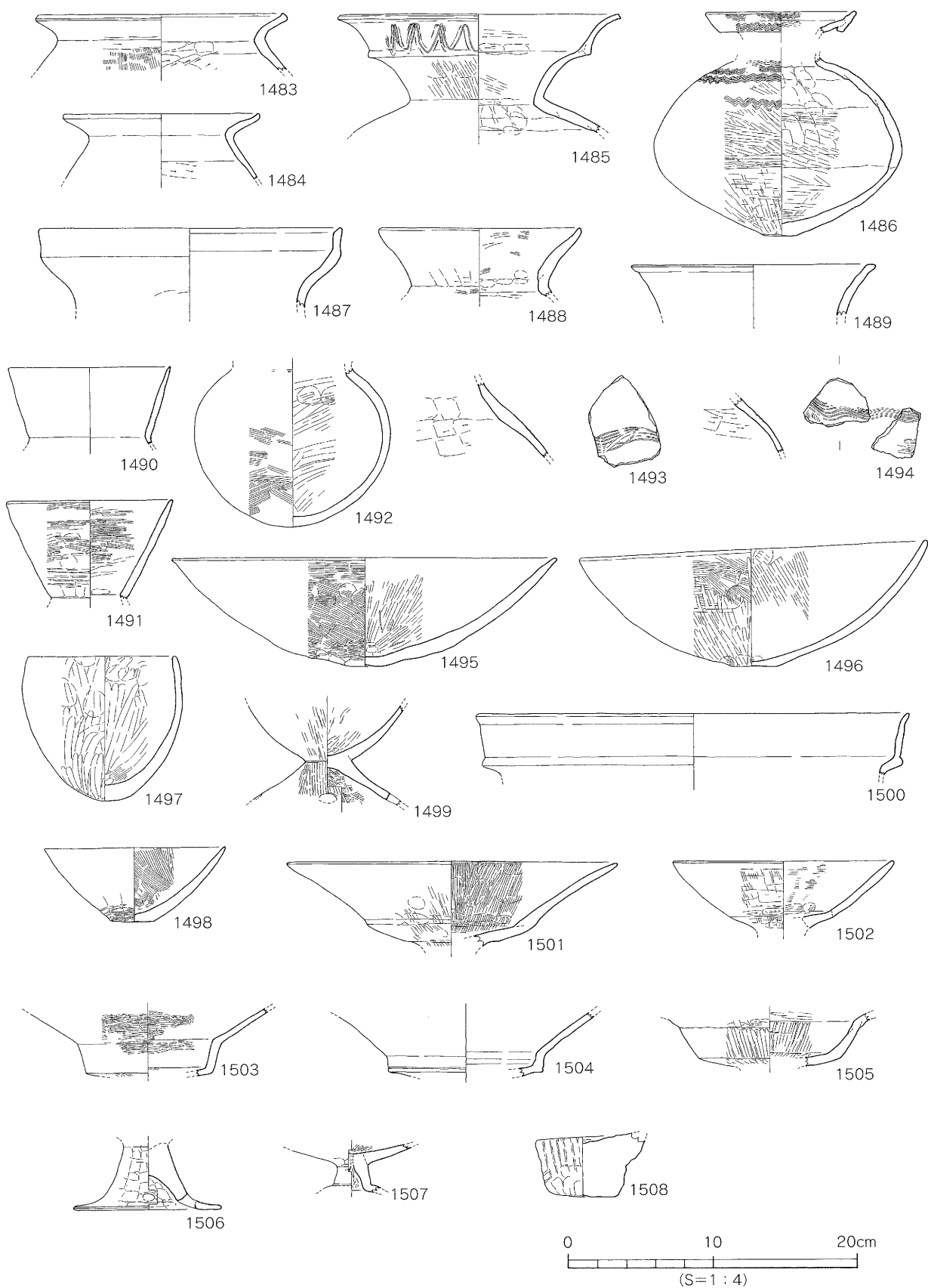
⑤ 5～7区（1983～1989）：調査地西部にあたり、短時間で調査した地点である。

3層出土品：1983～1988があり、1985～1987は砥石である。

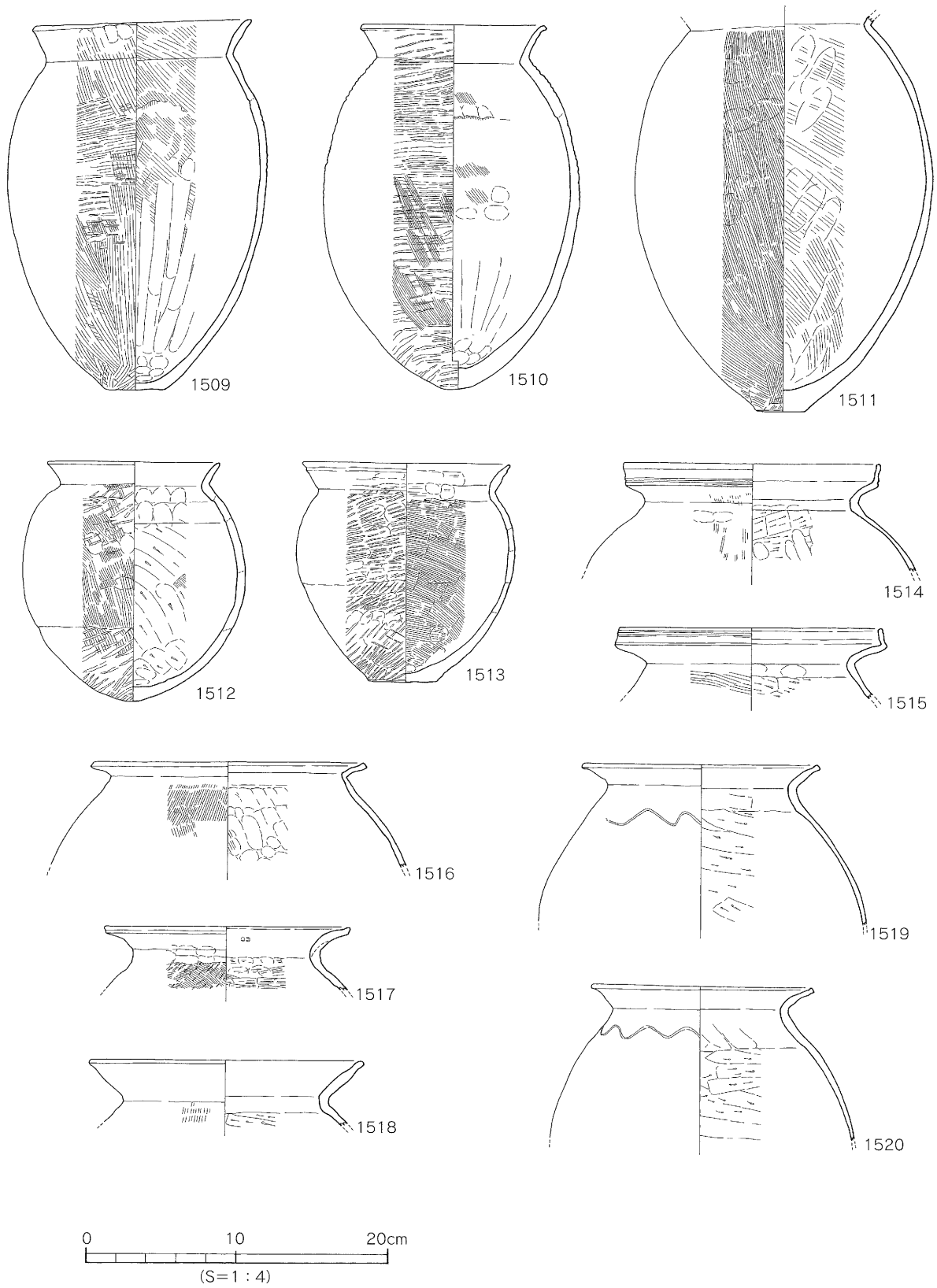
5層出土品：1989の扁平片刃石斧の未成品がある。

時期：出土遺物から古墳時代前期とする。

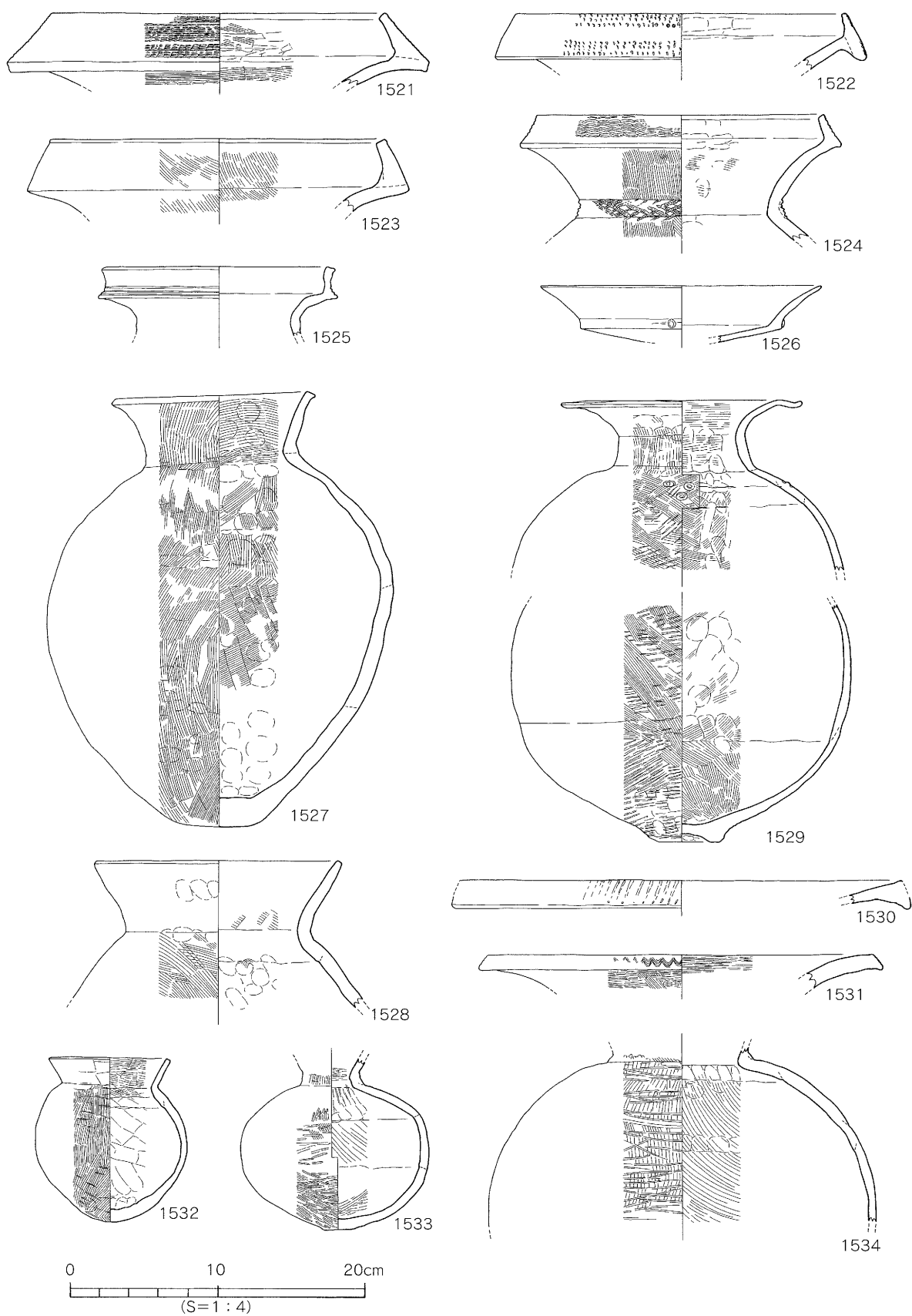
西石井遺跡1次調査地



第183図 SD201出土遺物実測図 (2区2層)

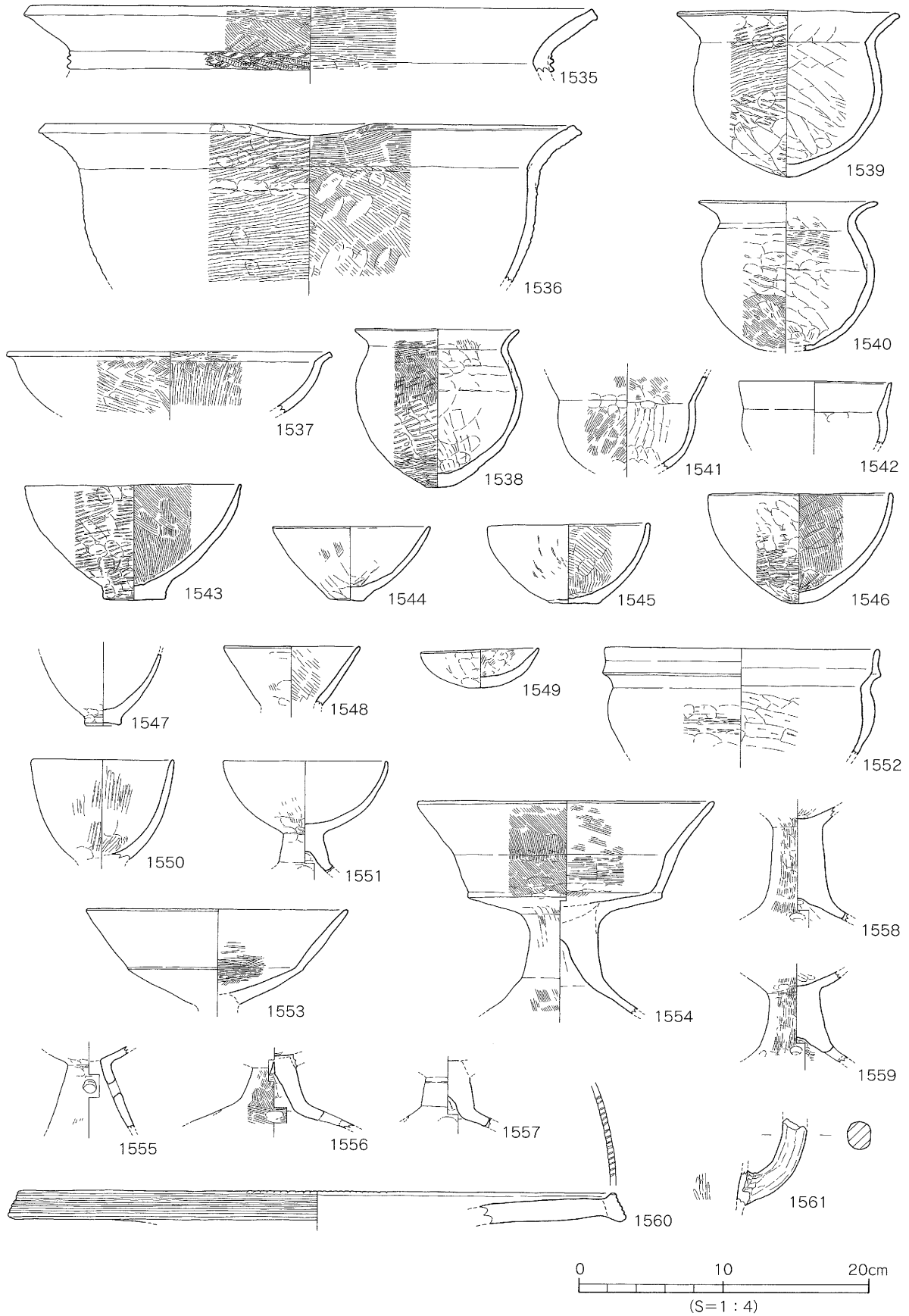


第184図 SD201出土遺物実測図(2区3層)(1)



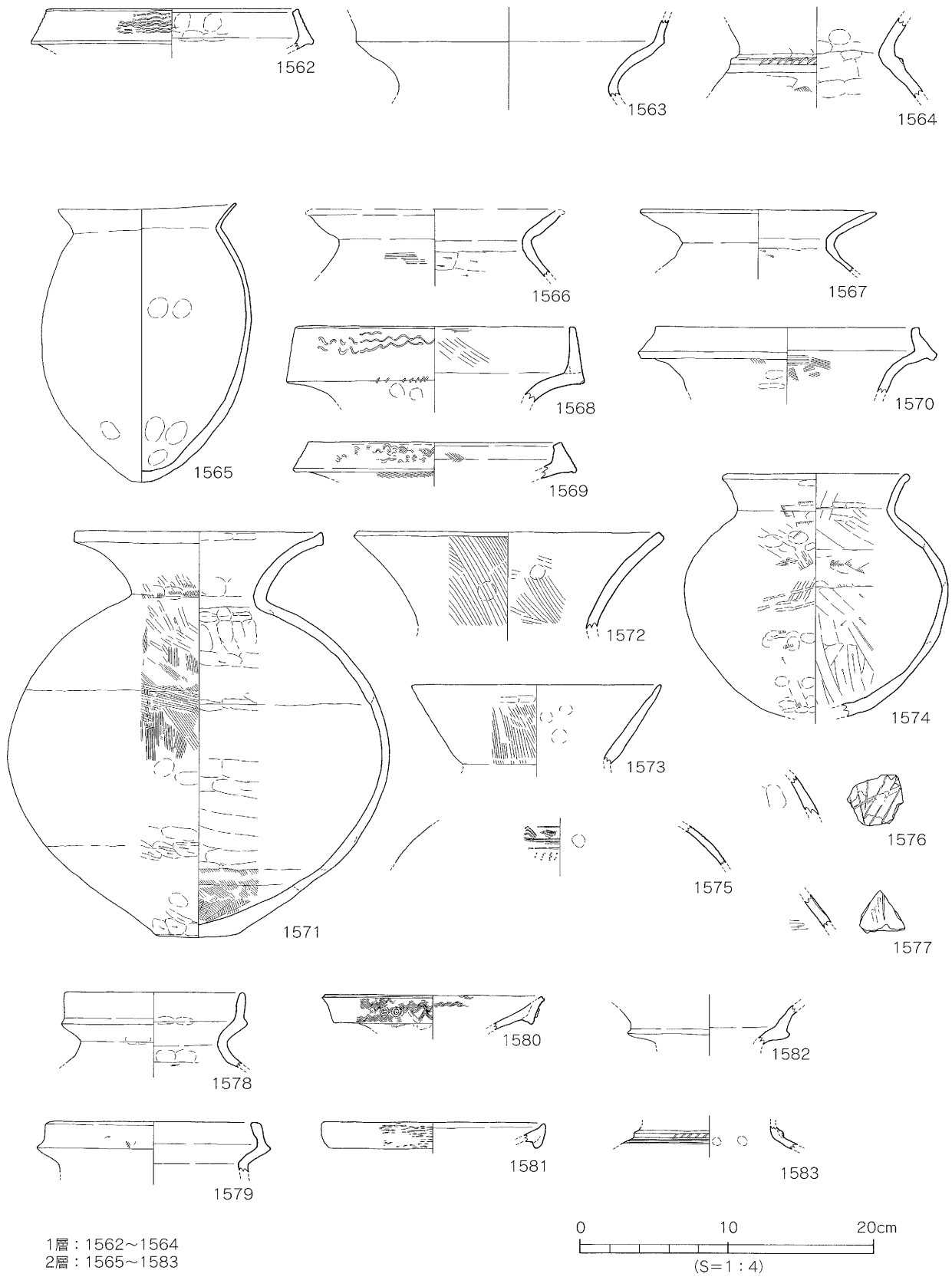
第185図 SD201出土遺物実測図(2区3層)(2)

古墳時代の遺構と遺物

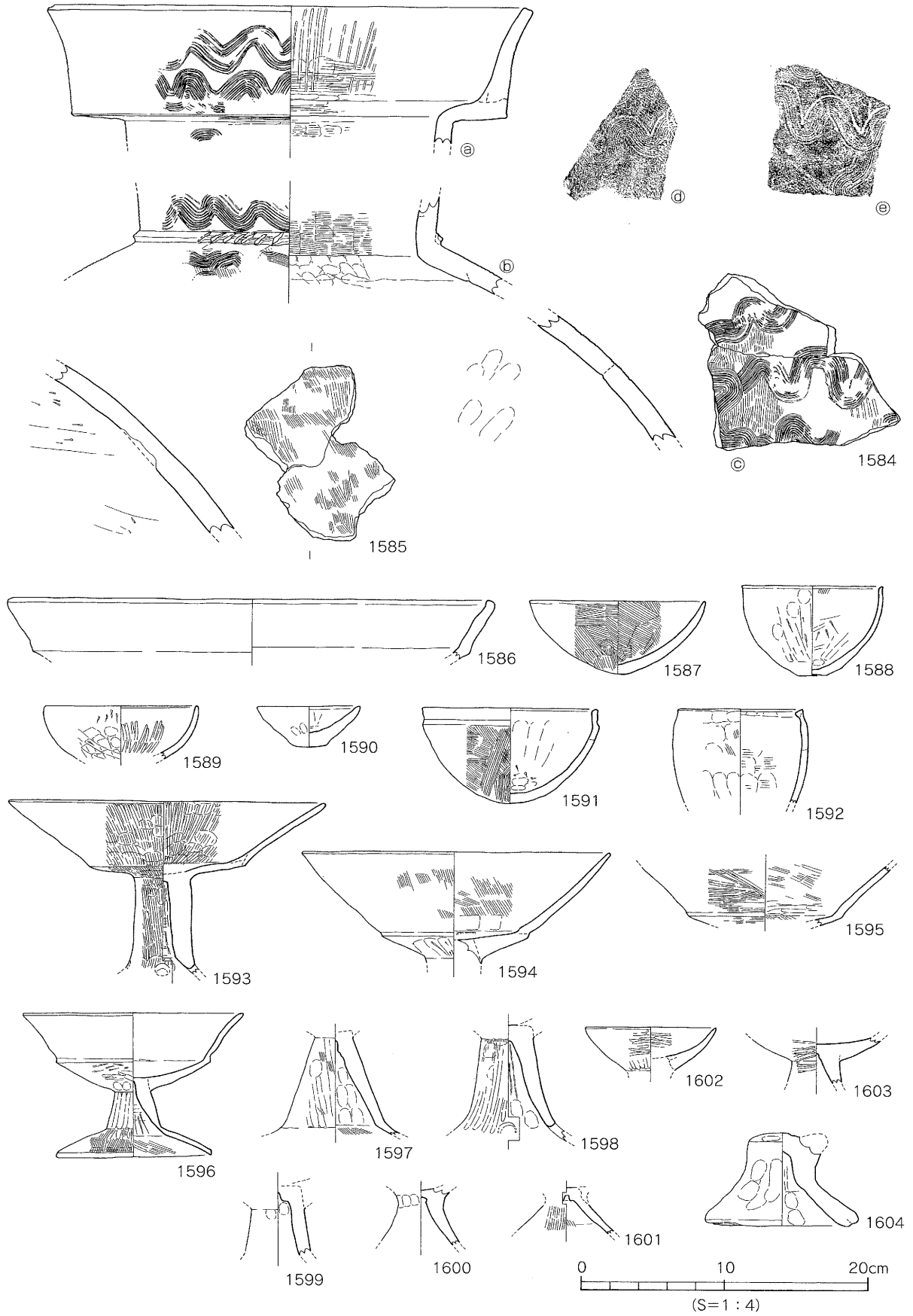


第186図 SD201出土遺物実測図(2区3層)(3)

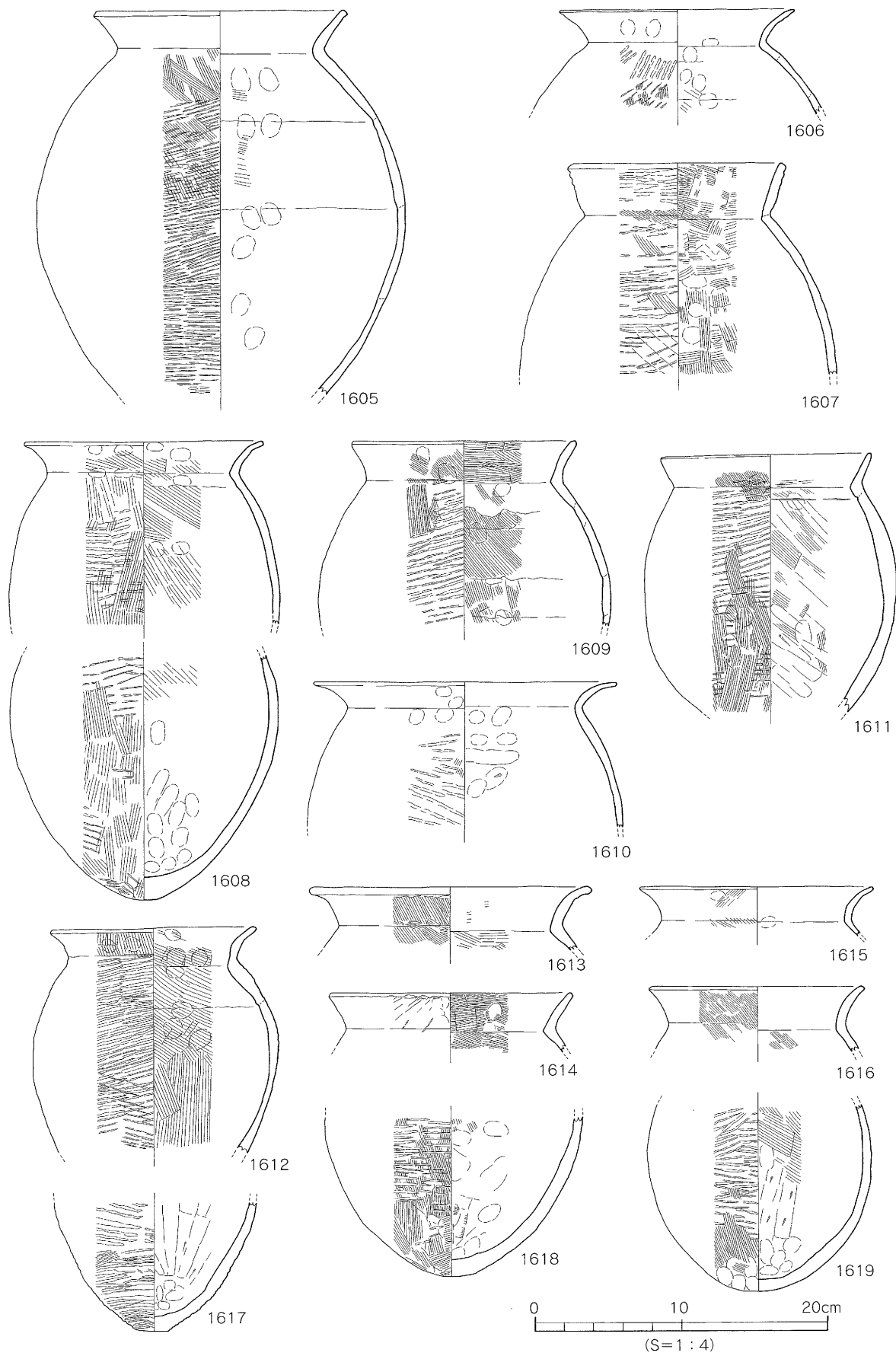
西石井遺跡 1次調査地



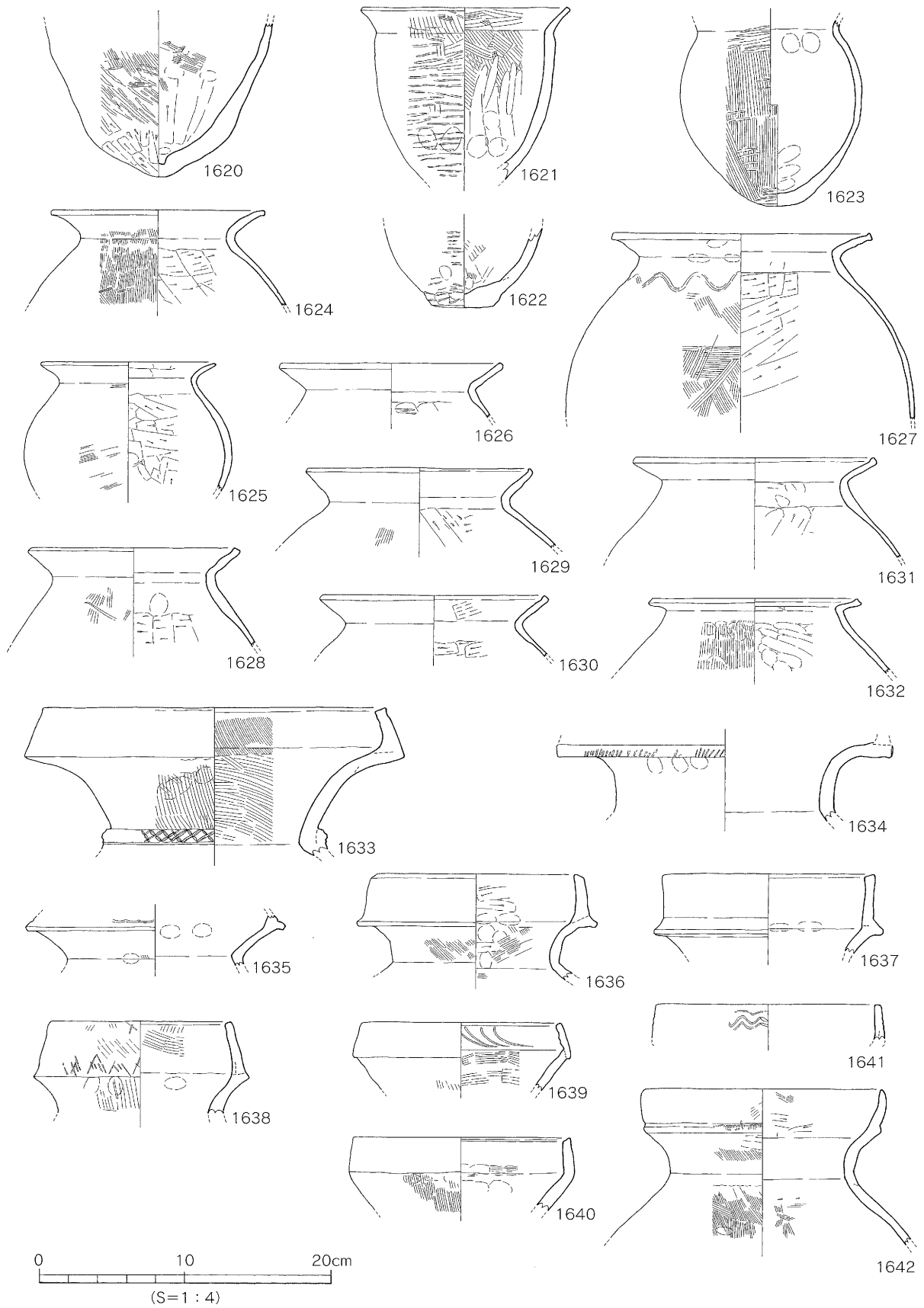
第187図 SD201出土遺物実測図 (3-4区1層・2層(1))



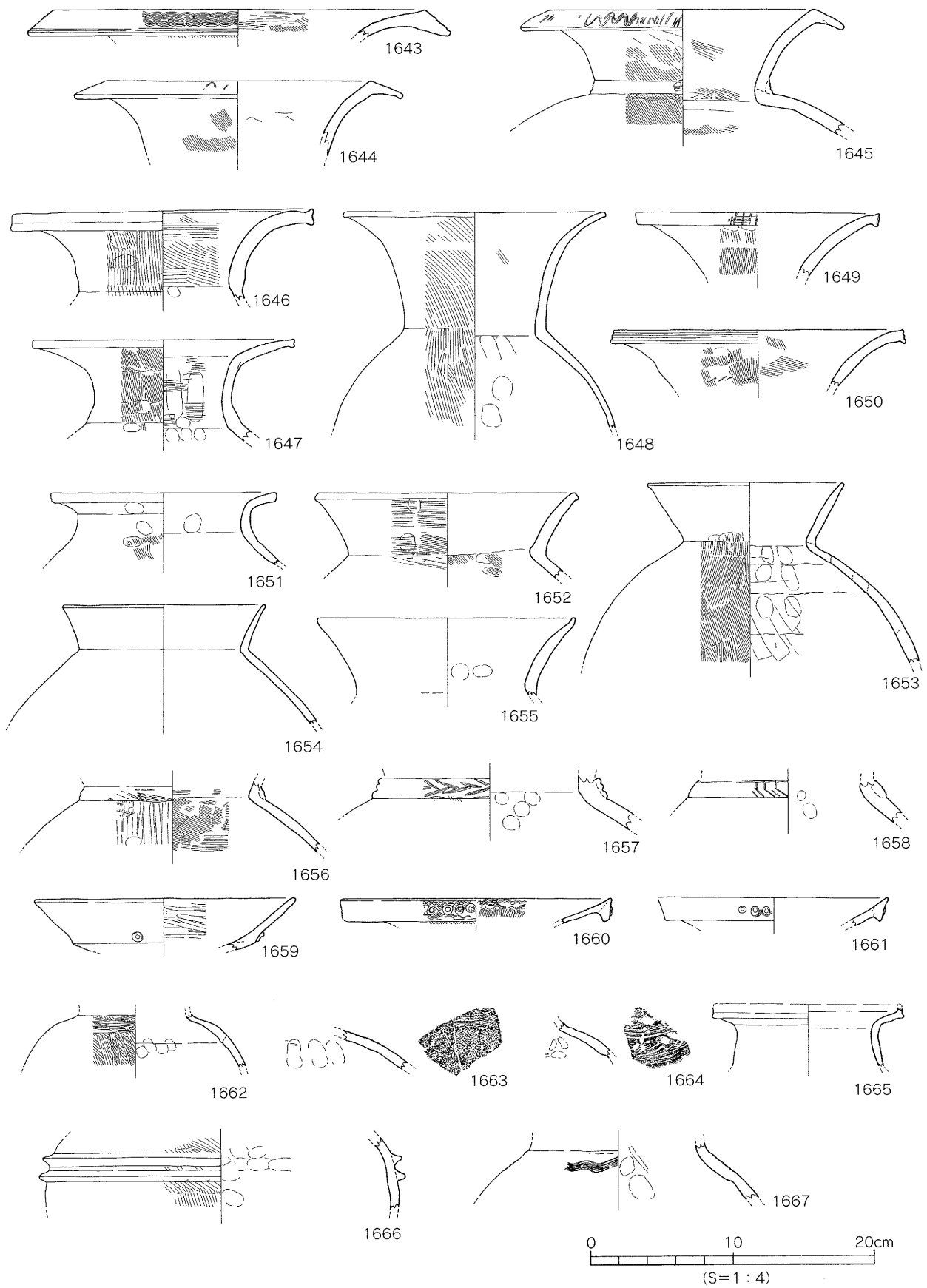
第188図 SD201出土遺物実測図 (3-4区2層) (2)



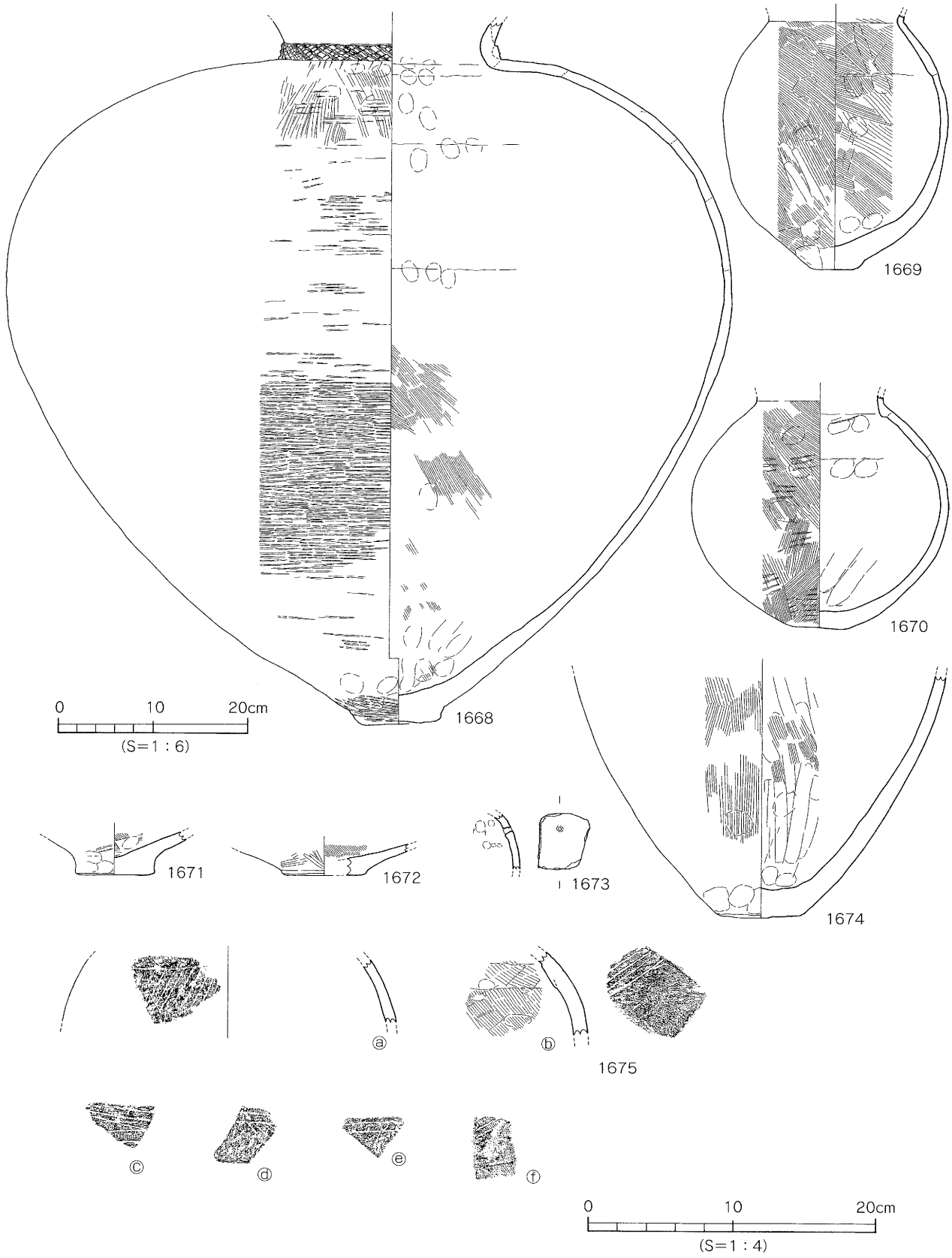
第189図 SD201出土遺物実測図 (3-4区3層) (1)



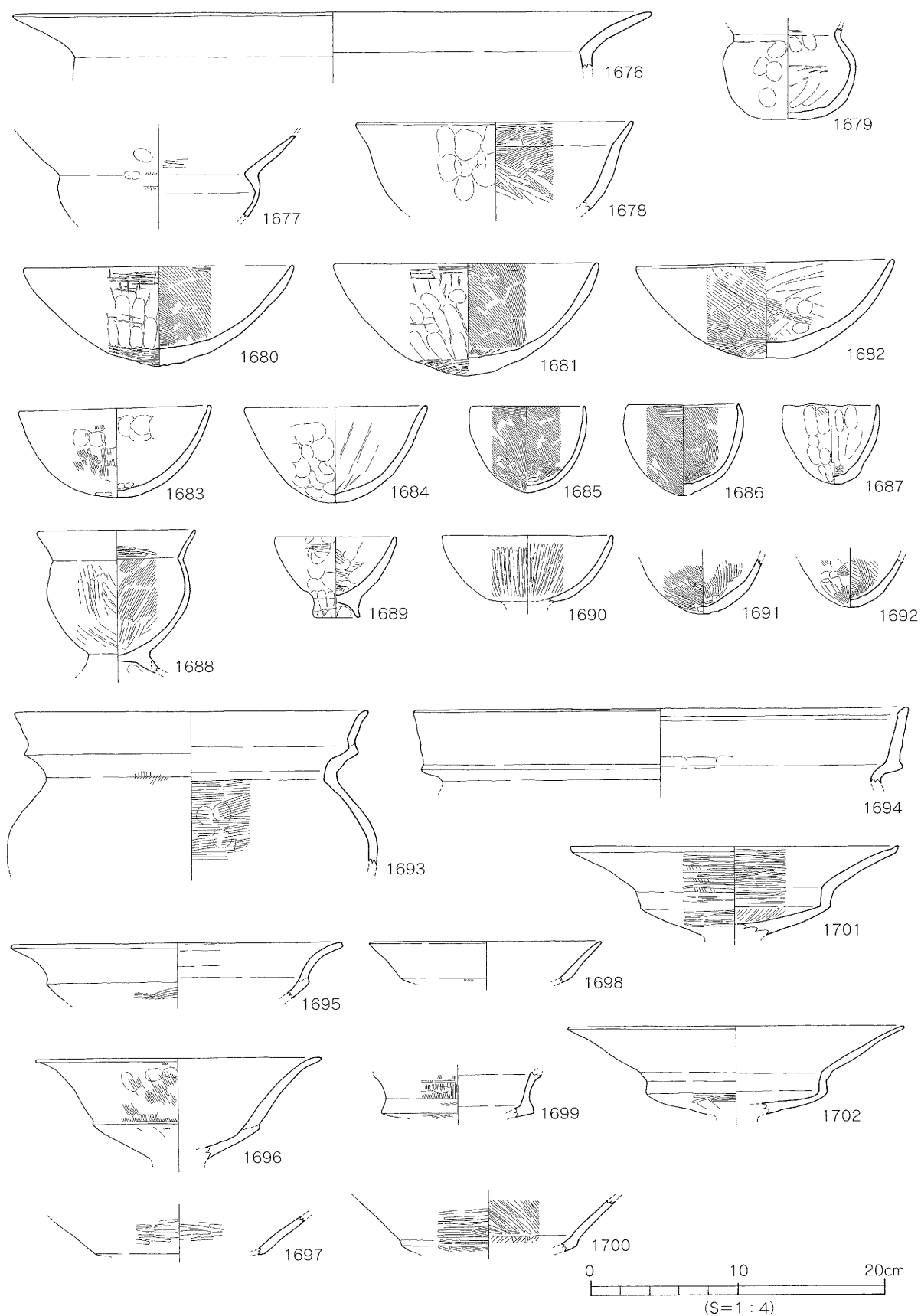
第190図 SD201出土遺物実測図 (3-4区3層) (2)



第191図 SD201出土遺物実測図(3-4区3層)(3)

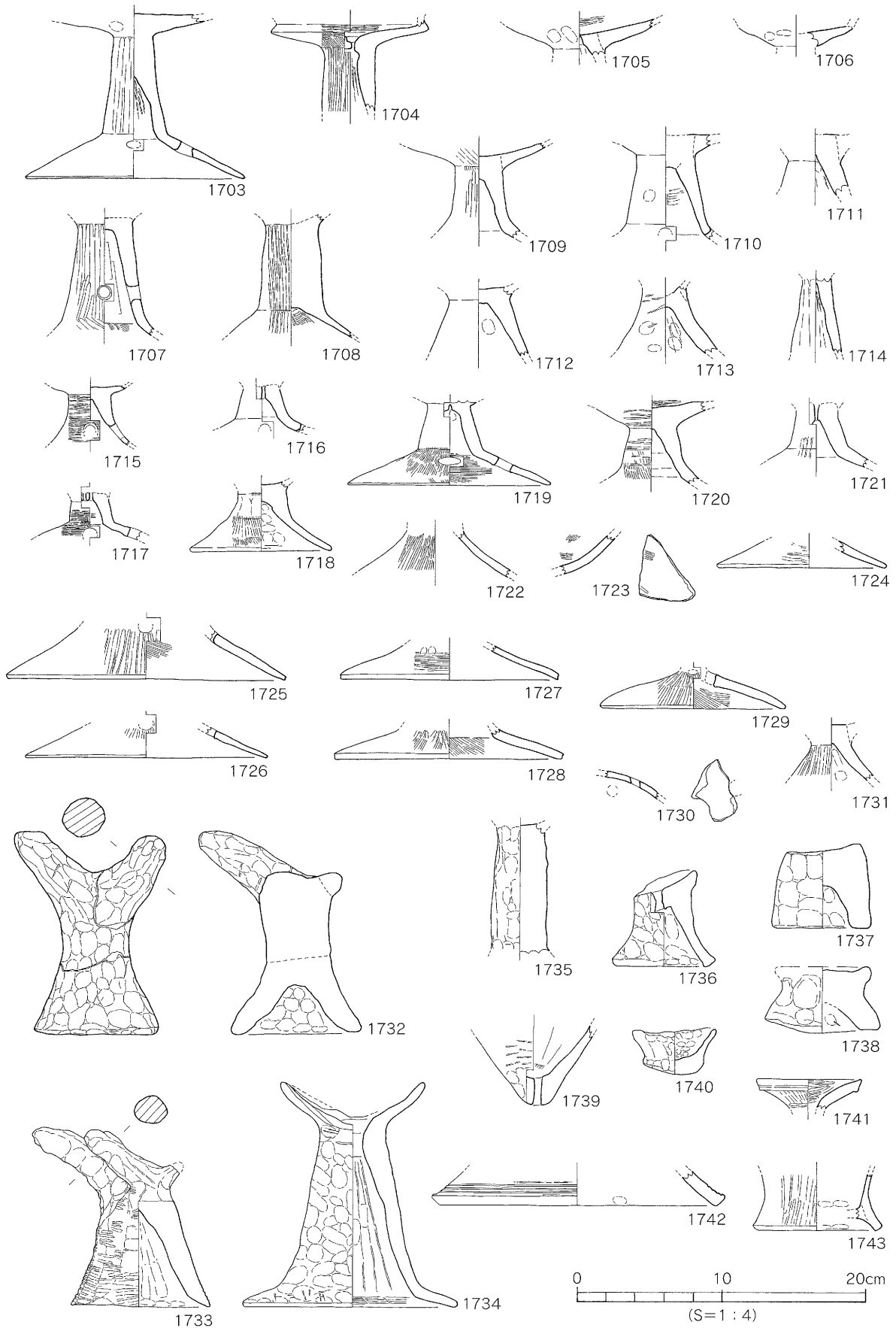


第192図 SD201出土遺物実測図 (3-4区3層) (4)



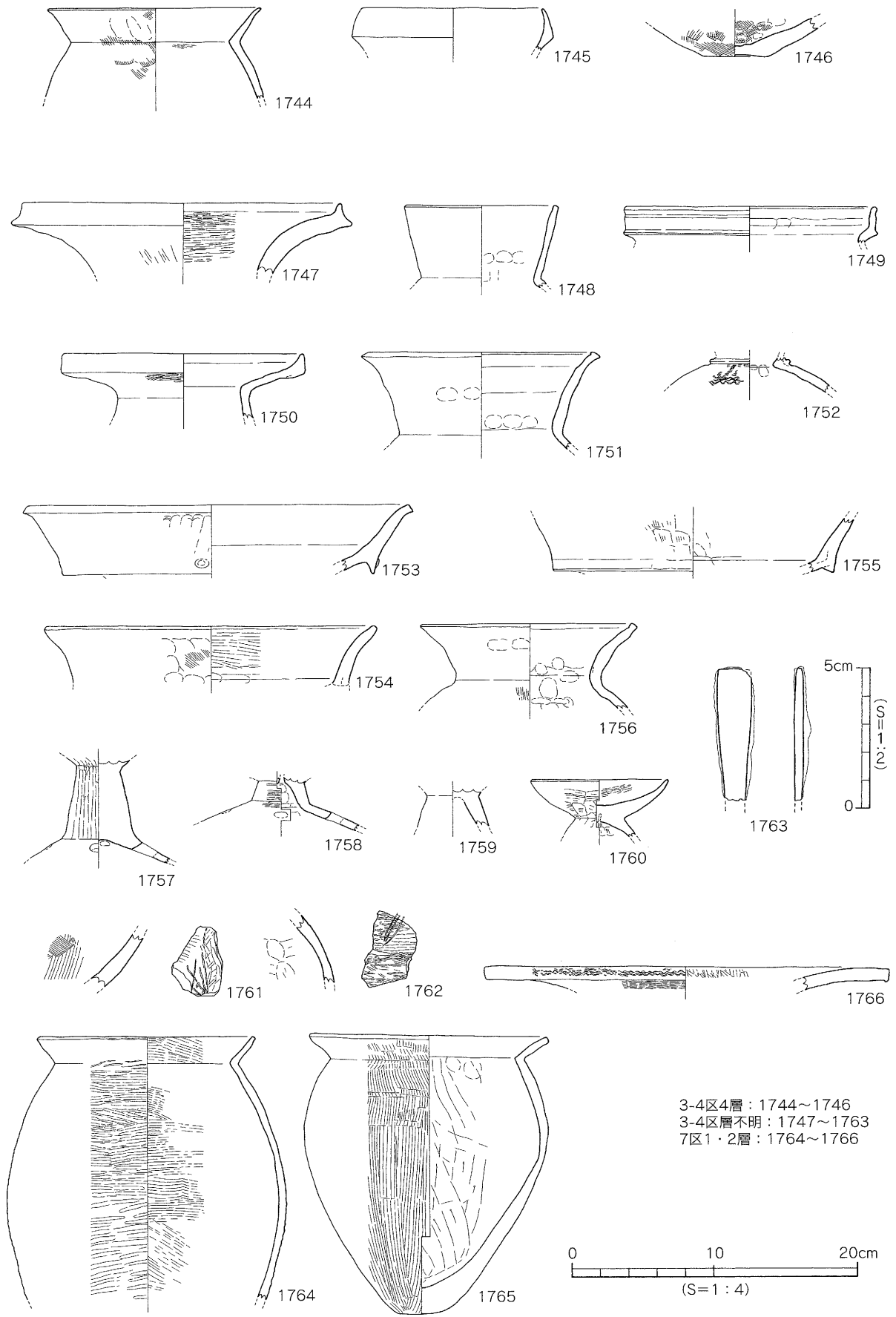
第193図 SD201出土遺物実測図 (3-4区3層) (5)

古墳時代の遺構と遺物



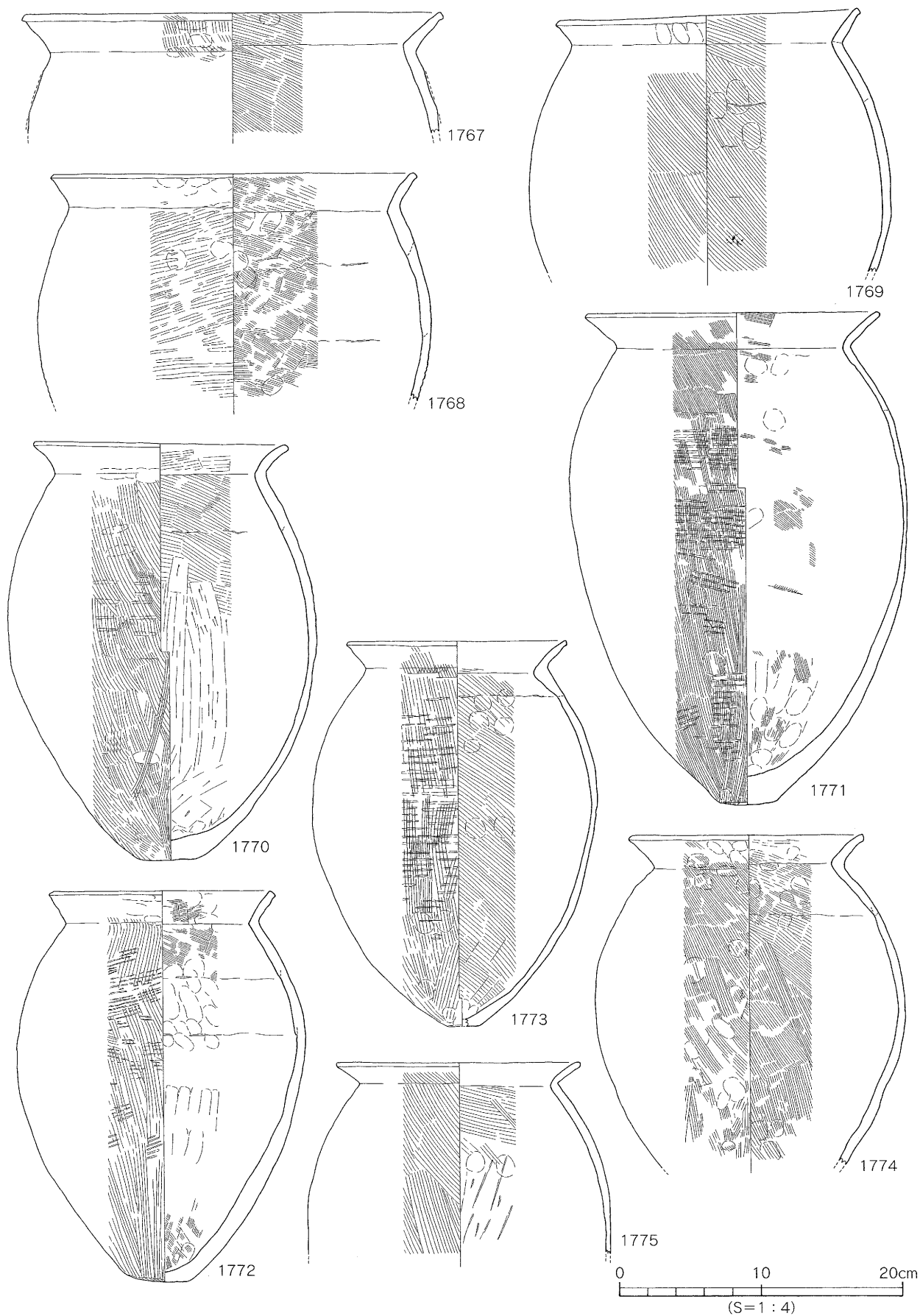
第194図 SD201出土遺物実測図(3-4区3層)(6)

西石井遺跡 1次調査地

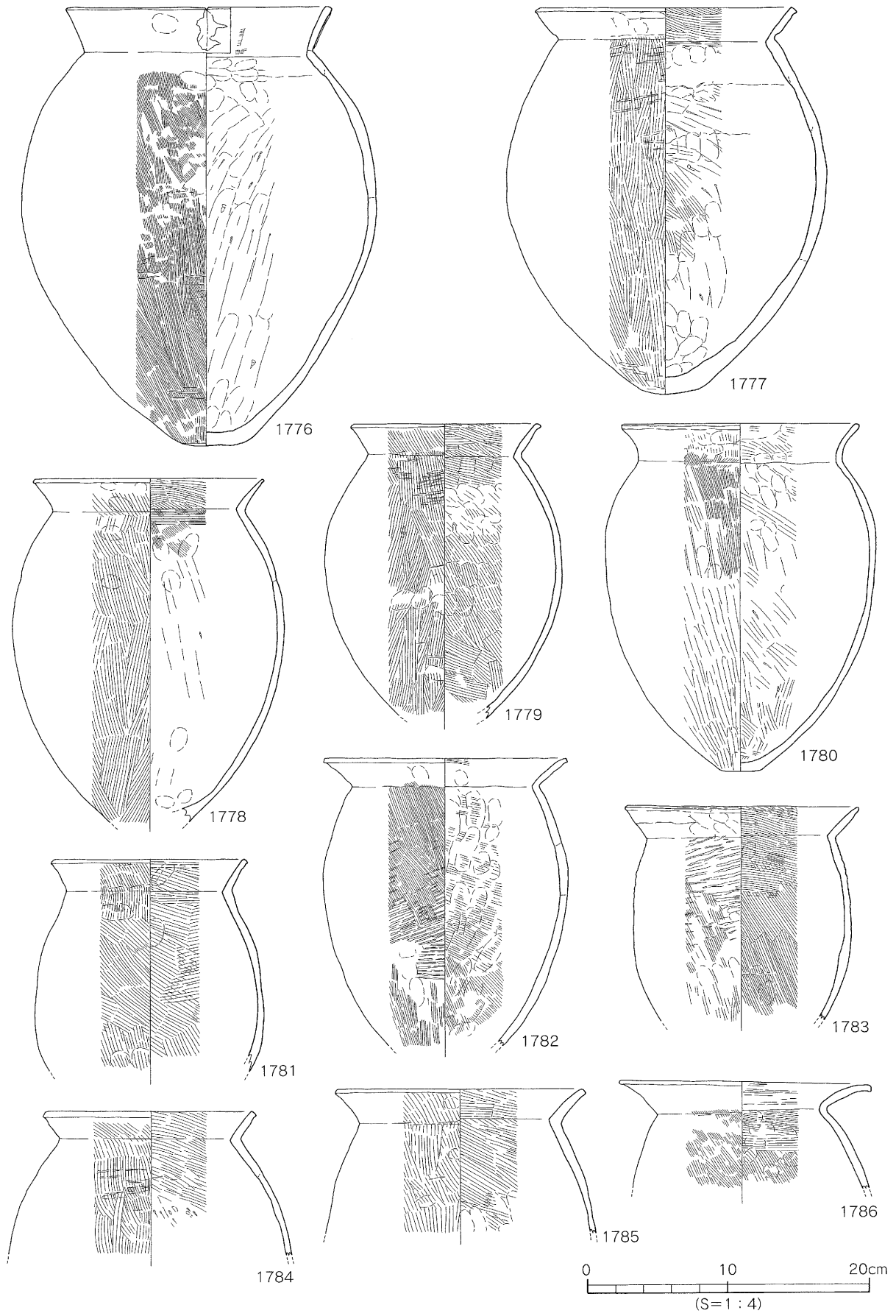


3-4区4層：1744~1746
 3-4区層不明：1747~1763
 7区1・2層：1764~1766

第195図 SD201出土遺物実測図 (3-4区4層・層不明・7区1・2層)

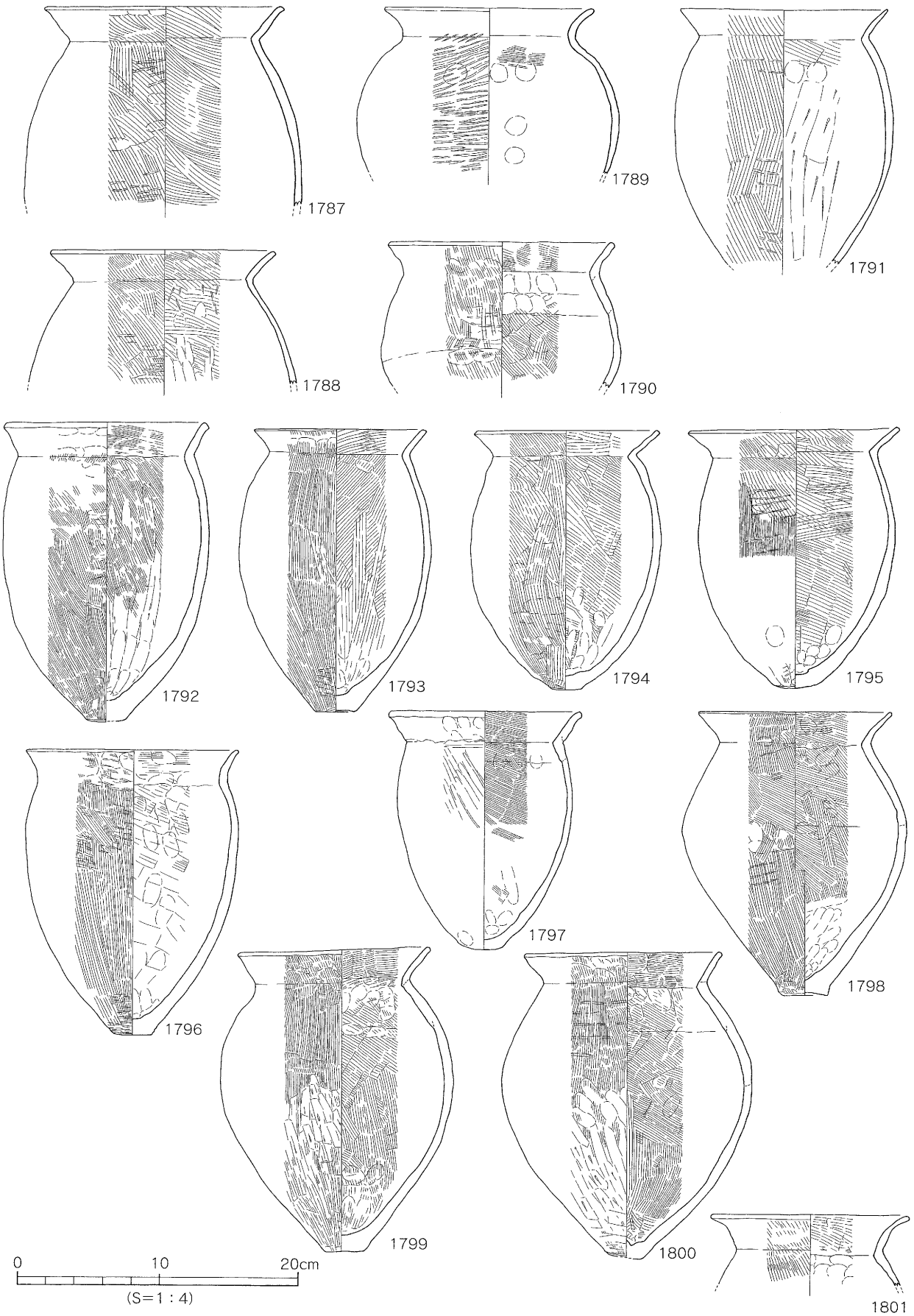


第196図 SD201出土遺物実測図 (5-7区3層) (1)



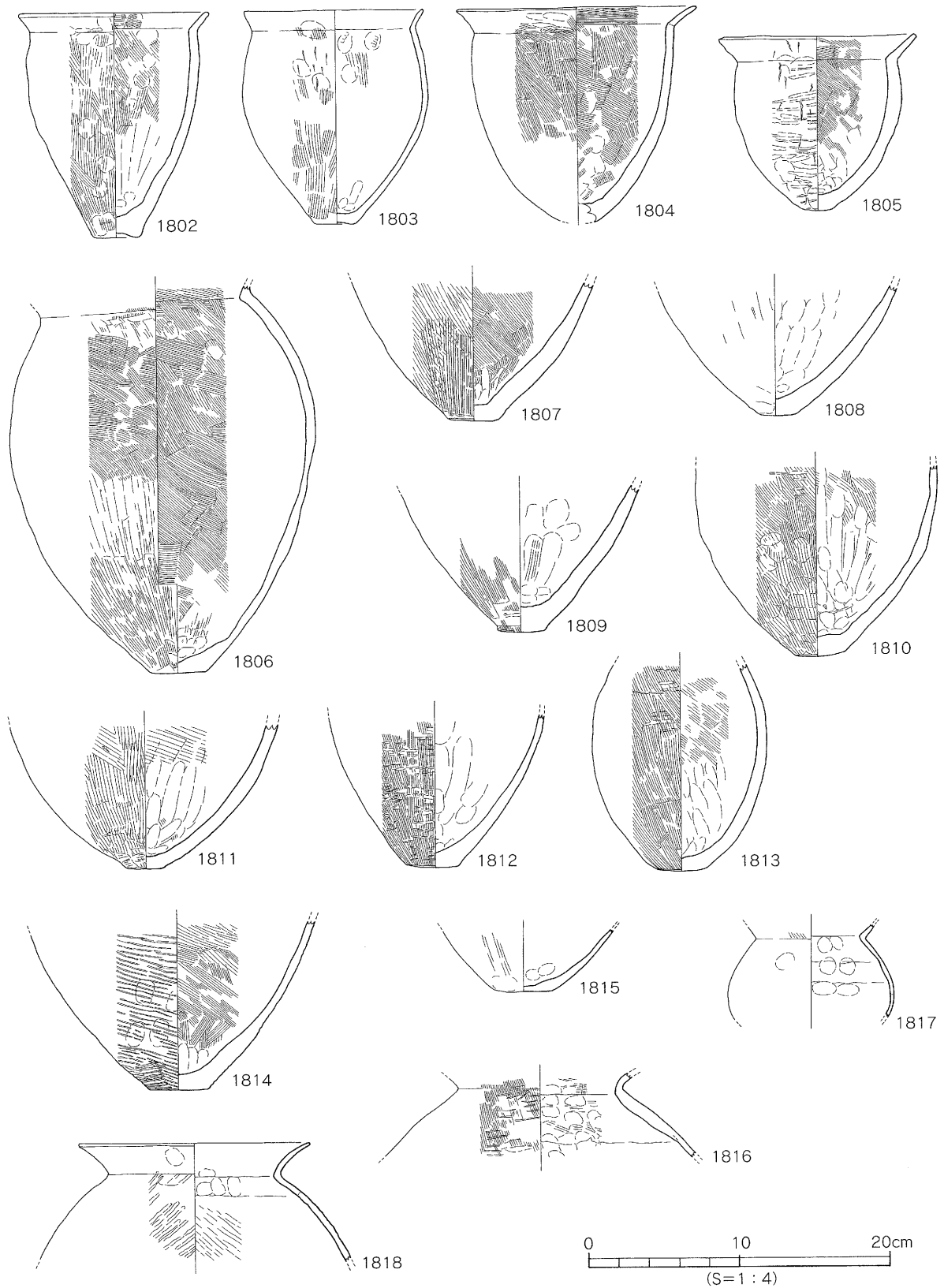
第197図 SD201出土遺物実測図 (5-7区3層) (2)

古墳時代の遺構と遺物

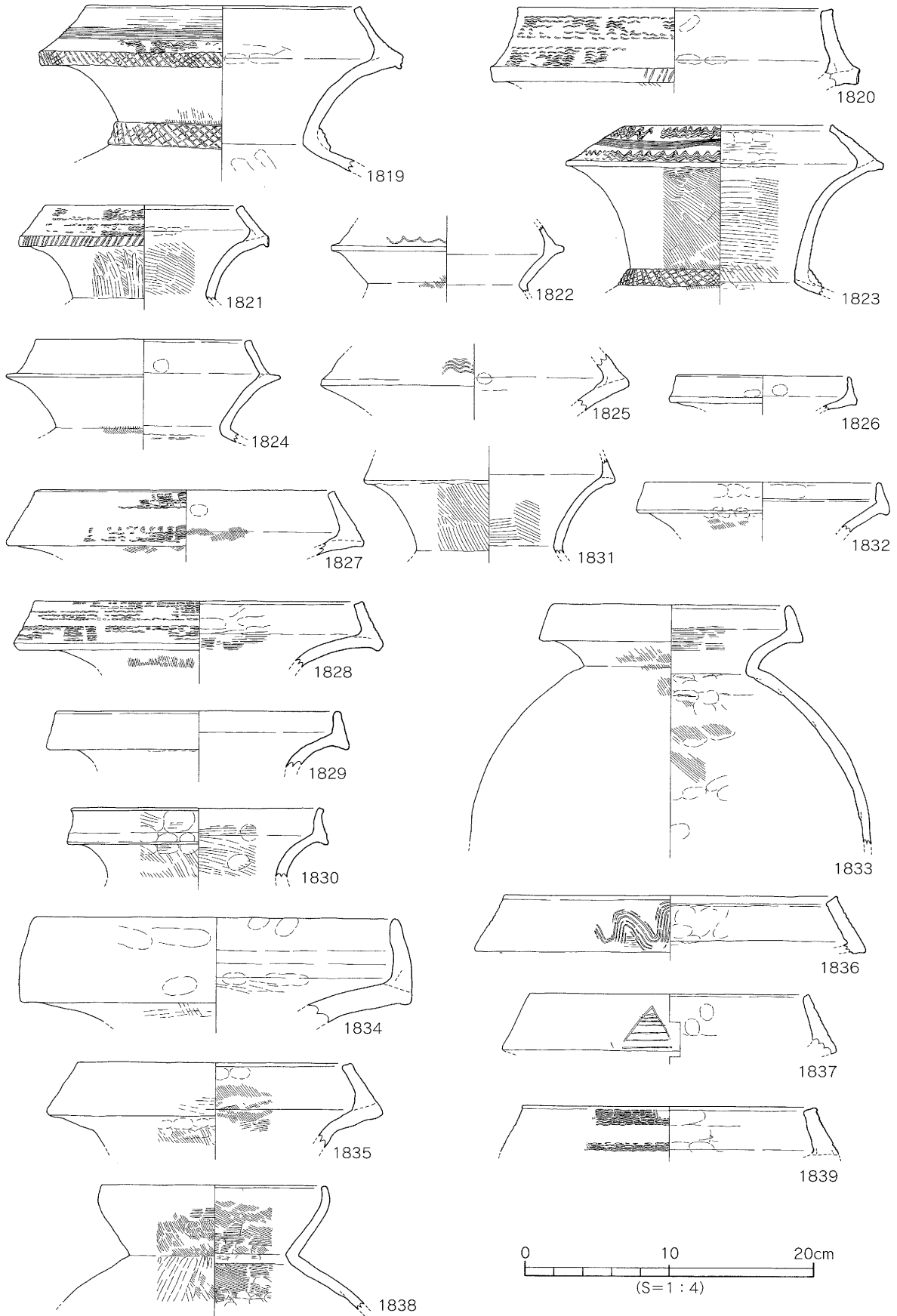


第198図 SD201出土遺物実測図 (5-7区3層) (3)

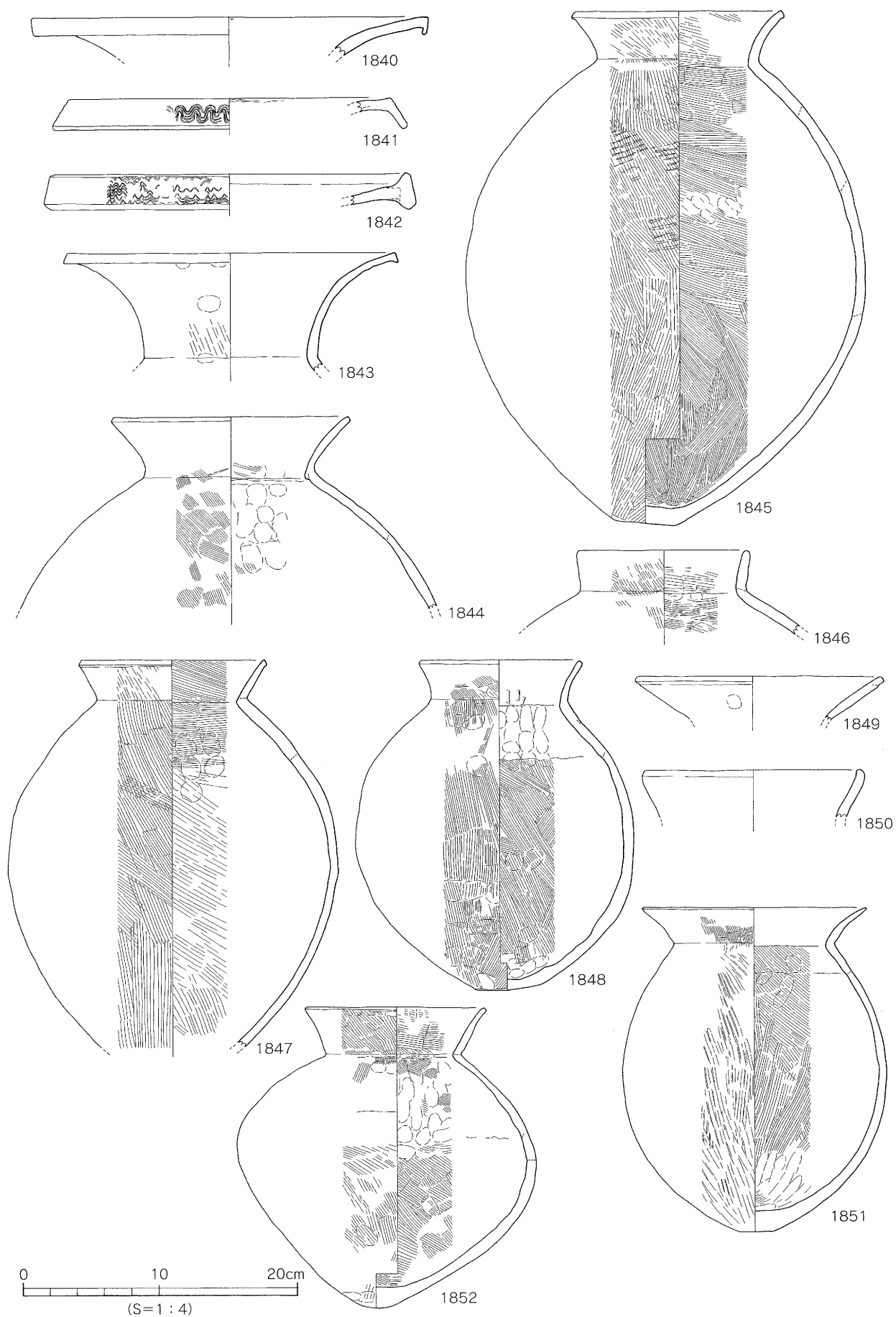
西石井遺跡1次調査地



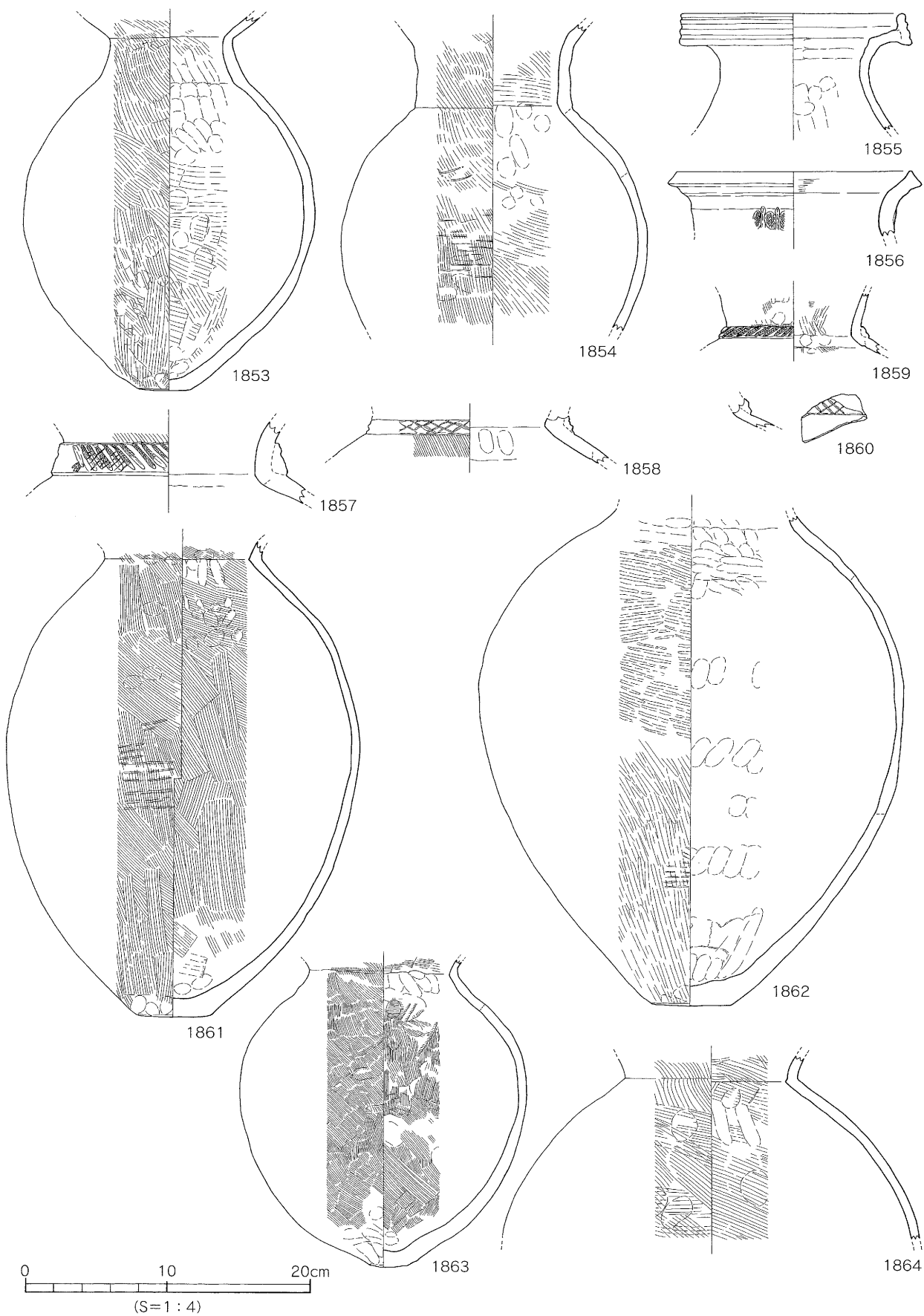
第199図 SD201出土遺物実測図(5-7区3層)(4)



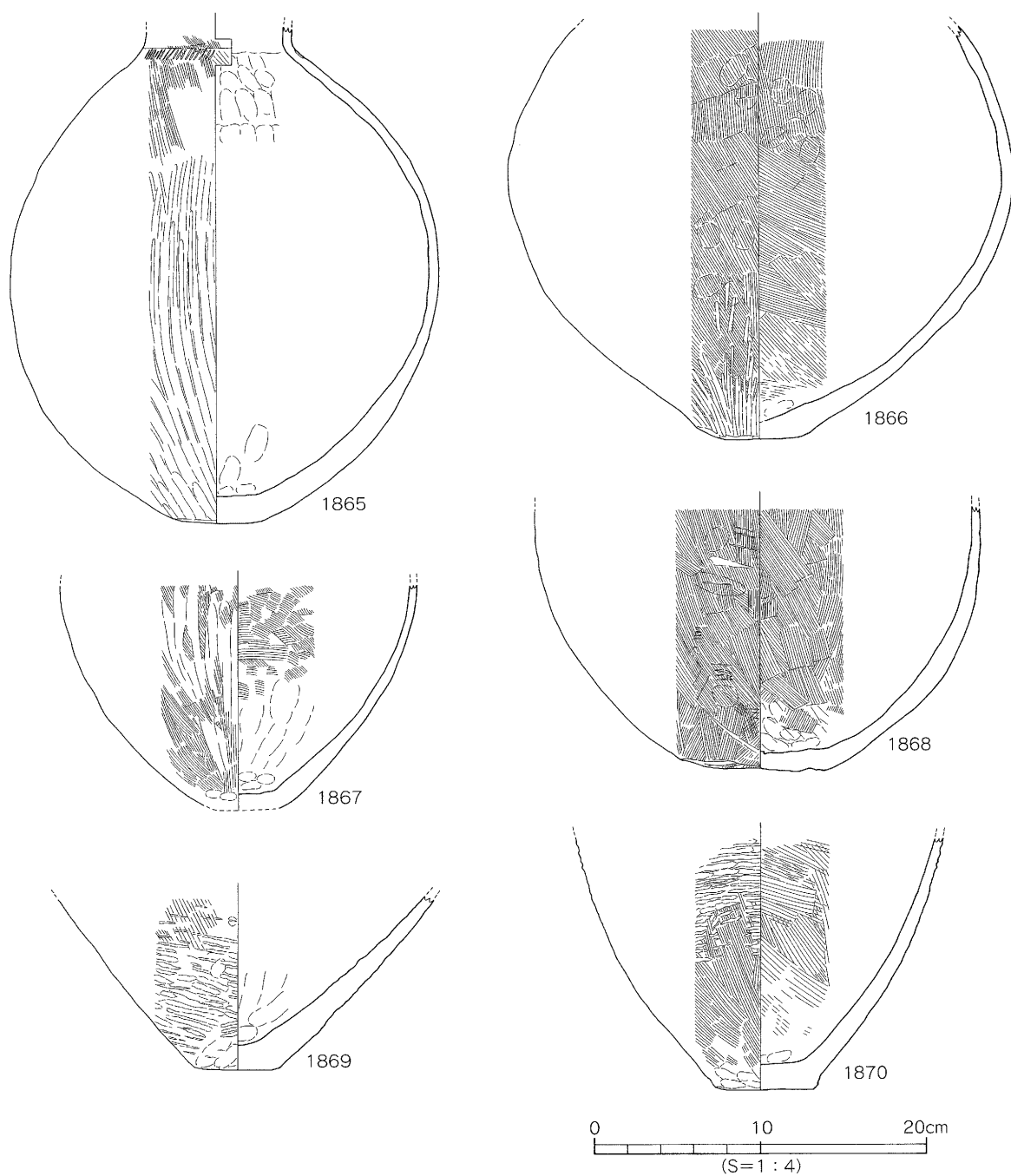
第200図 SD201出土遺物実測図 (5-7区3層) (5)



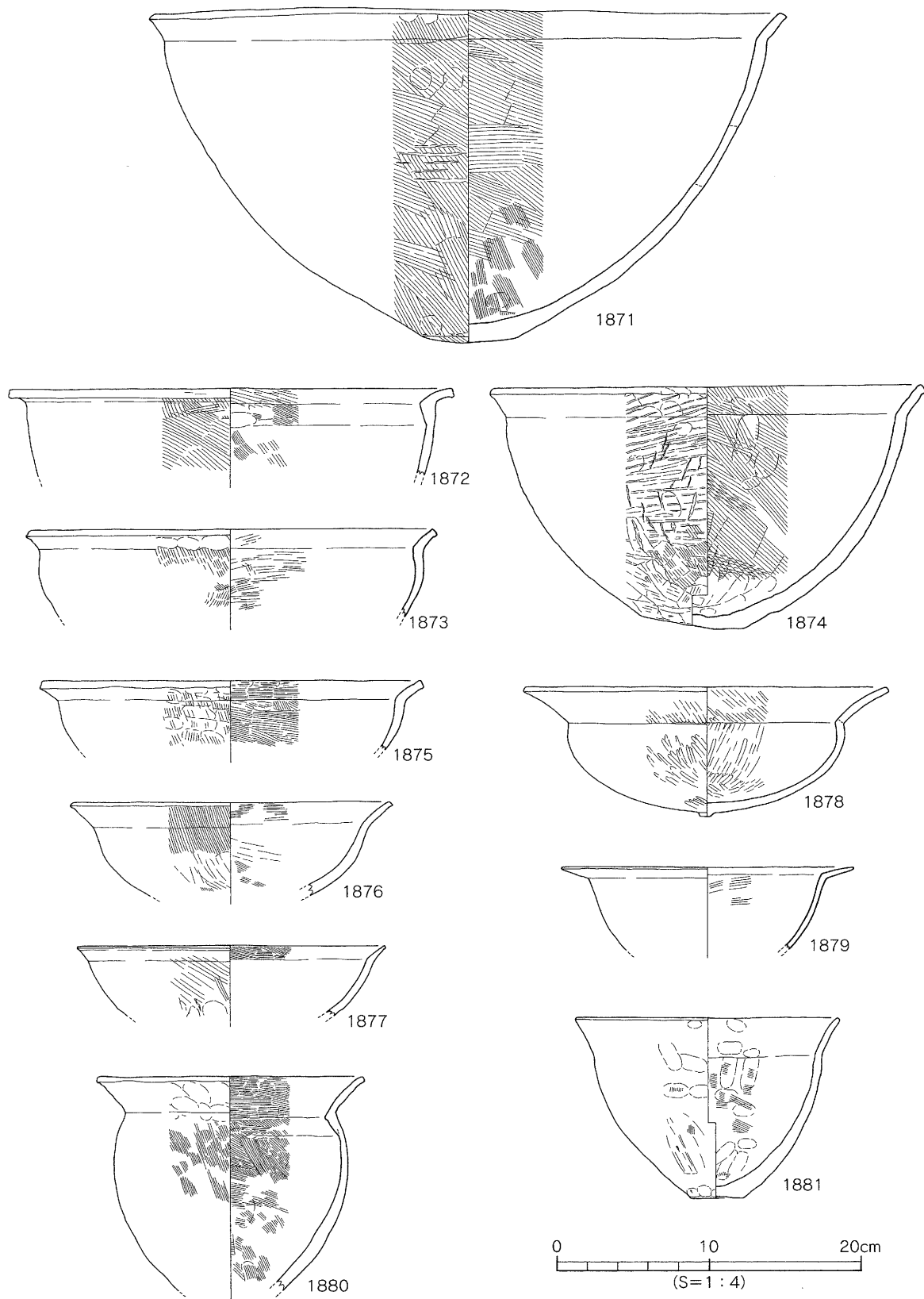
第201図 SD201出土遺物実測図 (5-7区3層) (6)



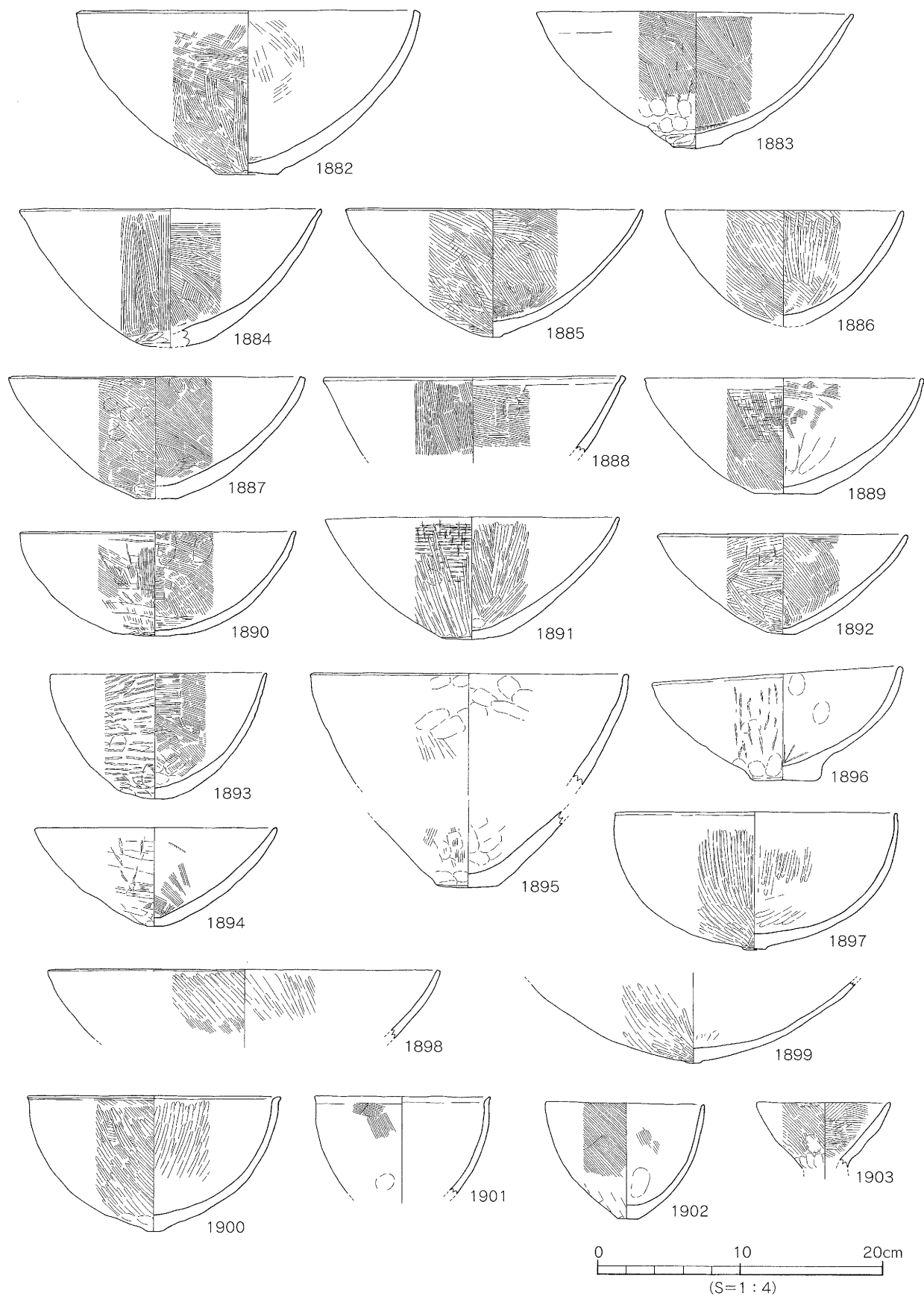
第202図 SD201出土遺物実測図 (5-7区3層) (7)



第203図 SD201出土遺物実測図(5-7区3層)(8)

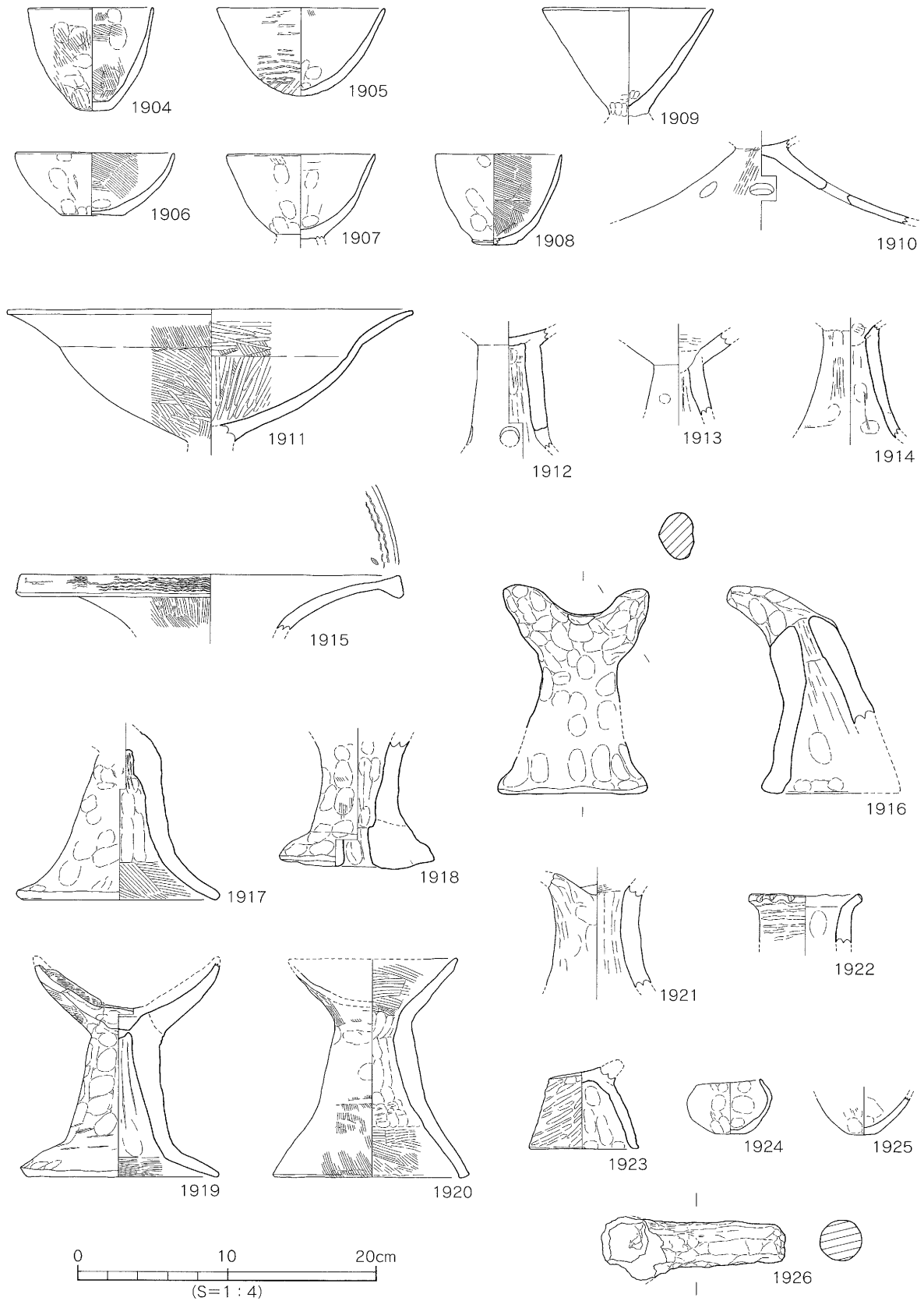


第204図 SD201出土遺物実測図 (5-7区3層) (9)

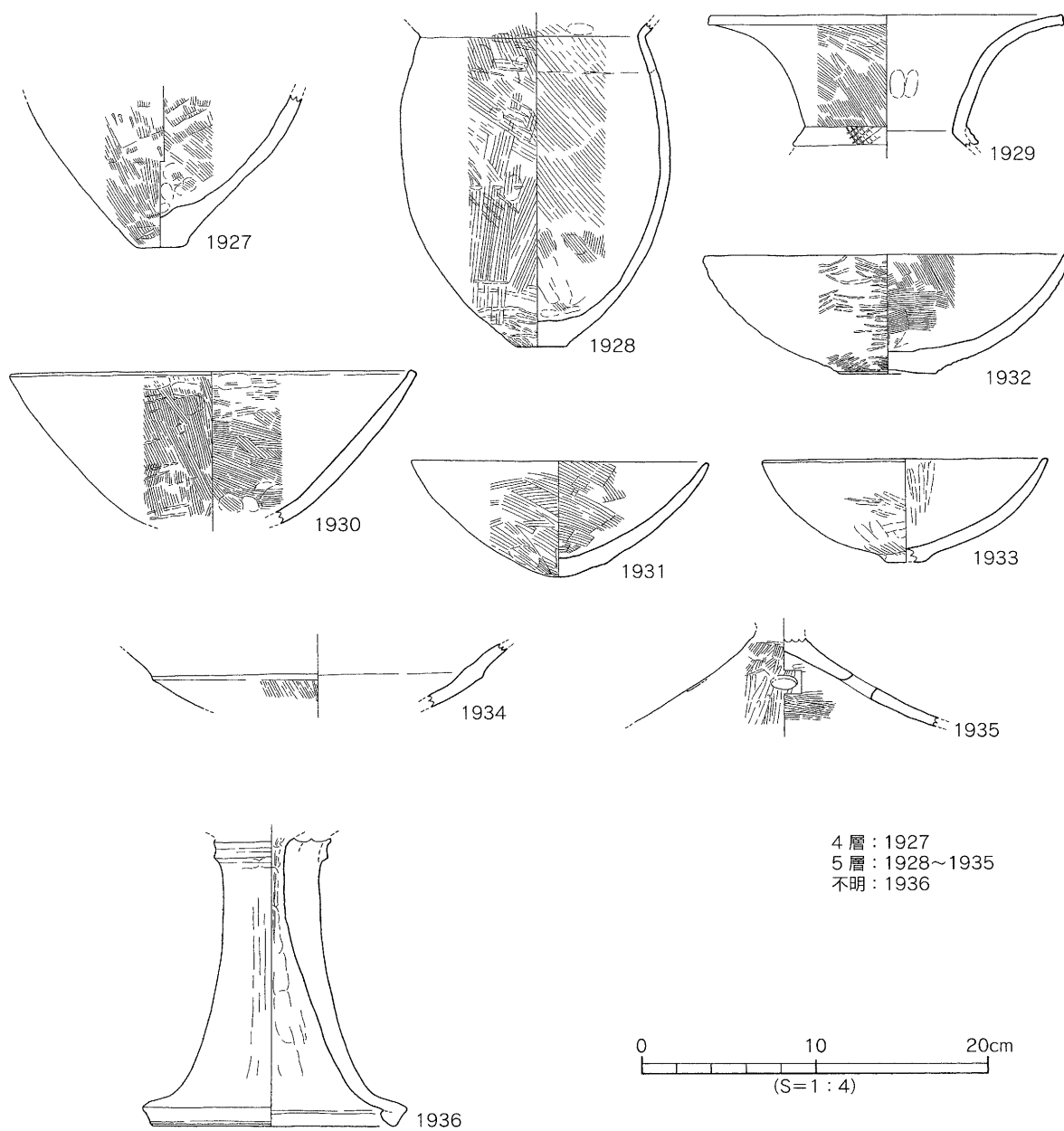


第205図 SD201出土遺物実測図 (5-7区3層) (10)

古墳時代の遺構と遺物

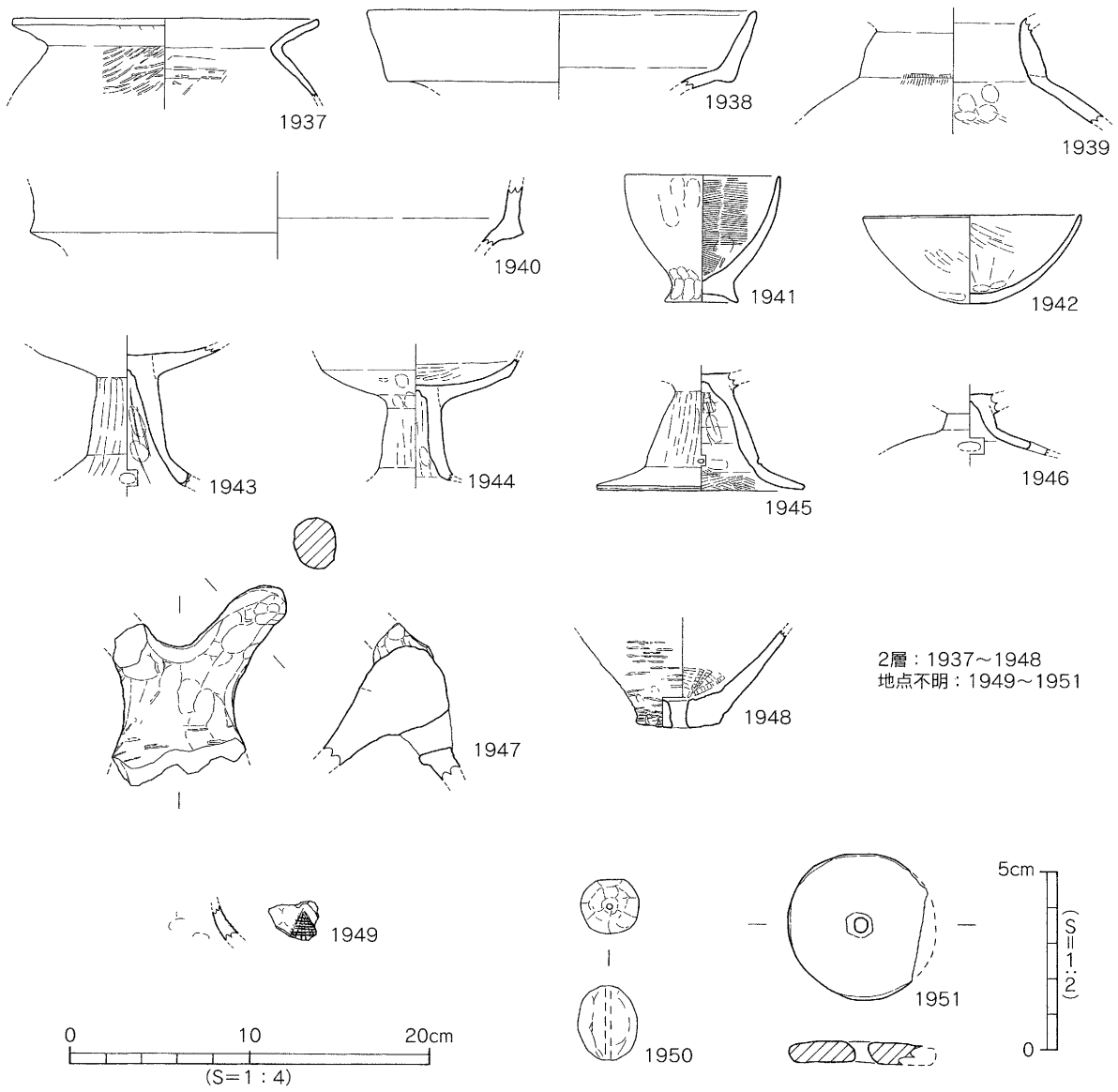


第206図 SD201出土遺物実測図 (5-7区3層) (11)

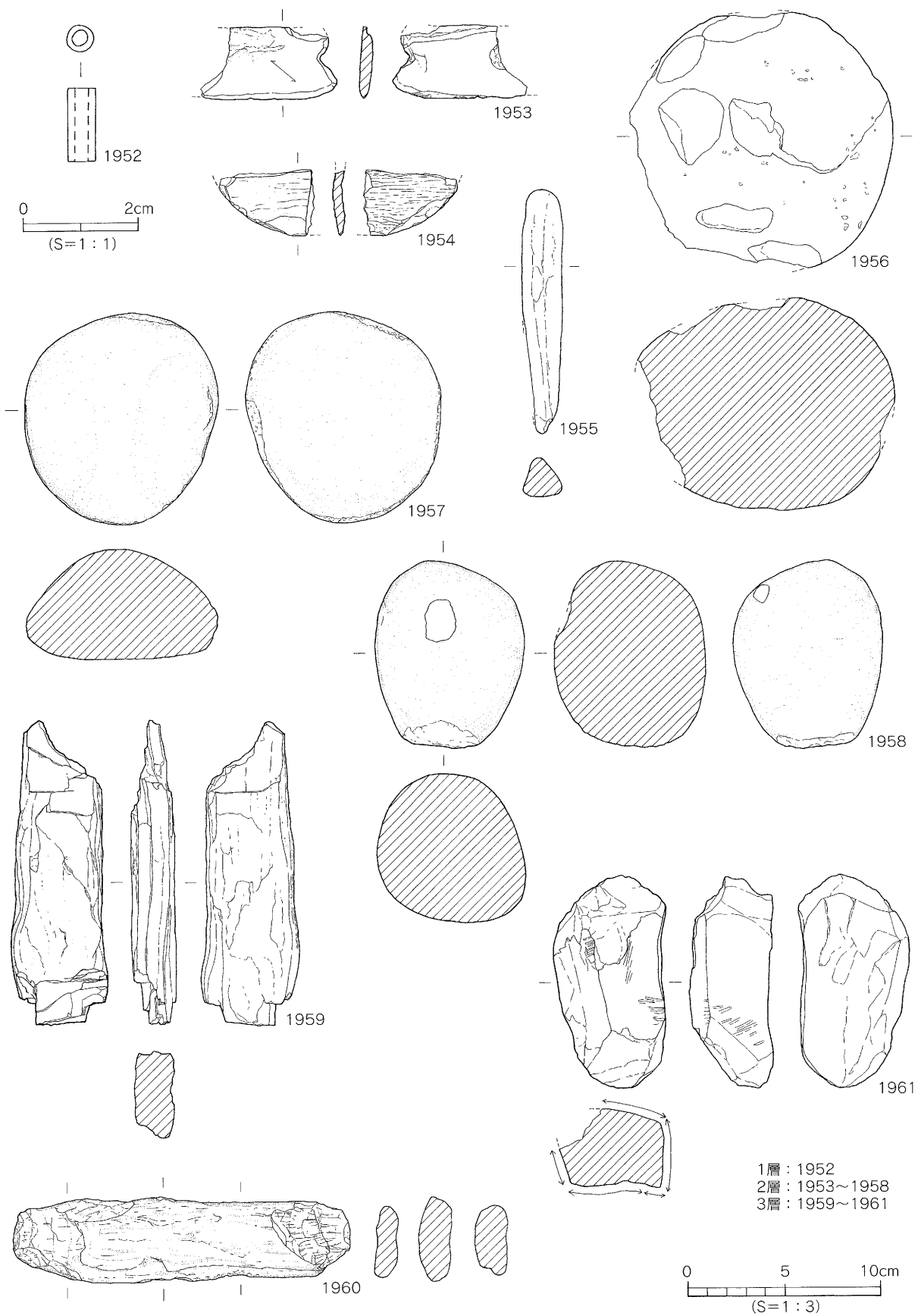


第207図 SD201出土遺物実測図 (5-7区4・5層他)

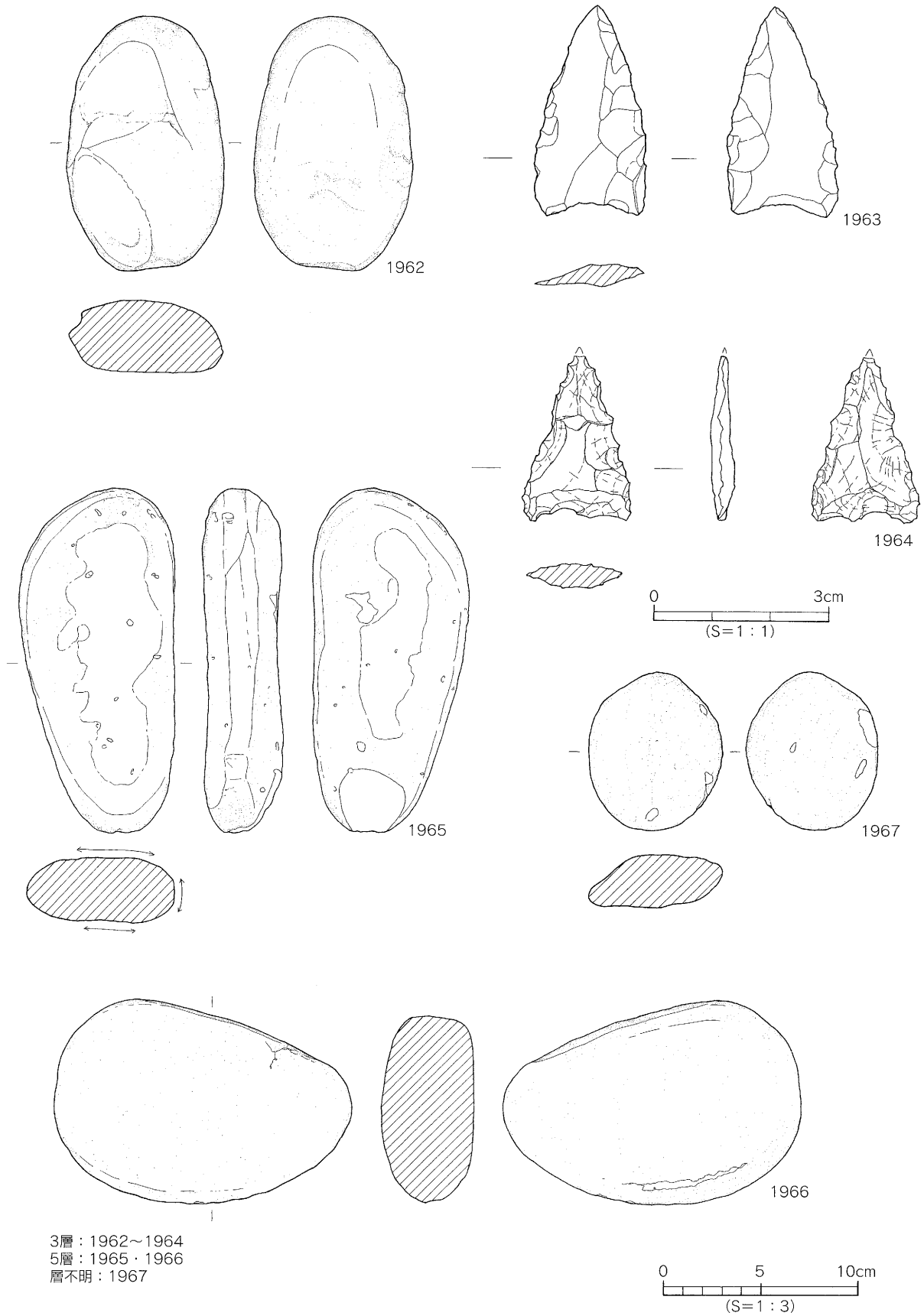
古墳時代の遺構と遺物



第208図 SD201出土遺物実測図（2層・地点不明）

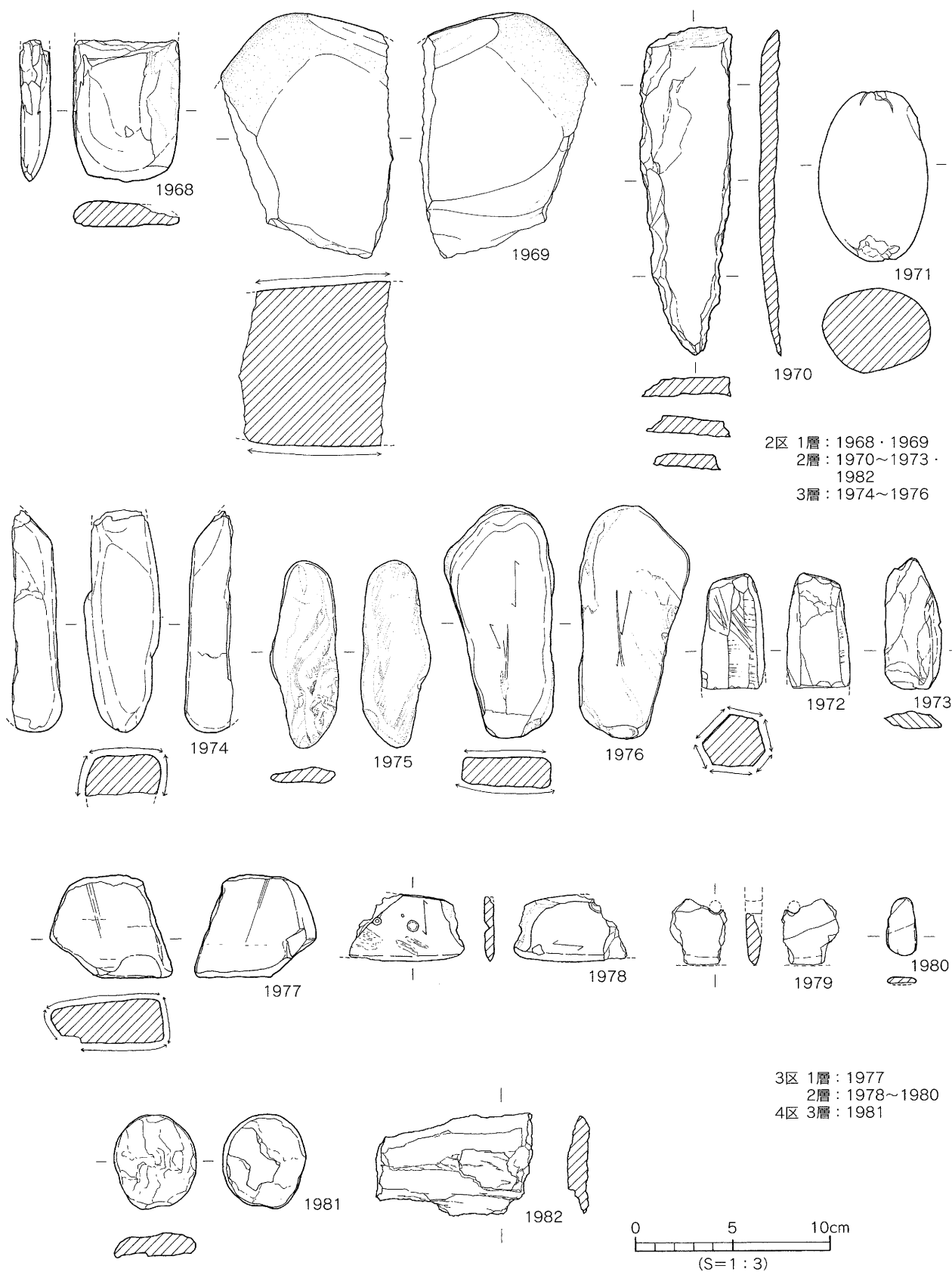


第209図 SD201出土遺物実測図(0-1区)(1)

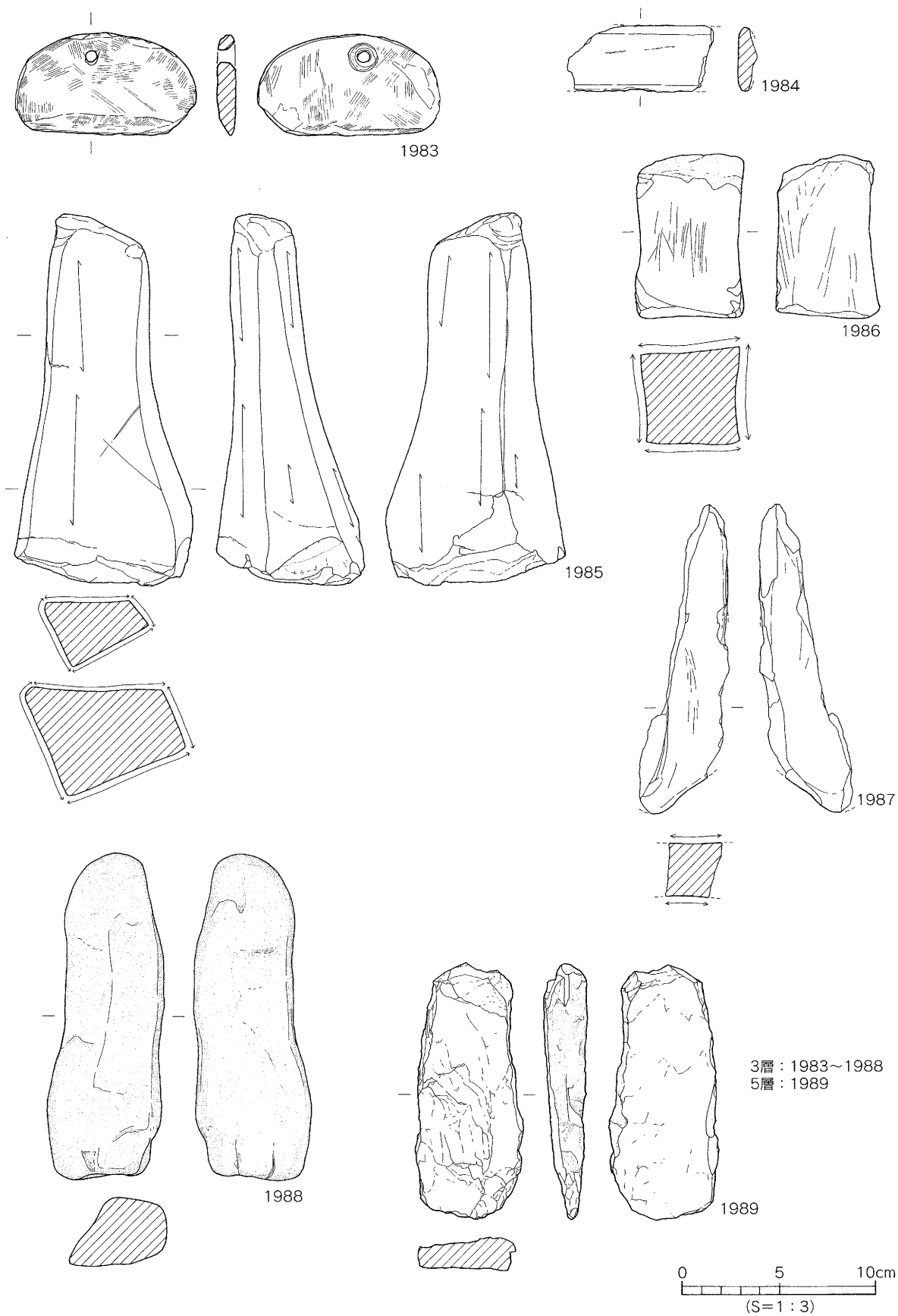


第210図 SD201出土遺物実測図(0-1区)(2)

西石井遺跡 1次調査地



第211図 SD201出土遺物実測図 (2区・3区)



第212図 SD201出土遺物実測図 (5-7区)

S D507 (第213図)

S D507は5区東部、S 1・2区に位置し、西側は溝S D504を切り、北・南・東測は調査区外へ続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。規模は南北検出長5.00m、東西検出長2.20~2.60m、深さ0.06~0.32mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は3層に分層される。1層黄褐色土に砂が混じるもの、2層黄灰褐色土、3層褐色粘質土である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より弥生土器片、須恵器片と石器が出土した。

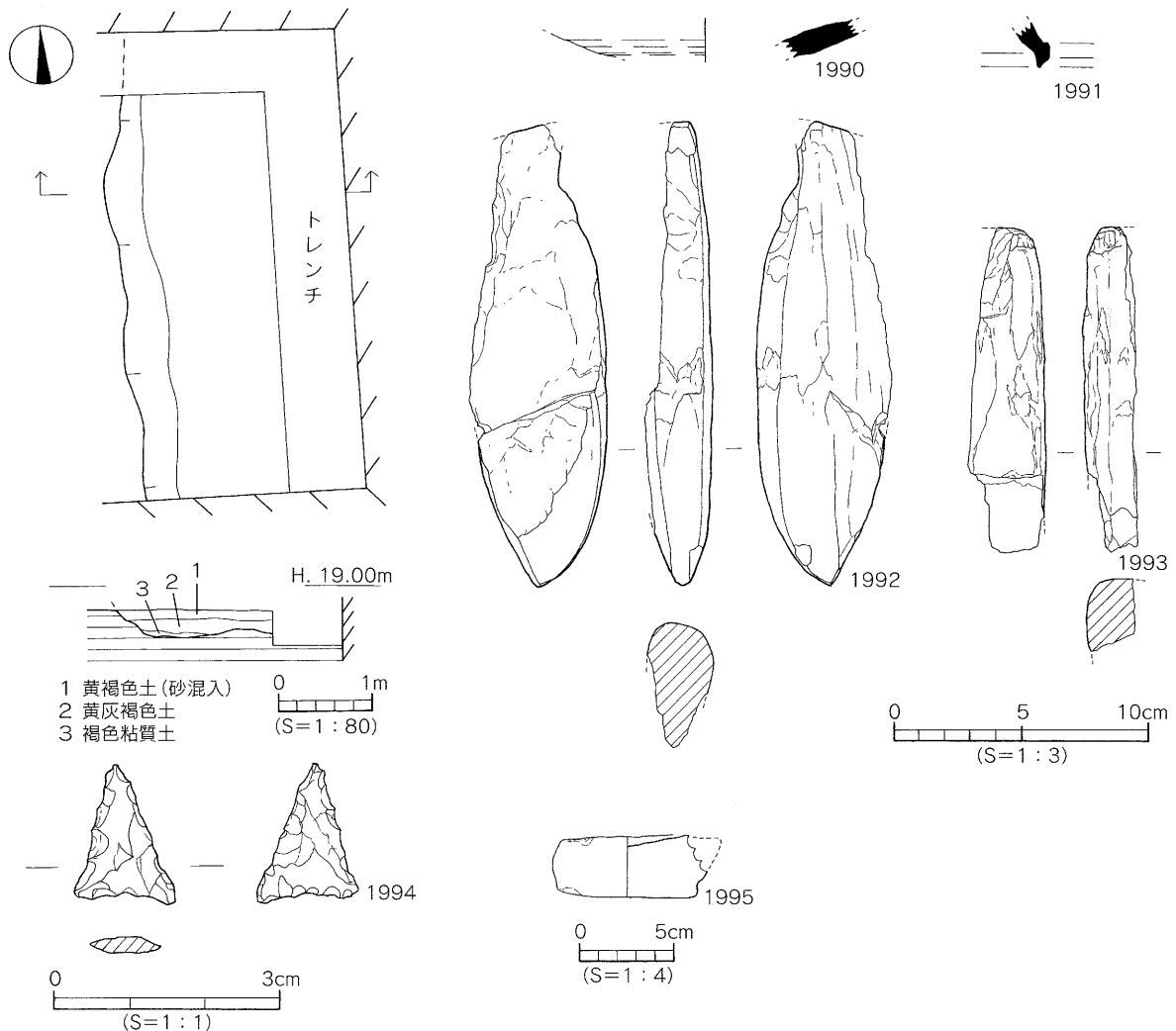
出土遺物 (1990~1995) 1990・1991は須恵器、1992~1994は石器、1995は弥生土器である。

時期：出土遺物から、概ね古墳時代後期とする。

S D401 (第214図)

S D401は4区北東部、N・O 1区に位置し、第Ⅲ①層上面で検出した。溝北測と東測は調査区外へ続く。規模は東西検出長5.30m、南北検出長0.50~1.70m、深さ0.18~0.22mを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より弥生土器、土師器片が出土した。

時期：検出層位や出土遺物から、概ね古墳時代とする。



第213図 SD507測量図・出土遺物実測図

(3) 土 坑

S K 202 (第215図、図版20・26)

S K 202は2区南西部、E 2区に位置する。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.30m、短径0.60m、深さ0.33~0.42mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。遺物は埋土中より、完形の土師器や弥生土器片が出土した。

出土遺物 (1996~2008) 1996~1999・2004は復元完形品で、1996~1998は近畿系の甕、1999は壺、2004は鉢である。2000~2003・2005~2008は小片で、2000・2001は甕、2002・2003は壺、2005は鉢、2006~2008は高坏である。

時期：出土遺物から古墳時代前期とする。

S K 301 (第64図)

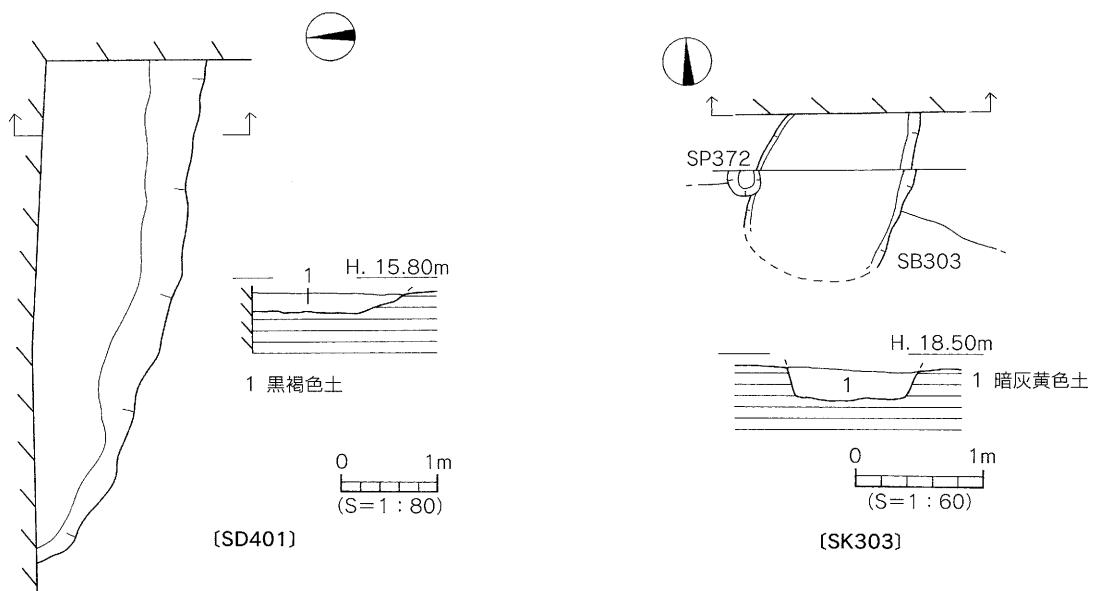
S K 301は3区中央西寄り、I 2区に位置し、北側はS B 301を、南側はS B 302を切り、南西側は柱穴に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径1.00m、深さ0.07~0.09mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐灰色土に黄色土が混じるものである。遺物は埋土中より、弥生土器片や土師器片が少量出土した。

時期：切り合いと出土遺物から、概ね古墳時代中期以降とする。

S K 303 (第214図)

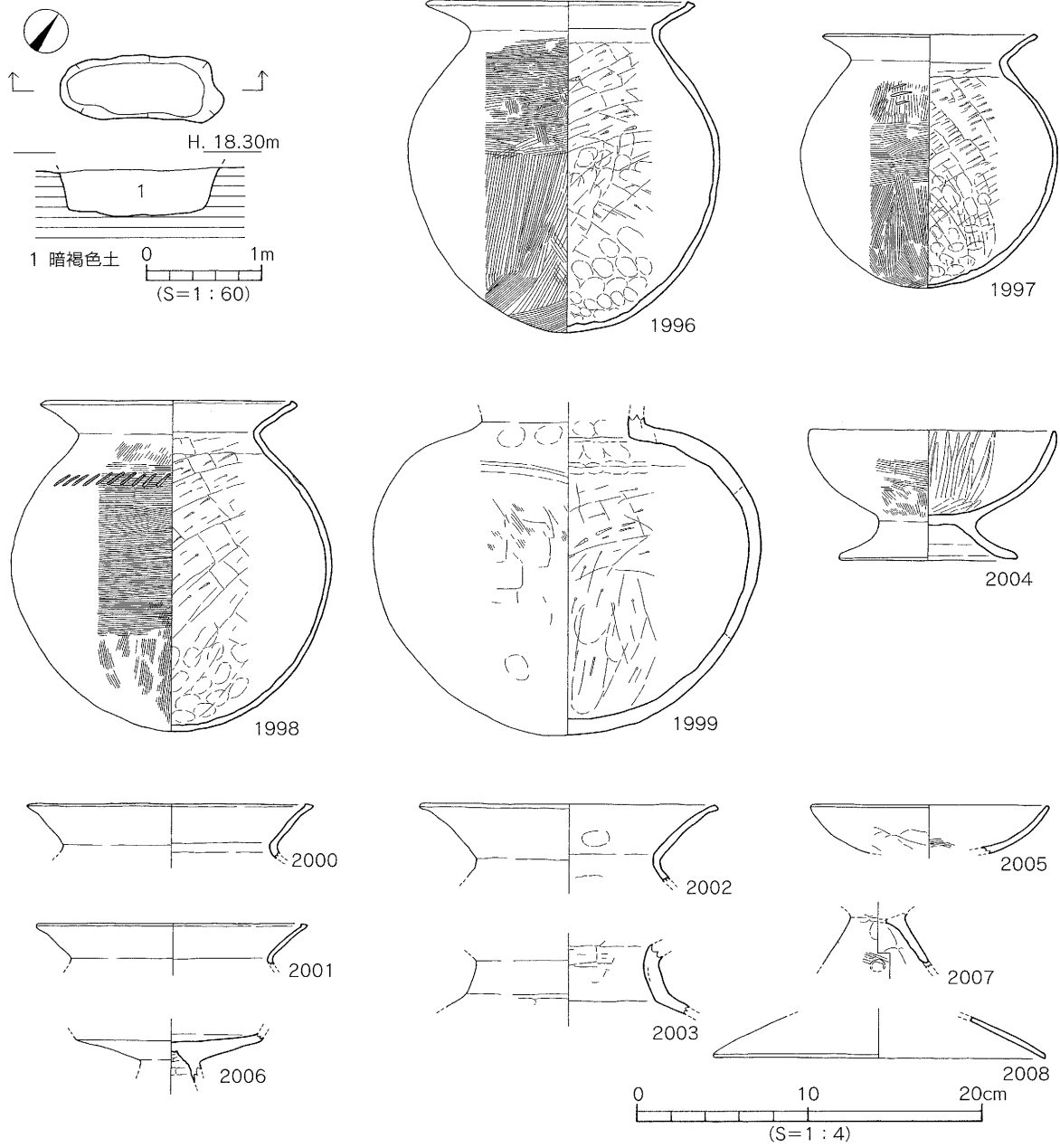
S K 303は3区北東部、I 1・2区に位置する。S B 303を切り、北側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.20m、南北検出長1.20m、深さ0.18~0.26mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片と土師器片が出土した。

時期：切り合いと出土遺物から、概ね古墳時代中期以降とする。



第214図 SD401・SK303測量図

西石井遺跡 1次調査地



第215図 SK202測量図・出土遺物実測図

5 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、性格不明遺構(SX)1基である。

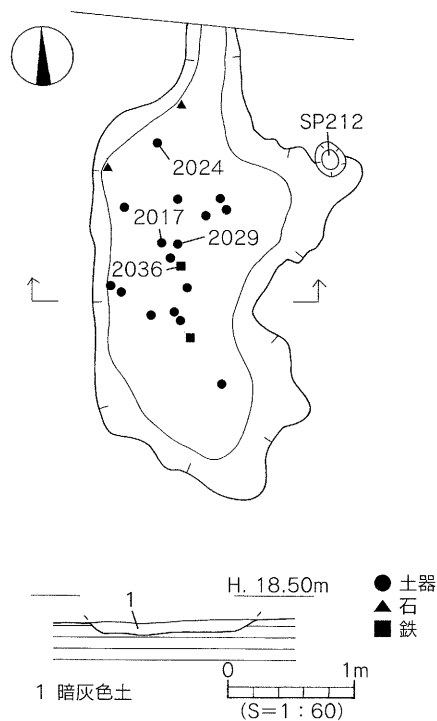
(1) 性格不明遺構

SX201 (第216・217図)

SX201は2区西部、E1・2区に位置し、北側はSB202・SB204を切り、東側はSP212に切られている。第VI①層上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は東西検出長2.92m、南北検出長5.00m、深さ0.02~0.16mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗灰色土に小礫が混じるものである。遺物は埋土中より、弥生土器、須恵器、陶器、石器、鉄器他が出土した。

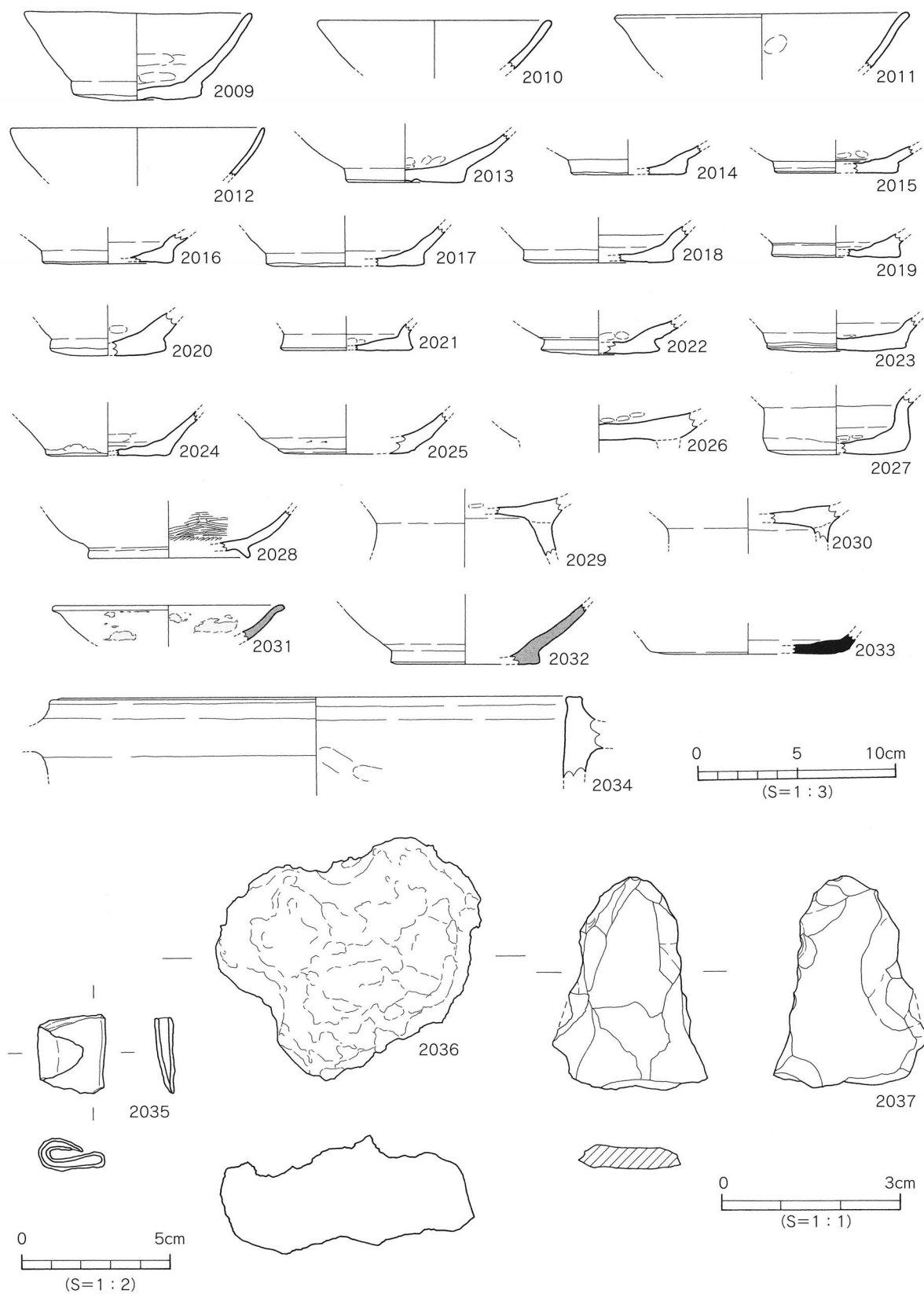
出土遺物 (2009~2037) 2009~2030は土師器の坏・椀で、2009~2023の坏底部は円板高台をなす。2031は緑釉、2032は陶器、2033は須恵器、2034は羽釜である。2035は鉄器、2036は鉄滓、2037は石器である。

時期：出土遺物から古代、平安時代とする。



第216図 SX201測量図

西石井遺跡 1次調査地



第217図 SX201出土遺物実測図

6 中世の遺構と遺物

中世の遺構は溝2条である。

(1) 溝

S D501 (第218図)

S D501は5区西部、O1～P2区に位置し、中央部は試掘トレンチに切られ、溝両端は調査区外へ続く。第Ⅲ①層上面で検出した。規模は南北検出長5.30m、幅2.96～3.40m、深さ0.12～0.30mを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色土に黄褐色土と砂が混じるものである。溝底面は北側から南側に向けて緩傾斜をなす(比高差5cm)。遺物は埋土中より、弥生土器片、土師器片が出土した。

出土遺物(2038～2049) 2038・2039は土師器の坏、2040～2044は弥生中期土器である。2045～2049は古墳時代初頭の土器で、2045は近畿系甕、2049は赤色顔料付きで、角閃石を含む搬入品である。

時期：最も新しい土器から、概ね中世とする。

S D502 (第219図)

S D502は5区中央部西側、P1～Q2区に位置し、南側は攪乱に切られ、溝両端は調査区外へ続く。第Ⅲ①層上面で検出した。規模は検出長7.30m、幅1.84～3.92m、深さ0.13～0.19mを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は2層に分層され、1層灰色土に黄褐色土が混じるもの、2層灰色砂質土に茶褐色土が混じるものである。溝底面は北側から南側に向けて緩傾斜をなす(比高差6cm)。遺物は埋土中より弥生土器、土師器、石器が出土した。

出土遺物(2050～2063) 2050・2051は土師器の坏である。2052～2057は弥生土器で、2056は赤色顔料が付く。2058～2063は石器である。

時期：最も新しい土器から、概ね中世とする。

7 その他の遺構と遺物

(1) ピット(S P)(第220・221図)

調査で検出したピットは246基である。内訳は、1区：12基、2区：54基、3区：66基、4区：66基、5区：48基である。埋土は暗褐色土、黒褐色土、褐灰色土、灰色土の4種類がある。ピット内からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

出土遺物(2064～2093) 特徴ある土器と石器を29点掲載した。このうち、2089・2090は西南四国型土器である。2091～2093は石器である。

(2) 包含層他出土遺物(2094～2262)(第222～229図)

1～5区の遺構に伴わない出土品を169点掲載した。

1区(2094～2112) 2095は角閃石を含む土器、2097は中国系土器、2109は赤色顔料付き脚台、2111・2112は石器である。

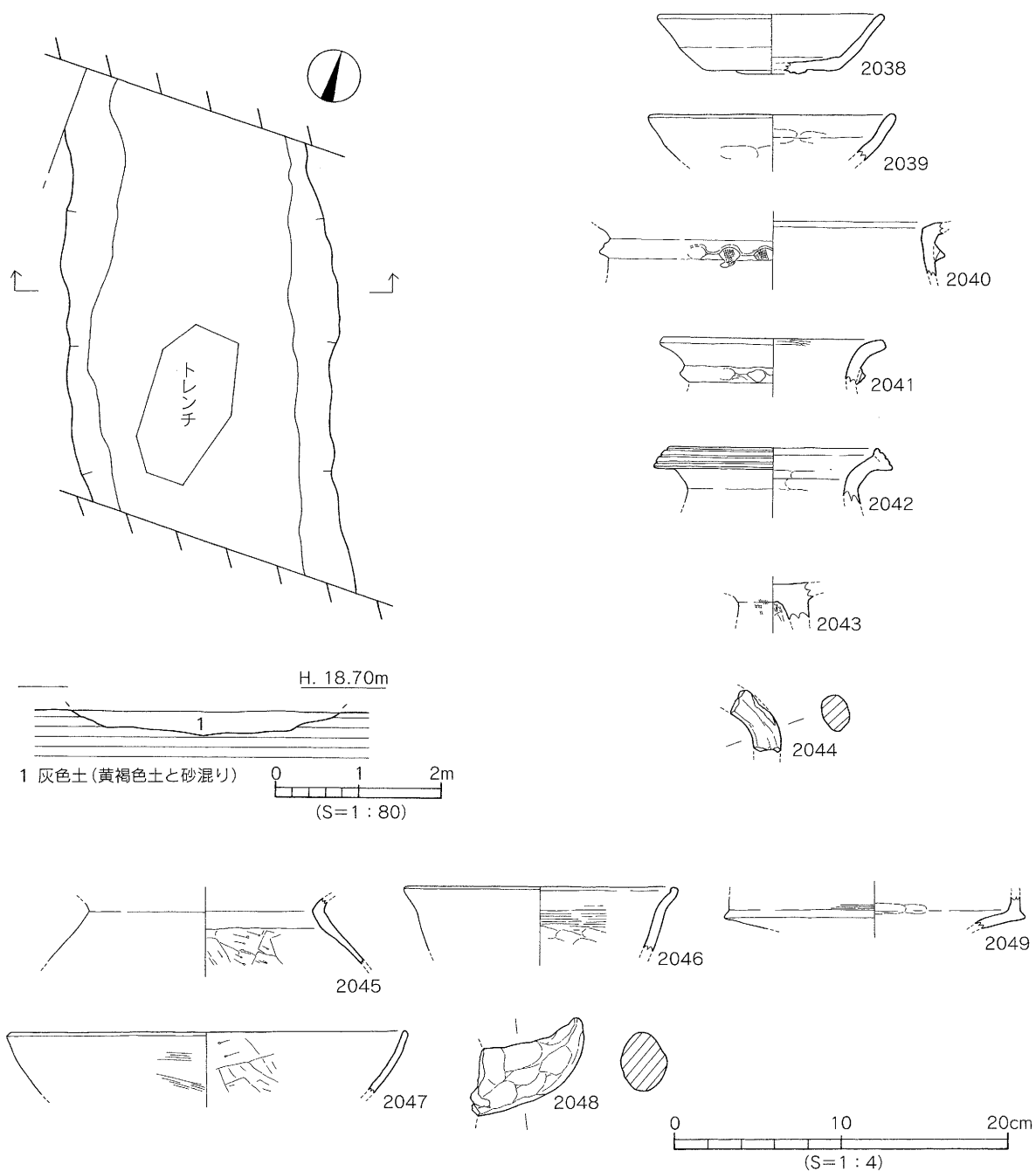
2区(2113～2162) 2113～2150は弥生前期～古墳初頭の土器で、2138は讃岐の下川津B類、2141は赤色顔料付き、2143・2144は中国系大型鉢、2149は吉備からの搬入甕である。2151～2153は土師器と須恵器である。2154～2159は石器、2160は玉、2161は金銅製品、2162は鉄器である。

西石井遺跡 1次調査地

3区 (2163~2165) 2163は弥生中期土器、2165は砥石である。

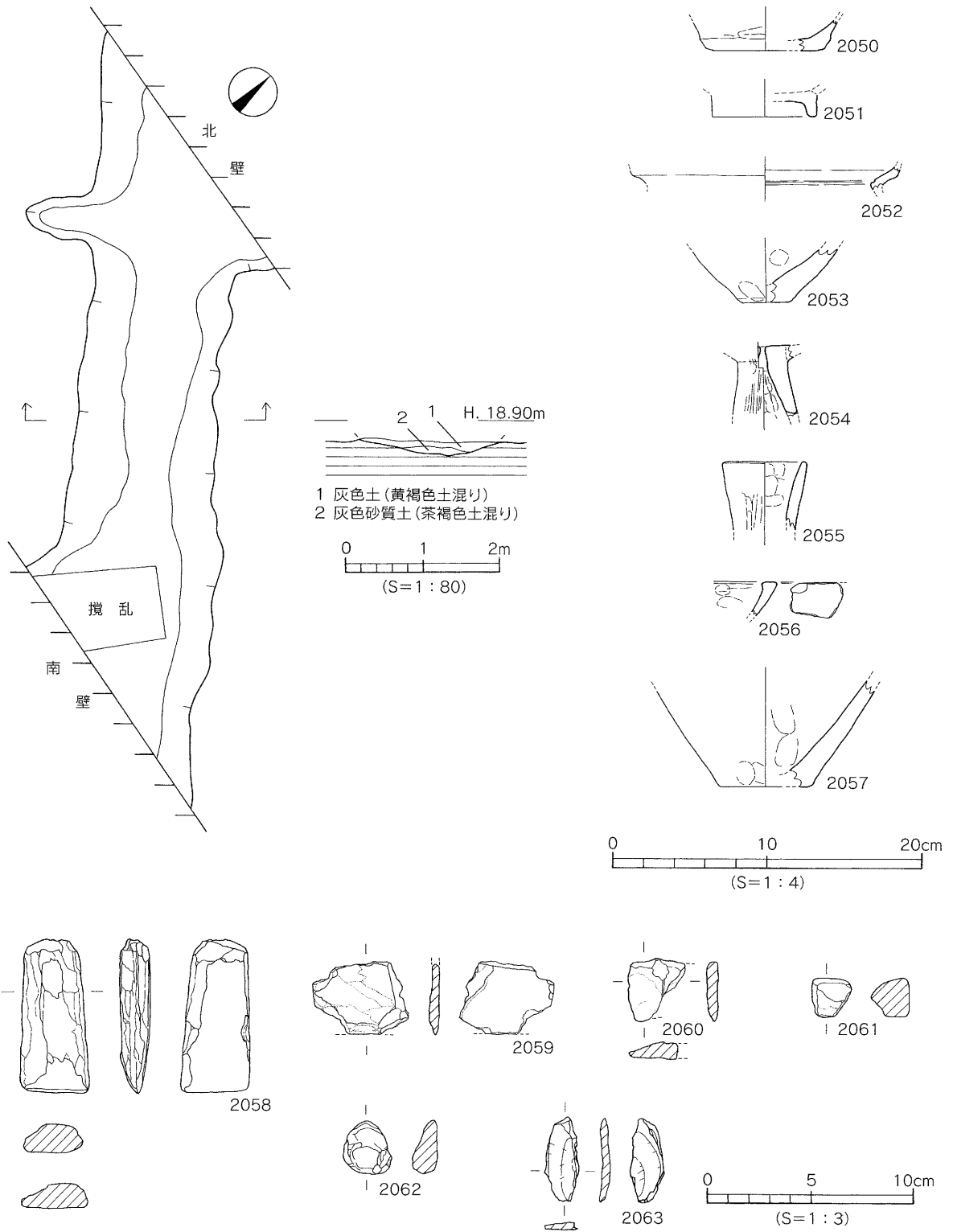
4区 (2166~2228) 包含層の上・中・下層で分けて掲載した。2173は弥生中期土器で備後系、2177は管玉、2195・2205は角閃石を含む。2200は線刻土器、2227は分銅形土製品。

5区 (2229~2254) 2229~2240は土器で、2230は中国系土器である。



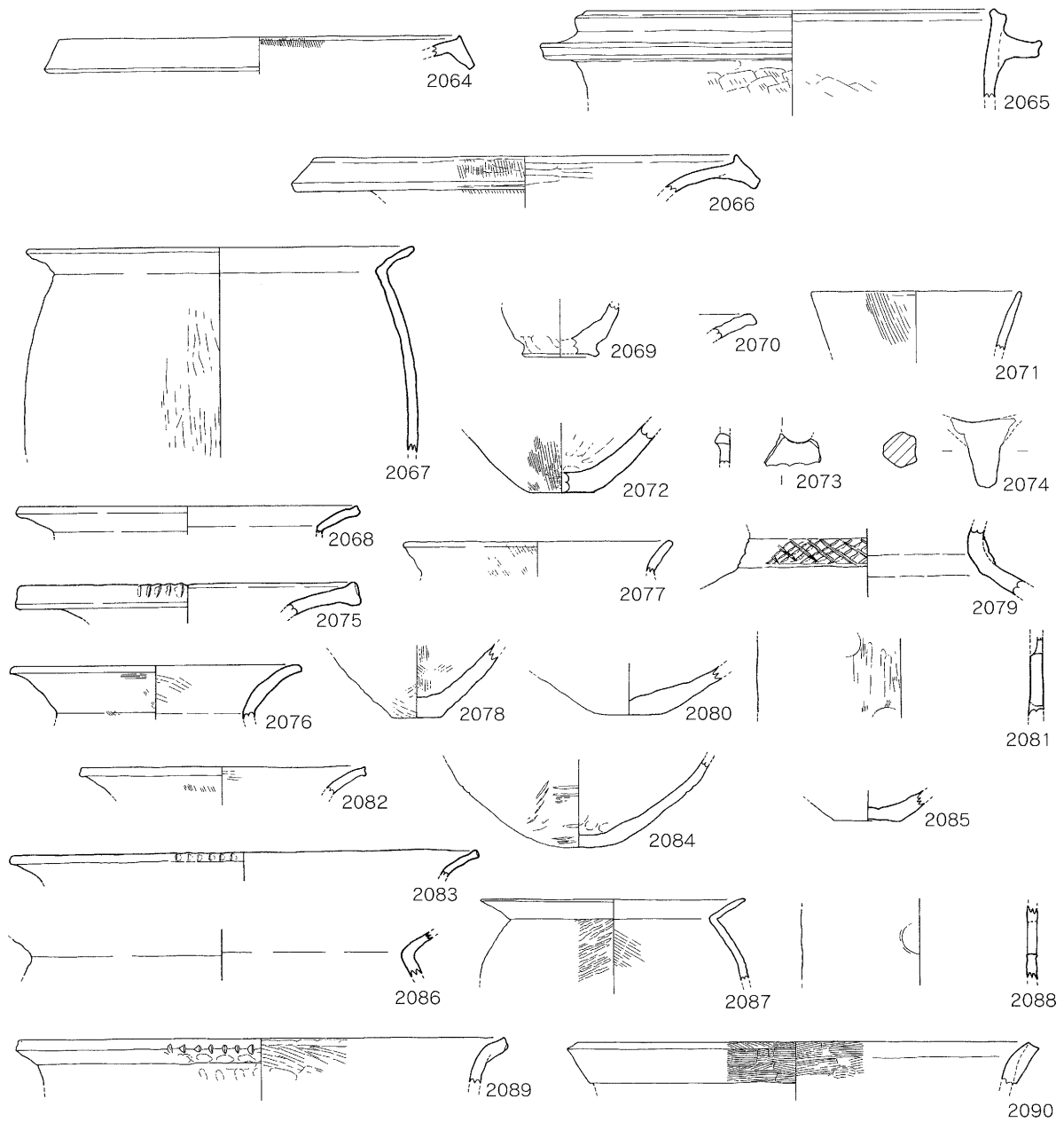
第218図 SD501測量図・出土遺物実測図

中世の遺構と遺物



第219図 SD502測量図・出土遺物実測図

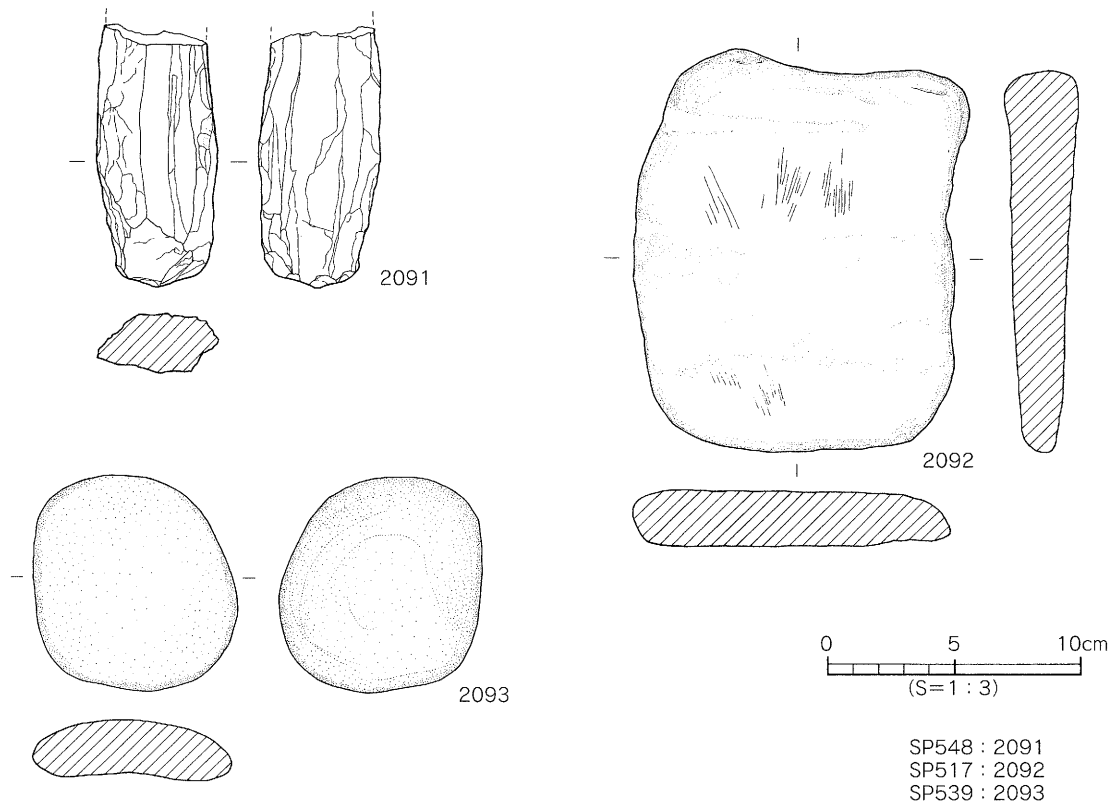
西石井遺跡 1次調査地



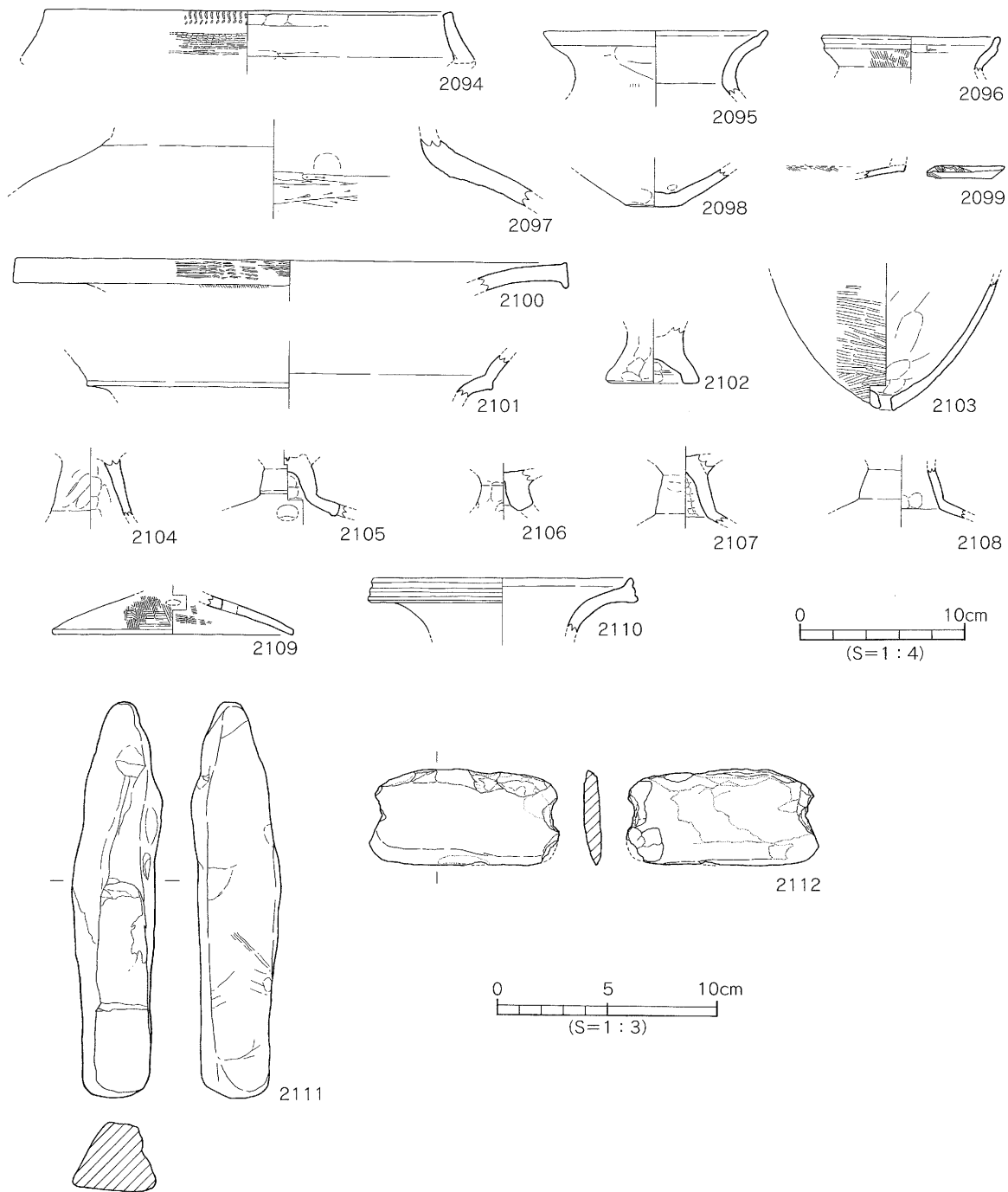
- | | |
|-------------------|-------------------|
| SP251 : 2064 | SP424 : 2076 |
| SP256 : 2065 | SP425 : 2077~2081 |
| SP323 : 2066 | SP435 : 2082 |
| SP402 : 2067・2068 | SP442 : 2083 |
| SP403 : 2069 | SP443 : 2084・2085 |
| SP405 : 2070 | SP456 : 2086 |
| SP406 : 2071 | SP463 : 2087 |
| SP410 : 2072 | SP459 : 2088 |
| SP411 : 2073 | SP554 : 2089 |
| SP416 : 2074 | SP549 : 2090 |
| SP423 : 2075 | |

第220図 SP出土遺物実測図(1)

その他の遺構と遺物

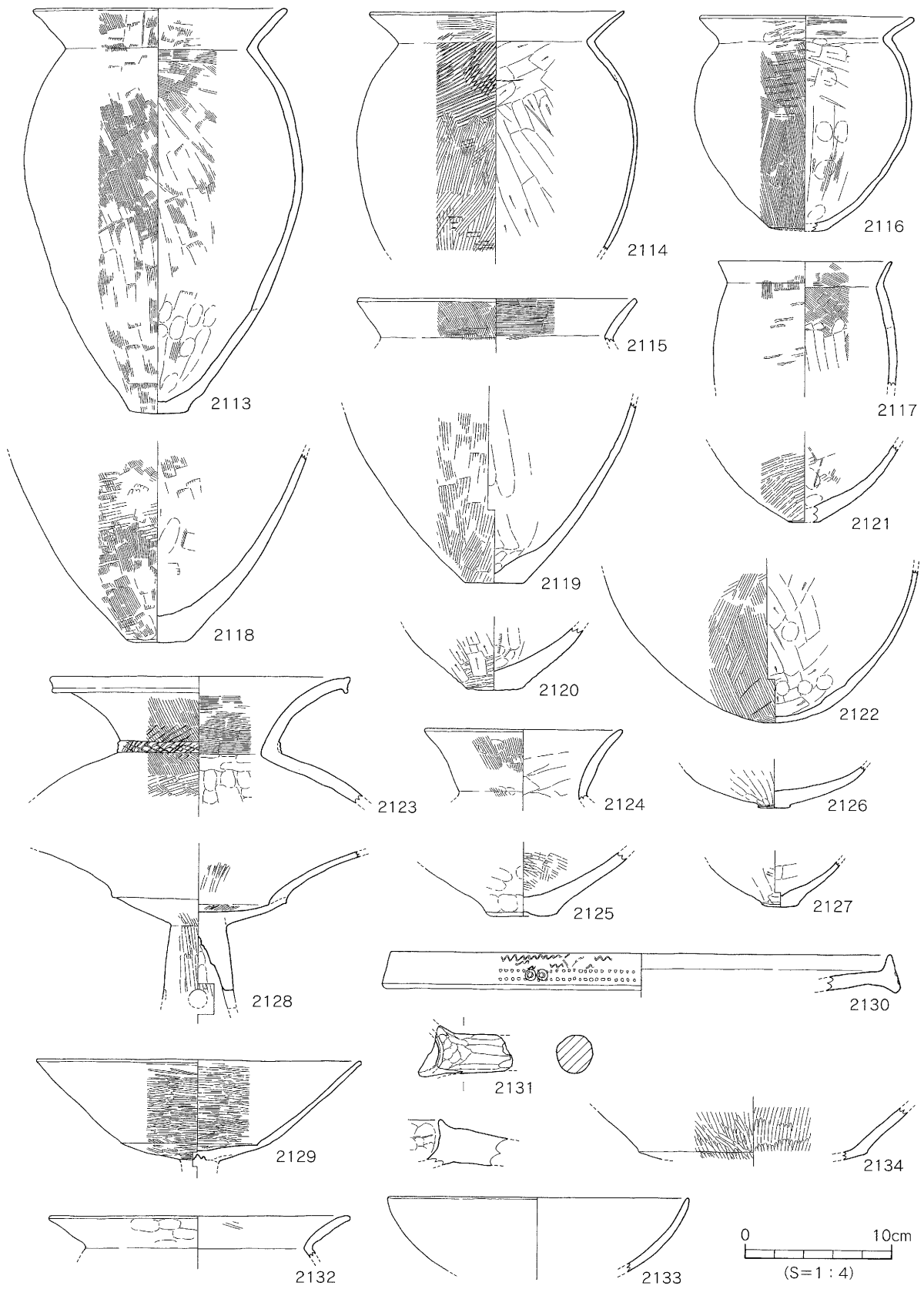


第221図 SP出土遺物実測図(2)

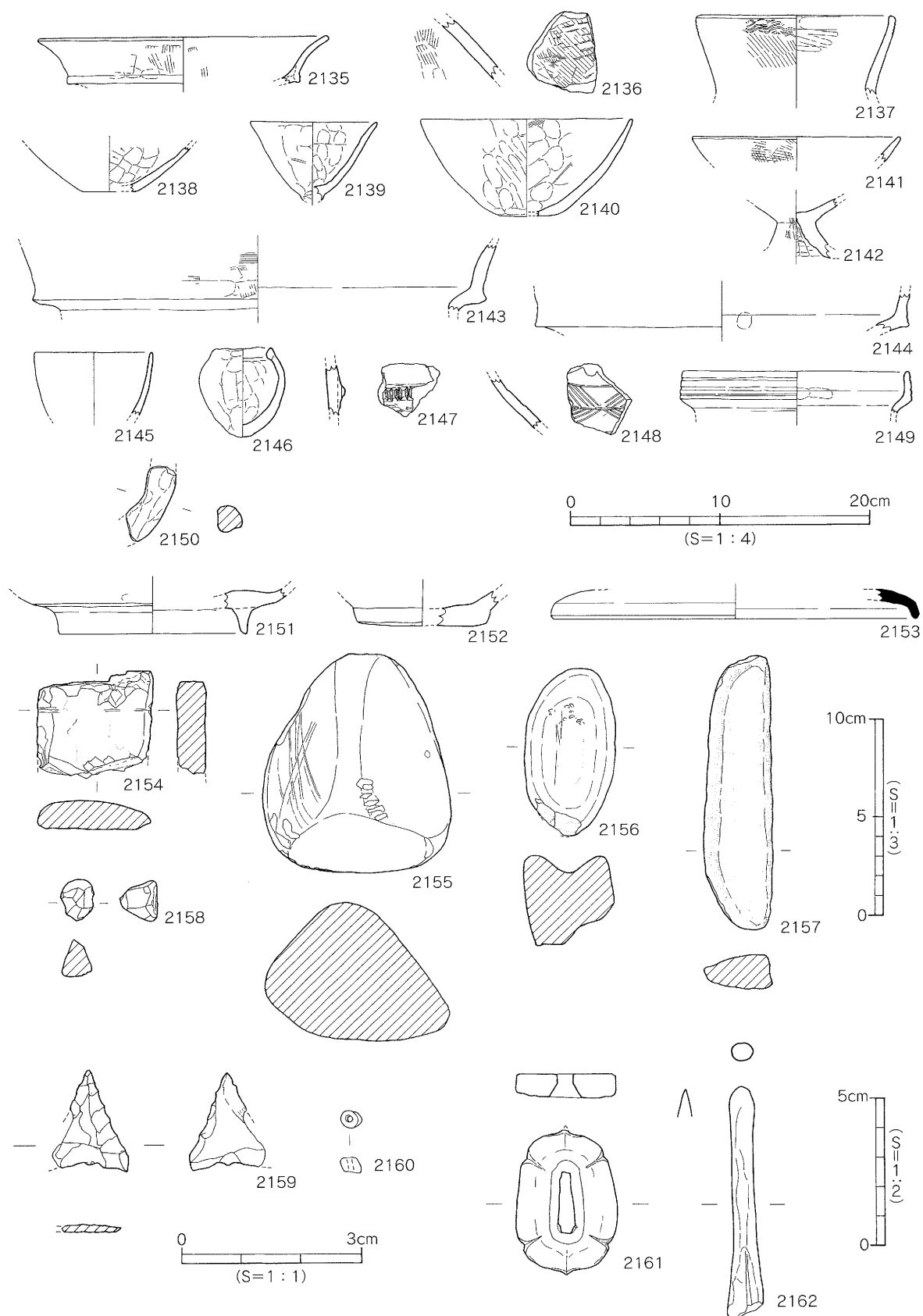


第222図 包含層出土遺物実測図 (1区) (1)

その他の遺構と遺物

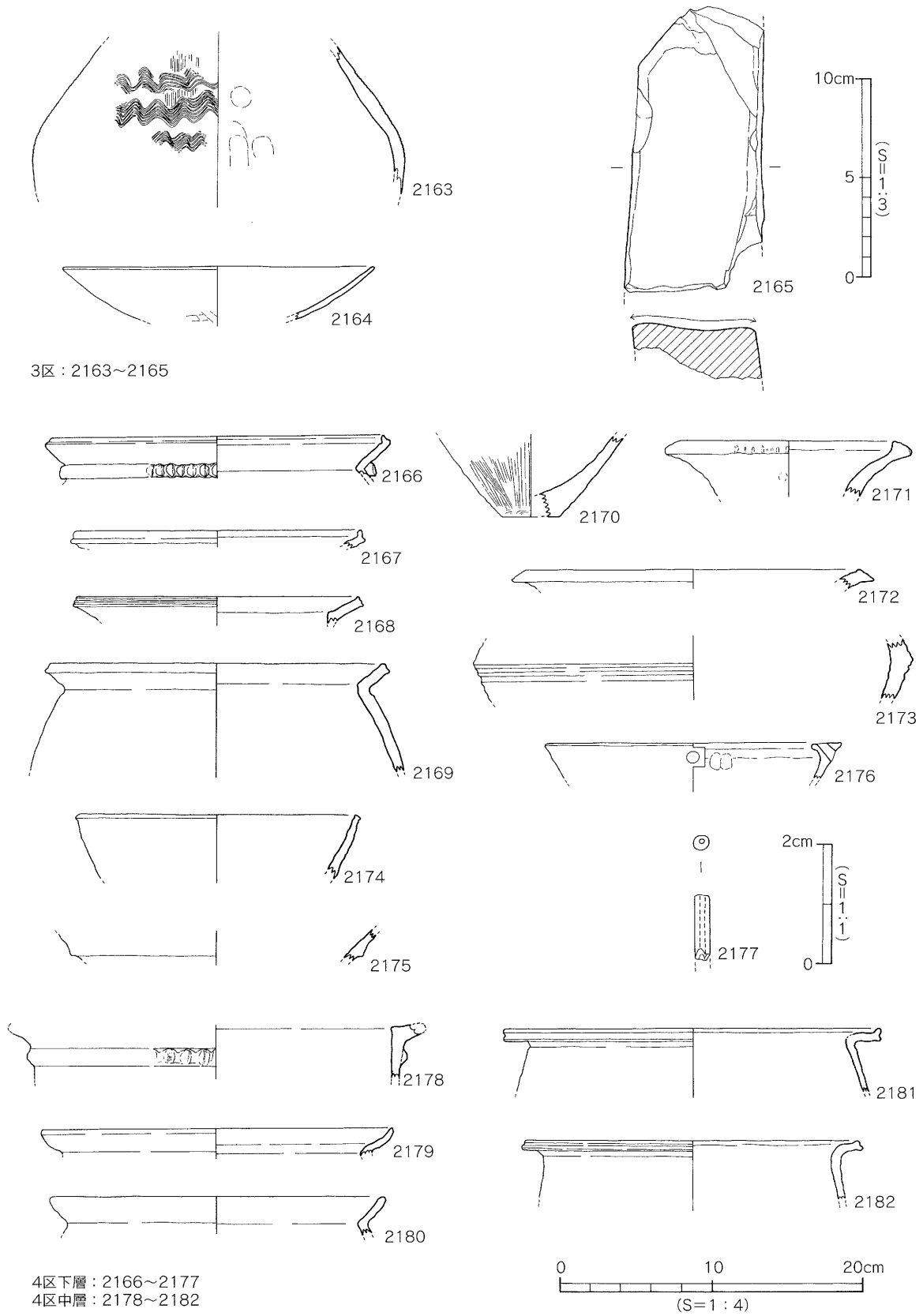


第223図 包含層出土遺物実測図 (2区) (2)



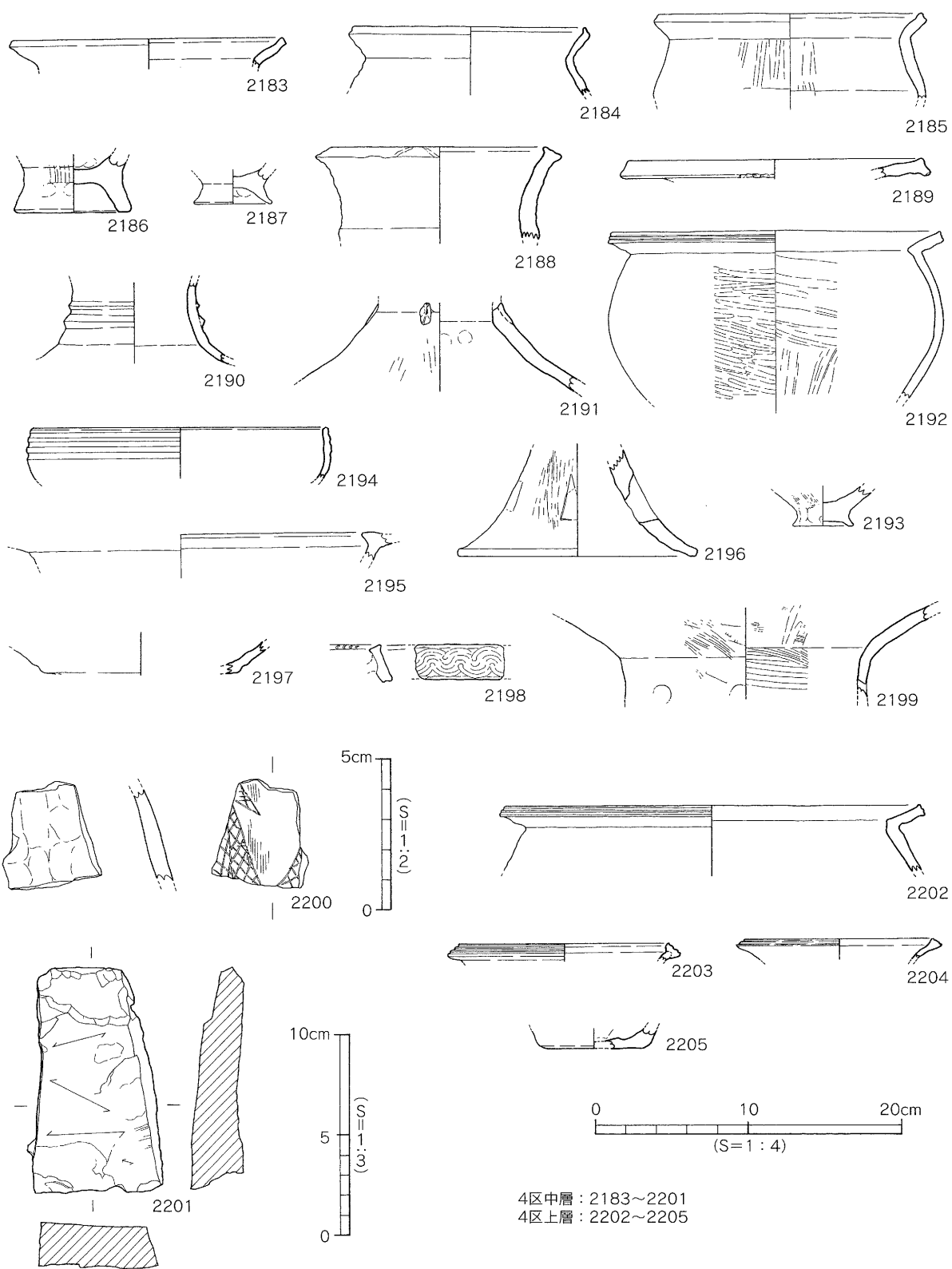
第224図 包含層出土遺物実測図(2区)(3)

その他の遺構と遺物



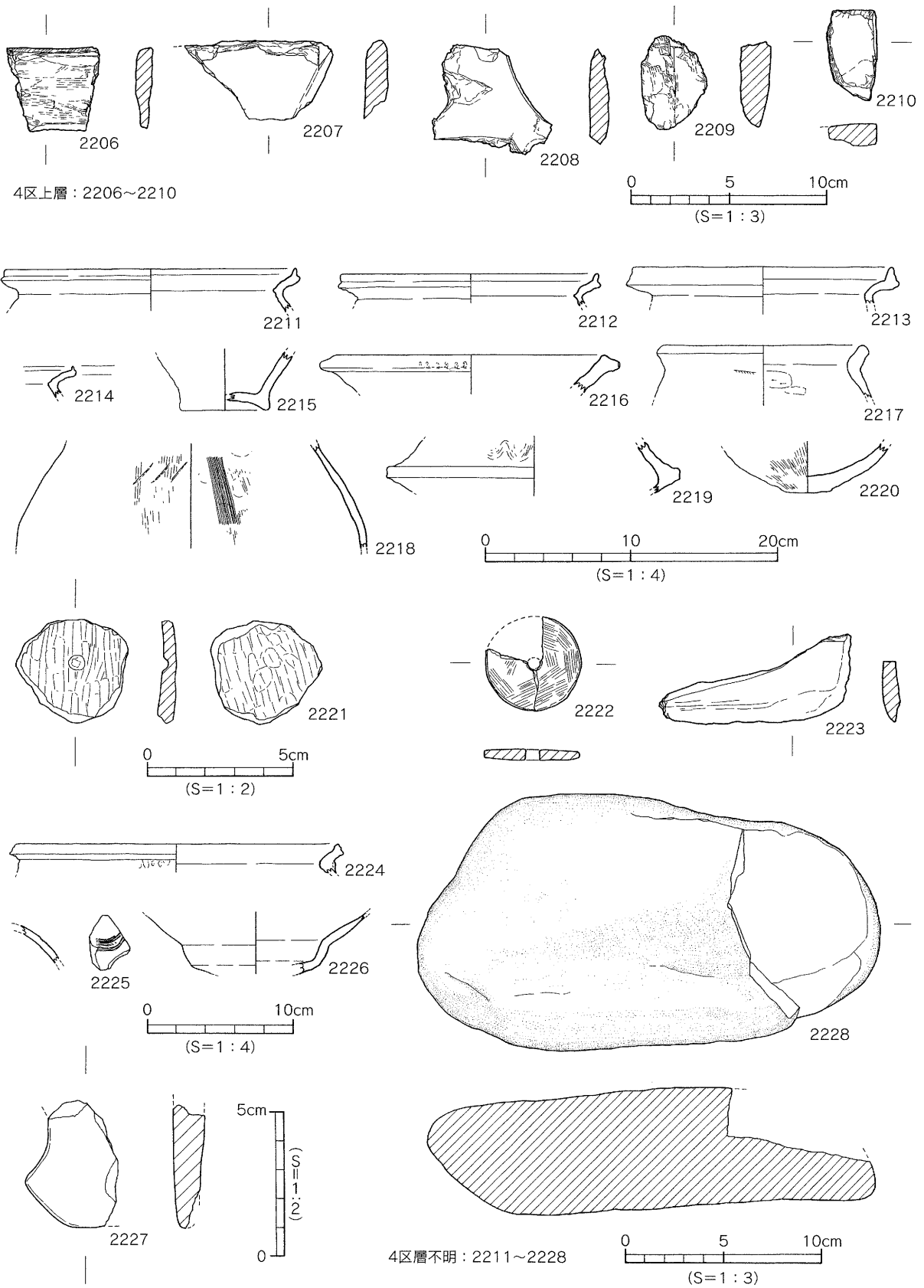
第225図 包含層出土遺物実測図 (3区・4区) (4)

西石井遺跡1次調査地

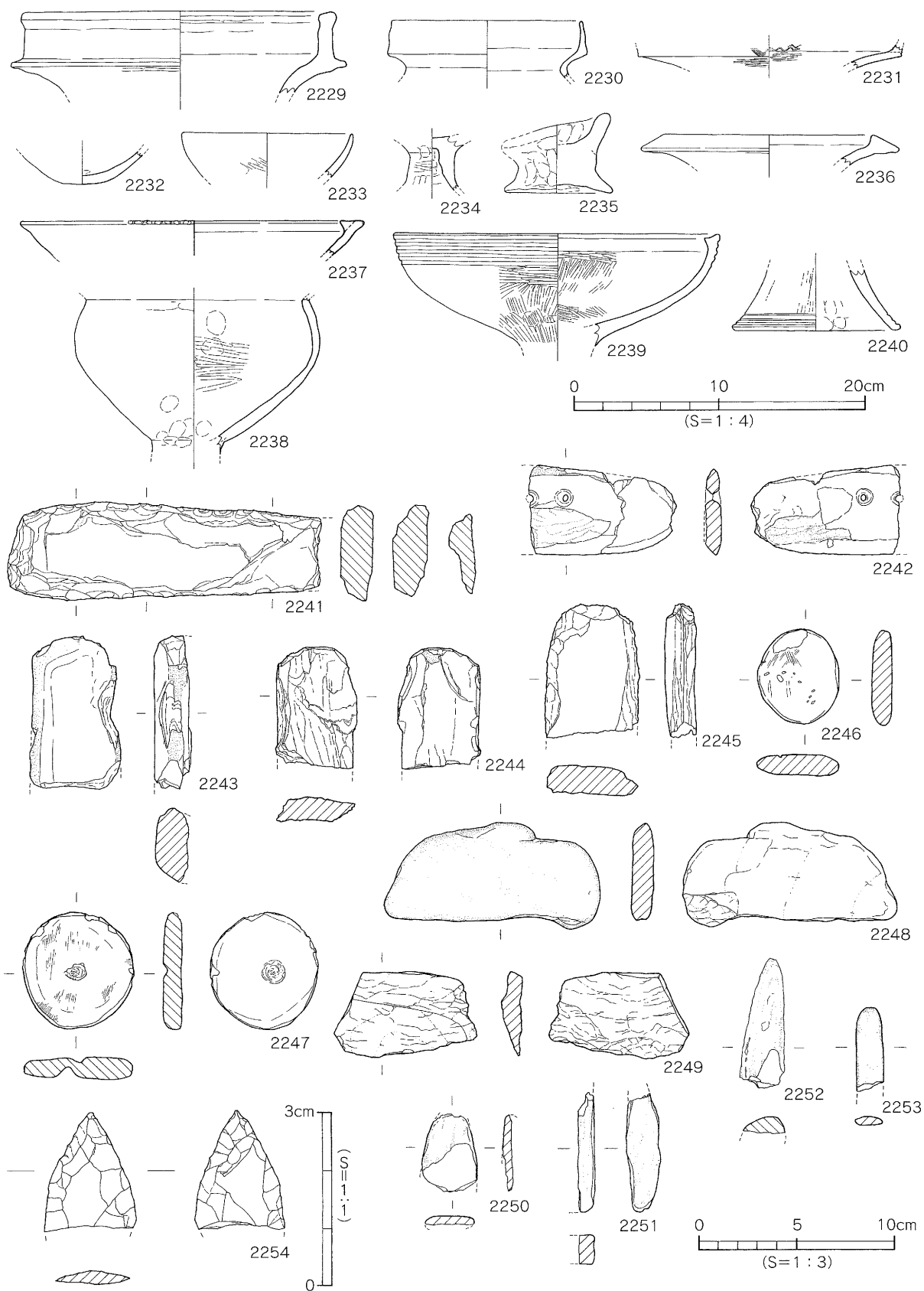


第226図 包含層出土遺物実測図(4区) (5)

その他の遺構と遺物



第227図 包含層出土遺物実測図(4区) (6)

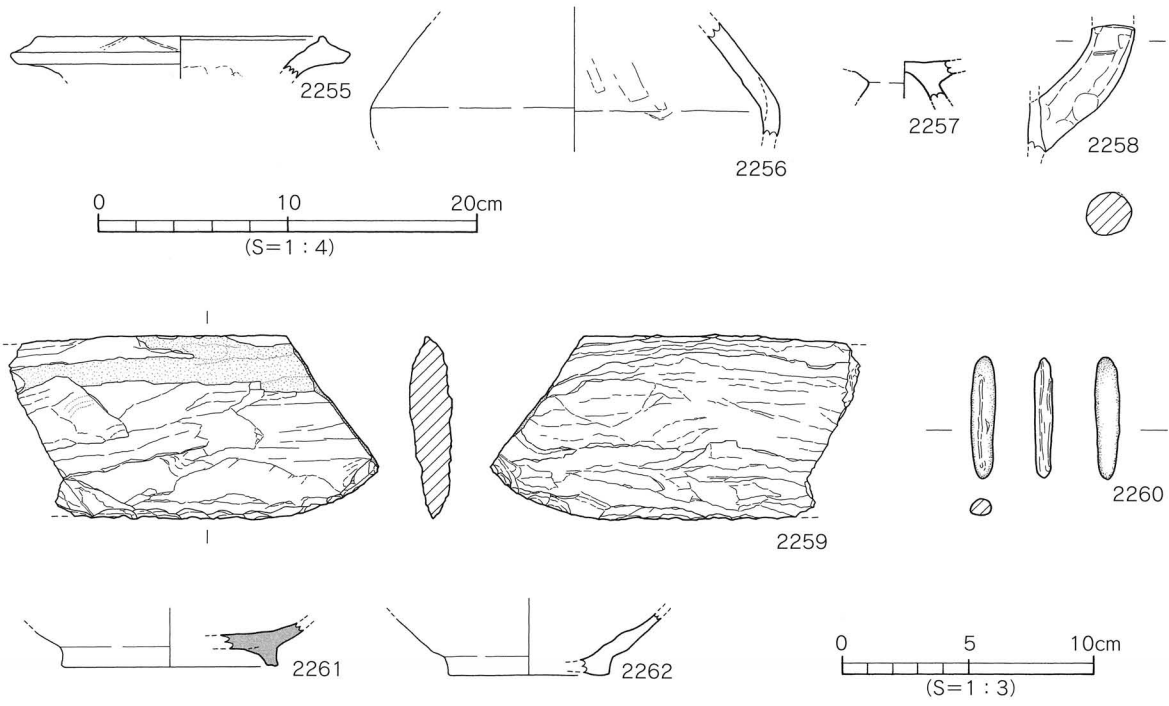


第228図 包含層出土遺物実測図 (5区) (7)

その他の遺構と遺物

6区 (2255~2260) 2255~2258は弥生土器、2259・2260は石器である。

表採 (2261・2262) 2261は緑釉陶器で、2262は土師器の坏である。



6区 : 2255~2260
表採 : 2261・2262

第229図 包含層(6区)・表採遺物実測図

8 小 結

本調査では、弥生時代から中世までの遺構と遺物を確認した。ここでは時代別にまとめをおこなう。

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構は、主に中期後半から末に時期比定されるもので、竪穴式住居址や溝、土坑、井戸、土器棺墓などである。竪穴式住居址は後期後半から末までのもので、このうち1区検出のS B 101、S B 102は長さ6～7 m、幅5～6 m、床面積40m²を測る大型住居址である。2つの住居址は遺存状態が良好で、壁体高が約70cmを測る。これは、当時の住居が地上面から70cm以上掘り込まれていたことが分かる貴重な資料である。住居内からは復元完形品を含む多数の弥生土器のほか、近畿地方や香川県及び西南四国地方からの搬入品が出土している。周辺地域との交流はもとより、当時の住居形態や集落様相を考えるうえで重要な資料となる。このほか、弥生時代後期後半から末に時期比定される土器棺墓3基が確認された。すべて棺身には壺形土器を使用している。このうち土器棺201は土坑掘り方と壺との隙間には、棺身を固定するために径10～30cm大の石が置かれていた。遺物では、包含層中より分銅形土製品が1点出土している。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構では、2区検出の溝S D 201が注目される。東西方向の溝で、溝内からは古墳時代初頭に時期比定される完形品またはそれに近い遺存状態の土器が列状に検出された。検出状況や規模等から集落を区画する溝の可能性がある。溝内からは在地の土器のほか、近畿地方をはじめ、香川県、岡山県、広島県などからの搬入品のほか、石器や鉄器などが出土している。このほか、古墳時代前期の遺構では、2区検出の竪穴式住居址S B 204と3区検出のS B 302があげられる。両者共に方形住居址で、S B 204は一辺5.4m以上を測るものである。なお、住居址内からは近畿系土器や外来的要素の強い土器が出土している。

(3) 古 代

古代の遺構は、2区検出のS X 201のみである。3×5 mの範囲に土師器、須恵器、鉄器が出土した。性格は不明であるが、平安期の遺構と考えられる。このほか、包含層資料ではあるが、瓦や緑釉陶器片が出土している。

(4) 中 世

中世の遺構は溝2条を検出した。両者共に、調査区東端5区で検出した南北方向の溝で、溝内にはは少量ではあるが砂粒が混入していることから、水利に伴う遺構と推測される。

(5) まとめ

本調査では、弥生時代から中世までの遺構、遺物を確認することができた。特に、調査地西半部、1・2・3区を中心に弥生時代末から古墳時代前期の集落が営まれており、溝S D 201を挟んで1・2区には大型住居址で構成された集落が、3～5区には通常規模の竪穴式住居で構成された集落が存在することがわかった。なお、S D 201出土品からは、当時の生活習慣や日常道具の様相を具体的に示す良好な資料が得られた。一方、古墳時代から中世にかけては遺構が点在しているが、少なくとも調査地や周辺地域に該期の集落が存在していることを物語る資料である。今後は、弥生時代のみならず、石井地区における古墳時代から中世までの集落様相や動態を追求し、解明していく必要がある。

第5章 西石井遺跡2次調査地

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

2001(平成13)年12月、松山市都市整備部道路建設課(以下、道路建設課)より松山市道「北久米・和泉線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課)に提出された。申請地は松山市西石井町354番地1外で、道路幅16m、全長245m、面積は3,930㎡である。

財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)は、申請地内における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、2003(平成15)年2月24日～26日の間に試掘調査を実施した。その結果、溝やピットのほか、弥生土器を含む遺物包含層を確認した。この結果を受け、埋文センター及び文化財課と申請者の三者は協議を重ね、申請地全域における埋蔵文化財の発掘調査を実施することになった。

(2) 調査の経緯(第3・5図)

調査地は、調査以前は宅地や水田に利用されており、生活道路が調査地内を縦横断する箇所が数ヶ所ある。そのため、発掘調査は、調査地内を4つの区に分けて実施した。調査区は西側より1区、2区、3区、4区とし、2区と3区は細分区し、2A区、2B区、3A区、3B区、3C区とした。また、4区は調査の進行上、東半部と西半部とに分けて調査をおこなった。また、調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは調査地西側から東側へ1・2・3・・・、北側から南側へA・B・C・Dとした。

平成14年7月より、調査地中央部3区から調査を開始し、その後、4区西半部の調査を3区と併行して実施した。平成14年10月より4区東半部と1区、2区の調査を実施した。平成15年3月15日には、松山市民を対象とした現地説明会を実施した。平成15年3月31日、すべての調査を終了した。なお、各区の調査期間や調査面積は表4のとおりである。

表4 調査区一覧

調査区	調査面積	調査期間
1区	107.9㎡	平成14年11月18日～平成15年1月8日
2A区	58.3㎡	平成15年3月3日～平成15年3月31日
2B区	328.0㎡	平成14年12月2日～平成15年3月31日
3A区	199.2㎡	平成14年7月9日～平成15年10月10日
3B区	71.3㎡	平成14年7月12日～平成14年9月6日
3C区	77.7㎡	平成14年7月15日～平成14年9月6日
4区	598.3㎡	平成14年7月16日～平成15年3月31日

2. 層位 (第230~234図)

調査地は、松山平野南部にあり、北側には石手川の支流の小野川、南側には重信川の支流の内川に挟まれた沖積低地上、標高20m前後に立地する。

基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層灰褐色～褐色土、第Ⅲ層オリーブ黒色～黒色土、第Ⅳ層黄灰色土、第Ⅴ層暗灰黄色土、第Ⅵ層黄褐色～黄色土、第Ⅷ層灰色砂礫である。なお、全体層位における第Ⅲ③層黒色土、及び第Ⅶ層黒色粘質土は本調査では未検出である。

第Ⅰ層－近現代の造成に伴う客土で、地表下80cmまで開発がおこなわれている。

第Ⅱ層－古代から中世の遺物を含む包含層である。色調や土質の違いで2層に分層したが、重機による土層掘削のため、明確な分層による遺物の取り上げができず、第Ⅱ層として調査時は遺物を取り上げた。本層中からは、土師器、須恵器、陶磁器片が出土した。

第Ⅱ①層：灰褐色土で、2A・3A・3C・4区で検出した。層厚4～16cmを測る。

第Ⅱ②層：褐色土で、4区のみで検出した。層厚6～8cmを測る。

第Ⅲ層－弥生時代から古代の遺物を含む包含層で、色調、土質より2層に分層した。

第Ⅲ①層：オリーブ黒色土で、1区、2B区、4区で検出した。層厚10～20cmを測る。

第Ⅲ②層：黒褐色土で、4区のみで検出した。層厚4～10cmを測る。

第Ⅳ層－弥生時代中期後半から後期前半までの遺物を含む包含層である。黄灰色土で、2A区を除く全域で検出した。層厚6～30cmを測り、4区の堆積が最も厚い。なお、4区では本層上面にて遺構を検出した。

第Ⅴ層－暗灰黄色土で、4区のみで検出した。層厚20cmを測る。

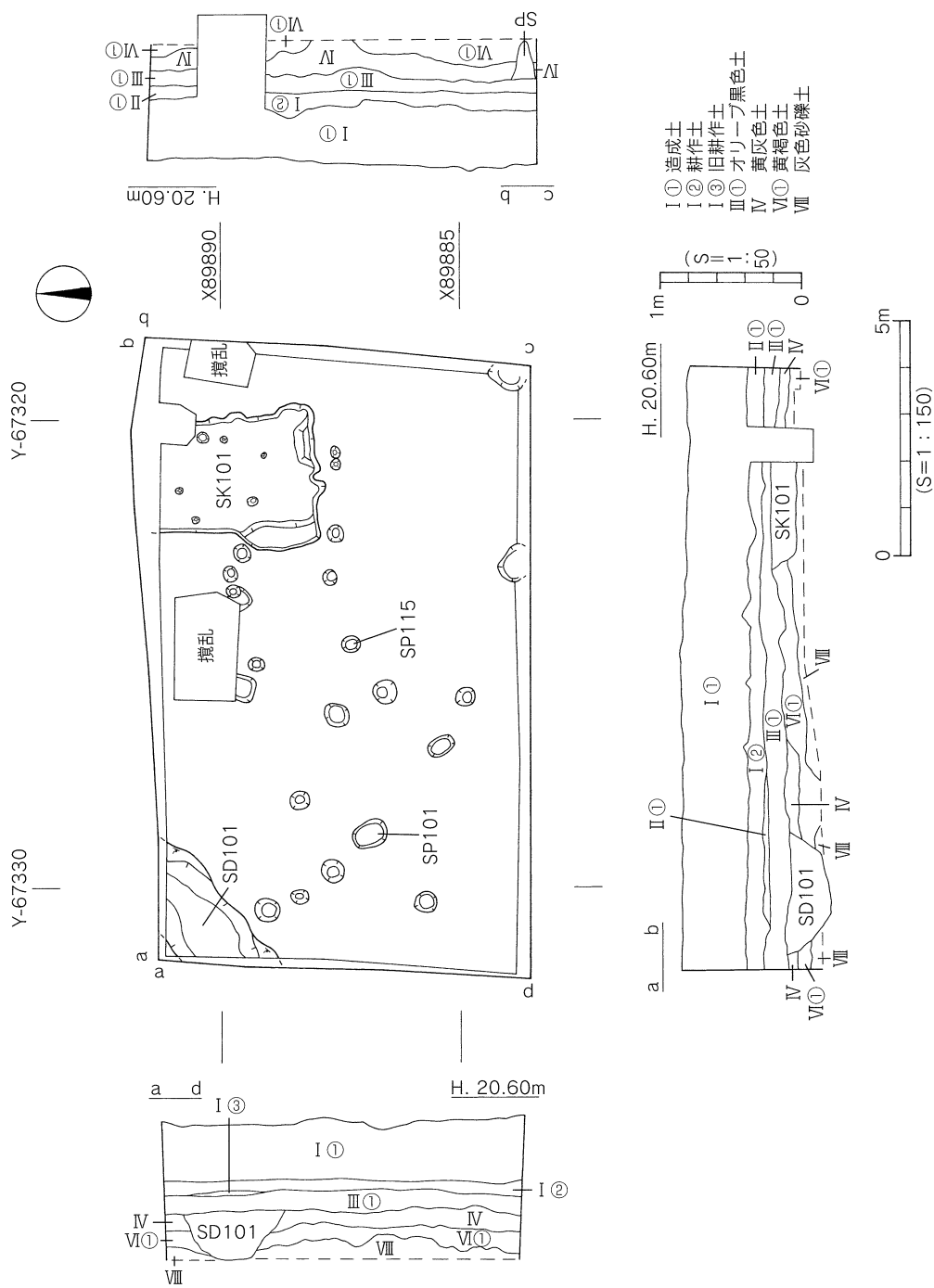
第Ⅵ層－色調、土質の違いで分層した。第Ⅵ①層は黄褐色土、第Ⅵ②層は黄色土である。

第Ⅵ①層：調査区全域で検出した。層厚10～150cmを測り、4区の堆積が最も厚い。なお、本層上面が調査における最終の遺構検出面である。

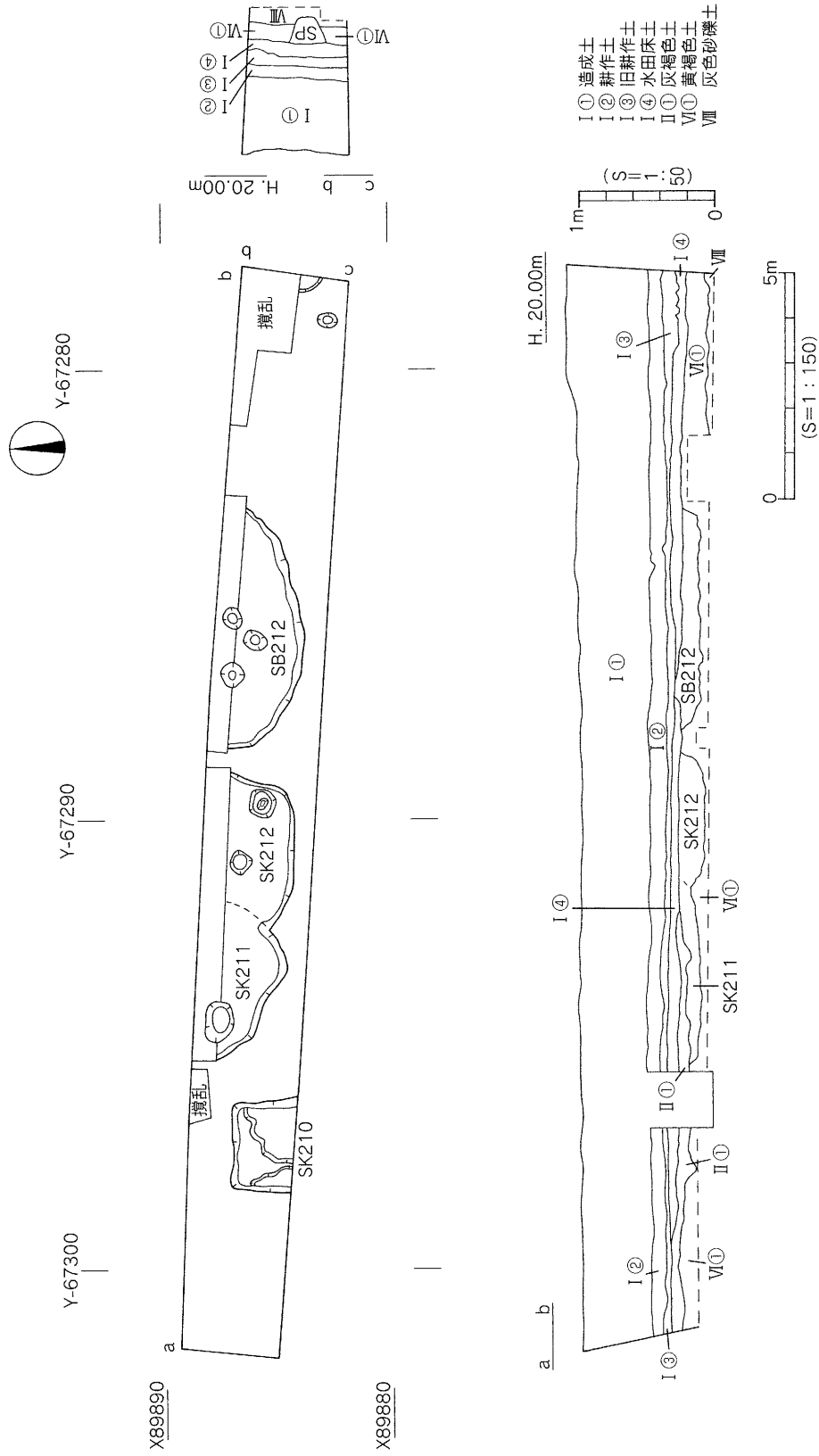
第Ⅵ②層：4区のみで検出した。層厚30cm以上の堆積を測る。

第Ⅷ層－小野川や内川の氾濫に起因する河川氾濫堆積物で、径5～10cm大の円礫と灰色粗砂で構成される。本層中からの遺物の出土はない。

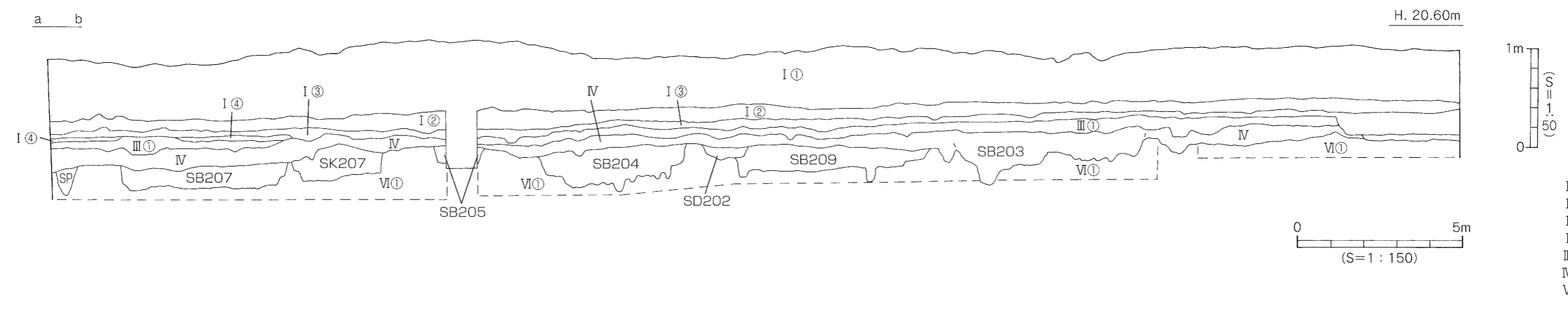
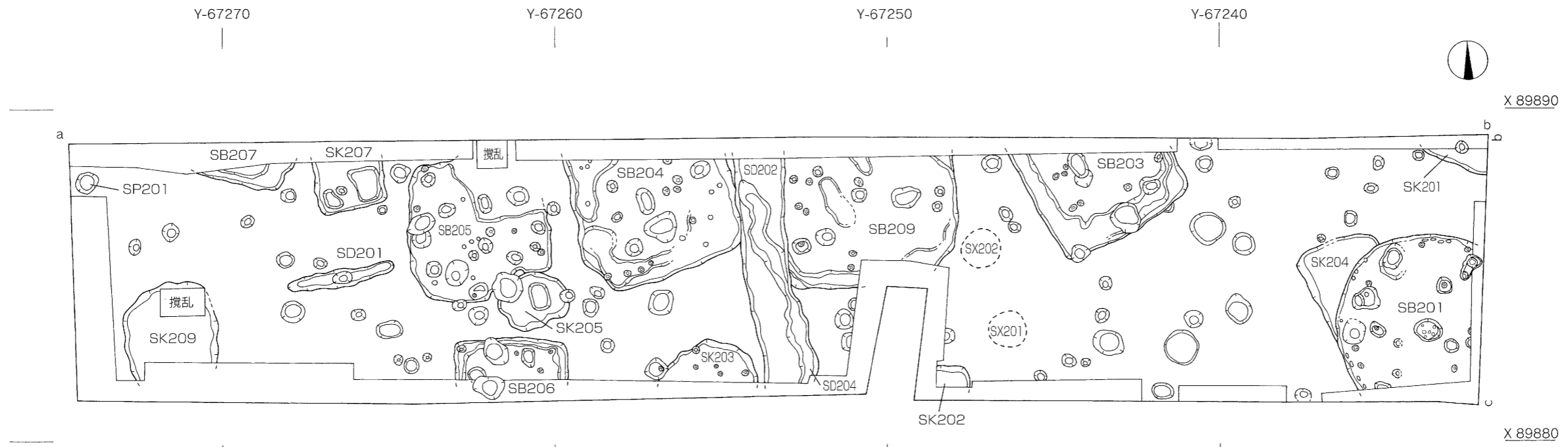
遺構は第Ⅳ層、及び第Ⅵ①層上面で検出した。検出した遺構は、弥生時代中期中葉から末に時期比定されるもので、竪穴式住居址13棟、掘立柱建物址1棟、溝9条、土坑25基、井戸6基他である。遺物は遺構及び包含層中から、弥生土器、土師器、須恵器、石器のほか、土製紡錘車、分銅形土製品、匙形土製品、絵画土器（鹿）が出土した。なお、弥生土器の中には、備後や豊後地方からの搬入品または外来系土器が含まれている。



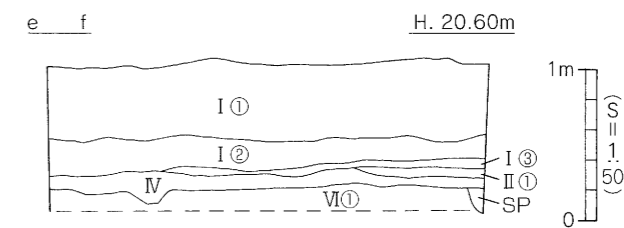
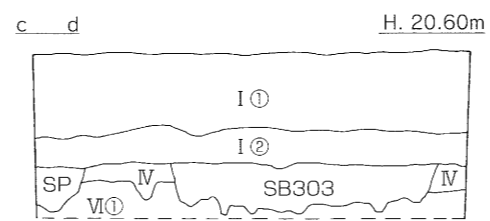
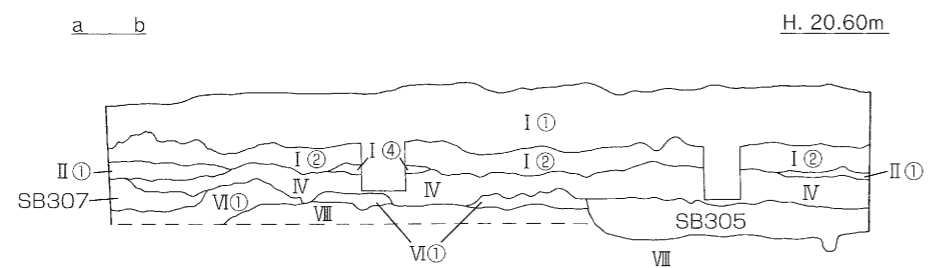
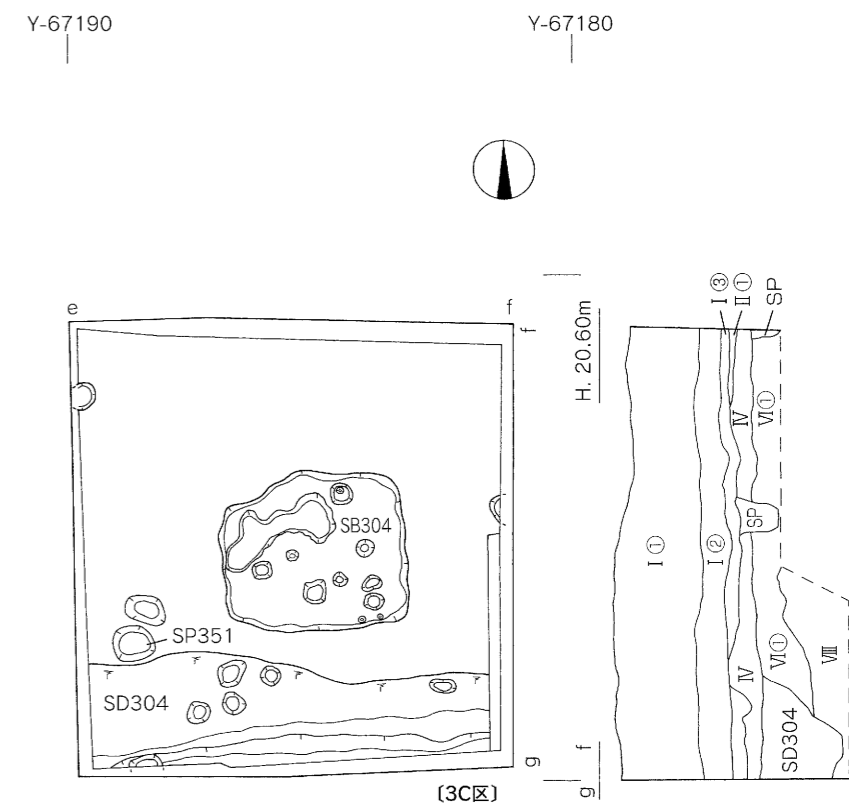
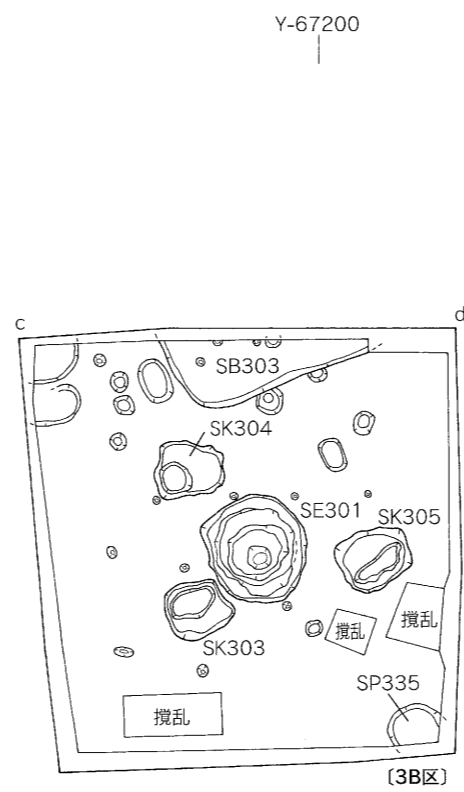
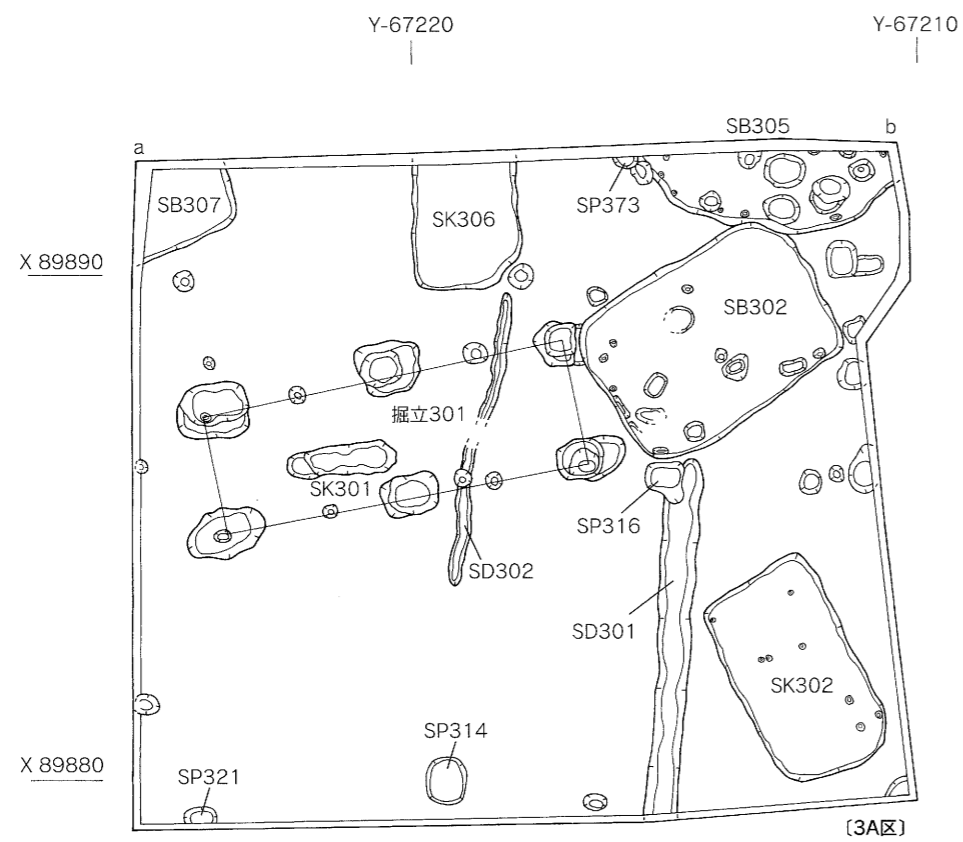
第230图 1区遺構配置図・土層図



第231図 2A区遺構配置図・土層図

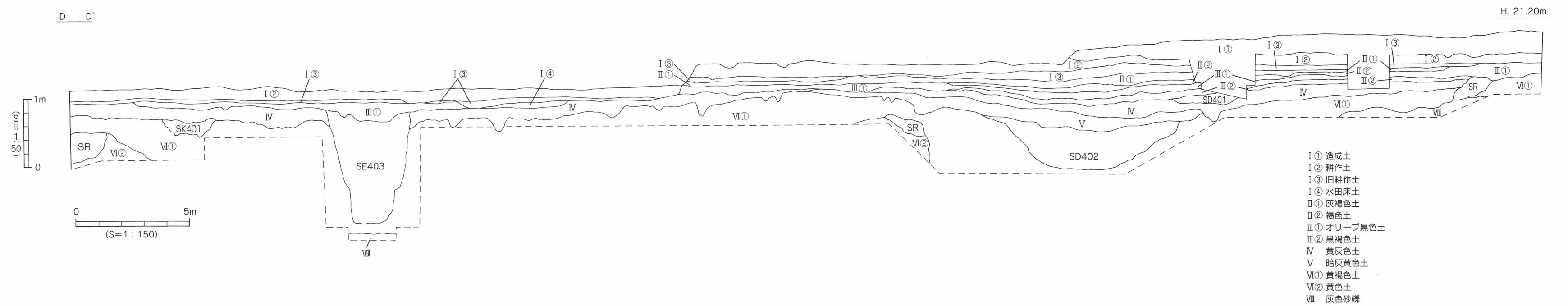
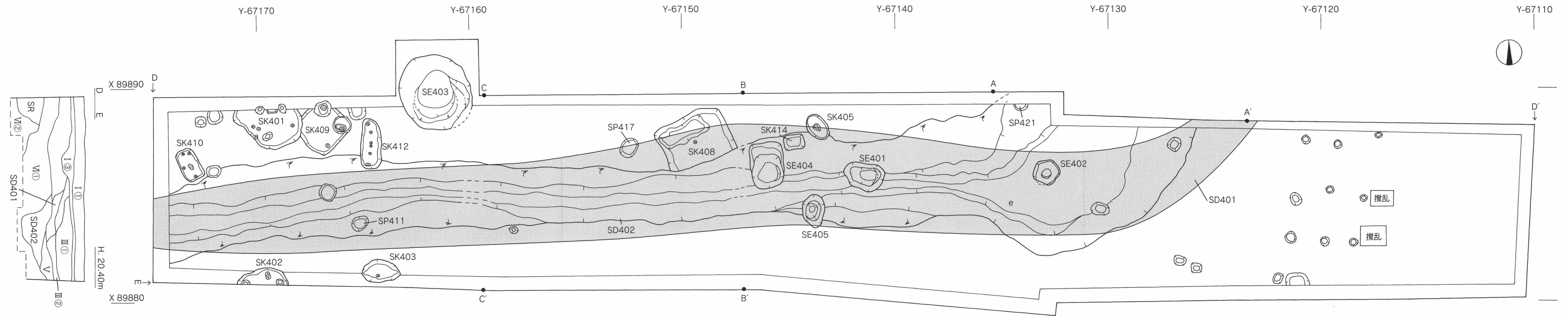


第232図 2B区遺構配置図・土層図



- I① 造成土
- I② 耕作土
- I③ 旧耕作土
- I④ 水田床土
- II① 灰褐色土
- IV 黄灰色土
- VI① 黄褐色土
- VII 灰色砂礫

第233图 3区遺構配置図・土層図



第234図 4区遺構配置図・土層図

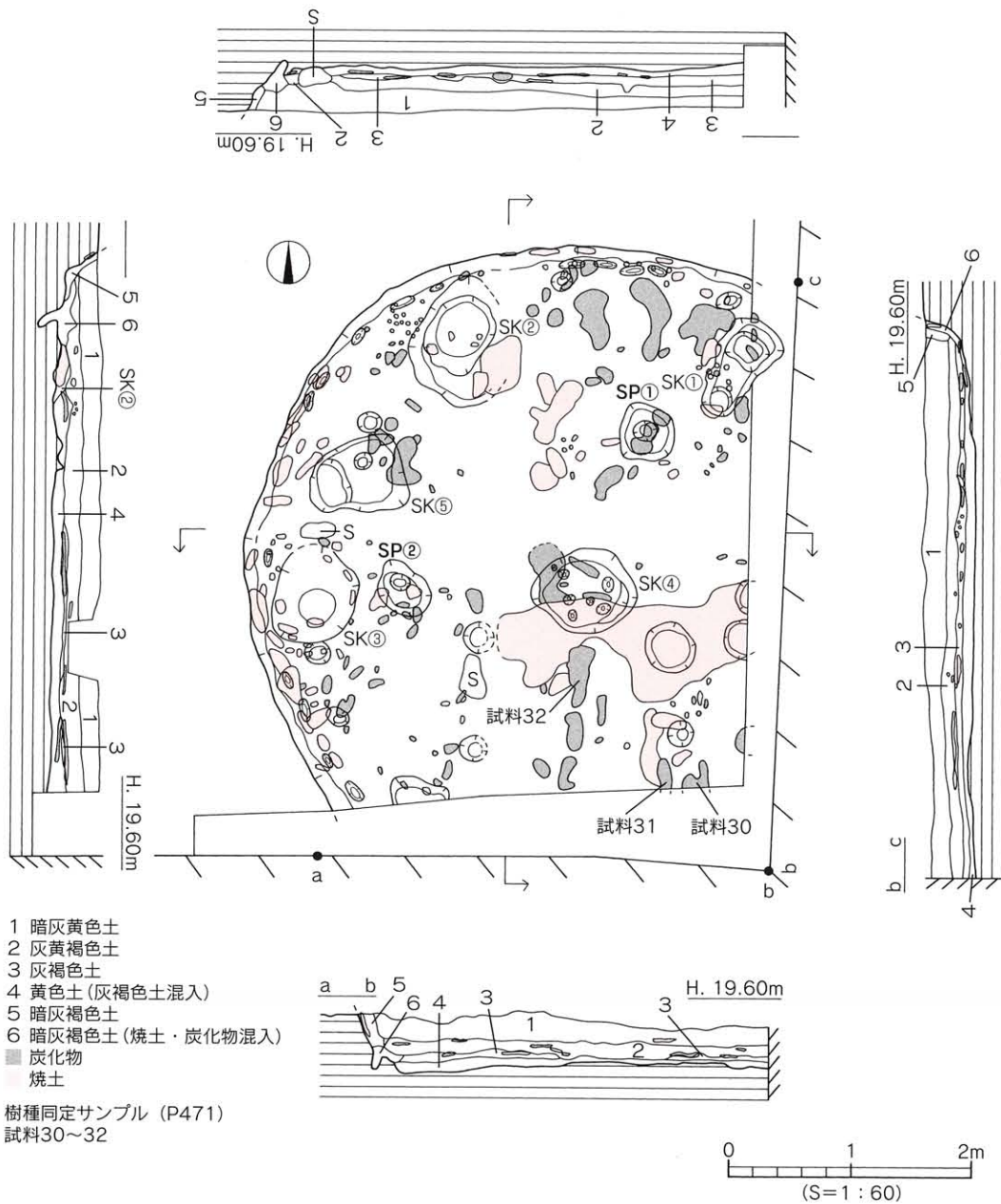
3. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴式住居址13棟、掘立柱建物址1棟、溝9条、土坑25基、井戸6基、土器溜まり3基である。

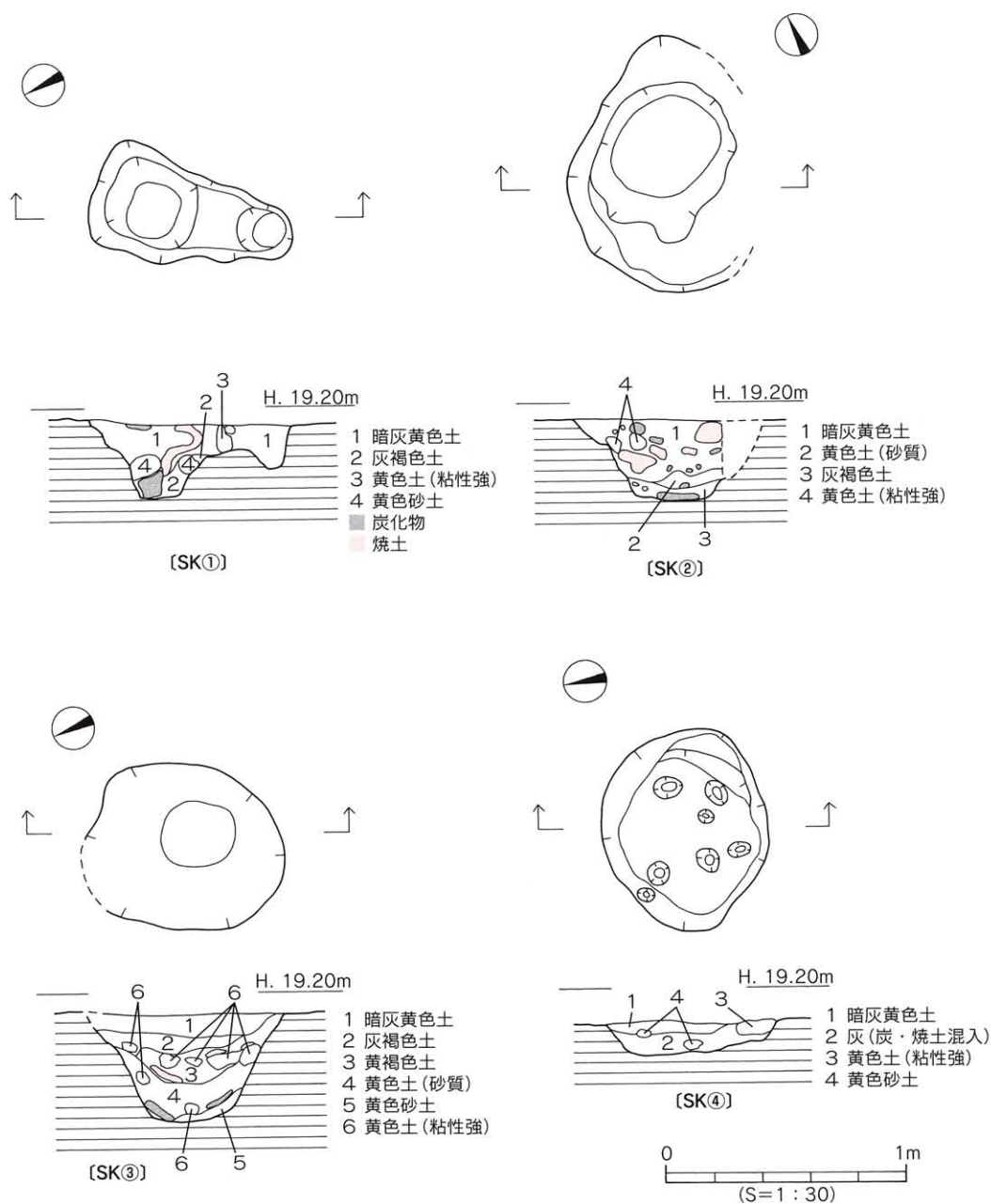
(1) 竪穴式住居址

S B 201 (第235・236図、図版41)

2 B区東端、B20～C21区に位置する。住居址北西側はS K204を切り、東側と南側は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.22m、南北検出長4.58m、壁高は55cmを測る。埋土は6層に分層され、1層暗灰黄



色土、2層灰黄褐色土、3層灰褐色土、4層黄色土（灰褐色土混入）、5層暗灰褐色土、6層は5層に焼土や炭化物が混入する。なお、第4層は住居址床面修築のための貼床土と考えられる。内部施設は主柱穴と周溝、土坑を検出した。主柱穴はSP①・②の2本と考えられ、規模は径23~55cm、深さ7~23cmを測る。柱穴掘り方埋土は暗灰褐色土である。柱痕は径10~15cm、深さ8~18cmを測る。柱痕埋土は灰褐色土である。貼床は住居址床面全体に施され、厚さ5~10cmを測る。周壁溝は住居址北壁から北西壁及び西壁沿いで検出され、径5~10cm、深さ5~10cmの小ピットが点在している。このほか、住居址床面にて、5基の土坑を検出した。このうち、4基(SK①~④)の土坑内からは焼土、炭化材、炭化物が出土した。なお、SP①からは、壺形土器(3)が出土した。遺物は住居址埋土中から、弥生土器が点在して出土した。2層及び3層中からは、焼土と炭化材や炭化物が散在して出土した。なお、住居址壁体に接する状態で、ほぼ全面にて焼土を検出した。



第236図 SB201内SK①~④測量図

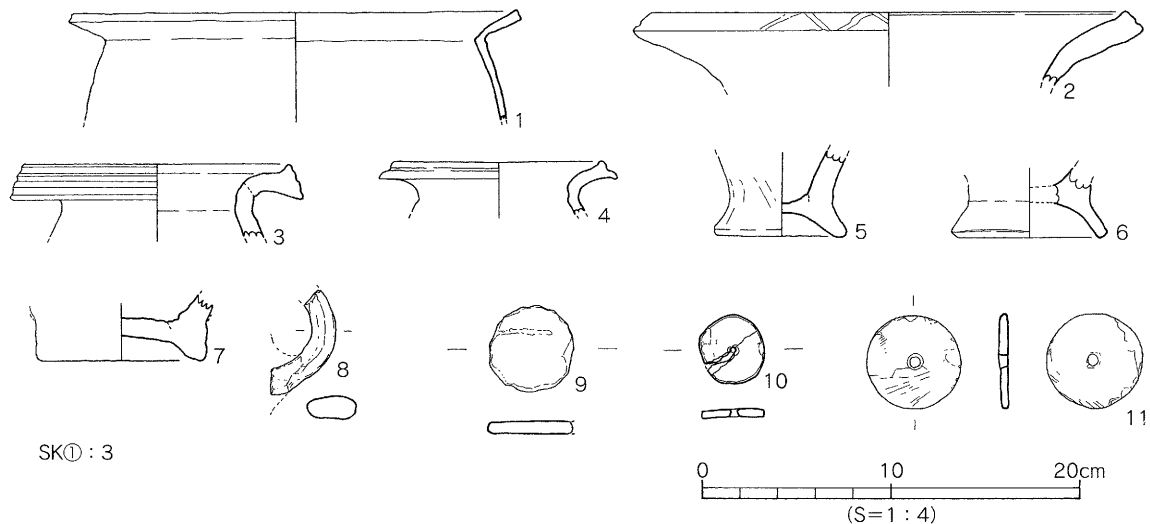
出土遺物（第237図）

1は折曲口縁の甕形土器、2～4は壺形土器である。2は口縁部が上方に拡張し、口縁端面に山形文を施す。3・4は口縁端面に凹線文が巡る。5～7は甕形土器の底部で、上げ底となる。8はジョッキ形土器の把手、9は円盤状土製品、10は土製の紡錘車である。11は緑色片岩製の紡錘車である。

時期：出土した遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

S B 203（第238図）

2 B 区中央部東寄り、B 18～19区に位置し、南側はS P 261に切られ、住居址北側は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.40m、南北検出長3.75m、壁高は42cmを測る。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土（黄色土混入）である。なお、2層は住居址床面修築のための貼床土と考えられる。内部施設は炉址と土坑、ピット、溝を検出した。炉址は住居址中央部西寄りで検出した。炉①は2層貼床土上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は南北検出長0.90m、東西長0.54m、深さ9cmを測る。埋土は暗灰黄色土で、炭化物が混入する。炉①からは弥生土器（17）が出土した。炉②は炉①の下面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径0.60m、深さ0.16mを測る。埋土は灰褐色土で、炭化物が混入する。住居址壁体に沿って、幅0.40～1.00m、深さ12～16cmを測る溝を検出した。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄色土である。また、溝底面から土坑1基（SK①）を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径0.90m、深さ12cmを測り、埋土は灰黄色土である。このほか、住居址床面にて9基のピットを検出したが、主柱穴は特定できなかった。遺物は1層中から弥生土器片と炭化物、2層中からは弥生土器小片が数点出土した。

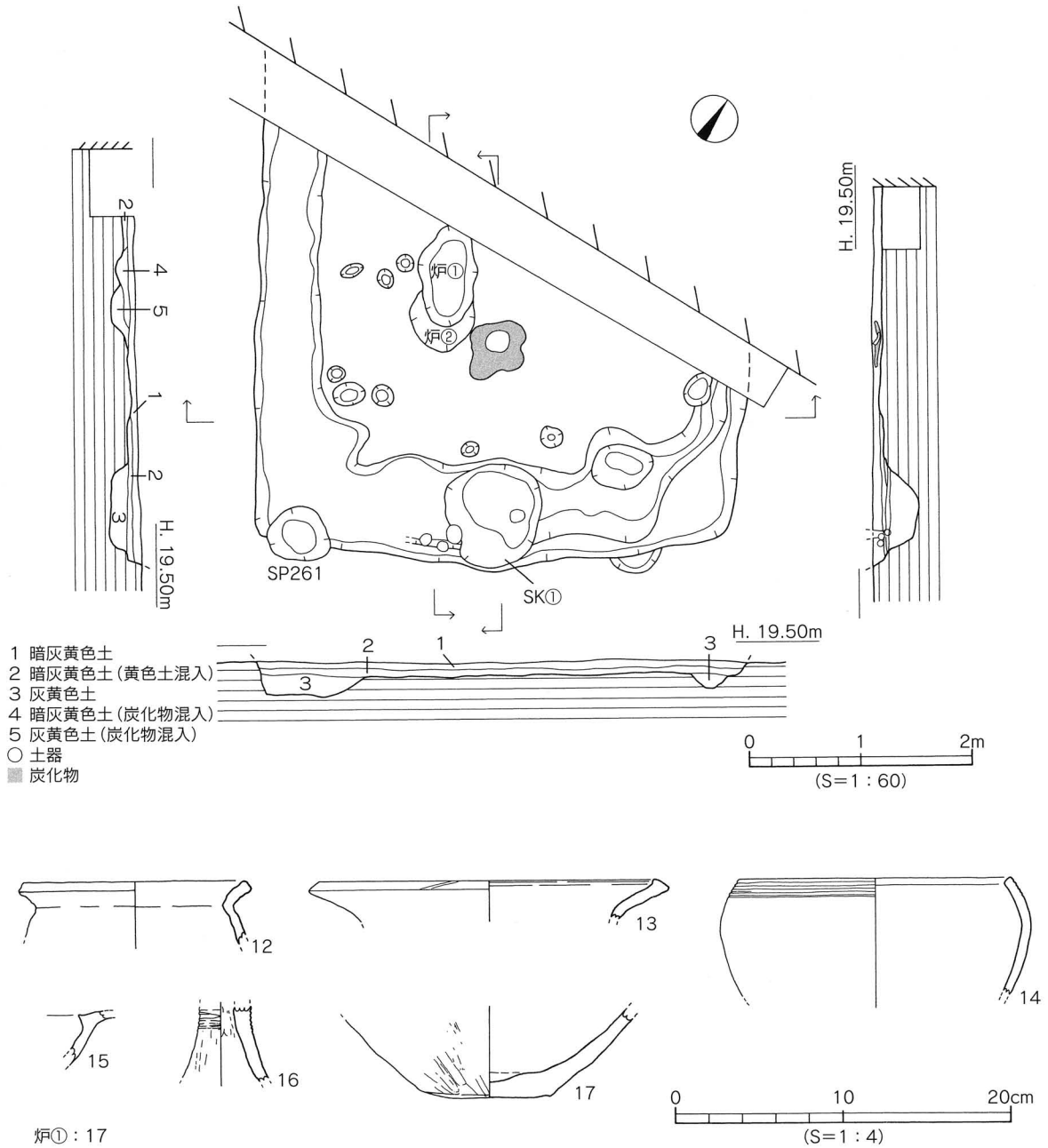


第237図 SB201出土遺物実測図

出土遺物 (第238図)

12は折曲口縁の甕形土器、13は壺形土器である。13は口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に山形文を施す。14~16は高坏形土器。14は坏部片で、口縁部に凹線文5条を施す。17は壺形土器の底部で、平底となる。

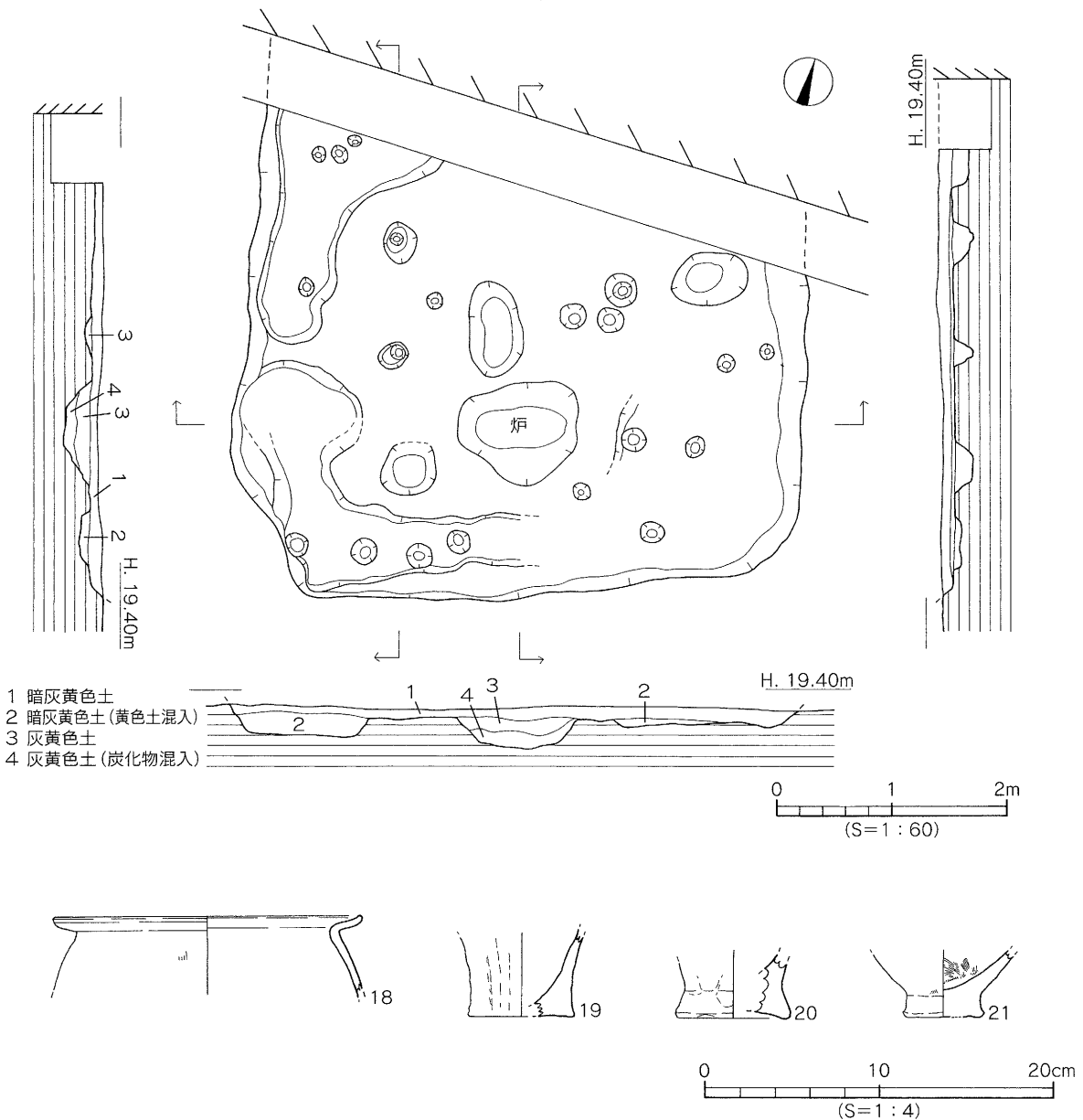
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。



第238図 SB203測量図・出土遺物実測図

S B 204 (第239図)

2 B 区中央部、B 16・17区に位置する。住居址東側はS D 202に切られ、北側は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.92m、南北検出長4.18m、壁体高は35cmを測る。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土(黄色土混入)である。なお、2層は床面修築のための貼床土と考えられる。内部施設は炉址、溝、ピットを検出した。炉址は住居址床面中央部西寄りで見出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.05m、短径0.80m、深さ22cmを測る。埋土は灰黄色土で炭化物が混入する。このほか、住居址西側から南側床面にて、溝を検出した。幅0.40~1.46m、深さ10~22cmを測り、埋土は暗灰黄色土に黄色土が混入するものである。また、溝底面からは径6~8cm、深さ5~8cmを測



第239図 SB204測量図・出土遺物実測図

る小ピットを8基検出した。ピット埋土は溝埋土と同じである。住居址床面からは、大小14基のピットを検出したが、支柱穴は特定できなかった。弥生土器片が散在して出土した。

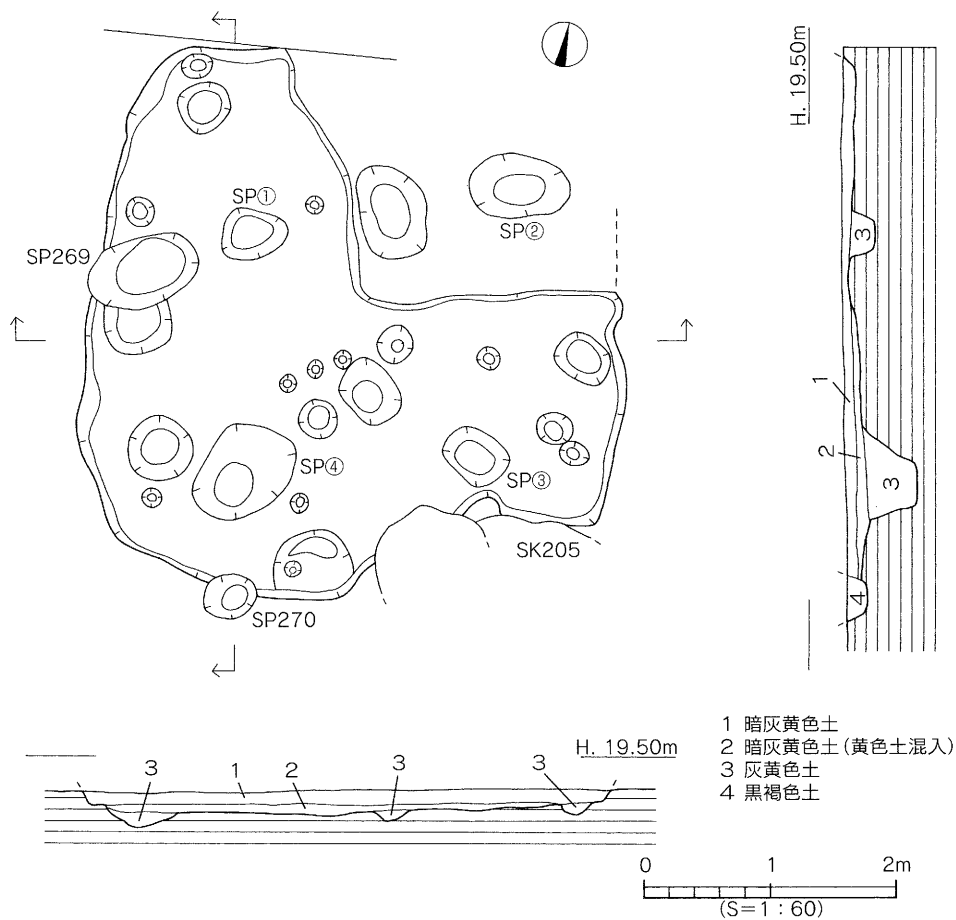
出土遺物 (第239図)

18は折曲口縁の甕形土器で、口縁端部は上方に拡張する。19・20は甕形土器の底部で、19は平底、20はやや上げ底となる。21は壺形土器の底部で、厚みのある突出部をもつ。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

S B 205 (第240図)

2 B区西側、B・C15区に位置する。住居址南側はS K205、S P264、S P270、西側はS P269に切れ、北東部壁体は未検出である。第VI①層上面で検出した。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.30m、南北検出長4.26m、壁高は20cmを測る。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土(黄色土混入)である。支柱穴は4本(S P①~④)と考えられ、規模は径40~80cm、深さ18~38cmを測り、柱穴掘り方埋土は灰黄色土である。このほか、住居址床面にて、大小ピット19基のピットを検出した。ピット埋土はすべて灰黄色土である。遺物は主に1層中から、弥生土器片が点在して出土した。



第240図 SB205測量図

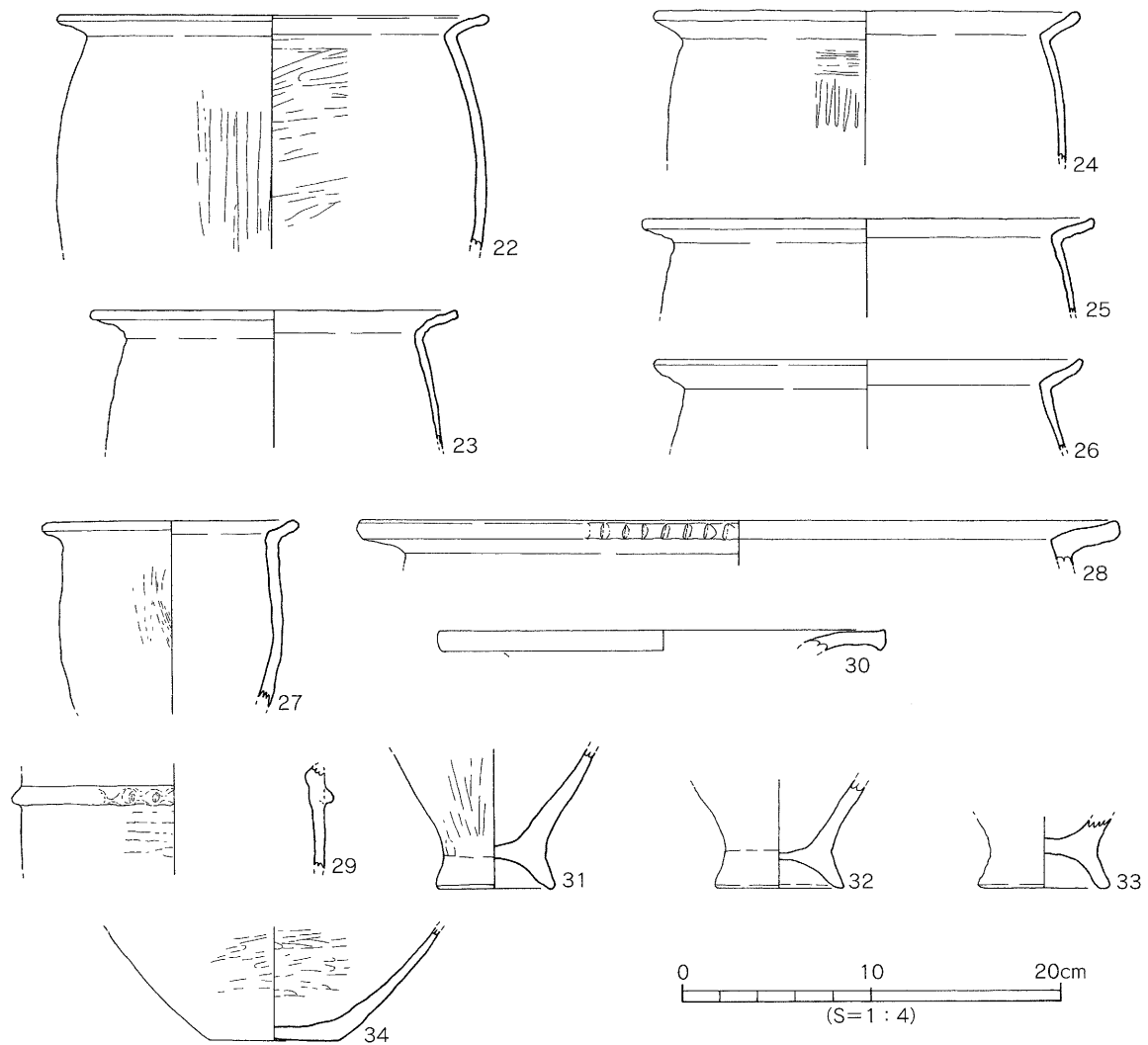
出土遺物（第241図、図版45）

22～29は甕形土器。22～28は折曲口縁で、29は押圧凸帯文を貼り付ける。30は広口壺の口縁部片で、口縁端部を上下方に拡張する。31～33は甕形土器の底部で、くびれをもつ上げ底となる。34は壺形土器の底部で、内外面共にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

S B 206（第242図）

2 B 区西側、C 15・16 区に位置する。住居址北側は S P 265 に切られ、南側は調査区外に続く。第 VI ① 層上面での検出であり、第 IV 層が覆う。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西長 3.38m、南北長 1.30m、壁高は 20cm を測る。埋土は 2 層に分層され、1 層暗灰黄色土、2 層暗灰黄色土（黄色土混入）である。住居址壁体に沿って、幅 20～35cm、深さ 3～6cm を測る周壁溝が巡る。埋土は暗灰黄色土（黄色土混入）である。住居址床面にて、大小 6 基のピットを検出した。ピット埋土はすべて、暗灰黄色土（黄色土混入）である。遺物は 1 層中より弥生土器片が少量出土した。



第241図 SB205出土遺物実測図

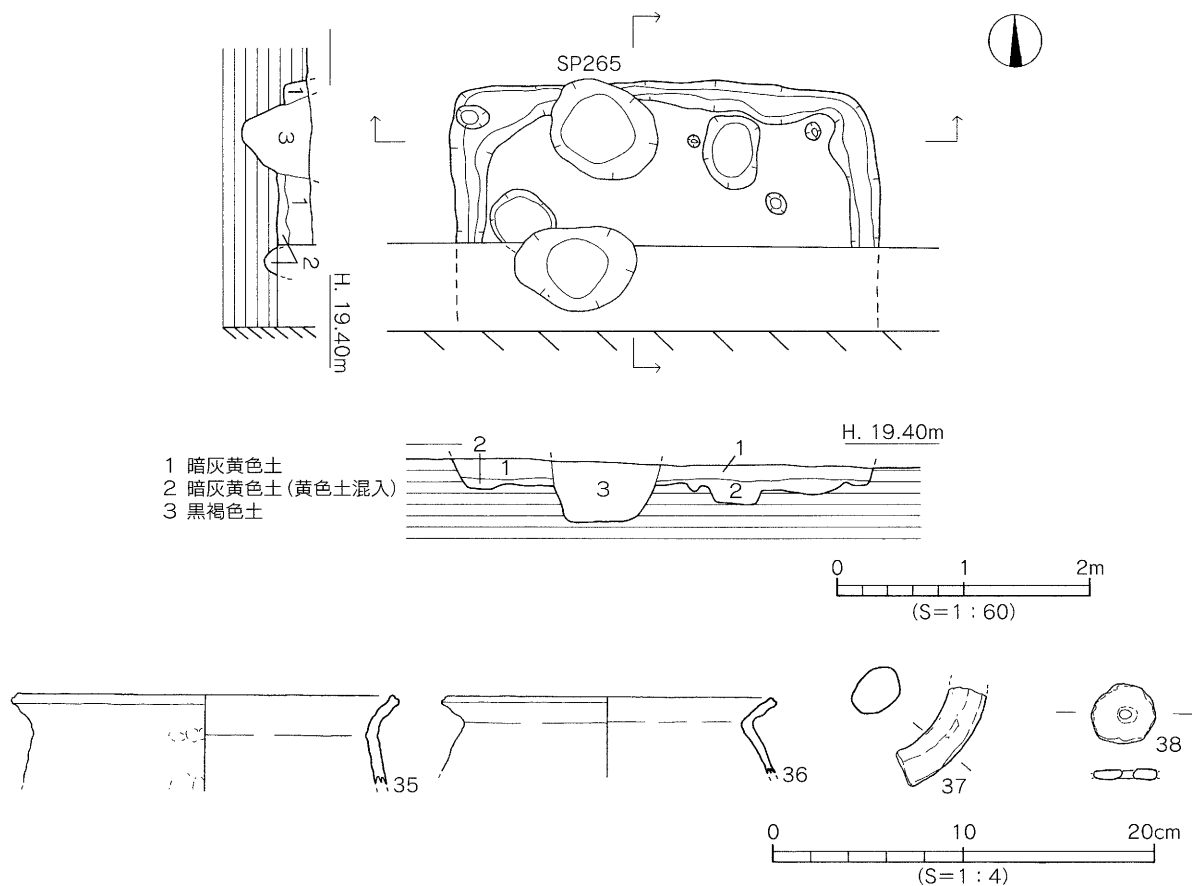
出土遺物 (第242図、図版45)

35・36は「く」の字状口縁を呈する甕形土器。37はジョッキ形土器の把手で、断面形態は楕円形を呈する。38は土製の紡錘車で、径0.8cm大の孔を穿つ。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期初頭とする。

S B 209 (第243図)

2 B区中央部、B 17・18区に位置する。南西隅はS D 202に切られ、北側及び南東部は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長5.55m、南北検出長3.90m、壁高は14cmを測る。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土(黄色土混入)である。住居址壁体に沿って、幅20~60cm、深さ5~8cmを測る周壁溝を検出した。溝埋土は灰黄色土である。住居址床面からは土坑3基を検出した。土坑埋土は、住居址埋土の2層と同じである。平面形態は楕円形を呈し、深さ10~20cmを測る。土坑内からの遺物の出土はない。このほか、住居址床面にて大小15基のピットを検出したが、主柱穴は特定できなかった。ピット埋土は、すべて暗灰黄色土(黄色土混入)である。ピット内からの遺物の出土はない。遺物は1層中より、少量の弥生土器片と石(径20~25cm)が数点出土した。

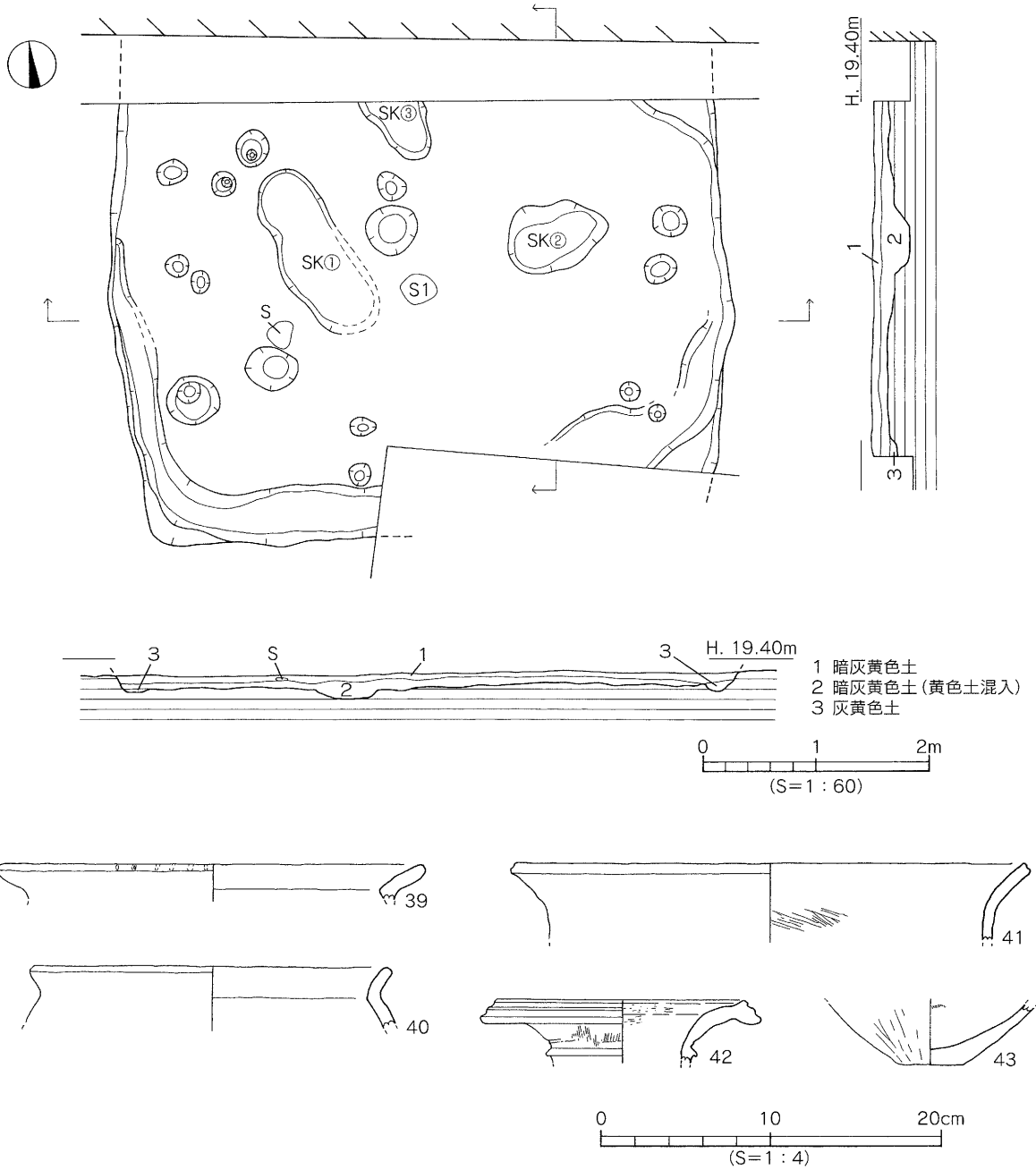


第242図 SB206測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第243図)

39~41は折曲口縁を呈する甕形土器。39の口縁端面には刻目を施す。42は広口壺で、口縁端部は上下方に拡張し、口縁端面に凹線文2条、頸部に凸帯文を施す。43は壺形土器の底部で、平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期初頭とする。



第243図 SB209測量図・出土遺物実測図

S B 212 (第244図)

2 A区中央部東寄り、B10・11区に位置し、北側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長5.50m、南北検出長1.58m、壁高は20cmを測る。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土(黄色土混入)である。なお、2層は住居址床面修築のための貼床土と考えられる。2層上面にてピット2基(SP②・③)、底面にてピット1基(SP①)を検出した。径45~55cm、深さ20~25cmを測り、ピット埋土はすべて灰黄色土である。遺物は1層中から、弥生土器片が数点出土した。

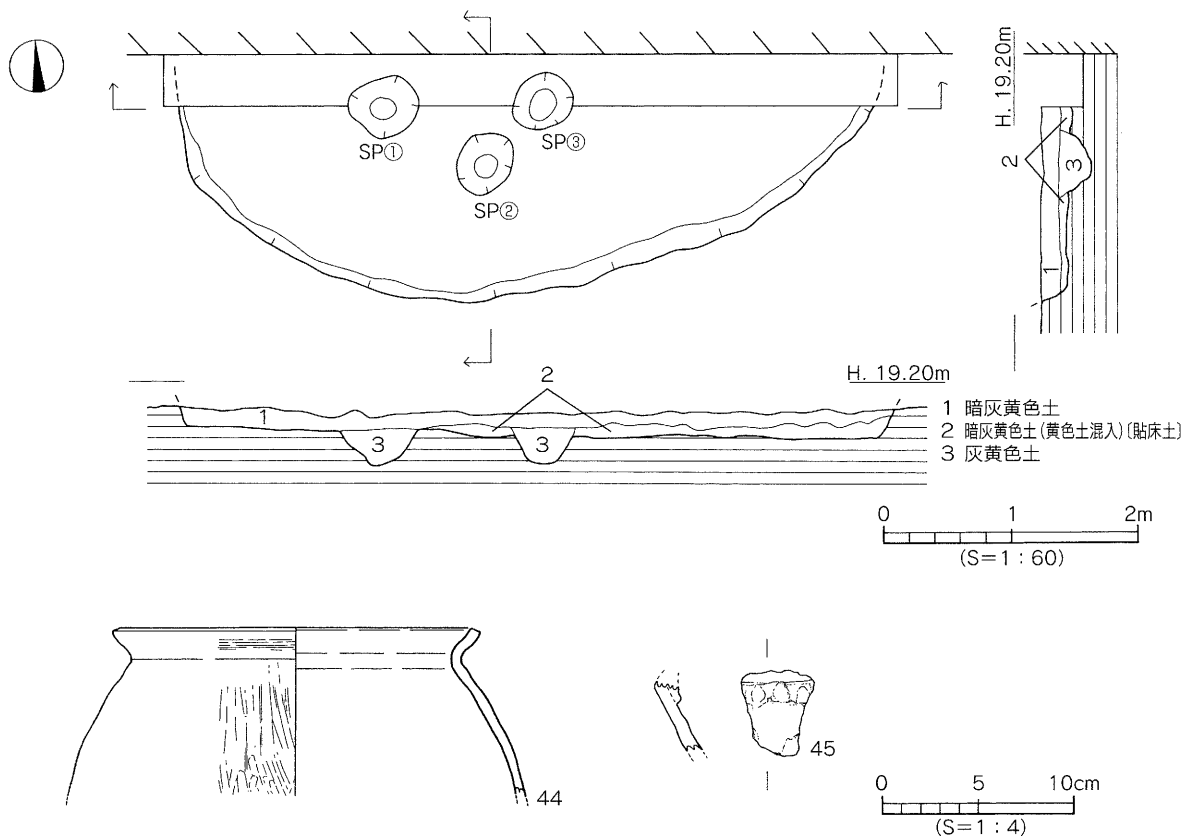
出土遺物(第244図)

44は折曲口縁を呈する甕形土器。口縁部はやや内湾する。45は壺形土器の肩部片で、押圧凸帯文を貼り付ける。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期初頭とする。

S B 304 (第245図)

3 C区中央部、B30~C31区に位置する。第VI①層上面で検出した。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.65m、南北検出長3.05m、壁高は12cmを測る。埋土は暗灰黄色土である。住居址床面にて、土坑1基とピット10基を検出した。土坑SK①は不定形状を呈し、規模は長さ2.30m、幅1.00m、深さ10cmを測る。土坑埋土は暗灰黄色土(黄色土混入)である。土坑内か



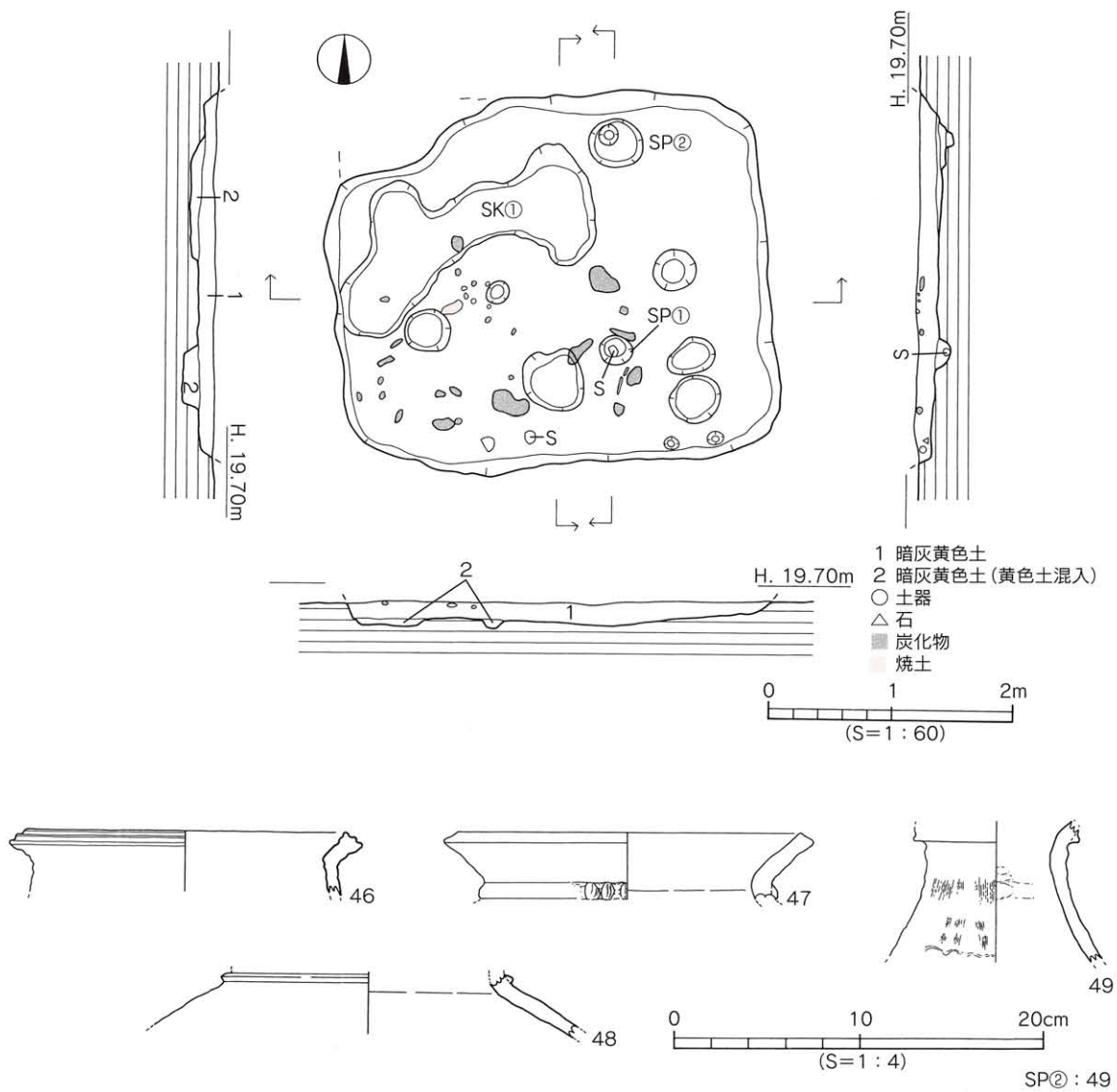
第244図 SB212測量図・出土遺物実測図

らの遺物の出土はない。ピットは径10~60cm、深さ3~10cmを測り、ピット埋土はすべて暗灰黄色土（黄色土混入）である。なお、SP①底面からは、径6cm大の石が1点出土した。SP②からは弥生土器(49)が出土した。住居址埋土中からは、弥生土器片が少量出土したほか、埋土上位からは焼土、炭化物が点在して出土した。

出土遺物（第245図、図版45）

46は折曲口縁を呈する甕形土器で、口縁端面に凹線文2条を施す。47~49は壺形土器。47の頸部には押圧凸帯文、49は肩部に波状文を施す。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期初頭とする。



第245図 SB304測量図・出土遺物実測図

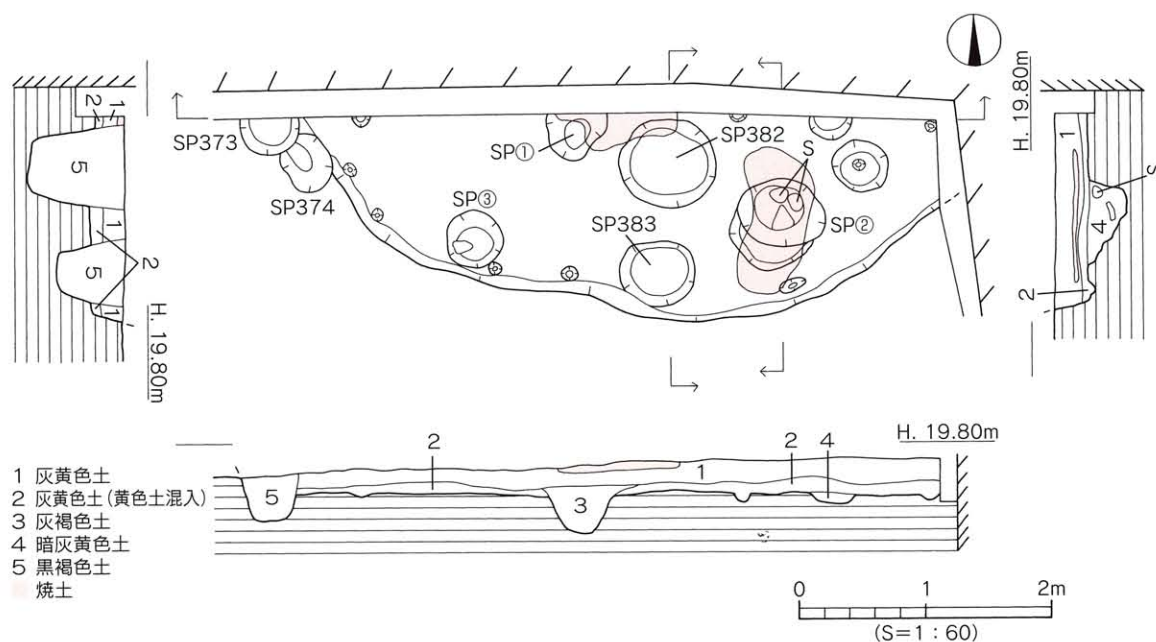
S B 305 (第246図)

3 A区北東隅、A24・25区に位置する。住居址西側はS P 373、S P 374、中央部はS P 382、S P 383に切られ、北側及び東側は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であり、第IV層が覆う。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長5.00m、南北検出長1.62m、壁高は28cmを測る。埋土は2層に分層され、1層灰黄色土、2層灰黄色土(黄色土混入)である。なお、2層は住居址床面修築のための貼床土と考えられる。2層上面にてピット1基(S P ①)を検出した。径45cm、深さ35cmを測り、埋土は灰褐色土である。住居址底面からは、大小12基のピットを検出した。住居の床面から大小ピット13基を検出した。このうち、壁体沿いに検出した5基の小ピットは、周壁溝に伴う可能性が考えられる。遺物は、S P ②より、石斧(56)、砥石(57)、台石(59・60)が出土したほか、S P ③からは弥生土器(55)が出土した。住居址埋土中からは、1層中より厚さ2~4cmを測る焼土塊を2箇所検出したほか、1層中より弥生土器片と石器が少量出土した。

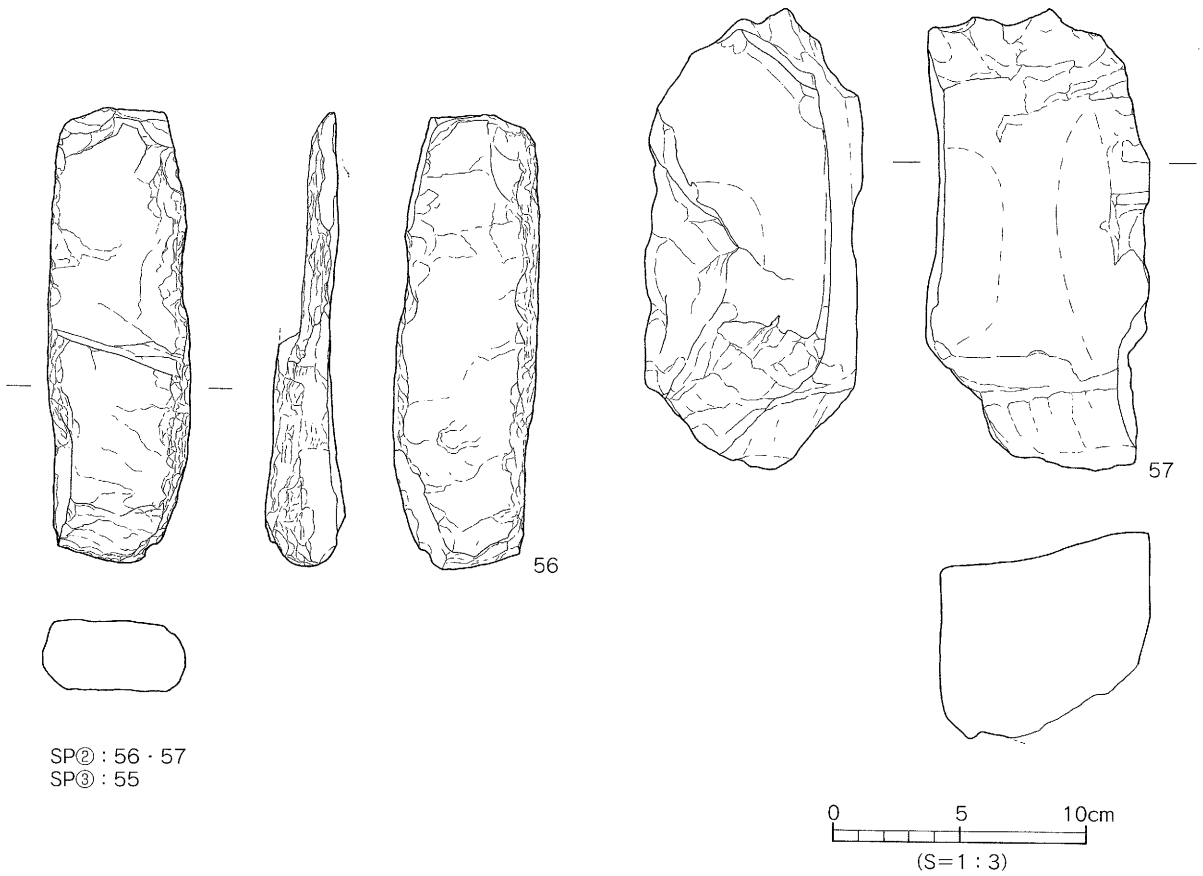
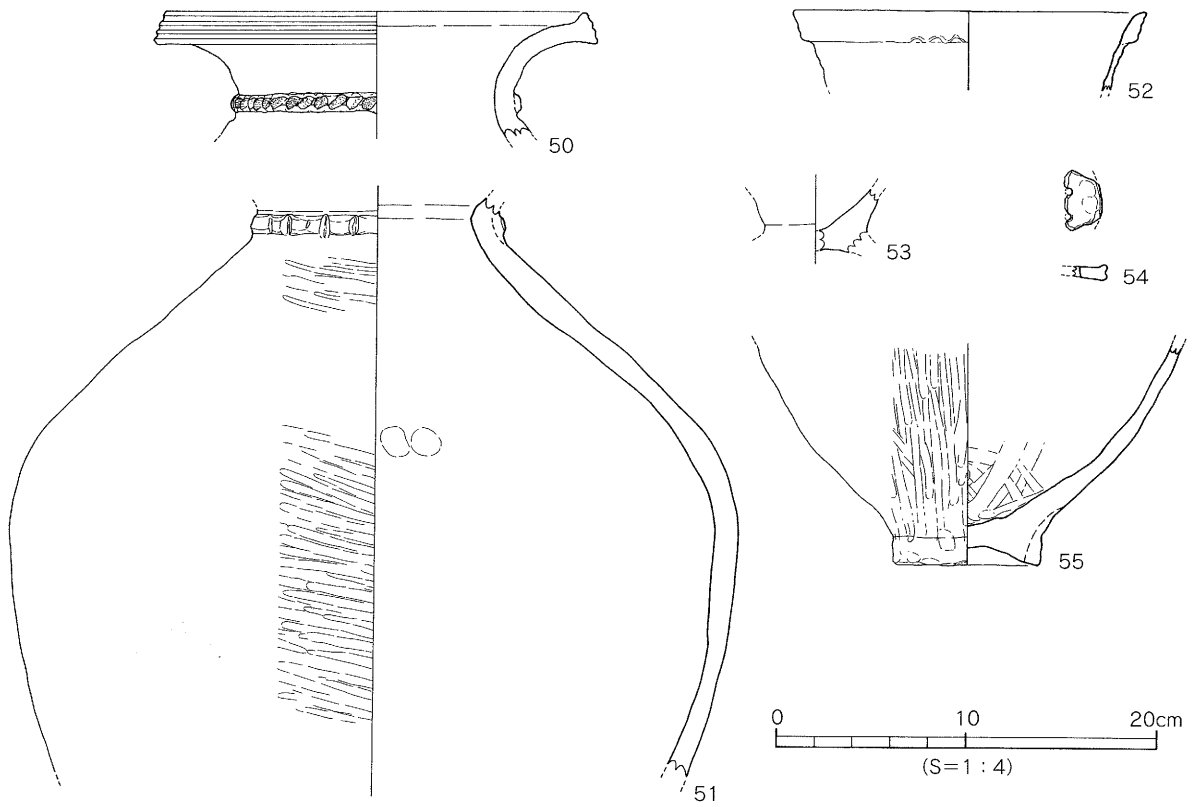
出土遺物(第247・248図、図版45)

50・51は壺形土器。50は口縁端面に凹線文3条、頸部に押圧凸帯文を施す。51は頸胴部片で、頸部に押圧凸帯文を施す。胴部外面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。52・53は鉢形土器。52は口縁部を断面方形状に拡張し、口縁下位は波状形態を呈する。54は土製品で、径0.4cm大の孔を2ヶ所穿つ。55は壺形土器の底部で、突出部をもつ上げ底となる。56は緑色片岩製の柱状片刃石斧で、敲打段階の未成品である。57・58は砥石で、57は2面、58は1面に使用痕を残す。59・60は台石で、使用面は1面である。61・62は石錘、63は器種不明品である。

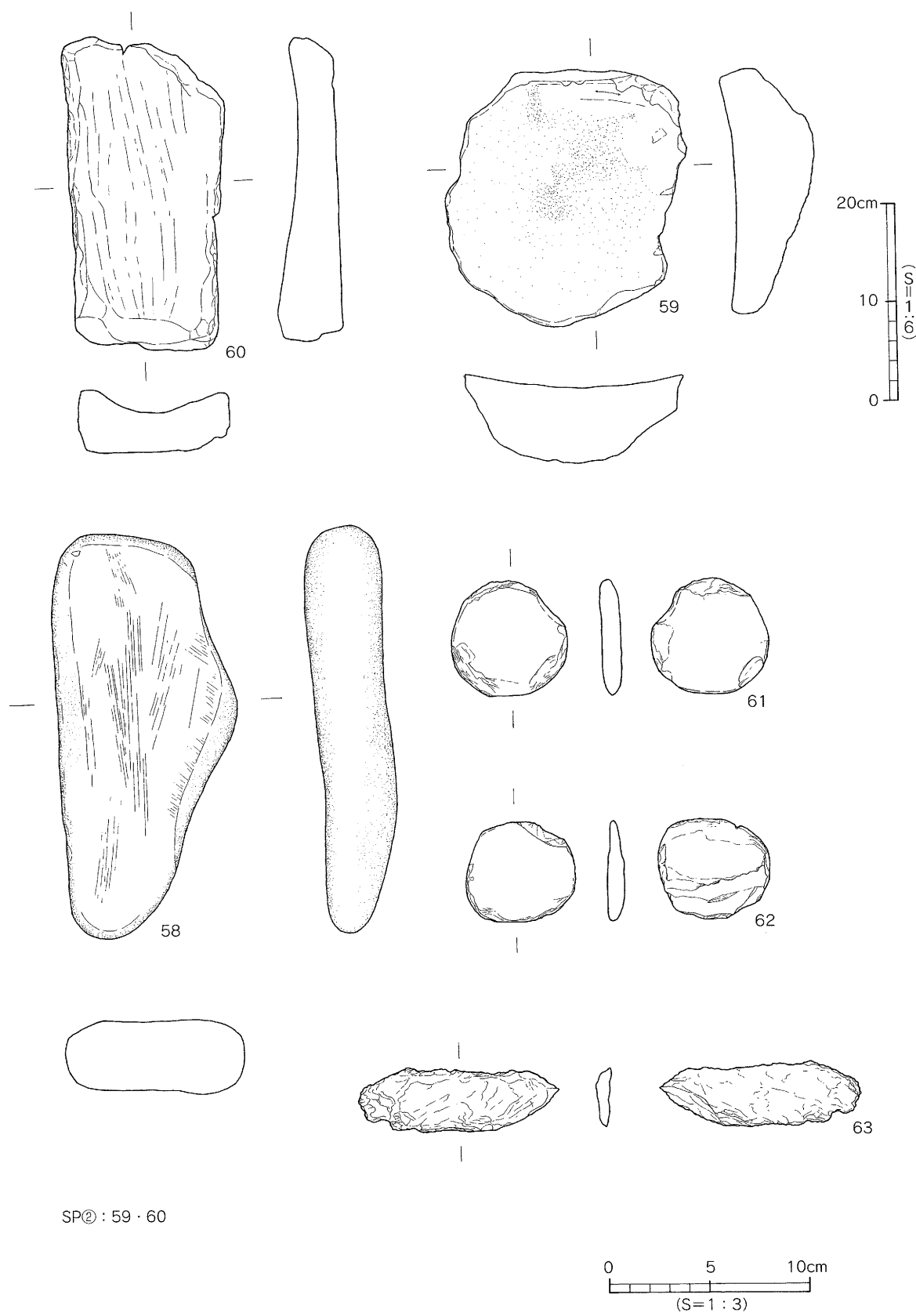
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期初頭とする。



第246図 SB305測量図



第247図 SB305出土遺物実測図(1)



第248図 SB305出土遺物実測図(2)

S B 307 (第249図)

3 A区北西隅、A23区に位置し、住居址北側及び西側は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。平面形態は方形状を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.30m、南北検出長1.50m、壁高は15cmを測る。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土(黄色土混入)である。このうち、2層は住居址床面修築のための貼床土と考えられる。遺物は2層上面にて、炭化物と焼土を検出したほか、1層中より弥生土器片が点在して出土した。

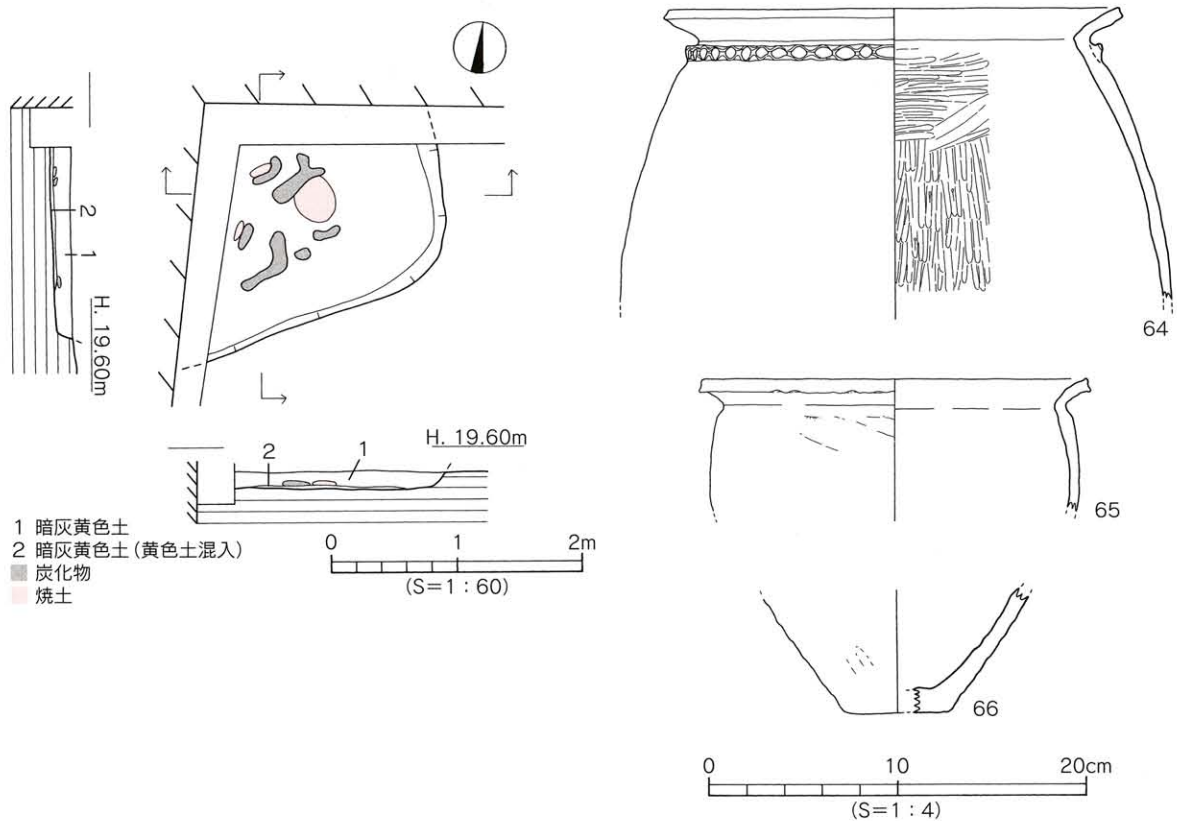
出土遺物 (第249図)

64・65は甕形土器。64の頸部には押圧凸帯文を施す。胴部内面上位にはヨコ方向、中位にはタテ方向のヘラミガキ調整を施す。66は壺形土器の底部で、平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期初頭から前半とする。

S B 207 (第250図)

2 B区西隅、B13・14区に位置し、北側は調査区外に続く。平面プランと調査区北壁の土層観察により住居址と判断した。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。平面形態は隅丸方形状を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.70m、南北検出長0.90m、壁高は20cmを測る。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土(黄色土混入)である。住居址壁体から内側に幅20~70cm、高さ20cm前後のベット状の高まりをもつ。遺物は1層中より、弥生土器片が少量出土した。



第249図 SB307測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第250図)

67は広口壺の口縁部片で、口縁端部は上方に拡張する。68は支脚形土器の脚部片。69は壺形土器の底部で、平底となる。

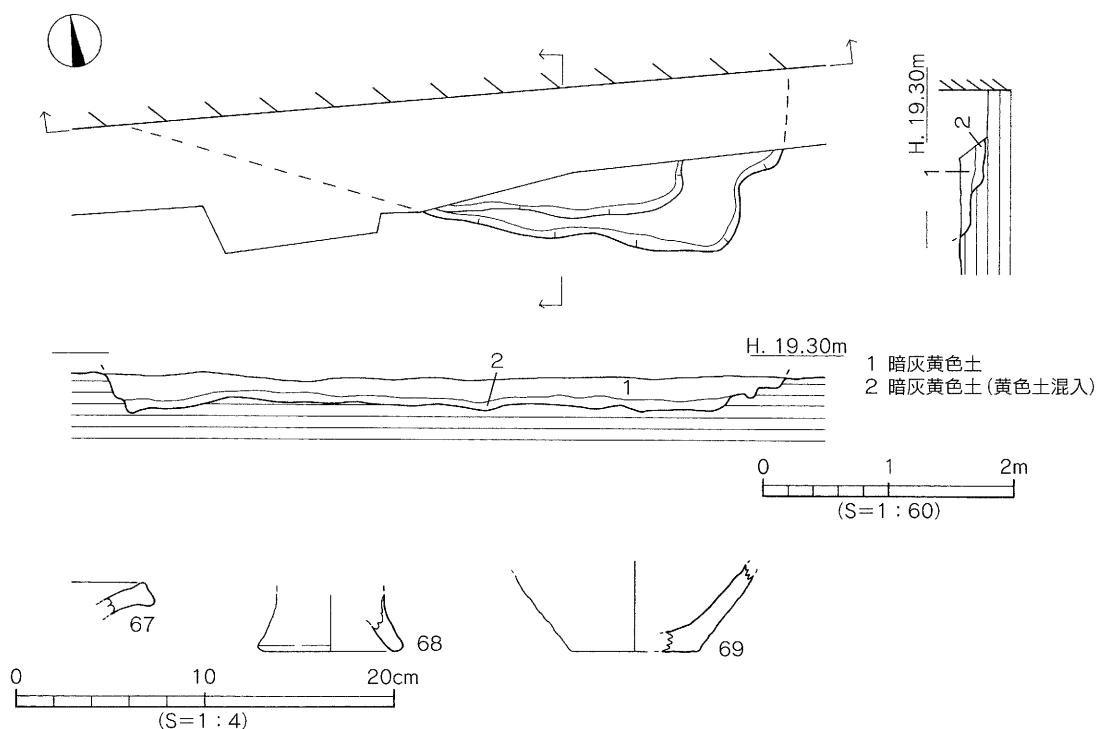
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期初頭から前半とする。

S B 302 (第251図、図版42)

3 A区北東部、A24～B25区に位置する。住居址北東隅はS B 305、北西隅は掘立301を切る。第VI①層上面で検出した。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長さ4.75m、幅3.45m、壁高は20cmを測る。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層灰黄色土である。住居址床面中央部南寄りにて、炉址を検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.70m、短径0.50m、深さ27cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、南西部はテラス状の平坦部をもつ。埋土は灰黄色土で炭化物が混入する。炉址からは鉢形土器(73)や土器片のほか、径5～15cm大の石が数点出土した。住居址埋土中からは、1層中より長さ22cm、幅5cm、厚さ1cm大の炭化材と焼土が出土した。このほか、住居址床面にて大小14基のピットを検出したが、支柱穴は特定できなかった。このうち、壁体沿いに検出した小ピットは、周壁溝に伴う可能性が考えられる。ピット埋土はすべて、灰黄色土である。遺物は1層中より弥生土器片が出土したほか、2層中からは炭化物や焼土が点在して出土した。

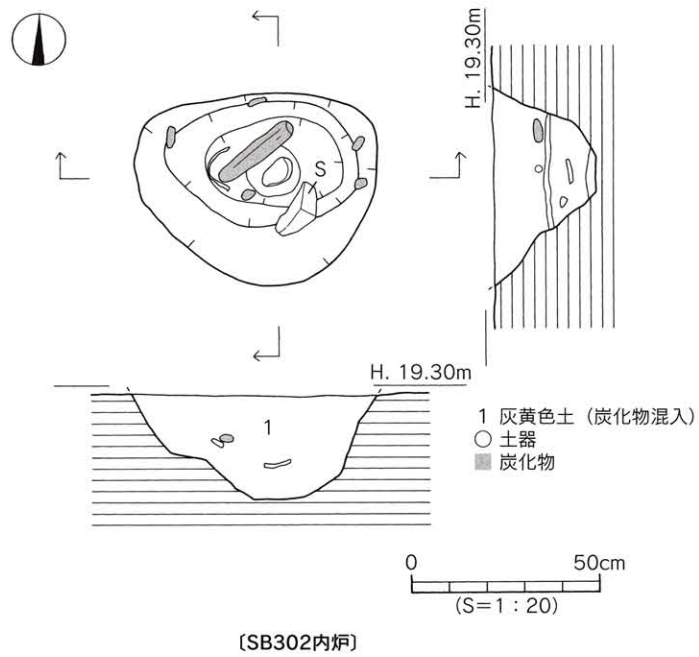
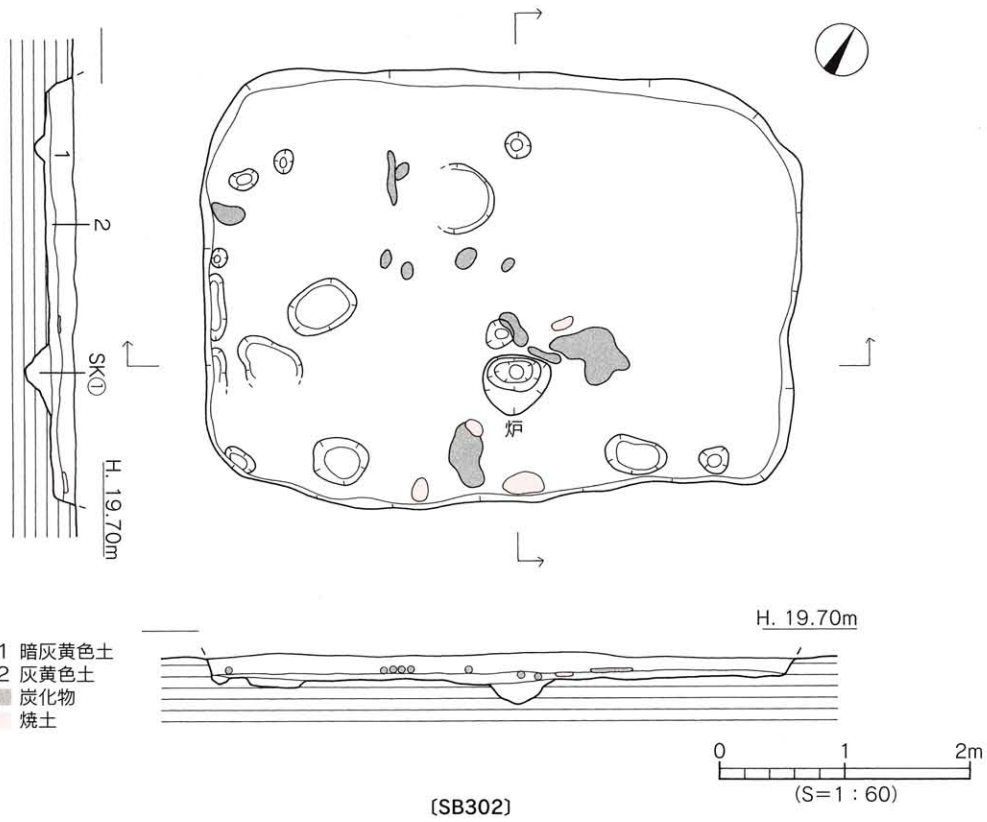
出土遺物 (第252図、図版46)

70は甕形土器。口径30cmを超える大型品で、胴部外面にはタタキ調整を施す。71・72は壺形土器。71は口縁端面に凹線文2条を施す。73～76は鉢形土器。73は直口口縁を呈し、底部は突出する。76は



第250図 SB207測量図・出土遺物実測図

弥生時代の遺構と遺物



第251図 SB302・302内炉測量図

口縁部が外反し、胴部内外面にヘラミガキ調整を施す。77は高坏形土器の口縁部片、78は器台形土器の柱部片である。79～81は壺形土器の底部で、79はやや上げ底、80・81は平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

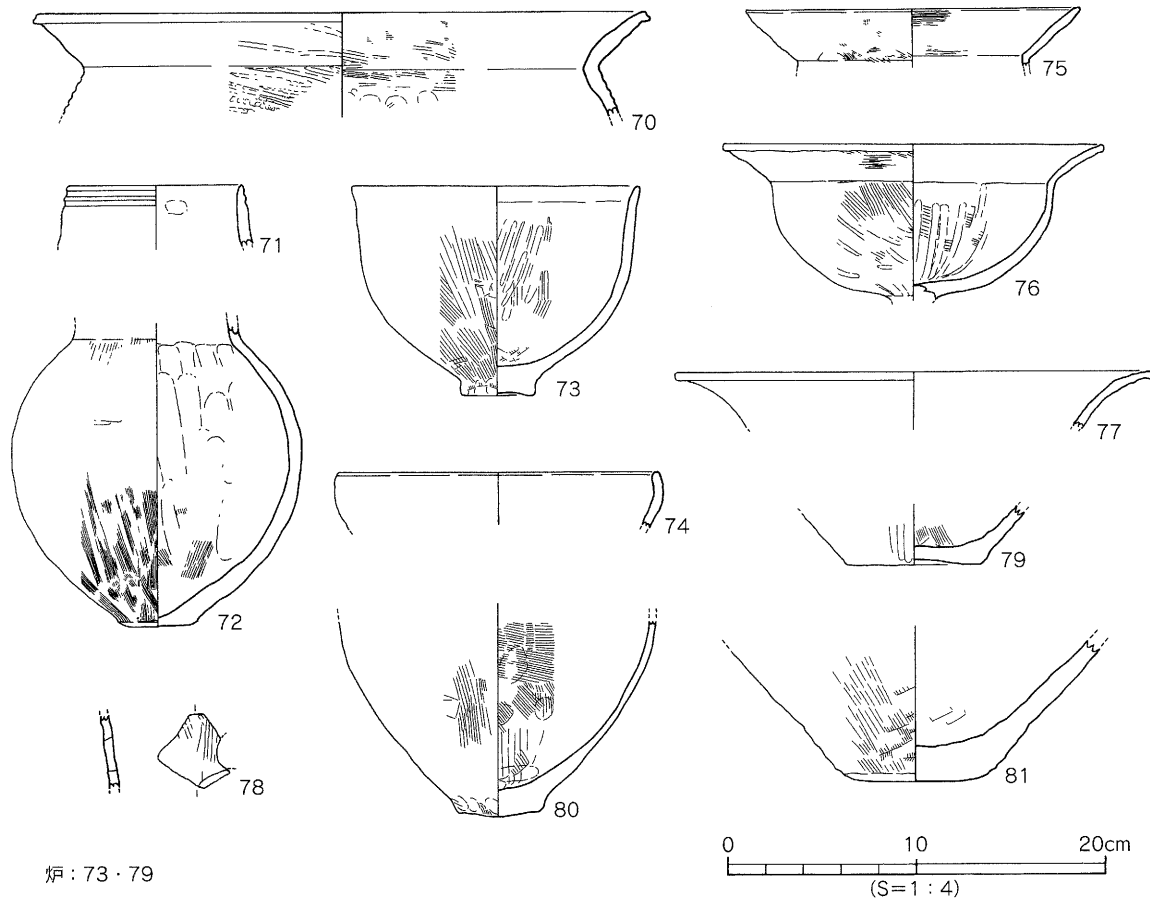
S B 303 (第253図)

3 B区北側、B27・28区に位置し、住居址北側は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であるが、土層観察より第IV層上面から掘り込まれた遺構である。平面形態は隅丸形状を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.65m、南北検出長1.46m、壁高は20cmを測る。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土(黄色土混入)である。住居址床面より大小4基のピットを検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径10～23cm、深さ7～15cmを測る。ピット埋土はすべて暗灰黄色土(黄色土混入)である。遺物は1層中より弥生土器片が数点出土したほか、2層上面にて径60×85cmの範囲に、厚さ0.4cm程度の焼土を検出した。

出土遺物 (第253図)

82は甕形土器の口縁部片で、内外面共にハケメ調整を施す。83は鉢形土器で、口縁端部は先細りする。84は甕形土器の胴底部で、わずかに上げ底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



炉：73・79

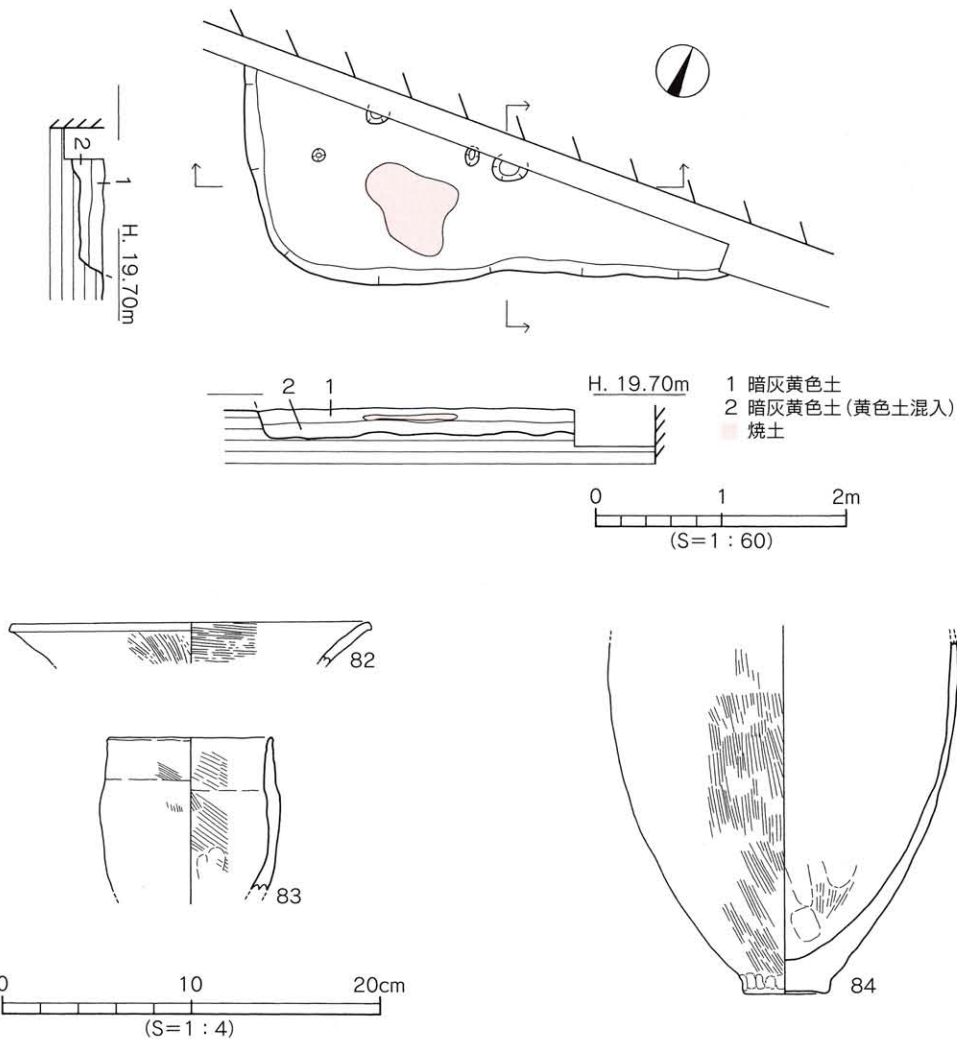
第252図 SB302出土遺物実測図

(2) 掘立柱建物址

掘立301 (第254図)

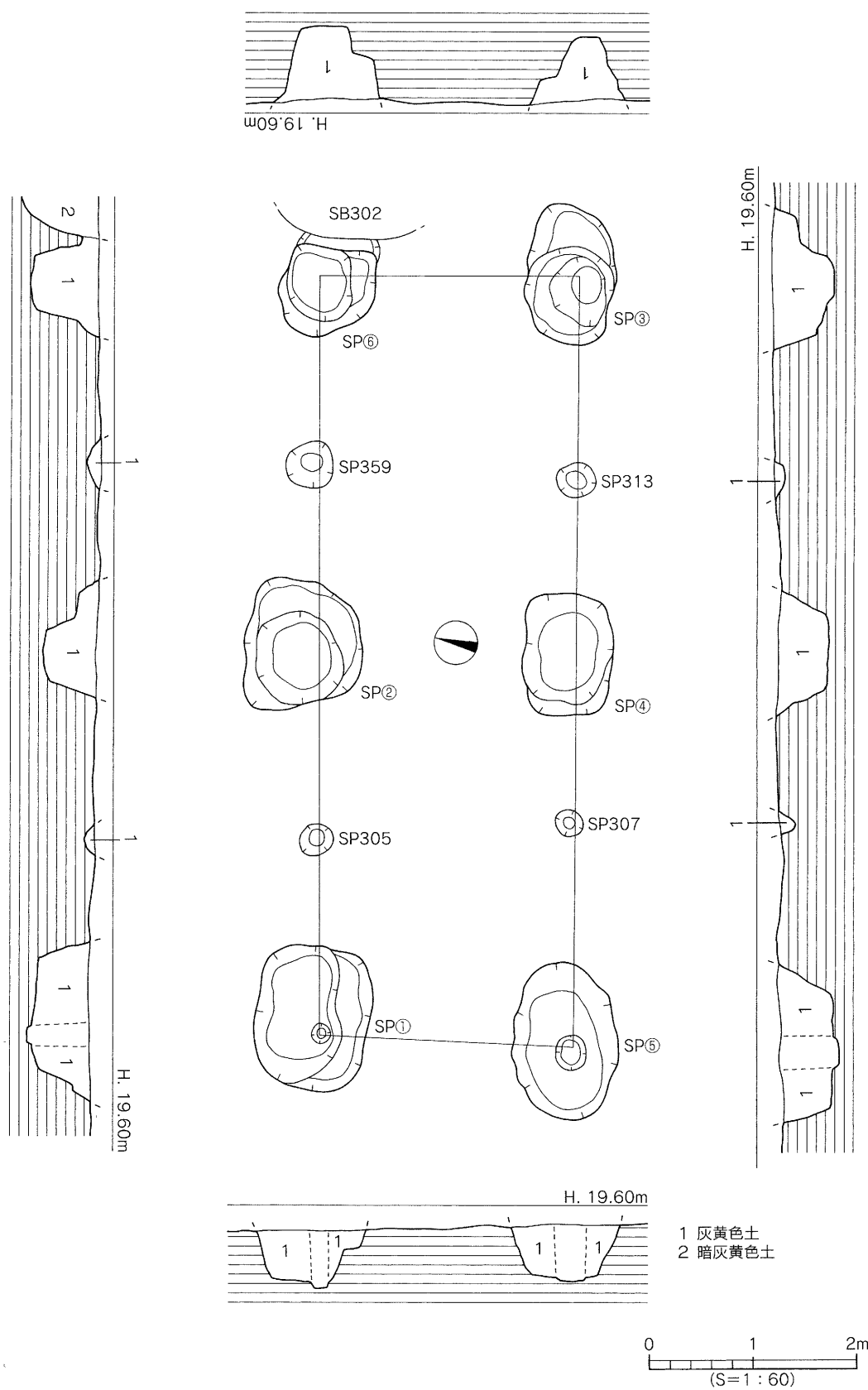
3 A区中央部、B・C23～B24区に位置する。1間×4間の建物址で、北東部はSB302に切られる。建物方位は真北よりやや西に振る。第VI①層上面で検出した。規模は桁行長7.40m、梁行長2.50m、柱穴間隔は1.60～2.50mを測る。柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径0.85～1.15m、深さ45～70cmを測る。桁行側で束柱4基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は0.28～0.45m、深さ10～15cmを測る。柱穴掘り方埋土は灰黄色土である。柱痕は柱穴底面にて2基の柱穴(S P①・②)で検出したが、柱痕埋土は未確認のため測量図には点線で表記している。柱穴内からは、弥生土器小片が数点出土した。

時期：SB302に切られることから、概ね弥生時代後期後半以前とする。



第253図 SB303測量図・出土遺物実測図

西石井遺跡 2次調査地



第254図 掘立301測量図

(3) 溝

S D 304 (第255図、図版42)

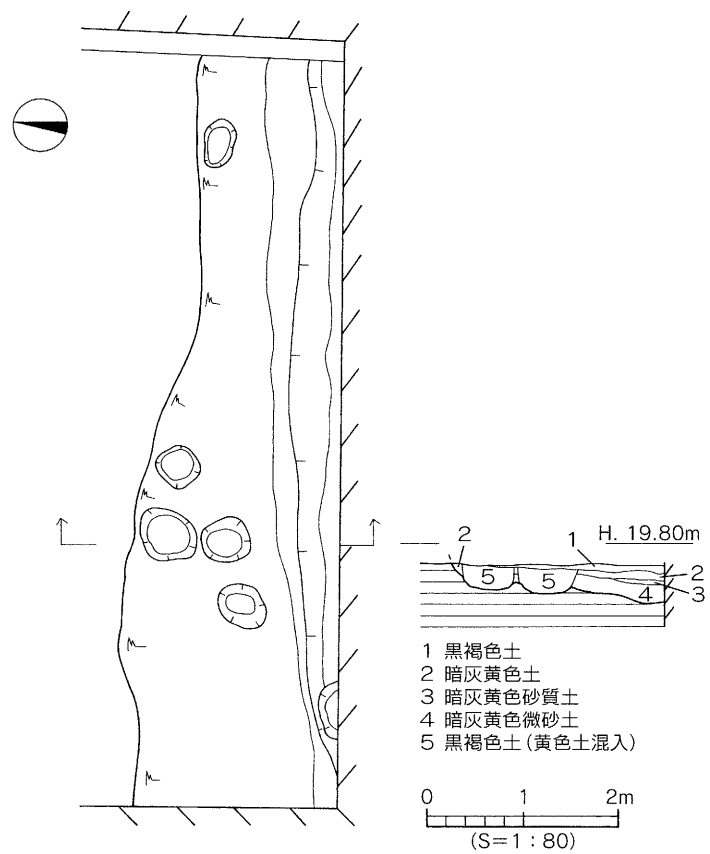
3 C区南端、C30・31区に位置する東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。検出状況から4区検出の溝S D 402に続くものと考えられる。第VI①層上面での検出であり、第IV層が覆う。規模は検出長8.00m、幅2.34m、深さ40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は4層に分層され、1層黒褐色土、2層暗灰黄色土、3層暗灰黄色砂質土、4層暗灰黄色微砂土である。溝壁面にて6基のピットを検出した。ピット埋土は黒褐色土に黄色土が混入するものである。遺物は主に4層中から弥生土器のほか、石器の未成品が多数出土した。

出土遺物 (第256～259図、図版46)

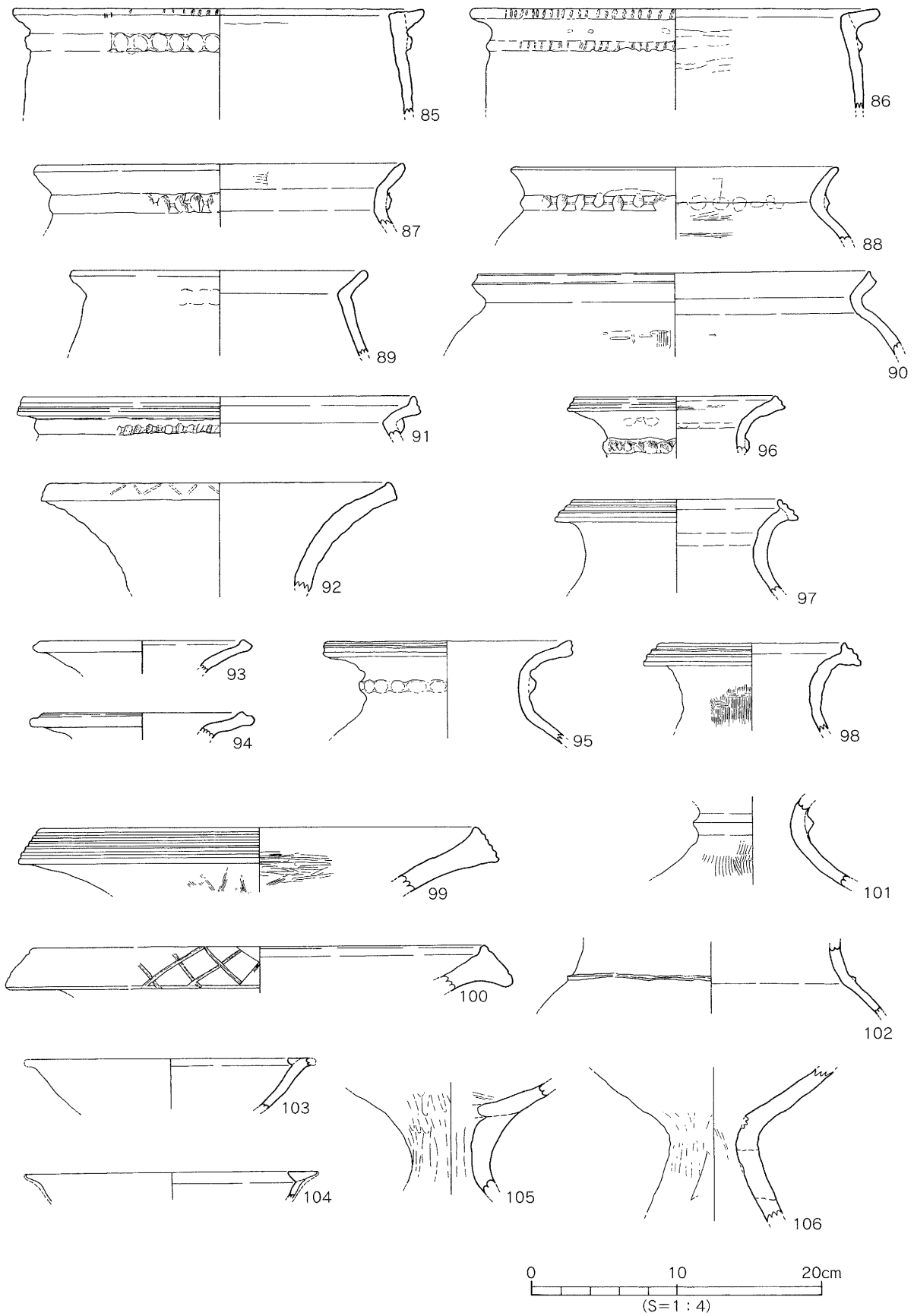
85～91は甕形土器。85・86は貼付口縁で、口縁端部に刻目、頸部に押圧凸帯文を施す。87・88は折曲口縁で、頸部に押圧凸帯文を施す。90は口縁端部を上方に拡張する。91は口径26cmを超える大型品で、口縁端面に凹線文2条、頸部に押圧凸帯文を施す。92～102は壺形土器。92は口縁端面に山形文、94～99は凹線文、100は斜格子目文を施す。101・102は頸部片で、断面三角形の凸帯文を施す。103～109は高坏形土器。103・104は坏部片で、口縁端部は内外方に拡張する。105～108は坏脚部接合部片で、106・107は三角形の透かし(未貫通)が看取される。109は胎土中に角閃石を含むことや、色調から外来系土器と考えられる。110～113は甕形土器、114は壺形土器の底部。110～113はくびれをもつ上げ底、114は平底となる。

115～119は扁平片刃石斧。115は成品で、116・119は研磨段階、117・118は粗割段階の未成品である。120～124は柱状片刃石斧。120は研磨段階、121～124は粗割段階の未成品である。125・126は伐採斧で、125は敲打段階、126は打裂段階の未成品である。127・128は砥石で、1面のみ使用痕を残す。129は石庖丁の原材、130～133は剥片である。

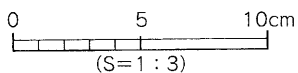
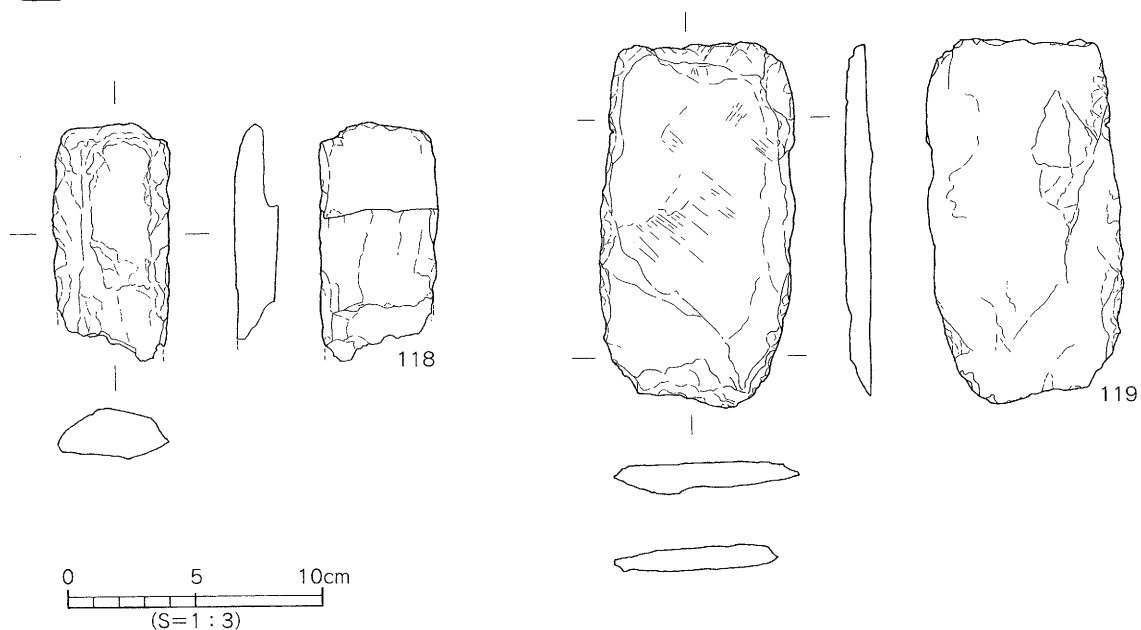
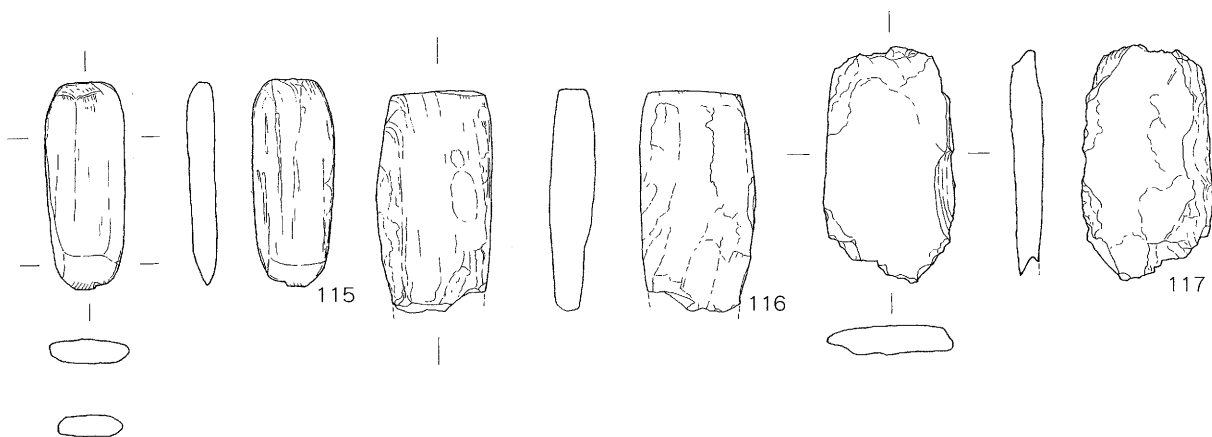
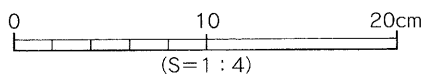
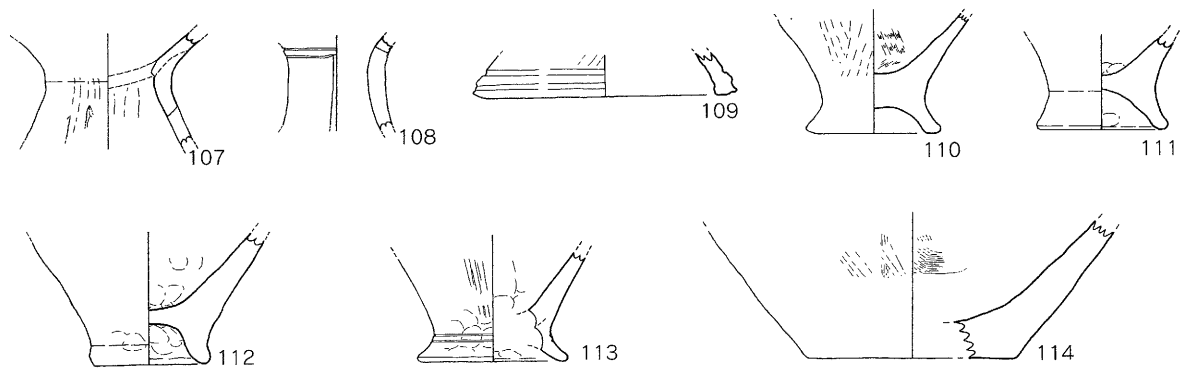
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。



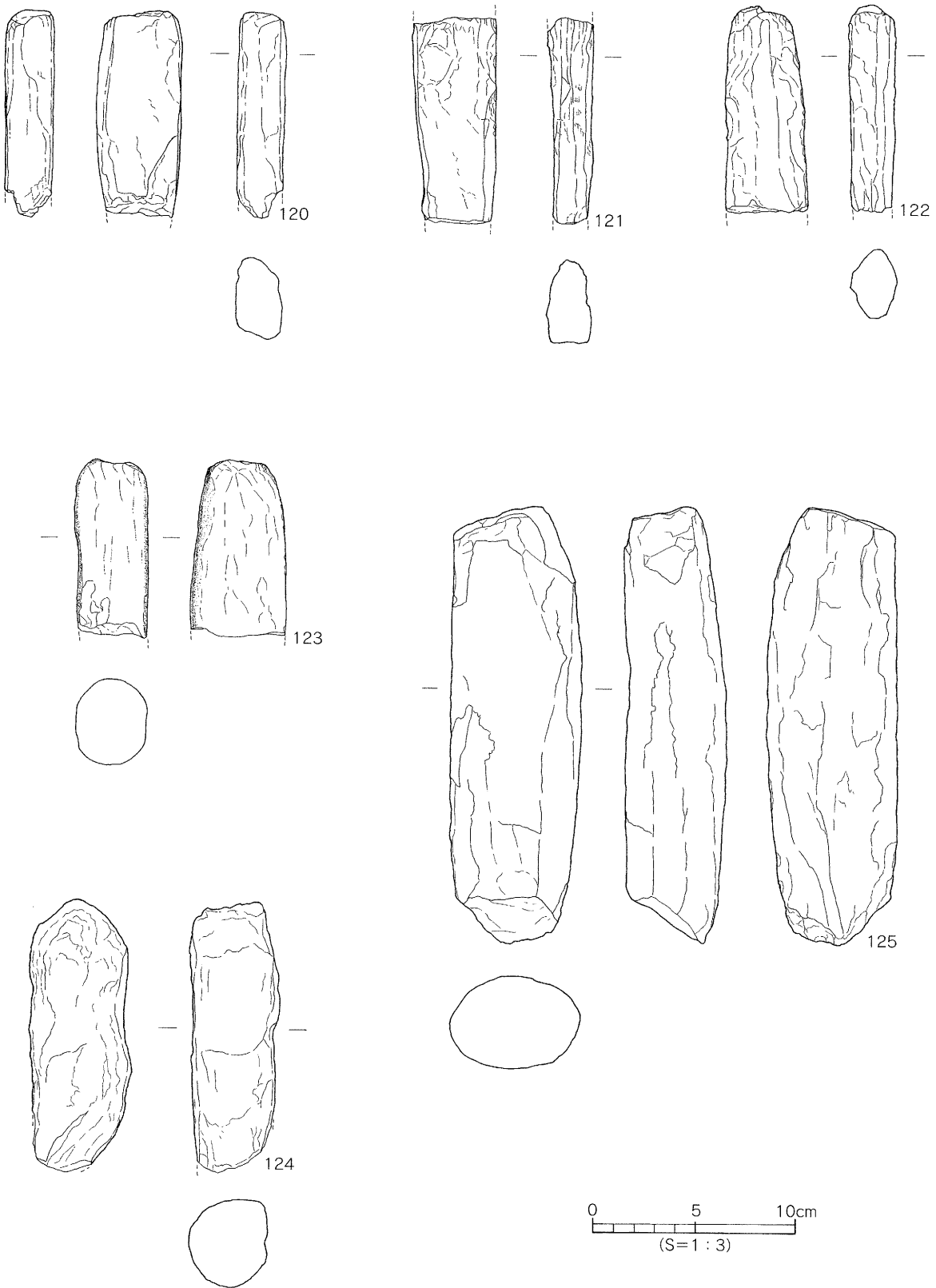
第255図 SD304測量図



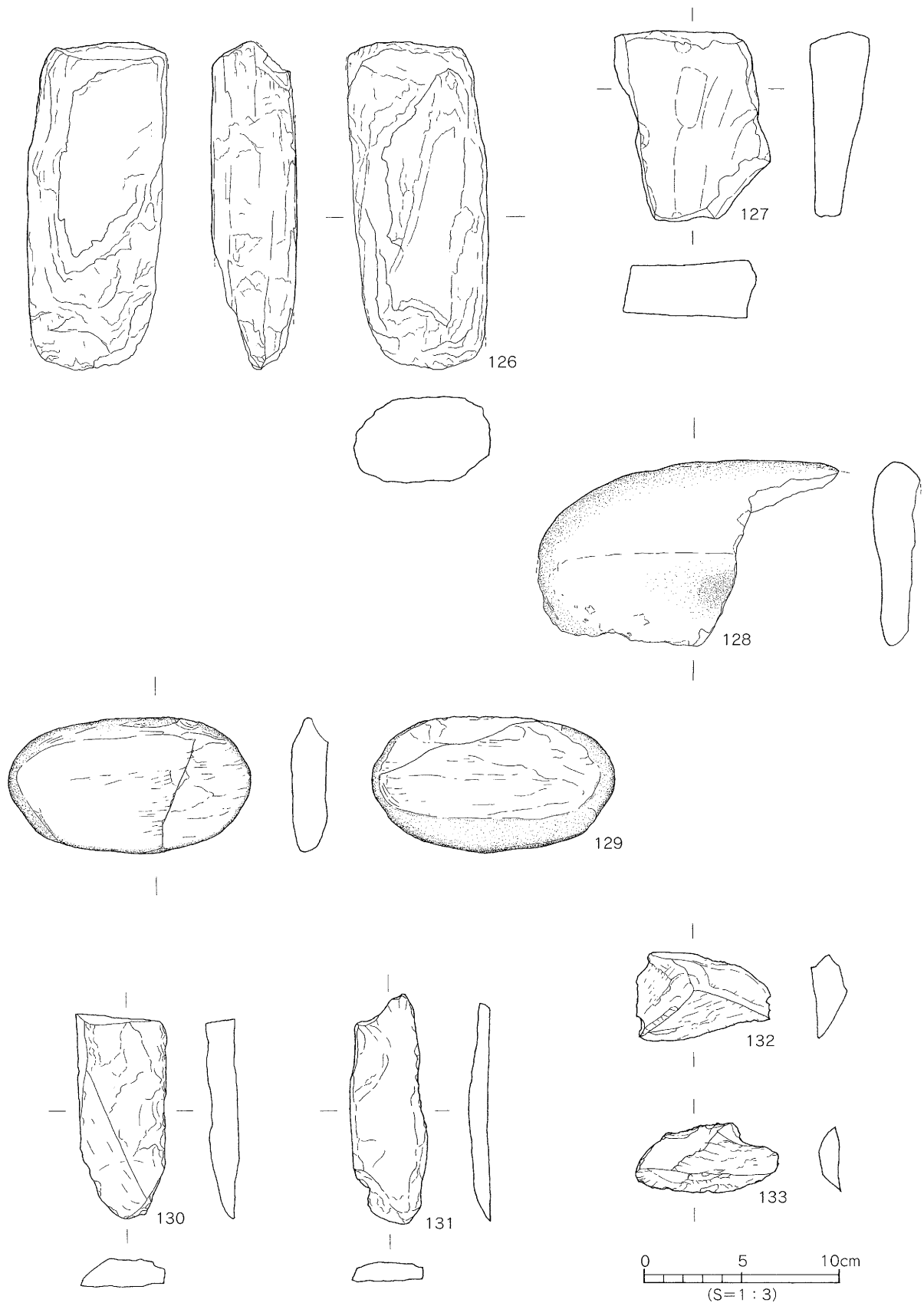
第256図 SD304出土遺物実測図(1)



第257図 SD304出土遺物実測図 (2)



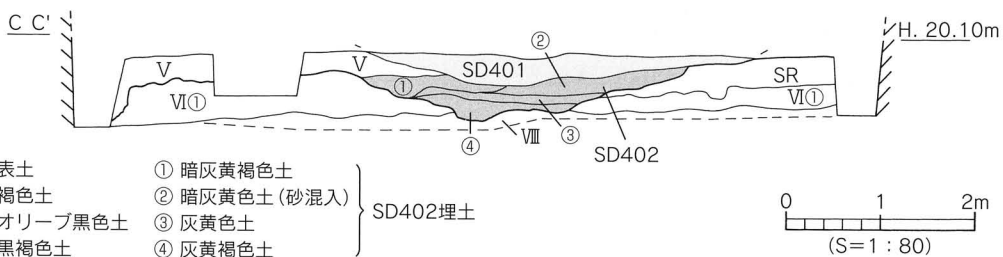
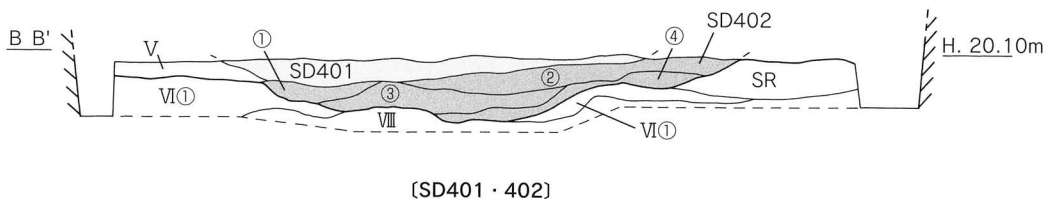
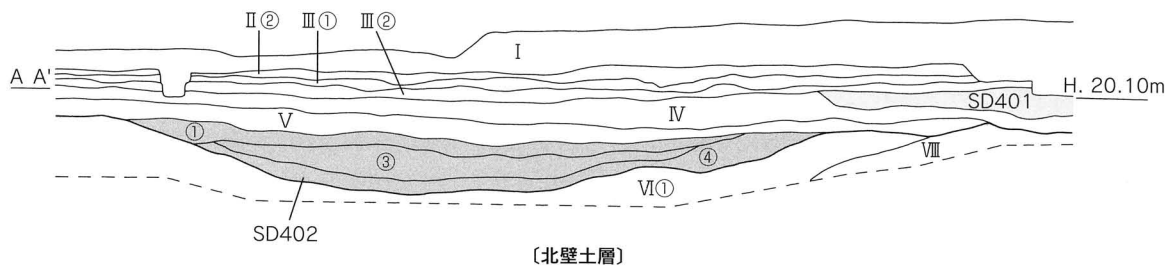
第258図 SD304出土遺物実測図 (3)



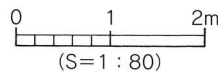
第259図 SD304出土遺物実測図(4)

S D 402 (第260図)

4区中央部、C33～B42区に位置する東西方向の溝で、途中、北東方向に向けて屈曲する。溝両端は調査区外に続き、溝西側は3C区検出のS D 304に続くものと考えられる。溝北側壁体はS K 405、S K 412、S K 414、S E 404に切られ、南側壁体はS E 405、中央部はS E 401、S E 402にそれぞれ切られている。第VI①層上面での検出であり、第V層が覆う。ただし、溝中央部から西側では、溝上面付近にてS D 401が検出されている。規模は検出長47.3m、幅2.40～9.70m、深さ50～90cmを測る。断面形態は緩やかな「U」字状を呈するが、溝底面中央部は凹む。埋土は4層に分層され、①層暗灰黄褐色土、②層暗灰黄色土(砂混入)③層灰黄色土、④層灰黄褐色土である。堆積状況はほぼ水平堆



- | | | |
|--------------|--------------|-----------|
| I 表土 | ① 暗灰黄褐色土 | } SD402埋土 |
| II② 褐色土 | ② 暗灰黄色土(砂混入) | |
| III① オリーブ黒色土 | ③ 灰黄色土 | |
| III② 黒褐色土 | ④ 灰黄褐色土 | |
| IV 黄灰色土 | | |
| V 暗灰黄色土 | | |
| VI① 黄褐色土 | | |
| VII 灰色砂礫 | | |



第260図 北壁土層・SD401・402断面測量図

積をなす。溝底面は凹凸があり、東側から西側に向けて傾斜をなす（比高差15cm）。なお、溝壁体中位から底面にかけては第Ⅷ層砂礫層となる。溝底面及び壁体よりピット5基を検出した。ピット埋土はすべて暗灰黄褐色土である。遺物は①・②層に集中しており、弥生土器や石器のほか、土製紡錘車や分銅形土製品が出土した。弥生土器は大半が破片であるが、この中には広島地方からの搬入品（164）が含まれている。なお、出土した石器は①層出土品には比較的成品が多く含まれているが、②層以下では、ほとんどが未成品である。

溝から出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、高坏形土器、ジョッキ形土器のほか、紡錘車、分銅形土製品である。石器は石庖丁、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、石鎌、叩き石、台石、砥石、などである。各層からの出土状況は以下のとおりである。なお、トレンチ内から出土した土器、石器は出土層位が特定できないため、層位不明品として扱っている。

〔弥生土器〕

①層出土品：138～140、143、146、148、156、165、168、171

②層出土品：135～137、141、150、152～155、157、162、166、174、176、180、181、185

③層出土品：134、147、149、151、161、167、172、175、177、178、182、186

④層出土品：142、158、179

層位不明品：144、145、159、160、163、164、169、170、173、183、184、187、188

〔石器〕

①層出土品：194、202、205、206、210、211、217、221～223、225

②層出土品：193、196～199、201、202、203、204、207～209、215、216、218～220、224

③層出土品：190、195

④層出土品：189、212、213

層位不明品：191、192、200、214

出土遺物（第261～268図、図版47・48）

134～150は甕形土器。134～146は折曲口縁で、口縁端面に刻目を施すもの（134～137・142・144）、頸部に凸帯文を施すもの（134～136・138・144～146）がある。147は弥生時代前期前半の甕形土器で、胴上位に削り出しによる段をもつ。148～150は底部で、くびれをもつ上げ底となる。151～172は壺形土器。151～162は広口壺で、口縁端面に凹線文を施すもの（155～157）、斜格子目文を施すもの（158・159）、山形文を施すもの（160）、刻目を施すもの（162）がある。163～167は頸肩部片。164は凹線文と刻目、刺突文が組み合うもので、広島地方（備後）からの搬入品である。168～172は胴底部。168は「ノ」の字状文を2列、170は肩部に穿孔（焼成後）を施す。

173～183は高坏形土器。175～178は口縁端部を内外方に拡張し、口縁上端面から穿孔する（176～178）。184は台形状土製品の底部、185はジョッキ形土器の把手部である。186・187は土製の紡錘車で、187は転用品と考えられる。188は分銅形土製品で、刺突文を施す。

189～192は石庖丁である。189・190は敲打段階の未成品で、191・192は石庖丁製作にかかる原材と考えられる。193～207は扁平片刃石斧である。193～196は成品で、他の石器は未成品である。197～199・203・204は研磨段階、200～202は粗割段階、205・206は敲打段階のものである。なお、207は扁平片刃石斧製作にかかる原材と考えられる。208～219は柱状片刃石斧である。208は成品で、その他は未成品である。210は研磨段階、それ以外はすべて粗割段階のものである。220は石鎌の未成品で、

敲打段階の未成品である。221は叩石、222は台石、223は砥石、224、225は器種不明品である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

S D401（第260図、図版42）

4区中央部、C33～B43区に位置する東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。発掘調査時は第IV層上面まで重機及び手作業により掘削をし、第IV層上面にて精査をおこなった結果、東西方向に土器が点在して出土した。この時点では溝の平面プランは明確ではなく、遺物のみを取り上げたが、その後、整理作業の段階で、土層壁や各遺構の検出状況などから溝の存在を確認した。そのため、溝S D401は調査壁の土層観察及び、S D402掘削時に設定したベルトの土層観察に推定範囲を第234図に掲載した。土層観察により、第IV層上面からの掘り込みであり、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長42.0m、幅5～7m、深さ30cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黄灰色土である。遺物は埋土中より完形品を含む弥生土器と石器が出土した。出土した弥生土器の中には、搬入品や外来的要素の強い土器が含まれている。また、石器は大半が未成品または石器素材である。

溝から出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、ミニチュア品である。この中には、搬入品（235：備後）と外来系土器（227・231・236）がある。石器は石庖丁、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、石錘、石鏃である。

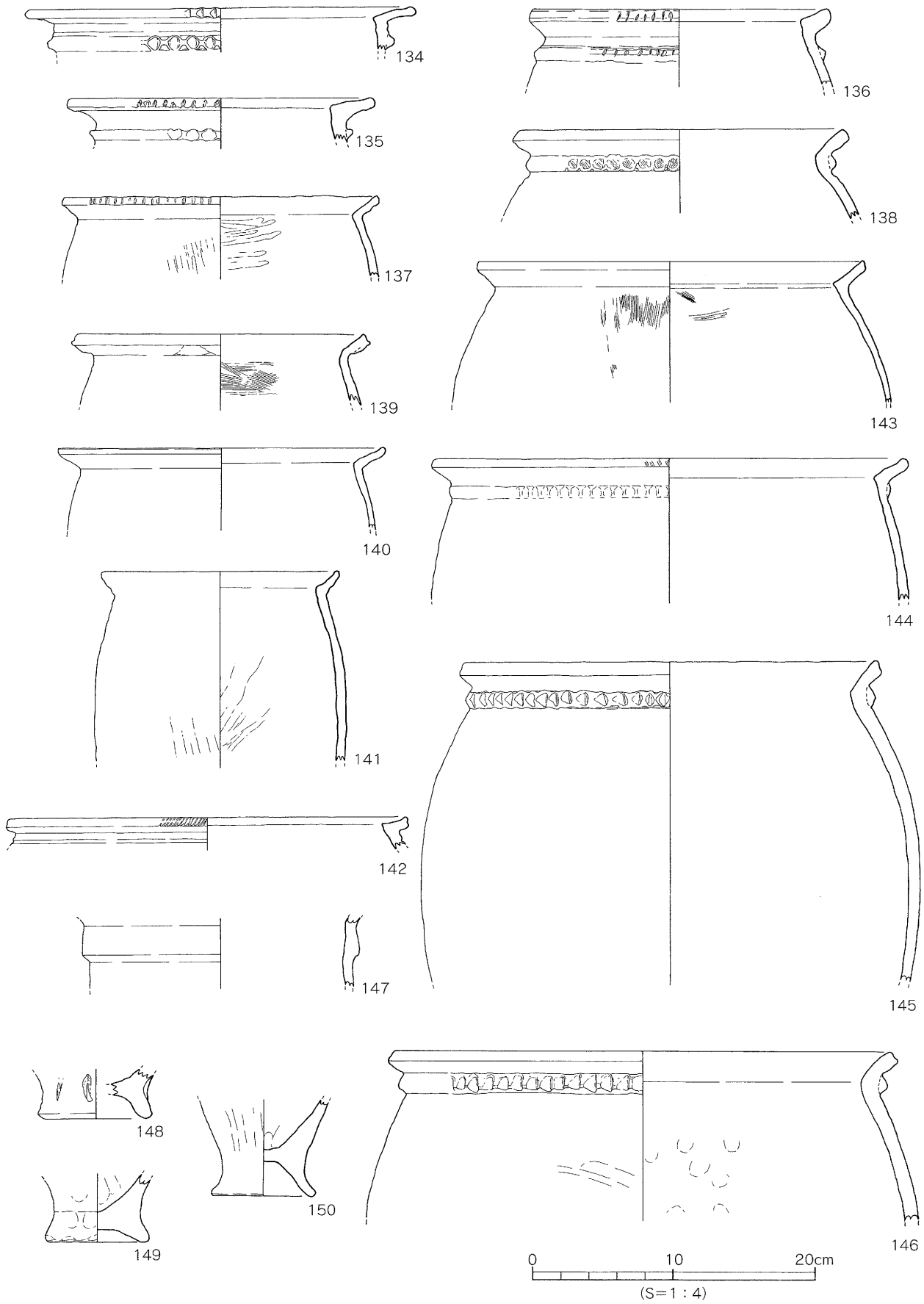
出土遺物（第269～272図、図版49）

226～231は壺形土器。226～228は長頸壺で、227は口頸部に凹線文を施し、外面には赤色顔料が付着する。229～231は複合口縁壺。231は口縁部に円形浮文を貼り付ける。233～235は鉢形土器。235は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文4条と部分的に竹管文2列を施す。肩部の張りは強く、肩胴部境付近にも凹線文3条と部分的に竹管文2列を施す。肩部外面はヨコ方向、胴部にはタテ方向のヘラミガキ調整を施す。内面は胴中位にはヨコ方向、胴下位にはタテ方向のヘラケズリ調整を施す。広島地方（備後）からの搬入品である。232は近現代遺物か。236～241は高坏形土器。236の柱部上位には凸帯文が巡り、柱部には三角形状の透かしを施す。外面には赤色顔料が付着する。242はミニチュア品、243～249は底部である。

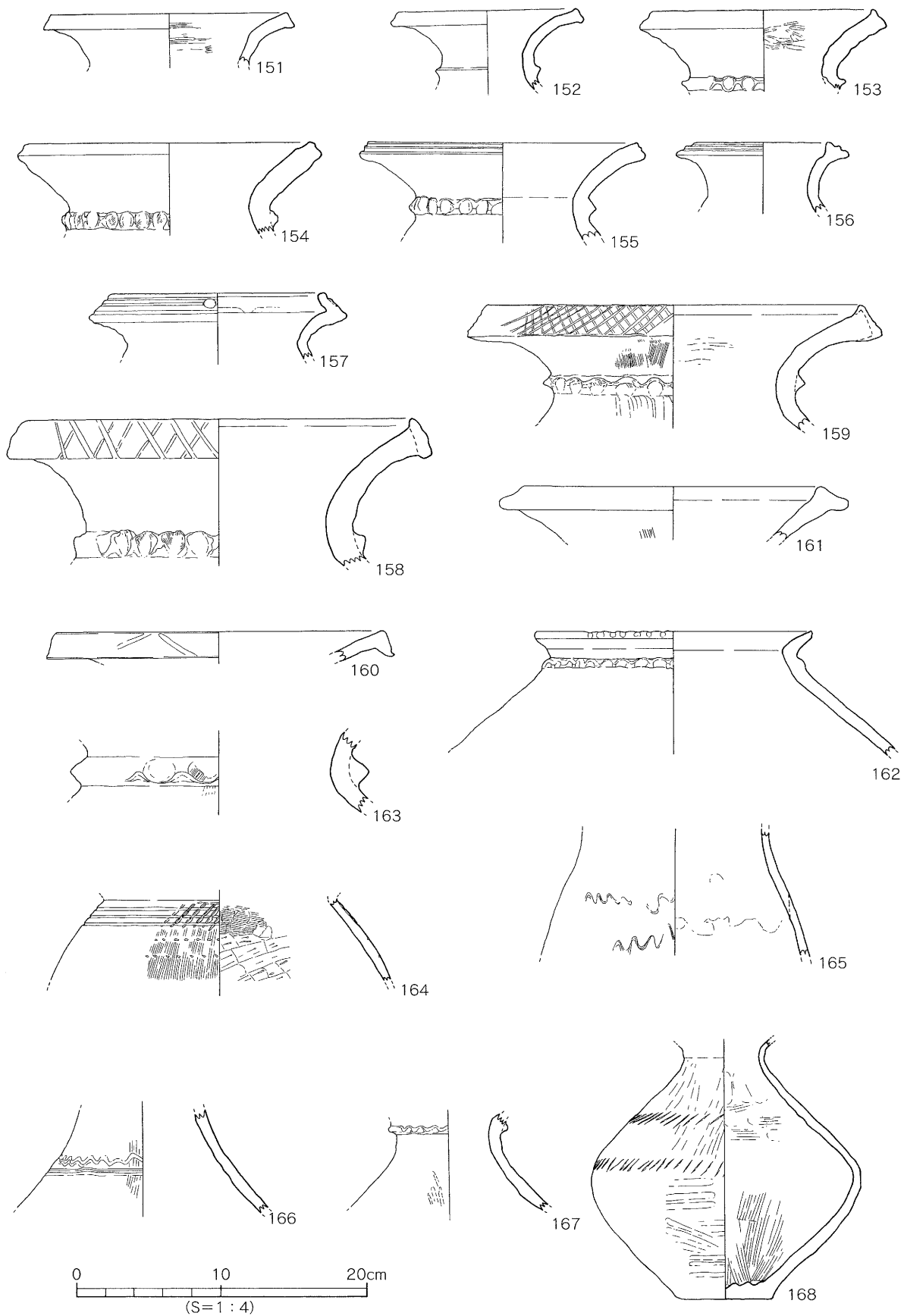
250～258は石庖丁である。250～252は成品で、253は敲打段階、254は粗割段階の未成品である。なお、255～258は石庖丁製作にかかる原材と考えられる。使用する石材は、254のみサヌカイトで、その他は緑色片岩である。259～262は扁平片刃石斧である。259は成品で、260は敲打段階、261は打裂段階、262は研磨段階の未成品である。使用する石材は、すべて緑色片岩である。263～268は柱状片刃石斧である。263は成品の破損品、264～268は粗割段階の未成品である。

269は砂岩製の石錘、270は層界岩製の有茎式磨製石鏃である。271～273は石鏃の未成品であり、使用する石材は、すべて赤色珪質岩である。

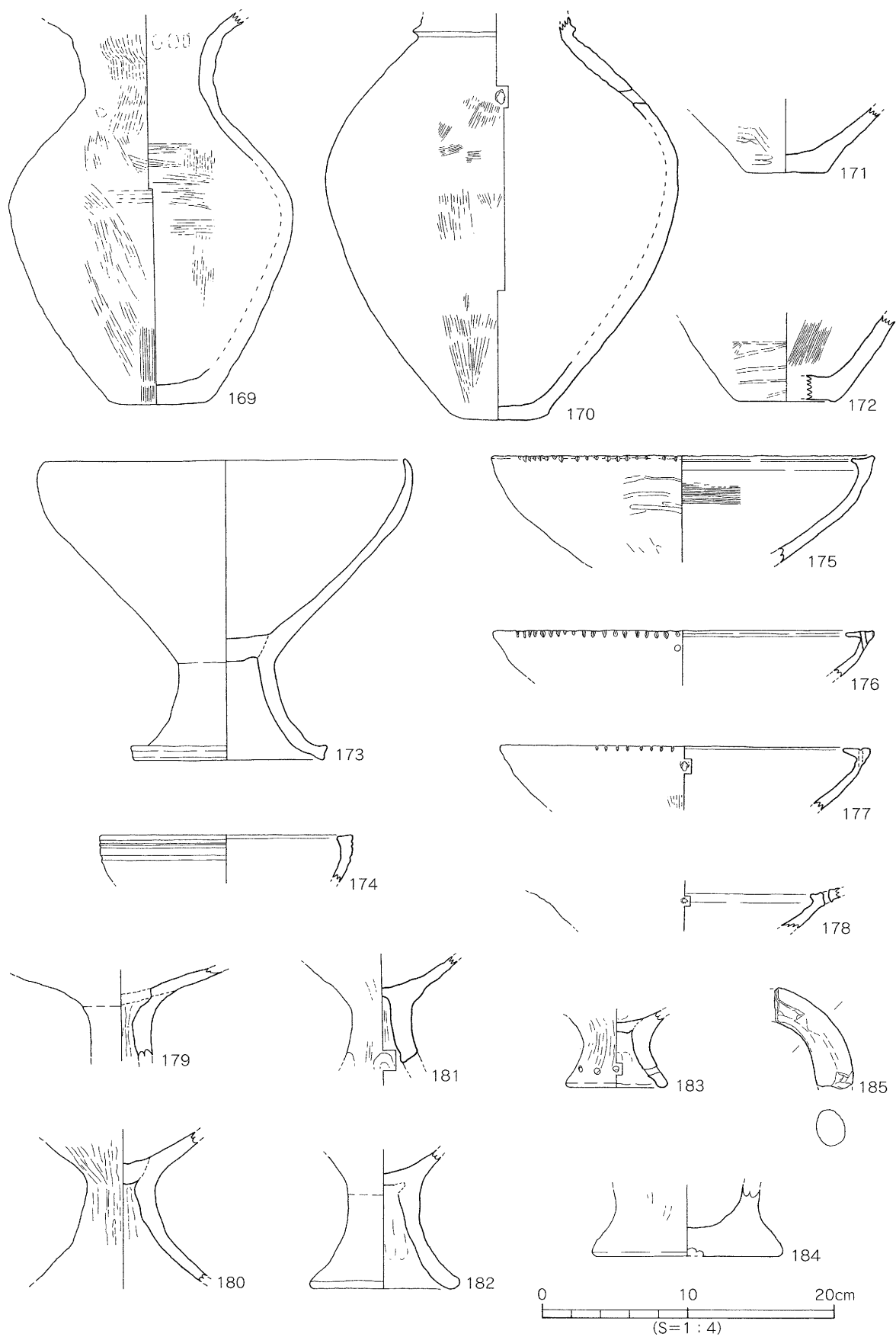
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



第261図 SD402出土遺物実測図(1)

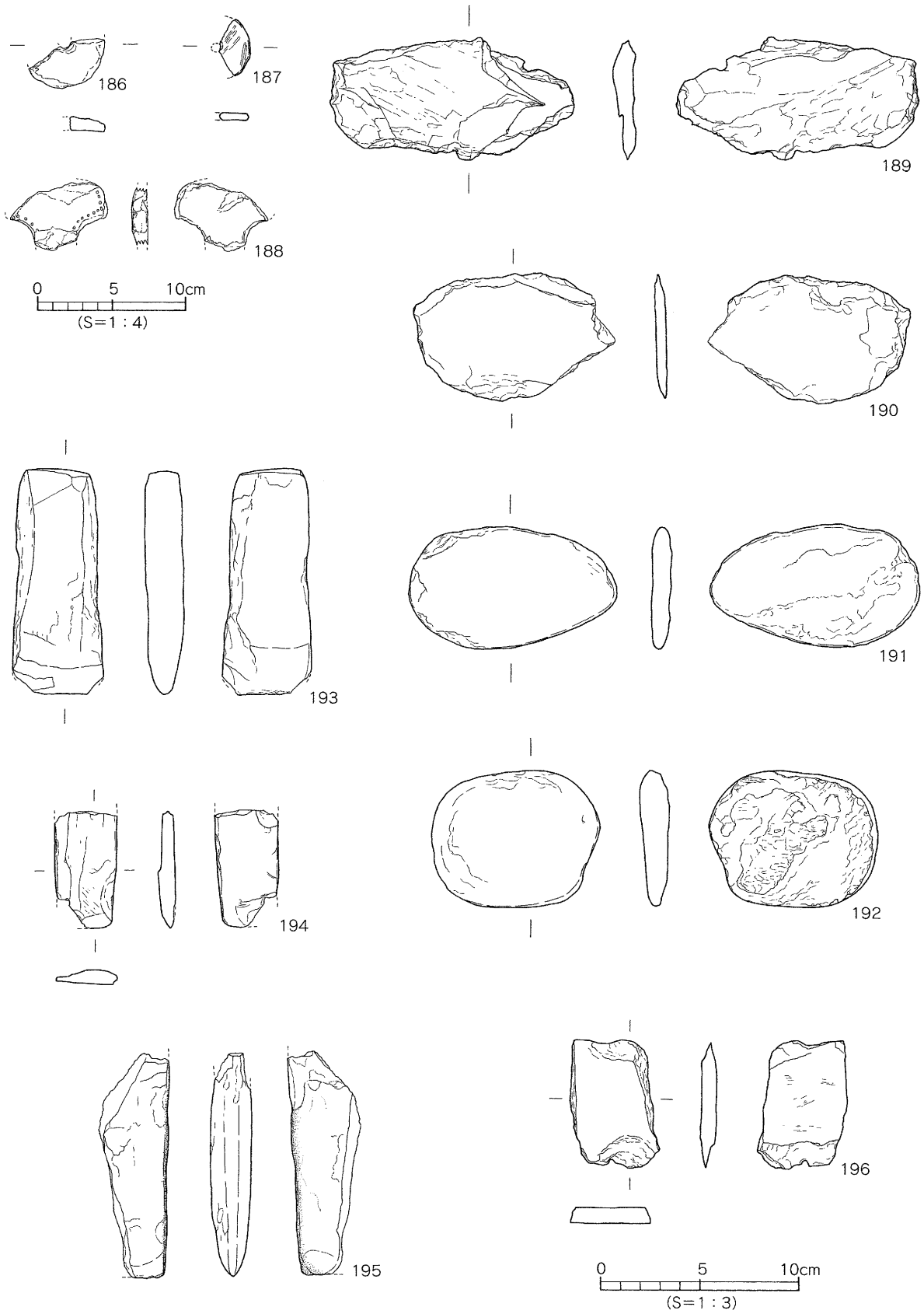


第262図 SD402出土遺物実測図(2)

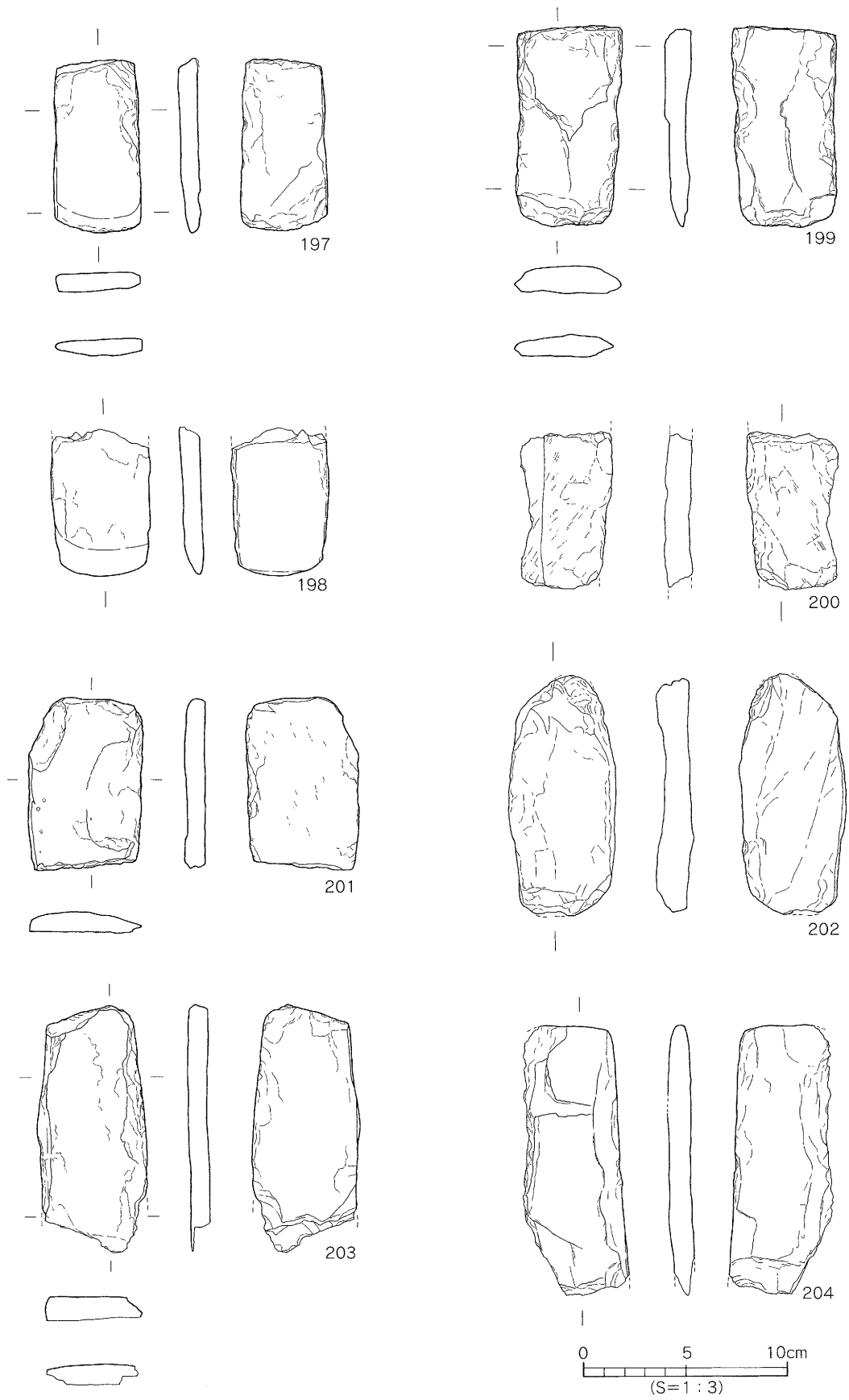


第263図 SD402出土遺物実測図 (3)

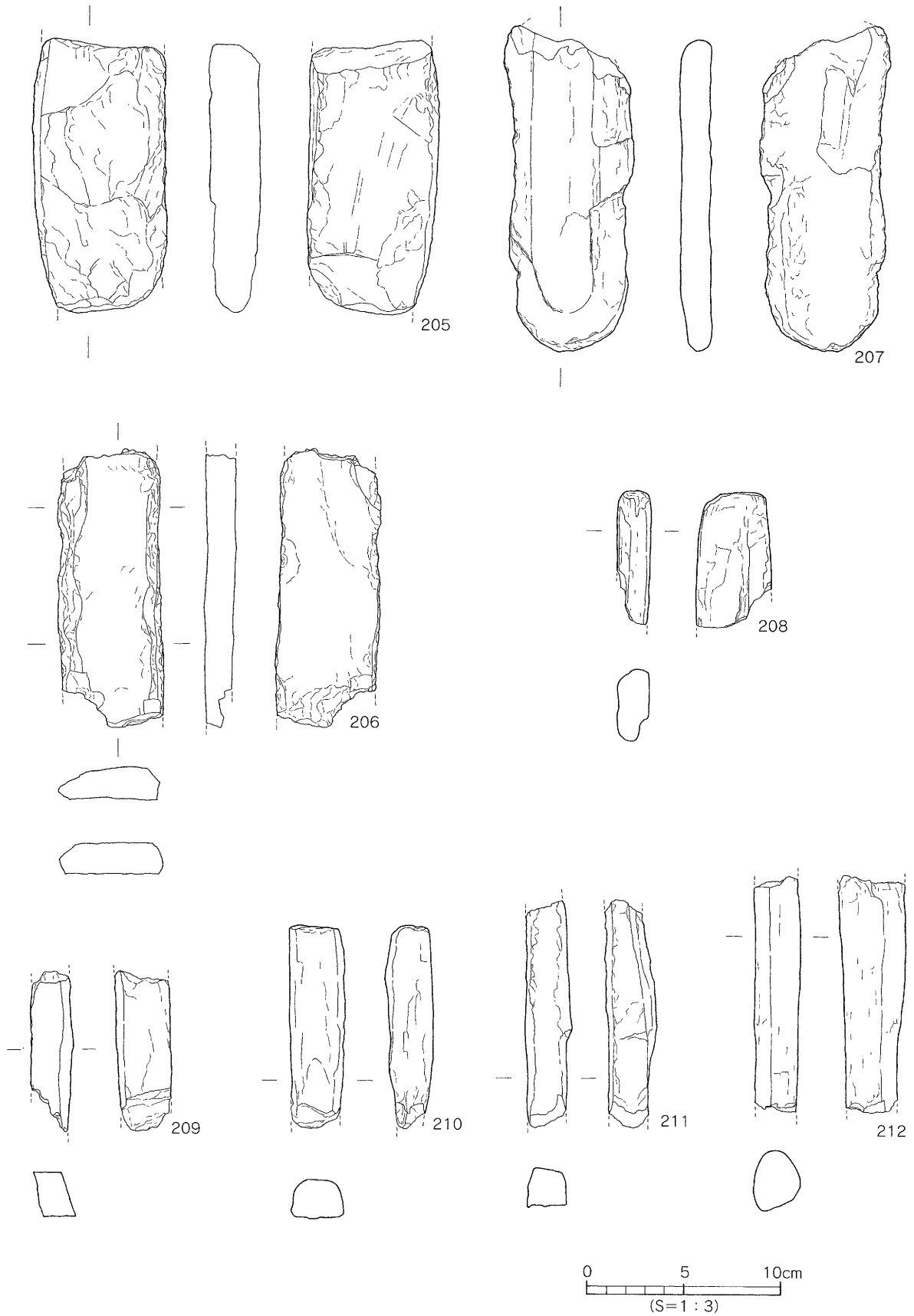
弥生時代の遺構と遺物



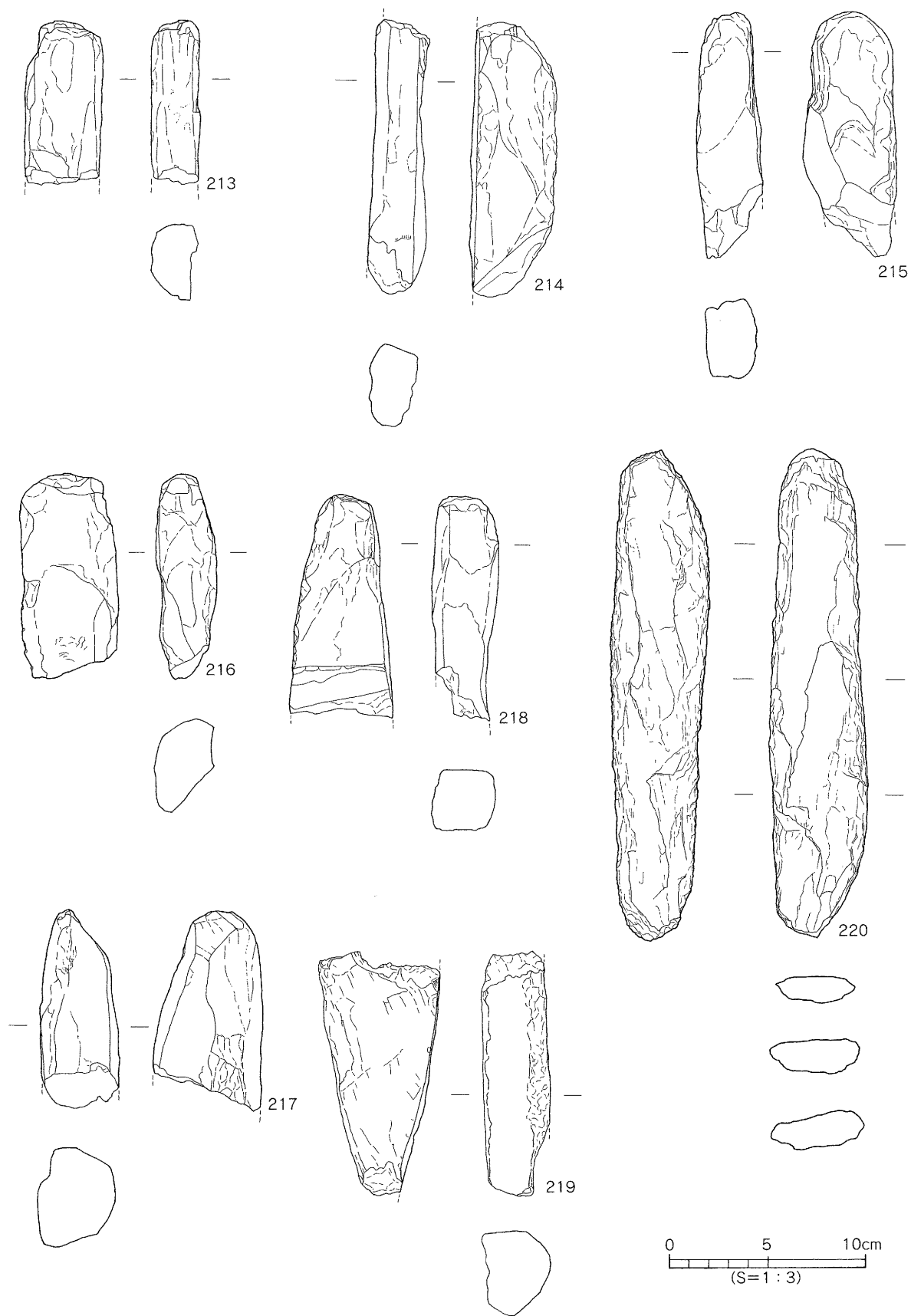
第264図 SD402出土遺物実測図(4)



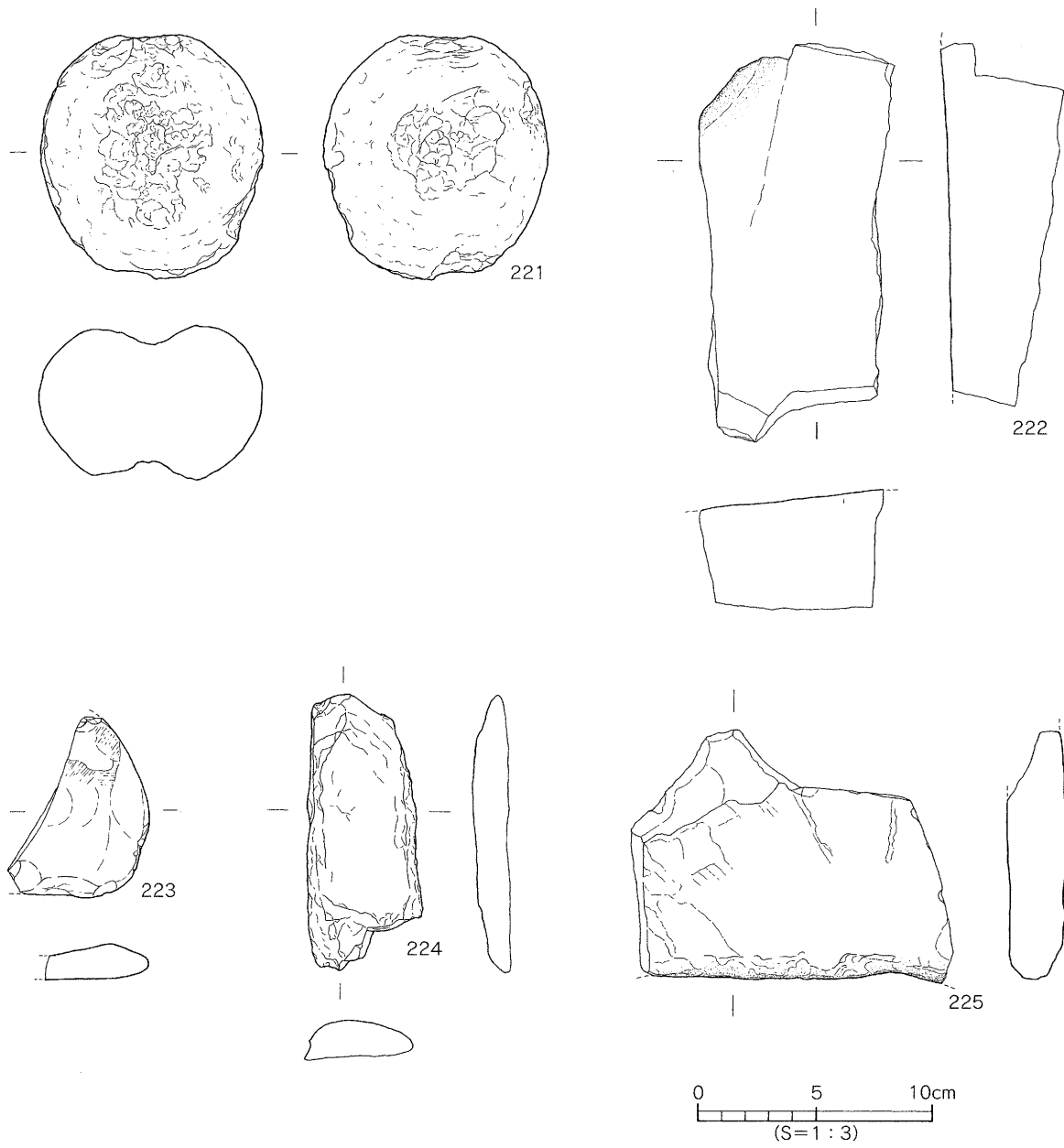
第265図 SD402出土遺物実測図 (5)



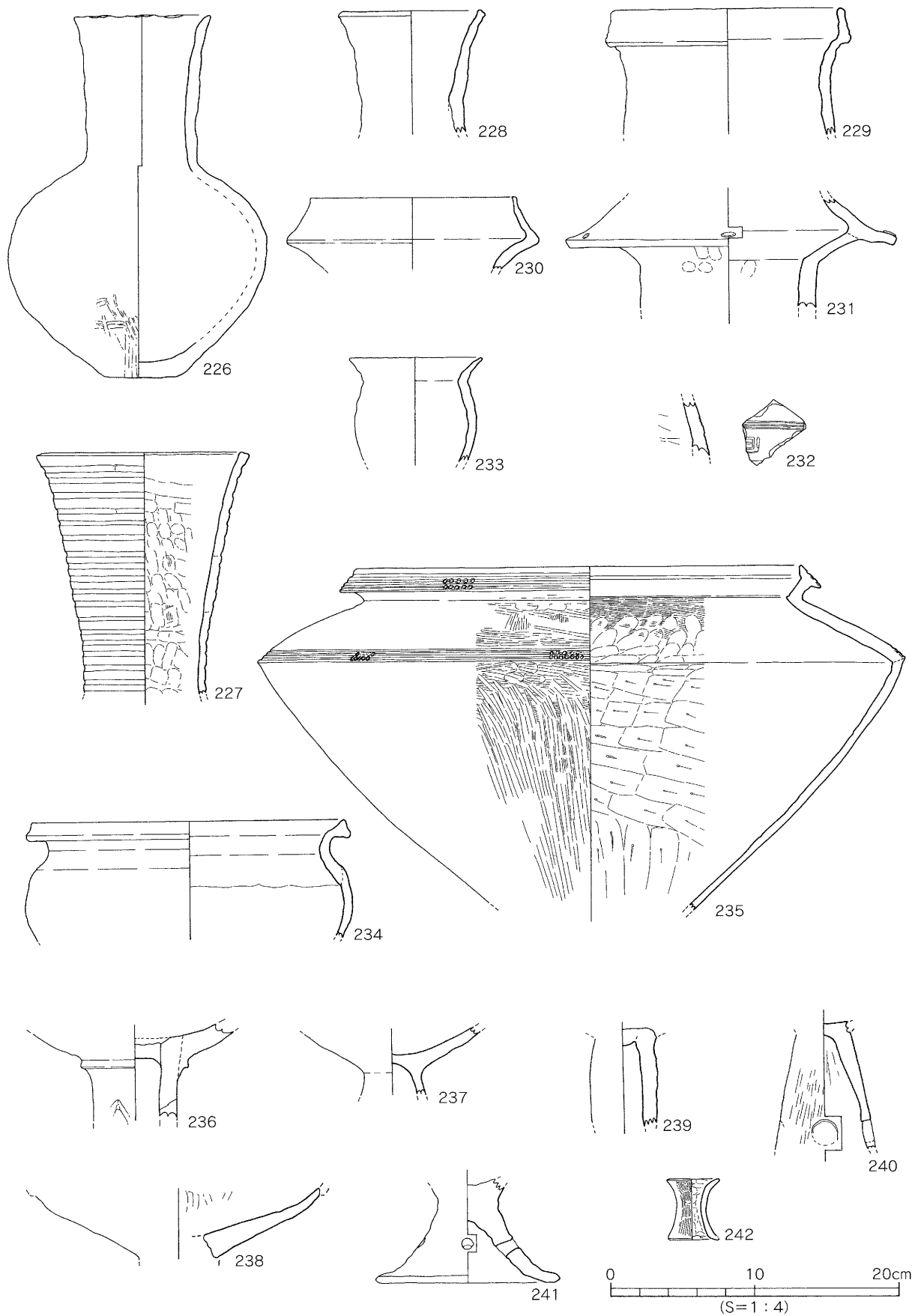
第266図 SD402出土遺物実測図 (6)



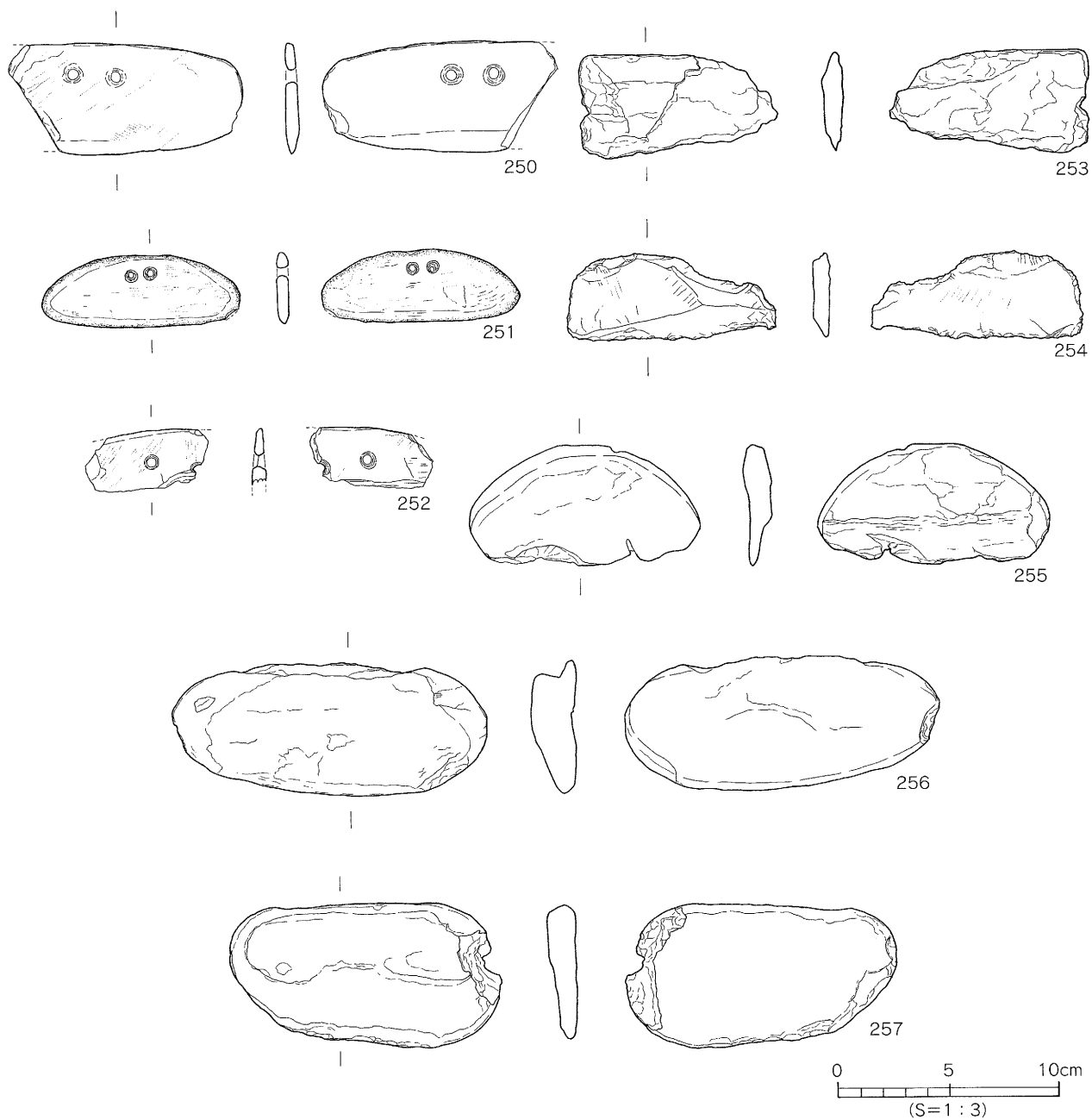
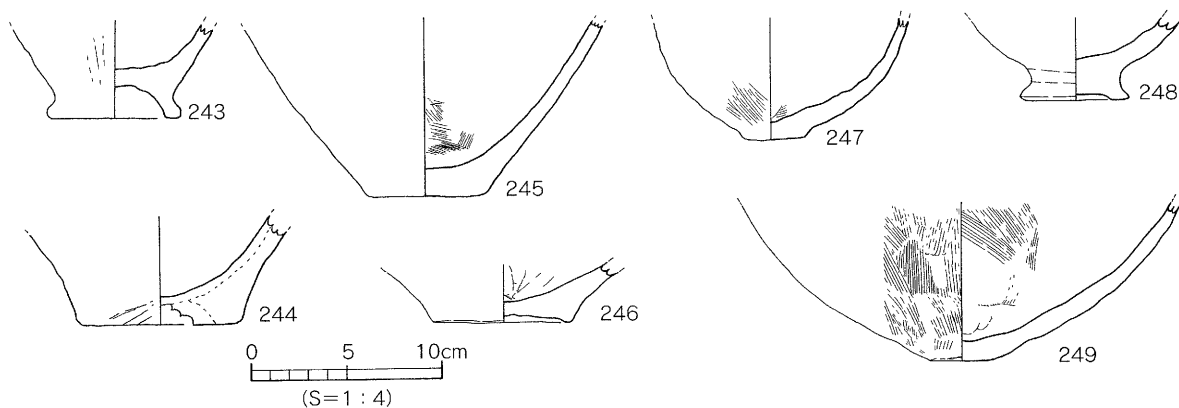
第267図 SD402出土遺物実測図 (7)



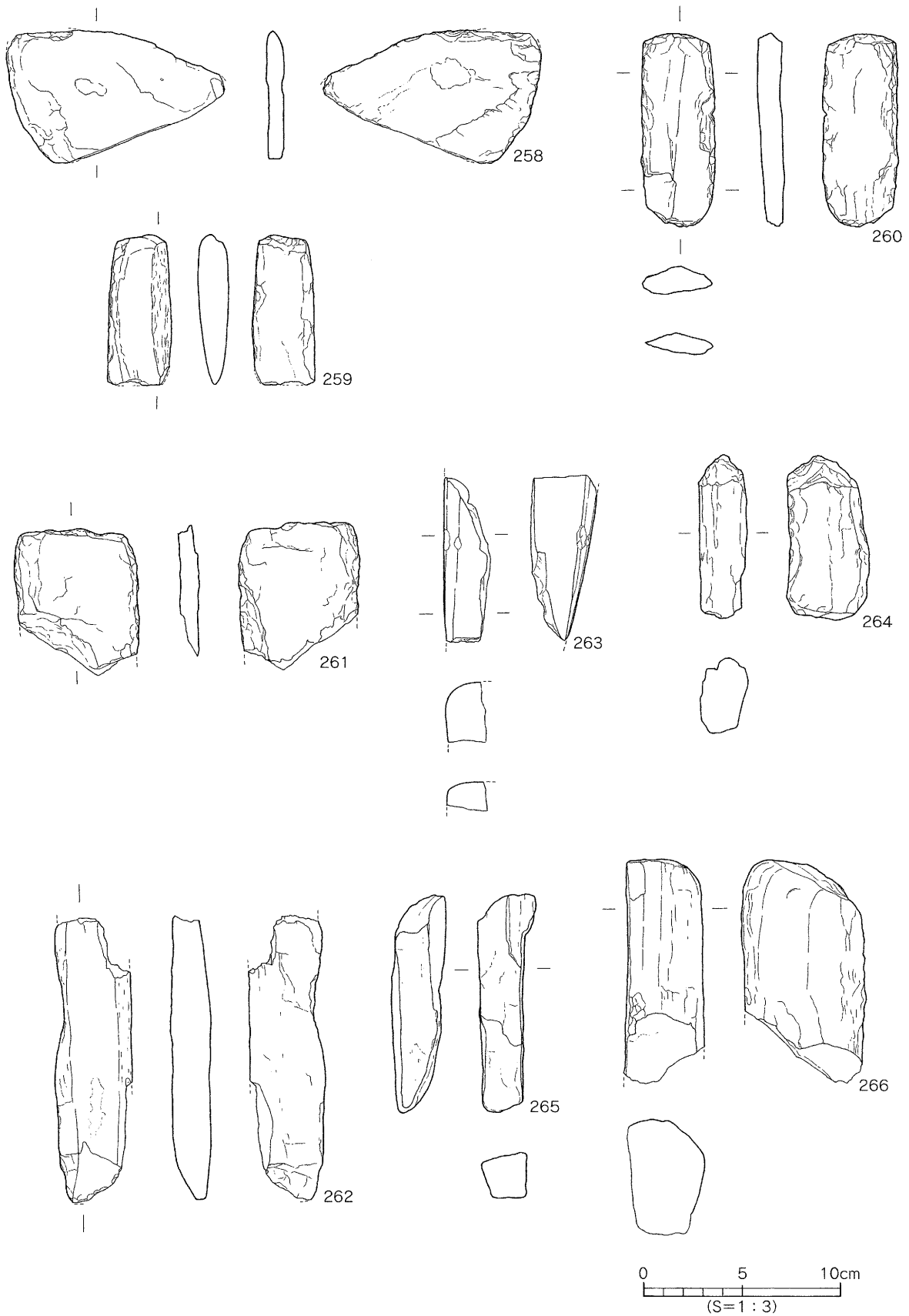
第268図 SD402出土遺物実測図(8)



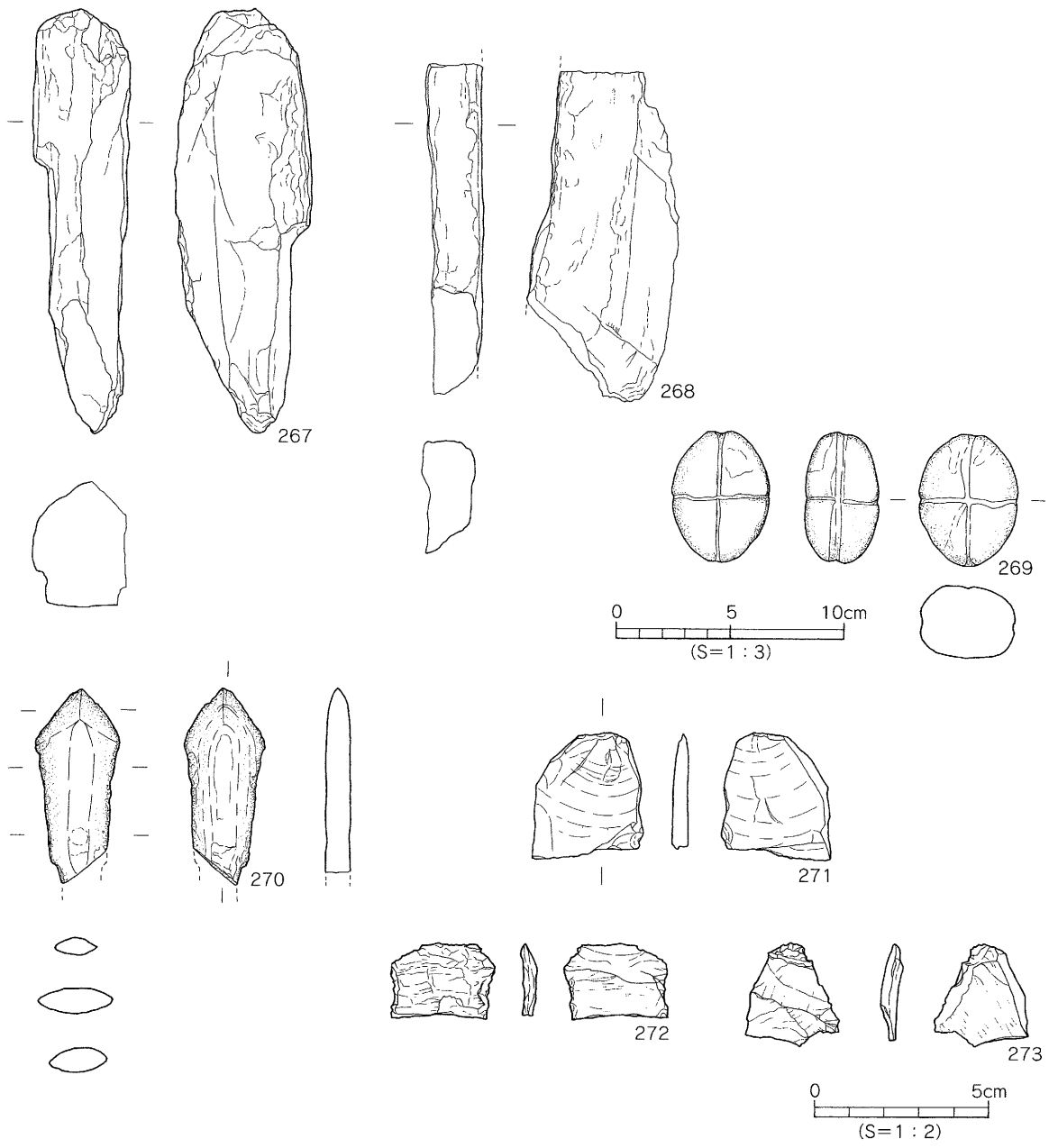
第269図 SD401出土遺物実測図 (1)



第270図 SD401出土遺物実測図(2)



第271図 SD401出土遺物実測図 (3)



第272図 SD401出土遺物実測図 (4)

S D101 (第273図)

1区北西部、A・B1～A2区に位置する東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、第IV層上面から掘り込まれた溝である。規模は検出長3.40m、幅1.68m、深さ44cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は3層に分層され、1層黒褐色土、2層黒褐色土（灰白色微砂混入）、3層黒褐色土（灰白色砂混入）である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片とスクレイパーが出土した。

出土遺物 (第273図)

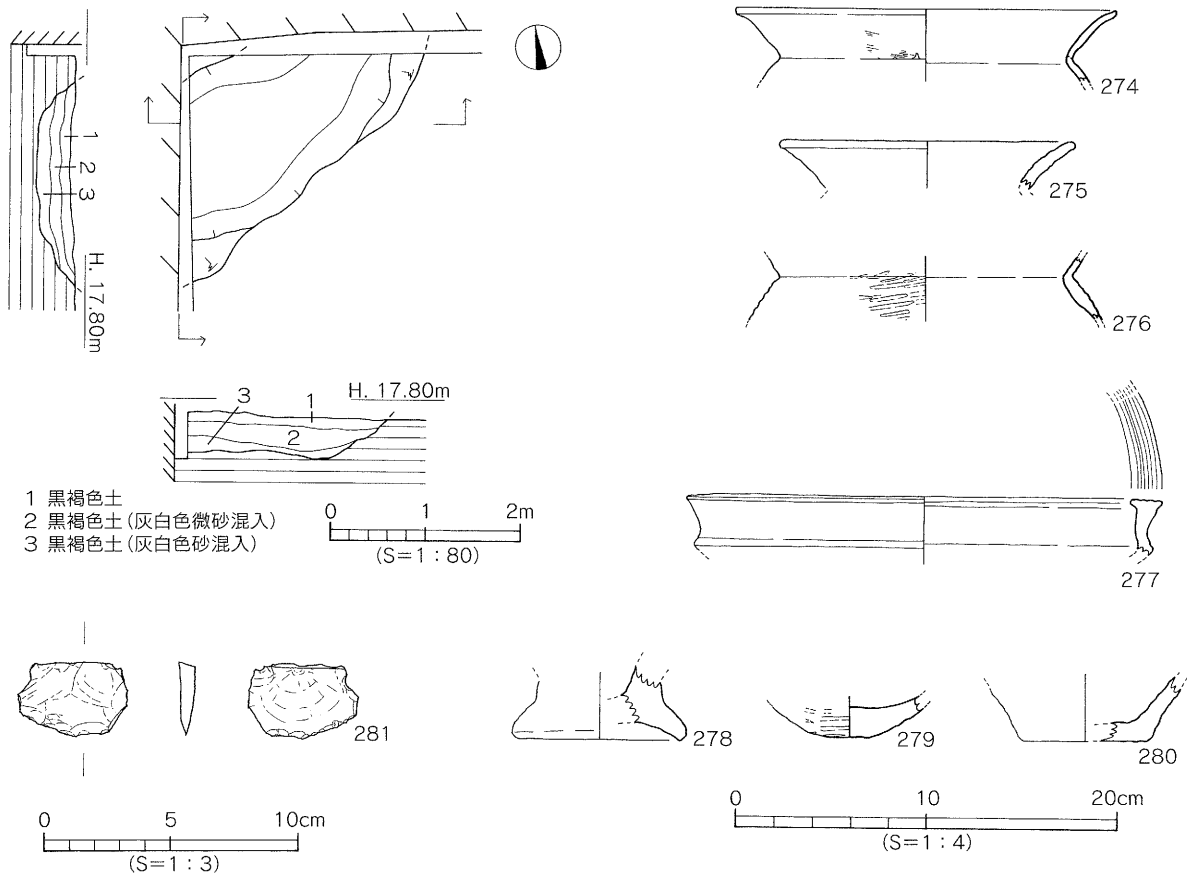
274～276は甕形土器で、276の外面にはタタキ調整を施す。277は高坏形土器（外来系）で、口縁端部は上下方に拡張し、口縁端面に沈線文3条を施す。278・279は甕形土器、280は壺形土器の底部である。281はサヌカイト製のスクレイパーである。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半から末とする。

S D201 (第274図)

2B区西側、B・C14区に位置する東西方向の溝で、溝中央部はS P243に切られる。溝両端は消失する。第VI①層上面で検出した。規模は検出長5.00m、幅0.76m、深さ16cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗灰黄色土単層である。溝底面にて小ピット3基を検出した。ピット埋土はすべて暗灰黄色土である。溝底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS D204と類似することから、概ね弥生時代中期後半から後期前半とする。



第273図 SD101測量図・出土遺物実測図

S D202 (第274図)

2 B区中央部、B・C17区に位置する南北方向の溝である。溝西側はS B204、東側はS B209、S D204を切り、溝両端は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であり、第IV層が覆う。規模は検出長6.76m、幅1.64m、深さ16cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。溝底面は南から北に向けて傾斜する(比高差8cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：第IV層が覆うことと切り合いから、概ね弥生時代後期前半とする。

S D204 (第274図)

2 B区中央部、B・C17区に位置する南北方向の溝で、S D202底面にて検出した。規模は検出長6.52m、幅0.72m、深さ8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗灰黄色土単層である。溝底面は南東から北西に向けて傾斜する(比高差6cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS D201に酷似することから、概ね弥生時代中期後半から後期前半とする。

S D301 (第274図)

3 A区東側、D24～B25区に位置する南北方向の溝である。溝北側はS P316に切られ、南側は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であり、第IV層が覆う。規模は検出長7.16m、幅0.66m、深さ12cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄色土単層である。溝底面は北から南に緩傾斜する(比高差4cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：第IV層が覆うことから、概ね弥生時代後期前半以前とする。

S D302 (第274図)

3 A区中央部、B・C24区に位置する南北方向の溝で、溝中央部はS P312に切られる。第VI①層上面で検出した。規模は検出長5.96m、幅0.36m、深さ8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

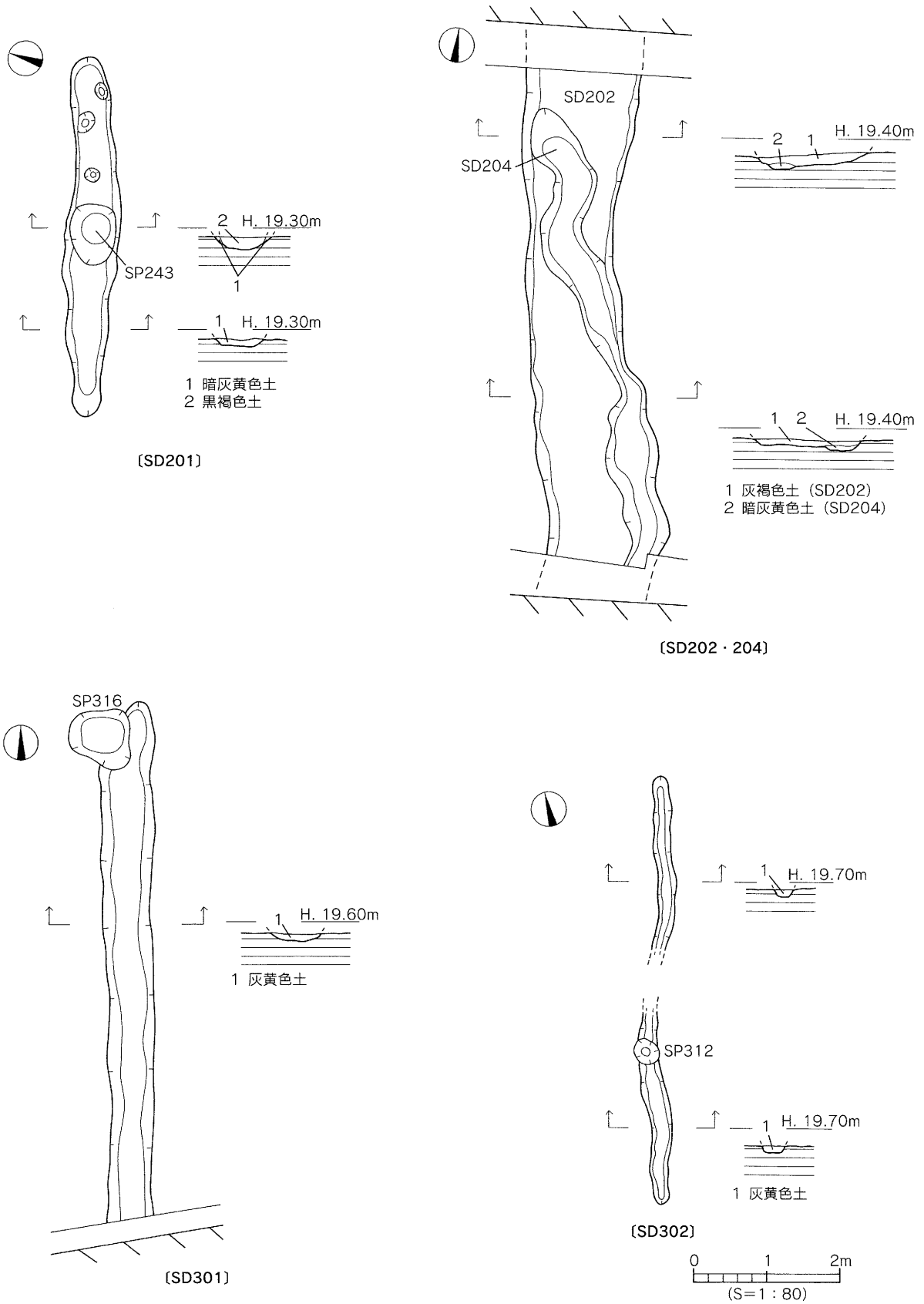
時期：埋土がS D301と酷似することから、概ね弥生時代後期前半以前とする。

(4) 土坑

1) 長方形土坑

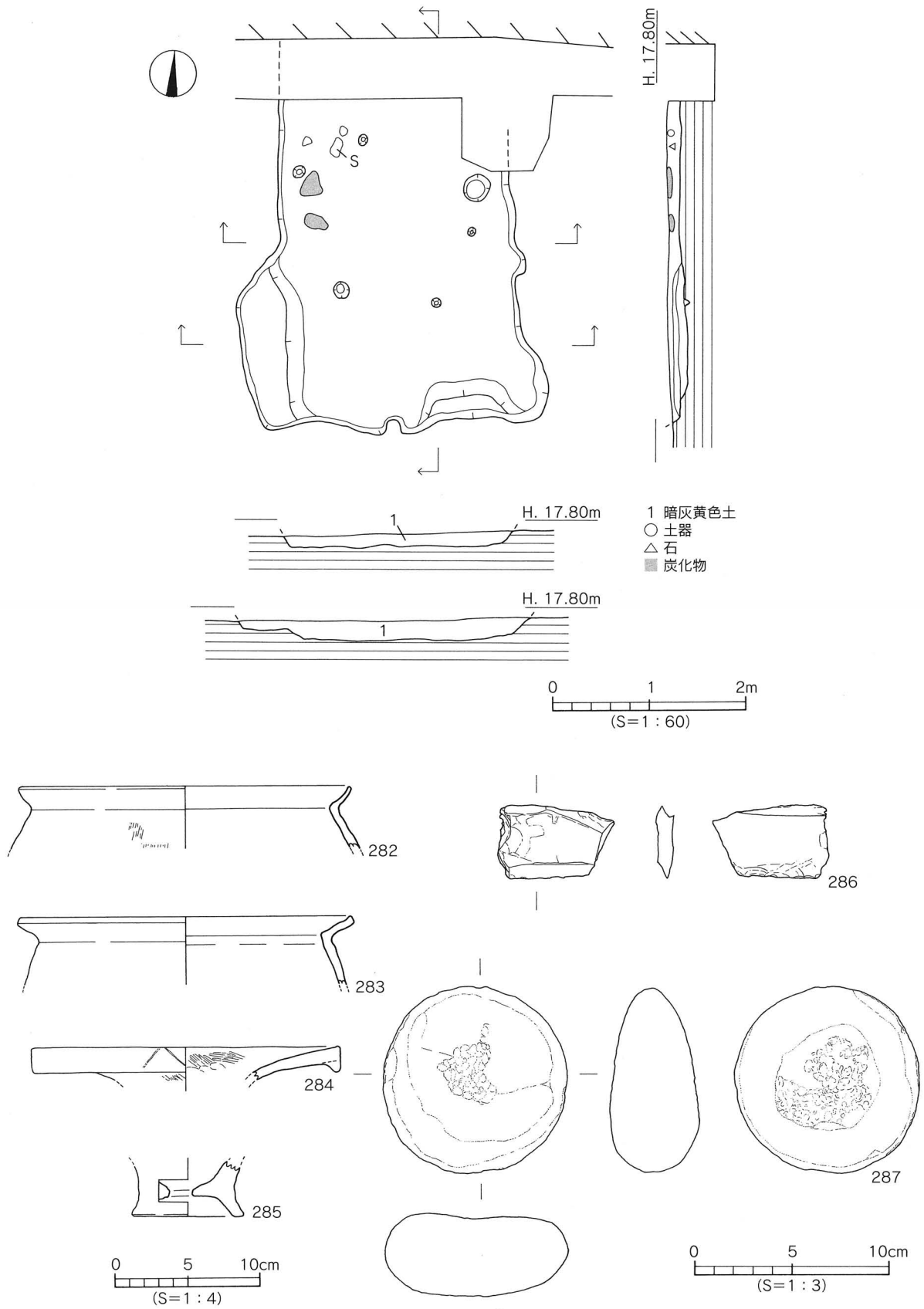
S K101 (第275図)

1区東側、A3～B4区に位置し、北側は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であり、第III①層が覆う。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長3.48m、東西検出長3.12m、深さ22cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑南西部はテラス状となる。埋土は暗灰黄色土単層である。土坑底面から小ピット6基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径10～25cm、深さ10cmを測る。ピット埋土はすべて暗灰黄色土である。土坑内からは、埋土上位から弥生土器片と石器のほか炭化物が出土した。



第274図 SD201・202・204・301・302測量図

弥生時代の遺構と遺物



第275図 SK101測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第275図)

282・283は甕形土器、284は壺形土器である。282・283は折曲口縁で、口縁部はやや内湾する。284は広口壺で、口縁端面に山形文を施す。285は所謂甗形土器で、甕形土器の転用品である。286は石庖丁または石鎌の未成品である。287は敲石で、両面に敲打痕を残す。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半から後期初頭とする。

S K 204 (第276図)

2 B 区東側、B・C 20 区に位置し、南東部は S B 201 に切られる。第 VI ① 層上面で検出した。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長 2.75m、東西長 2.40m、深さ 15cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰黄色土である。土坑内から遺物の出土はない。

時期：S B 201 に切られることや埋土から、概ね弥生時代中期後半以前とする。

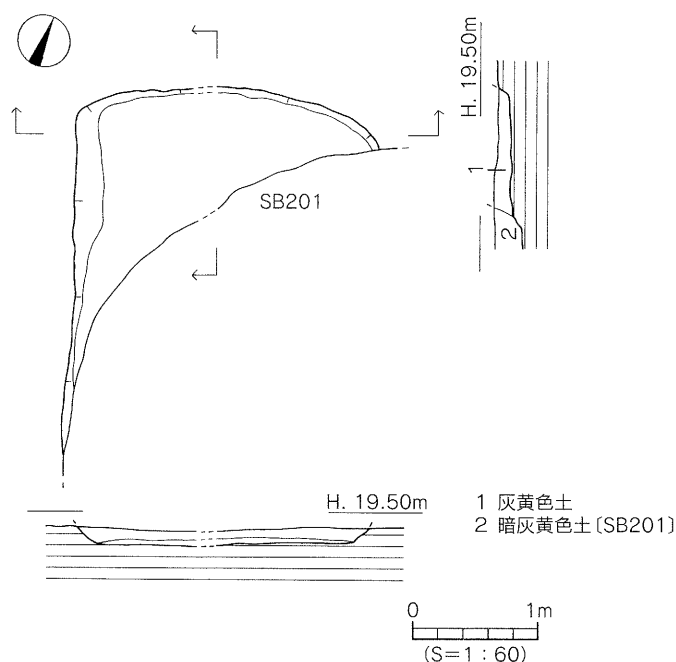
S K 302 (第277図)

3 A 区の南東部、C 25 区に位置する。第 VI ① 層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ 4.35m、幅 2.45m、深さ 30cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰黄色土単層である。土坑底面から小ピット 8 基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径 10~15cm、深さ 8cm を測る。土坑及びピット内からの遺物の出土はない。

時期：埋土が S K 204 に酷似することから、概ね弥生時代中期後半以前とする。

S K 306 (第277図)

3 A 区中央部北寄り、A・B 24 区に位置し、北側は調査区外に続く。第 VI ① 層上面での検出であり、第 IV 層で埋まる。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長 2.55m、東西長 2.20

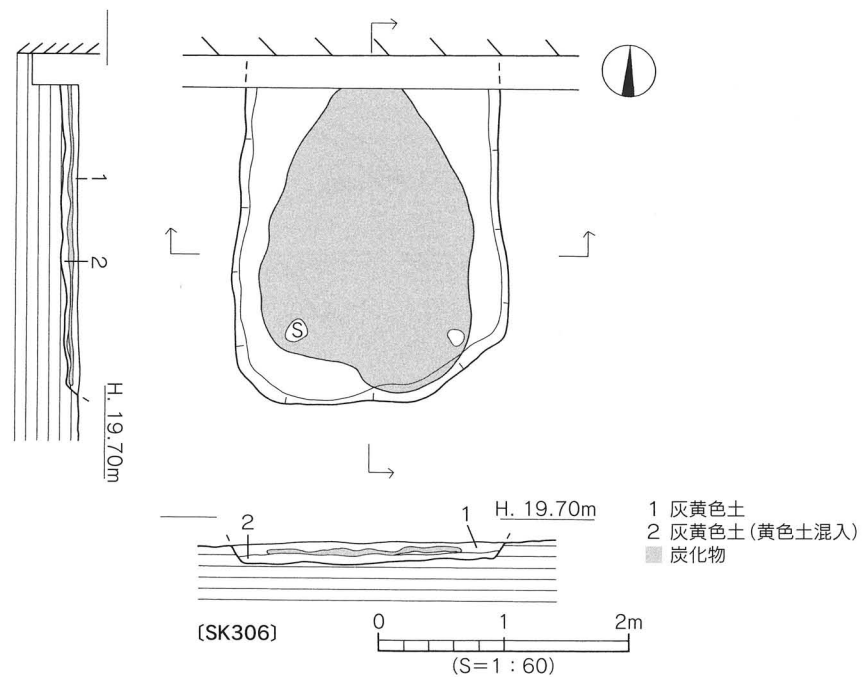
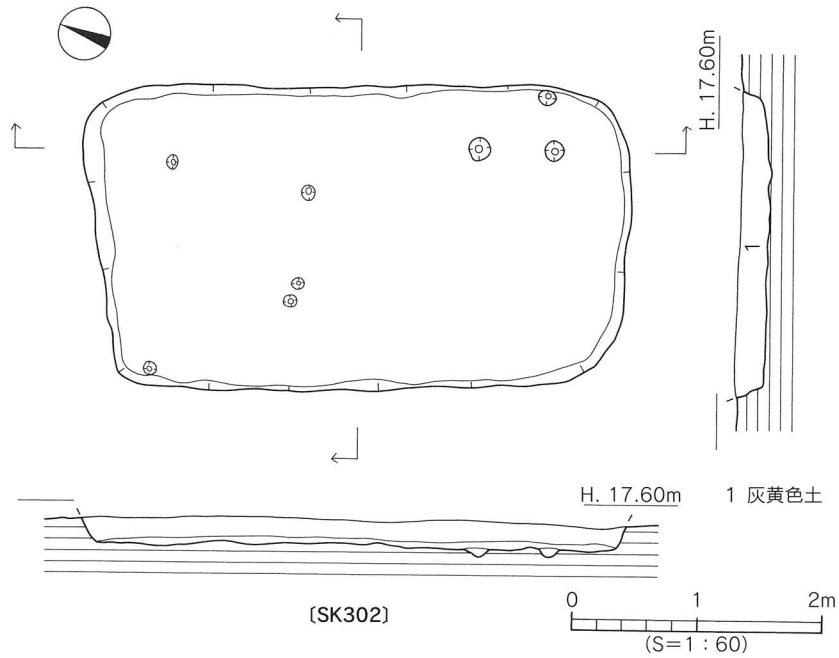


第276図 SK204測量図

弥生時代の遺構と遺物

m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、1層灰黄色土、2層灰黄色土（黄色土混入）である。2層上面にて1.65×2.40mの範囲に炭化物を検出した。遺物は土坑埋土1層中より、弥生土器片と径10～15cm大の石が出土した。

時期：埋土と検出状況から、概ね弥生時代後期前半とする。



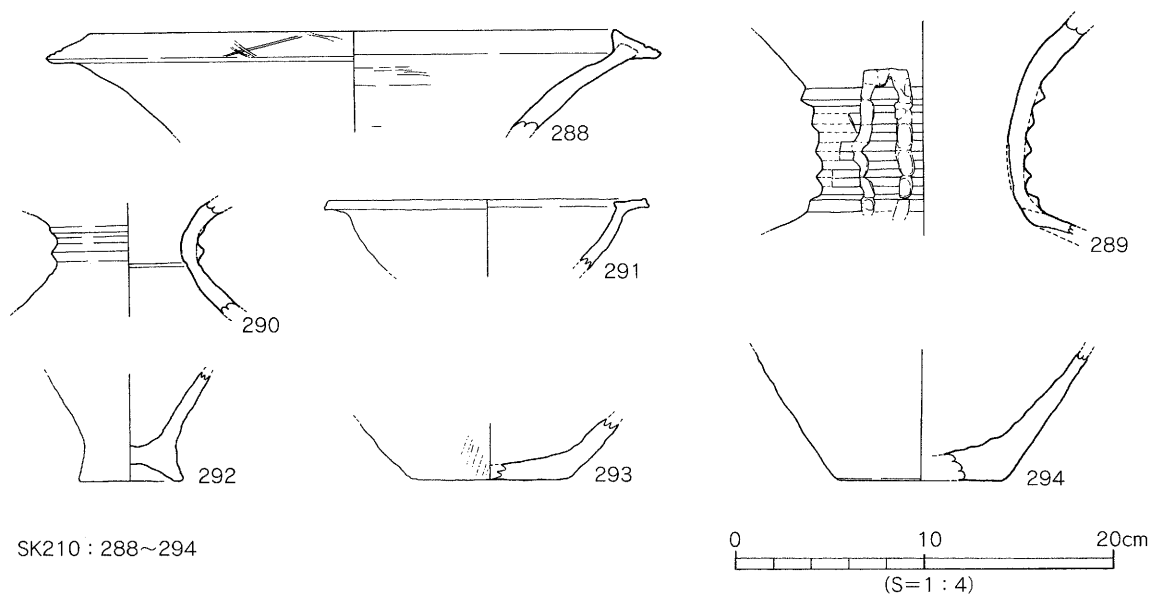
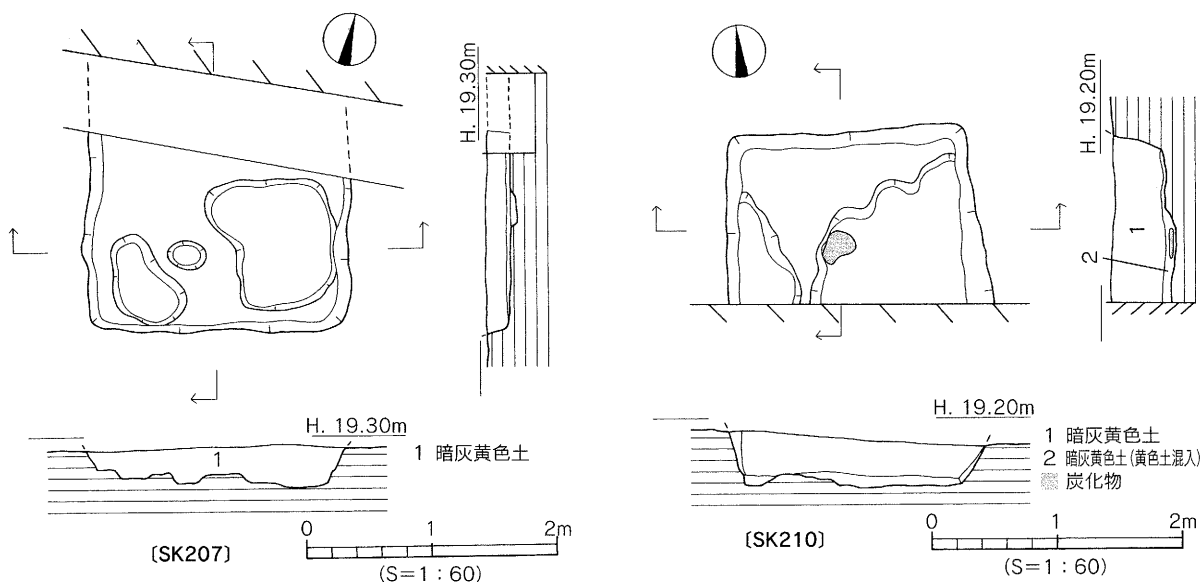
第277図 SK302・306測量図

2) 方形土坑

S K207 (第278図)

2 B区西側、B14区に位置し、北側は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であり、第IV層が覆う。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西長2.15m、南北検出長1.55m、深さ35cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色土単層である。土坑底面から大小3基のピットを検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径0.23~1.00m、深さ8~15cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同じである。土坑及びピット内からの遺物の出土はない。

時期：検出状況と埋土から、概ね弥生時代中期後半から後期初頭とする。



第278図 SK207・210測量図・出土遺物実測図

S K210 (第278図)

2 A区西側、B 8区に位置し、南側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西長2.10m、南北長1.35m、深さ40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土(黄色土混入)である。土坑底面西側と東側には、長さ0.90~1.20m、幅0.60~1.50m、深さ8~10cmの凹みを検出した。遺物は1層中より弥生土器片、2層中より炭化物が出土した。

出土遺物 (第278図)

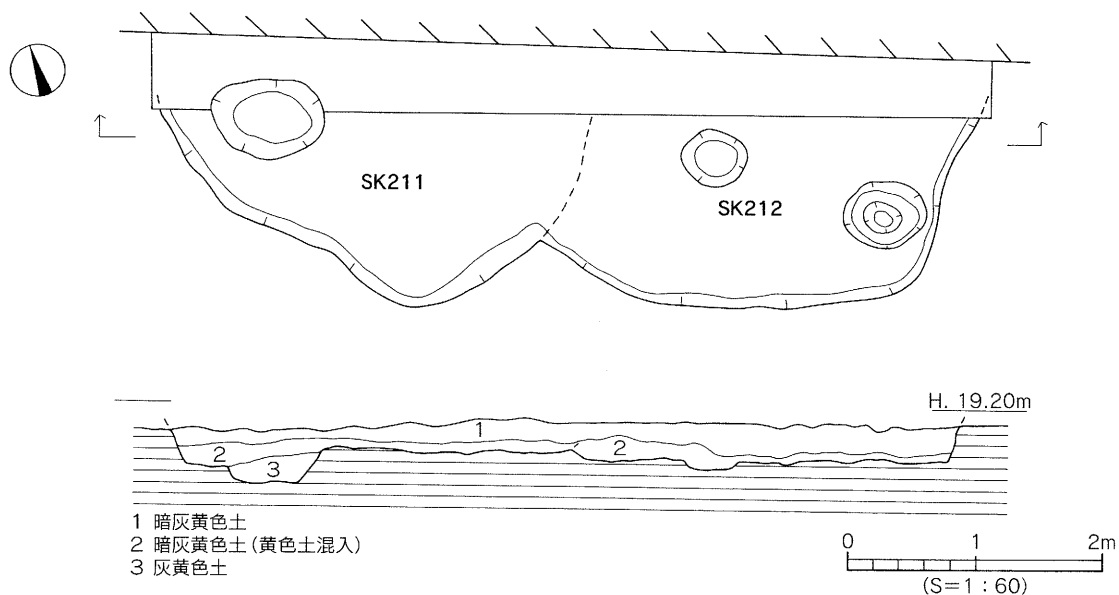
288~290は壺形土器。288は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に斜格子目文を施す。289・290は頸部片。289は断面三角形の凸帯文5条と、逆U字状の棒状浮文を貼り付ける。291は高坏形土器の坏部片で、口縁端部は内外方に拡張する。292は甕形土器の底部で、くびれをもつ上げ底となる。293・294は壺形土器の底部で、平底となる。

時期：出土した遺物の特徴から、弥生時代中期中葉とする。

S K211 (第279図)

2 A区中央部、B 8・9区に位置し、東側はS K212を切る。土坑北側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.15m、南北検出長1.75m、深さ26cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土(黄色土混入)である。土坑底面からピット1基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径60cm、深さ18cmを測る。ピット埋土は灰黄色土である。土坑及びピット内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K210に酷似することから、概ね弥生時代中期中葉以降とする。



第279図 SK211・212測量図

S K 212 (第279図)

2 A区中央部、B 9・10区に位置し、西側はS K 211に切られる。土坑北側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.00m、南北検出長1.55m、深さ27cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土(黄色土混入)である。土坑底面からピット2基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径45~55cm、深さ15cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同じである。ピット及び土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土と検出状況から、概ね弥生時代中期中葉以前とする。

S K 408 (第280図、図版42)

4区中央部、B 37・38区に位置する。南側はS D 402、東側はトレンチに切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西長3.05m、南北検出長2.75m、深さ14cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、1層灰黄色土、2層灰黄色砂質土である。土坑底面からピット1基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径13cm、深さ8cmを測る。ピット埋土は暗灰褐色土である。さらに、土坑底面北側にて、長さ2.10m、幅0.85m、深さ13cmを測る凹みを検出した。遺物は、1層中より弥生土器片のほか、分銅形土製品3点が出土した。

出土遺物 (第280図、図版50)

295は甕形土器の口縁部。折曲口縁で、頸部に押圧凸帯文を貼り付ける。296・297は壺形土器。296は口縁端面に凹線文2条を施す。298・299は甕形土器の底部で、上げ底となる。300~302は分銅形土製品。300は粘土紐の貼付により眉と鼻を表現し、表面に刺突文と穿孔、側面には刺突文2列を施す。301は粘土紐の貼付により眉と鼻を表現し、目は刺突文、耳は穿孔により表現されている。頭部には刺突文1列、側面には刺突文2列を施す。302は無文である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

S K 409 (第281図)

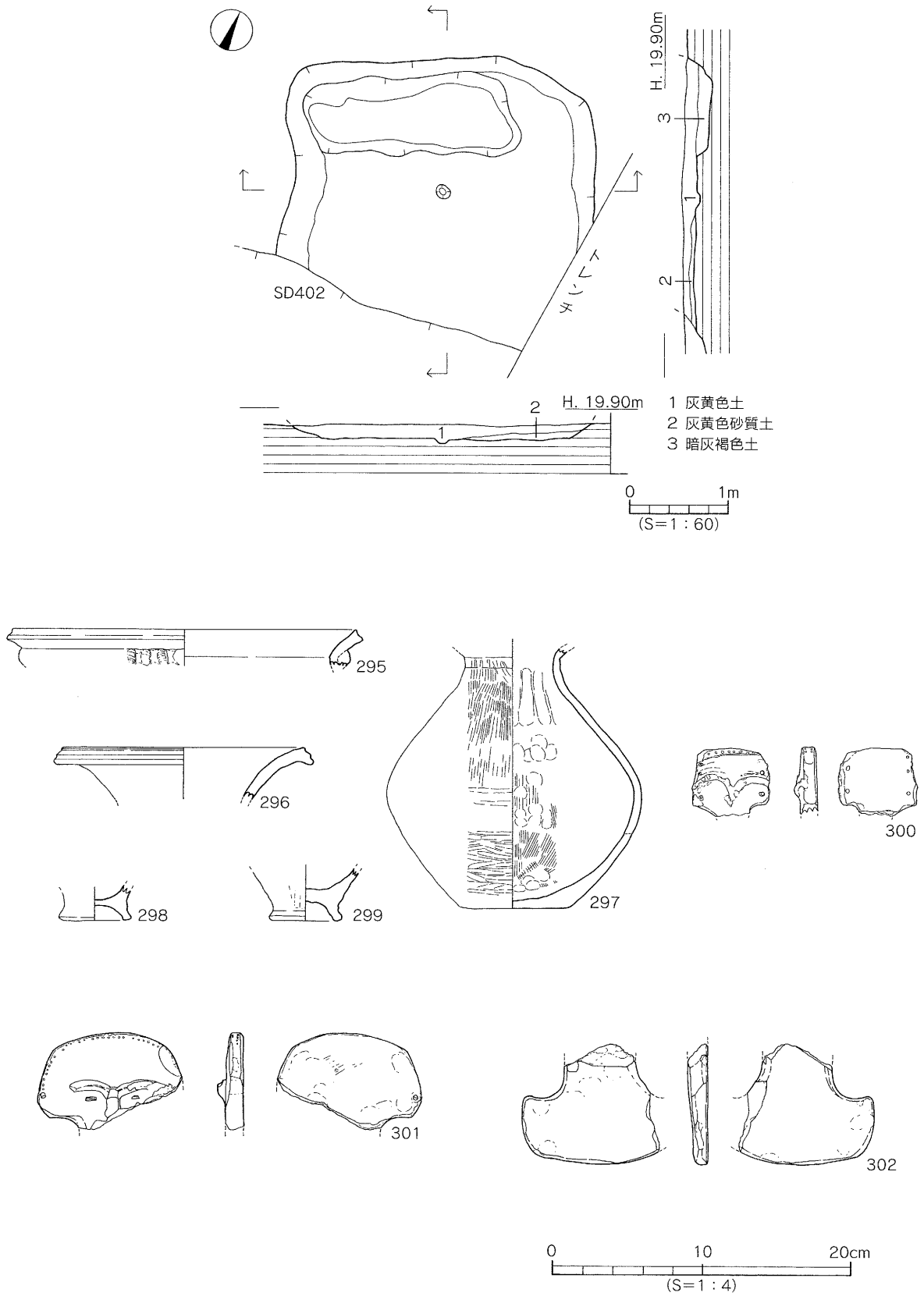
4区西側、B 34区に位置し、西側はS K 401に切れ、北東部はS P 433に切られている。第VI①層上面での検出であり、第IV層が覆う。平面形態は方形を呈し、規模は東西長2.20m、南北長2.00m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰褐色土単層である。土坑底面からピット2基(S P ①・②)を検出した。S P ①は径60~70cm、深さ8cm、S P ②は径10cm、深さ10cmを測る。埋土は両者共に暗灰褐色土である。遺物は埋土中から弥生土器片が点在して出土したほか、S P ①内からは、弥生土器(303・305)が出土した。

出土遺物 (第281図)

303は甕形土器。口縁端部は上下方に拡張し、口縁端面に凹線文2条を施す。304は鉢形土器で、口縁端部は内傾する。305は甕形土器の底部で、上げ底となる。306・307は壺形土器の底部で、平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

弥生時代の遺構と遺物



第280図 SK408測量図・出土遺物実測図

3) 円形土坑

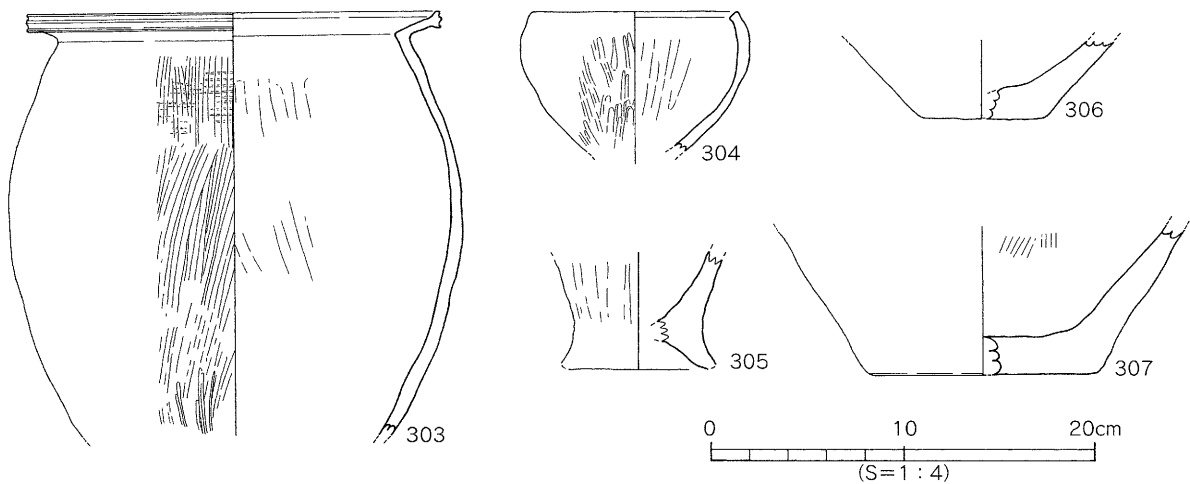
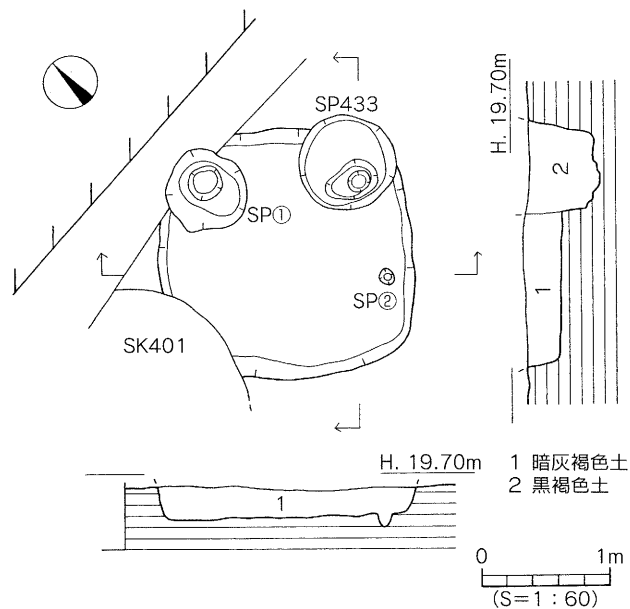
S K 203 (第282図)

2 B区中央部、C16・17区に位置する。土坑西側はS P 232に切られ、南側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.12m、南北検出長1.30m、深さ10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色土単層である。土坑底面からピット5基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径10~20cm、深さ5cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同じである。遺物は埋土中より弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第282図)

308は甕形土器。口縁部はやや内湾し、頸部内面に稜をもつ。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。



第281図 SK409測量図・出土遺物実測図

S K303 (第283図)

3 B区中央部南寄り、C27区に位置する。第VI①層上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径1.15~1.20m、深さ40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は3層に分層され、1層灰黄色土、2層暗灰黄色土、3層暗灰黄色土(灰黄色土混入)である。土坑北西部底面には、長さ1.00m、幅0.65m、深さ10cmの凹みがある。遺物は1層中より弥生土器と石器が出土し、2層下面からは炭化材が2点出土した。

出土遺物 (第283図)

309は壺形土器の頸部片で、断面方形の凸帯文を施す。310は甕形土器、311は壺形土器の底部で、上げ底となる。312は剥片で、石材は赤色頁岩である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

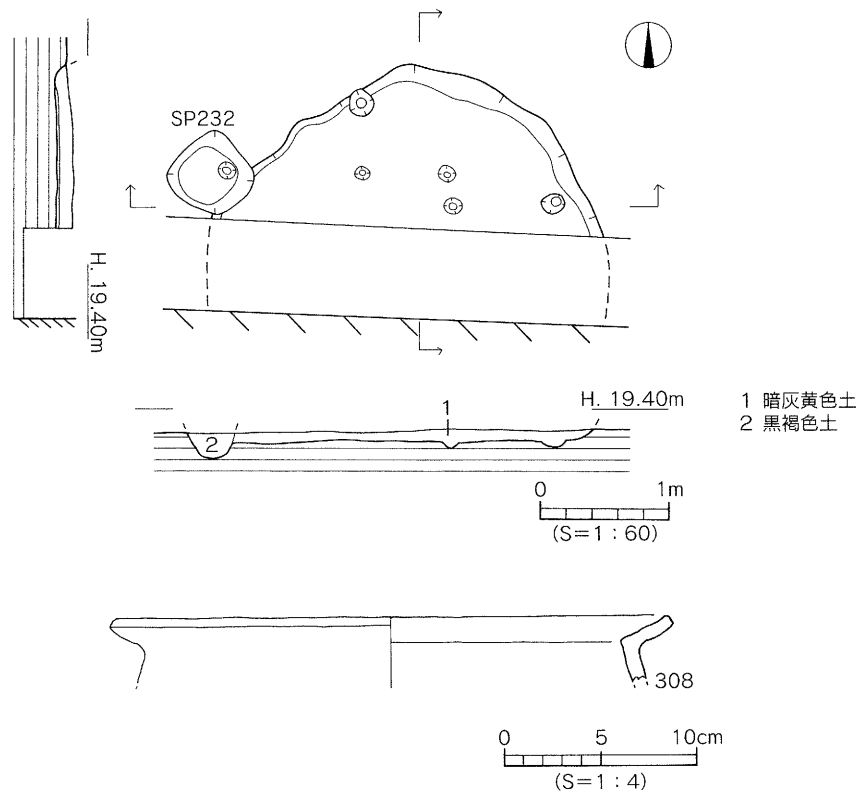
S K304 (第283図)

3 B区中央部北寄り、B27区に位置する。第VI①層上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径1.10~1.30m、深さ45cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は3層に分層され、1層暗灰黄色土、2層灰黄色土、3層灰黄色土(黄色土混入)である。土坑南西部底面には、径60cm、深さ18cmの凹みがある。土層観察の結果、3層堆積後に掘削されたものである。遺物3層中より弥生土器が少量出土した。

出土遺物 (第283図)

313・314は甕形土器。313は折曲口縁で、口縁端部は丸い。314はくびれをもつ上げ底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。



第282図 SK203測量図・出土遺物実測図

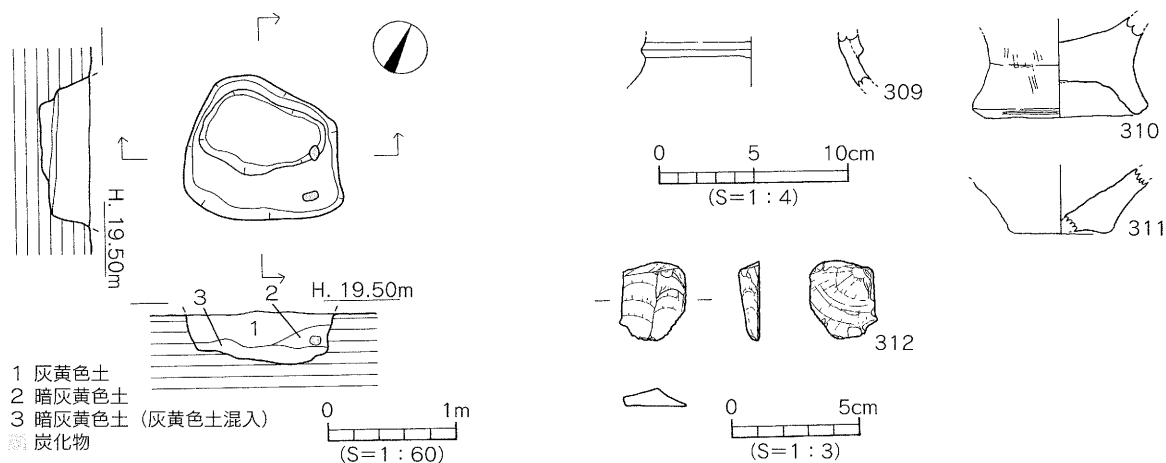
S K305 (第284図)

3 B区東側、C28区に位置する。第VI①層上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径1.18～1.32m、深さ48cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、1層灰黄色土、2層暗灰黄色土(黄色土混入)である。土坑南側底面には、長さ115cm、幅45cm、深さ12cmの凹みがある。土層観察の結果、土坑上面にてピット(暗灰黄色土)が存在していたものと考えられる。遺物は2層中より、弥生土器片が少量出土した。

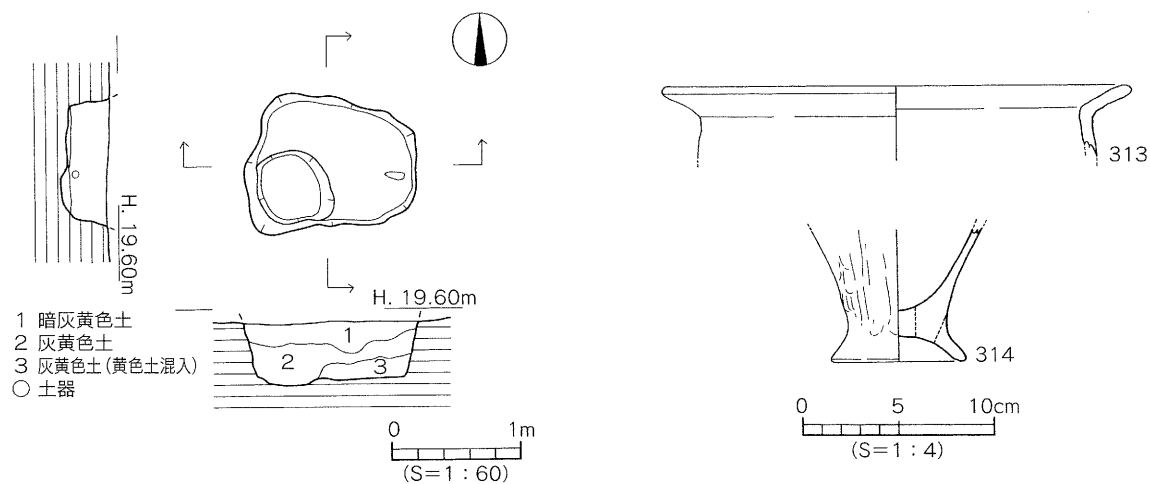
出土遺物

315・316は甕形土器。315は頸部片で、押圧凸帯文を貼り付ける。316は底部で、平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

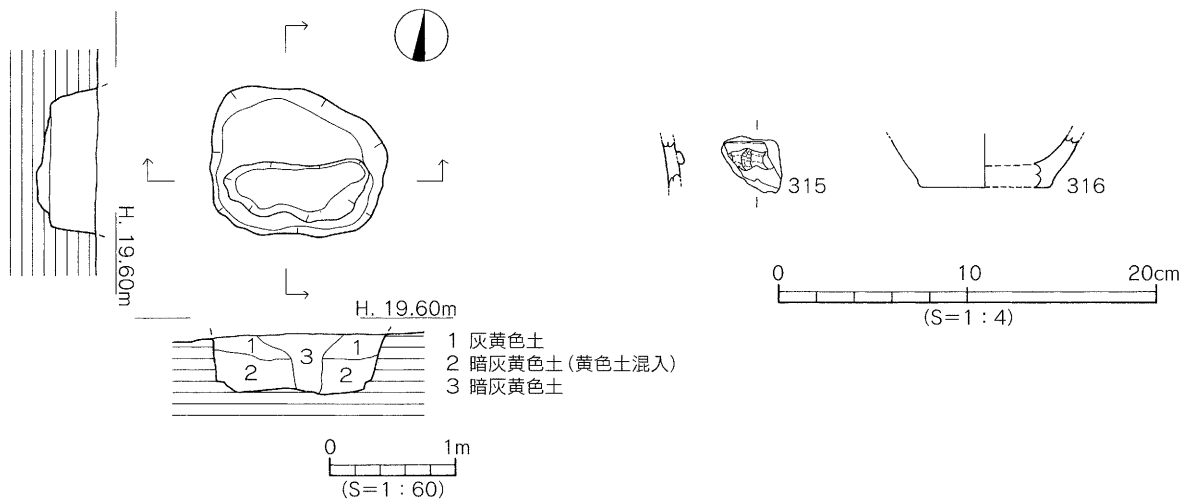


[SK303]



[SK304]

第283図 SK303・304測量図・出土遺物実測図



第284図 SK305測量図・出土遺物実測図

4) 楕円形土坑

S K 410 (第285図)

4区西端、B33区に位置する。第Ⅵ①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.40m、短径0.80m、深さ6cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰褐色土単層である。土坑底面から小ピット5基を検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は8～25cm、深さ5～8cmを測る。ピット埋土は暗灰褐色土に黄色土が混入するものである。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第285図)

317は甕形土器の底部で、くびれをもつ上げ底となる。胴部外面にタテ方向のヘラミガキ調整を施す。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

S K 301 (第285図)

3A区西側、B23区に位置する。第Ⅵ①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.20m、短径0.90m、深さ28cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑西側はテラス状の高まりをもつ。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層灰黄色土である。土坑底面にて小ピット5基を検出した。径15cm前後、深さ5cmを測り、ピット埋土は灰黄色土である。遺物は1層中より、弥生土器のほか炭化物が出土した。

出土遺物 (第285図)

318は甕形土器。口縁部はやや内湾し、口縁端部は上方に拡張する。319・320は高坏形土器。320は凹線文5条と貝殻施文による刻目を施す。広島地方からの搬入品である。321は壺形土器で、沈線文4条を施す。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

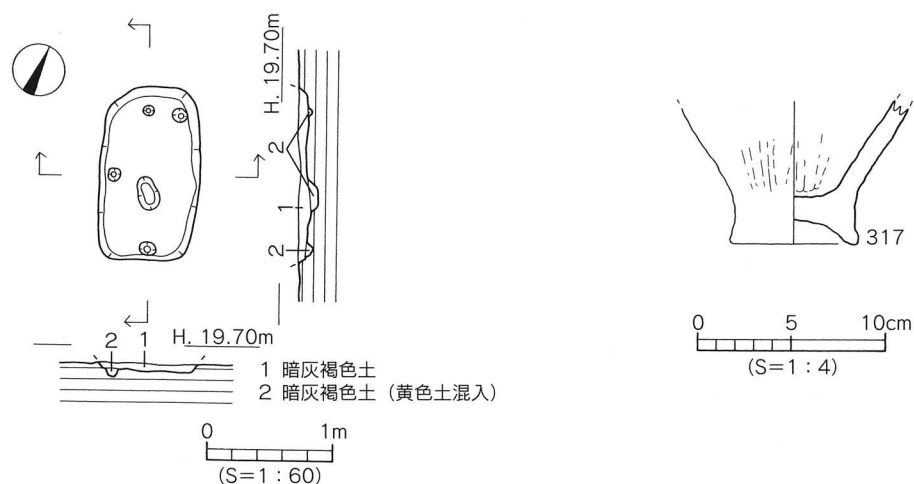
S K414 (第286図)

4区中央部、B38・39区に位置する。S D402の壁体にて検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.25m、短径1.00m、深さ28cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器が少量出土した。

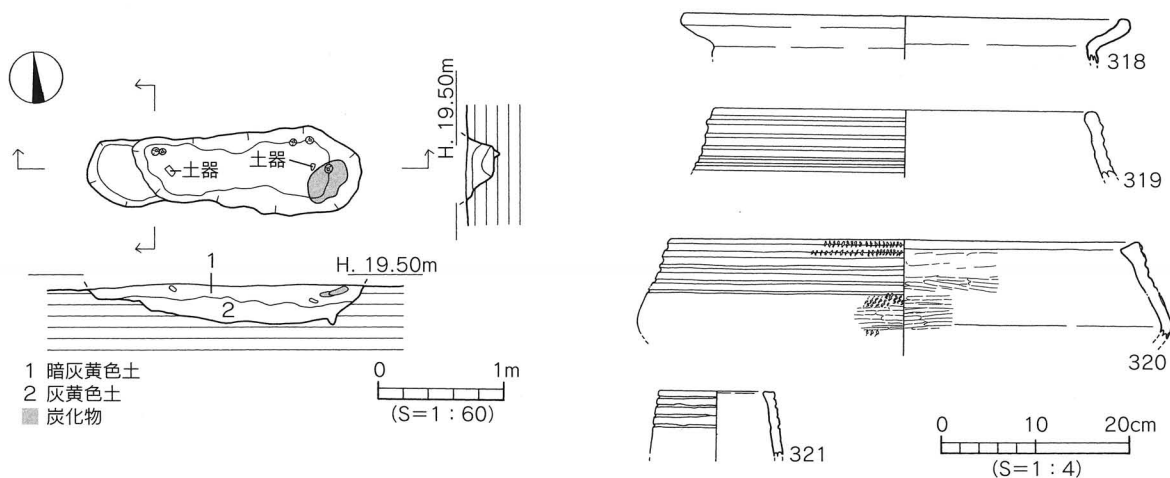
出土遺物 (第286図)

322・323は壺形土器。322は広口壺で、口縁端部は上下方に拡張し、凹線文5条と斜格子目文を施す。補修痕あり。323は底部片で、平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。



[SK410]



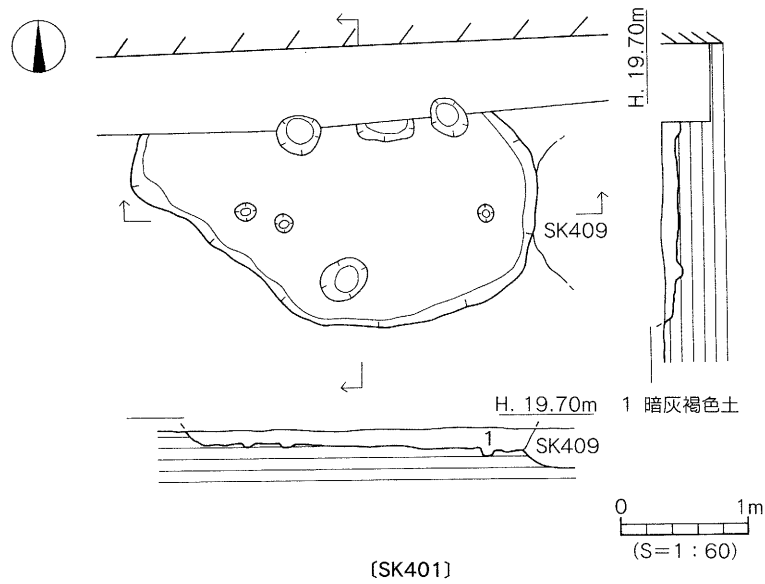
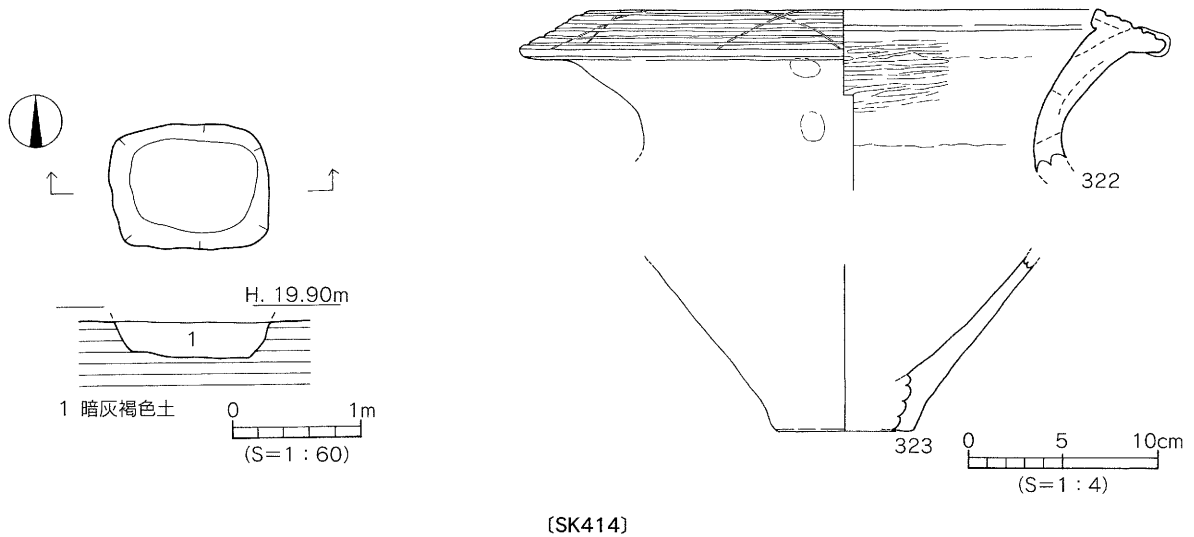
[SK301]

第285図 SK410・301測量図・出土遺物実測図

S K 401 (第286図)

4区西側、B33・34区に位置する。土坑東側はS K 409を切り、北側は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.25m、南北長1.75m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰褐色土単層である。土坑底面から大小7基のピットを検出した。平面形態は円形を呈し、規模は15~35cm、深さ5~10cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同じである。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

時期：出土遺物と検出状況より、概ね弥生時代中期後半とする。



第286図 SK414・401測量図・出土遺物実測図

S K 205 (第287図、図版43)

2 B区中央部西寄り、C 15・16区に位置する。S B 205を切り、S P 264・S P 266に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.15m、短径1.75m、深さ32cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色土単層である。遺物は埋土上位より、弥生土器片が密集して出土した。

出土遺物 (第288図)

324は甕形土器。口縁部は外反し、口縁端部は「コ」字状となる。325～331は壺形土器。325は直口壺、326～330は複合口縁壺である。331は広口壺の頸胴部片で、内外面共に丁寧なハケメ調整を施す。332・333は高環形土器。333の坏脚部接合は充填技法による。334は器台形土器で、口縁端面に円形浮文を4個貼り付け、柱部には円孔3箇所、3段施す。335は甕形土器、336・337は壺形土器、338は鉢形土器の底部で、335・338は上げ底、336・337は平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期中葉とする。

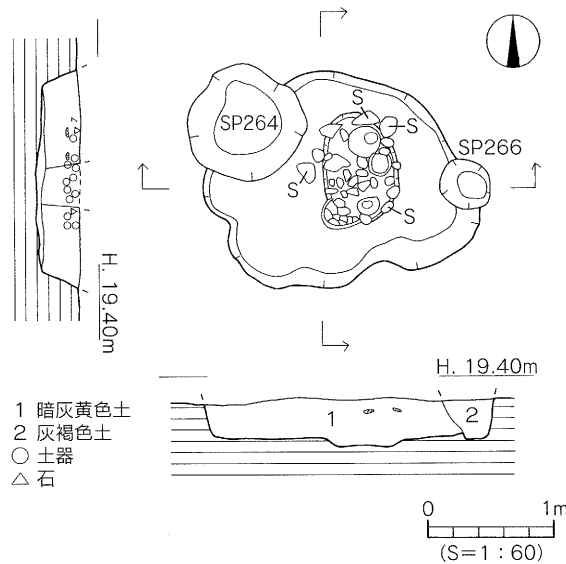
S K 209 (第289図)

2 B区西端、C 13区に位置する。土坑北側は攪乱に切られ、南側は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長2.42m、東西検出長2.85m、深さ32cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、1層暗灰黄色土、2層暗灰黄色土(黒褐色土混入)である。遺物は1層中より、弥生土器が数点出土した。

出土遺物 (第289図)

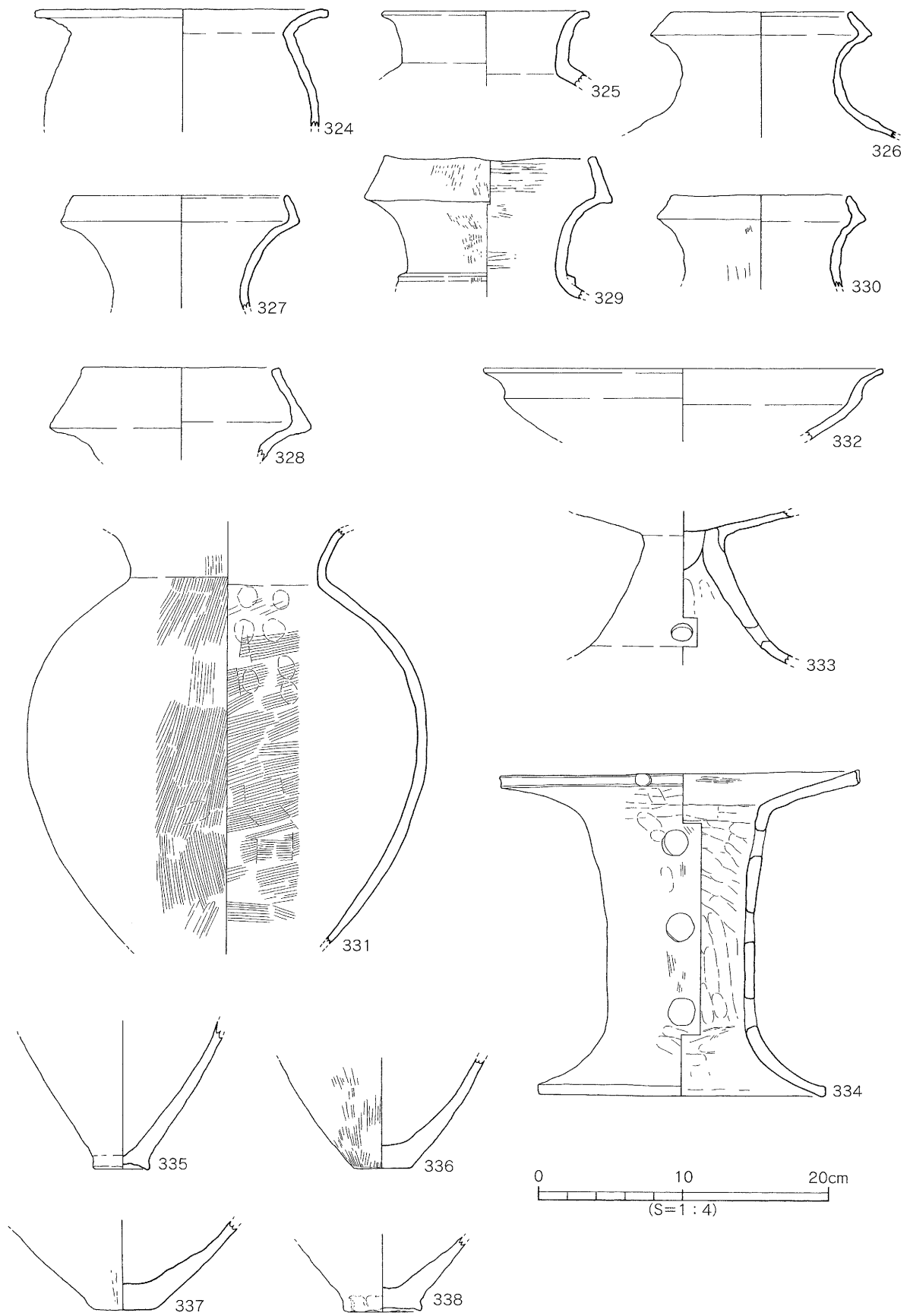
339は壺形土器の底部片で、平底となる。

時期：出土遺物と埋土から、概ね弥生時代後期中葉とする。



第287図 SK205測量図

弥生時代の遺構と遺物



第288図 SK205出土遺物実測図

S K202 (第289図)

2 B区中央部南寄り、C18区に位置し、土坑西側と南側は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.25m、南北検出長1.00m、深さ12cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器が数点出土した。

出土遺物 (第289図)

340～345は壺形土器。340は広口壺の口縁部片、341は頸肩部片である。342～345は底部片で、平底となる。

時期：出土遺物の特徴と埋土から、弥生時代後期後半とする。

S K402 (第290図)

4区西側、C33・34区に位置し、南側は調査区外に続く。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.25m、南北検出長0.75m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。土坑底面からピット3基を検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は25～35cm、深さ6～8cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同じである。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：検出状況から、弥生時代後期以降とする。

S K403 (第290図)

4区西側、C35区に位置し、南側は調査区外に続く。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.25m、短径0.75m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、1層黒褐色土、2層暗灰黄色土である。土坑底面から小ピット1基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径13cm、深さ6cmを測る。ピット埋土は暗灰褐色土である。遺物は2層中より弥生土器片が数点出土した。

出土遺物 (第290図)

346は高坏形土器の脚部片。沈線文10条を上下2段に施し、沈線文間に貫通しない矢羽状透かしを2段施す。

時期：検出状況と埋土から、弥生時代後期以降とする。

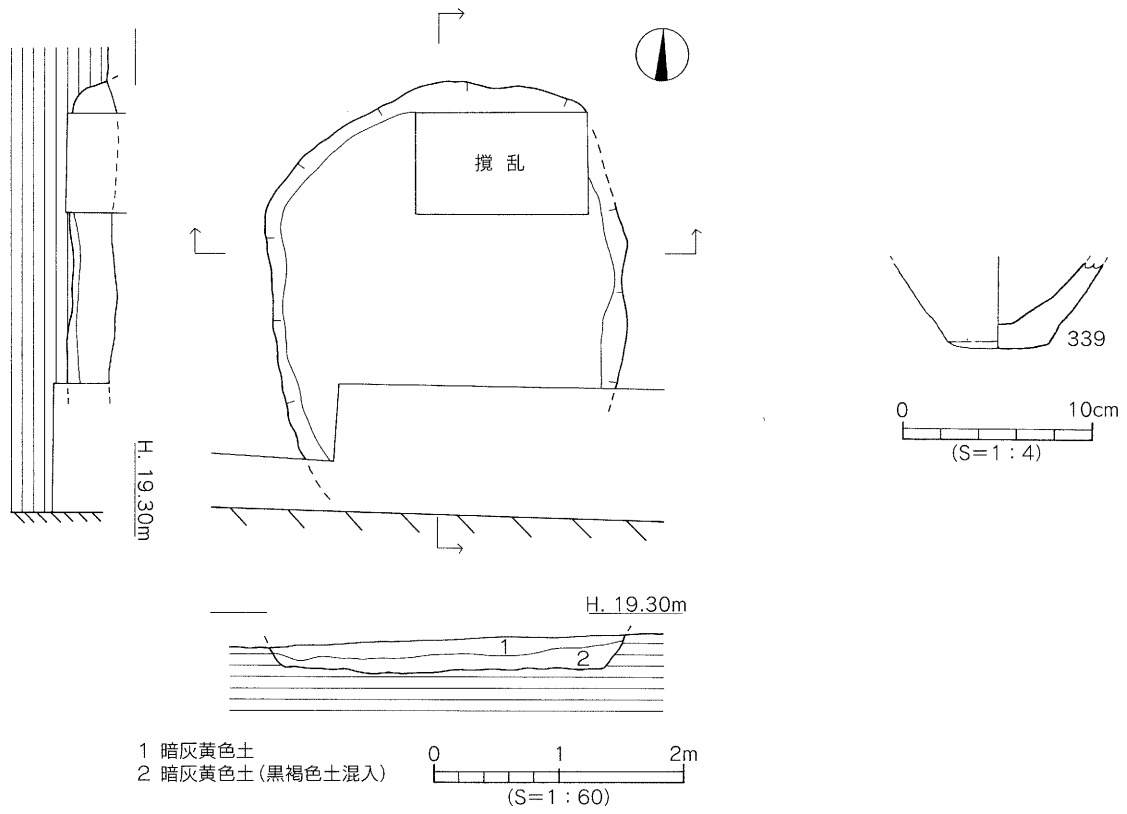
S K405 (第290図)

4区中央部、B39区に位置し、S D402を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.45m、短径1.05m、深さ18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。土坑底面からピット1基を検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は径20～45cm、深さ7cmを測る。ピット埋土は、土坑埋土と同じである。遺物は埋土上位より、少量の弥生土器片と石が出土した。

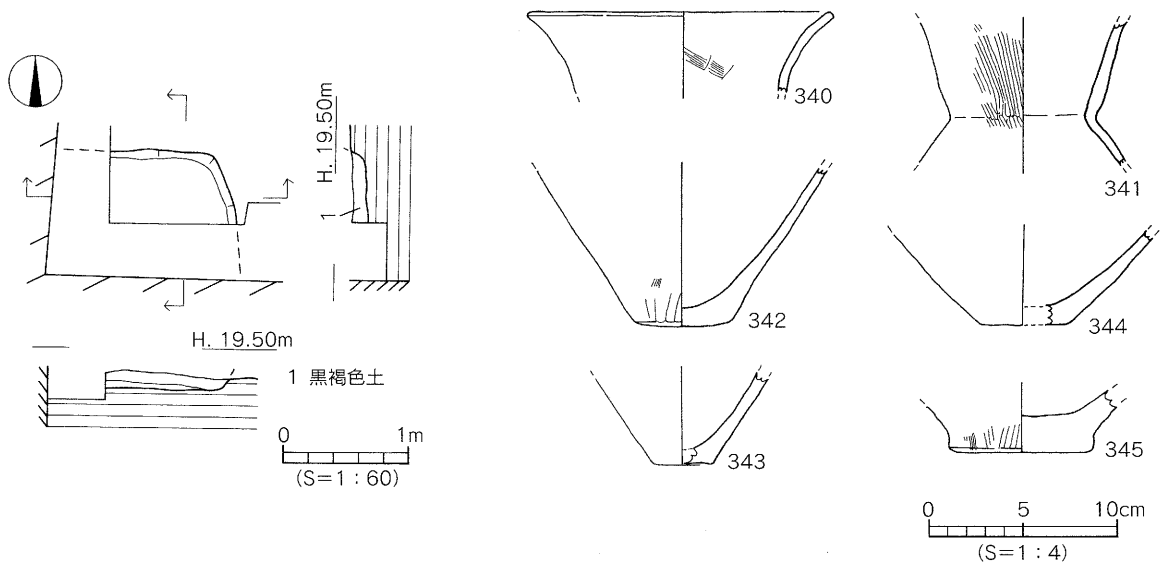
出土遺物 (第290図)

347は壺形土器の底部で、平底となる。

時期：検出状況と埋土から、弥生時代後期以降とする。



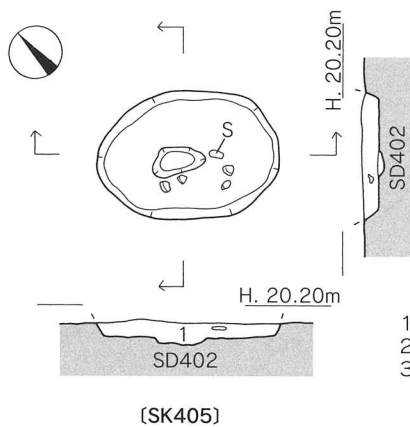
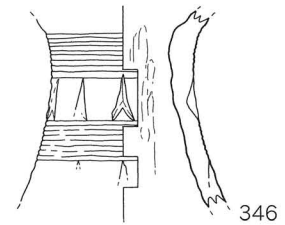
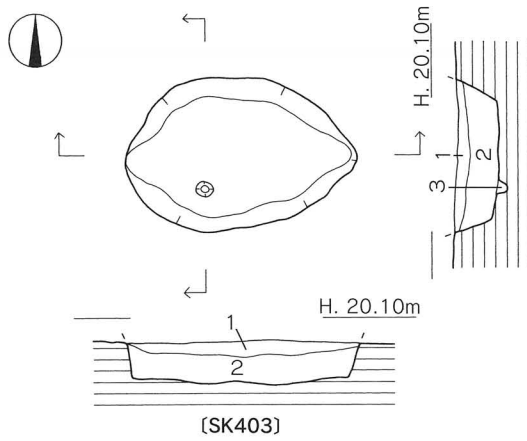
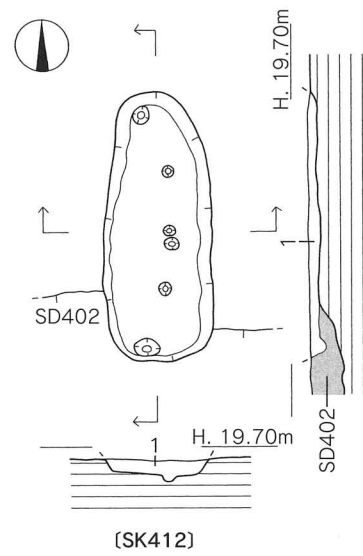
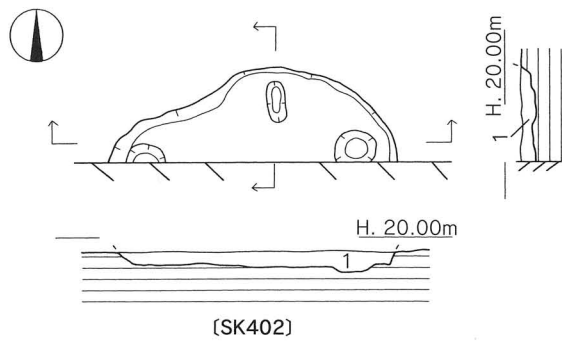
[SK209]



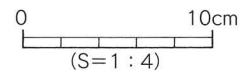
[SK202]

第289図 SK209・202測量図・出土遺物実測図

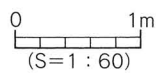
西石井遺跡 2次調査地



- 1 黒褐色土
- 2 暗灰黄色土
- 3 暗灰褐色土



SK403 : 346
SK405 : 347



第290図 SK402・403・405・412測量図・出土遺物実測図

S K 412 (第290図)

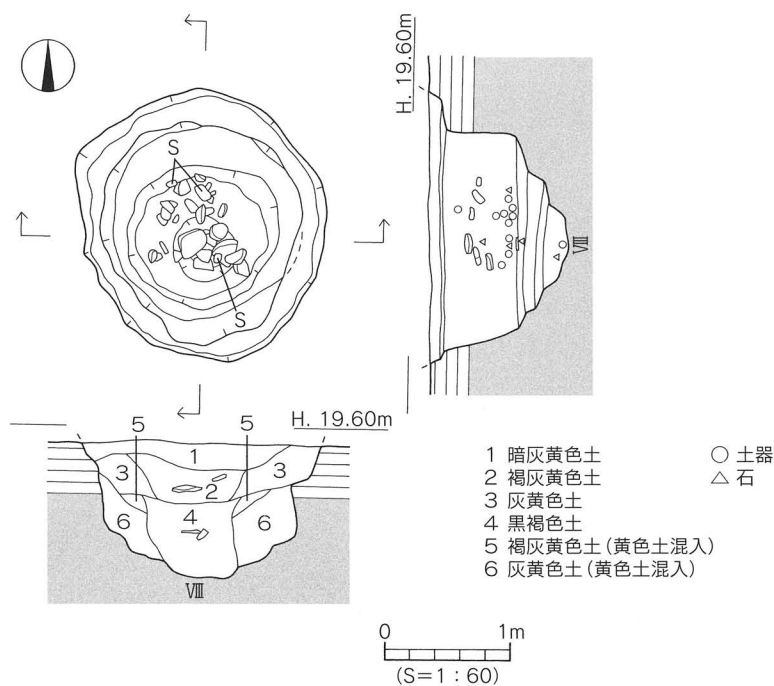
4区西側、B34・35区に位置し、南側はS D 402を切る。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.15m、短径0.85m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。土坑底面から小ピット6基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径8～15cm、深さ5cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同じである。土坑及びピット内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K 402・405等と酷似することから、概ね弥生時代後期以降とする。

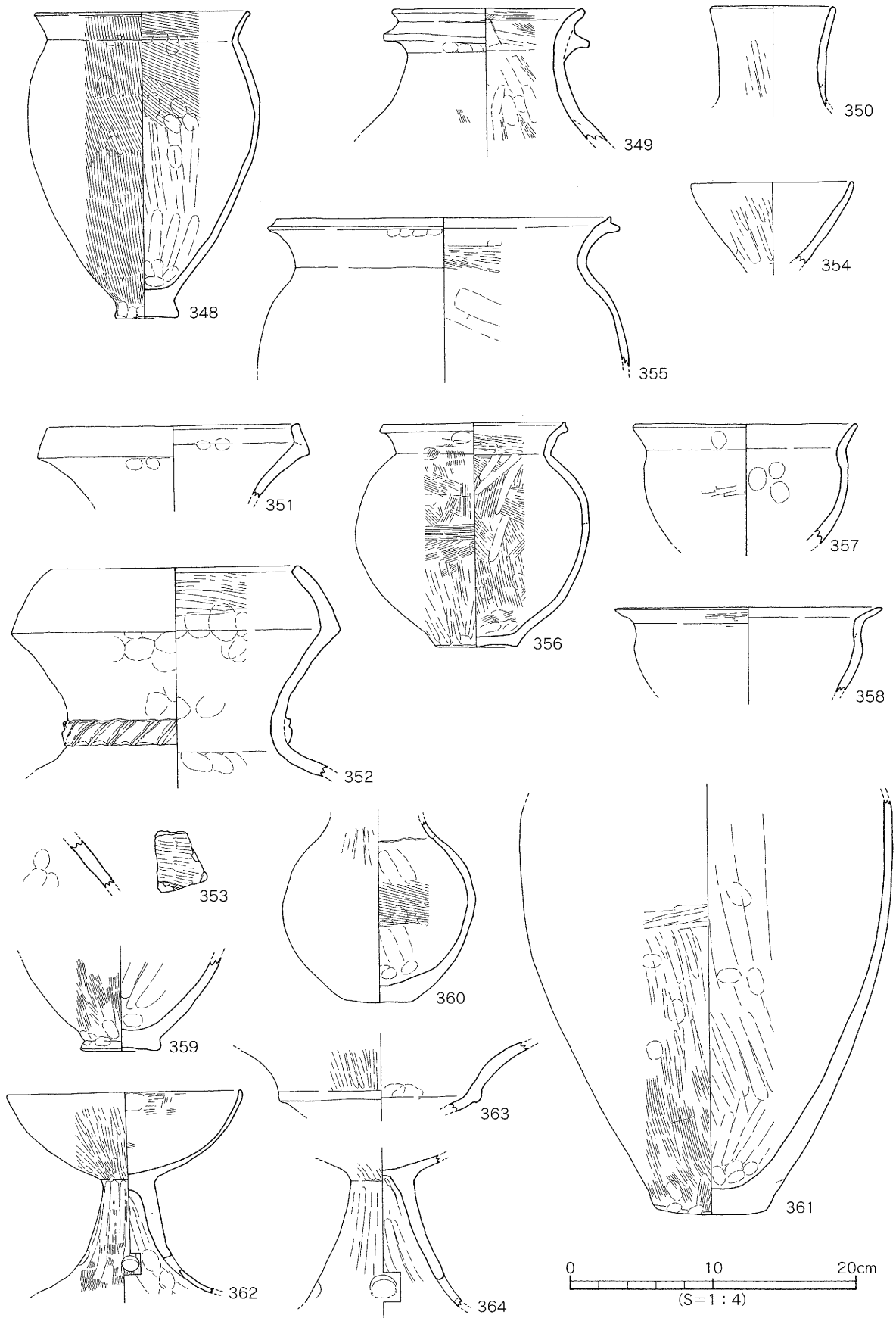
(5) 井戸

S E 301 (第291図、図版43)

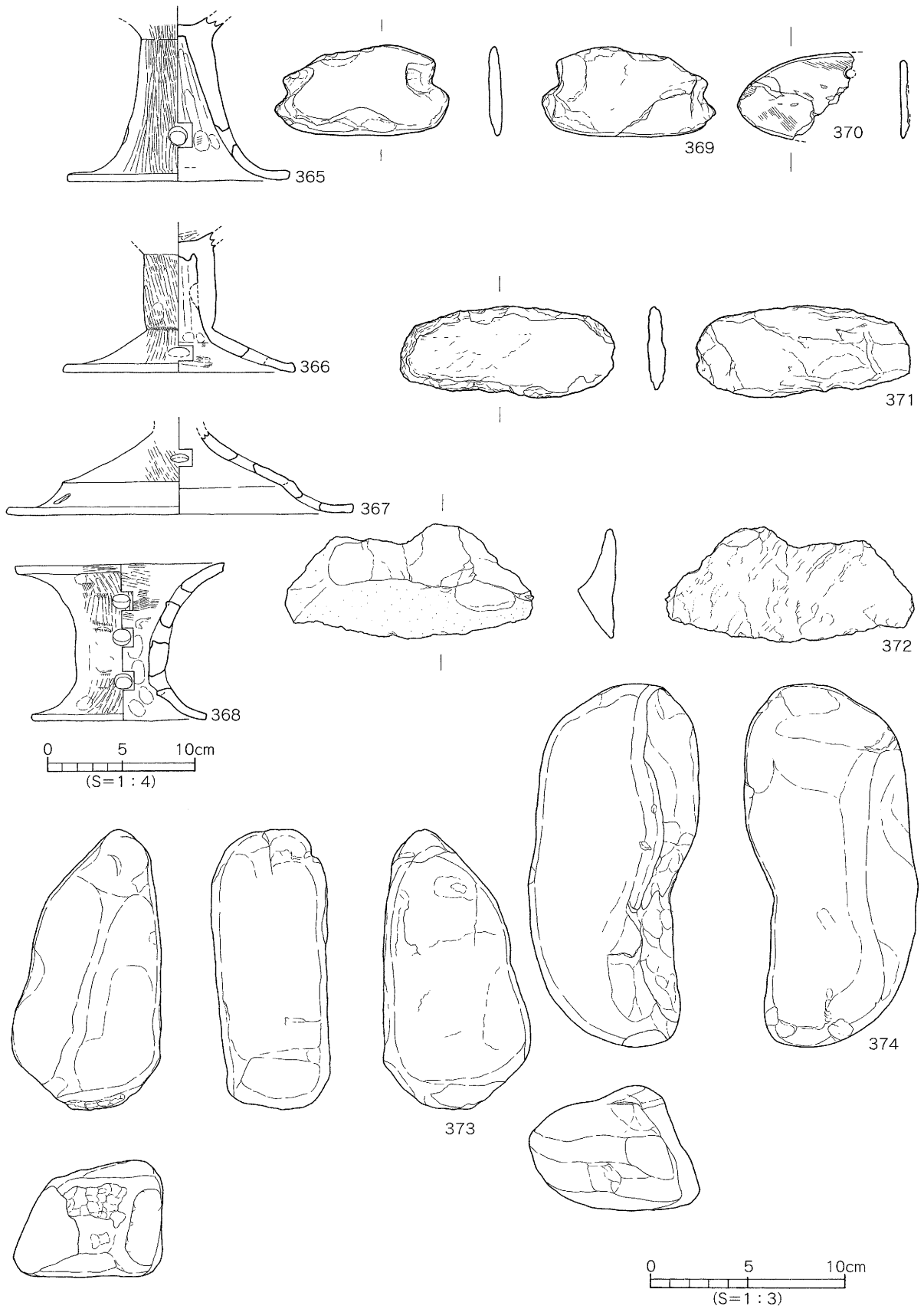
3B区中央部、B・C27区に位置する。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.15m、短径1.92m、深さは最深部で1.08mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、北側壁体から東側壁体にかけては、やや筒状もしくはフラスコ状となる。また、井戸下位は段掘り状となる。井戸は地面を掘りくぼめただけの素掘りのもので、壁体中位から底面にかけては第VIII層砂礫層となる。埋土は6層に分層され、1層暗灰黄色土、2層褐灰黄色土、3層灰黄色土、4層黒褐色土、5層褐灰黄色土(黄色土混入)、6層灰黄色土(黄色土混入)である。堆積状況はほぼ水平堆積をなすが、土層観察により3層及び5層堆積時に再掘削されたものと考えられる。遺物は主に2層、4層中から弥生土器と石器、径10～20cm大の石が出土した。また、井戸底面付近からも土器や石器が数点出土した。



第291図 SE301測量図



第292図 SE301出土遺物実測図(1)



第293図 SE301出土遺物実測図 (2)

出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器である。このうち、底面付近出土の鉢形土器（356）は完形品、壺形土器（360）は胴底部完存品である。なお、2層及び4層中からの出土品は、ほとんどが破片である。石器は、石庖丁、叩石、砥石が出土した。2層出土の石庖丁（369・370）は成品、底面付近出土の石庖丁（371）は未成品である。なお、叩石、磨石は完形品で、両者共に2層出土品である。

出土遺物（第292・293図、図版50・51）

348は甕形土器の完形品。口縁部は「く」の字状を呈し、底部はわずかに上げ底となる。外面はハケメ調整、内面は胴部上位がハケメ調整、胴部下位はタテ方向のナデ調整を施す。349～353・360・361は壺形土器。349は広口壺で、350は長頸壺、351・352は複合口縁壺である。353は肩部片で、ヘラ描き沈線文2条を施す（線刻か）。354～359は鉢形土器。354は直口口縁、355～358は外反口縁を呈するものである。356は完形品で、口縁端面はナデ凹み、胴部下位外面にはヘラミガキ調整を施す。359は鉢形土器の胴底部、360は壺形土器の胴底部で、上げ底となる。362～367は高坏形土器。367は柱裾部に段をもち、裾部と有段部にそれぞれ円孔を4箇所穿つ。368は器台形土器で、円孔4箇所を3段施す。

369～371は石庖丁である。369・370は成品で、両側面に抉りをもつ。371は研磨段階の未成品である。372は剥片で、石材は安山岩である。373は叩石、374は磨石である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

S E 401（第294図、図版44）

4区中央部、B39区に位置する。第V層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.75m、短径1.20m、深さは最深部で1.55mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東西壁体中位はオーバーハングにより袋状となる。井戸は素掘りで、井戸壁体中位から底面にかけては第VIII層砂礫層となる。埋土は12層に分層され、1層黒褐色土、2層灰黄褐色土、3層褐灰色砂質土、4層灰褐色土、5層黒褐色粘質土、6層黒灰色粘質土、7層灰褐色砂質土、8層灰褐色粘質土、9層黒色粘質土、10層灰褐色粘質土、11層黒色粘質土、12層灰黄色砂である。堆積状況は水平堆積をなすが、土層観察により4層及び5層堆積時に再掘削されたものと考えられる。遺物は、主に5・6層に集中しており、完形品（377・389・439・440）を含む多数の土器と径10～20cm大の河原石が密集して出土した。出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器、ミニチュア土器である。9～11層からは、口縁部または底部の完存品が井戸中央部に重なり合うようにして出土した。このほか、最下層からは、口縁部を欠損する完存品（425）のほか土器片がまばらに出土した。このうち、搬入品や外来的要素の強い土器が数点ある。壺形土器（401）は胎土中に角閃石や片岩を多く含むことなどから、大分県からの搬入品、壺形土器（444）は形態の特徴から広島県、安芸地方からの搬入品である。また、壺形土器（398）は、備後地方の影響を受けた外来系土器である。

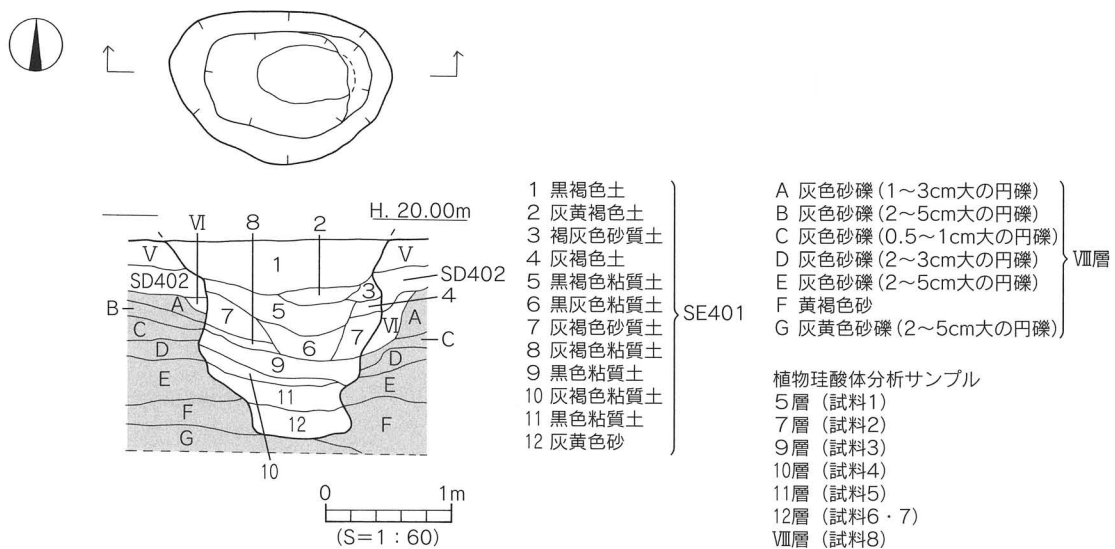
出土遺物（第295～299図、図版51・52）

375～396は甕形土器。375～381は口縁部が「く」の字状を呈し、377は口縁部を上方にやや拡張し、底部は突出する平底となる。382～387は折曲口縁を呈し、384は頸部に押圧凸帯文、387は口縁端面に凹線文2条を施す。388・389は胴底部で、389は口縁部を欠損するものの完存品で、外面はタタキ調整後ハケメ調整を施す。390～396は底部で、396の外面にはタタキ調整を施す。397～437は壺形土器。

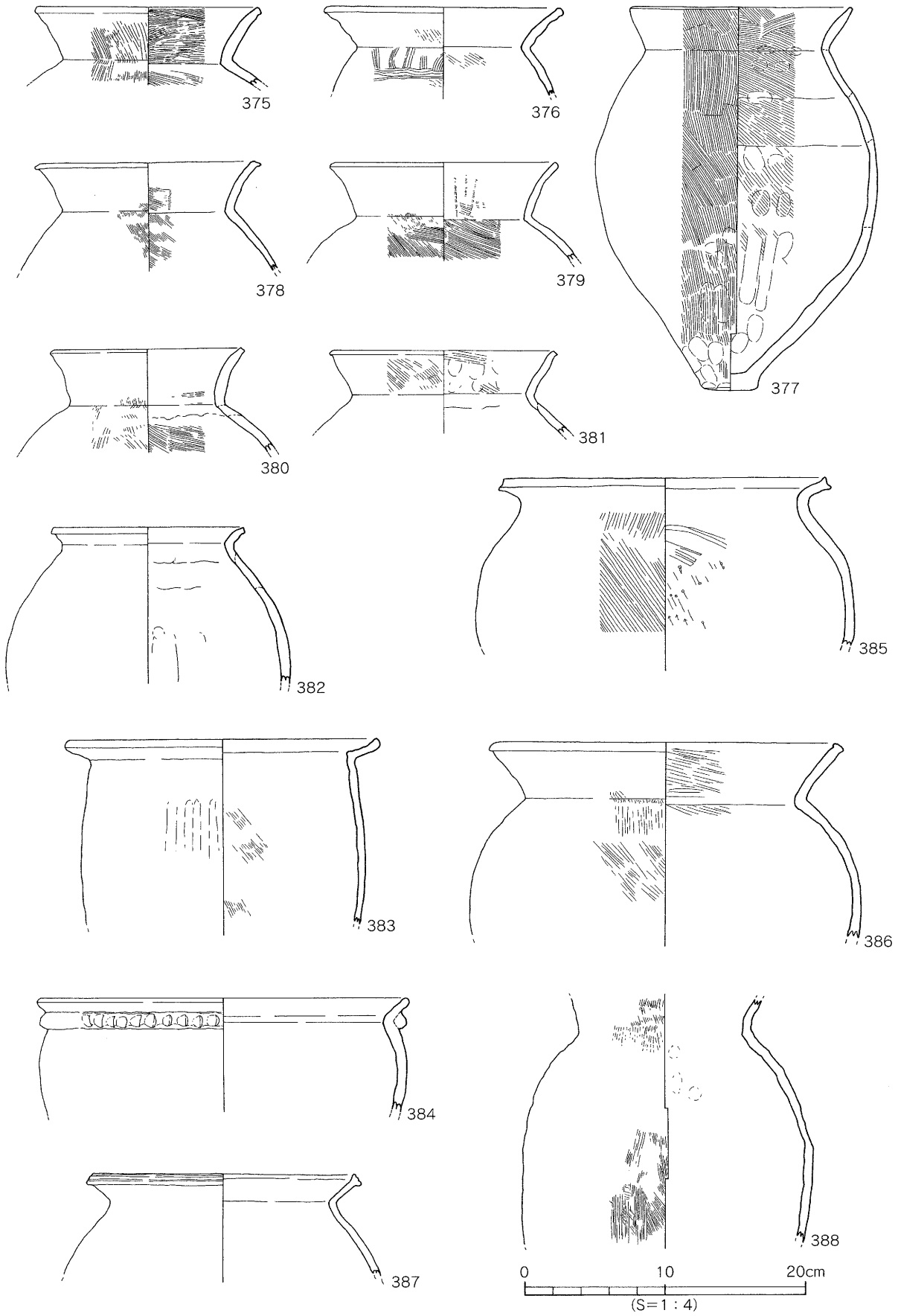
397は長頸壺、398・399は直口壺、400は広口壺である。398は頸部に凸帯文5条を貼付、口縁上面に孔を穿つ。401～419は複合口縁壺。401は口縁接合部に「ハ」の字状文を施す。豊後からの搬入品である。口縁部外面には波状文を施すもの(409・410・414～417)、沈線文と波状文を施すもの(412)、斜線文を施すもの(413)、斜格子目文を施すもの(418)がある。頸部には凸帯文を施すものがあり、凸帯上に刻目を施すもの(410)と斜格子目文を施すもの(412・415・417～419)がある。421～424は頸部片で、423は刺突文を施す。425～437は胴底部で、436はつまみ状の突出部をもつ。

438～440は鉢形土器。438は口径35cmを超える大型品で、内外面共にハケメ調整を施す。439・440は完形品で、440は焼成後に孔を穿つ。441～443、445～450は高坏形土器。445・446は口縁端部を内方に拡張し、445は口縁上面に孔を穿つ。444は高坏形土器として考えていたが、整理段階で、搬入品であることがわかった。451・452は支脚形土器、453はミニチュア品である。452は受部がU字状となる。

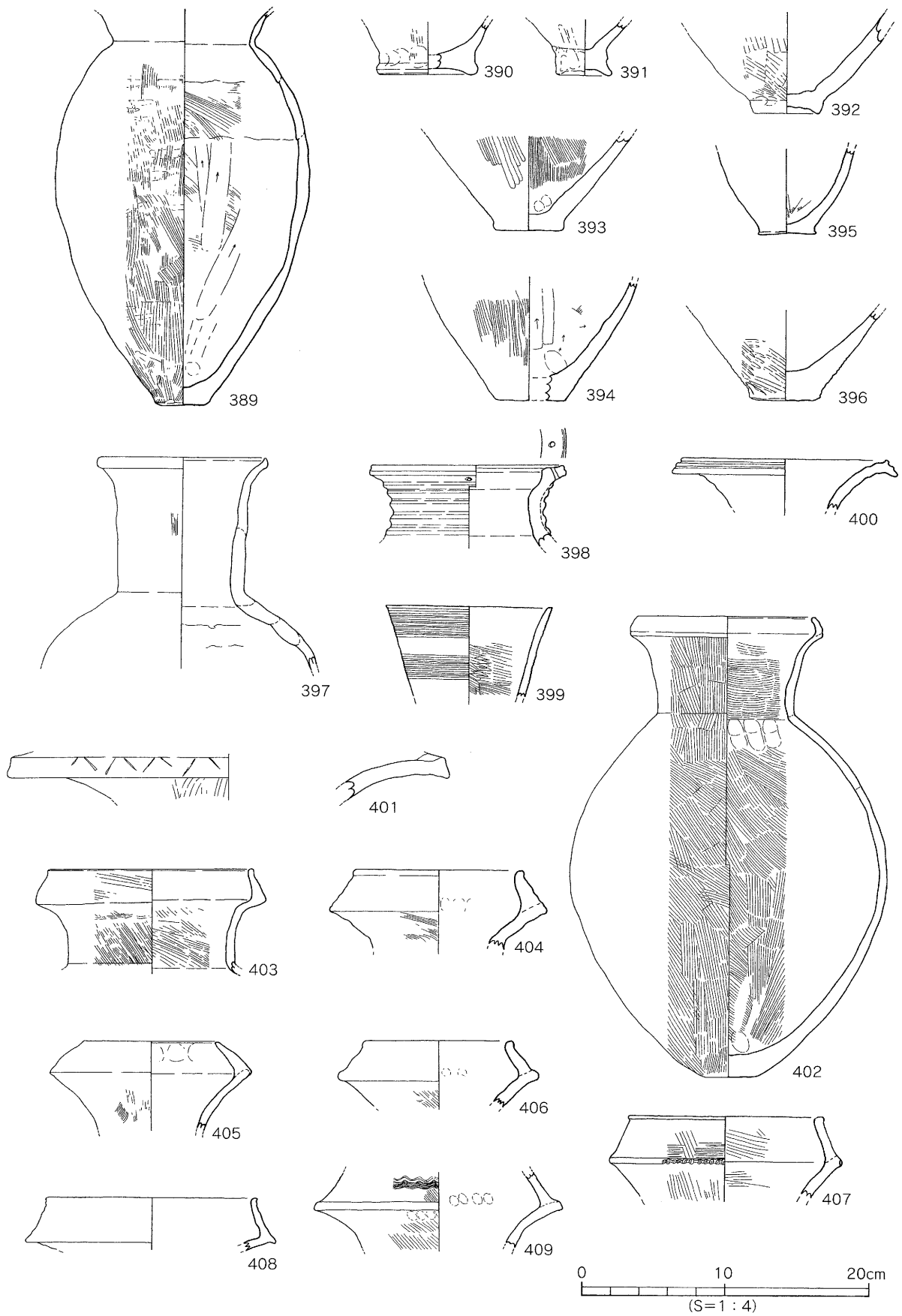
時期：出土した遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



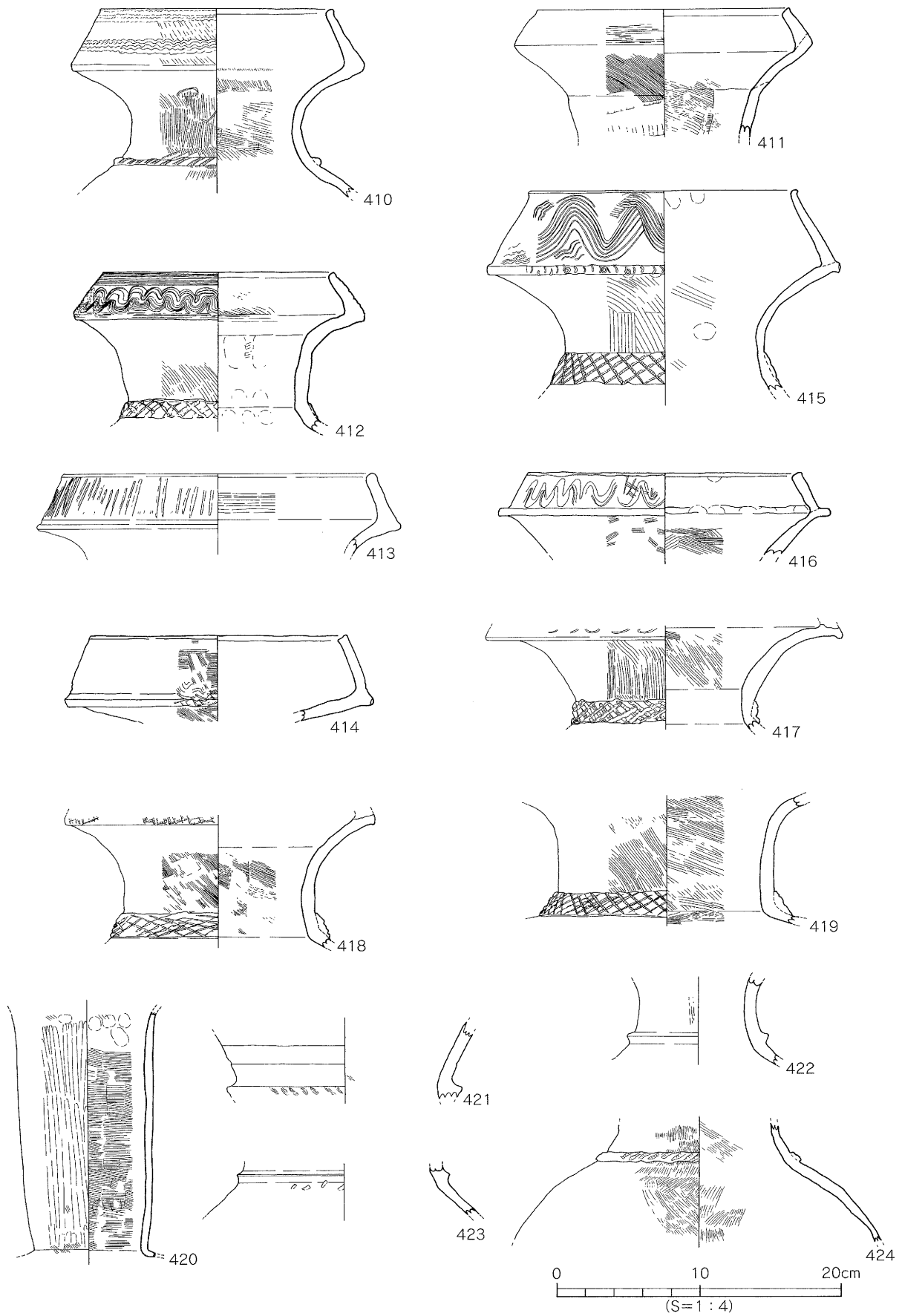
第294図 SE401測量図



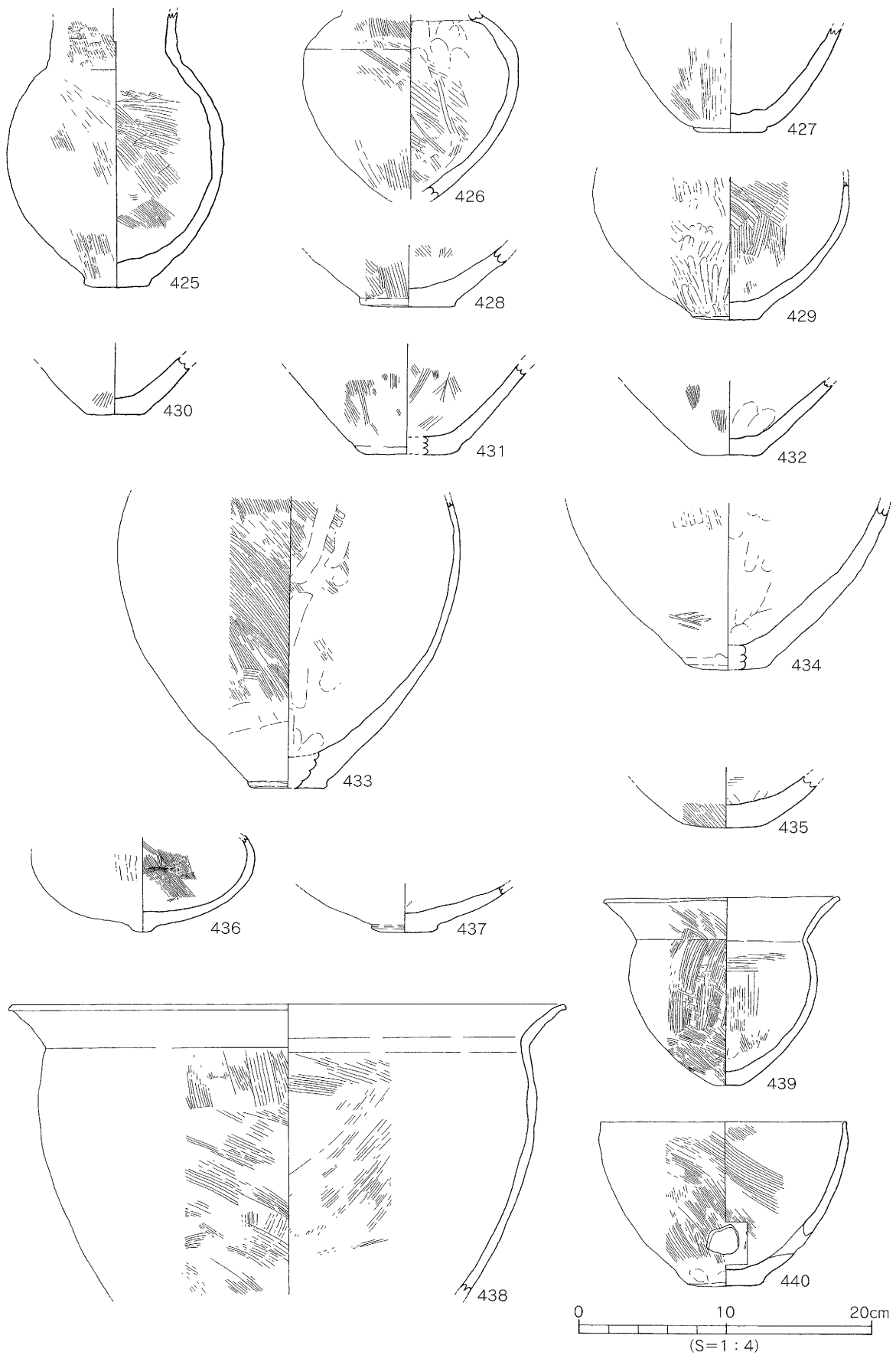
第295図 SE401出土遺物実測図(1)



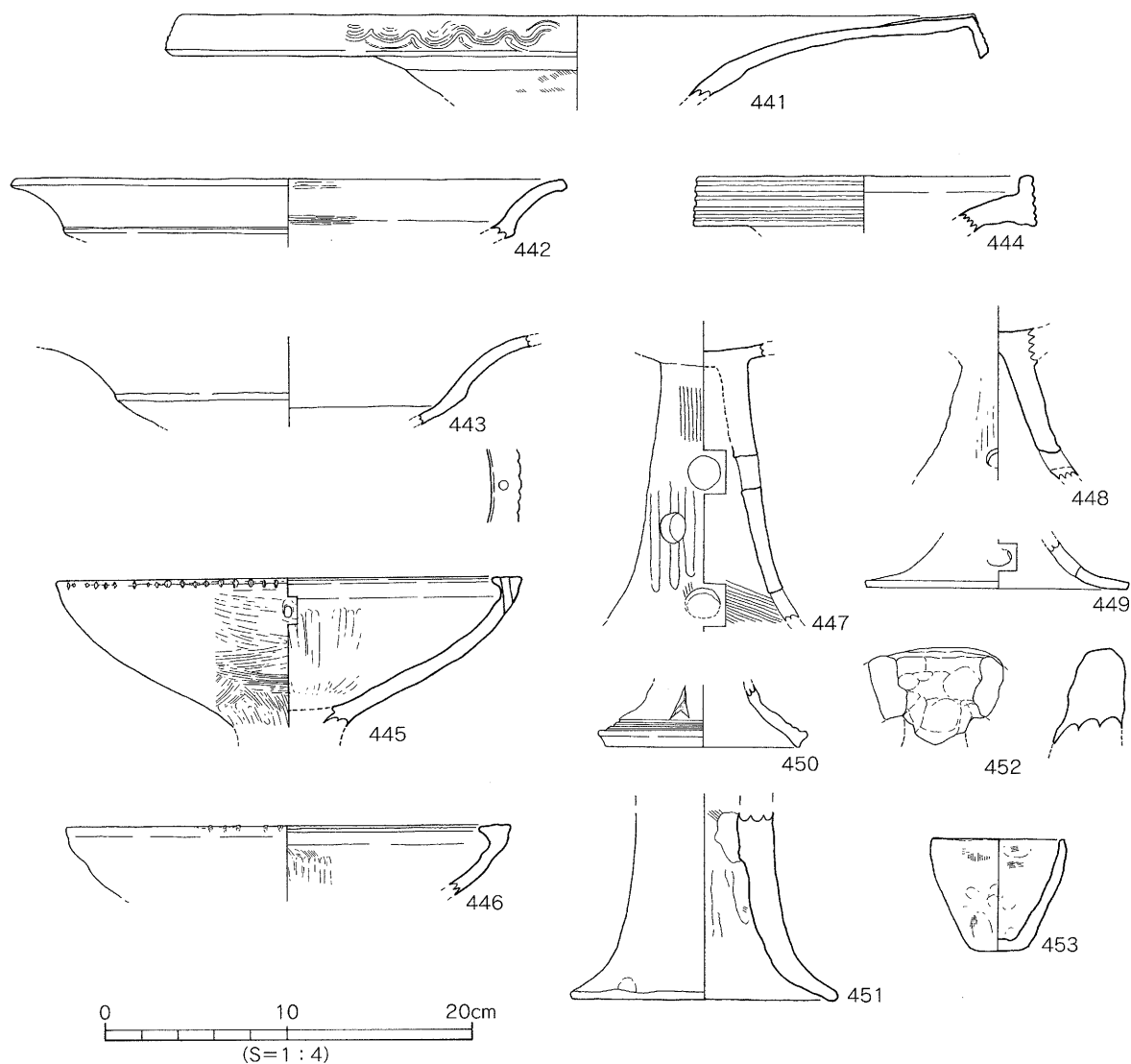
第296図 SE401出土遺物実測図 (2)



第297図 SE401出土遺物実測図 (3)



第298図 SE401出土遺物実測図 (4)



第299図 SE401出土遺物実測図(5)

SE402 (第300図、図版43)

4区中央部東寄り、B41区に位置する。第IV層上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径1.10~1.15m、深さは最深部で1.58mを測る。断面形態は、井戸上位は逆台形状、井戸中位から底面にかけては筒状となる。なお、東壁体はオーバーハングにより、一部袋状となる。井戸は素掘りで壁体中位から底面は第VIII層砂礫層となる。埋土は10層に分層され、1層黒褐色土、2層灰黄褐色土、3層灰黄色砂質土、4層暗灰黄色土、5層黒褐色粘質土、6層暗褐色砂質土、7層黒褐色粘質土、8層黄褐色砂質土、9層灰色砂質土、10層黄褐色砂質土である。堆積状況は水平堆積をなすが、土層観察により4層堆積時に再掘削されたものと考えられる。

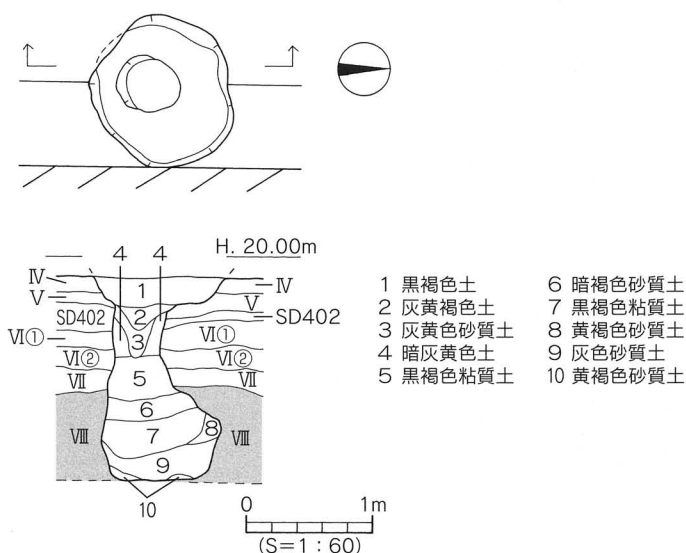
遺物は主に2・3・7層中から弥生土器と河原石が出土した。出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器、器台形土器である。2層からは完形品(454)や口縁部を欠損する完形品(484)、大型の土器片が重なり合うようにして出土したほか、3層からも完形品(455)や口縁部欠損の完形品(483)などが出土した。7層からは複合口縁壺が、その場で割れた状

態で出土したほか、鉢形土器の完形品（490）と径10～20cm大の石10点余りがまとまって出土した。最下層からは、甕形土器の胴部片（461）が井戸底に敷かれた状態で出土した。

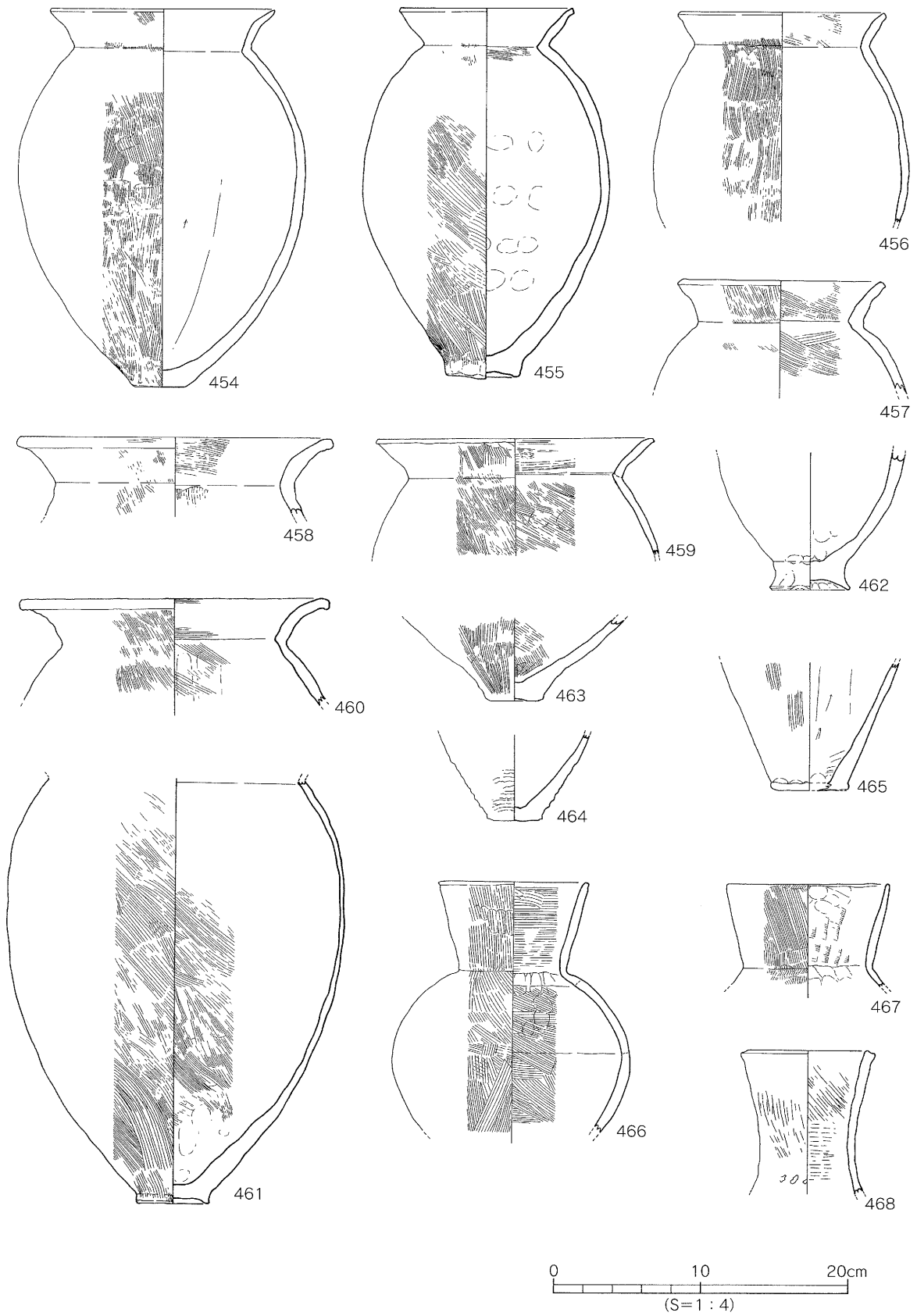
出土遺物（第301～304図、図版52・53）

454～465は甕形土器。454～460は口縁部が「く」の字状を呈し、口頸部内面に稜をもつ。外面はハケメ調整、内面は454がヘラケズリ調整、その他はハケメ調整を施す。461～465は胴底部で、461～463は上げ底、464・465は平底となる。464の外面にはタタキ調整を施す。466～489は壺形土器。466・467は直口壺、468は長頸壺で頸部下位に刺突文を施す。469～477は複合口縁壺である。口縁部には波状文を施すもの（472・473）、波状文と半截竹管文を施すもの（469）、沈線文を施すもの（474）がある。473は底部を欠損するものの、ほぼ完存品で胴部外面にはハケメ調整後、タテ方向のヘラミガキ調整を施す。なお、476・477は同一個体と考えられ、477は沈線文と刻目を施す。478～480は広口壺で、口縁端面に凹線文を施す。481・482は長頸壺で、沈線文と刻目を施す。483～489は頸～胴底部で、485はわずかに上げ底、その他は平底となる。490～494は鉢形土器。490は突出する底部で、内外面に粘土補修痕を残す。495・496は高坏形土器の脚部片で、495は柱部上位に沈線文と刺突文を施す。497・498は支脚形土器、499は器台形土器である。497は受部が「U」字状となる。

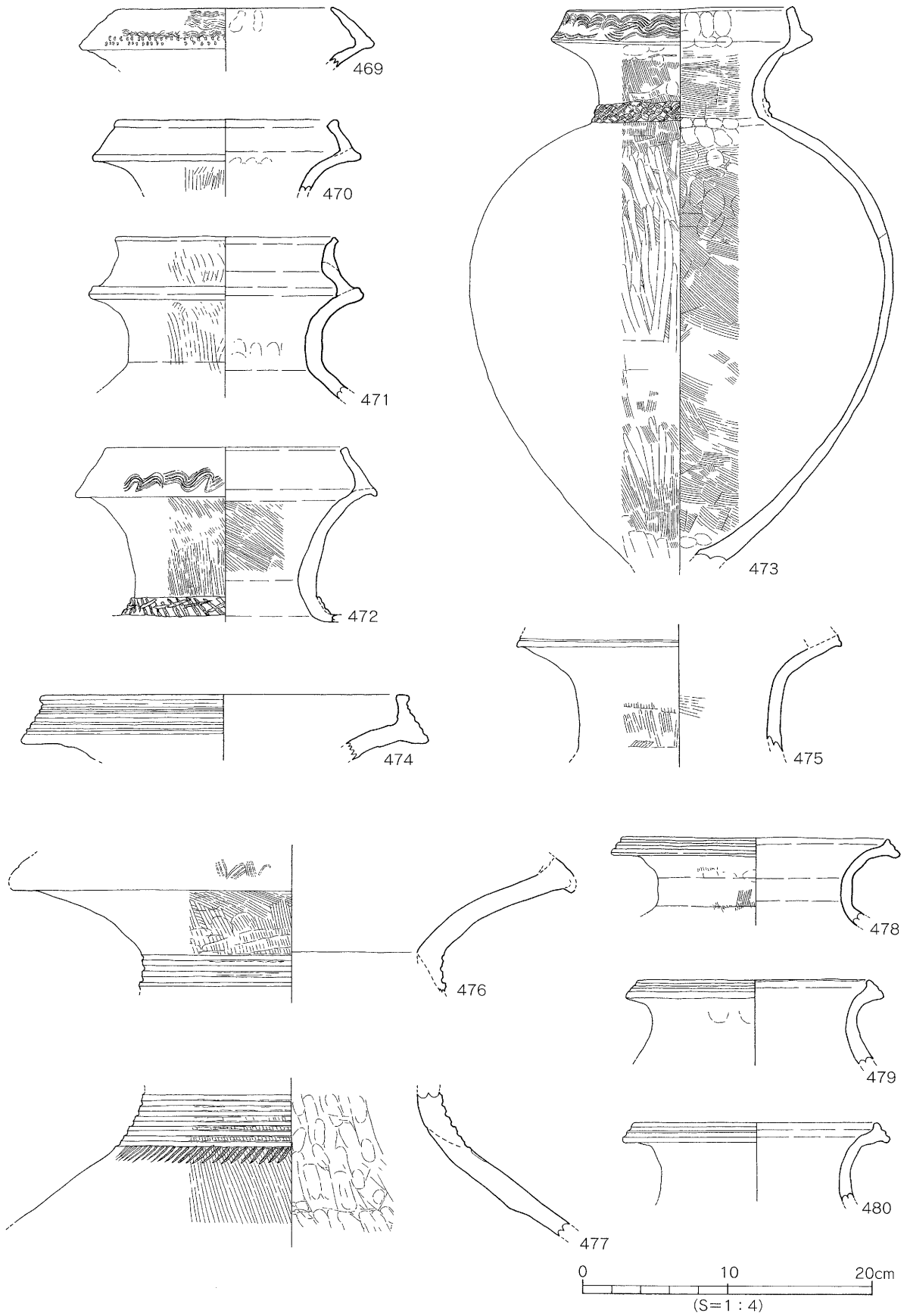
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



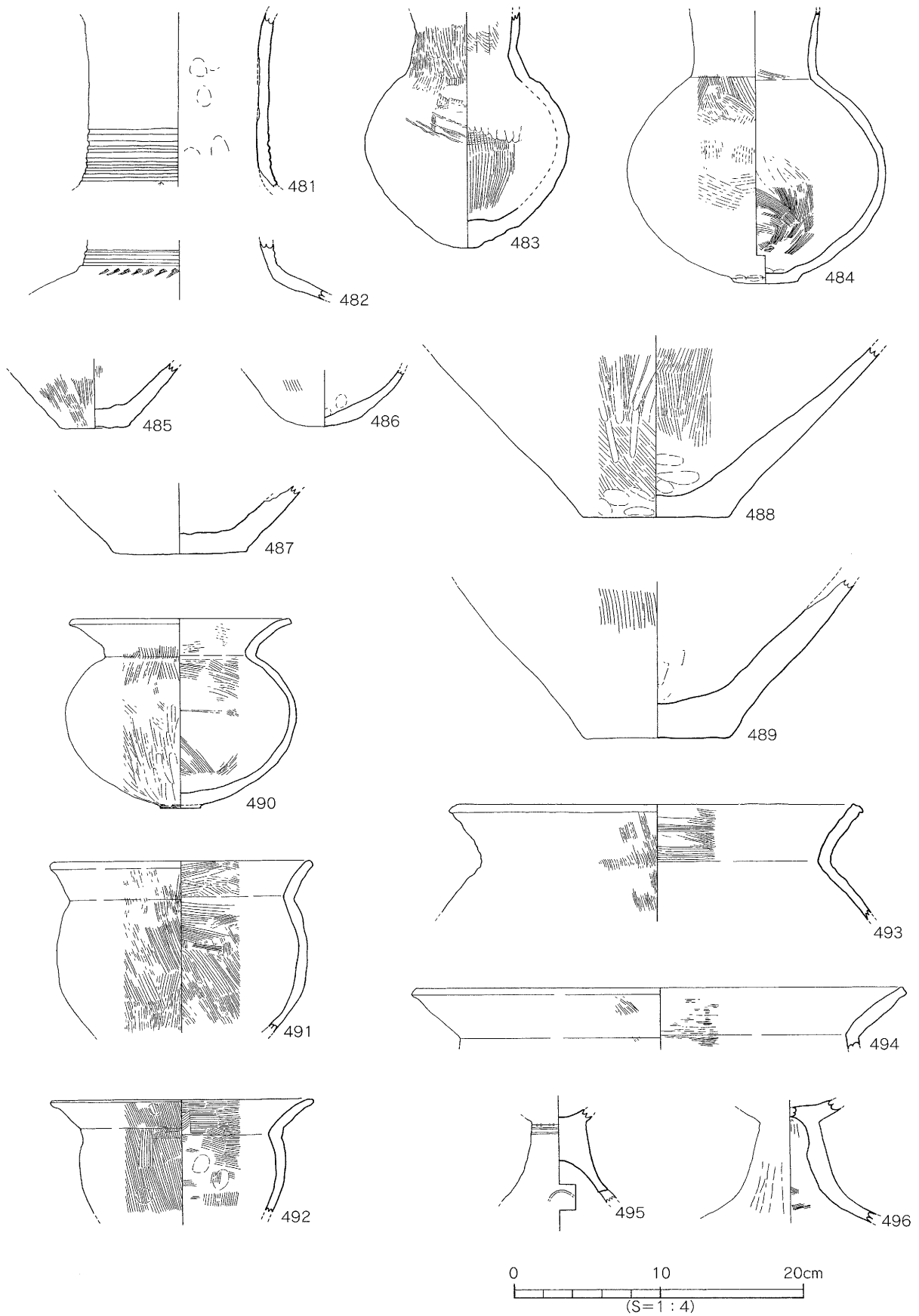
第300図 SE402測量図



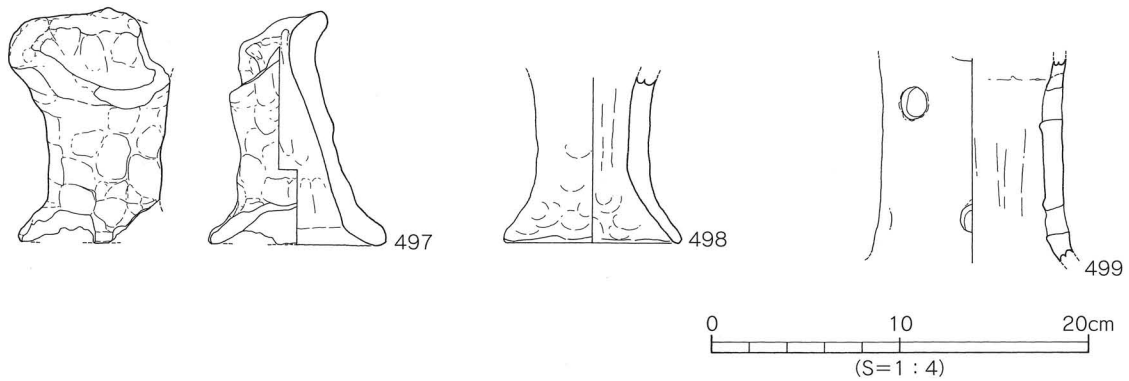
第301図 SE402出土遺物実測図 (1)



第302図 SE402出土遺物実測図 (2)



第303図 SE402出土遺物実測図 (3)

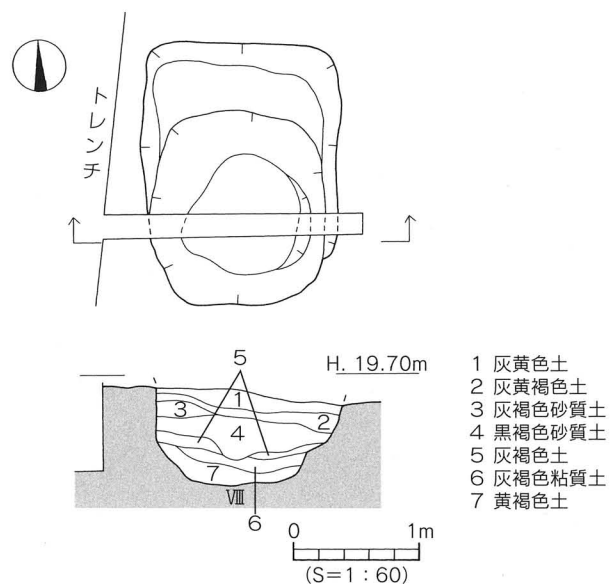


第304図 SE402出土遺物実測図 (4)

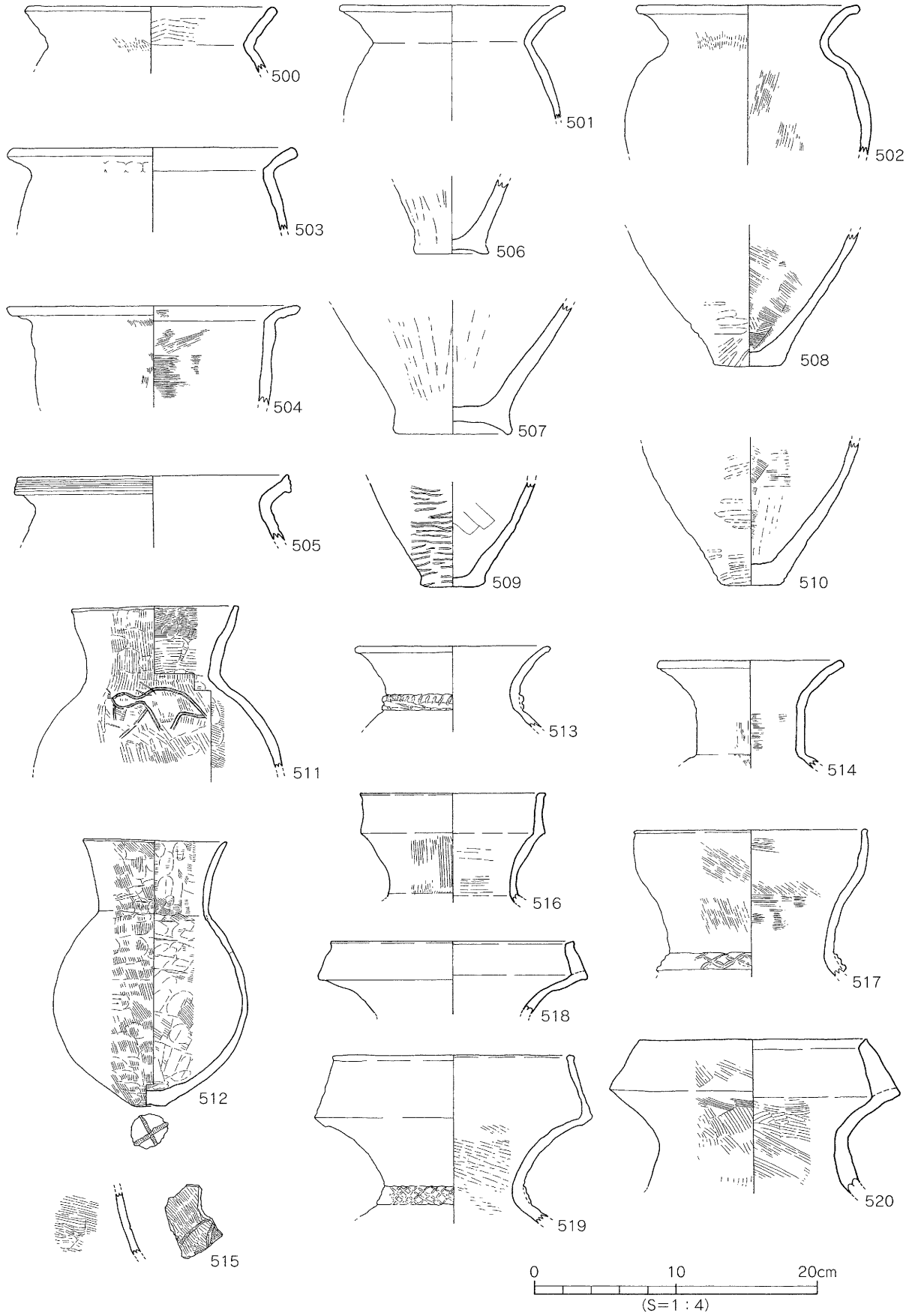
SE404 (第305図)

4区中央部、B38区に位置する。溝SD402底面にて検出した。平面形態は円形を呈するが、北側には長方形に、深さ5cm程度の凹みをもつ。円形部分の掘り方規模は、径1.40~1.50m、深さは最深部で、検出面下80cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、西壁体はやや筒状となる。井戸は素掘りのもので、壁体から井戸底面は第Ⅷ層砂礫層となる。埋土は7層に分層され、1層灰黄色土、2層灰黄褐色土、3層灰褐色砂質土、4層黒褐色粘質土、5層灰褐色土、6層灰褐色粘質土、7層黄褐色土である。堆積状況はほぼ水平堆積をなす。

遺物は、主に4・7層から完形品を含む土器片と、径10~25cm大の河原石が10点余り出土した。出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、ジョッキ形土器、支脚形土器である。石器は石錘が出土した。4層からは、壺形土器の完形品(512)や胴底部完形品(524)、7層からは土器片と完形の石錘(535)が出土した。このうち、4層出土の壺形土器(511)は肩部に鳥形の線刻が描かれている。また、壺形土器(515)にも形状は不明であるが、線刻が施されている。



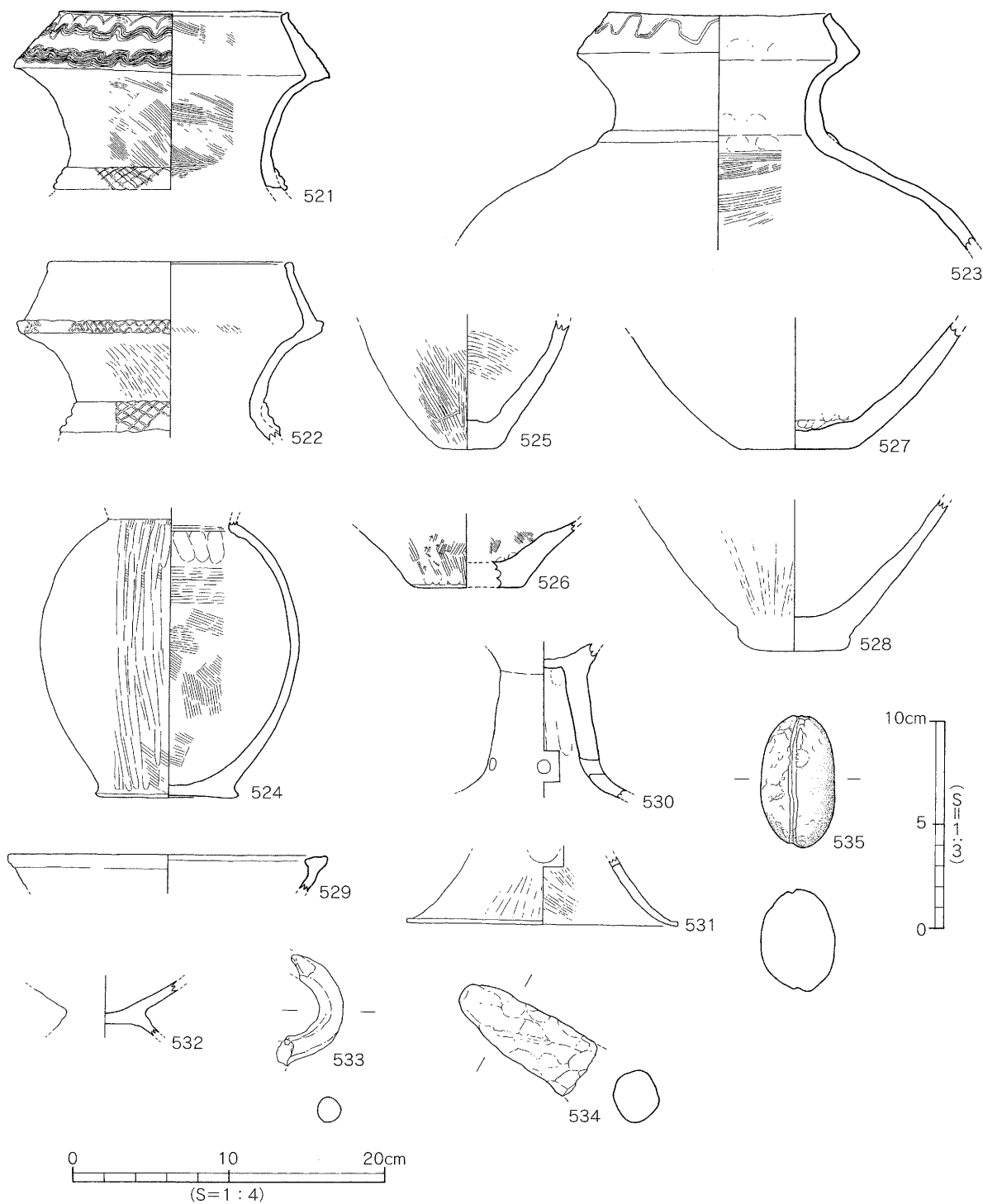
第305図 SE404測量図



第306図 SE404出土遺物実測図(1)

出土遺物 (第306・307図、図版53)

500～510は甕形土器。500～503は口縁部が「く」の字状を呈し、502は肩部の張りが強い。504・505は折曲口縁を呈し、505は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文3条を施す。506～510は胴底部で、508～510の外面にはタタキ調整を施す。511～528は壺形土器。511・512は直口壺で、511の肩部には鳥形(絵画)、512は底部外面に「×」印の線刻を施す。513・514は広口壺。515は肩部片で、



第307図 SE404出土遺物実測図 (2)

ヘラ状工具による線刻を施す。516～523は複合口縁壺。521・523は口縁部外面に波状文を施す。524は胴底部完存品で、胴部外面にタテ方向のヘラミガキ調整を施す。525～528は底部で、平底となる。529～531は高坏形土器で、529は口縁端部が内外方に拡張する。532は脚付鉢の脚部片、533はジョッキ形土器の把手、534は支脚形土器の角状突起である。535は砂岩製の石錘である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

S E 405 (第308図)

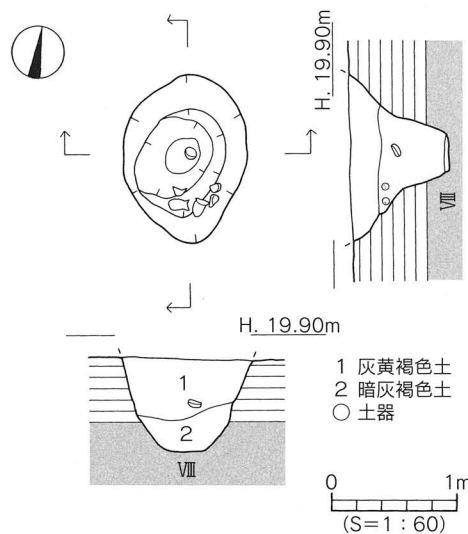
4区中央部、B39区に位置する。第Ⅵ①層上面で検出した。S D 402を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.35m、短径1.00m、深さは最深部で80cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体中位から底面にかけてはやや舟底状となる。井戸は地面に穴を掘っただけの素掘りのもので、壁体下位から底面にかけては第Ⅷ層砂礫層となる。埋土は2層に分層され、1層灰黄褐色土、2層暗灰褐色土である。堆積状況はほぼ水平堆積をなす。

遺物は、主に1層下位からの出土である。出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器である。完形の甕形土器(536・538・539)や壺形土器(541)が井戸中央部に横倒しの状態で、重なり合うように出土した。これらの土器の下面からは、大型の破片が密集して出土した。

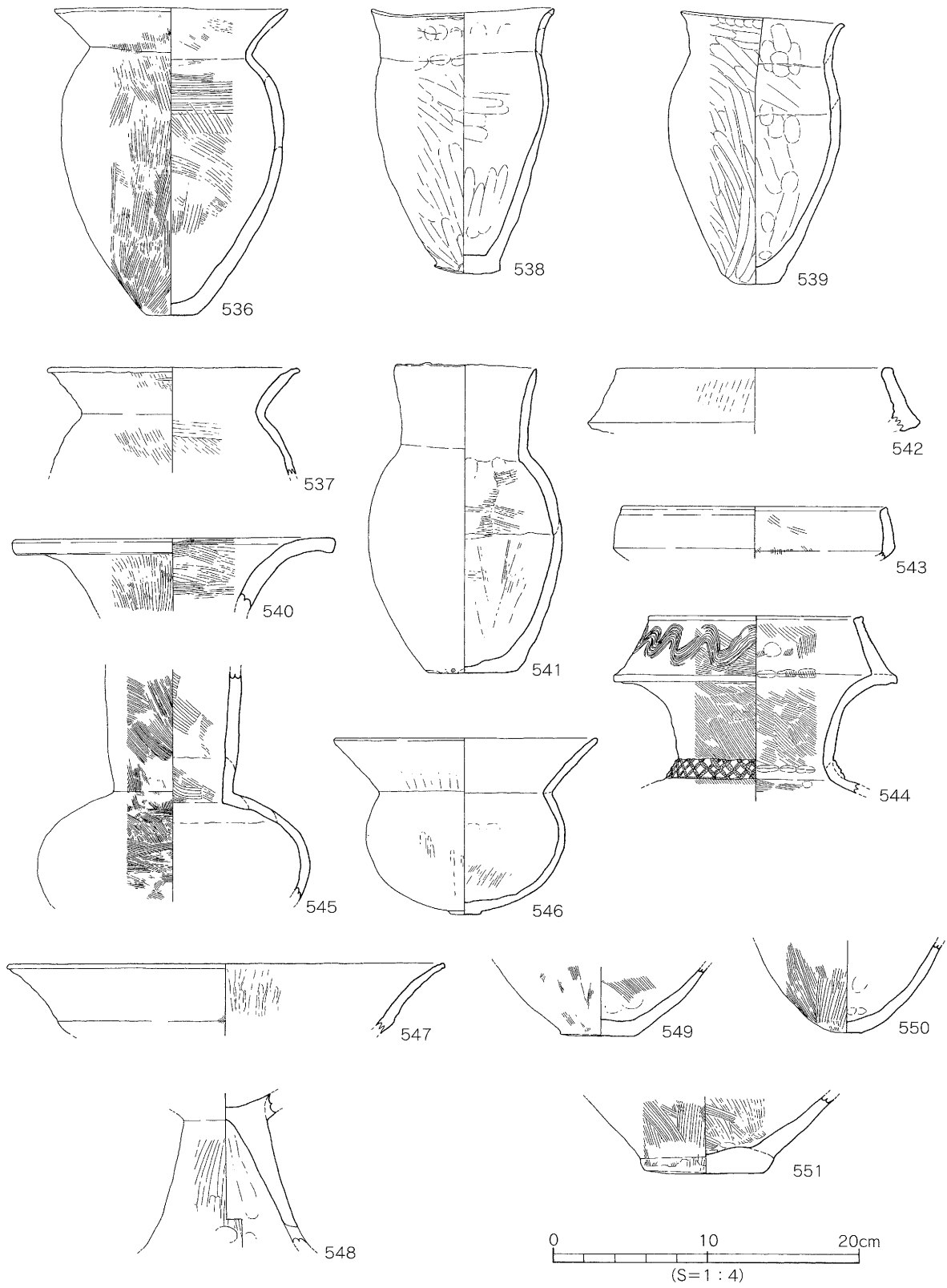
出土遺物 (第309図、図版54)

536～539は甕形土器。536・538・539は完形品で、口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部は先細りする。538・539の胴部外面は、ナデ上げにより凹凸が著しい。540～545は壺形土器。540は広口壺、541は完形の直口壺である。542～544は複合口縁壺で、544は口縁部に波状文、頸部には凸帯文上に斜格子目文を施す。545は長頸壺の頸胴部片である。546は鉢形土器、547・548は高坏形土器である。549～551は壺形土器の底部で、平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



第308図 SE405測量図

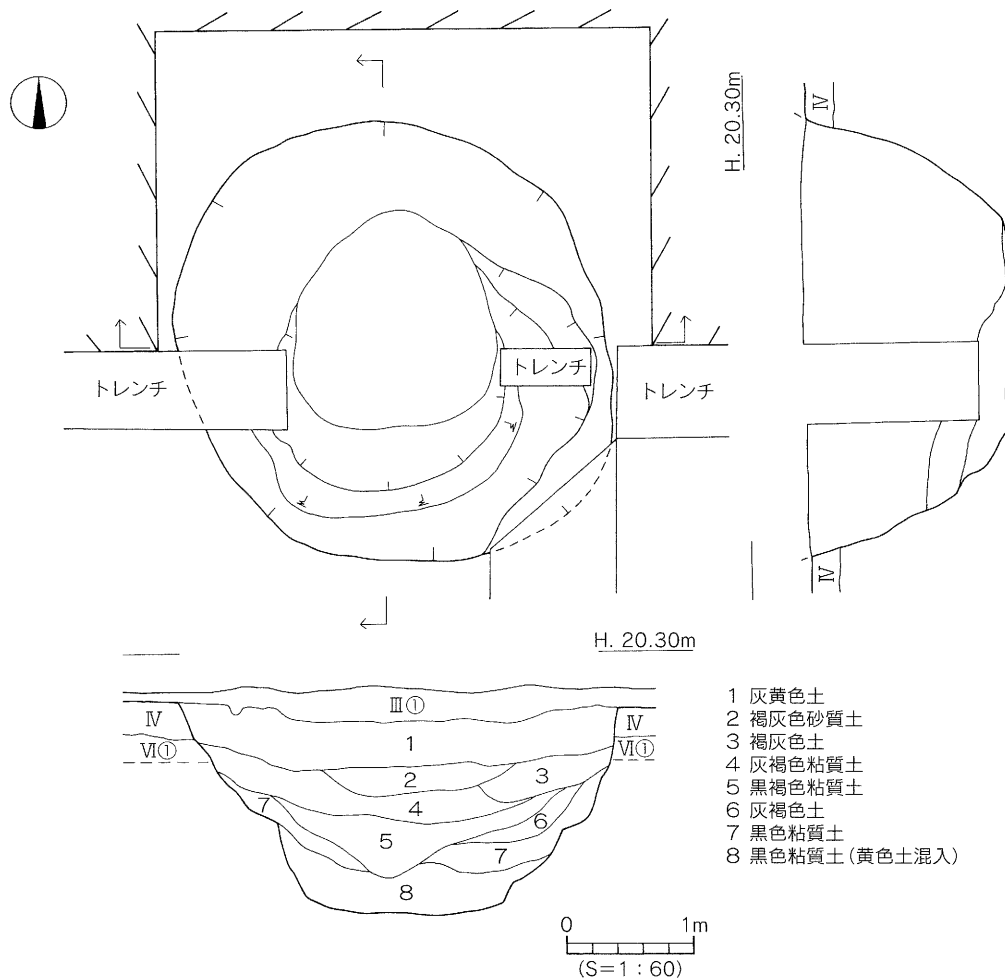


第309図 SE405出土遺物実測図

SE403 (第310図、図版44)

4区西側、A・B35区に位置する。第VI①層上面での検出であるが、土層観察により本来は第IV層上面から掘り込まれた遺構である。平面形態は円形を呈し、規模は径3.40~3.50m、深さは最深部で1.55mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、南側壁体は井戸中位付近で段をもつ。井戸は素掘りのもので、井戸壁体及び底面は、第IV層及び第VI①層となる。埋土は8層に分層され、1層灰黄色土、2層褐灰色砂質土、3層褐灰色土、4層灰褐色粘質土、5層黒褐色粘質土、6層灰褐色土、7層黒色粘質土、8層黒色粘質土(黄色土混入)である。堆積状況は水平堆積をなすが、土層観察により6層または7層堆積時に再掘削されたものと考えられる。

遺物は主に2・5層中から、弥生土器と径10~20cm大の河原石が20点余り出土した。出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器、ミニチュア土器のほか、紡錘車1点と匙形土製品1点がある。2層からは完形品の出土はなく、大型の破片が石と共に散在して出土した。一方、5層からは完形品(620)を含む土器が折り重なるように密集して出土したほか、石器(634)と石が出土した。壺形土器(602)は胎土中に角閃石を多く含むことと、色調などから讃岐地



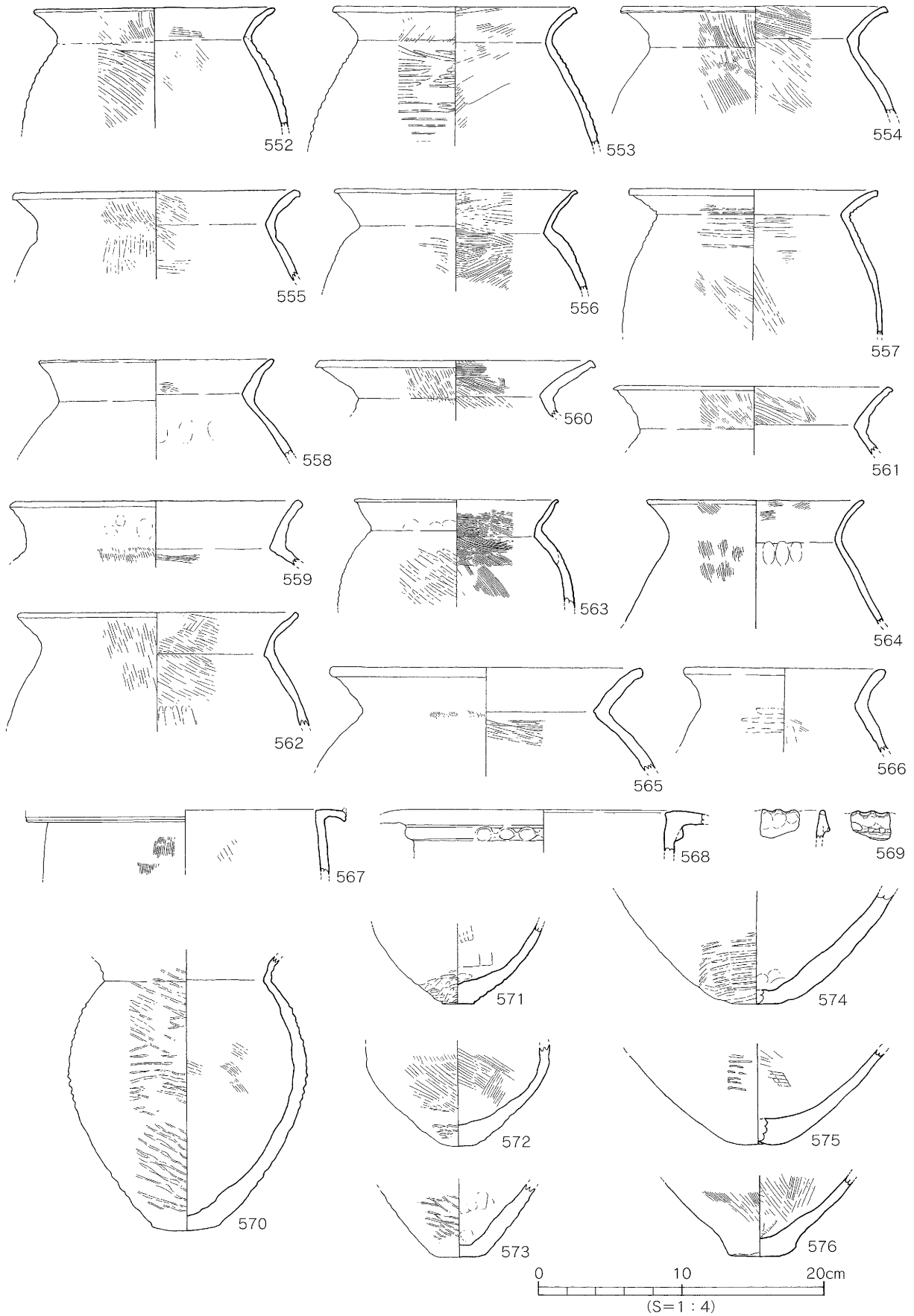
第310図 SE403測量図

方からの搬入品である。また、高坏形土器（614）は胎土中に片岩を含み、赤色顔料が付着することなどから、北部九州地方（豊後）からの搬入品と考えられる。このほか、鉢形土器（608）は形態の特徴から、岡山地方の影響を受けた外来系土器と考えられる。

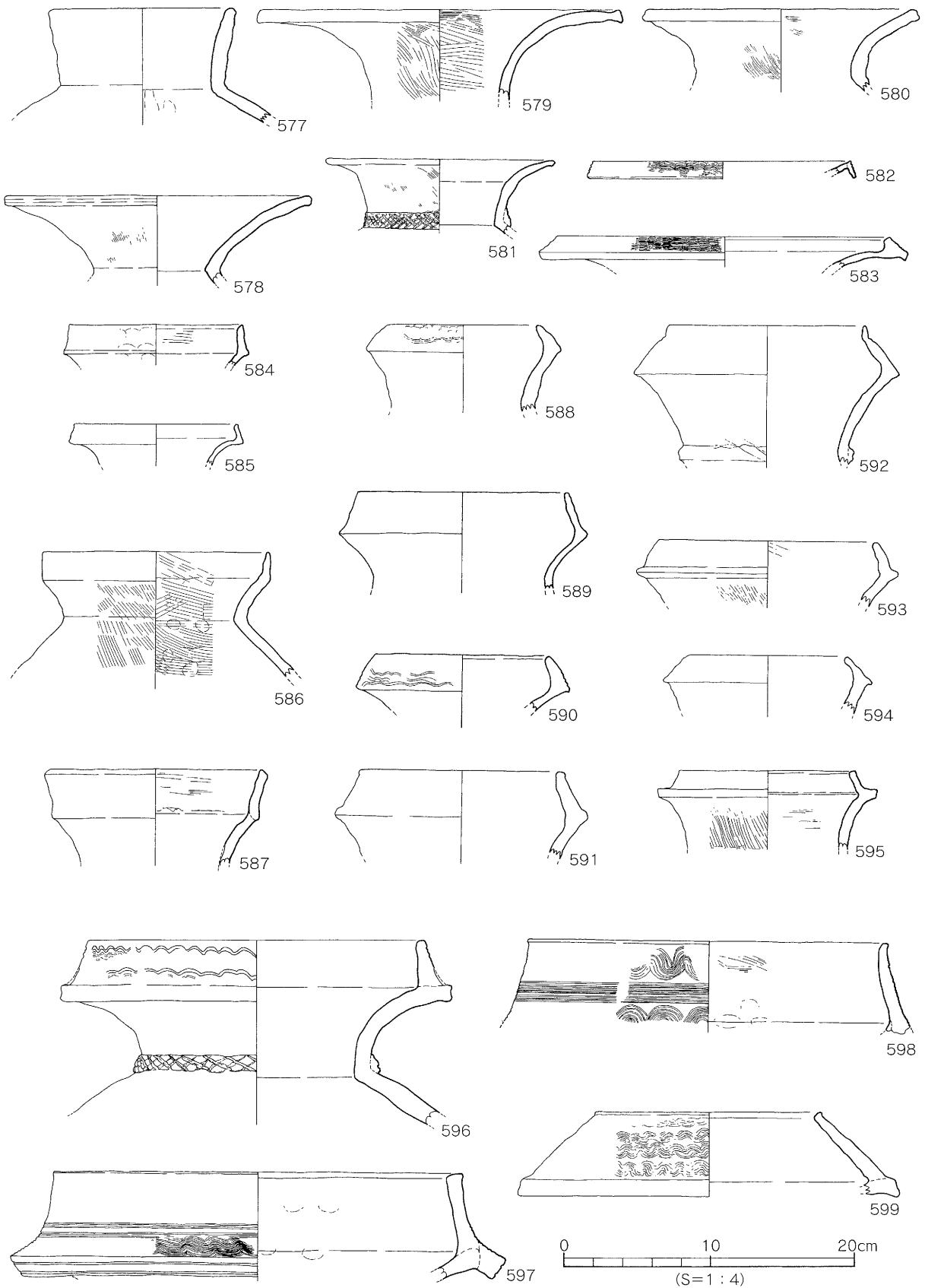
出土遺物（第311～314図、図版54・55）

552～576は甕形土器。552～566は口縁部が「く」の字状を呈し、胴部外面はタタキ調整を施すもの（552・553・556・557・563・566）、ハケメ調整を施すもの（554・555・559・560・562・564）がある。567・568は折曲口縁を呈し、567は口縁端面に凹線文を施す。568は指頭押圧による凸帯文を施す（弥生中期）。569は口唇部が波状形態を呈し、刻目凸帯文を貼り付ける（弥生前期）。570は胴部片で、外面にタタキ調整を施す。571～576は底部で平底となり、576以外は外面にタタキ調整を施す。577～605は壺形土器。577は直口壺、578～583は広口壺である。581は頸部に凸帯文を貼付、凸帯上に斜格子目文を施す。582は口縁端部を下方に、582は上方に拡張し、口縁端面には波状文を施す。584～599は複合口縁壺。584～595は中小型品、596～599は大型品である。600・601は頸肩部片、602は頸胴部片で胎土中に角閃石を多く含む。讃岐の下川津B類土器。603～605は底部片で、平底となる。606～612は鉢形土器。608は肩部の張りが強く、胴部は内外面共にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。612は脚付鉢の坏脚部片である。613～616は高坏形土器。614は口縁端部が内外方に拡張し、内外面に赤色顔料が付着する。外来系土器。617～627は支脚形土器。617・618は受部が「U」字状にカットされる。619～624は角状突起をもつもので、619・620は3方向の突起をもち、脚部は中実となる。628は所謂甗形土器で、甕形土器の転用品である。629～631はミニチュア品、632は土製の紡錘車である。633は匙形土製品で、柄部は欠損するが体部はほぼ完存する。634は緑色片岩製の柱状片刃石斧である。

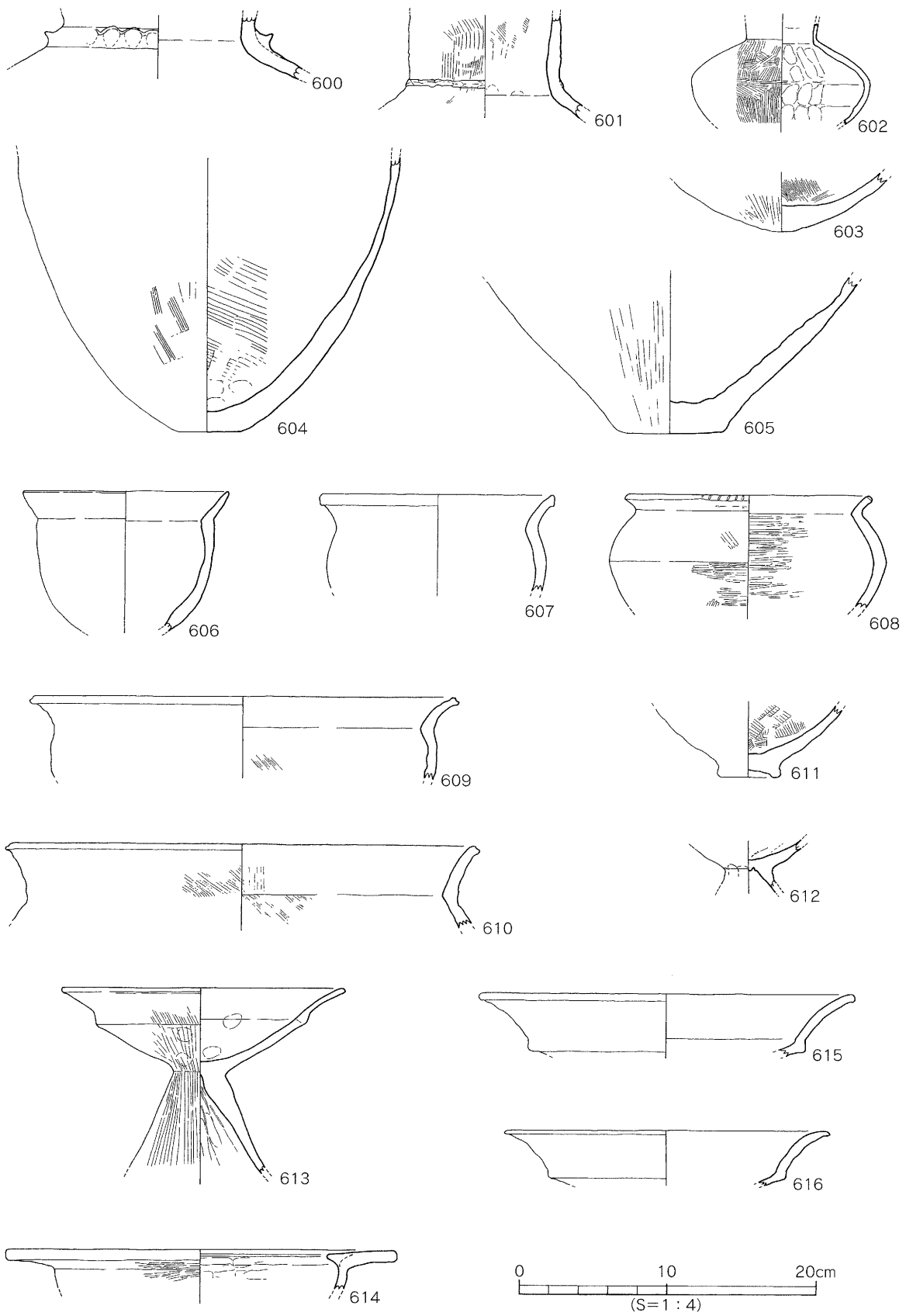
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期末とする。



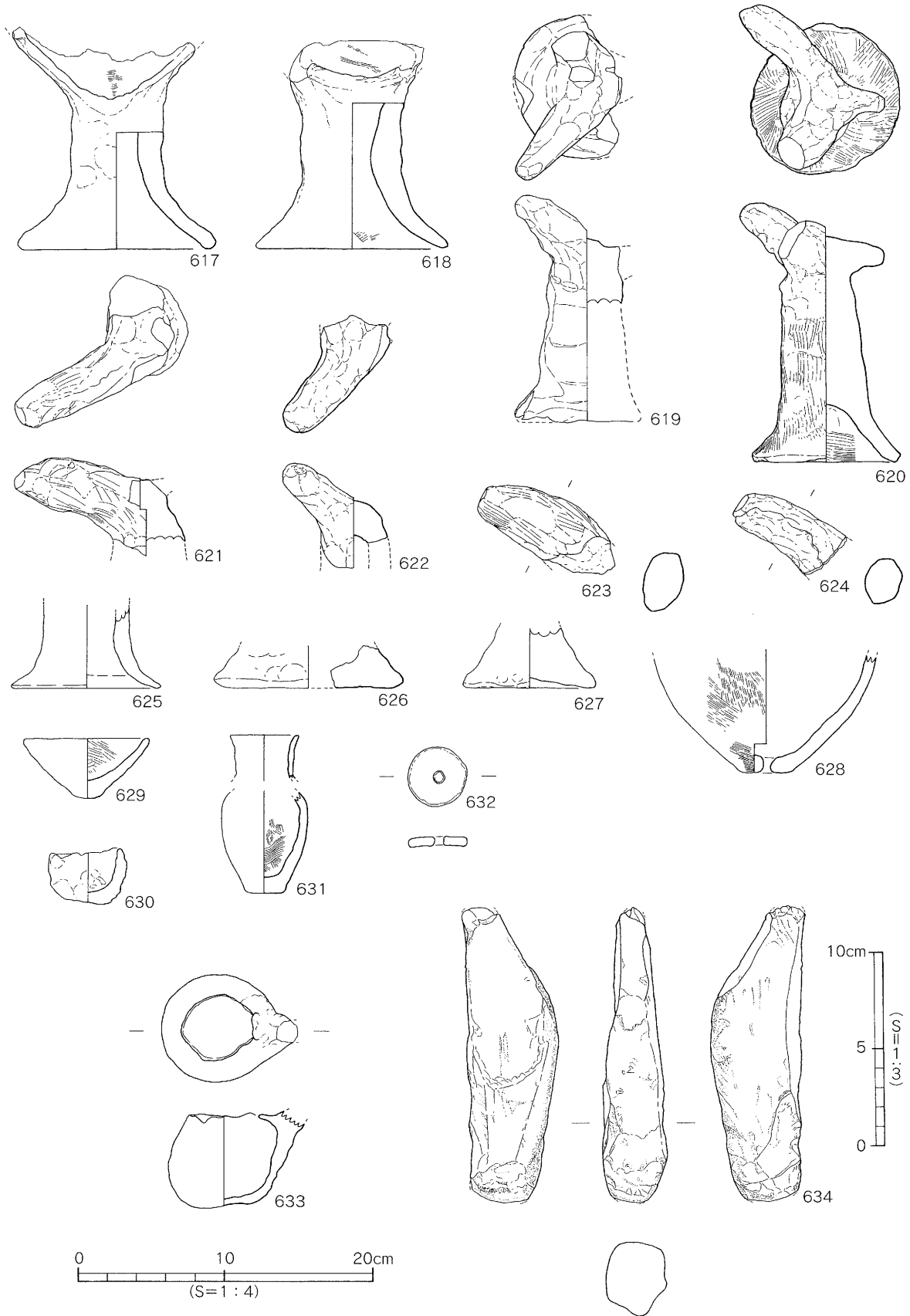
第311図 SE403出土遺物実測図(1)



第312図 SE403出土遺物実測図 (2)



第313図 SE403出土遺物実測図 (3)



第314図 SE403出土遺物実測図(4)

(6) 土器溜まり (S X) (第239図)

調査では、遺構の平面プランが明確でなく、遺物の集中する地点が2 B地区で3ヶ所みられた。およそ、径1 m×1 mの範囲に土器が密集している。ここでは土器溜まり (S X) として扱った。S X 201は第IV層掘り下げ時、S X 202及びS X 203は第III①層掘り下げ時に検出したものである。

S X 201出土遺物 (第315図)

635は甕形土器の口縁部片で、口縁端部は上方に拡張する。636は壺形土器の頸肩部片で、断面三角形の凸帯文を貼り付ける。637は高坏形土器の口縁部で、口縁端部は内外方に拡張する。

S X 202出土遺物 (第316～318図、図版55)

638～646は甕形土器。638～645は口縁部が「く」の字状を呈し、胴部外面にはタタキ調整を施すもの (638～642・644～646) とハケメ調整を施すもの (643) がある。647～660は壺形土器。647～653は広口壺で、口縁端面に刻目を施すもの (652)、波状文を施すもの (653) がある。654～657は複合口縁壺。656の口縁接合部には刻目を施す。659・660は底部で平底となる。661～667は鉢形土器。661～664は直口口縁を呈し、外面にはタタキ調整を施す。666は脚付鉢の脚部片である。668～680は支脚形土器。668～672は台形状を呈し、中空となる。673～678は角状突起をもつものである。681～684は鉢形土器のミニチュア品、685は分銅形土製品で無文である。686は分銅形土製品かは不明。

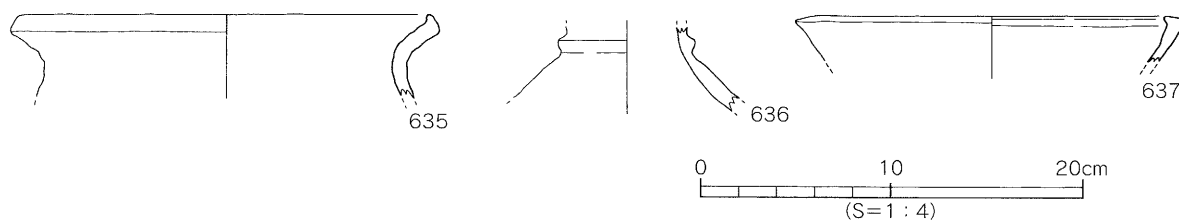
S X 203出土遺物 (第318図)

687・688は壺形土器。687は複合口縁壺で、頸部に押圧凸帯文を貼り付ける。688は広口壺で、胴部外面にはタタキ調整後、ハケメ調整を施す。689は高坏形土器の脚部片で、柱部外面にヘラミガキ調整を施す。

4. その他の遺構と遺物

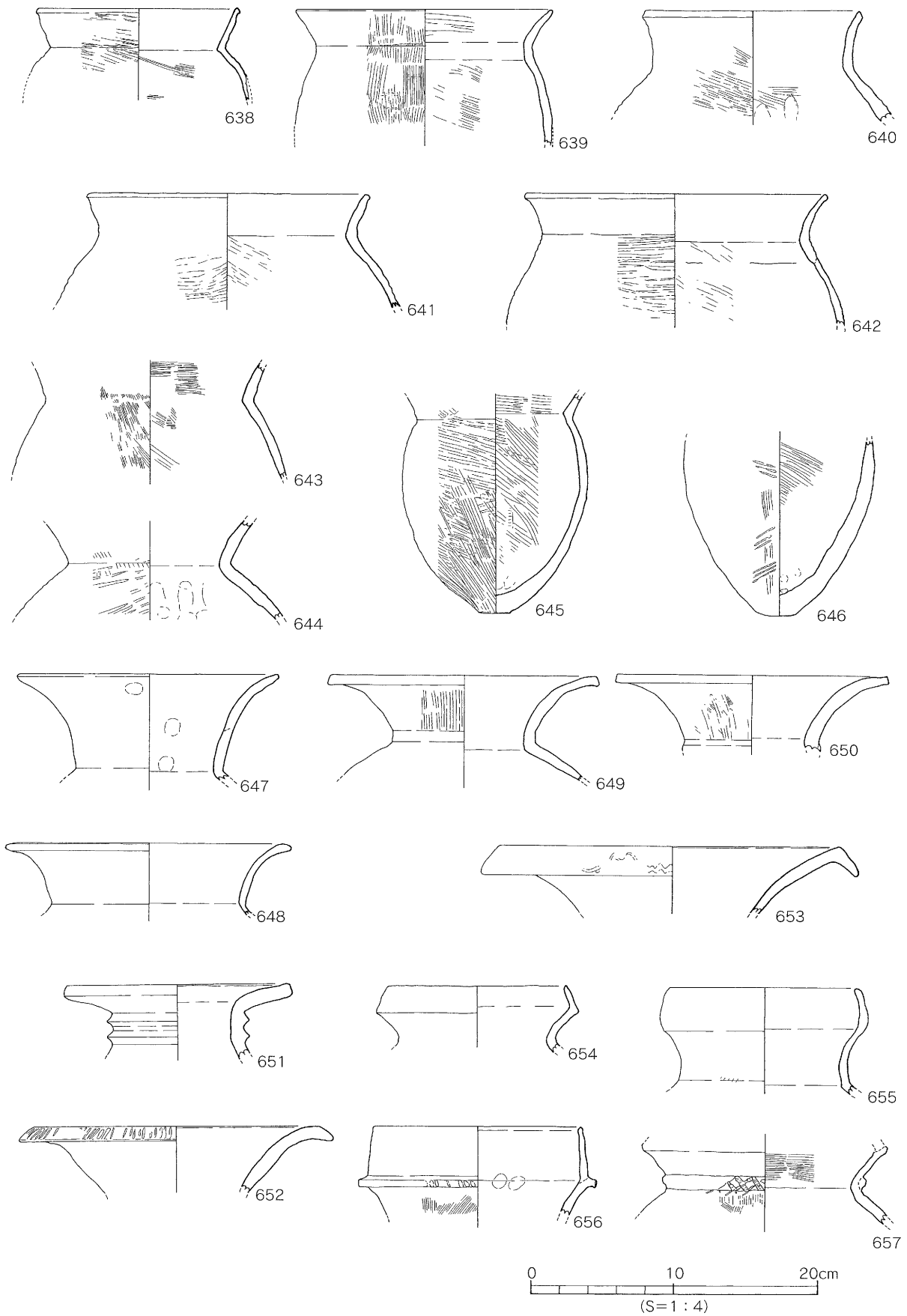
(1) ピット

本調査で確認されたピットは132基である。内訳は1区から22基、2区から66基、3区から23基、4区から21基を検出した。さらにピット埋土は灰褐色土、黒緑色土、黒褐色土の3グループに分けられ、出土遺物から灰褐色土は古代、黒緑色土は古墳時代、黒褐色土は弥生時代に時期比定される。ピット内から出土した遺物は大半が小片であるが、実測可能な遺物を掲載する。

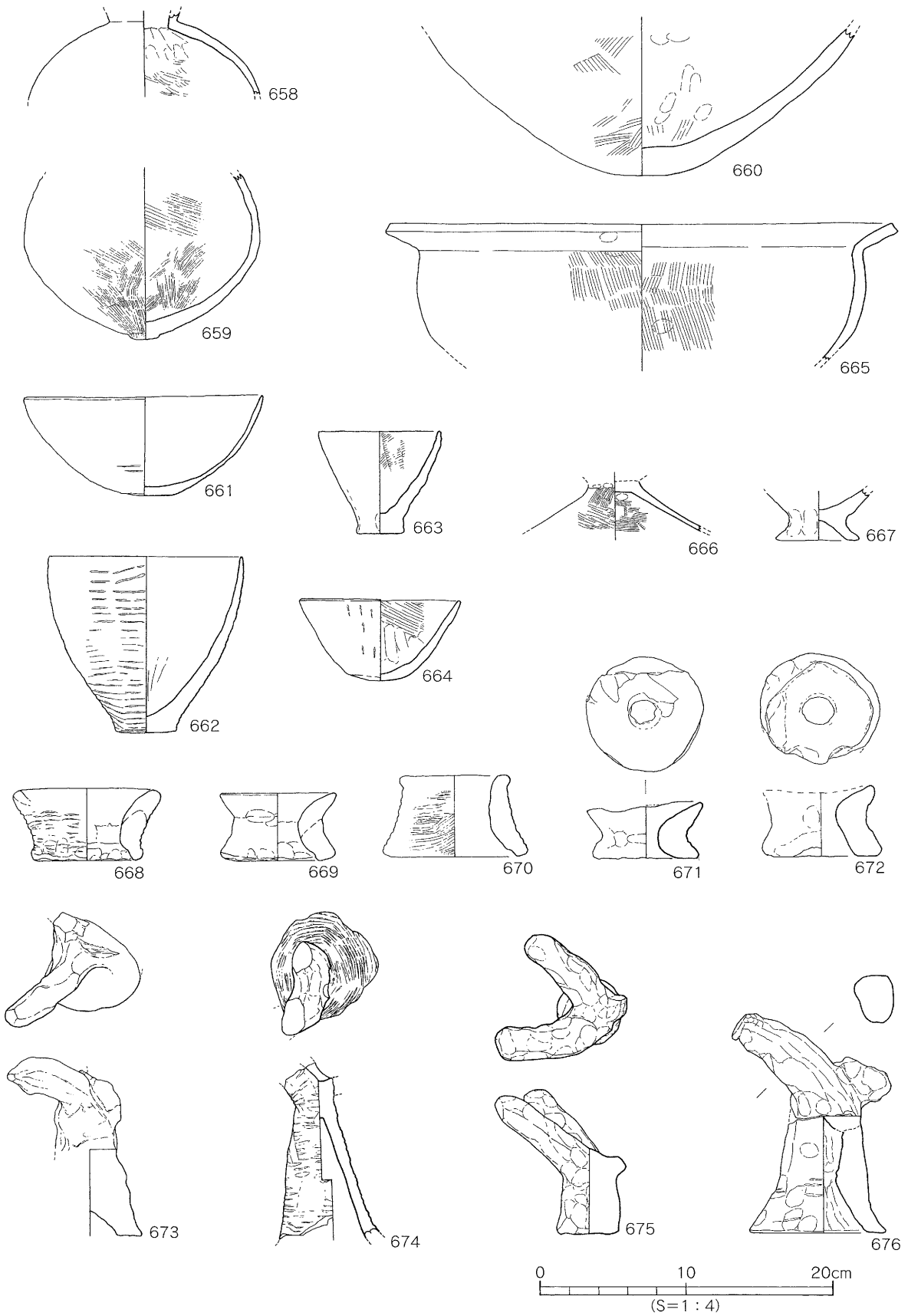


第315図 SX201出土遺物実測図

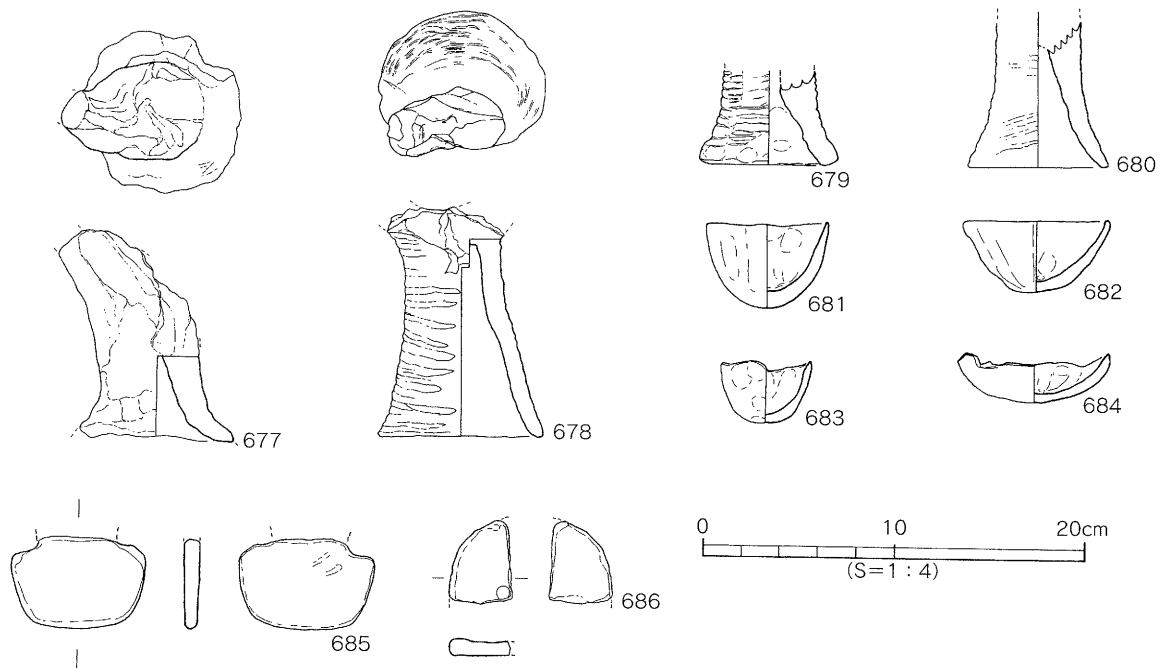
弥生時代の遺構と遺物



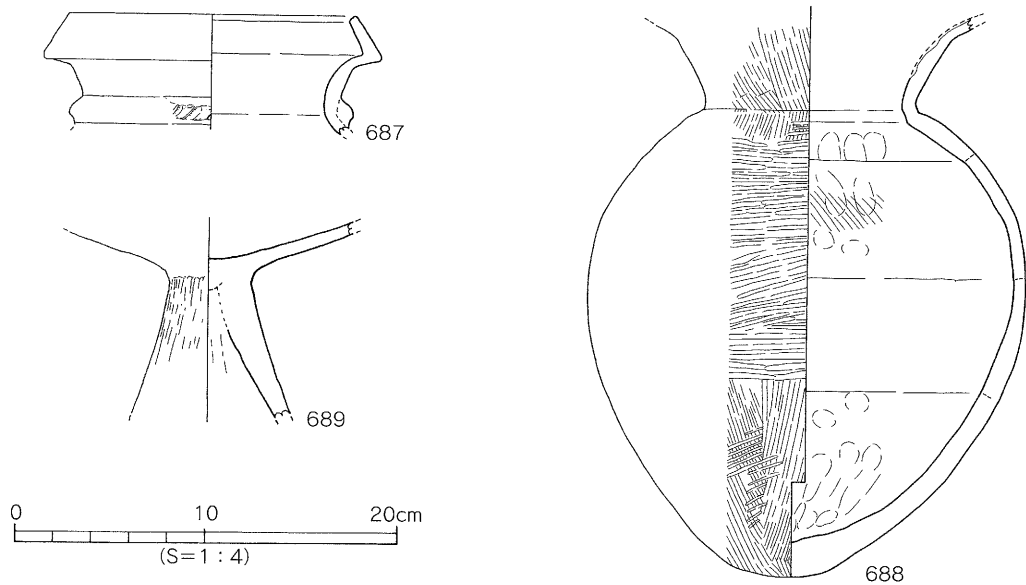
第316図 SX202出土遺物実測図(1)



第317図 SX202出土遺物実測図 (2)



SX202 : 677~686



SX203 : 687~689

第318図 SX202 (3)・203出土遺物実測図

出土遺物（第319図、図版55）

690～694は甕形土器。690は貼付口縁、691～693は折曲口縁を呈し、頸部に指頭押圧による凸帯文を貼り付ける。694は弥生前期の甕の口縁部で、口唇部下に刻目凸帯文を貼り付ける。695～699は壺形土器。695～698は広口壺の口縁部で、695は口縁端面に凹線文3条、696は山形文、697は斜格子目文を施す。700は鉢形土器の完形品で、体部外面にはタタキ調整後、ハケメ調整を施す。701～703は高坏形土器。701は口縁端部を内外方に拡張し、口縁端面に刻目を施す。702は口縁端部が内方に拡張する。704～707は甕形土器の底部である。708は壺形土器の肩部片で、鹿の線刻を施す。

（2）包含層出土遺物

本調査では第Ⅲ層、第Ⅳ層の遺物包含層を確認した。各調査区で出土した遺物の実測図を掲載する。

第Ⅲ層出土遺物（第320・321図、図版56）

709～711は甕形土器で、口縁部は「く」の字状を呈する。712・713は広口壺で、713は口縁端面に凹線文3条を施し角閃石を含む搬入品（讃岐・下川津B類土器）。714～717は複合口縁壺である。718は肩部片で、波状文と沈線文を施す。719・720は鉢形土器。719の外面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。721は高坏形土器の脚部片で、長方形の透かしを2箇所看取する。722～725は支脚形土器、726は器台形土器である。727・728は甕形土器、729は壺形土器の底部である。730は土製の紡錘車で、土器の転用品である。731はミニチュア品、732は匙形土製品である。732は体部が円形、皿状を呈し、柄部は欠損する。733はサヌカイト製の打製石鏃、734・735は石庖丁で、735は敲打段階の未成品である。736は扁平片刃石斧で、敲打段階の未成品である。737・738は器種不明品である。

第Ⅳ層出土遺物（第322図、図版56）

739～743は甕形土器。739は口縁端面に凹線文2条を施す。740～742は頸部に押圧凸帯文を貼り付ける。744～750は壺形土器。746は口縁端面に凹線文3条と円形浮文を施す。形態の特徴より、広島地方（備後）からの搬入品である。747は口縁部が長方形に拡張され、口縁端面に凹線文2条を施す。形態の特徴から、西南四国地方からの搬入品である。748は口縁部が丸く拡張されており、西南四国地方の影響を受けた外来系土器である。751・752は高坏形土器で、751は外面に赤色顔料が付着することから、北部九州地方の影響を受けた外来系土器である。753は分銅形土製品で、側面に穿孔を施す。

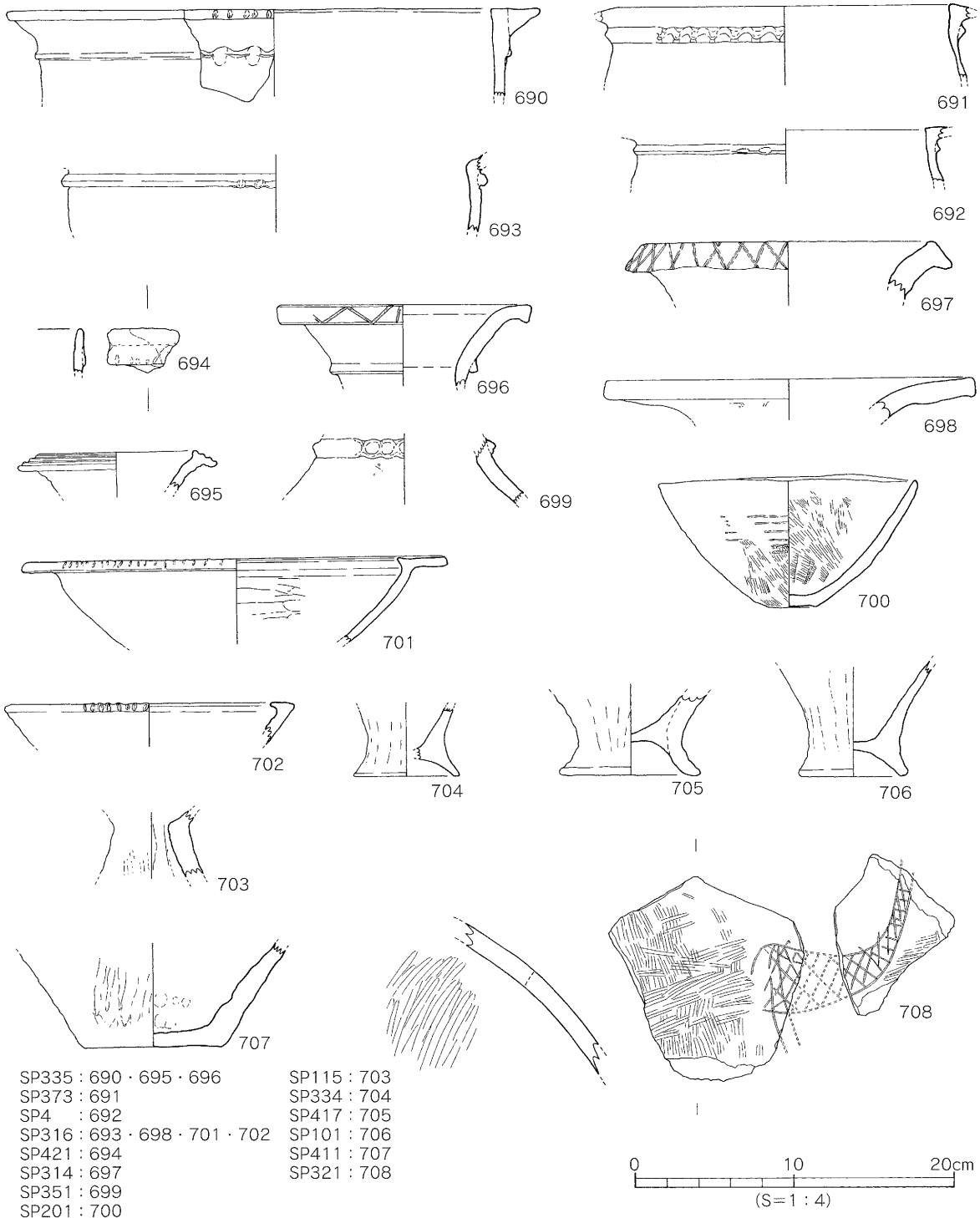
（3）出土地点不明遺物

本調査では重機で掘削中や廃土中から出土した遺物がある。出土層位や地点が不明なため、地点不明出土遺物として報告する。

出土遺物（第323・324図、図版56）

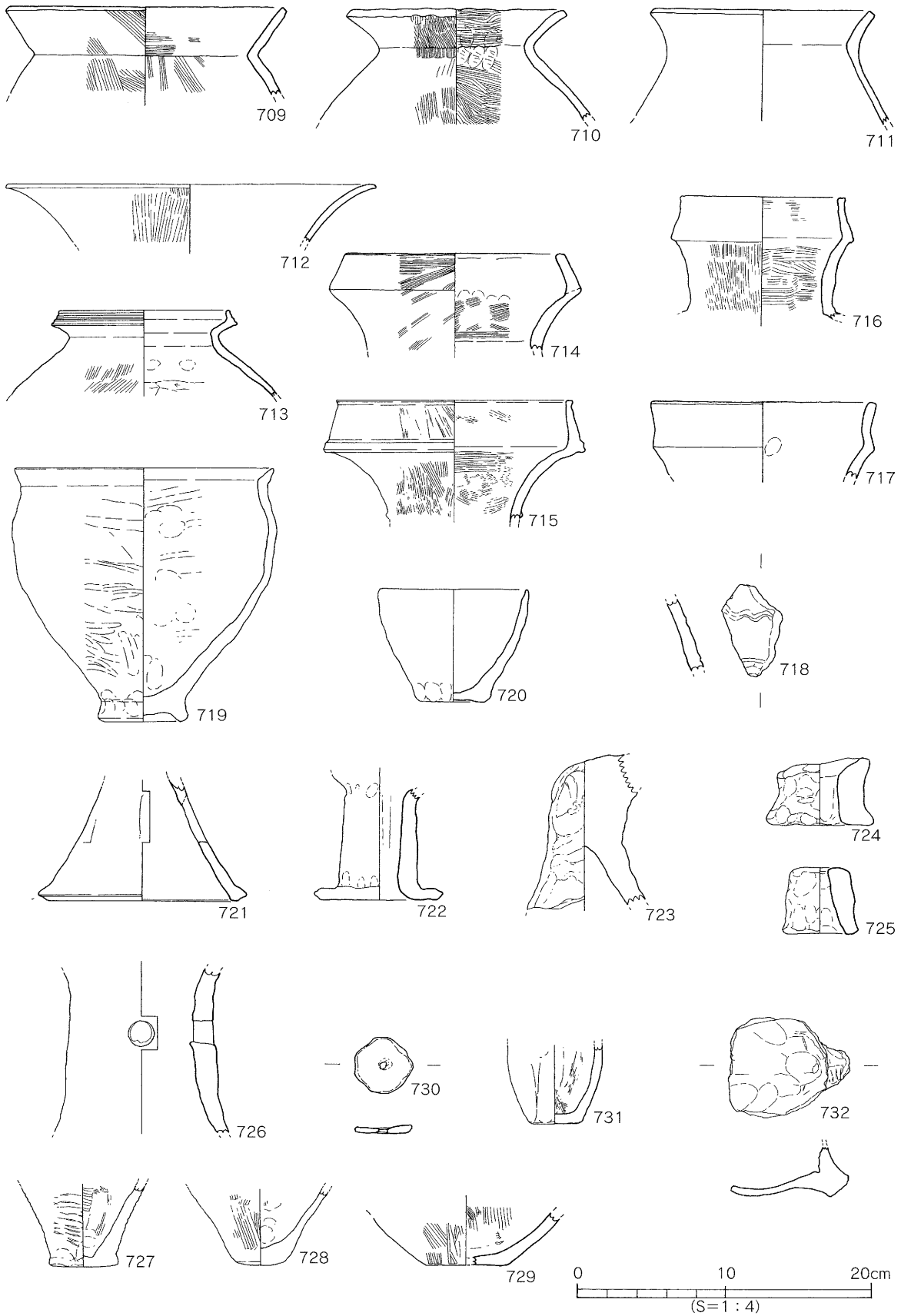
754・755は甕形土器。754は口縁下に押圧凸帯文、口縁端面に刻目を施す。755は胴部に段をもち、段上に刻目を施す。756～760は壺形土器。756は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に浮文2列、口縁接合部に山形文を施す。形態の特徴から、大分地方（豊後）からの搬入品である。757は短頸壺、760は頸部片で押圧凸帯文を貼り付ける。758・759は弥生前期の広口壺。758は頸部にヘラ描き沈線文3条、胴部上位に横沈線文2条と沈線文間に斜線文5～6条を施す。759は口縁下と胴部中位に段をもち、外面はヨコ方向の丁寧なヘラミガキ調整を施す。761・762は高坏形土器で、761は柱部に貫通

しない矢羽状透かしと沈線文、柱裾部に凹線文を施す。763は支脚形土器、764は須恵器坏蓋である。765は扁平片刃石斧で、研磨段階の未成品である。766・767は柱状片刃石斧で、研磨段階の未成品である。768は緑色片岩製の伐採斧で、敲打段階の未成品である。769・770は砂岩製の石錘、771はサヌカイト製の剥片、772は赤色珪質岩製の石鎌である。



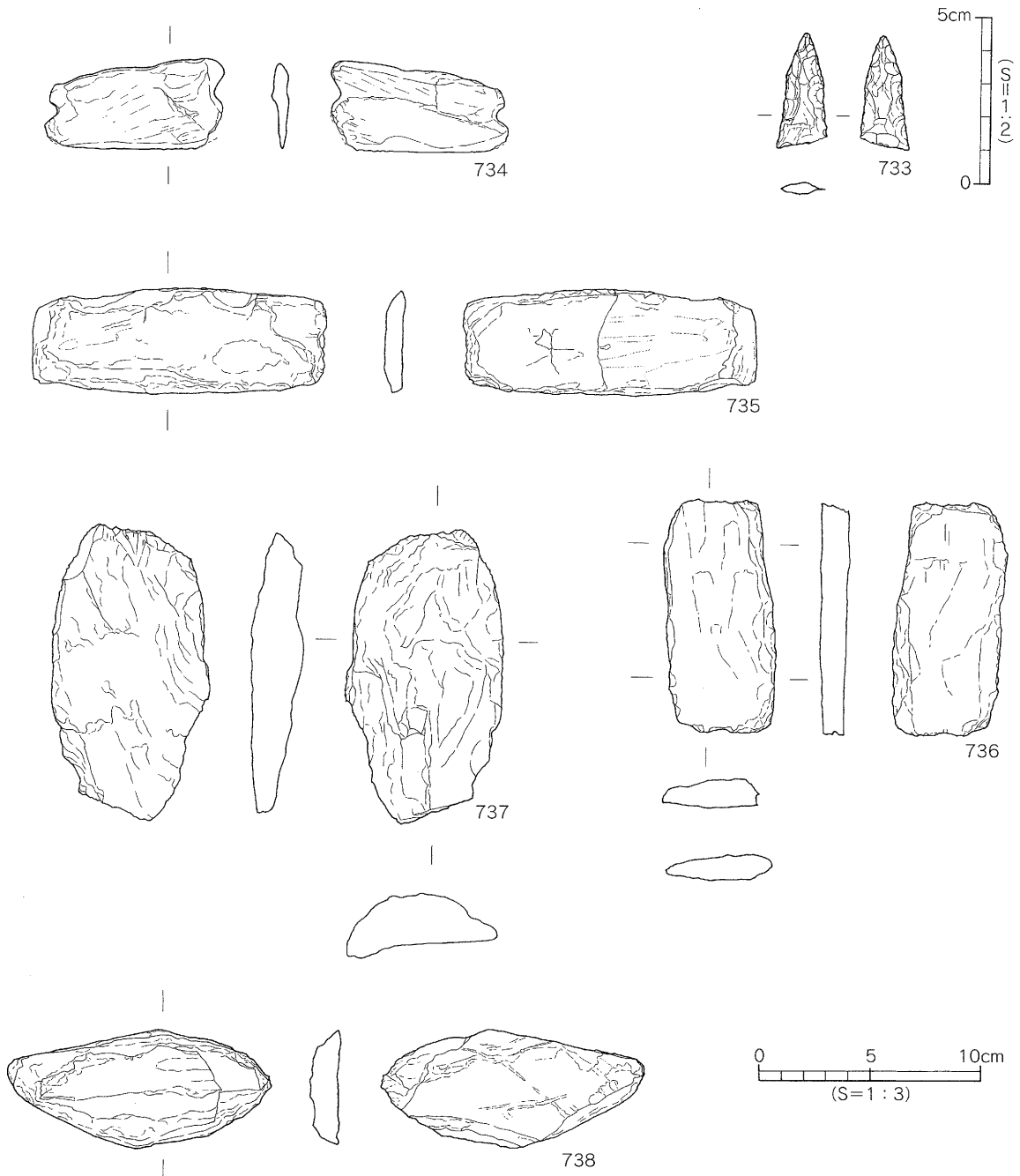
第319図 SP出土遺物実測図

西石井遺跡 2 次調査地

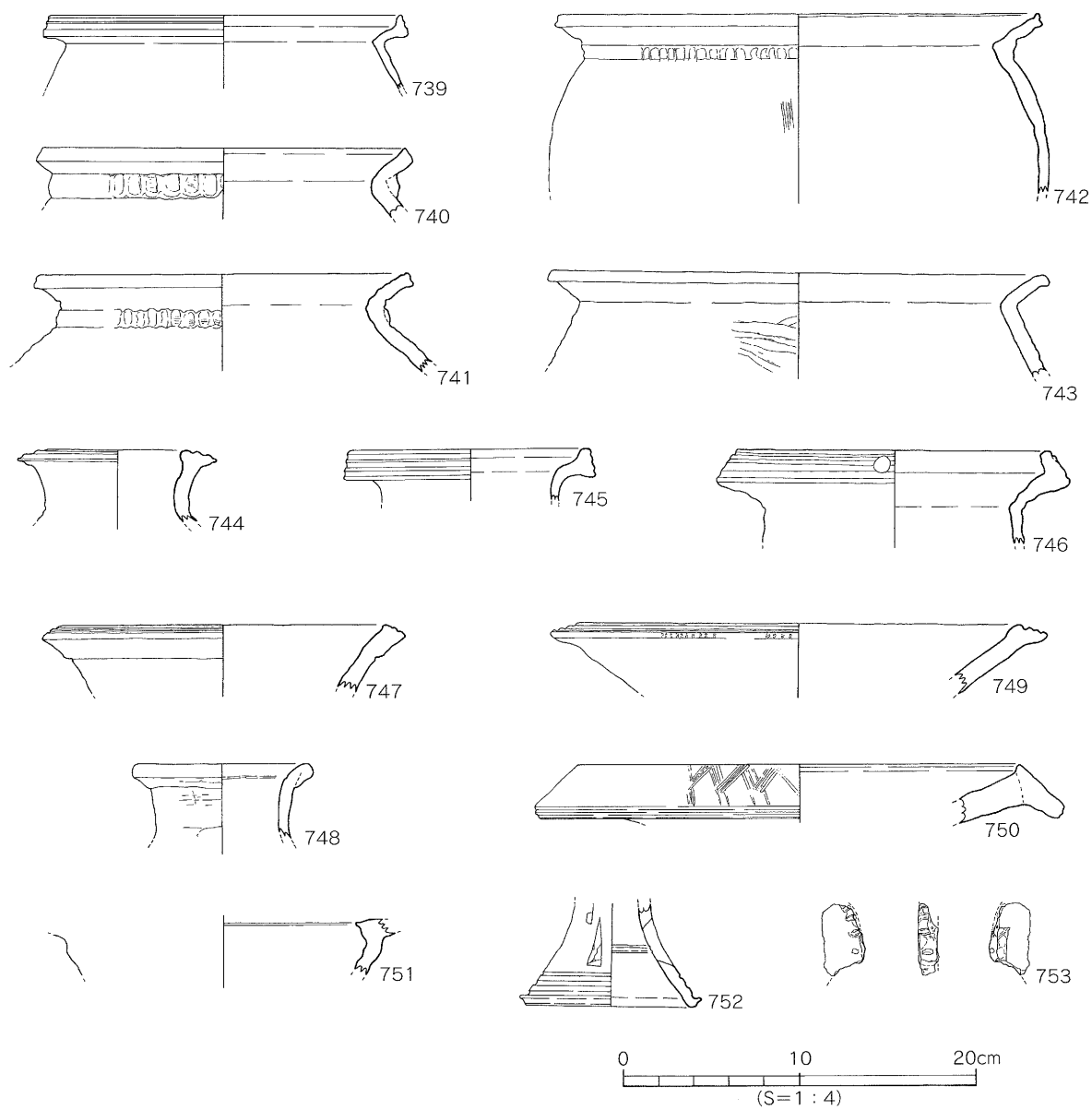


第320図 第三層出土遺物実測図(1)

その他の遺構と遺物

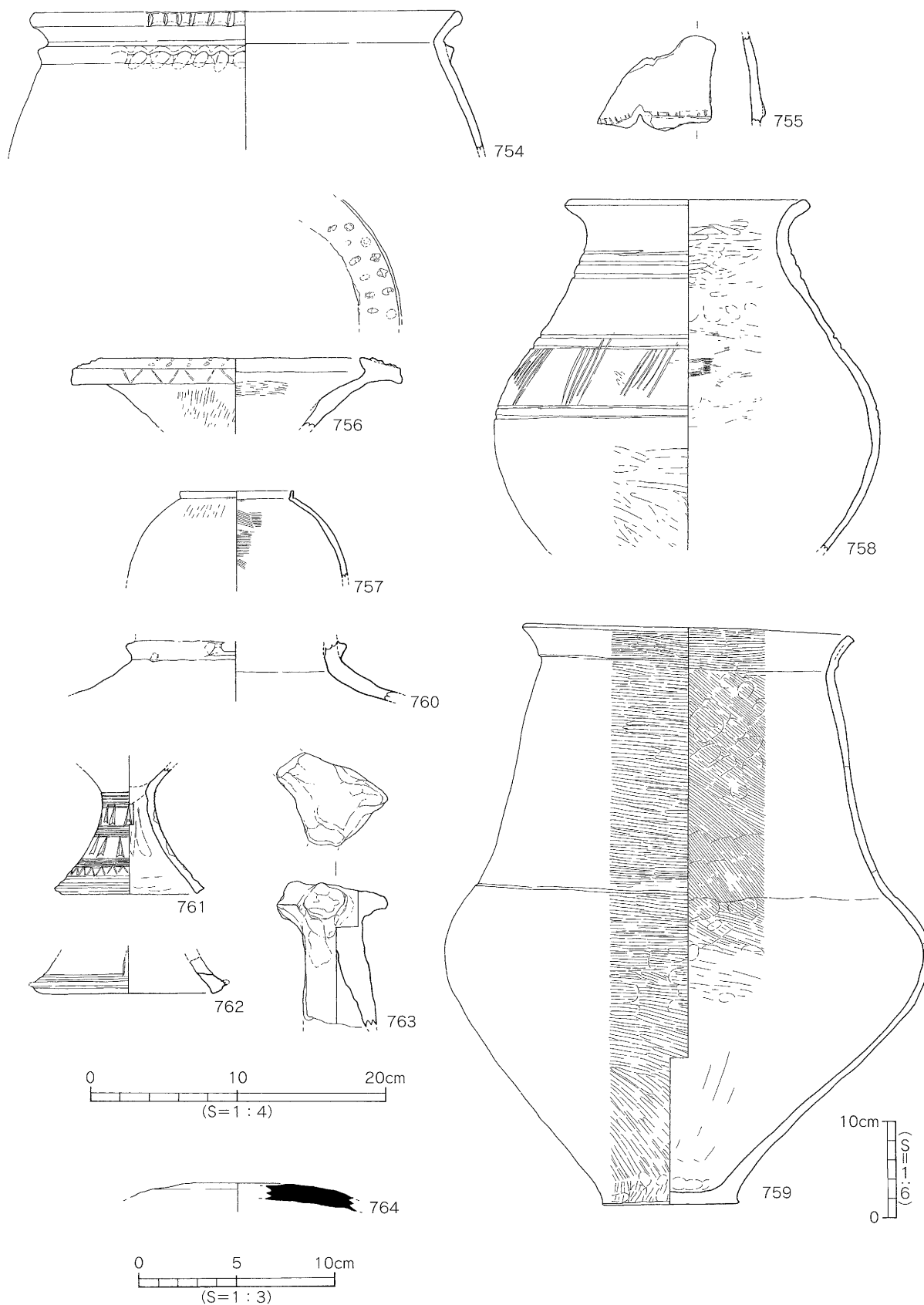


第321図 第Ⅲ層出土遺物実測図(2)

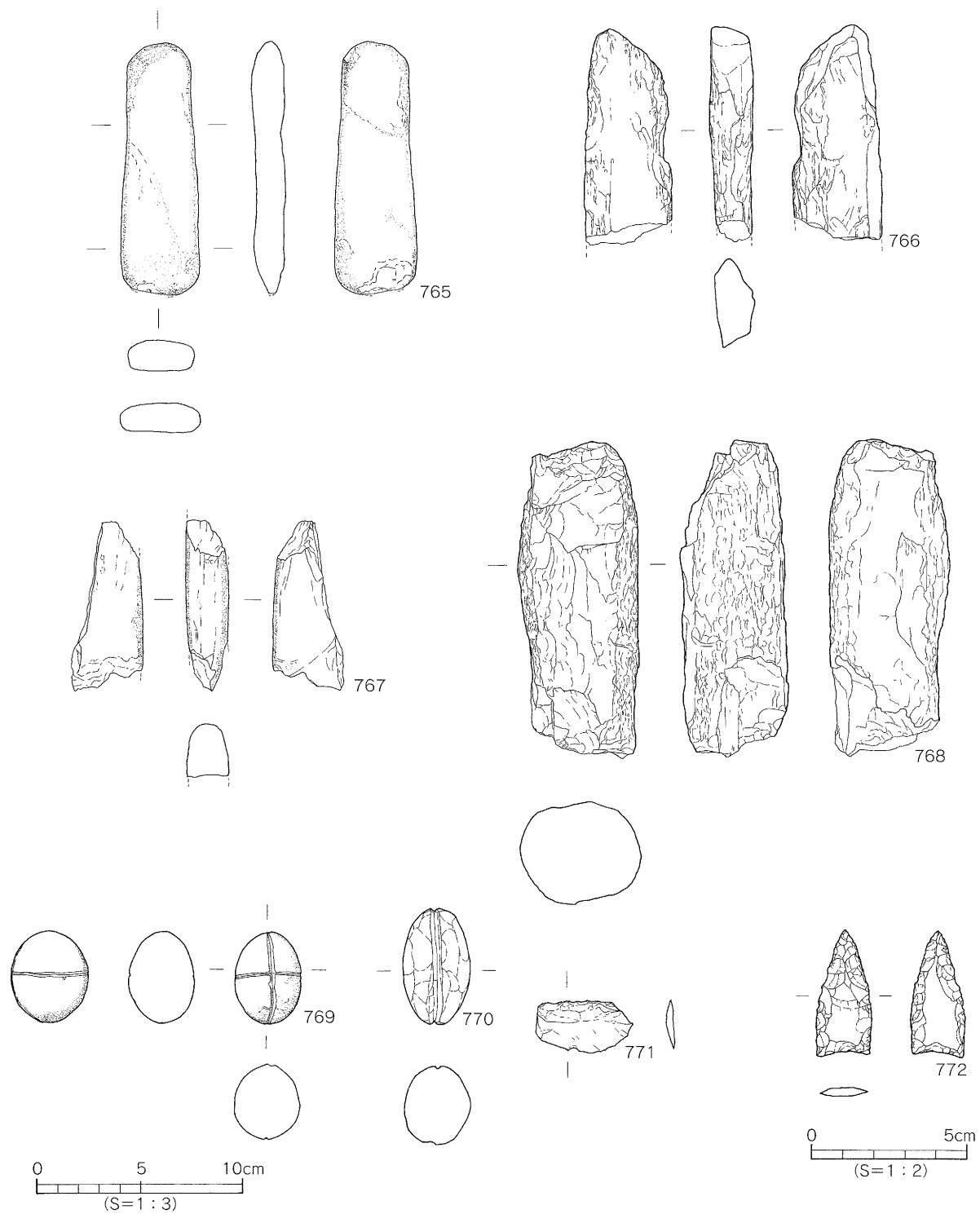


第322図 第IV層出土遺物実測図

その他の遺構と遺物



第323図 出土地点不明遺物実測図 (1)



第324図 出土地点不明遺物実測図(2)

5. 小 結

本調査では、弥生時代前期から後期までの遺構や遺物を確認した。前期の遺構は未検出であるが、前期前半に時期比定される土器が出土している。ここでは、中期から後期に時期比定される遺構・遺物を中心に、時期別に説明する。

(1) 遺 構

1) 弥生時代中期

弥生時代中期の遺構は、前半に時期比定されるものではなく、中葉から後半に限られる。中期中葉の遺構は、溝と土坑とがある。調査地東側で検出した溝 S D304・402は同一溝と考えられ、溝内からは中期中葉から後半の土器類と共に、150点余りの石器が出土した。なお、本稿掲載の石器のうち、約8割が未成品である。在地の石材を使用していることや、未製品が多数出土していることから、該期には調査地及び近隣地域に石器製作に携わる人々の集落が存在している可能性が高いと考えられる。中期後半では、竪穴式住居址や溝、土坑が該期の遺構である。竪穴式住居址は調査地中央部2B区に集中しており4棟を検出した。平面形態や規模をみると、S B201は径5m以上を測る円形住居址で、他の3棟は一辺4～5mを測る方形住居である。このうち、S B201は床面や壁体から焼土や炭化材、炭化物が検出された。また、床面検出の土坑のうち、4基の土坑内からも焼土や炭化物が層をなして検出されたことから、遺構内で火を使った何らかの行為が行われたものと推測される。このほか、15基の土坑が検出されたが、調査地全域に点在している。

2) 弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は、竪穴式住居址、溝、土坑、井戸である。竪穴式住居址は、廃棄・埋没時期が後期初頭から前半期と後期後半期とに分かれる。前者に該当する住居址は調査地中央部、2B区と3区で8棟を検出した。平面形態では円形と方形の2種類に分けられ、規模は中期後半期の住居址とほぼ同じである。後者の住居址は、3A区で2棟を検出した。3A区検出のS B302は、長さ4.6m、幅3.5mを測る長方形住居址であり、S B303も同規模と考えられる。

本調査で注目される遺構は、6基の井戸である。3B区で1基、4区では5基の井戸を検出した。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模をみると、径1～2m前後の井戸3基と、径3mを超えるやや大型の井戸1基とに分けられる。すべての井戸が、地面に穴を掘っただけの素掘構造で、断面形態は逆台形状を呈するが、径1～2m前後の井戸は、一部が筒状または袋状となる。井戸内からは完形品、完存品を含む多量の土器片と、径5～20cm大の河原石が出土した。なお、埋土の堆積状況は水平または斜堆積をなすが、4基の井戸では埋土上位付近で再掘削された状況がみられた。遺物は再掘削された凹み内から、完形品が出土するケースが多く、井戸内にて、何らかの祭祀的な行為がなされたものではないかと推測される。また、S E403からは埋土上位にて、土器片が重なり合う状況でレンズ状に堆積しており、土器の廃棄場として井戸が利用されたものと考えられる。

(2) 遺 物

本調査では、弥生時代前期から後期までの遺物が出土した。前期はS E403より刻目凸帯文系の土器片や、出土層位は不明であるが、前期前半に時期比定される土器が出土している。中期では中期前半の資料はなく、中葉から末までの遺物と後期の遺物が遺構や包含層中より出土している。この中に

は、搬入品や外来系土器のほか、土製品や線刻土器、石器が出土した。

まず、搬入品・外来系土器であるが、遺構及び包含層中より20点が出土した。搬入品は瀬戸内海沿岸及び西南四国地方からのもので、12点が出土した。遺構出土品では、中期中葉から後半の溝S D304からは西南四国地方、S D402では岡山県からの搬入品がある。後期には、S D401とS K301より広島県（備後）、S E401からは大分県と広島県（安芸）、S E403では大分県と香川県からの搬入品がある。このほか、包含層中より上記の地域からの搬入品が出土している。また、搬入品ではないが、上記の地域の影響を受けたと考えられる外来系土器が8点出土している。

土製品では、分銅形土製品6点と匙形土製品2点が出土した。分銅形土製品は、中期後半の土坑S K408より3点、後期の溝S D401より1点、S X202より1点、第Ⅳ層中より1点がそれぞれ出土した。このうち、S K408出土品は上下セットと思われるものである。匙形土製品は井戸S E403と第Ⅲ層中より1点ずつが出土した。S E403出土品は、柄部を欠損するものの体部完存品で、球形、袋状を呈する。一方、第Ⅲ層出土品は体部が楕円形、皿状を呈するものである。これらの土製品のほかに、井戸やピット内から線刻土器が4点出土した。S E402からは2点出土しており、1点は鳥が描かれた絵画土器である。また、3A区検出のS P321からは鹿が描かれた土器片が出土した。このほか、S E301からも線刻土器1点が出土した。

石器は、中期中葉から後半の溝S D304、S D402出土品が注目される。本稿掲載の石器61点のうち、製作途中の未成品が35点ある。特に、石斧類では扁平片刃石斧が16点中12点、柱状片刃石斧が17点中15点と、出土数の約8割を未成品が占めている。粗割、敲打、研磨段階の未成品で、柱状片刃石斧には粗割段階のものが13点もある。これら2条の溝以外にも、各遺構や包含層中より数多くの未成品が出土している。このほか、後期の溝S D401より石錘と有茎式磨製石鏃が出土している。

（3）まとめ

本調査では、主に弥生時代前期から後期までの遺構・遺物を確認することができた。とりわけ松山平野の平地部における弥生時代中期集落の検出例は少なく、今回の調査は中期の集落構造を知るうえで貴重な成果となる。また、中期中葉から後半の溝S D304・402からの石器未成品の出土は、近隣地域での石器製作を物語るものであり、当時の石器製作や石器素材のあり方を考えるうえでも好資料となる。一方、後期では井戸が注目される。平野内における弥生時代の井戸の検出例は少なく、今回の調査結果は、当時の井戸の形態や構造を研究するうえで貴重な資料となる。

第6章 西石井遺跡3次調査地

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

2003（平成15）年2月17日、松山市都市整備部道路建設課より松山市道「北久米・和泉線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は松山市西石井6丁目200番11外で、道路幅16m、全長200m、面積3,200㎡である。財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、申請地内における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、2003（平成15）年2月24日～26日の間に試掘調査を実施した。その結果、溝やピットのほか、弥生土器を含む遺物包含層を確認した。この結果を受け、埋文センターと申請者は協議を重ね、申請地全域における埋蔵文化財の発掘調査を実施することになった。発掘調査は埋文センターが主体となり、文化財課と申請者の協力のもと、2003（平成15）年5月12日より開始した。

(2) 調査の経緯（第3・4図）

調査地は、調査以前は宅地に利用されており、生活道路が調査地内を横断する箇所が数ヶ所ある。発掘調査は、調査地内を3つの区に分区して実施した。調査地西側から東側に向けて1区、2区、3区とし、さらに3区は3A区・3B区・3C区の3つの区に細分区した。また、調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは北から南へA・B・C・D、西から東へ1・2・3・・・とした。平成15年5月12日より、調査地西側1区から調査を開始し、その後、2区と3区は併行して実施した。平成16年2月13日、すべての調査を終了した。なお、各調査区の調査期間や調査面積は表5のとおりである。

表5 調査区一覧

地区	調査面積（㎡）	調査期間
1区	652.1	平成15年5月12日～平成15年9月11日
2区	330.6	平成15年9月29日～平成16年1月31日
3A区	40.2	平成15年10月9日～平成15年12月4日
3B区	137.4	平成15年10月6日～平成15年12月12日
3C区	78.7	平成15年12月9日～平成16年2月13日

2. 層位 (第325～328図)

調査地は、松山平野中央部にあり、北側には石手川の支流の小野川、南側には重信川の支流の内川にはさまれた沖積低地上、標高21.00～21.70mに立地する。調査地の基本層位は、全体の基本層位のうち、第Ⅱ②層及び第Ⅲ③層は未検出である。なお、第Ⅵ層以下の土層は、調査壁沿いに設定した深掘トレンチによる土層観察により確認した。

第Ⅰ層—近現代の造成に伴う客土で、地表下12～80cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層—第Ⅱ①層のみを確認した。灰褐色土で、3C区を除く地域で検出され、層厚4～8cmを測る。本層中からは土師器片が少量出土した。

第Ⅲ層—第Ⅲ①層及び第Ⅲ②層を確認した。

第Ⅲ①層：オリブ黒色土で、1・2区で検出され、層厚3～10cmを測る。本層中からは土師器、須恵器片が少量出土した。

第Ⅲ②層：黒褐色土で、1・2区で検出され、層厚4～30cmを測る。2区が最も厚い堆積をなす。本層中からは、弥生土器、土師器、須恵器のほか軟質土器が出土した。

第Ⅳ層—黄灰色土で、2区及び3A・3B区で検出され、層厚8～20cmを測る。本層中からは、主に弥生時代中期末から後期前半頃に時期比定される土器が出土した。なお、2区西半部と3A・3B区では、本層上面が最終遺構検出面となる。

第Ⅴ層—暗灰黄色土で、1・2区及び3B区で検出され、層厚10～30cmを測る。2区東半部は本層上面が最終遺構検出面となる。

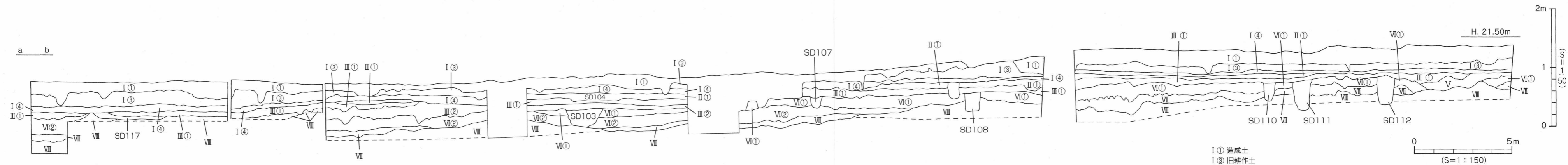
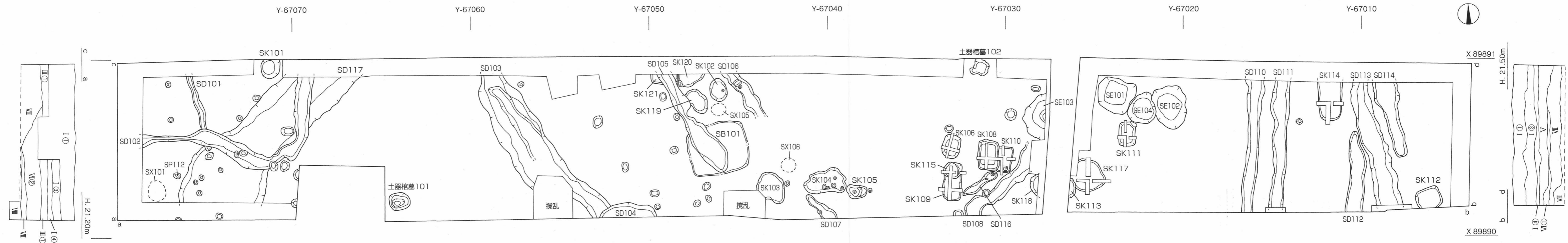
第Ⅵ層—第Ⅵ①層及び第Ⅵ②層を確認した。

第Ⅵ①層：黄褐色土で、調査地全域で検出され、層厚4～20cmを測る。1区及び3C区は本層上面が最終遺構検出面となる。

第Ⅵ②層：黄色土で、1・2区及び3A区で検出され、層厚8～30cmを測る。

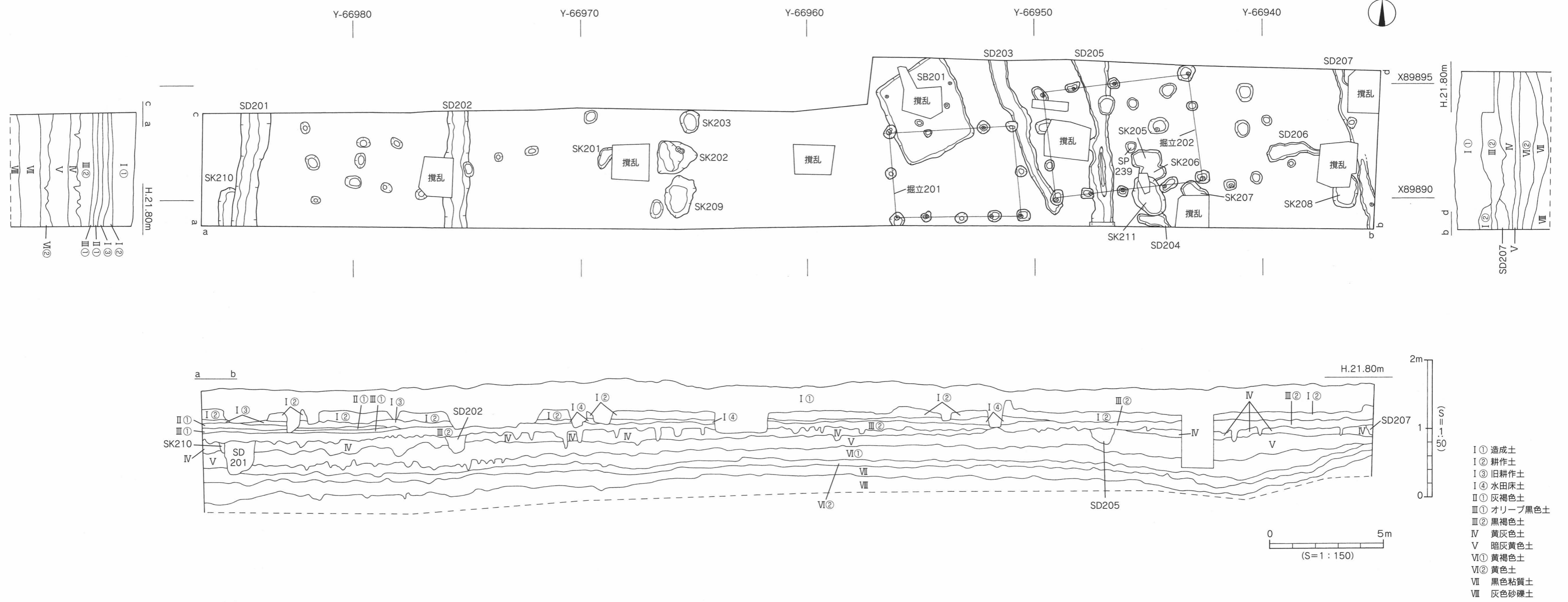
第Ⅶ層—黒色粘質土で、3C区を除く地域で検出され、層厚8～25cmを測る。

第Ⅷ層—小野川や内川の氾濫に起因する河川氾濫堆積物で、径5～10cm大の円礫と灰色粗砂で構成される。3C区を除く地域で検出された。本層上面は起伏に富み、さらに調査地北東部から南西部に向けて緩傾斜をなす。本層中からの遺物の出土はない。

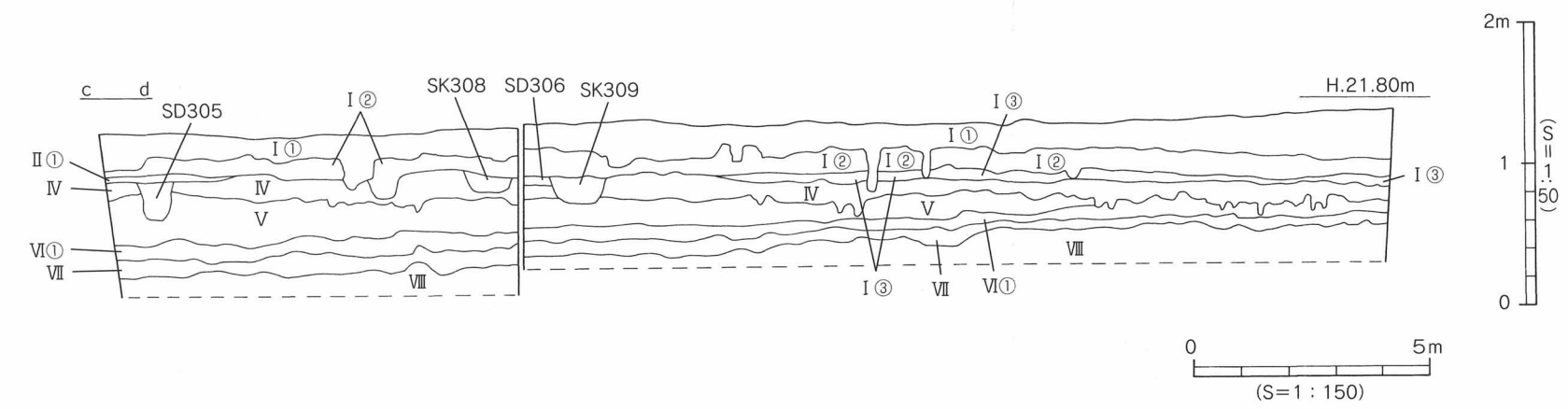
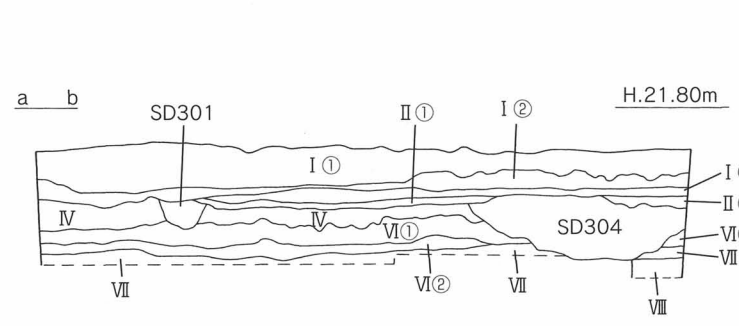
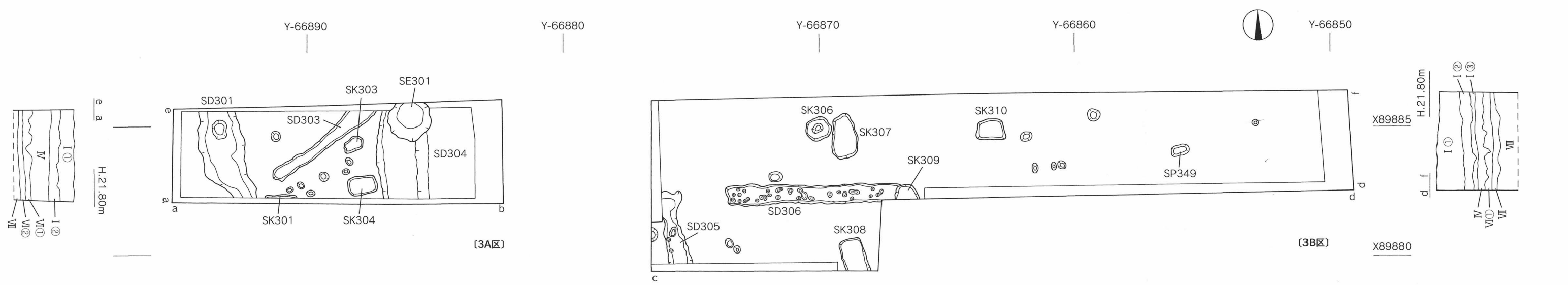


- I① 造成土
- I③ 旧耕作土
- I④ 水田床土
- II① 灰褐色土
- II② オリーブ黒色土
- III① 黒褐色土
- III② 暗灰黄色土
- V 黄褐色土
- VI① 黄色土
- VI② 黄色土
- VII 黒色粘質土
- VIII 灰色砂礫

第325図 1区遺構配置図・土層図

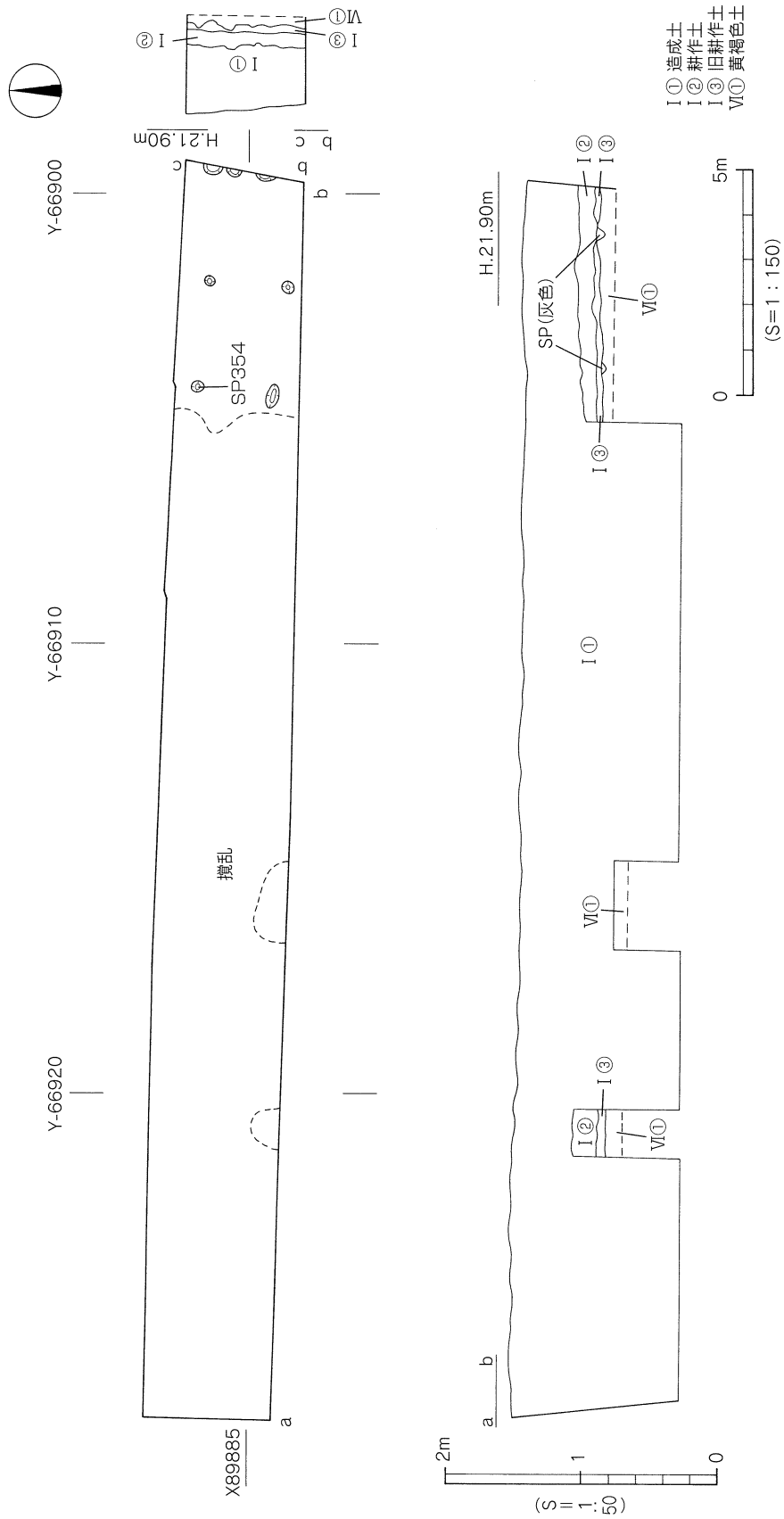


第326図 2区遺構配置図・土層図



- I ① 造成土
- I ② 耕作土
- I ③ 旧耕作土
- I ④ 水田床土
- II ① 灰褐色土
- IV 黄灰色土
- V 暗灰黄色土
- VI ① 黄褐色土
- VI ② 黄色土
- VII 黑色粘质土
- VIII 灰色砂砾土

第327图 3A区・3B区遺構配置図・土層図



第328图 3C区遺構配置図・土層図

3. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴式住居址 2 棟、溝 18 条、土坑 19 基、井戸 5 基、土器棺墓 2 基、土器溜まり 8 基である。

(1) 竪穴式住居址

S B 101 (第 329 図)

1 区中央部、B 7～C 8 区に位置する。S D 105 に切られ、第 VI ① 層上面で検出した。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 3.42m、幅 2.95m、壁高は 8cm を測る。埋土は暗灰色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

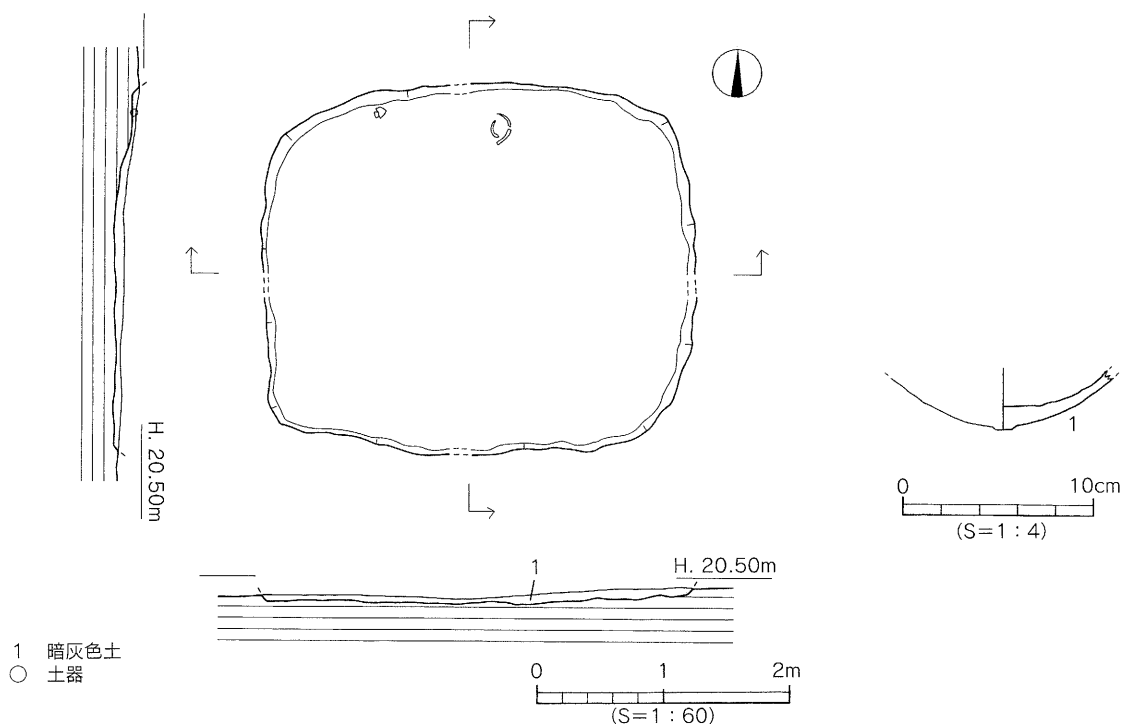
出土遺物：1 は鉢形土器の底部で、つまみ状の突出部をもつ。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

S B 201 (第 330～332 図、図版 59・63)

2 区中央部東寄り、A 25～B 26 区に位置する。第 IV 層上面で検出した。住居址西側は掘立 201、中央部は攪乱に切られ、北側は調査区外に続く。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ 3.95m、幅 3.35m、壁高は 42cm を測る。埋土は 3 層に分層され、1 層黒褐色土、2 層灰黄褐色土、3 層灰黄褐色砂質土である。

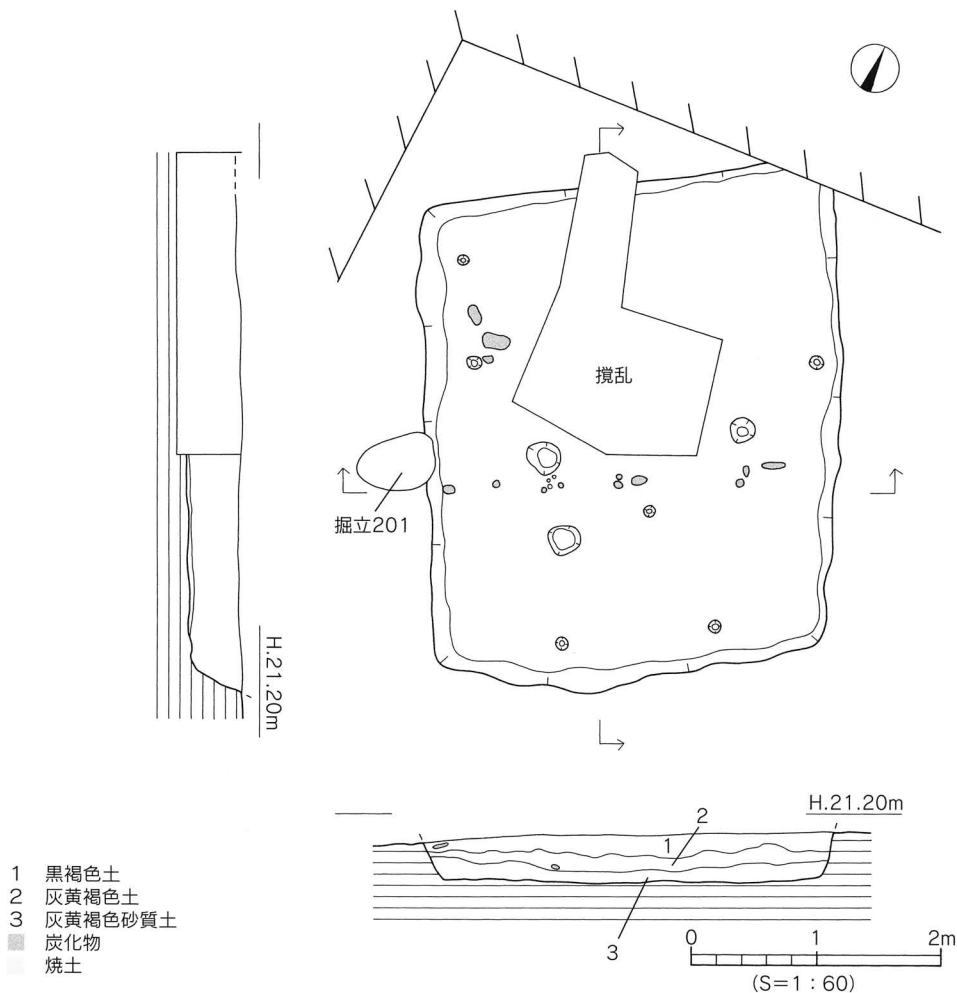
住居址床面から、大小 9 基のピットを検出した。規模は径 10～25cm、深さ 5～12cm を測る。ピット埋土は黒褐色土である。また、床面から炭化材と焼土が出土した。遺物は埋土中より、弥生土器のほか、軟質土器片、石庖丁、有孔円板が出土した。



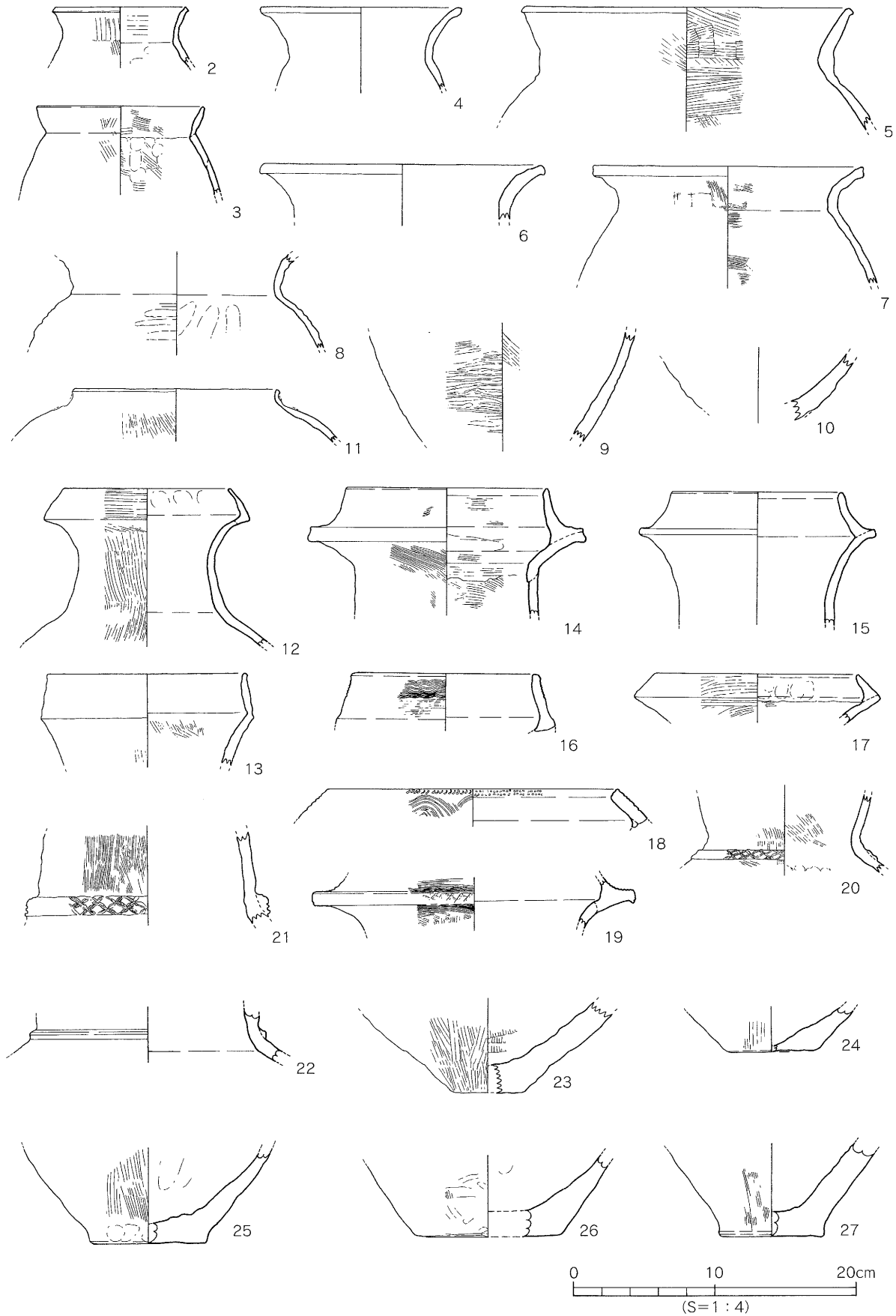
第 329 図 SB101 測量図・出土遺物実測図

出土遺物：2～10は甕形土器。2～7は口縁部が外反し、4以外は口縁端面に面をもつ。8・9の胴部外面にはタタキ調整を施す。11～27は壺形土器。11は短頸壺、12～19は複合口縁壺である。12～15は長い頸部をもつもので、16・19は口縁部に櫛描き波状文を施し、18は波状文と半截竹管文、口縁端面には竹管文2列を施す。20～22は頸部片で、20・21は凸帯上に斜格子目文を施す。23～27は底部で平底となる。28～32は鉢形土器で、29～31は脚付鉢である。33～38は高坏形土器、39はバケツ形土器である。40・41は支脚形土器で、40は柱部が中空となる。42・43は器台形土器、44はミニチュア品である。45・46は軟質土器。器種は壺と考えられ、外面に一辺1～2mm大の格子叩き、内面にはナデ調整を施す。47～49は石庖丁、50は有孔円板である。石材は緑色片岩である。51は砂岩製の砥石である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

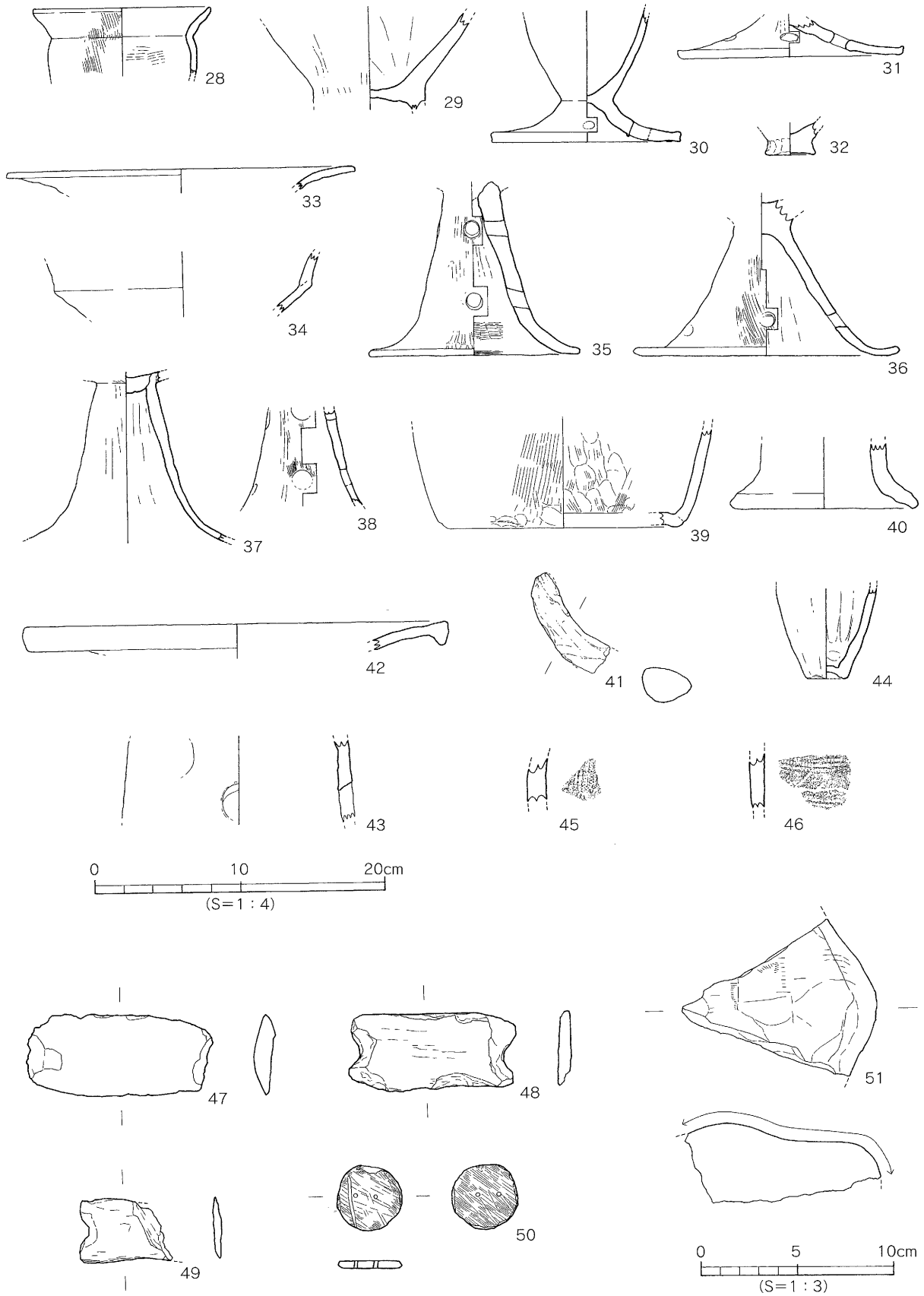


第330図 SB201測量図



第331図 SB201出土遺物実測図(1)

弥生時代の遺構と遺物



第332図 SB201出土遺物実測図(2)

(2) 溝

S D117 (第333図)

1区西側、C1～B3区に位置する南北方向の溝である。溝中央部はS D102に切られ、溝両端は調査区外に続く。第Ⅷ層上面で検出した。規模は検出長12.30m、幅3.20m、深さ26cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は2層に分層され、1層黄灰色土、2層黒褐色土である。溝底面は南西から北東の向けて傾斜をなす（比高差23cm）。溝底面から小ピット3基を検出した。規模は径20～26cm、深さ3～6cmを測る。ピット埋土は黒褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器片が少量出土した。

出土遺物：52・53は甕形土器。52は折曲口縁で、頸部に押圧凸帯文を施す。54は壺形土器で、口縁端面に凹線文3条を施す。55・56は甕形土器の底部で、上げ底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

S D112 (第334図)

1区東側、B14～C15区に位置する南北方向の溝で、南側は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。規模は検出長4.60m、幅0.96m、深さ14～44cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土単層である。溝底面は北から南に向けて傾斜する（比高差30cm）。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物：57は壺形土器で、凹線文2条を施す。58は壺形土器の底部で平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半とする。

S D107 (第335図)

1区中央部、C8・9区に位置する南北方向の溝である。溝西側はS P129に切られ、南側は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。規模は検出長1.98m、幅0.86m、深さ3～6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色砂質土である。溝底面は北西から南東に向けて緩傾斜する（比高差3cm）。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物：59は壺形土器の頸部片で、断面三角形状の凸帯を貼り付ける。60・61は壺形土器の底部で平底となる。60の外面には線刻を施す。

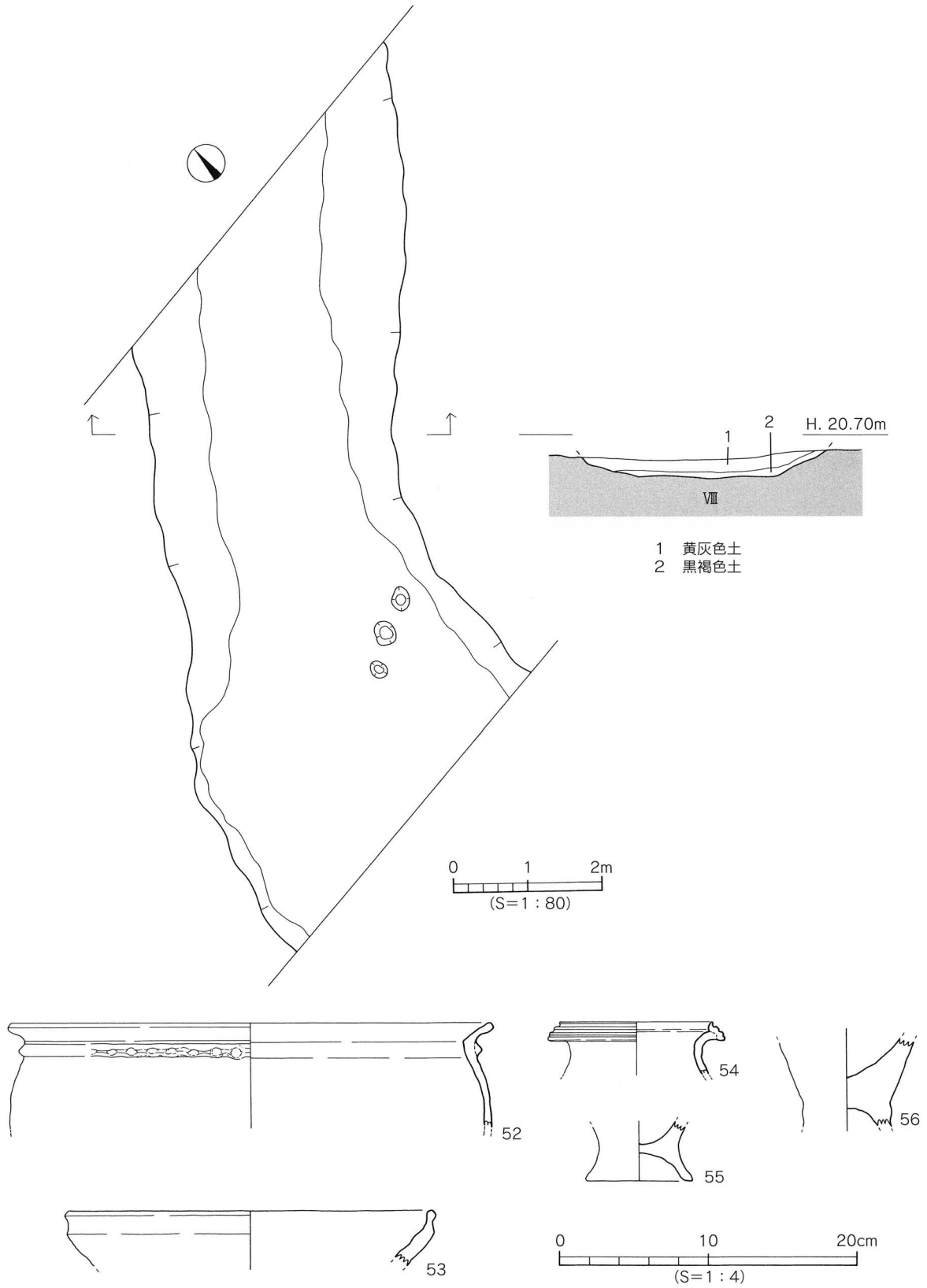
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期前半とする。

S D110 (第336図)

1区東側、B・C13区に位置する南北方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。規模は検出長6.88m、幅0.86m、深さ28～32cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土（黄色土混入）である。溝底面は南から北に向けて傾斜する（比高差16cm）。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物：62は複合口縁壺。口縁部に山形文を施し、斜線文で充填する。63は壺形土器の底部で、厚みのある平底となる。64は支脚形土器の角状突起部で、断面形態は楕円形を呈する。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



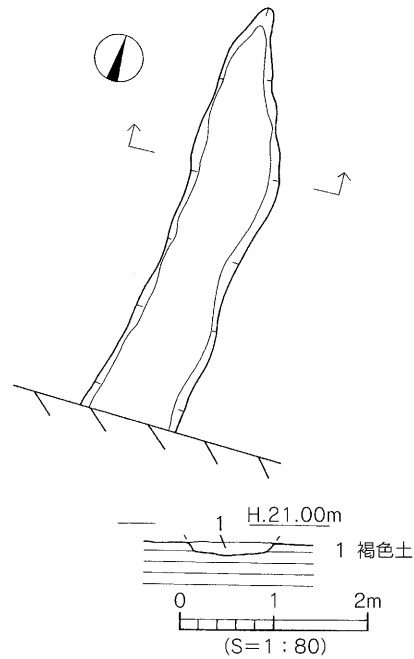
第333図 SD117測量図・出土遺物実測図

S D111 (第336図)

1区東側、B・C14区に位置する南北方向の溝で、ほぼS D110と平行に走る。溝両端は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。規模は検出長7.00m、幅1.06m、深さ24~50cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土(黄色土混入)である。溝底面は北から南に向けて傾斜する(比高差28cm)。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物：65は甕形土器の底部で平底となる。外面にはハケメ調整を施す。

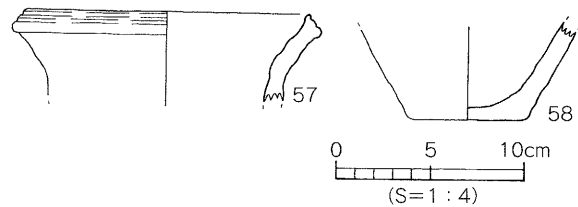
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



S D108 (第337図)

1区中央部東寄り、C10・11区に位置する南北方向の溝である。溝西側中央部はS P110に切られ、両端は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。規模は検出長6.60m、幅1.04m、深さ8~30cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土単層である。溝底面は南西から北東に傾斜する(比高差23cm)。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

時期：出土遺物の特徴から、概ね弥生時代後期後半とする。

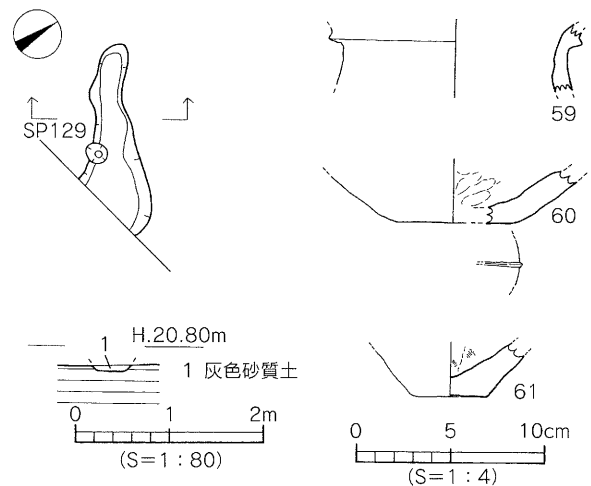


第334図 SD112測量図・出土遺物実測図

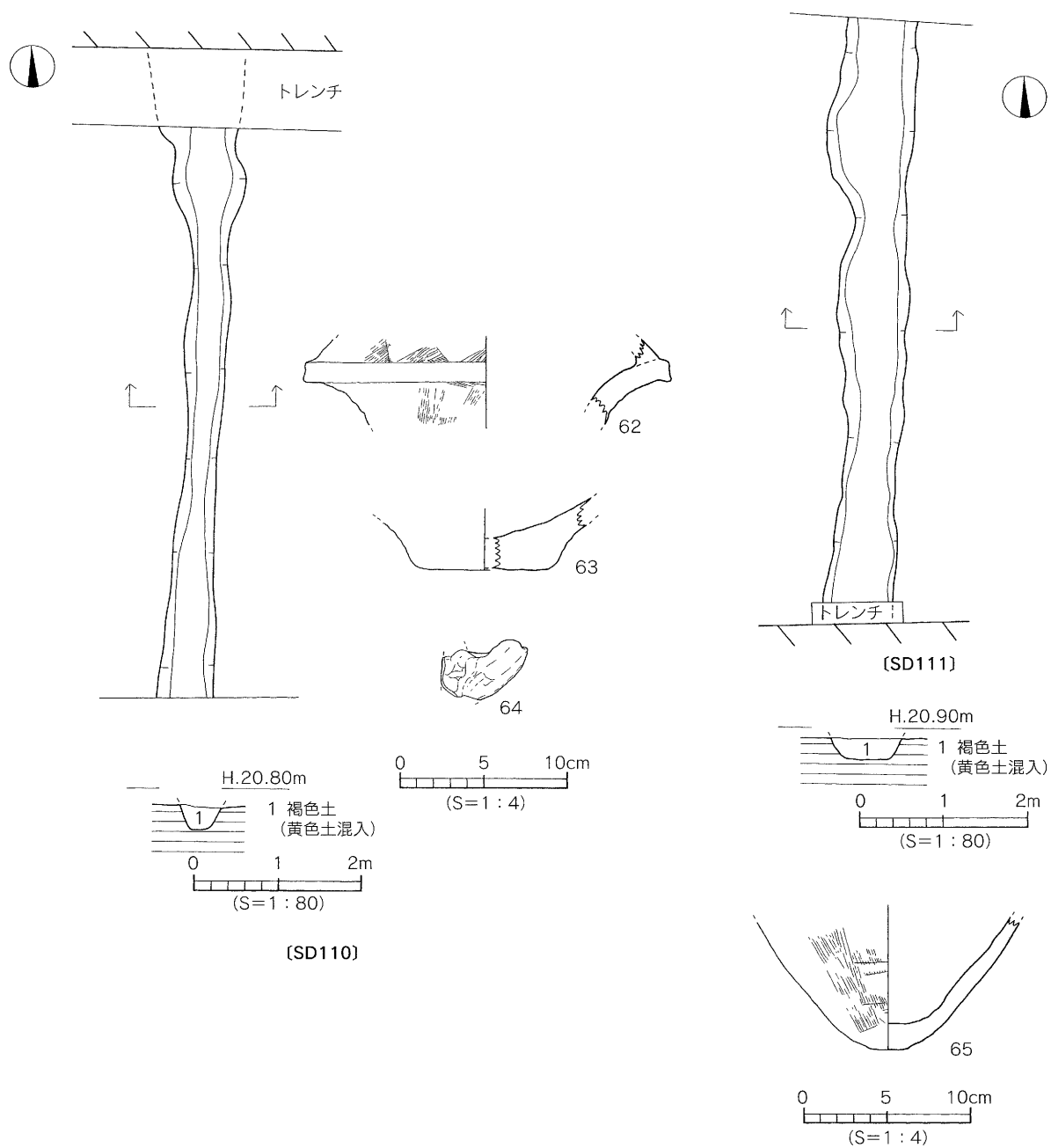
S D114 (第337図)

1区東端、B・C15区に位置する南北方向の溝で、北側は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であり、第III①層が覆う。規模は検出長4.40m、幅1.36m、深さ6~10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土(黄色土混入)である。溝底面は南から北に傾斜する(比高差6cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS D110・S D111に酷似することから、概ね弥生時代後期後半とする。



第335図 SD107測量図・出土遺物実測図



第336図 SD110・111測量図・出土遺物実測図

S D 116 (第337図)

1区中央部東寄り、C10区に位置する東西方向の溝である。第VI①層上面で検出した。規模は検出長2.36m、幅0.46m、深さ6～10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土単層である。底面から小ピット2基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径16cm、深さ3～5cmを測り、ピット埋土は褐色土である。溝底面は西から東に緩傾斜する(比高差3cm)。溝内からの遺物の出土はない。

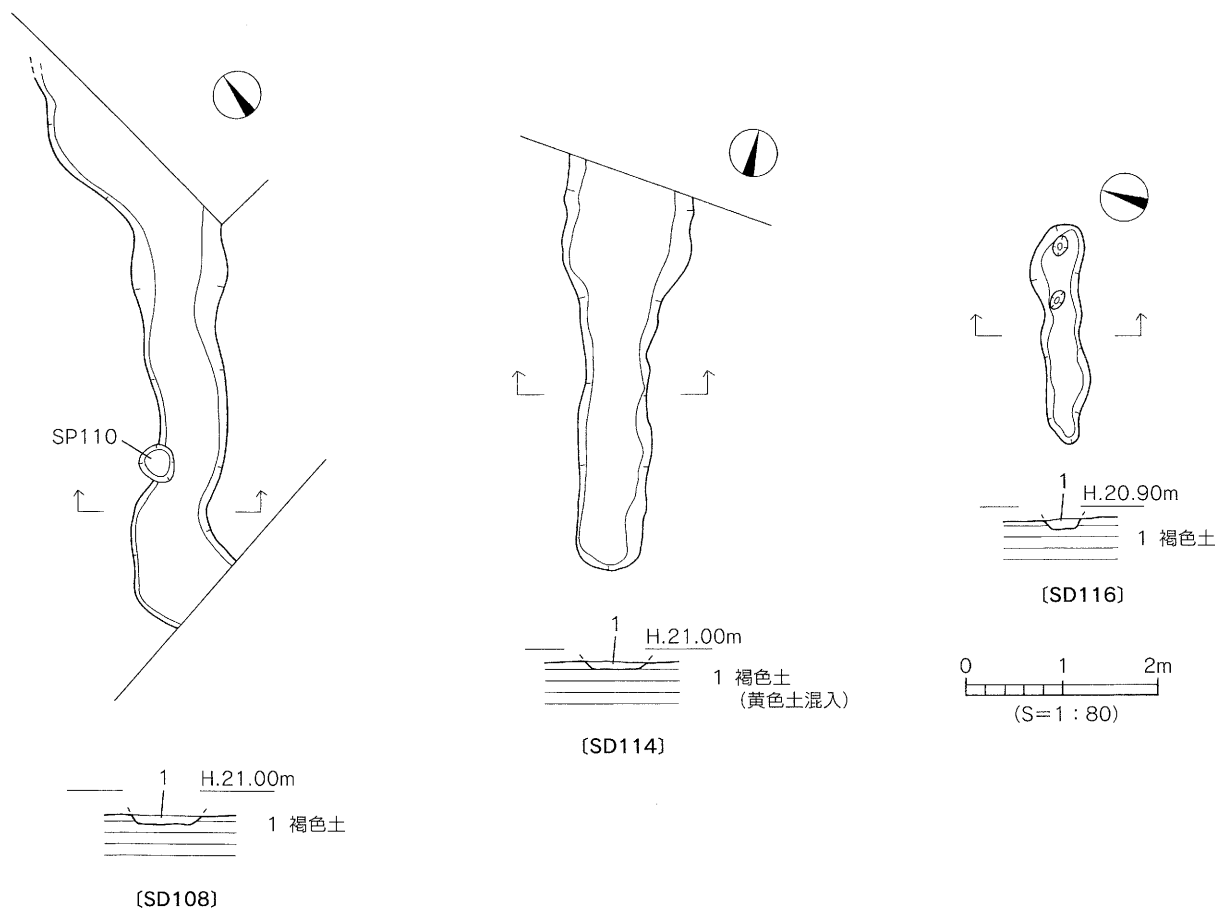
時期：埋土がSD108に酷似することから、概ね弥生時代後期後半とする。

S D 201 (第338図)

2区西端、B19～C20区に位置する南北方向の溝である。溝西側はSK210を切り、両端は調査区外に続く。第IV層上面での検出であり、第III②層が覆う。規模は検出長5.00m、幅1.26m、深さ36～48cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し埋土は褐色土単層である。溝底面は北から南に向けて傾斜する(比高差10cm)。遺物は埋土中より、弥生土器片と須恵器片が出土した。

出土遺物：66は複合口縁壺で、口縁端部は上方に拡張する。67は壺形土器の底部片で平底となる。69は須恵器坏蓋で丸みのある天井部をもち、口縁端部は尖り気味となる。71は提瓶の口縁部片で口縁中位に凹線2条を施す。

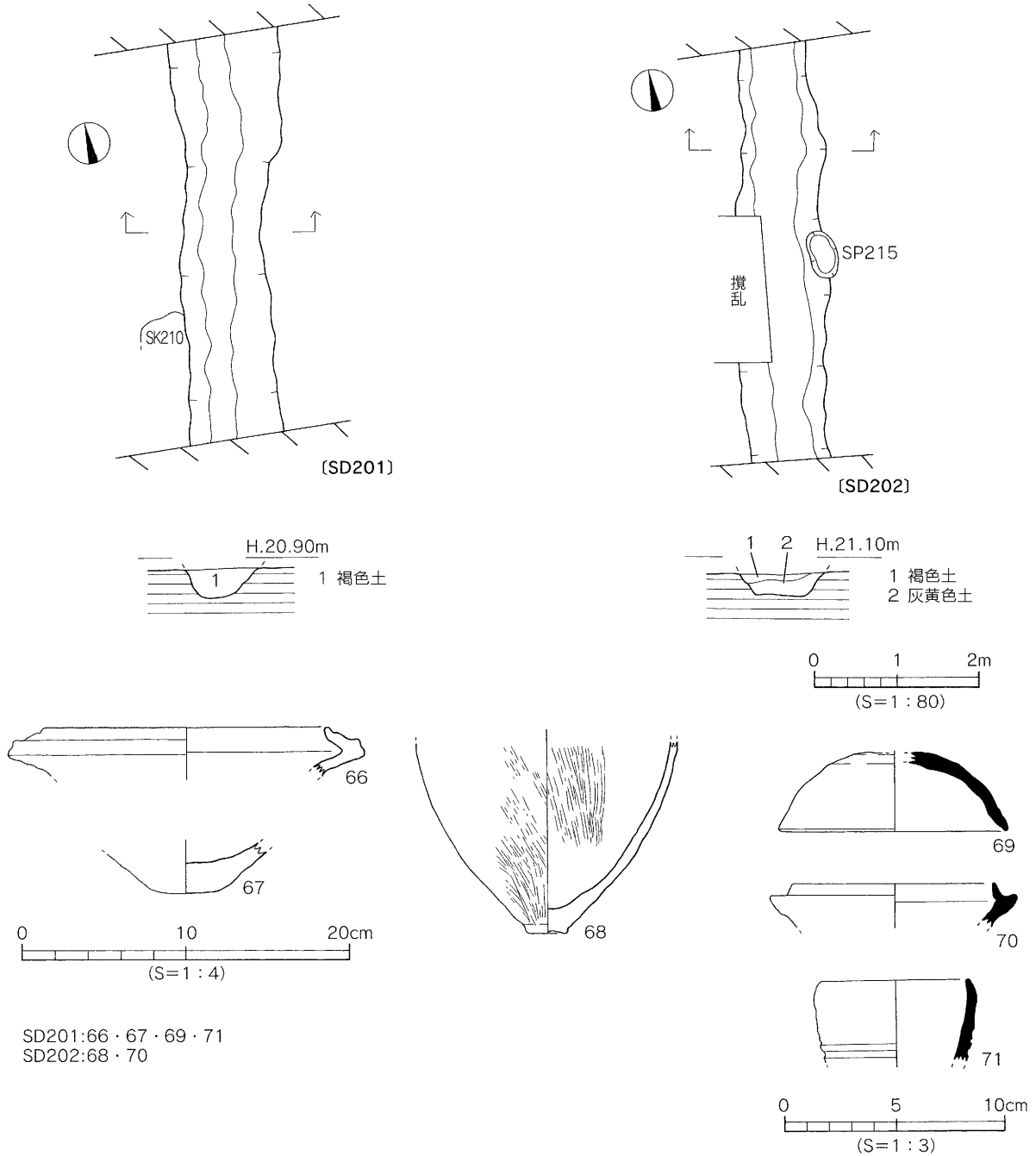
時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後半とする。



第337図 SD108・114・116測量図

S D202 (第338図)

2区西側、B・C21区に位置する南北方向の溝である。溝東側はS P215、西側は攪乱に切れ、両端は調査区外に続く。第IV層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長5.14m、幅1.04m、深さ24~40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、1層褐色土、2層灰黄色土である。溝底面は南から北に向けて傾斜する(比高差12cm)。遺物は埋土中より弥生土器片と須恵器片が出土した。



SD201:66・67・69・71
SD202:68・70

第338図 SD201・202測量図・出土遺物実測図

出土遺物：68は甕形土器の底部片で、わずかに上げ底となる。70は須恵器坏身で、たちあがりは低く内傾し、受部は上外方に短くのびる。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後半とする。

S D 203 (第339図)

2区東側、A26～C27区に位置する南北方向の溝である。溝西側は掘立201、南側は掘立202に切られ、両端は調査区外に続く。第IV層上面で検出した。規模は検出長7.50m、幅0.76m、深さ2～6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土単層である。溝底面は北西から南東に向けて緩傾斜する（比高差5cm）。溝内からの遺物の出土はない。

時期：検出状況と埋土から、概ね弥生時代後期後半とする。

S D 204 (第339図)

2区東側、C27・28区に位置する東西方向の溝である。溝北側はS K 211に切られ、南側は調査区外に続く。第IV層上面で検出した。規模は検出長1.60m、幅0.60m、深さ6cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：検出状況と埋土から、概ね弥生時代後期後半とする。

S D 205 (第339図)

2区東側、A27～C27区に位置する南北方向の溝である。溝東側と南側は掘立202、東側をS P 211に切られ、中央部は攪乱に切られる。第V層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長7.08m、幅1.60m、深さ20～40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。溝底面は北から南に向けて傾斜する（比高差14cm）。溝底面にて、長さ3m、幅50cm、深さ10cmの凹地を検出した。埋土は、褐色土に黄色土が混入するものである。遺物は溝埋土中より、弥生土器片と須恵器片が少量出土した。

出土遺物：72は甕形土器の口縁部、73は壺形土器の底部で平底となる。74はミニチュア品で、口唇部は波状形態を呈する。75は須恵器坏蓋の口縁部で、口縁端部は丸い。

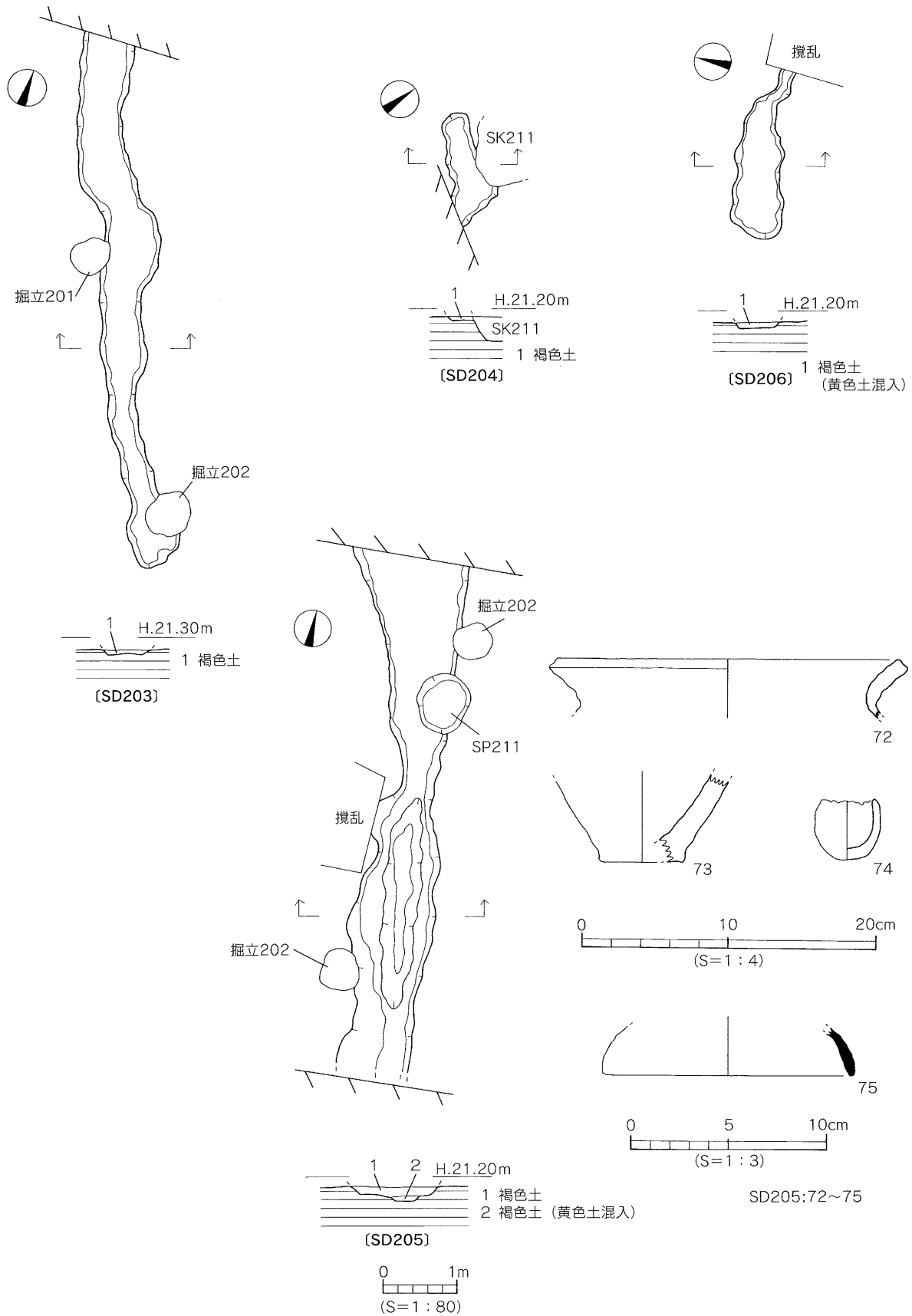
時期：検出状況と出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後半とする。

S D 206 (第339図)

2区東端、B29区に位置する東西方向の溝で、東側は攪乱に切られる。第IV層上面で検出した。規模は検出長2.36m、幅0.64m、深さ6～8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土に黄色土が混入するものである。溝底面は東から西に向けて傾斜する（比高差3cm）。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS D 110に酷似することから、概ね弥生時代後期後半とする。

弥生時代の遺構と遺物



第339図 SD203~206測量図・出土遺物実測図

S D207 (第340図)

2区東端、A29～C29区に位置する南北方向の溝である。溝中央部はS P259と攪乱に切られ、東側は攪乱に切られ、溝両端は調査区外に続く。第IV層上面の検出であり、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長7.20m、幅0.64m、深さ6～8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土に黄色土が混入するものである。溝底面にて小ピット1基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径20cm、深さ10cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同じである。溝底面は北から南に向けて緩傾斜する（比高差3cm）。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS D110に酷似することから、概ね弥生時代後期後半とする。

S D301 (第340図)

3A区西側、C・D38区に位置する南北方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第IV層上面で検出した。規模は検出長3.56m、幅1.90m、深さ17～20cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄色土単層である。溝底面からピット1基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径60cm、深さ10cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同じである。溝底面は北から南に向けて緩傾斜する（比高差3cm）。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

時期：出土遺物の特徴から、概ね弥生時代後期後半とする。

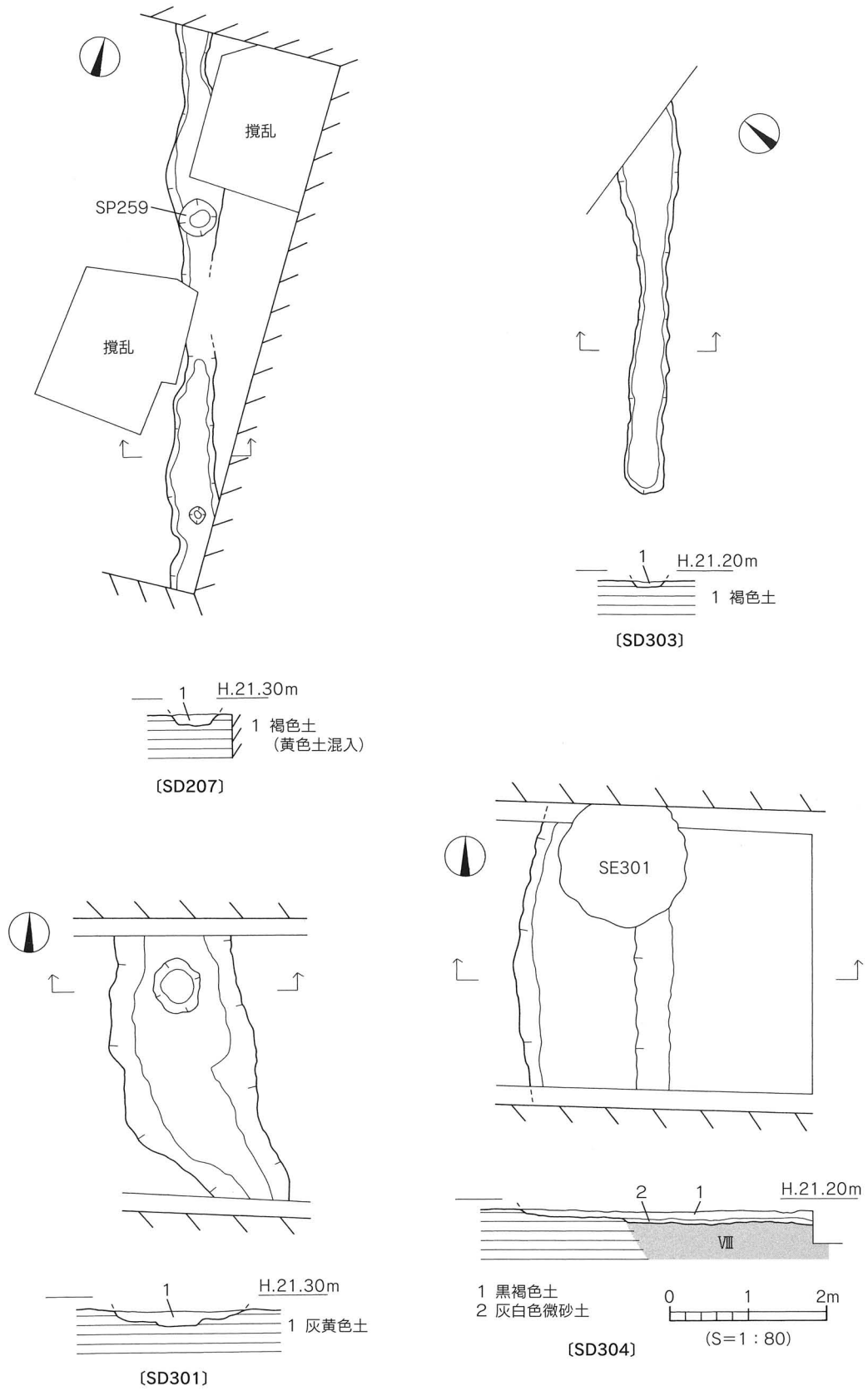
S D303 (第340図)

3A区中央部、D38～C39区に位置する南北方向の溝で、溝東端は調査区外に続く。第IV層上面で検出した。規模は検出長5.00m、幅0.76m、深さ2～8cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐色土単層である。溝底面は南西から北東に向けて緩傾斜する（比高差6cm）。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

時期：出土遺物の特徴から、概ね弥生時代後期後半とする。

S D304 (第340・341図、図版63)

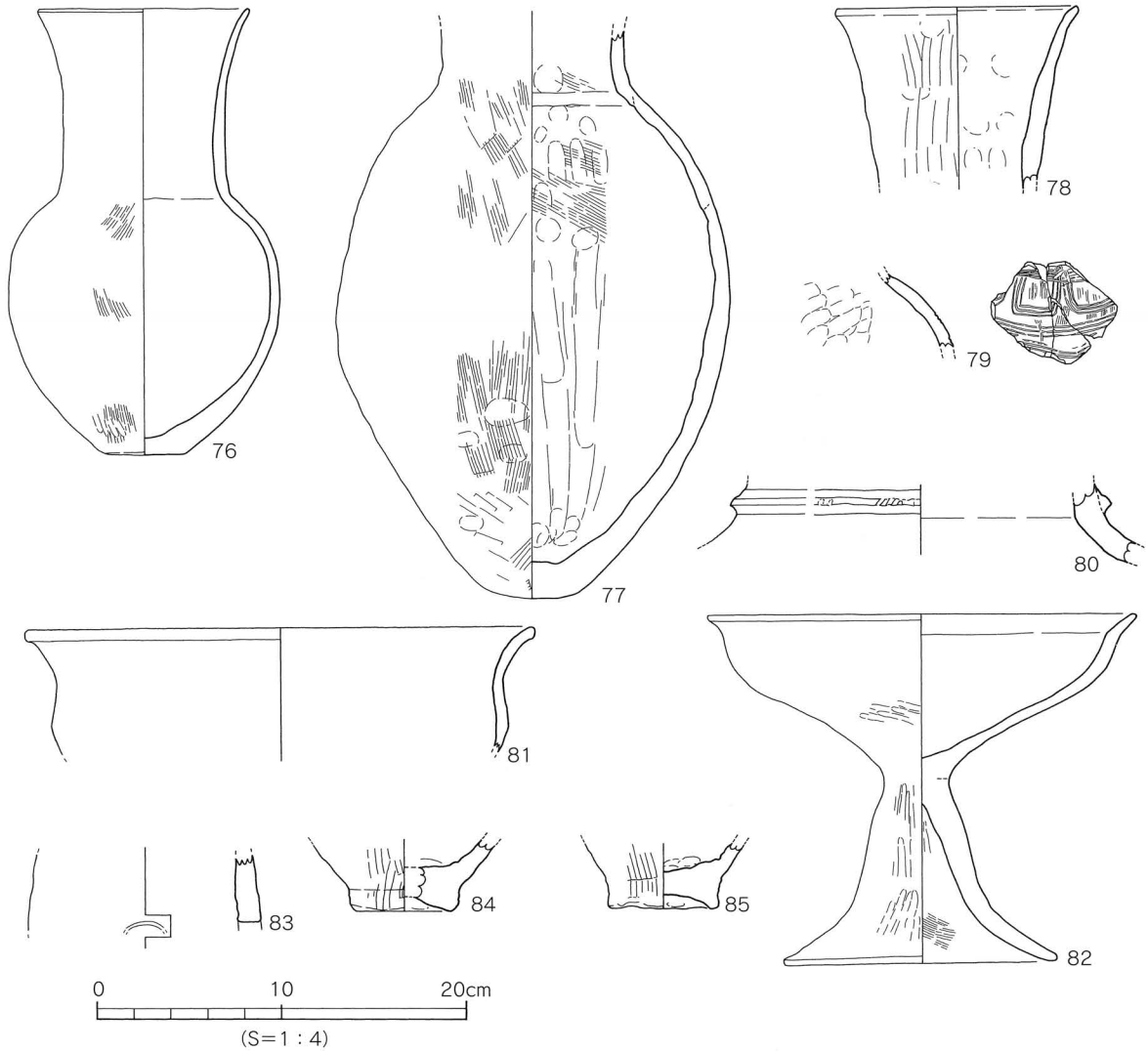
3A区東側、C39～D40区に位置する南北方向の溝である。溝北側はS E301に切られ、両端は調査区外に続く。第IV層上面での検出であり、第Ⅱ①層が覆う。規模は検出長2.36m、幅2.06m、深さ8～80cmを測る。断面形態はU字状を呈する。埋土は2層に分層され、1層黒褐色土、2層灰白色微砂土である。溝底面は中央部から南側にかけて、急激に下がっている（比高差70cm）。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。



第340図 SD207・301・303・304測量図

出土遺物：76～80は壺形土器。76・77は直口壺。76は完形品で、底部は平底となる。78は長頸壺の口頸部片、79は肩部片で櫛状工具（3条1組）による線刻を施す。80は頸肩部片で、凸帯上に刻目を施す。81・82は高坏形土器。82は完形品で、外面にヘラミガキ調整を施す。83は器台形土器の柱部片、84・85は鉢形土器の底部片である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



第341図 SD304出土遺物実測図

(3) 土坑

S K104 (第342図)

1区中央部、C8・9区に位置する。第VI①層上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2.35m、短径1.33m、深さ10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。土坑底面から小ピット5基を検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径10～23cm、深さ5～8cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同じである。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物：86～88は壺形土器で、86は口縁端面に凹線文2条を施す。87は頸部に断面長方形の凸帯文を施す。88は底部片で平底となる。89は高坏形土器の坏部で、口縁端部は面をもつ。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代中期後半から後期前半とする。

S K105 (第343図)

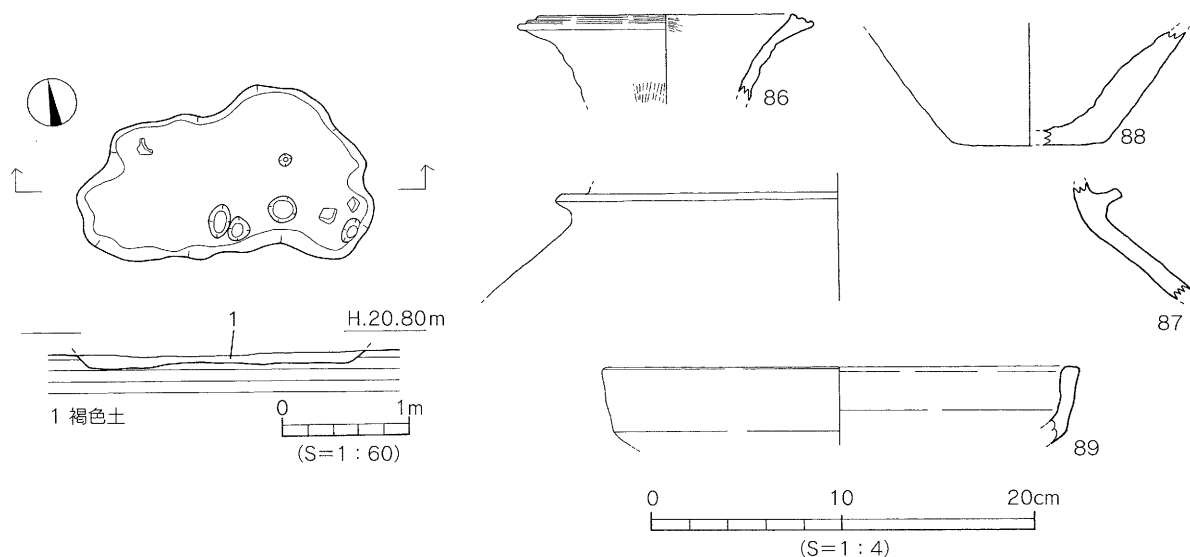
1区中央部、C9区に位置する。第VI①層上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1.75m、短径1.00m、深さ35cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑東側はテラス状となる。埋土は褐色土単層である。土坑底面から小ピット1基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径20cm、深さ10cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同じである。遺物は埋土上位より、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物：90は鉢形土器の底部で、突出部をもつ平底となる。91・92は壺形土器の底部片で平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

S K201 (第343図)

2区中央部、B23区に位置し、東側は攪乱に切られる。第IV層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.90m、短径0.47m、深さ8cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色



第342図 SK104測量図・出土遺物実測図

土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が出土した。

出土遺物：93は鉢形土器の底部で、中央部が凹む。

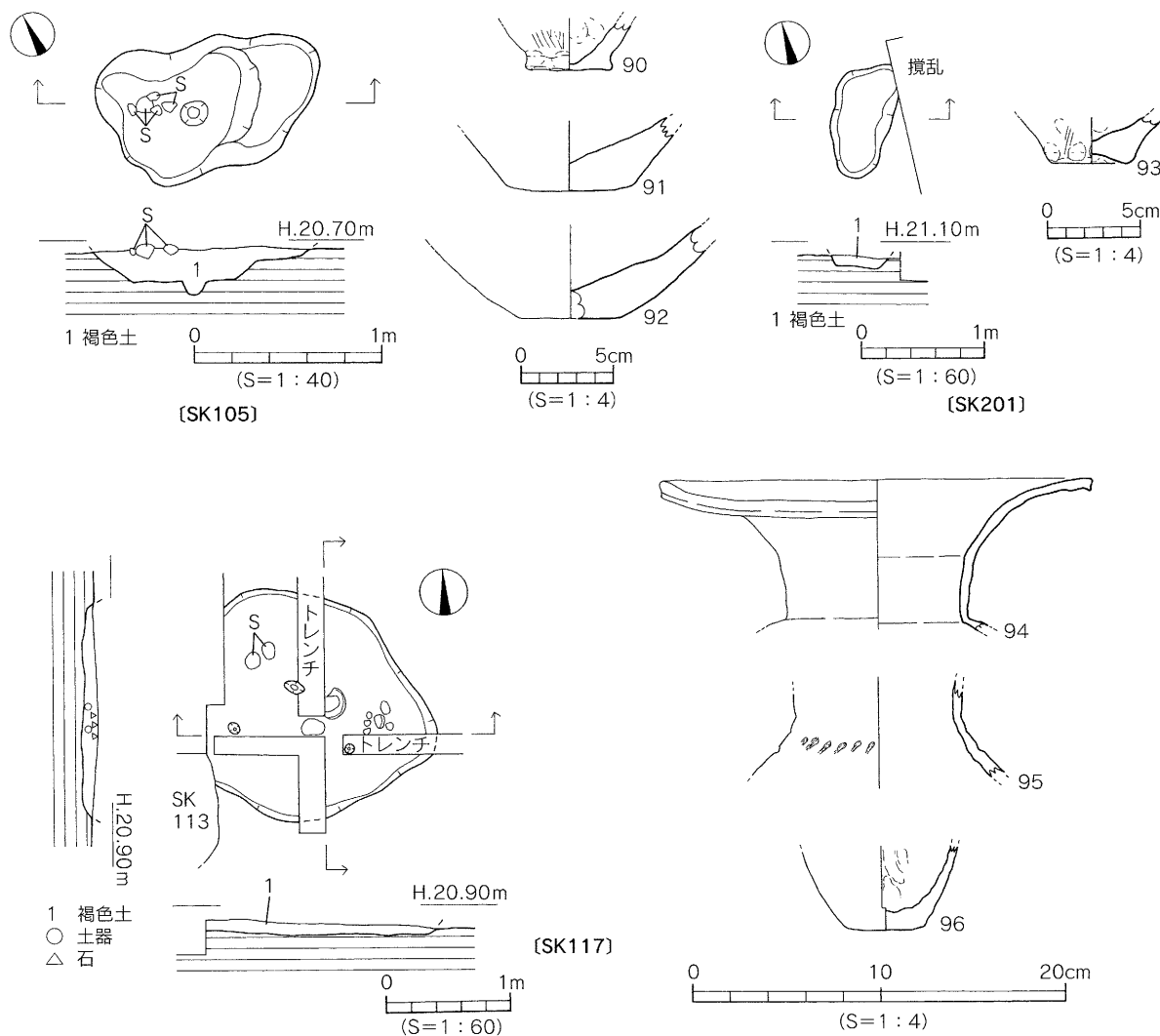
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

S K117 (第343図)

1区中央部東寄り、C11・12に位置する。南側はS K113に切られ、西側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.95m、短径1.90m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。土坑底面にて小ピット3基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径8～13cm、深さ3～6cmを測る。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物：94・95は壺形土器。94は広口壺で、口縁端面はナデ凹む。95は頸部片で、列点文が巡る。96は鉢形土器の底部で平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



第343図 SK105・201・117測量図・出土遺物実測図

S K 102 (第344図)

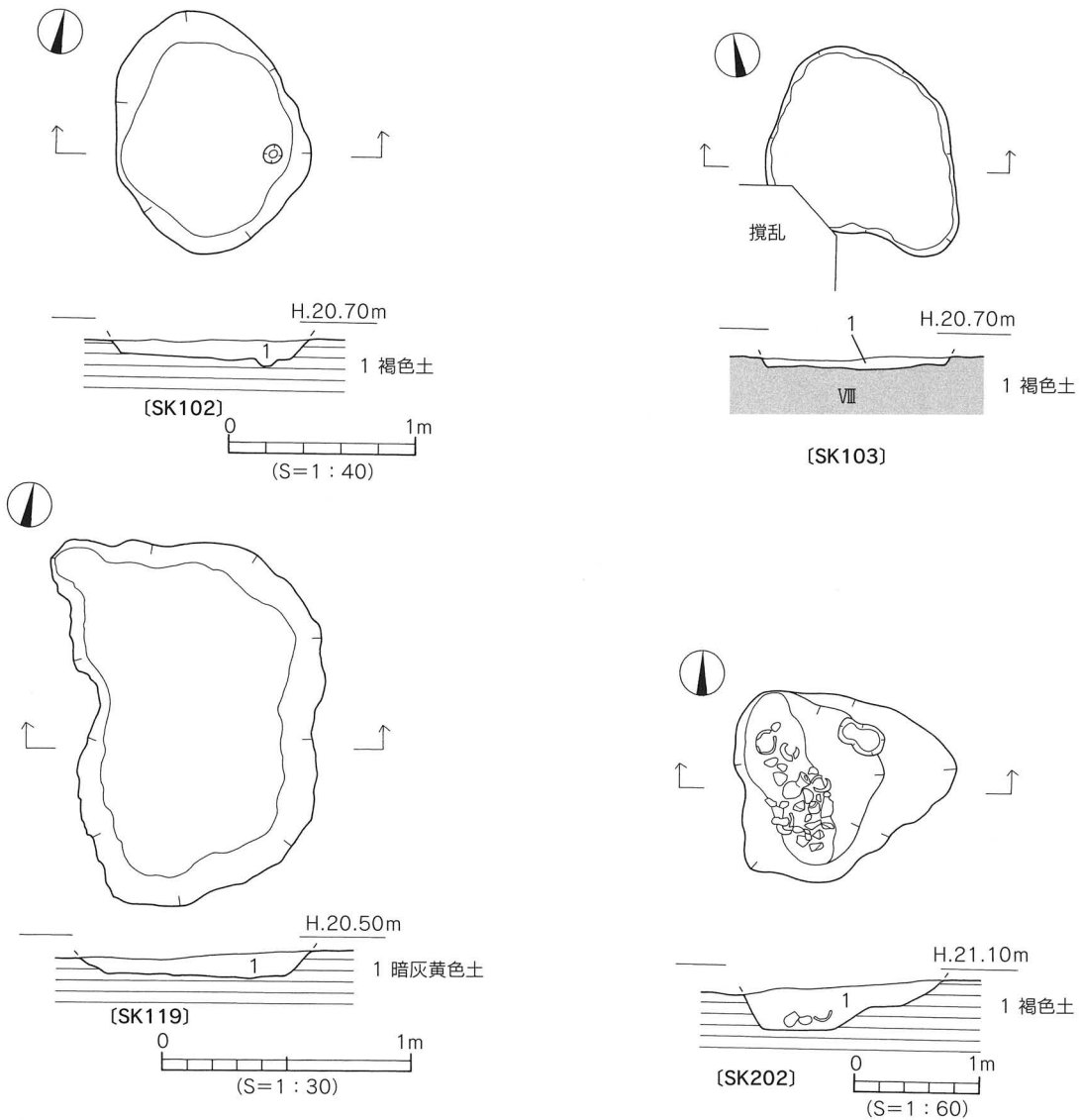
1区中央部、B7区に位置する。第Ⅵ①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.95m、短径1.55m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。土坑底面にて、小ピット1基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径15cm、深さ6cmを測る。ピット埋土は、土坑埋土と同じである。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

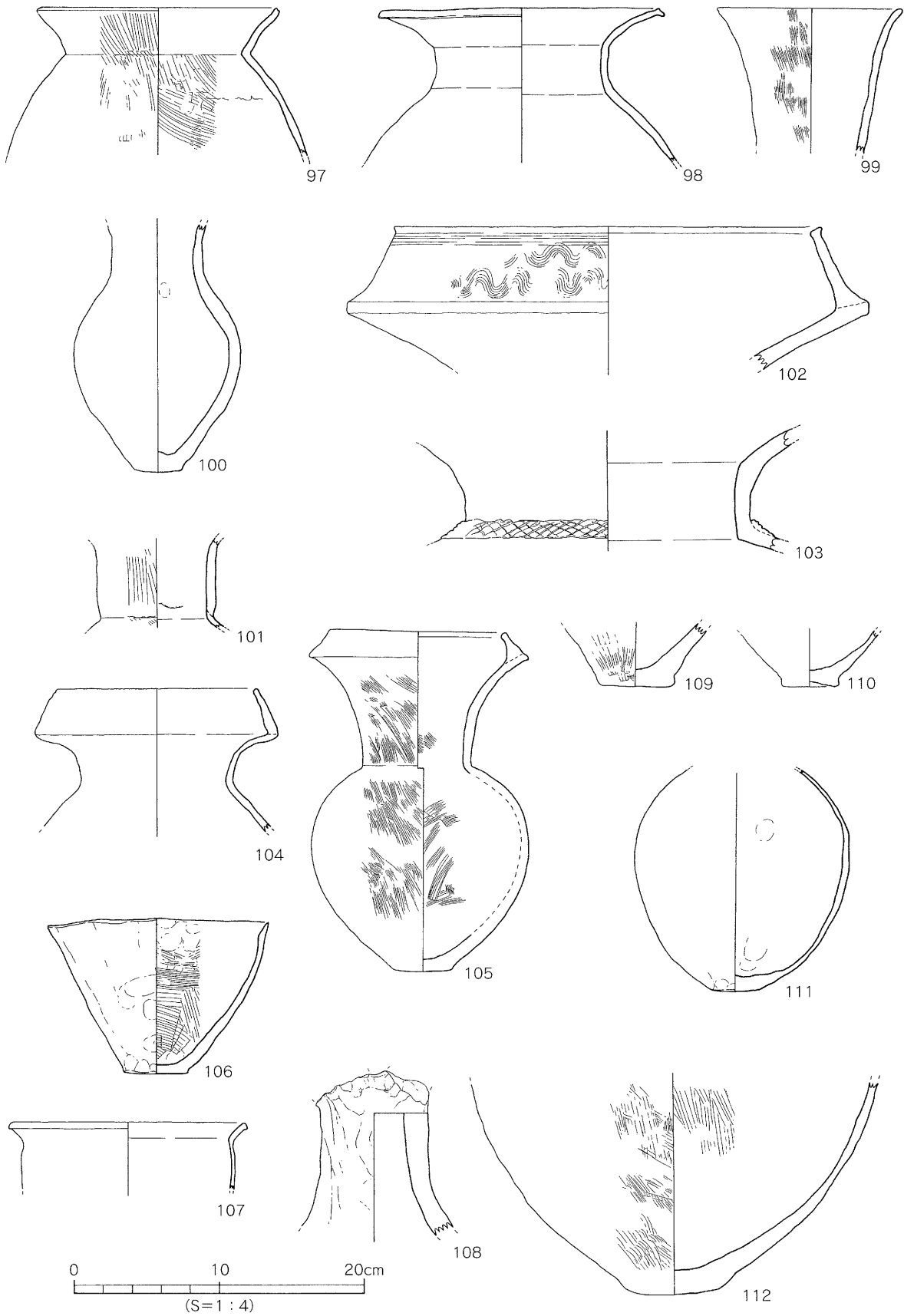
S K 103 (第344図)

1区中央部、C8区に位置し、南西側は攪乱に切られる。第Ⅷ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.90m、短径1.52m、深さ10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K 102と類似することから、概ね弥生時代後期後半とする。



第344図 SK102・103・119・202測量図



第345図 SK202出土遺物実測図

S K 119 (第344図)

1区中央部、B7区に位置し、西側はS D 105に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2.93m、短径1.86m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

時期：S D 105に切られることや、出土遺物から、概ね弥生時代後期後半とする。

S K 202 (第344・345図、図版63)

2区中央部、B23・24区に位置する。第IV層上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1.77m、短径1.60m、深さ66cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側はテラス状となる。埋土は褐色土単層である。土坑底面から小ピット1基を検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径40cm、短径20cm、深さ6cmを測る。ピット埋土は、土坑埋土と同じである。遺物は埋土下位より、完形品を含む多数の弥生土器が出土した。

出土遺物：97は甕形土器、98～105は壺形土器。98は広口壺で、口縁端面はナデ凹む。99は長頸壺、100・101は直口壺、102～105は複合口縁壺である。102・103は同一個体で、102は口縁部に櫛描き沈線文と波状文、103は凸帯上に斜格子目文を施す。106・107は鉢形土器。106はほぼ完形品で、口縁端部は先細りする。108は支脚形土器で、角状突起部を欠損する。109・110は甕形土器、111・112は壺形土器の底部である。

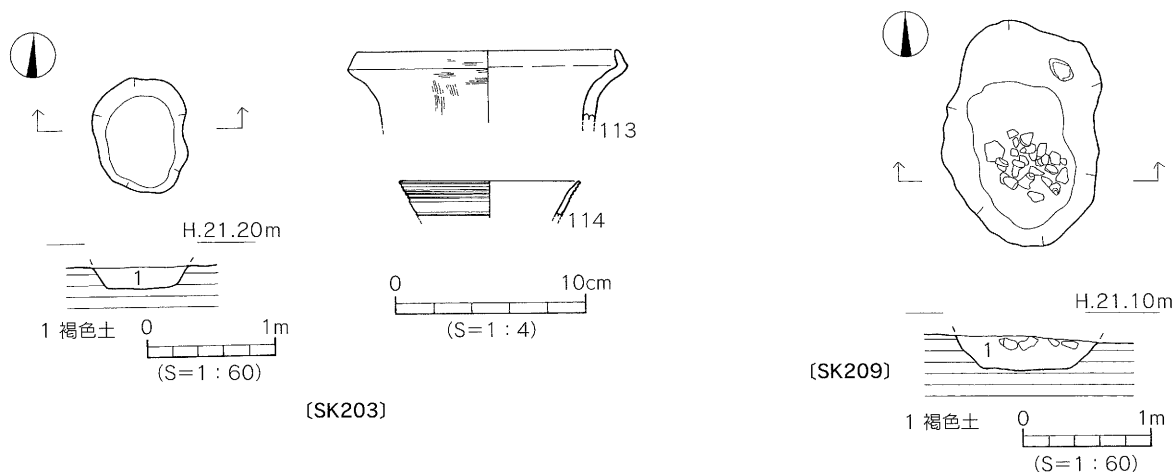
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

S K 203 (第346図)

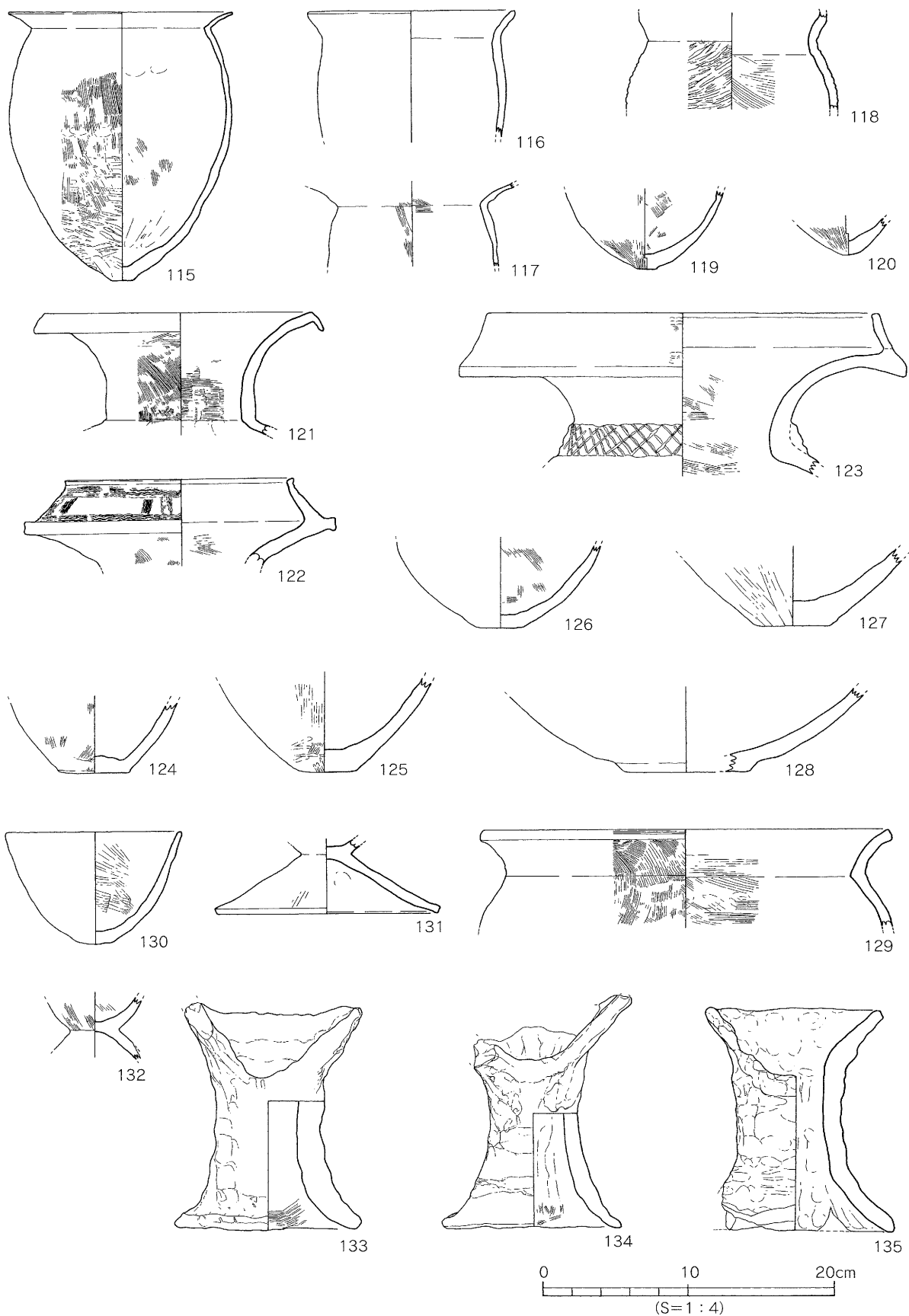
2区中央部、B23・24区に位置する。第IV層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.95m、短径0.75m、深さ17cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物：113・114は壺形土器。113は複合口縁壺、114は直口壺で、細沈線文を施す。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



第346図 SK203・209測量図・出土遺物実測図



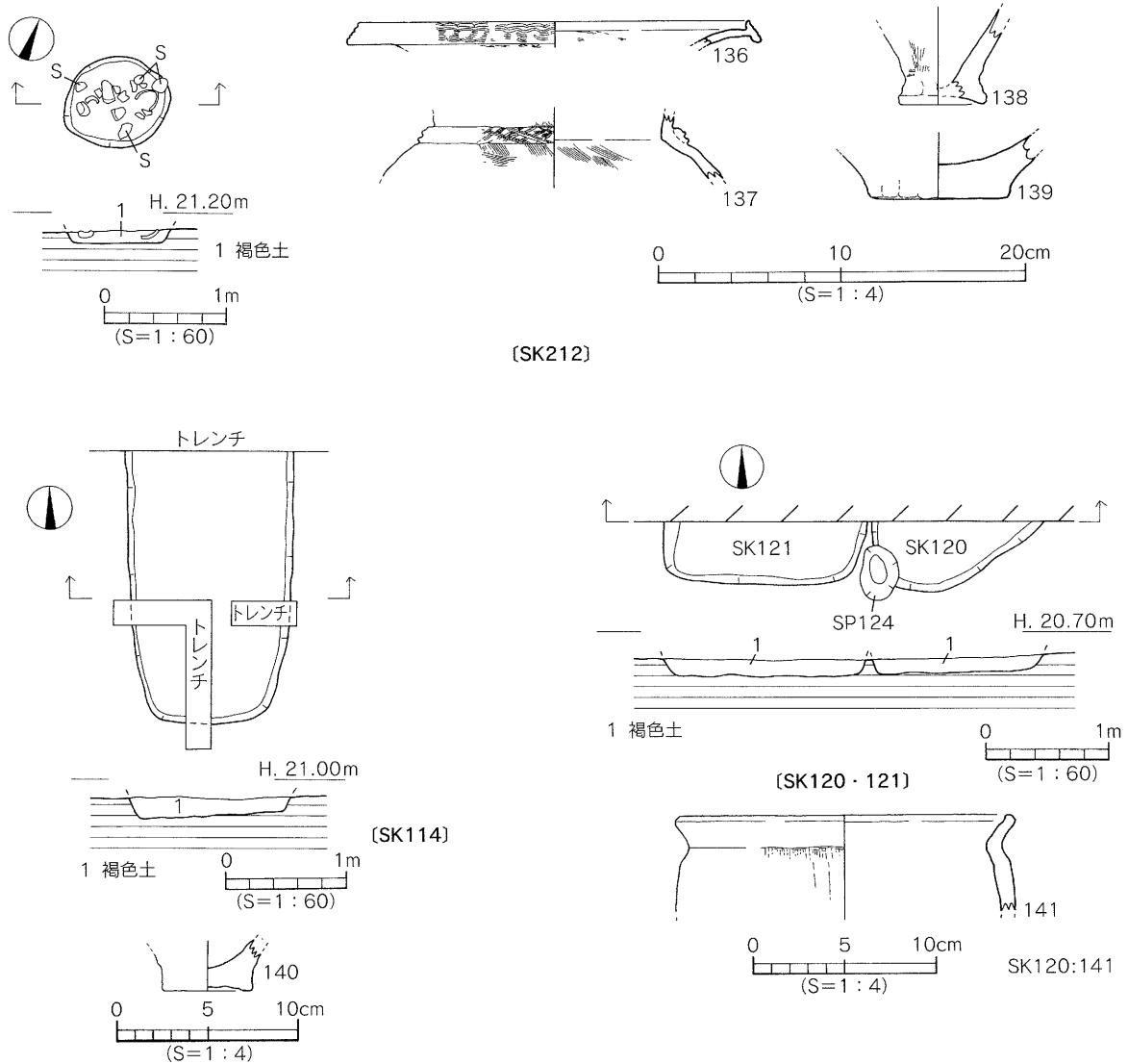
第347図 SK209出土遺物実測図

S K 209 (第346・347図、図版60・64)

2区中央部、B・C23区に位置する。第IV層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.80m、短径1.23m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。遺物は埋土上位より、完形品を含む弥生土器が出土した。

出土遺物：115～120は甕形土器。115は胴上部外面にはタテ方向のハケメ調整、胴下部にはタタキ調整を施す。117は外面にハケメ調整、118はタタキ調整を施す。119・120は底部で平底となる。121は広口壺、122・123は複合口縁壺である。122の口縁部には、櫛描き波状文間にタテ方向の沈線文（2本1組）を施す。124～128は底部片で平底となる。129～132は鉢形土器。130は完形品、131・132は脚付鉢である。133～135は支脚形土器で、受部は「U」字状にカットされる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



第348図 SK212・114・120・121測量図・出土遺物実測図

S K 212 (第348図)

2区東端、A29区に位置する。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.85m、短径0.75m、深さ10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が出土した。

出土遺物：136・137は壺形土器。136は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に櫛描き波状文を施す。138は甕形土器の底部で上げ底、139は壺形土器の底部で平底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

S K 114 (第348図)

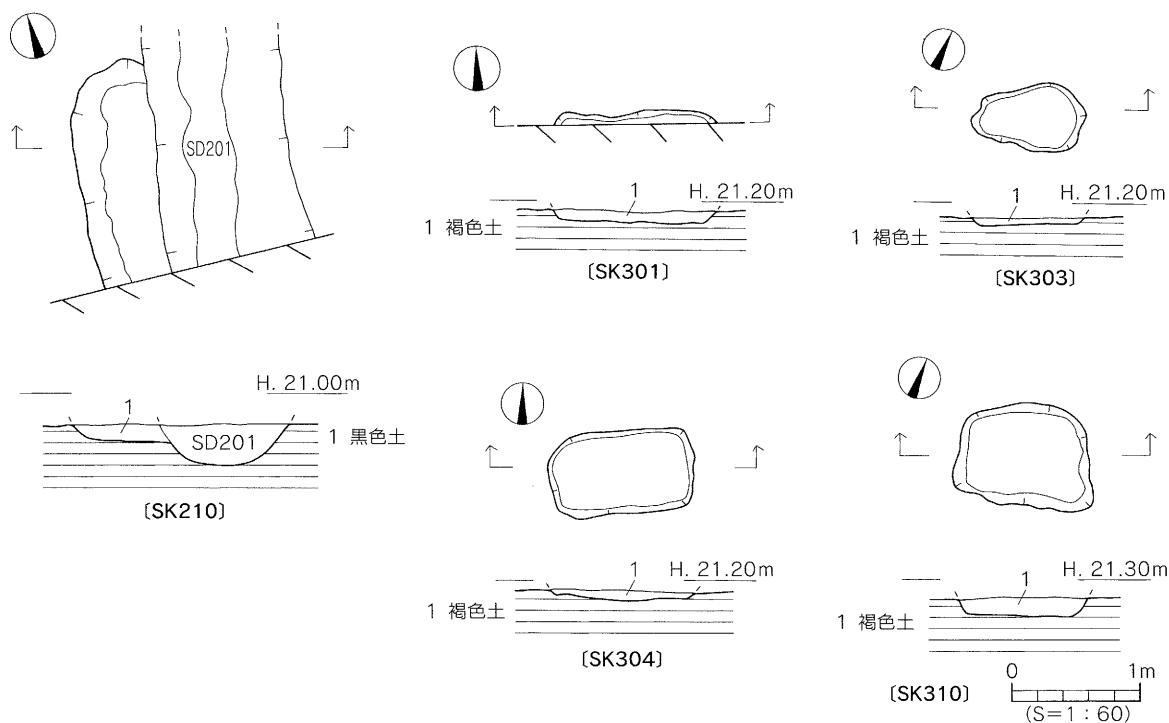
1区東側、B14区に位置し、北側は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。平面形態は長方形を呈し、規模は南北検出長2.25m、東西長1.35m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物：140は甕形土器の底部で、上げ底となる。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期前半とする。

S K 120 (第348図)

1区中央部、B7区に位置する。溝西側はS P 124に切られ、北側は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.40m、南北検出長0.60m、深さ12cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。遺



第349図 SK210・301・303・304・310測量図

物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物：141は甕形土器。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部をやや内方に拡張する。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期前半とする。

S K 121 (第348図)

1区中央部、B7区に位置する。溝東側はS D 105に切られ、北側は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であり、第III①層が覆う。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.65m、南北検出長0.55m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K 120に酷似することから、概ね弥生時代後期前半とする。

S K 210 (第349図)

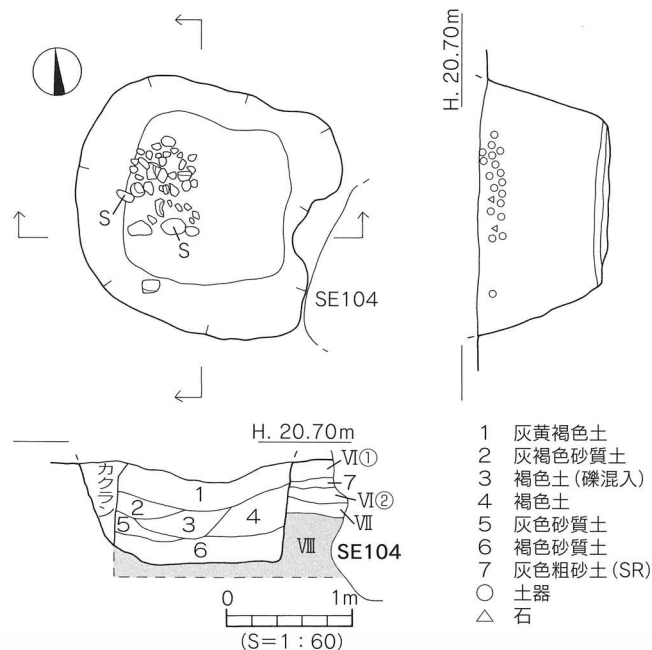
2区西端、B・C19区に位置する。東側はS D 201に切られ、南側は調査区外に続く。第IV層上面での検出であり、第III②層が覆う。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.78m、東西検出長0.63m、深さ13cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：S D 201に切られることから、概ね弥生時代後期前半以前とする。

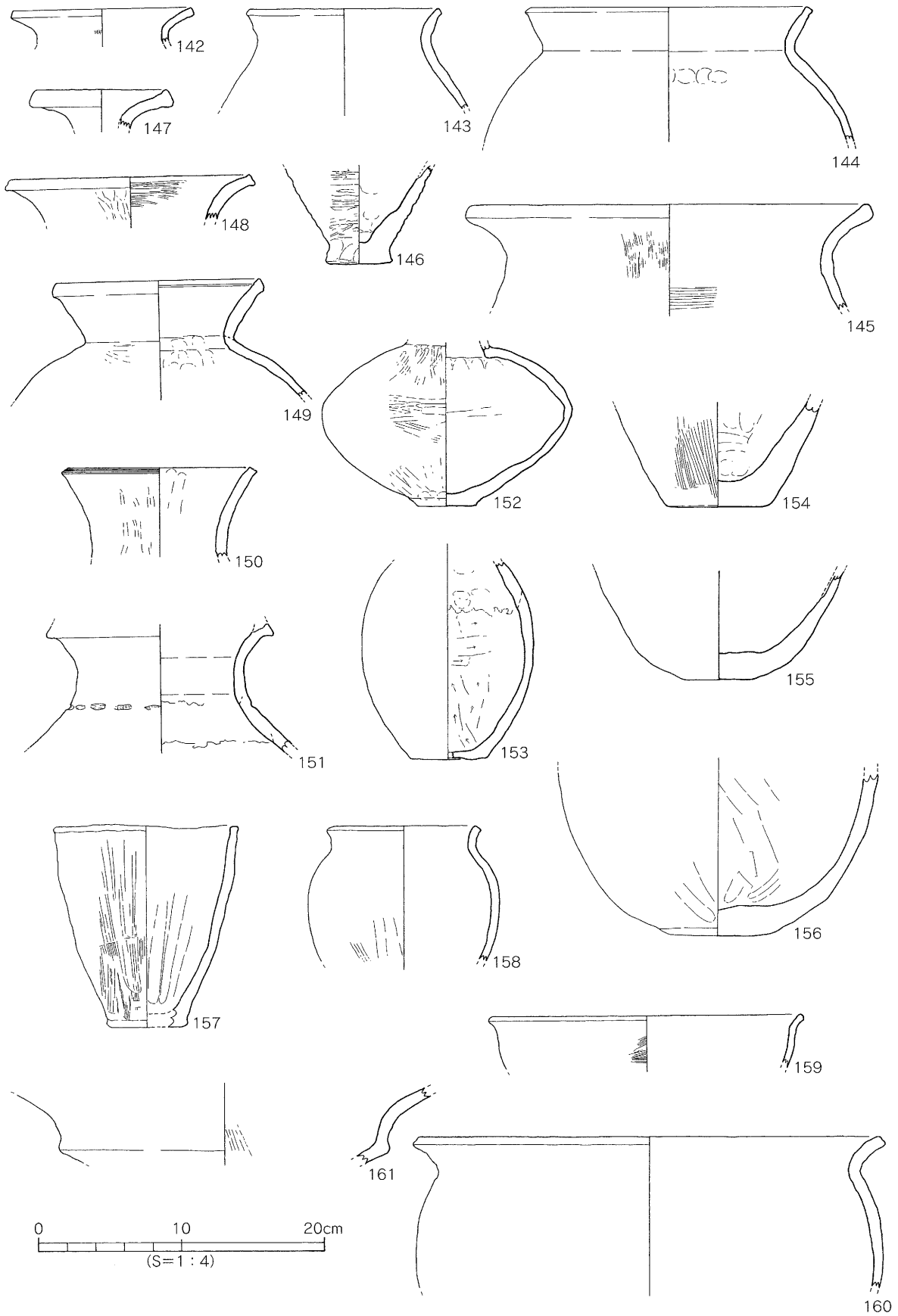
S K 301 (第349図)

3A区中央部、D38区に位置する。南側は調査区外に続く。第IV層上面で検出した。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.28m、南北検出長0.10m、深さ8cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

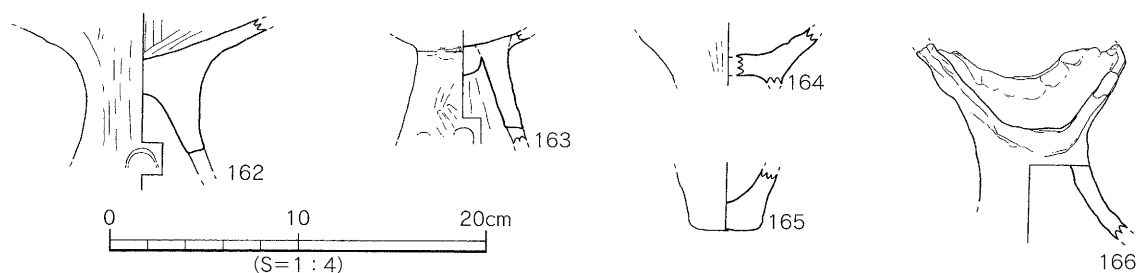
時期：埋土がS K 120・121に酷似することから、概ね弥生時代後期前半とする。



第350図 SE101測量図



第351図 SE101出土遺物実測図(1)



第352図 SE101出土遺物実測図(2)

S K 303 (第349図)

3 A区中央部、D39区に位置する。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は不整長方形を呈し、規模は長さ0.92m、幅0.53m、深さ7cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K 120に酷似することから、概ね弥生時代後期前半とする。

S K 304 (第349図)

3 A区中央部、D39区に位置する。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.15m、幅0.65m、深さ10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K 120に酷似することから、概ね弥生時代後期前半とする。

S K 310 (第349図)

3 B区中央部、C・D44区に位置する。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.03m、幅0.80m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K 120に酷似することから、概ね弥生時代後期前半とする。

(4) 井戸

SE 101 (第350図、図版60)

1区東側、B12区に位置する。第Ⅵ①層上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2.00m、短径1.70m、深さは最深部で105cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側壁体は筒状となる。井戸は地面に穴を掘っただけの素掘りのもので、壁体中位から底面にかけては、第Ⅷ層砂礫層となる。埋土は7層に分層され、1層灰黄褐色土、2層灰褐色砂質土、3層褐色土(礫混入)、4層褐色土、5層灰色砂質土、6層褐色砂質土、7層灰色粗砂質土である。堆積状況はほぼ水平堆積をなすが、3層堆積時に再掘削された可能性がある。遺物は主に、1層中からは土器片、6層中からは完形品を含む土器が多量に出土した。

出土遺物 (第351・352図)

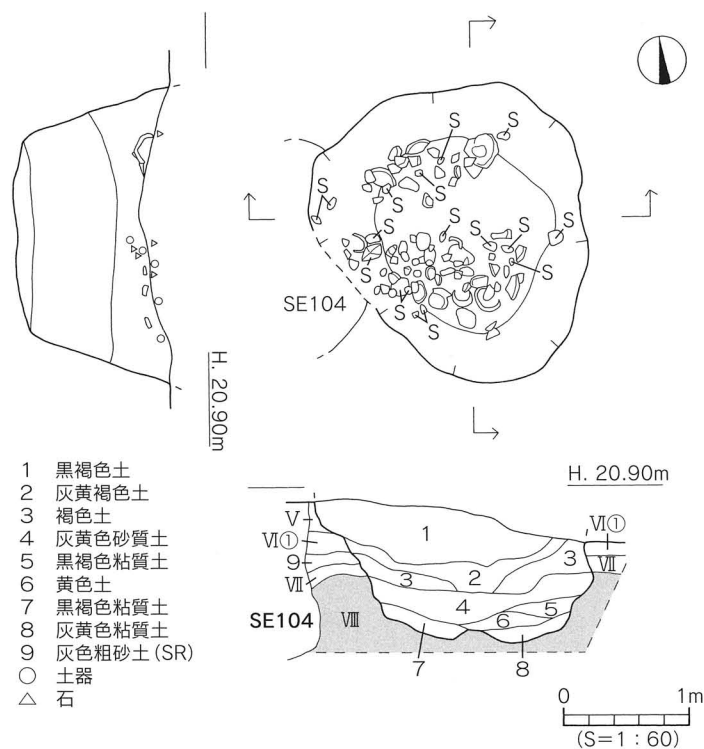
出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器である。142～146は甕形土器。142～145は口縁部が「く」の字状を呈し、口縁端部は「コ」字状となる。146は底部片

で、胴部外面にタタキ調整を施す。147～156は壺形土器。147～149は広口壺で、147・148は口縁端部を上下方に拡張する。150は直口壺で、口縁端面に沈線文2条を施す。151は頸部片で、刻目を施す。152は長頸壺の胴底部。底部は平底となり、胴部上位にはヘラミガキ調整を施す。153は胴底部で、内面にヘラケズリ調整を施す。154～156は底部で、厚みのある平底となる。157～160は鉢形土器、161～163は高坏形土器である。164・165は鉢形土器の底部で、164は脚付鉢である。166は支脚形土器で、受部は「U」字状にカットされる。

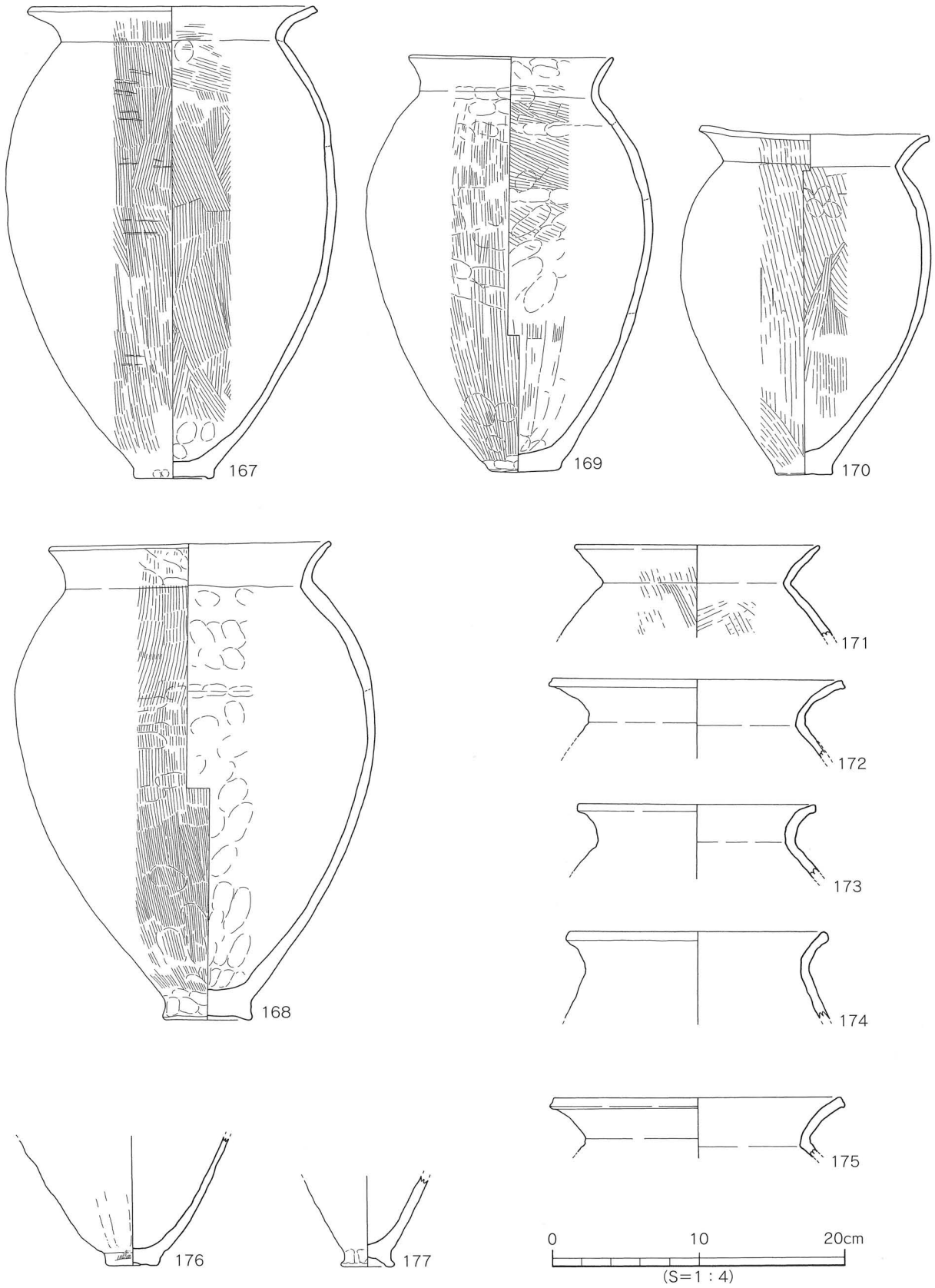
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

SE 102 (第353図、図版60)

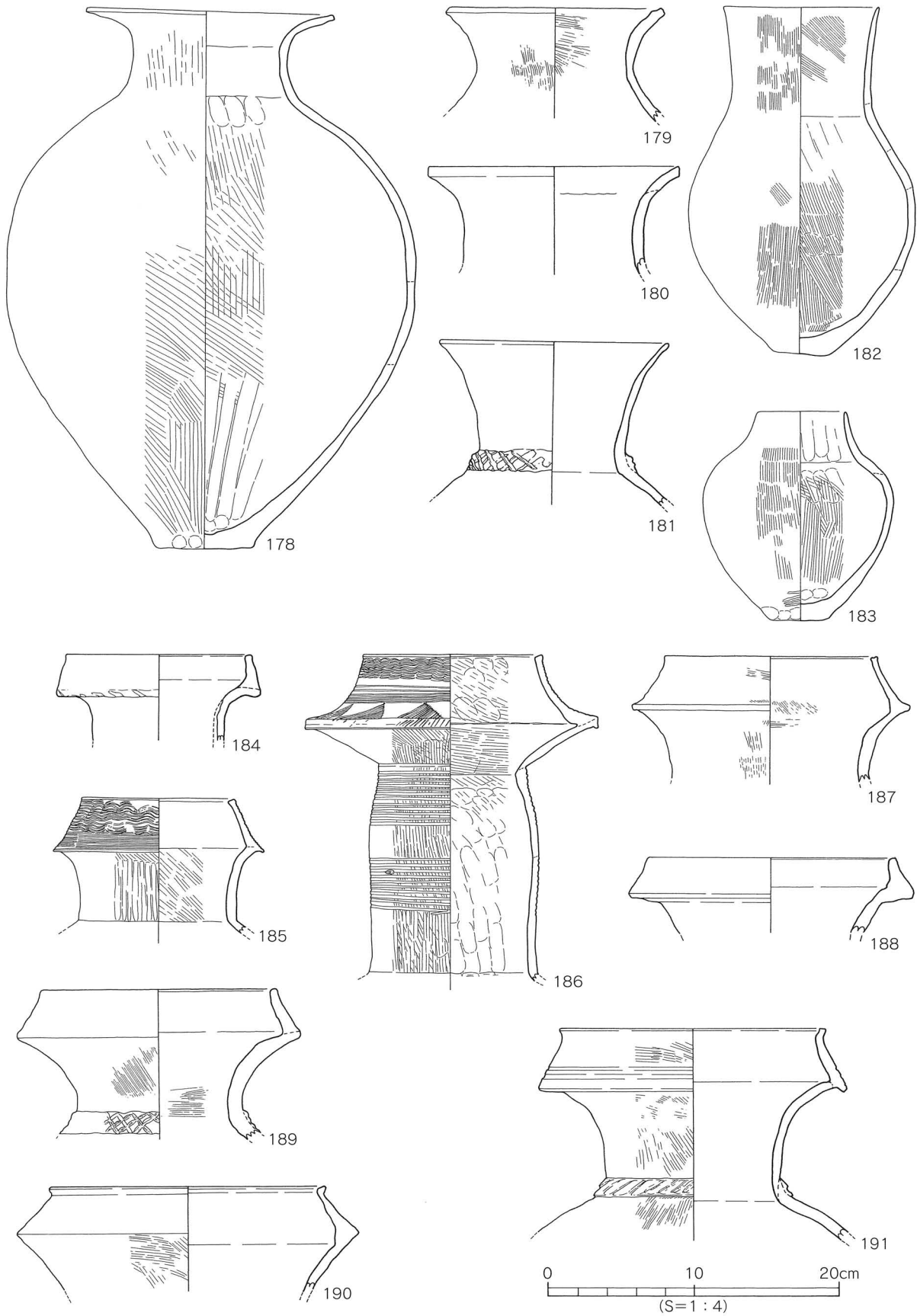
1区東側、B12・13区に位置し、西側はSE104に切られる。第VI①層上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径2.35m、短径2.15m、深さは最深部で105cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側壁体はオーバーハングにより袋状となる。井戸は地面に穴を掘っただけの素掘りのもので、壁体中位から底面にかけては、第VIII層砂礫層となる。埋土は8層に分層され、1層黒褐色土、2層灰黄褐色土、3層褐色土、4層灰黄色砂質土、5層黒褐色粘質土、6層黄色土、7層黒褐色粘質土、8層灰黄色粘質土である。堆積状況は斜堆積をなすが、2層堆積時に再掘削された可能性がある。遺物は1層及び2層中から、弥生土器と河原石が出土した。1層中からは、復元完形品(167・169・170)や胴底部完形品(200)を含む大型の土器片と、径5～20cm大の河原石40点余りが密集して出土した。2層中からは口縁部を欠損するものの、ほぼ完形品(178)や土器片が散在して出土した。



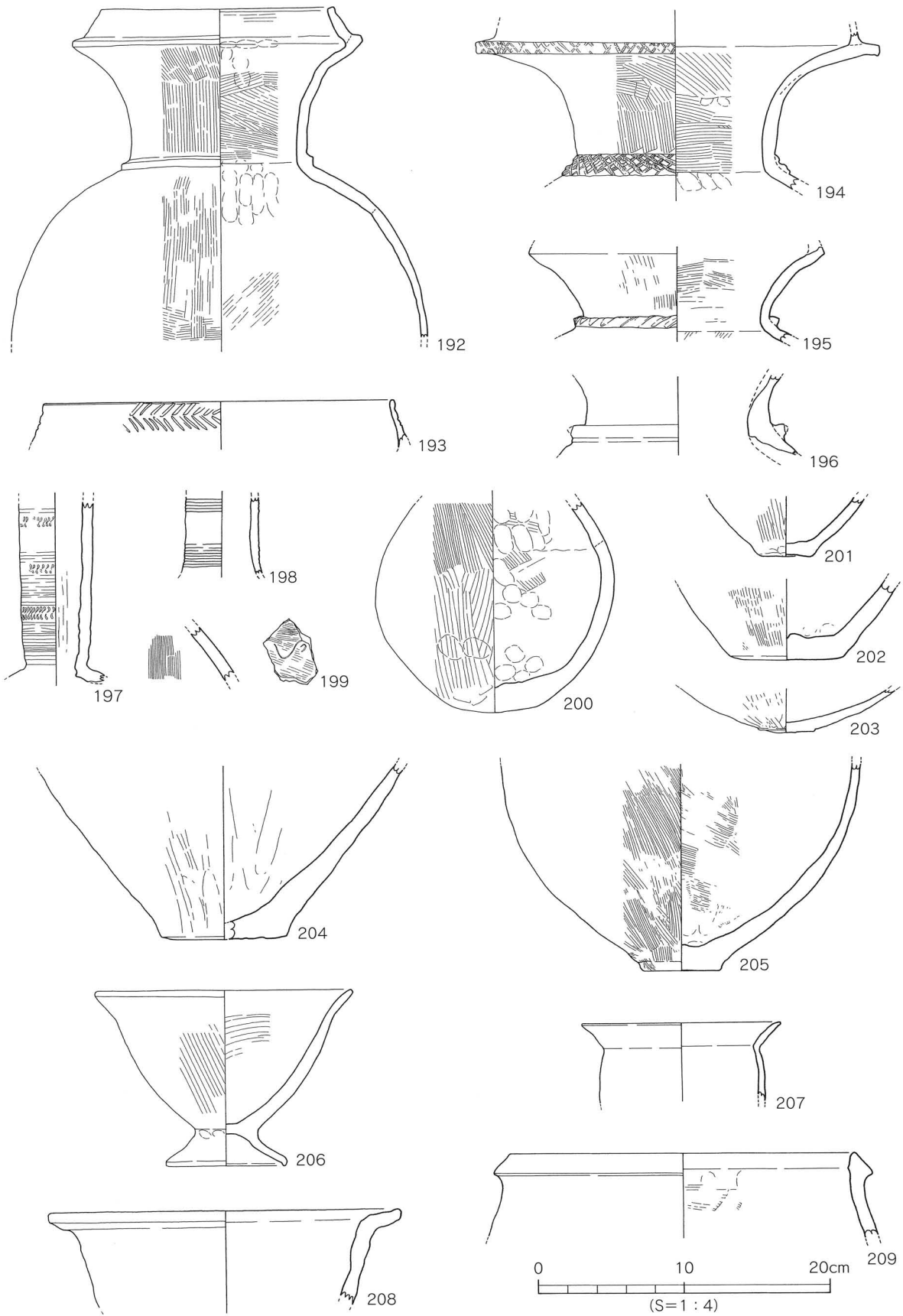
第353図 SE102測量図



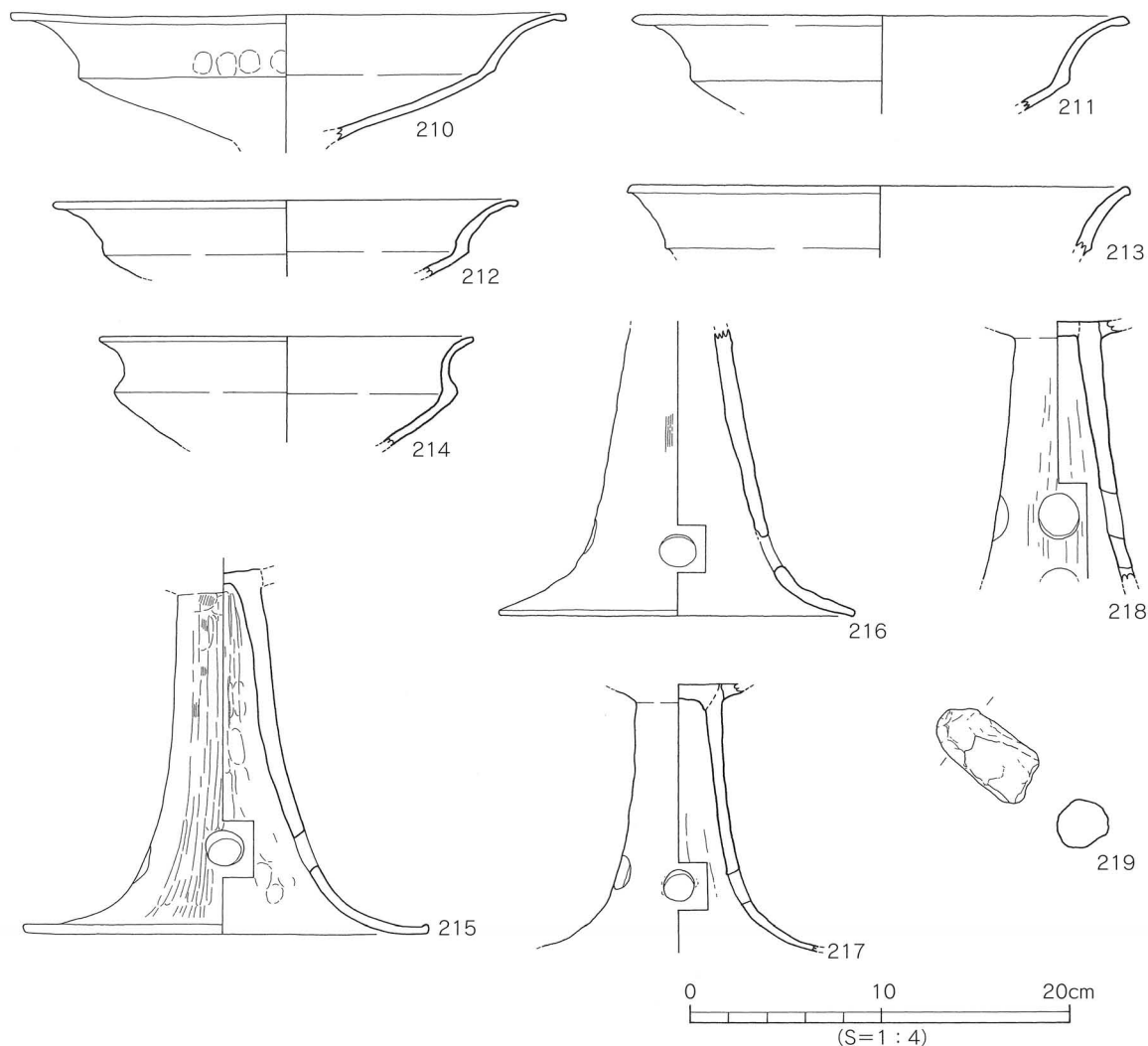
第354図 SE102出土遺物実測図(1)



第355図 SE102出土遺物実測図(2)



第356図 SE102出土遺物実測図(3)



第357図 SE102出土遺物実測図(4)

出土遺物(第354~357図、図版64・65)

出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器である。167~177は甕形土器。167・169・170は完形品。口縁部は「く」の字状を呈し、胴上位に胴部最大径をもつ。167・168・170はわずかに上げ底、169は平底となる。167は胴部外面にタタキ調整後、ハケメ調整を施す。171~175は口縁部片、176・177は底部片である。178~205は壺形土器。178~181は広口壺。178は完形品で、胴部内外面にハケメ調整を施す。182・183は完形品。182は直口壺、183は短頸壺で、182の胴部内面には、粘土補修痕が残る。184~195は複合口縁壺。184は口縁部下位に刻目、185は沈線文と波状文とを施す。186は長い頸部をもつもので、口縁部には波状文、沈線文と山形文、頸部には沈線文2段を施す。193は羽状文を施す。197・198は長頸壺の頸部片。197は細沈線文と半截竹管文、198は細沈線文を施す。199は肩部片で、線刻を施す。200~205は底部で平底となる。206~209は鉢形土器。206は脚付鉢で、脚端部は内方に屈曲する。209は口縁部を三角形状に拡張する。形態の特徴から、外来的要素の強い土器である。210~218は高坏形土器、219は支脚形土器である。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

S E 301 (第358図、図版61)

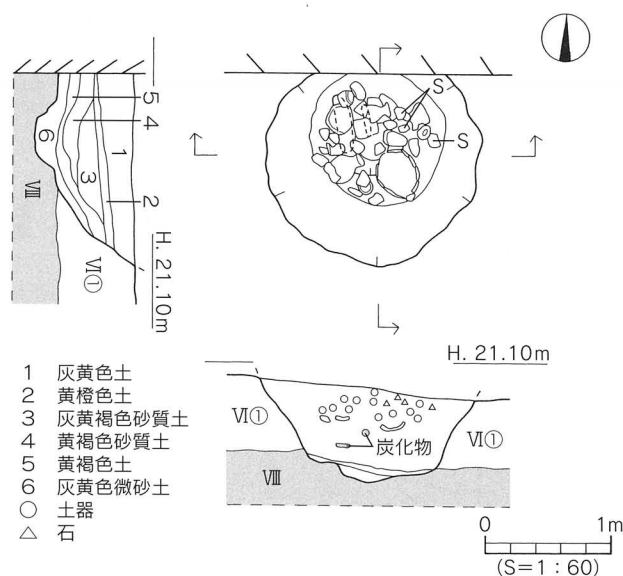
3 A区東側、C・D39区に位置する。S D304を切り、北側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径1.60~1.65m、深さは最深部で78cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、井戸底面は中央部が凹む。井戸は地面に穴を掘っただけの素掘りのもので、井戸底面は第VIII層砂礫層に及ぶ。埋土は6層に分層され、1層灰黄色土、2層黄橙色土、3層灰黄褐色砂質土、4層黄褐色砂質土、5層黄褐色土、6層灰黄色微砂土である。

遺物は2層及び3層中から、完存品や復元完存品を含む弥生土器や河原石が出土した。出土した弥生土器は甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器である。2層中からは、口縁部を一部欠損するもののほぼ完形の甕形土器(225)や壺形土器(229・230)をはじめ、大型の土器片が井戸中央部にまとまって出土した。3層中からは、胴下半から底部を欠損するものの、ほぼ完存する壺形土器(239)を中心に、完存品(226・227・231・232)が弧状に並べられた状態で出土した。なお、出土した壺形土器のうち、肩部に2本の線刻(記号か)を施すものが9個体(227・229~234・236・237)ある。また、埋土中に少量ではあるが炭化物が混入する。

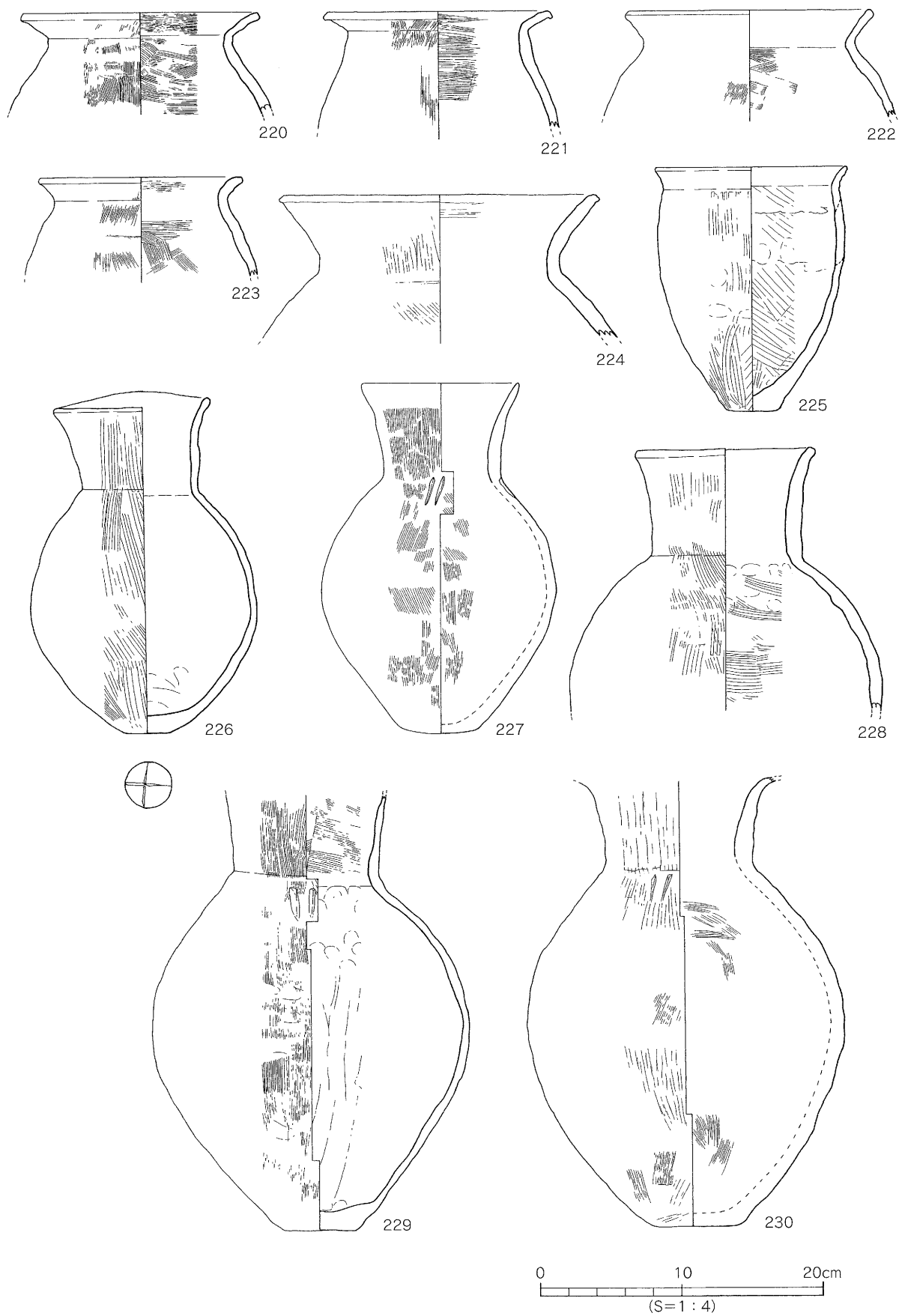
出土遺物(第359~361図、図版66~68)

220~225は甕形土器。224は口径20cmを超える大型品、225は小型品である。225は口縁部が短く外反し、胴部の張りは弱く、底部は厚みのある平底となる。226~241は壺形土器。226~230は直口壺で、226の底部外面には「×」字状の線刻が残る。227・229・230の肩部には、幅0.3~0.5cm、長さ2.0~2.5cm前後の線刻が2本施される。231~234は長頸壺で、肩部には直口壺と同様に、2本の線刻が施される。235の肩部には、ヘラ状工具による列点文が巡る。236は広口壺で、口縁端面に沈線文1条が巡る。肩部にはタテ方向の線刻が2本施される。237~239は複合口縁壺。237は口縁部がやや外反し、肩部に線刻を施す。238は頸部に列点文が巡る。239は大型品で、凸帯上に刻目を施す。240・241は底部で平底となる。242は鉢形土器、243~249は高坏形土器である。243の口縁端部は内傾する。

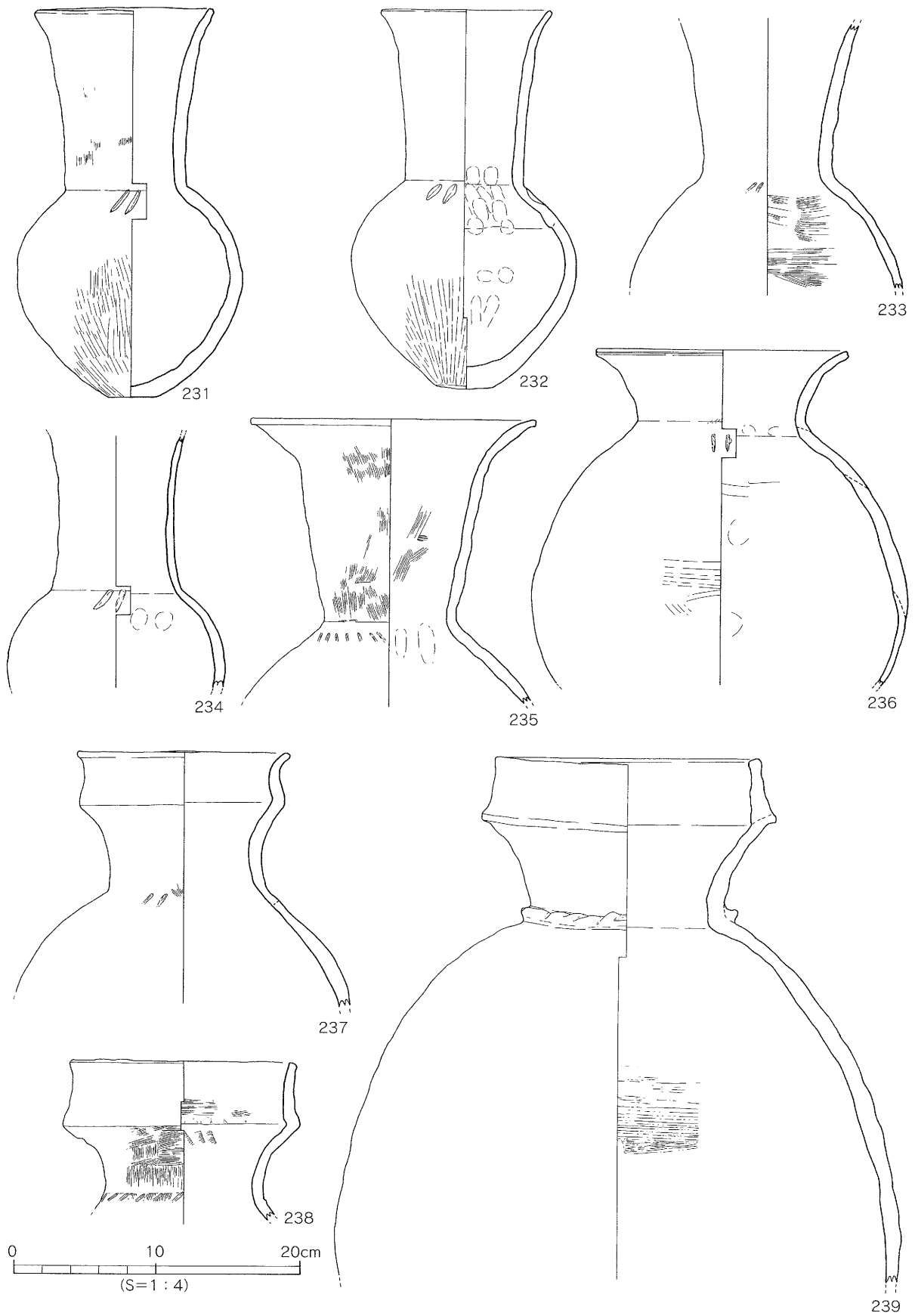
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



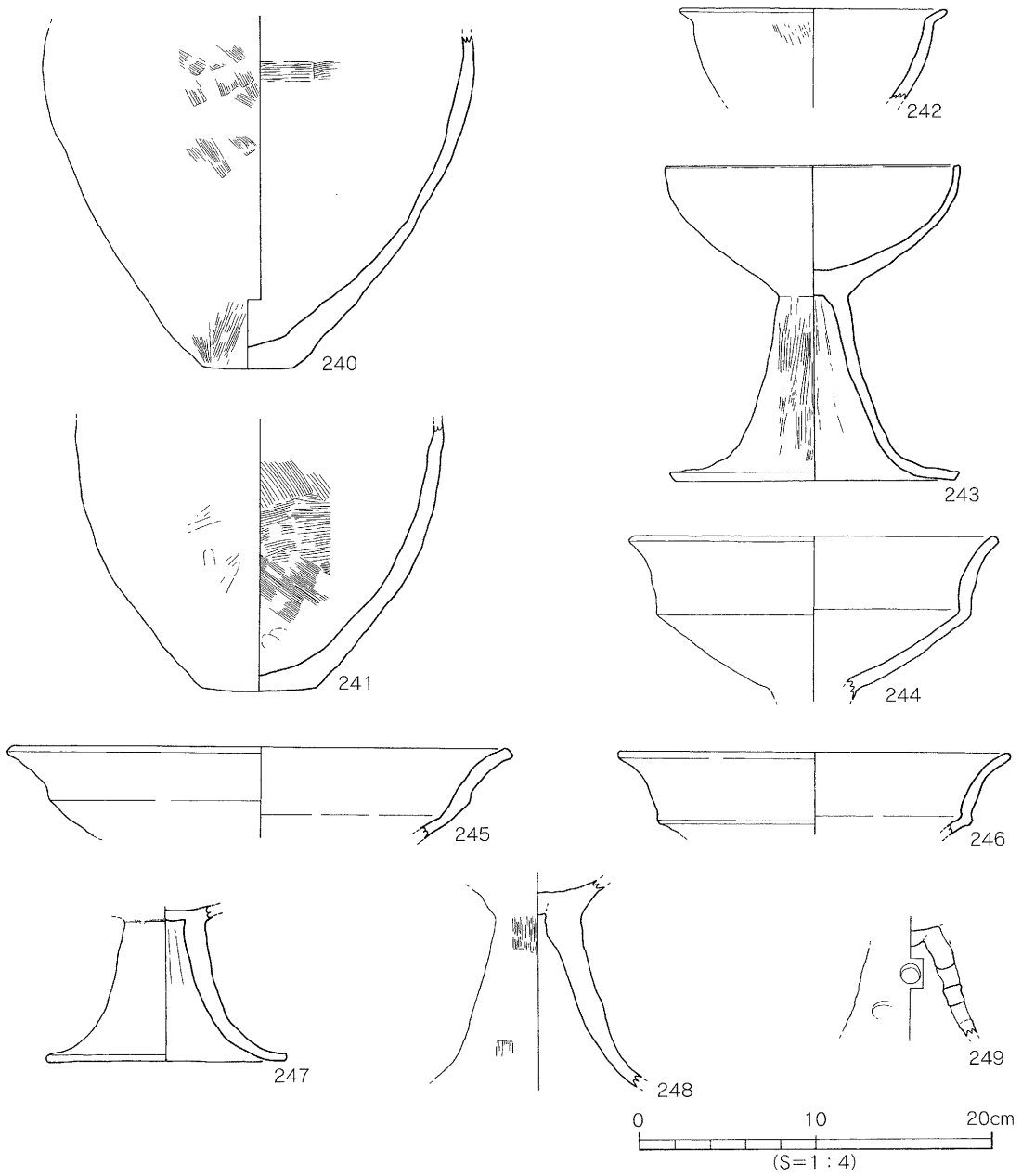
第358図 SE301測量図



第359図 SE301出土遺物実測図(1)



第360図 SE301出土遺物実測図(2)

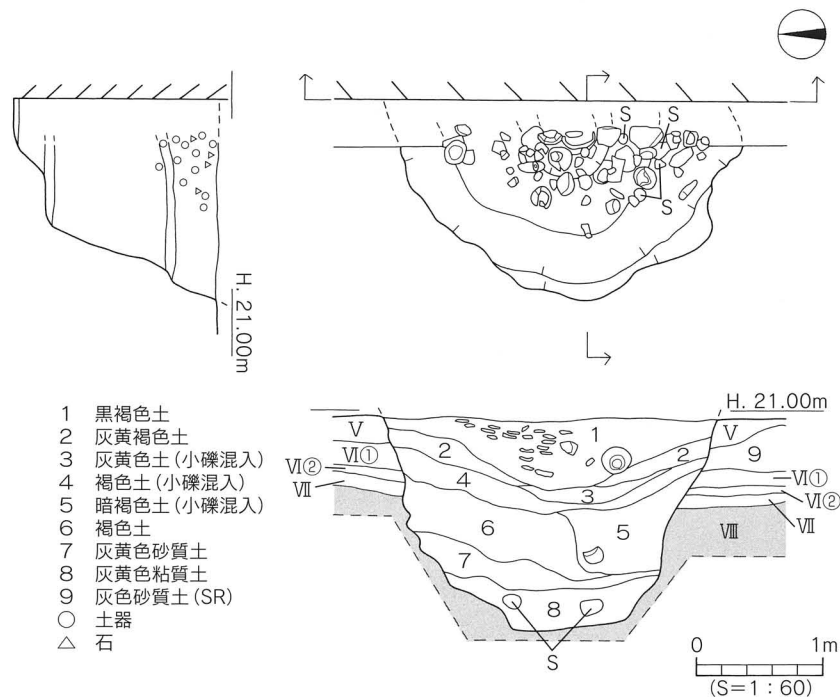


第361図 SE301出土遺物実測図(3)

SE 103 (第362図、図版61)

1区中央部東寄り、B11区に位置し、東側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.28m、東西検出長0.79m、深さは最深部で1.50mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが西壁上位はテラス状となる。井戸は地面に穴を掘っただけの素掘りのもので、井戸底面は第VIII層砂礫層に及ぶ。埋土は8層に分層され、1層黒褐色土、2層灰黄褐色土、3層灰黄褐色土(礫混入)、4層褐色土(礫混入)、5層暗褐色土(礫混入)、6層褐色土、7層灰黄色砂質土、8層灰黄色粘質土である。堆積状況は、ほぼ水平堆積をなすが、6層堆積時に再掘削された可能性がある。

遺物は1層、4層、5層中から弥生土器と石器、及び径10~30cmの河原石40点余りが出土した。出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、甑形土器、支脚形土器、ミニチュア品である。このほか、匙形土製品が2点出土した。石器は石庖丁と石錘が出土した。1層中からは、完形品はその場で割れた状態で点在して出土した。完形品は壺形土器(299)、鉢形土器(310)などがあり、その他は、口縁部や底部などの大型片が出土した。石器は石庖丁(339)と石錘(340)が出土した。4層中からは、1層と同様に地点ごとに完形品が割れた状態で出土した。壺形土器(296)と器台形土器(329)とが井戸南側に並んで出土したのをはじめ、壺形土器(277・281・295)が井戸北側で同様の出土状況を示した。さらに、4層中からは径10~20cm大の河原石30点余りが散在して出土した。5層中からは、井戸南西部にて完形品(275・276)や復元完形品(282)が折り重なって出土した。なお、5層中からは匙形土製品(337)が出土した。



第362図 SE103測量図

出土遺物（第363～367図、図版68～70）

250～274は甕形土器。250～265は中型品、266・267は口径26cmを超える大型品である。268～270は小型品で、268の底部はわずかに上げ底となる。胴部外面はハケメ調整を施す。271～274は底部である。275～309は壺形土器。275～281は直口壺で、275は頸部に幅0.2cm、長さ2cmほどの線刻が2本施される（記号）。281は頸胴部完存品で、頸部下に刻目列点文が巡る。282～294は複合口縁壺。282は1/2の残存で、頸胴部外面にタテ方向のヘラミガキ調整を施す。290～294は大型品。294は口縁部に沈線文が巡り、口縁接合部には沈線文と円形浮文を施す。形態の特徴から、外来的要素の強い土器である。295は直口壺。296は口縁端面に凹線文2条を施し、内外面共に粗いハケメ調整を施す。299は短頸壺で、胴部下位にはハケメ調整後、ヘラミガキ調整を施す。301～309は底部で、309のみ上げ底となる。310～317は鉢形土器。310の外面、312の胴部内面にはタテ方向のヘラミガキ調整を施す。316は脚付鉢の底部で、径1cm前後の孔を穿つ。318～328は高坏形土器。坏脚部接合方法は、充填技法（323・328）と組み合わせ技法（322・324・325～327）とがある。329は器台形土器、330～333は支脚形土器である。330は受部が「U」字状にカットされる。334・335はミニチュア品である。336は所謂甌形土器で、甕形土器からの転用品である。337・338は匙形土製品である。体部は円形、皿状を呈し、337は柄部の断面形態が円形を呈する。339は敲打段階の石庖丁未成品である。340は石錘で、重量132.85gを測る。

時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。

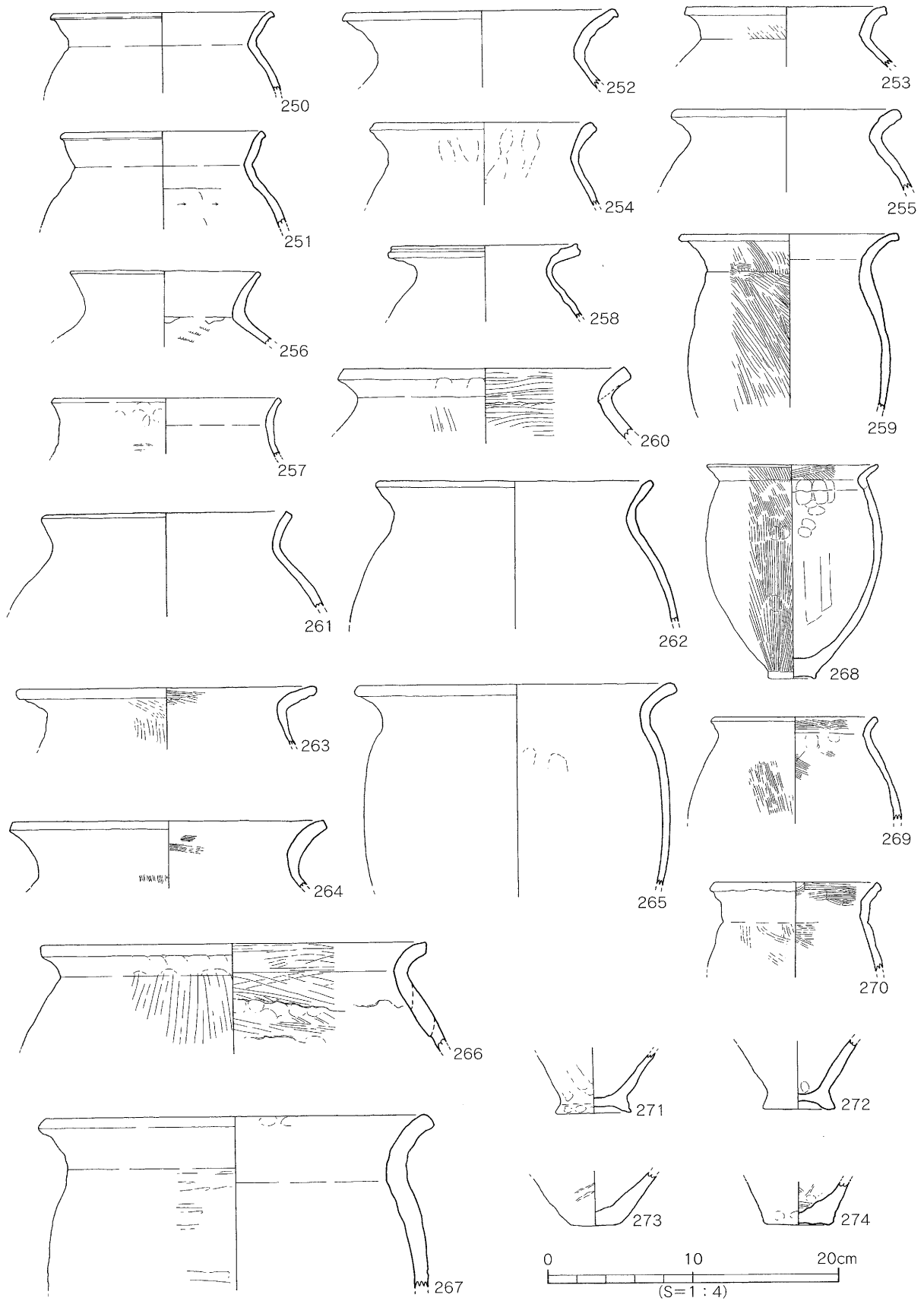
S E 104（第368図、図版60）

1区東側、B12区に位置し、東側はS E 102を切る。第V層上面で検出した。平面形態は不整円形を呈し、規模は径1.60～1.65m、深さは最深部で1.40mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体中位から下位にかけては、オーバーハングにより袋状となる。井戸は地面に穴を掘っただけの素掘りのもので、壁体中位から底面にかけては第VIII層砂礫層となる。埋土は9層に分層され、1層灰色砂質土（小礫混入）、2層灰黄褐色土、3層灰黄褐色砂質土、4層灰黄色砂質土、5層灰色砂質土、6層暗褐色粘質土、7層黄色土、8層黒褐色粘質土、9層灰黄色粘質土である。堆積状況はほぼ水平堆積をなす。遺物は1層中から小片、5・6層中からは、大量の土器片が出土した。

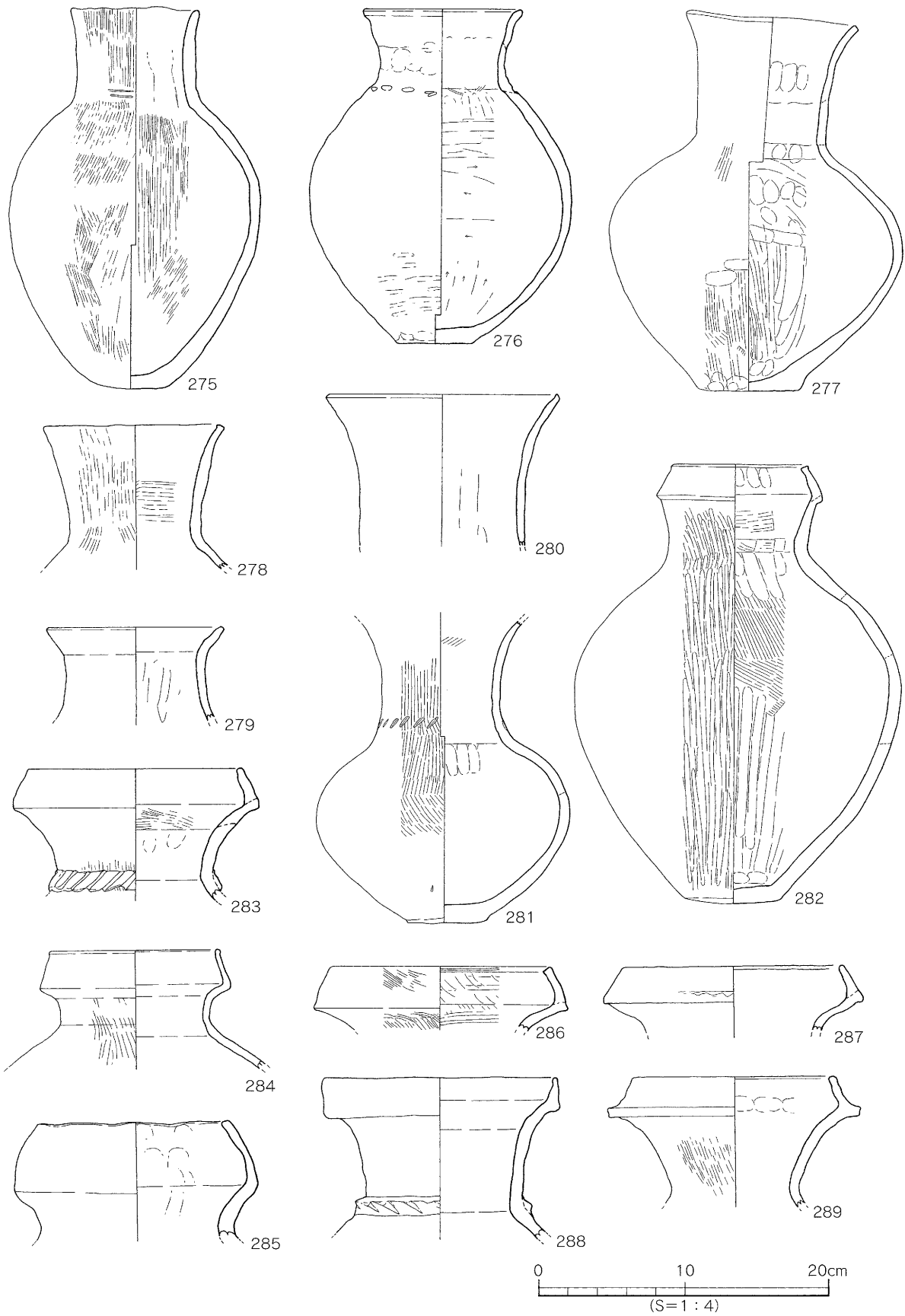
出土遺物（第368図）

出土した弥生土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器である。341・342は甕形土器の口縁部で、口縁端部は「コ」字状となる。343は広口壺の口頸部、344は底部で平底となる。345は鉢形土器、346は高坏形土器、347は器台形土器でヘラ描き沈線文3段と、径1.4cm前後の孔を穿つ。

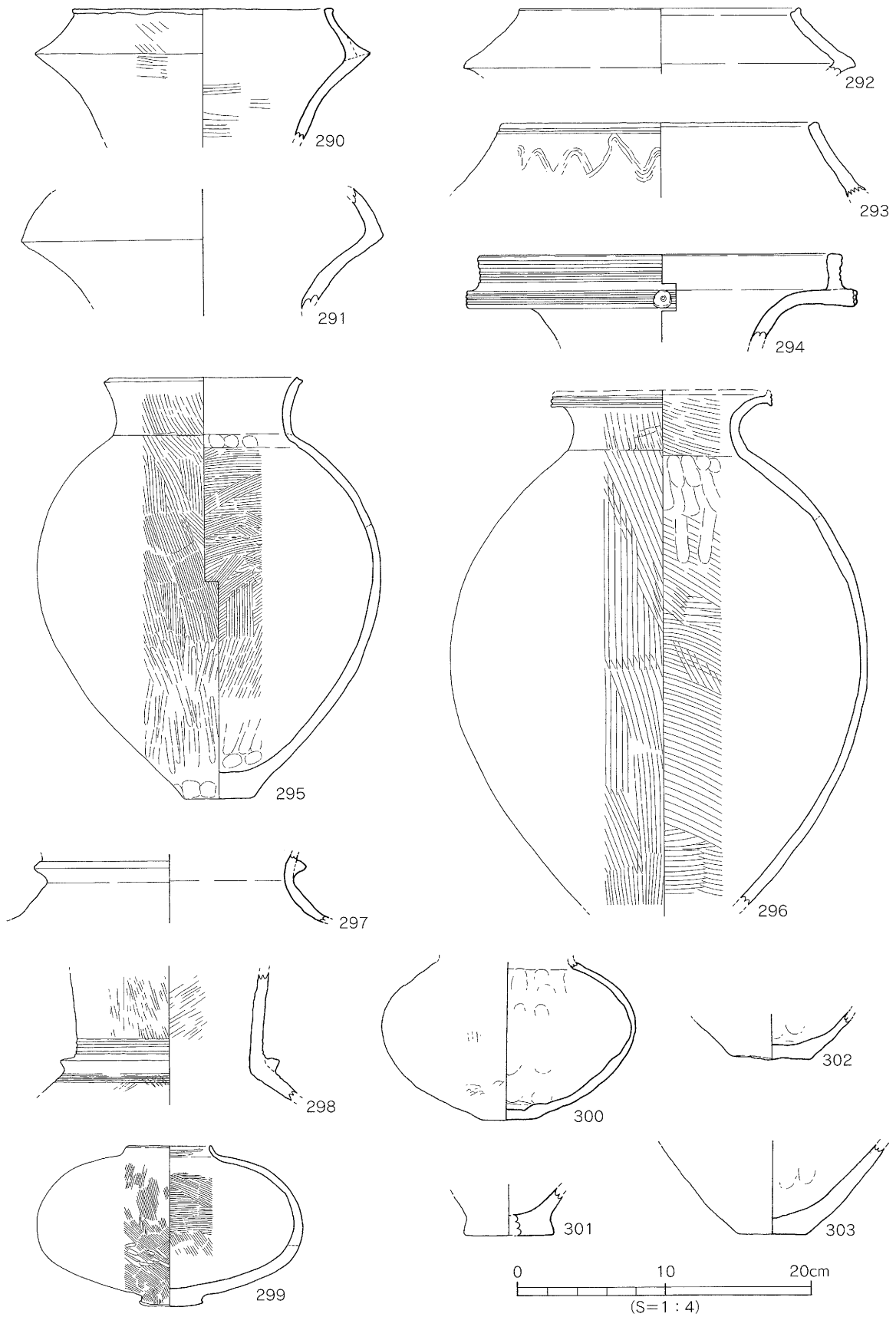
時期：出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半とする。



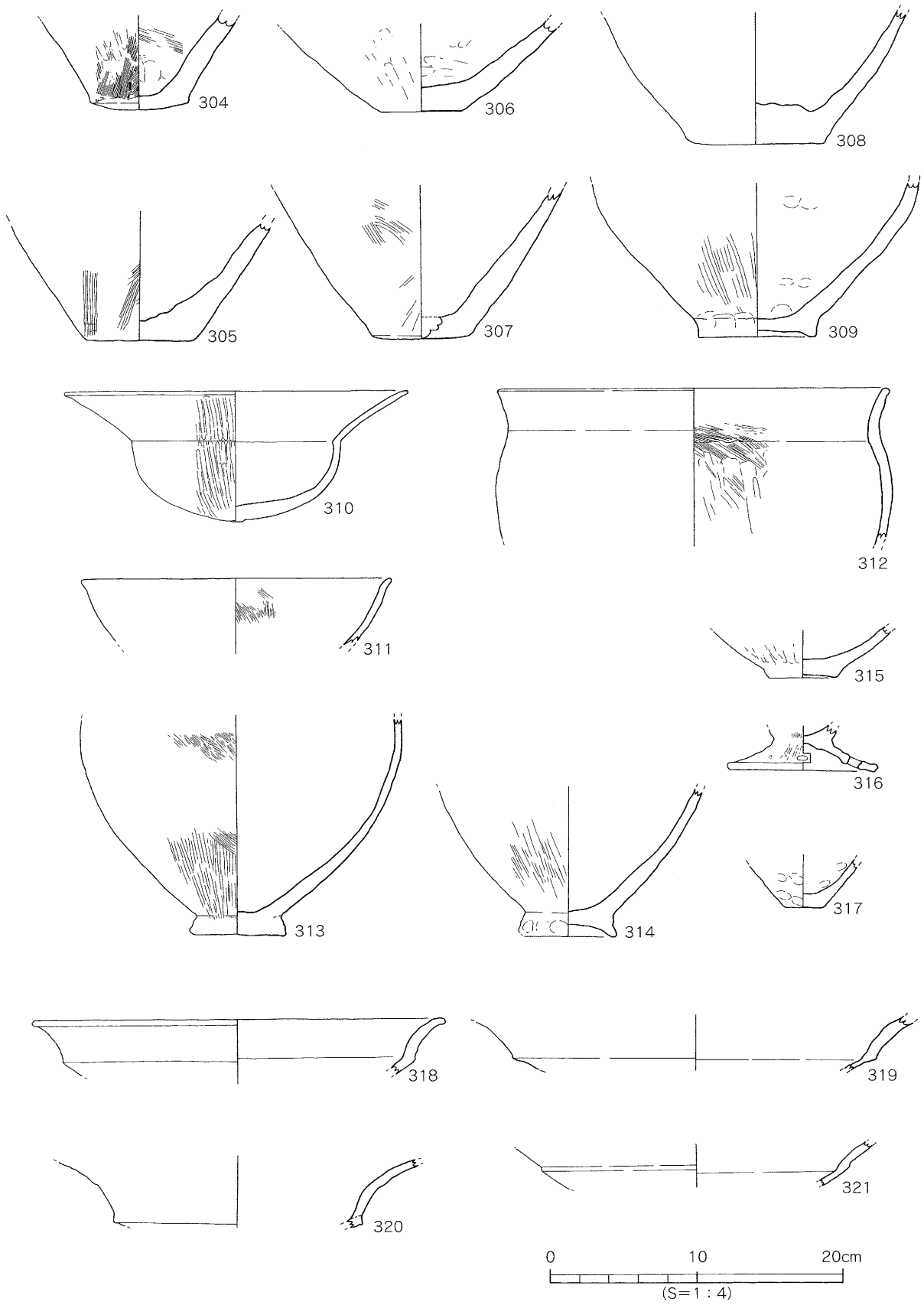
第363図 SE103出土遺物実測図 (1)



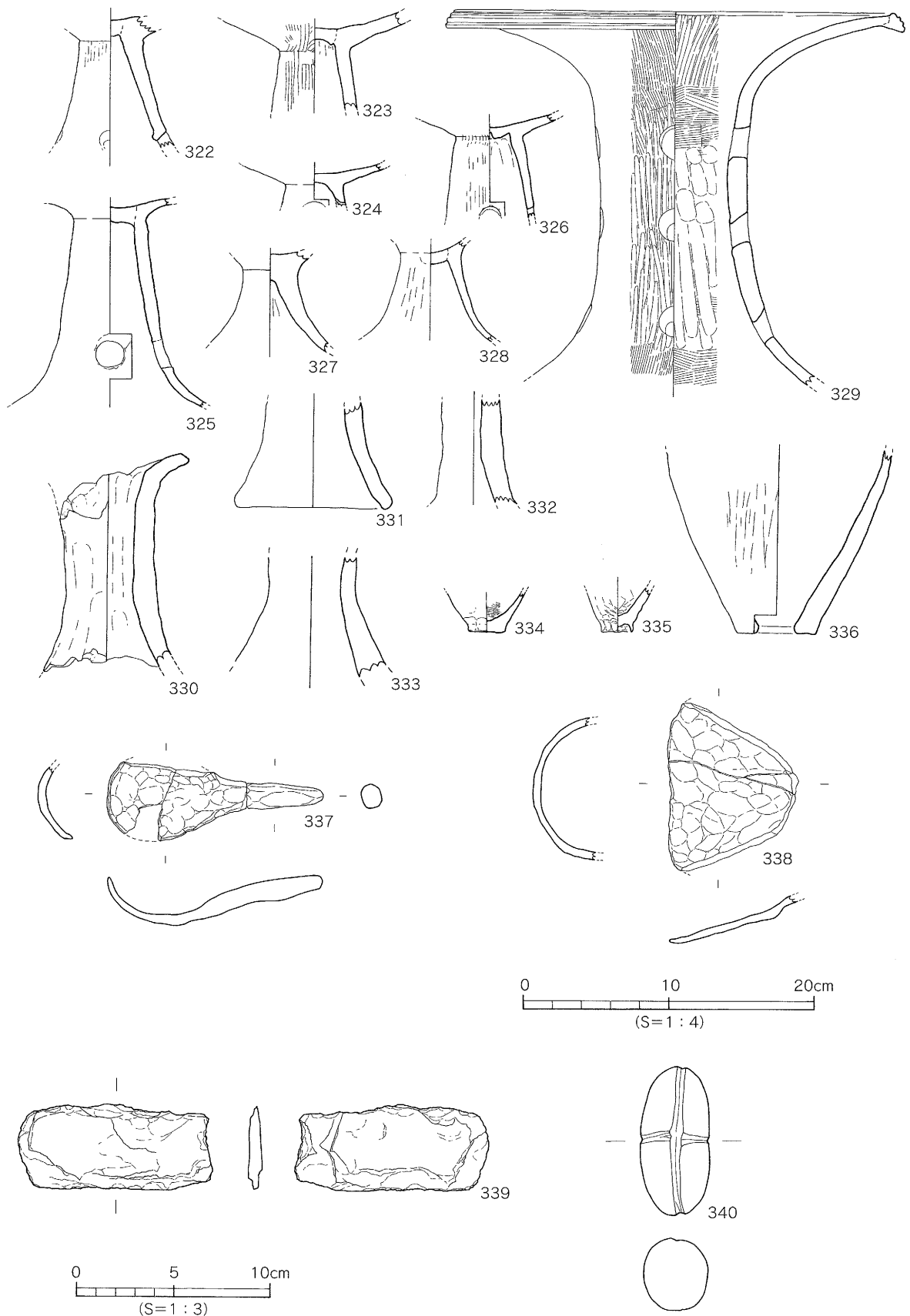
第364図 SE103出土遺物実測図(2)



第365図 SE103出土遺物実測図(3)

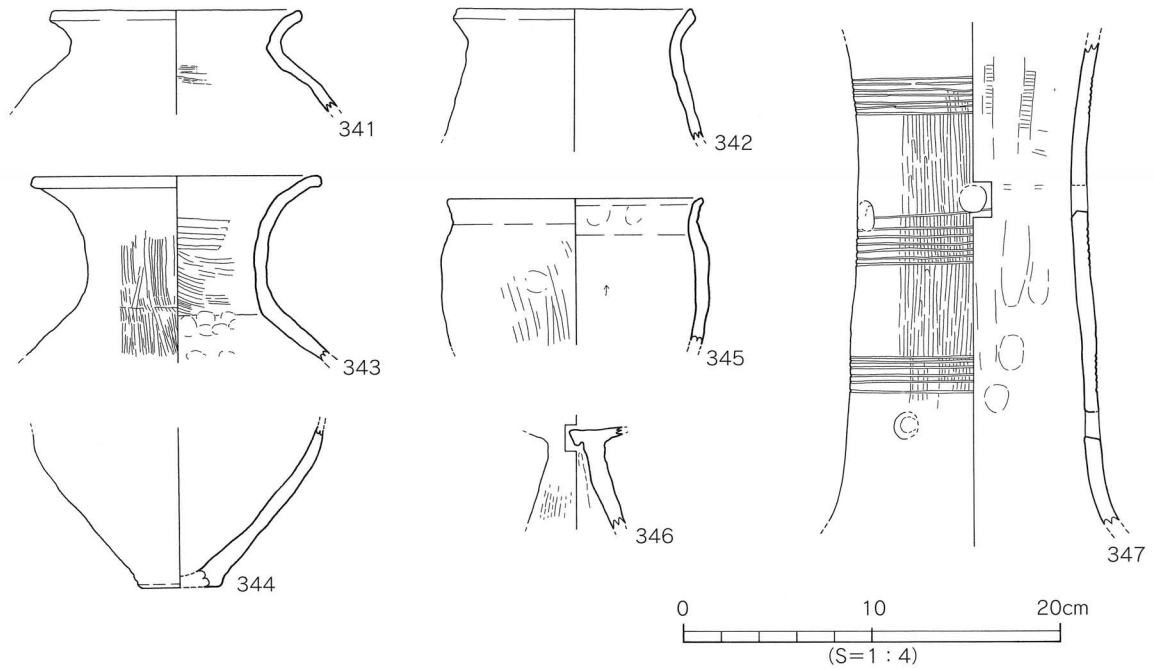
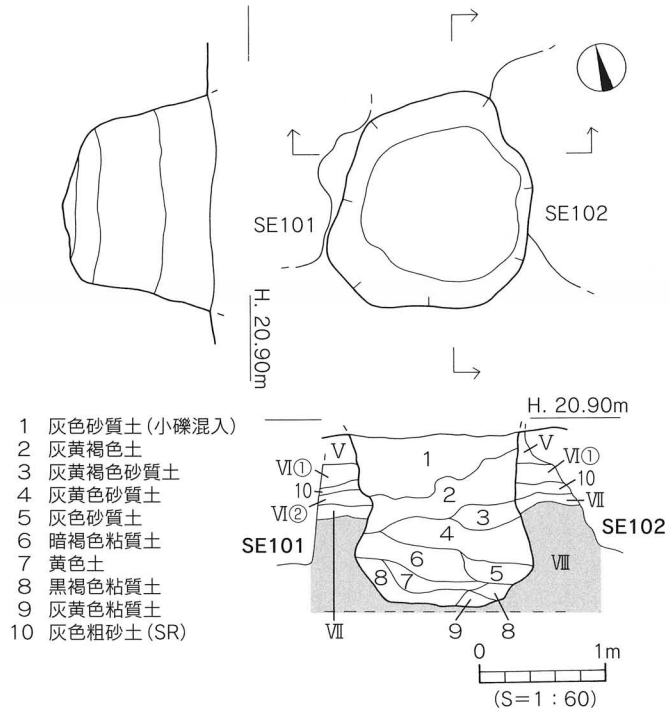


第366図 SE103出土遺物実測図(4)



第367図 SE103出土遺物実測図 (5)

西石井遺跡3次調査地



第368図 SE104測量図・出土遺物実測図

(5) 土器棺墓

土器棺墓101 (第369図、図版62)

1区西側、C4区に位置する。第Ⅵ②層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。墓坑の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.24m、短径0.85m、深さ37cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、墓坑東側はテラス状となる。埋土は3層に分層され、1層灰黄色粘質土、2層灰黄色土、3層灰黄褐色砂質土である。棺身には複合口縁壺を使用する。

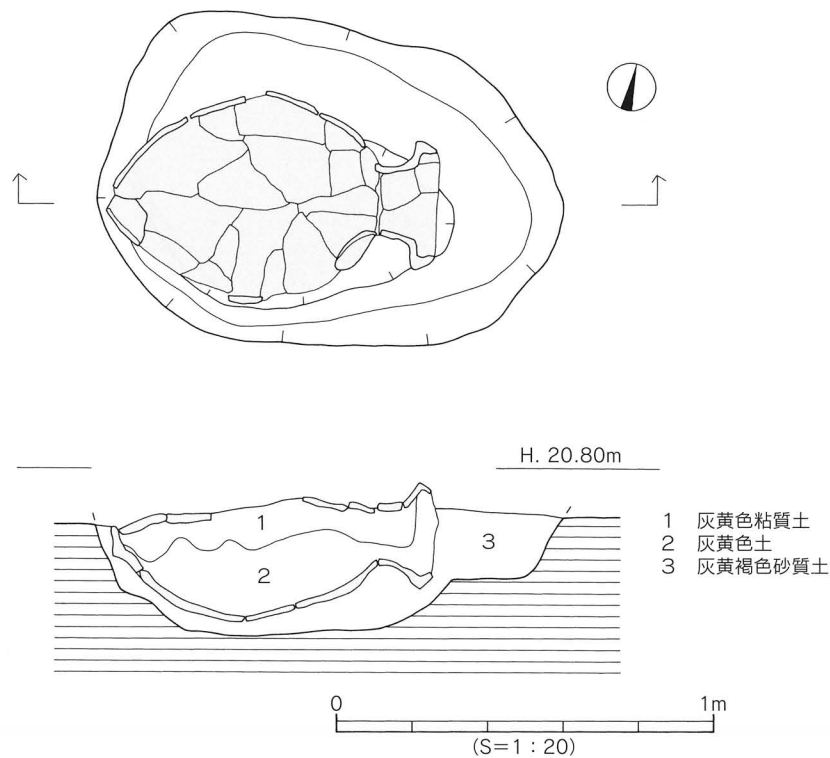
出土遺物 (第370図、図版71)

348は複合口縁壺。口縁端部は内傾する面をなす。口縁部に櫛描き波状文、頸部には押圧凸帯文を施す。胴部最大径は胴中位にあり、頸部内面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。

時期：棺身に使用された土器の特徴より、弥生時代後期後半とする。

土器棺墓102 (第371図、図版62)

1区中央部東寄り、B10区に位置する。第Ⅵ①層上面で検出した。墓坑の平面形態は不整形円形を呈し、規模は東西長0.99m、南北検出長0.82m、深さ32cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は4層に分層され、1層灰黄色粘質土、2層灰黄色土、3層灰黄褐色土、4層灰黄褐色砂質土である。棺身には複合口縁壺を使用する。遺物は土器棺内3層中より、鉄鏃が1点出土した。

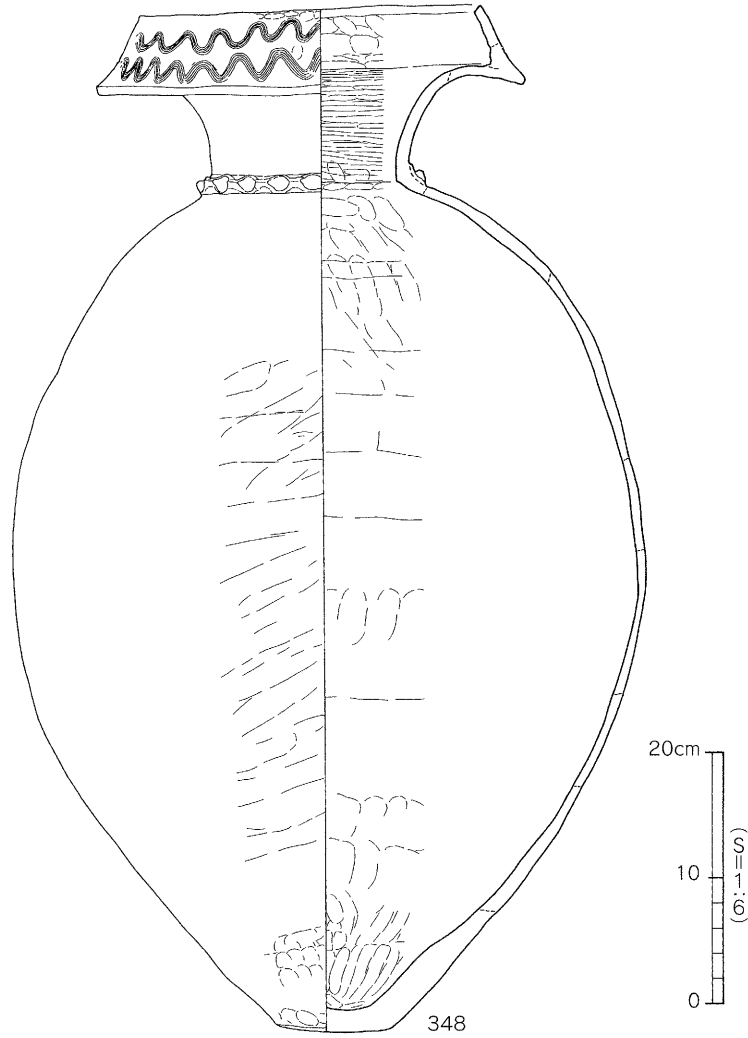


第369図 土器棺墓101測量図

出土遺物（第371図、図版71）

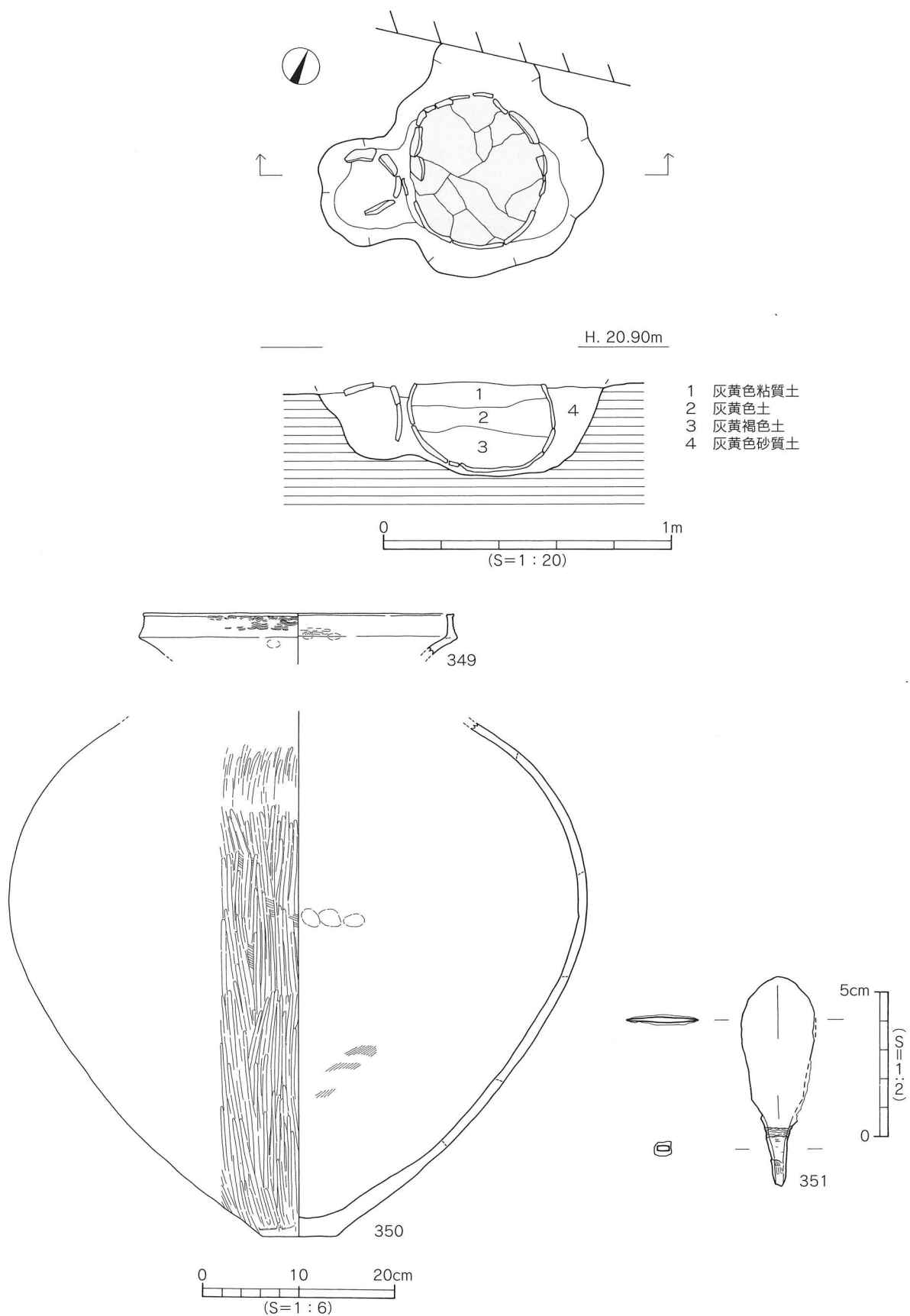
349は複合口縁壺の口縁部片。口縁端部は面をなし、櫛描き波状文を施す。350は胴底部で、胴部最大径は胴中位にあり、胴部外面にはタテ方向のヘラミガキ調整を施す。351は有茎式の鉄鏃である。

時期：棺身に使用された土器の特徴より、弥生時代後期後半とする。



第370図 土器棺墓101出土遺物実測図

弥生時代の遺構と遺物



第371図 土器棺墓102測量図・出土遺物実測図

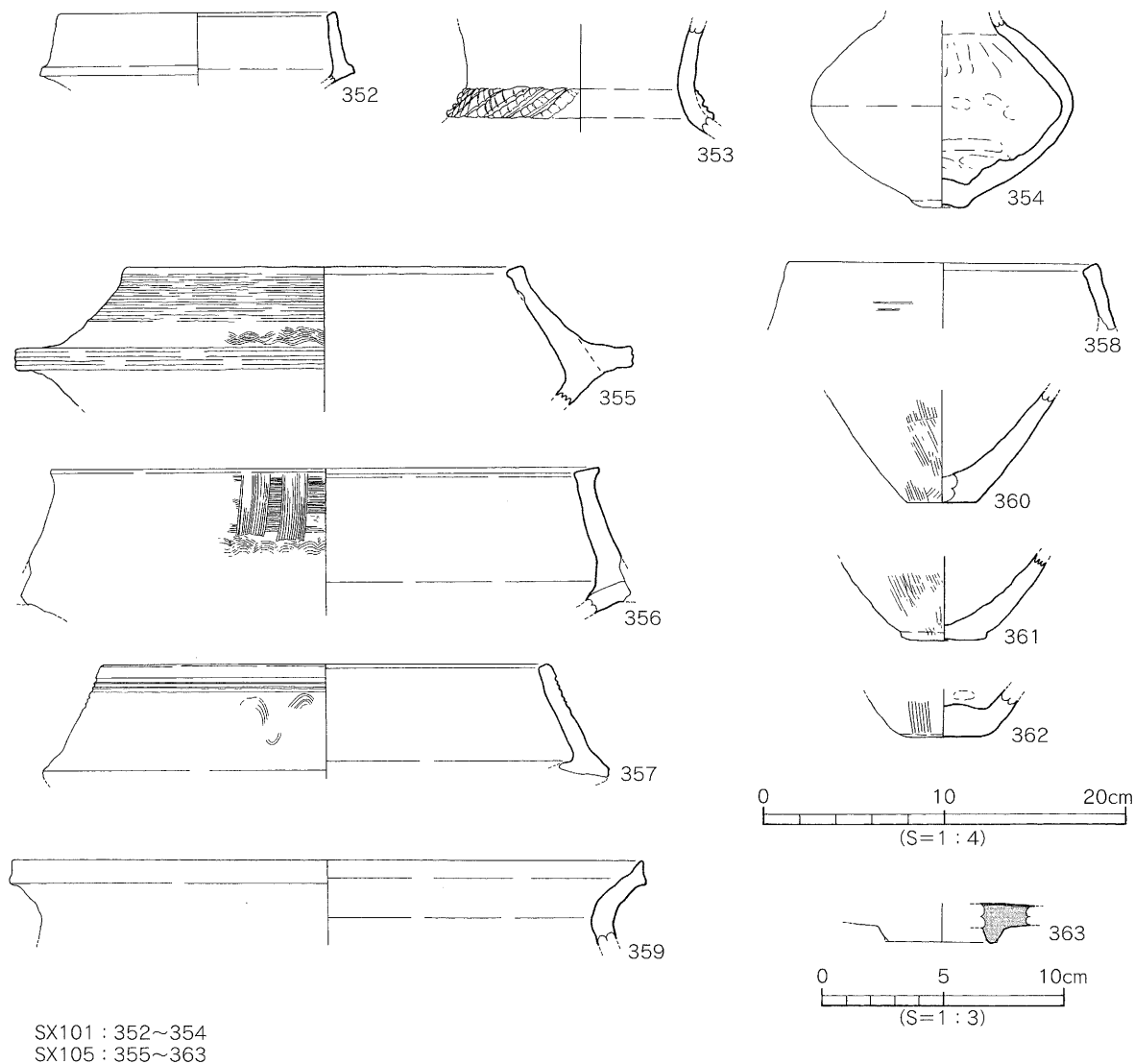
(6) 土器溜まり (SX)

調査では、遺構の平面プランが明確でなく、遺物の集中する地点が1区と2区で8ヶ所みられた。1区では南西部と中央部で3ヶ所確認した。2区では5ヶ所確認した。およそ、径1m×1mの範囲に土器が密集している。ここでは土器溜まり (SX) として扱い、出土した遺物を掲載した。なお、この中には外来的要素の強い土器2点 (365・382) が含まれている。

出土遺物 (第372~374図、図版71)

352~354はSX101、355~363はSX105、364~373はSX106、374・375はSX201、376~379はSX202、380~382・385~387はSX204、383はSX203、384はSX205出土品である。

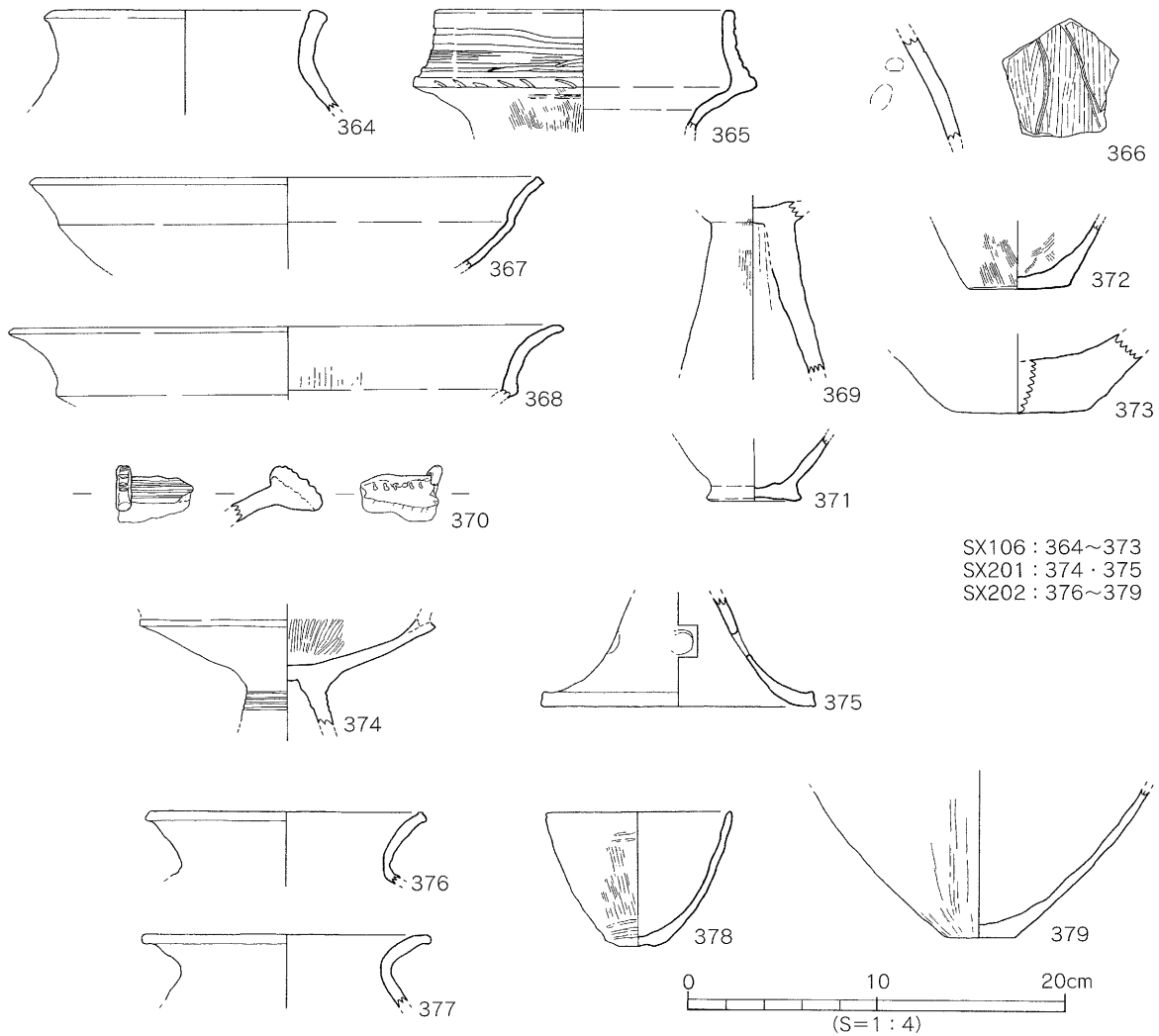
352は複合口縁壺の口縁部で、口縁端部は内傾する。353は壺形土器の頸部片で、凸帯上に斜格子目文を施す。354は胴底部片で、底部中央部が凹む。355~358は複合口縁壺。355~357は大型品で、355・357は櫛描き沈線文と波状文、356は沈線文 (タテ・ヨコ方向) と波状文を施す。359は口径30cmを超える鉢形土器。360~362は壺形土器の底部である。363は肥前系の碗の底部で、断面台形状の高台が付く。364は壺形土器の口縁部で、口縁端部は丸い。365は複合口縁壺で、口縁部にはヘラ描き沈線文、



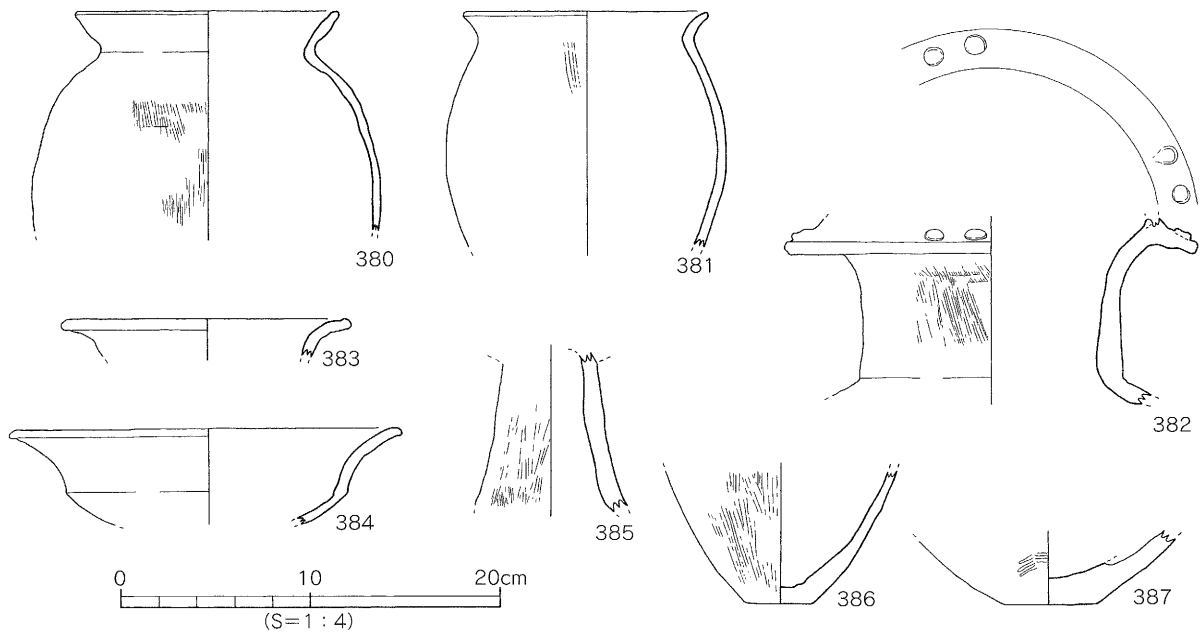
SX101 : 352~354
SX105 : 355~363

第372図 SX101・105出土遺物実測図

口縁接合部には刻目を施す。形態の特徴より、広島地方（安芸）の影響を受けた外来系土器である。366は壺形土器の肩部片で、2本の線刻を施す。367～369は高坏形土器、370は器台形土器で口縁端面に沈線文と棒状浮文、口縁内面に半截竹管文を施す。371は鉢形土器、372・373は壺形土器の底部である。374・375は高坏形土器で、374は柱部に沈線文4条を施す。376・377は甕形土器、378は鉢形土器で、体部外面にタタキ調整を施す。379は壺形土器の底部である。380・381は甕形土器、382は複合口縁壺で口縁部に円形浮文を施す。形態の特徴より外来的要素の強い土器である。383～385は高坏形土器、386・387は壺形土器の底部である。



第373図 SX106・201・202出土遺物実測図



SX203 : 383
SX204 : 380~382 · 385~387
SX205 : 384

第374図 SX203・204・205出土遺物実測図

4. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、掘立柱建物址2棟、溝5条、土坑3基である。

(1) 掘立柱建物址

掘立201 (第375図)

2区東側、B25～C26区に位置し、SB201、SD203を切る。第IV層上面で検出した。2×4間の東西棟で、建物方位は真北よりわずかに西へ振る。規模は、桁行長5.45m、梁行長4.00mを測る。柱穴間隔は1.30～1.75mを測る。各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径60～80cm、深さ22～30cmを測る。柱痕は6基に柱穴(SP③・④・⑥・⑦・⑨・⑩)で検出され、径12～20cm、深さ20～30cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色土または黒褐色土に黄色土が混入するものである。柱痕埋土は褐色土である。遺物は土師器片、須恵器片、弥生土器片、朝鮮系軟質土器や白玉、有孔円板が出土した。

出土遺物 (第375図、図版72)

388～393は軟質土器。小片の為、器種は断定しえないが、ここでは壺として扱う。器壁は厚さ0.7～1.3cmを測る。外面には一辺1～2mm大の四角形、または長方形の格子目タタキを施す。394～396は高環形土器の脚部片で、柱裾部境内面には明瞭な稜をもつ。397はミニチュア品、398は有孔円板、399は白玉である。398・399共に滑石製である。

時期：出土遺物の特徴から、古墳時代後期前半とする。

掘立202 (第376図)

2区東側、B27～A28区に位置し、SD203、SD205、SK211を切る。第IV層上面で検出した。3×4間の東西棟で、建物方位は真北より西に振っている。規模は、桁行長6.50m、梁行長4.60mを測る。柱穴間隔は1.40～1.75mを測る。各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径60～80cm、深さ20～50cmを測る。柱痕は9基の柱穴(SP①～⑨)で検出され、径10～20cm、深さ20～60cmを測る。柱穴掘り方埋土は2層に分層され、1層褐色土、2層褐色土(黄色土混入)である。柱痕埋土は黒色土である。遺物は土師器片、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物：400・401は弥生土器の壺形土器で、400は凸帯上に斜格子目文を施す。

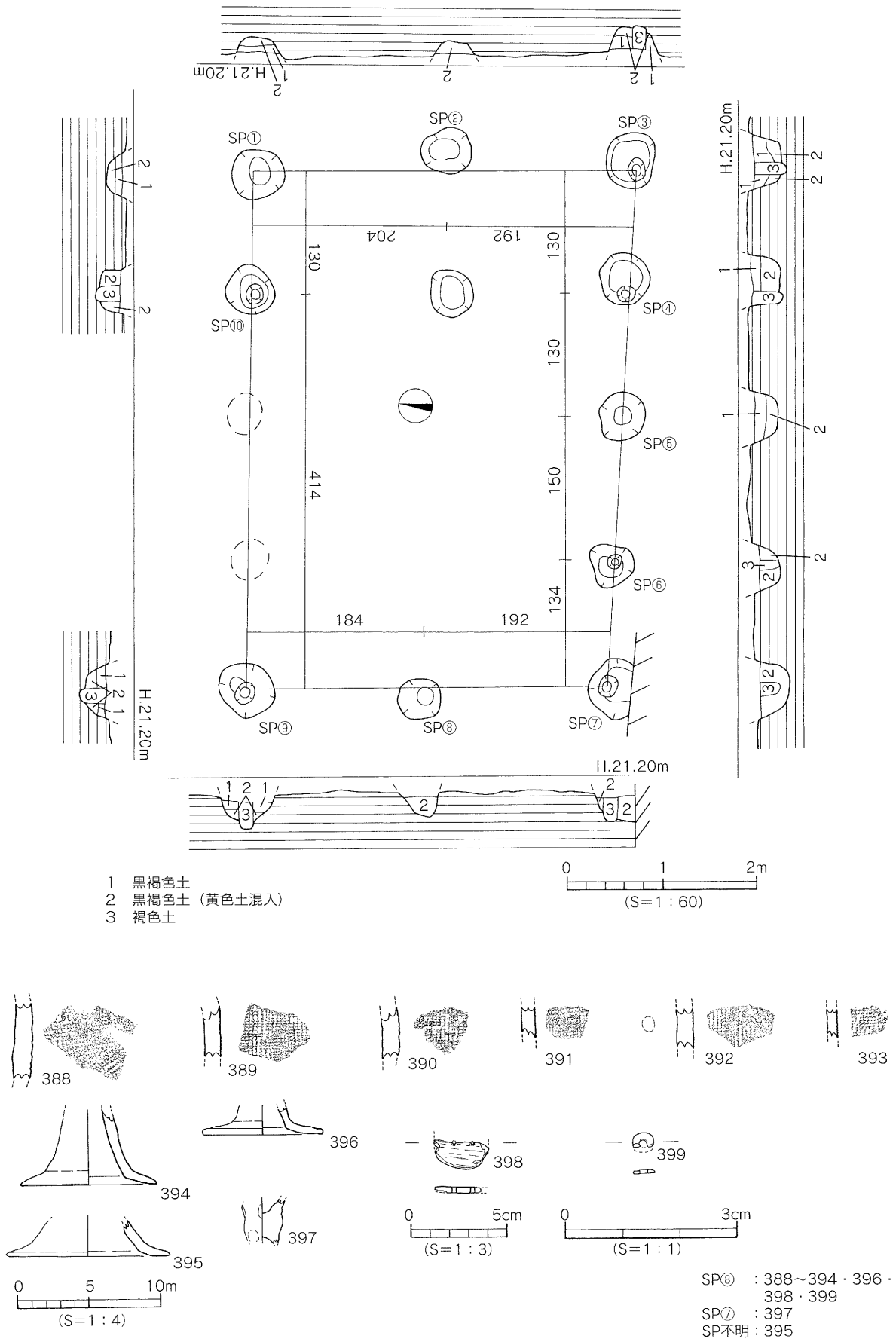
時期：遺構の切り合いと、出土遺物の特徴から、概ね古墳時代後期とする。

(2) 溝

SD103 (第377・378図)

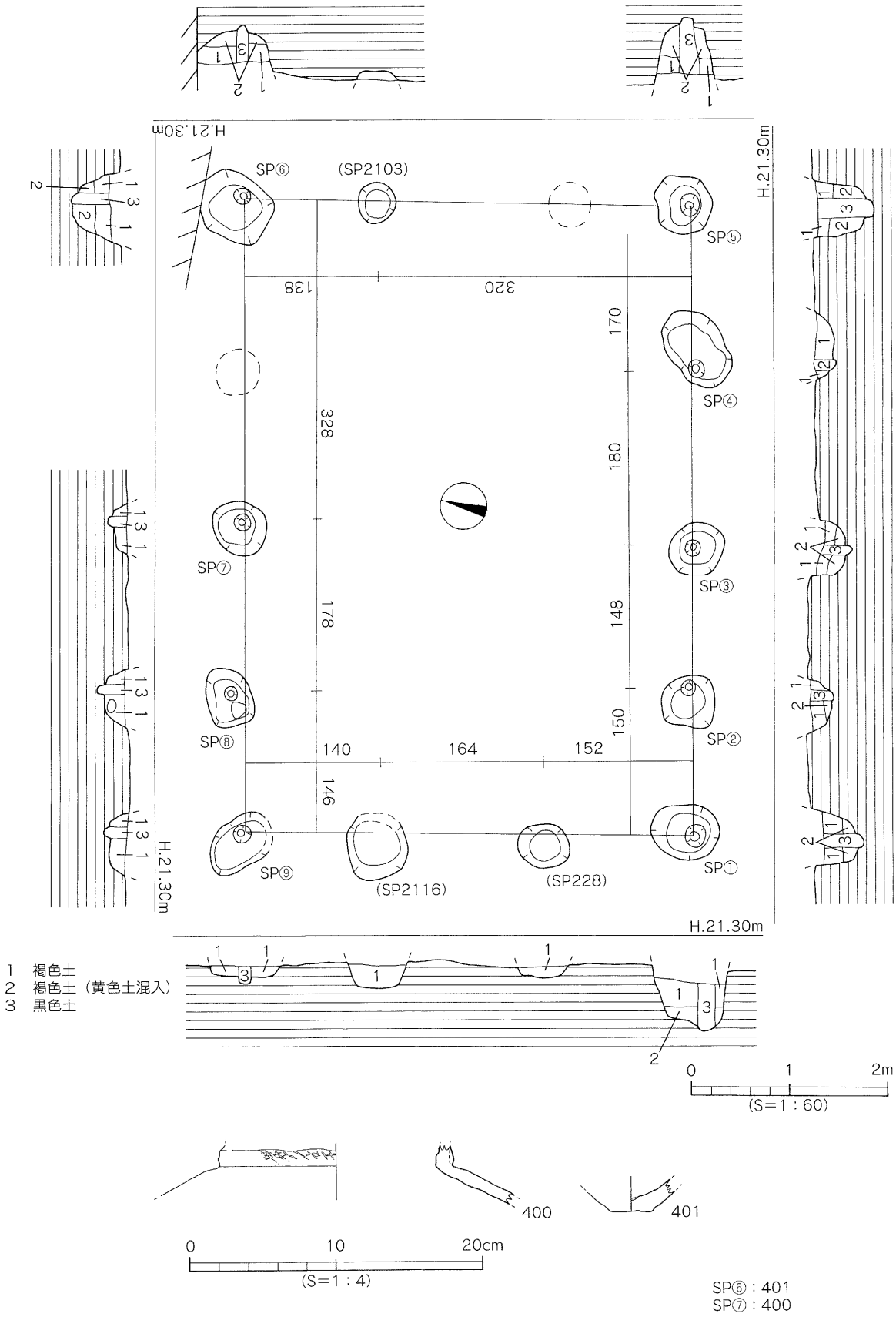
1区中央部西寄り、B5～C6区に位置する南北方向の溝である。溝南側はSD104に切られ、両端は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であり、第III②層が覆う。規模は検出長10.95m、幅2.48m、深さ16～30cmを測る。断面形態は皿状を呈するが、溝中央部から北側底面にかけて一部凹む。埋土は2層に分層され、1層褐色土、2層灰色砂質土である。溝底面は西から東に向けて傾斜する(比高差12cm)。遺物は1層中より須恵器片、土師器片が少量出土した。

西石井遺跡3次調査地



第375図 掘立201測量図・出土遺物実測図

古墳時代の遺構と遺物



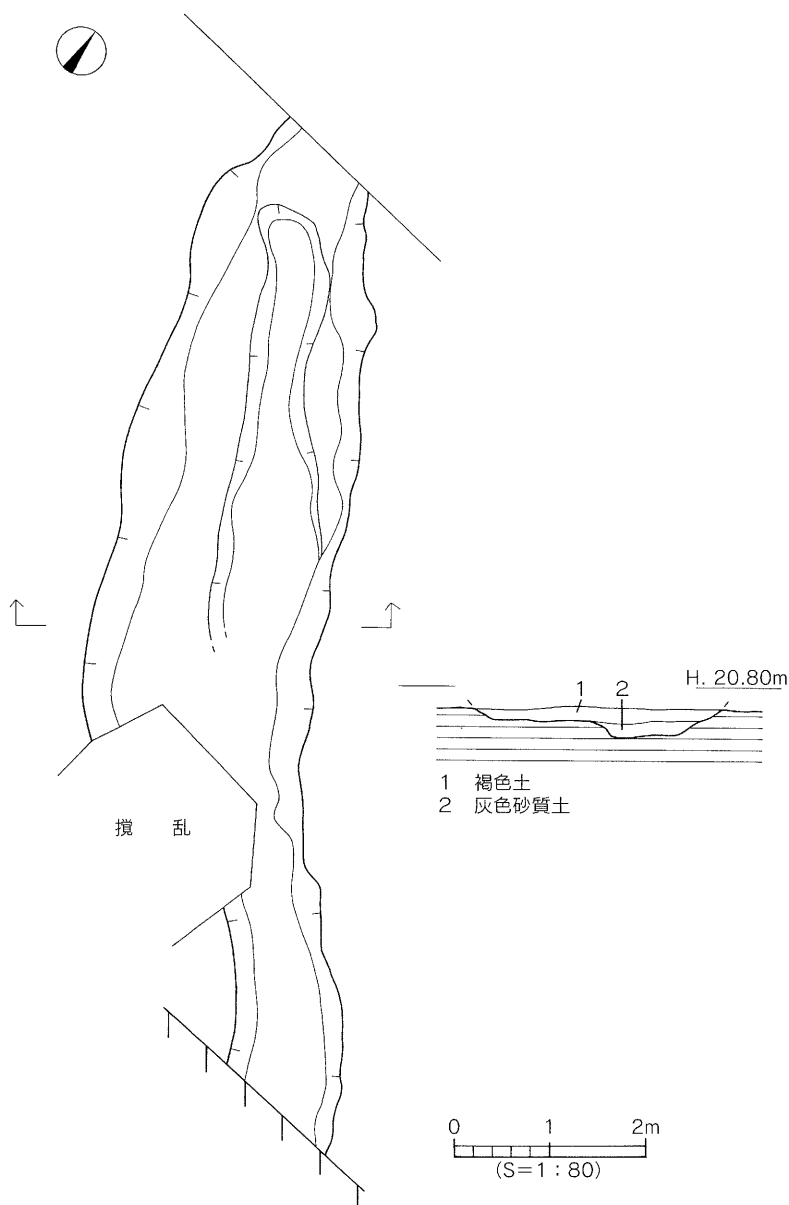
第376図 掘立202測量図・出土遺物実測図

出土遺物：402～407は弥生土器。402は甕形土器の口縁部、403は壺形土器の胴底部である。404は高坏形土器の坏部、405は支脚形土器である。405は受部が「U」字状にカットされる。406は壺形土器、407は鉢形土器の底部で、平底となる。408～411は須恵器。408は坏蓋で、天井部外面に線刻を施す。409は壺、410は甗で頸部には凹線1条と直線文を施す。411は甕の底部で、外面に格子目叩き、内面には同心円叩きを施す。

時期：出土遺物の特徴から、古墳時代後期とする。

S D105 (第379図)

1区中央部西寄り、B・C7区に位置する南北方向の溝である。溝南側はS B101、中央部はS K119、北側はS K121を切り、北端は調査区外に続く。第V層上面での検出であり、第II②層が覆う。



第377図 SD105測量図

規模は検出長6.72m、幅1.36m、深さ6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色砂質土である。溝底面は平坦である。遺物は埋土中より須恵器、土師器、弥生土器片が出土した。

出土遺物：412～415は弥生土器。412は甕形土器、413は複合口縁壺の口縁部である。414は甕形土器、415は壺形土器の底部である。416・417は須恵器。416は坏蓋で、かえり端部は尖る。417は高坏で、脚端部は上下方に拡張し、脚端面は凹む。

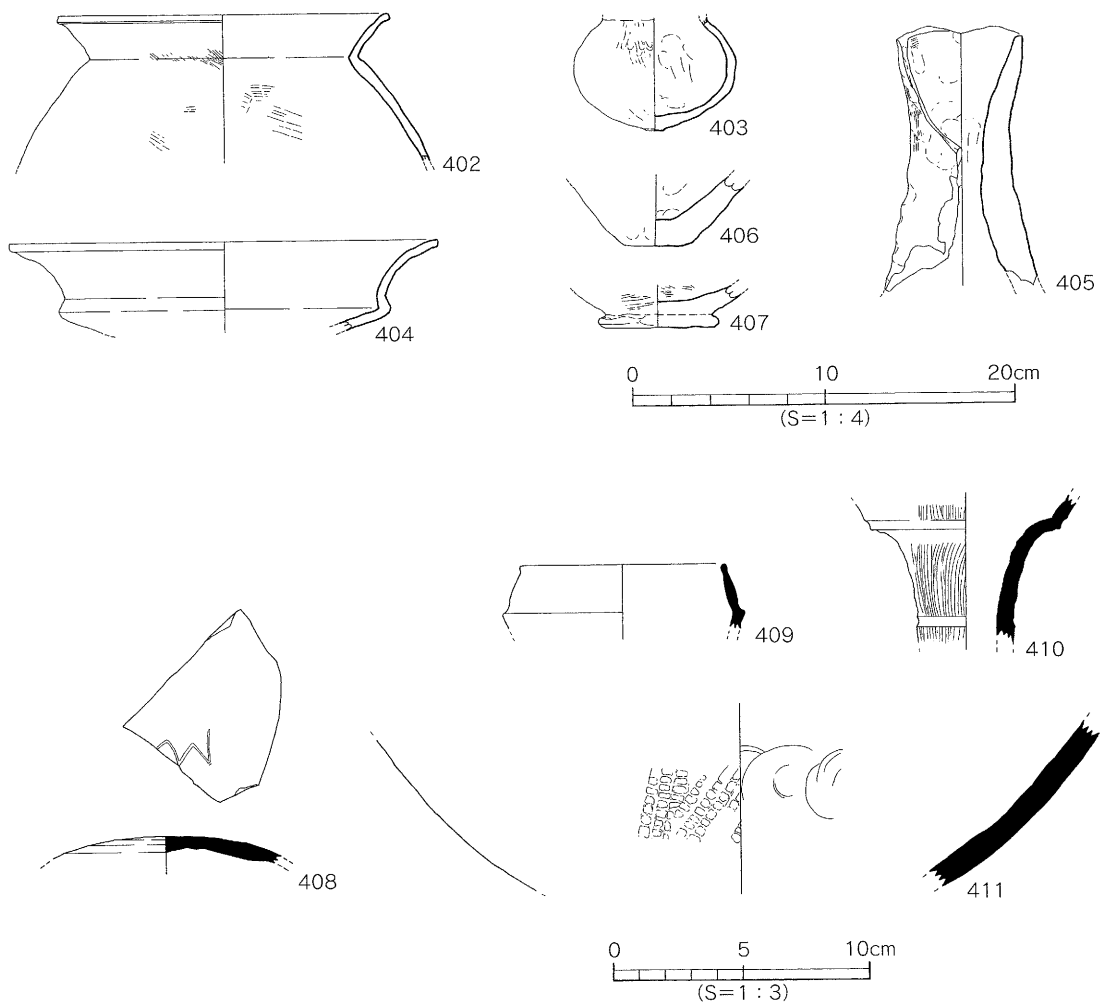
時期：出土遺物の特徴から、古墳時代後期後半から末とする。

SD113 (第380図)

1区東端、B14～C15区に位置する南北方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第V層上面で検出した。規模は検出長7.16m、幅1.40m、深さ6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土（黄色土混入）である。溝底面は平坦である。遺物は埋土中より須恵器片が少量出土した。

出土遺物：418は須恵器短頸壺で、口縁部は短く内傾し、肩胴部境に1条の沈線が巡る。419は高坏の脚部片である。

時期：出土遺物の特徴から、古墳時代後期後半から末とする。



第378図 SD103出土遺物実測図

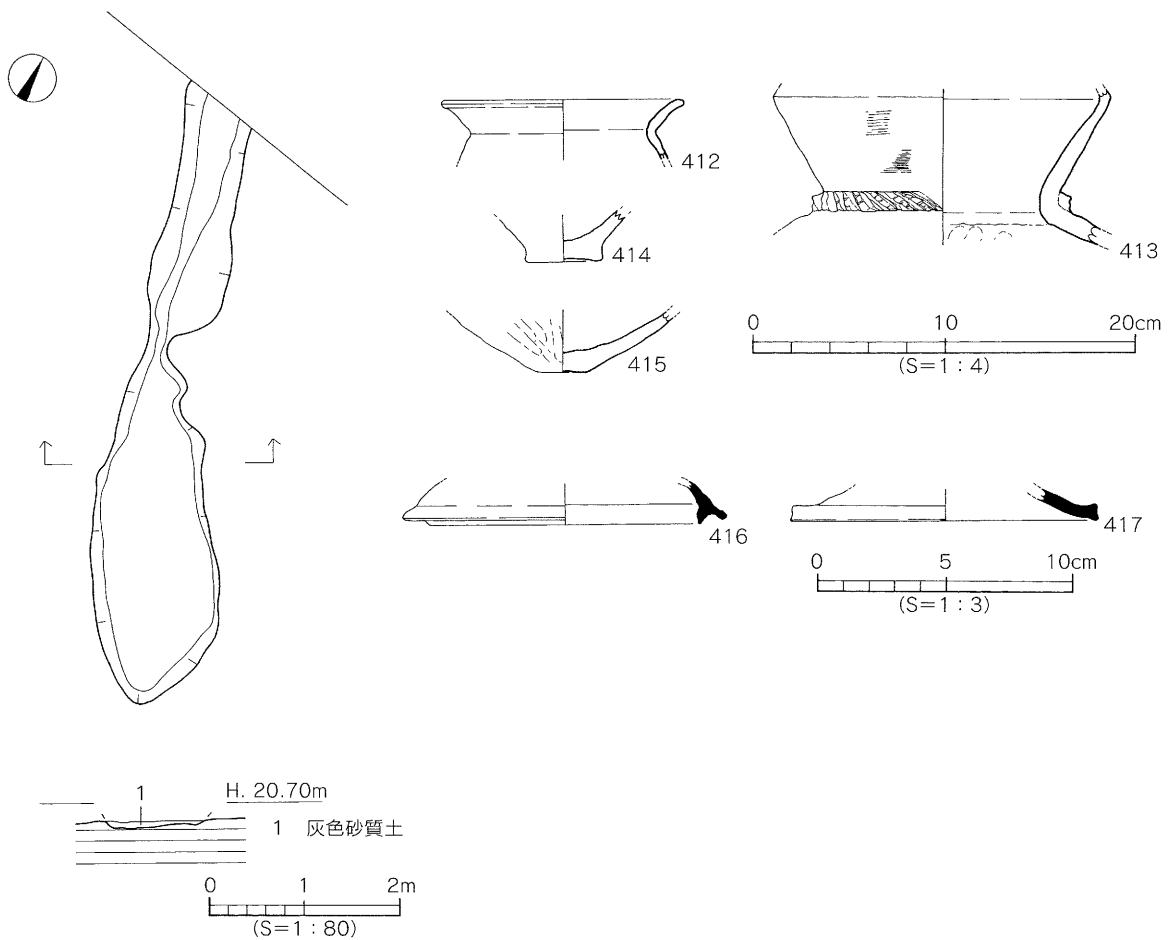
S D 305 (第381図)

3 B区西端、D・E41区に位置する南北方向の溝で、途中西側に曲がり、溝両端は調査区外に続く。第IV層上面での検出であり、第II①層が覆う。規模は検出長3.00m、幅1.00m、深さ12~22cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒色土(黄色土混入)である。溝底面から大小3基のピットを検出した。平面形態は円~楕円形を呈し、径12~40cm、深さ6~10cmを測る。ピット埋土は溝埋土と同じである。溝底面は平坦である。遺物は埋土中より、土師器片、須恵器片が数点出土した。

時期：出土遺物の特徴から、概ね古墳時代後期とする。

S D 306 (第381図)

3 B区西側、B 7~C 8区に位置する東西方向の溝で、溝東側はS K 309(中世)に切られる。第IV層上面で検出した。規模は検出長7.04m、幅0.64m、深さ8~13cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色土単層である。溝底面にて、大小26基のピットを検出した。平面形態は円~楕円形を呈し、規模は径16~58cm、深さ6~16cmを測る。ピット埋土はすべて黒色土である。溝底面は東から西に向



第379図 SD105測量図・出土遺物実測図

けて傾斜する（比高差7cm）。遺物は埋土中より土師器片、須恵器片が少量出土した。

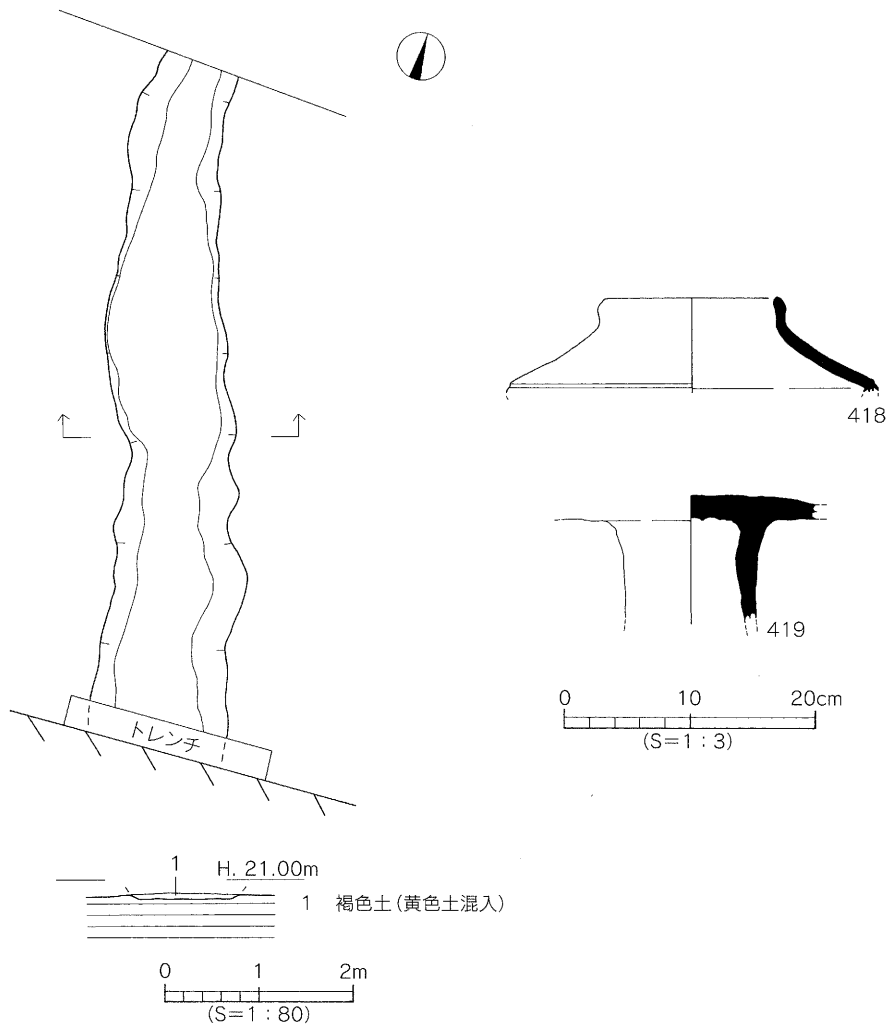
時期：出土遺物の特徴より、概ね古墳時代後期とする。

(3) 土坑

S K112 (第382図)

1区東側、C15区に位置し、南西隅は調査区外に続く。第IV層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は東西長2.90m、南北検出長2.30m、深さ10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。土坑底面にて4基のピットを検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径15cm、深さ5～8cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同じである。遺物は埋土中より、土師器片、須恵器片が数点出土した。

時期：出土遺物の特徴より、概ね古墳時代後期とする。



第380図 SD113測量図・出土遺物実測図

S K 118 (第382図)

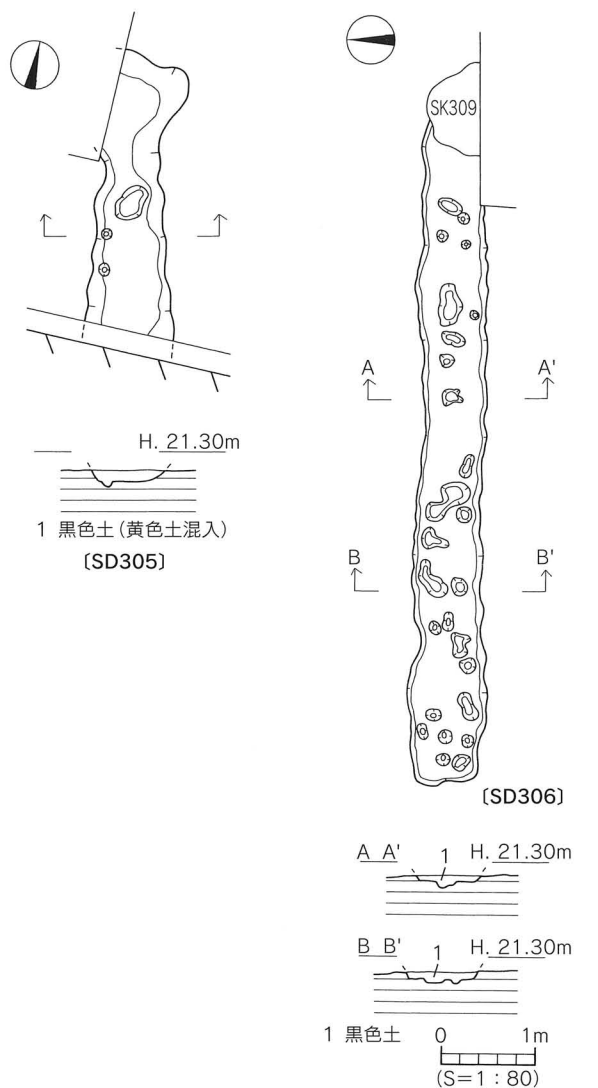
1区中央部東寄り、C11区に位置し、東側は調査区外に続く。第Ⅷ層上面で検出した。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.20m、東西検出長0.45m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土中より、須恵器片が数点出土した。

時期：出土遺物の特徴より、古墳時代後期とする。

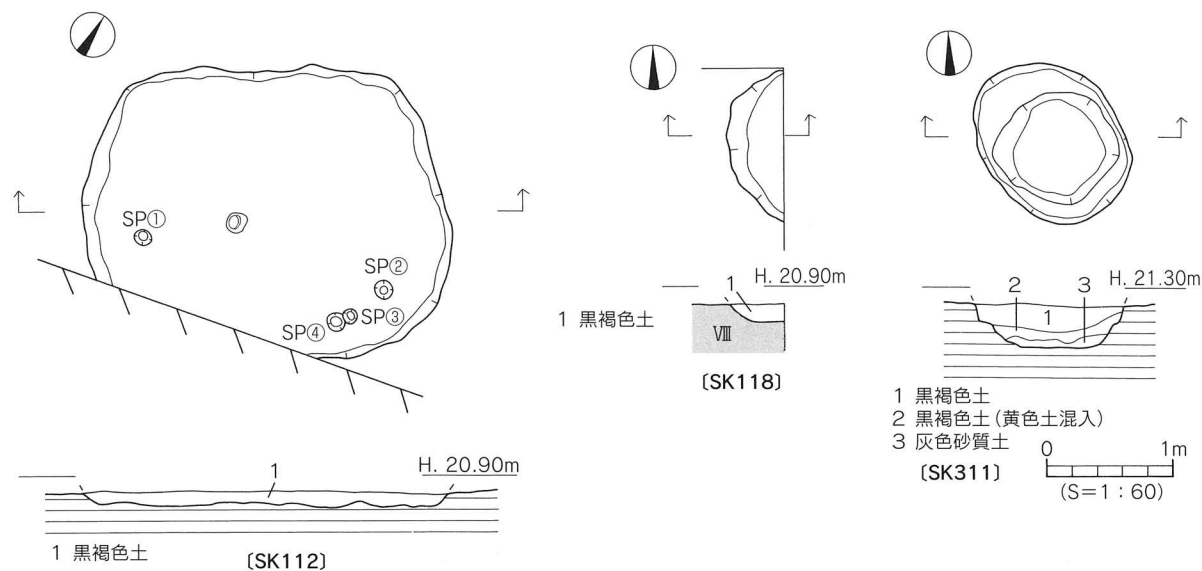
S K 311 (第382図)

3C区東側、C48に位置する。第Ⅵ①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.40m、短径1.10m、深さ35cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体中位付近で二段掘り構造となる。埋土は3層に分層され、1層黒褐色土、2層黒褐色土(黄色土混入)、3層灰色砂質土である。遺物は埋土中より、須恵器片、土師器片が少量出土した。

時期：出土遺物の特徴より、古墳時代後期とする。



第381図 SK305・306測量図



第382図 SK112・118・311測量図

5. 中近世の遺構と遺物

中近世の遺構は溝4条、土坑10基、土坑墓6基である。

(1) 溝

SD101 (第383図)

1区西端、B1区に位置する南北方向の溝で、溝南側はSD102に切られ、北端は調査区外に続く。第VI②層上面で検出した。規模は検出長7.04m、幅0.36m、深さ6~15cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色砂質土である。溝底面は北西から南東に傾斜する(比高差7cm)。遺物は埋土中より、土師器片が少量出土した。

時期：出土遺物の特徴より、概ね中世とする。

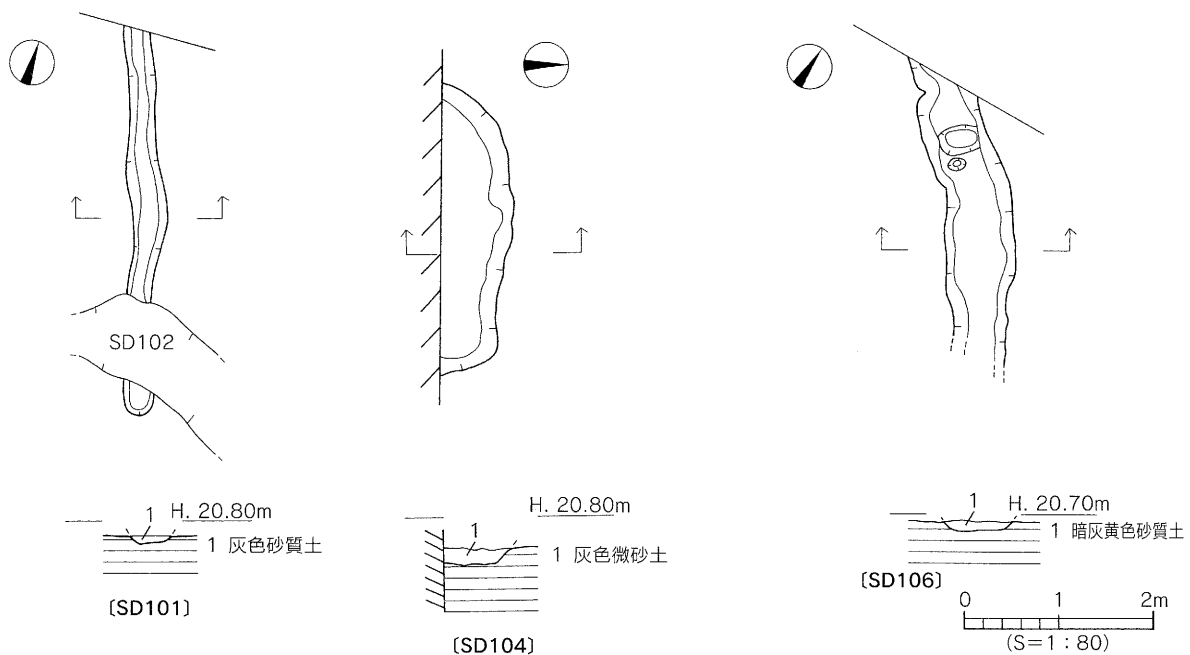
SD104 (第383図)

1区中央部、C6・7区に位置する東西方向の溝で、溝西端はSD103を切り、南側は調査区外に続く。第III①層上面で検出した。規模は検出長3.12m、幅0.80m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色微砂土である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、土師器片が少量出土した。

時期：検出状況と出土遺物より、概ね中世とする。

SD106 (第383図)

1区中央部、B7・8区に位置する南北方向の溝で、溝北端は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。規模は検出長3.30m、幅0.76m、深さ8~15cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗灰



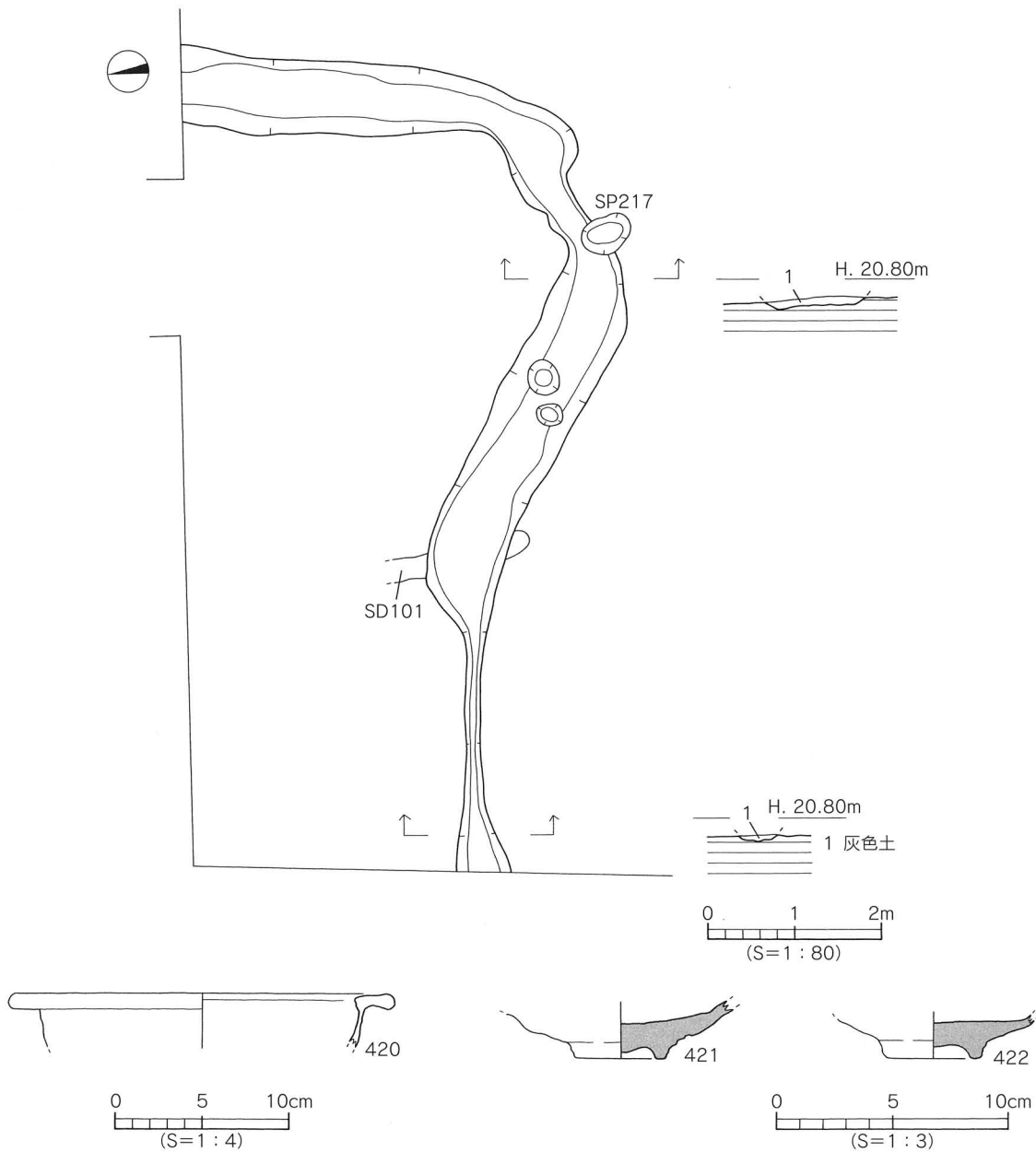
第383図 SD101・104・106測量図

黄色砂質土単層である。溝底面にて、小ピット2基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径20～30cm、深さ5～8cmを測る。ピット埋土は溝埋土と同じである。溝底面は南東から北西に向けて傾斜する（比高差6cm）。遺物は埋土中より、土師器片が数点出土した。

時期：出土遺物の特徴より、概ね中世とする。

SD102（第384図）

1区西端、B1～B3区に位置する。途中「L」字状に屈曲し、東端はSD101、SD117を切り、SP217に切られる。溝両端は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。規模は検出長12.60m、幅0.96m、深さ5～20cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色土単層である。溝底面から小



第384図 SD102測量図・出土遺物実測図

ピット 2 基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径30~40cm、深さ5~10cmを測る。ピット埋土は溝埋土と同じである。溝底面は南から西に傾斜する(比高差8cm)。遺物は埋土中より土師器片、陶磁器片が少量出土した。

出土遺物 (第384図)

420は土師器土鍋で、口縁部は水平にのび、口縁端部は丸く肥厚する。421・422は肥前系の碗で、高台は台形状を呈する。高台及び底部外面は無釉である。

時期：出土遺物の特徴より、近世、江戸時代中期とする。

(2) 土坑

S K101 (第385図)

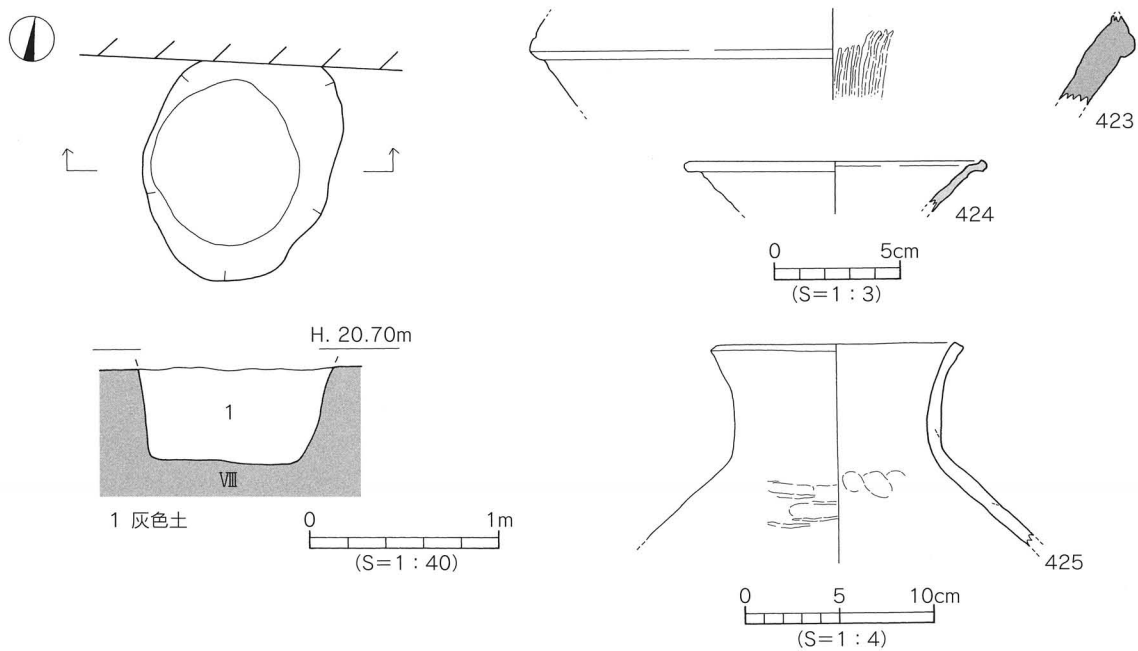
1区西側、B2区に位置し、北側は調査区外に続く。第Ⅷ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は南北検出長1.75m、東西長1.50m、深さ75cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰色土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片、土師器片、陶磁器片が数点出土した。

出土遺物：423は備前焼のすり鉢である。内面に条線7条が残る。424は中国産の白磁皿である。425は弥生土器の直口壺である。

時期：出土遺物の特徴より、中世、15世紀代とする。

S K205 (第386図)

2区東側、B27・28区に位置し、S K206と重複する(前後関係は不明)。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.30m、幅0.65m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰色土単層である。遺物は埋土中より、須恵器片、土師器片が少量出土した。



第385図 SK101測量図・出土遺物実測図

出土遺物：426は須恵器坏蓋で、口縁端部は丸く仕上げる。

時期：埋土と出土遺物より、概ね中世とする。

S K 206 (第386図)

2区東側、B27・28区に位置し、南側はS K211に切られ、S K205と重複する。第IV層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.25m、推定幅1.15m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰色土単層である。遺物は埋土中より、土師器片と427の釘が出土した。

時期：埋土と出土遺物より、概ね中世とする。

S K 113 (第387図)

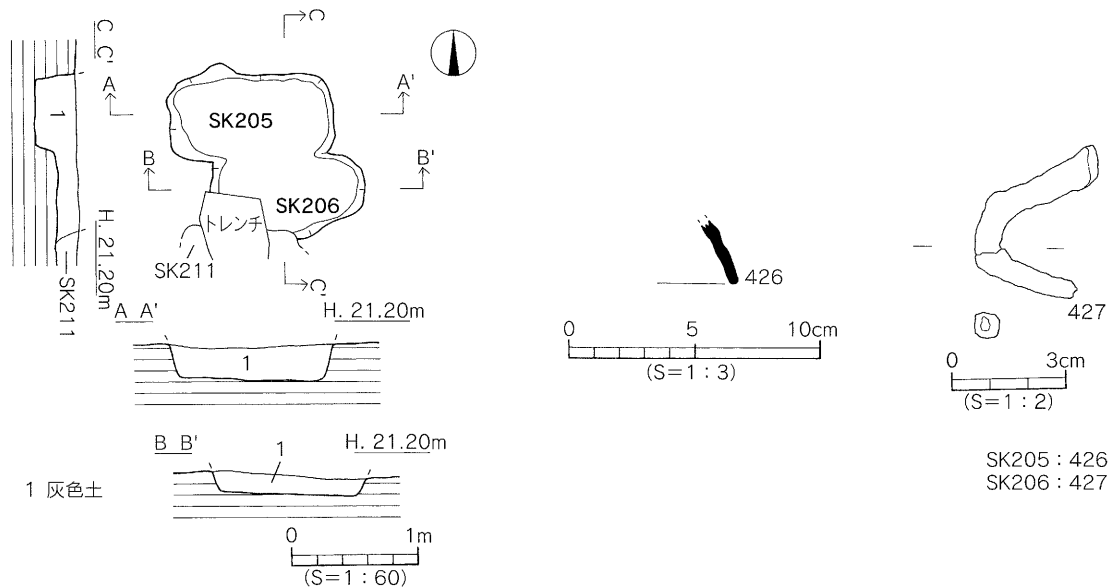
1区中央部東寄り、C11区に位置する。土坑北側はS K117を切り、西側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.25m、東西検出長0.35m、深さ12cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K101と酷似することから、概ね中世とする。

S K 207 (第387図)

2区東側、B・C29区に位置し、南側は攪乱に切られる。第IV層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.10m、東西検出長0.65m、深さ40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は2層に分層され、1層灰色土、2層灰色土(黄色土混入)である。遺物は埋土中より、土師器片が数点出土した。

時期：出土遺物の特徴より、概ね中世とする。



第386図 SK205・206測量図・出土遺物実測図

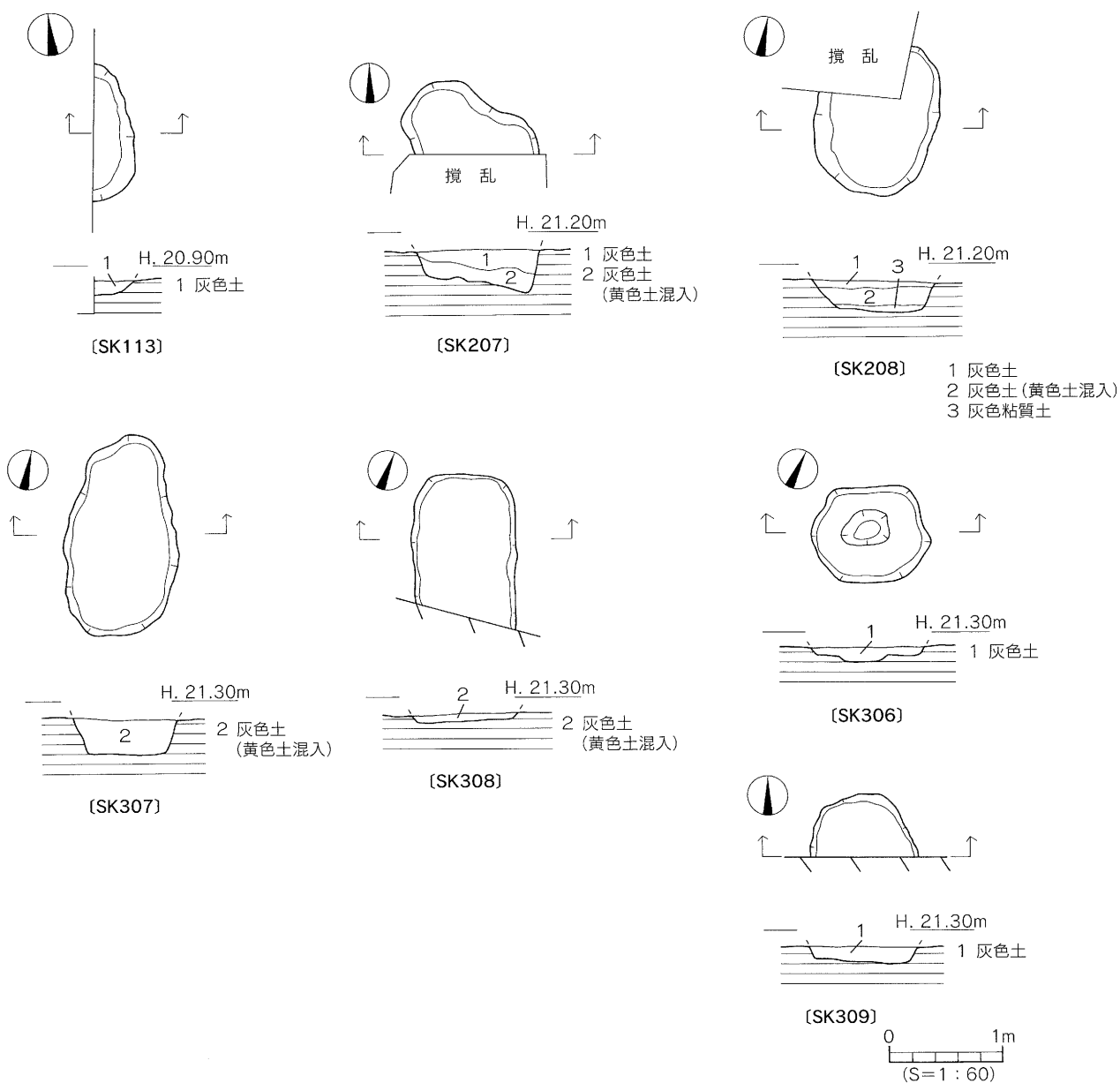
S K208 (第387図)

2区東側、B・C29区に位置し、北側は攪乱に切られる。第IV層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.40m、短径1.10m、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は3層に分層され、1層灰色土、2層灰色土(黄色土混入)、3層灰色粘質土である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K207と酷似することから、概ね中世とする。

S K307 (第387図)

3B区西側、C・D43区に位置する。第IV層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.85m、短径1.10m、深さ40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰色土(黄色土混入)



第387図 SK113・207・208・306~309測量図

である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K207と類似することから、概ね中世とする。

S K306 (第387図)

3 B区西側、C42～D43区に位置する。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は長径1.05m、短径0.90m、深さ13cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰色土単層である。土坑底面中央部にて、ピット1基を検出した。径40～60cm、深さ10cmを測り、ピット埋土は土坑埋土と同じである。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K206と酷似することから、概ね中世とする。

S K309 (第387図)

3 B区西側、D43区に位置し、西側はS D306を切る。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西長0.55m、南北検出長0.95m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がS K206と酷似することから、概ね中世とする。

(3) 土坑墓

S K106 (第388図、図版62・72)

1区中央部東寄り、B・C10区に位置する。第Ⅵ①層上面で検出した。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長さ2.05m、幅1.48m、深さ50cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は4層に分層され、1層黄灰色土、2層灰黄色土、3層灰黄色粘質土、4層灰オリーブ色土である。土坑底面にて小ピット2基を検出した。径4～8cm、深さ6～8cmを測り、ピット埋土は灰オリーブ色土である。遺物は、北側底面にて完形の土師器坏が出土した。

出土遺物：428・429は完形の土師器坏。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。底部は平底で、底部切り離しは回転糸切り技法による。430は土師器土鍋または土釜の脚部片である。

時期：出土遺物の特徴から、14世紀代とする。

S K108 (第388図、図版62・72)

1区中央部東寄り、B・C10区に位置し、東側はS K110を切る。第Ⅵ①層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.60m、幅1.65m、深さ55cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は4層に分層され、1層黄灰色土、2層灰黄色土、3層灰黄色粘質土、4層灰オリーブ色土である。土坑底面にて、長さ1.20m、幅0.90m、深さ8cmの長方形の掘り込みを検出した。また、3基のピットを検出した。ピットの規模は径10cm、深さ6～8cmを測り、ピット埋土は灰黄色土である。遺物は、土坑中央部底面にて完形の土師器坏が出土した。

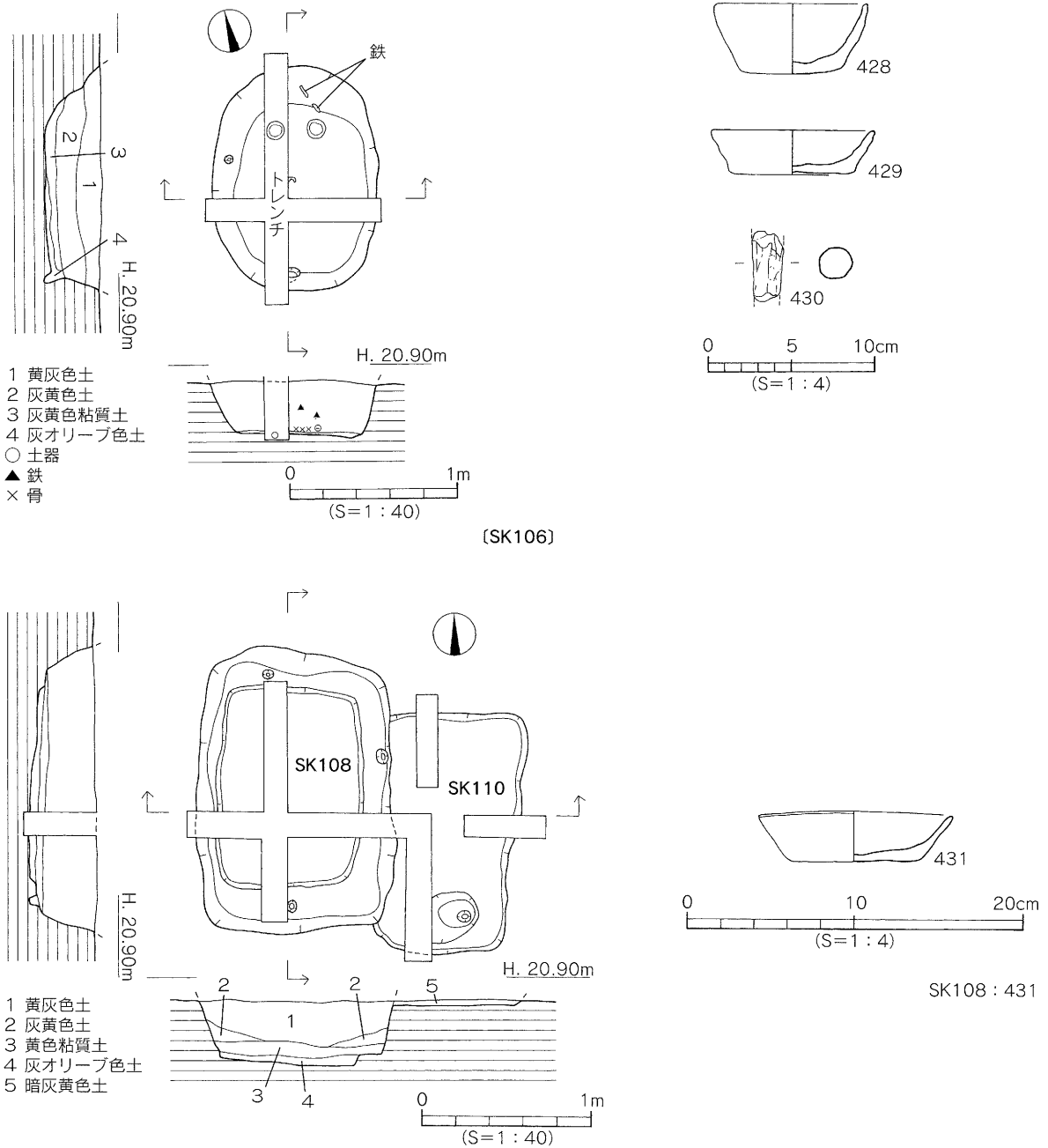
出土遺物：431は完形の土師器坏。体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。底部切り離しは、回転糸切り技法による。

時期：出土遺物の特徴から、14世紀代とする。

S K110 (第388図、図版62)

1区中央部東寄り、C10・11区に位置し、西側はS K108に切られる。第IV層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.20m、幅1.15m、深さ5cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色土単層である。土坑底面にて、径20~50cm、深さ10cmを測るピットを1基検出した。ピット埋土は土坑埋土と同じである。土坑内からは、土師器小片が数点出土した。

時期：S K108に切られることから、概ね14世紀以前とする。



第388図 SK106・108・110測量図・出土遺物実測図

S K 109 (第389図、図版72)

1区中央部東寄り、C10区に位置し、北側はS K 115に切られる。第IV層上面で検出した。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.90m、東西検出長1.55m、深さ45cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は3層に分層され、1層黄灰色土、2層灰黄色土、3層灰黄色粘質土である。遺物は完形の土師器坏が、土坑中央部西寄りの床面にて出土した。また、埋土中より、鉄釘が1点出土した。

出土遺物：432は完形の土師器坏。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。底部は平底で、底部切り離しは回転糸切り技法による。433は土師器土鍋または土釜の脚部片で、断面形態は楕円形を呈する。434は鉄釘で、表面に木質片が付着する。

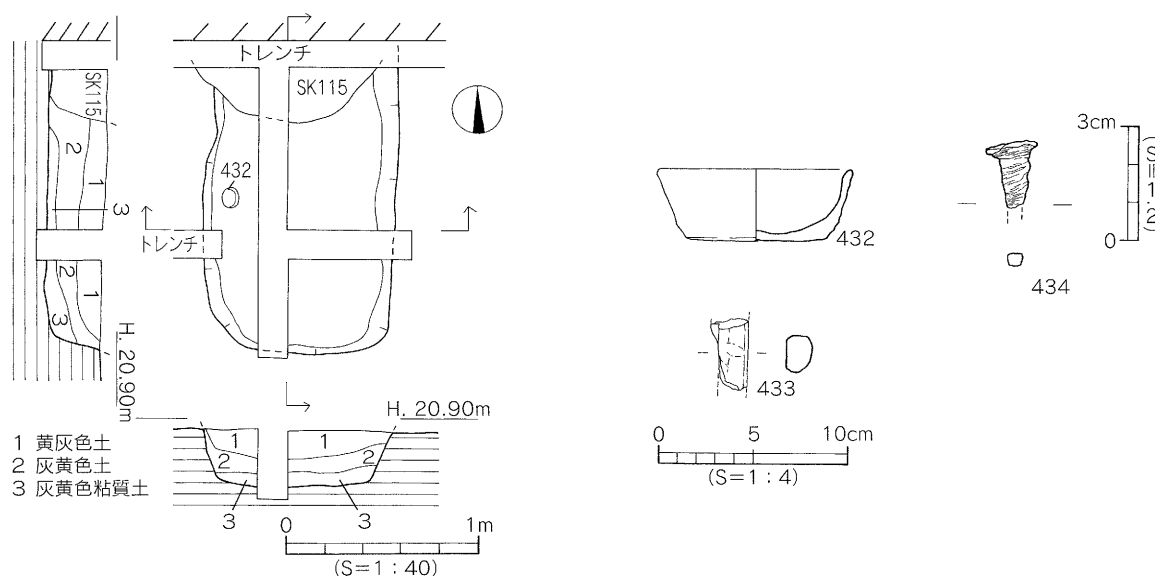
時期：出土遺物の特徴から、14世紀代とする。

S K 115 (第390図、図版62・72)

1区中央部東寄り、C10区に位置し、南側はS K 109を切る。第IV層上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径1.35~1.45m、深さ45cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は4層に分層され、1層黄灰色土、2層灰黄色土、3層黄灰色粘質土、4層灰オリーブ色土である。土坑底面にて、3基の小ピットを検出した。径6~8cm、深さ5~8cmを測り、ピット埋土は灰黄色土である。遺物は南西隅の床面にて、完形の土師器坏が出土した。

出土遺物：435は完形の土師器坏。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや内傾する。底部切り離しは回転糸切り技法による。436は土師器皿で、底部はやや突出する平底となる。底部切り離しは、回転糸切り技法による。

時期：出土遺物の特徴から、14世紀代とする。

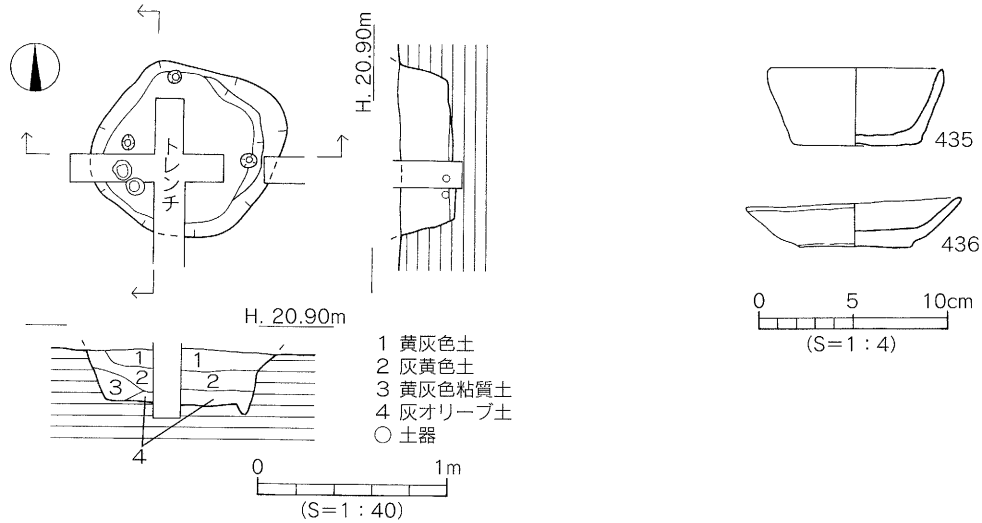


第389図 SK109測量図・出土遺物実測図

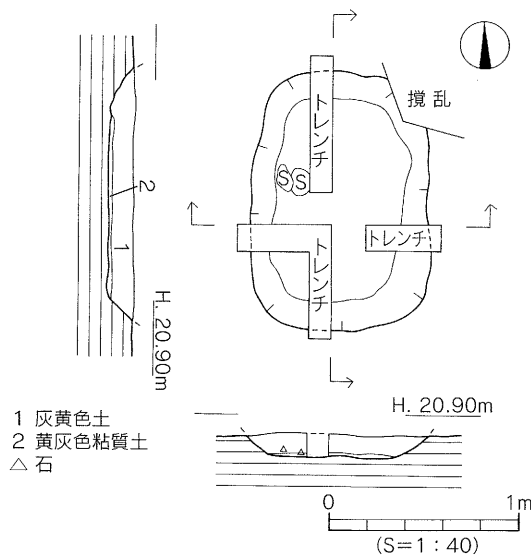
S K111 (第390図、図版62)

1区東側、B12区に位置し、北東隅は攪乱に切られる。第IV層上面で検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.10m、幅1.45m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は2層に分層され、1層灰黄色土、2層黄灰色粘質土である。遺物は土坑底面中央部より、径10~15cm大の石が2点出土した。

時期：埋土がS K115に酷似することから、概ね14世紀代とする。



(SK115)



(SK111)

第390図 SK115・111測量図・出土遺物実測図

6. その他の遺構と遺物

(1) ピット

本調査で確認されたピットは245基である。内訳は1区：108基、2区：84基、3区：53基である。さらにピット埋土は灰色土、褐色土、黒褐色土の3グループに分けられる。ピットから出土した遺物は大半が小片であるが、実測可能な遺物を掲載する。

ピット出土遺物 (第391図)

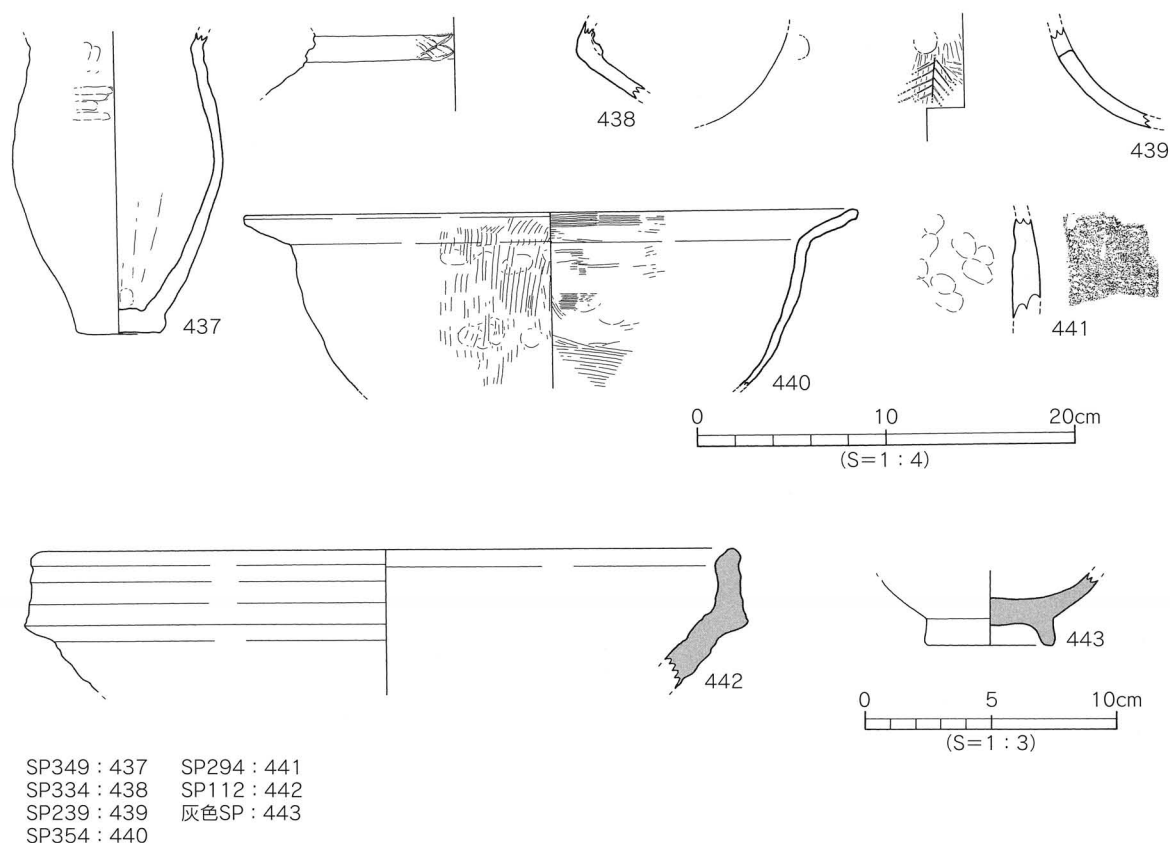
437は甕形土器で、胴部外面にタタキ調整を施す。438は壺形土器の肩部片、439は器台形土器の柱部片で、円孔と有軸羽状文を施す。440は鉢形土器である。441は軟質土器、442は備前焼のすり鉢、443は肥前系の碗である。

(2) 包含層出土遺物 (第392・393図)

本調査では、第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層の遺物包含層を確認した。各調査区の包含層から出土した遺物の実測図を掲載する。

第Ⅱ①層出土遺物：444・445は土師器坏。444は円盤高台状の底部、445は突出する平底となる。

第Ⅲ②・③層出土遺物：446は土師器高坏の脚部片で、柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。447は軟質土器で、格子目叩き(2×4mm)を施す。448は須恵器坏蓋で、断面三角形の鋭い稜をもつ。449～461は弥生土器。449は甕形土器、450～452は壺形土器である。450は直口壺で、頸部に刻目列点文を施す。453～455は高坏形土器、456は支脚形土器で角状突起部をもつ。457～459は甕形土器、

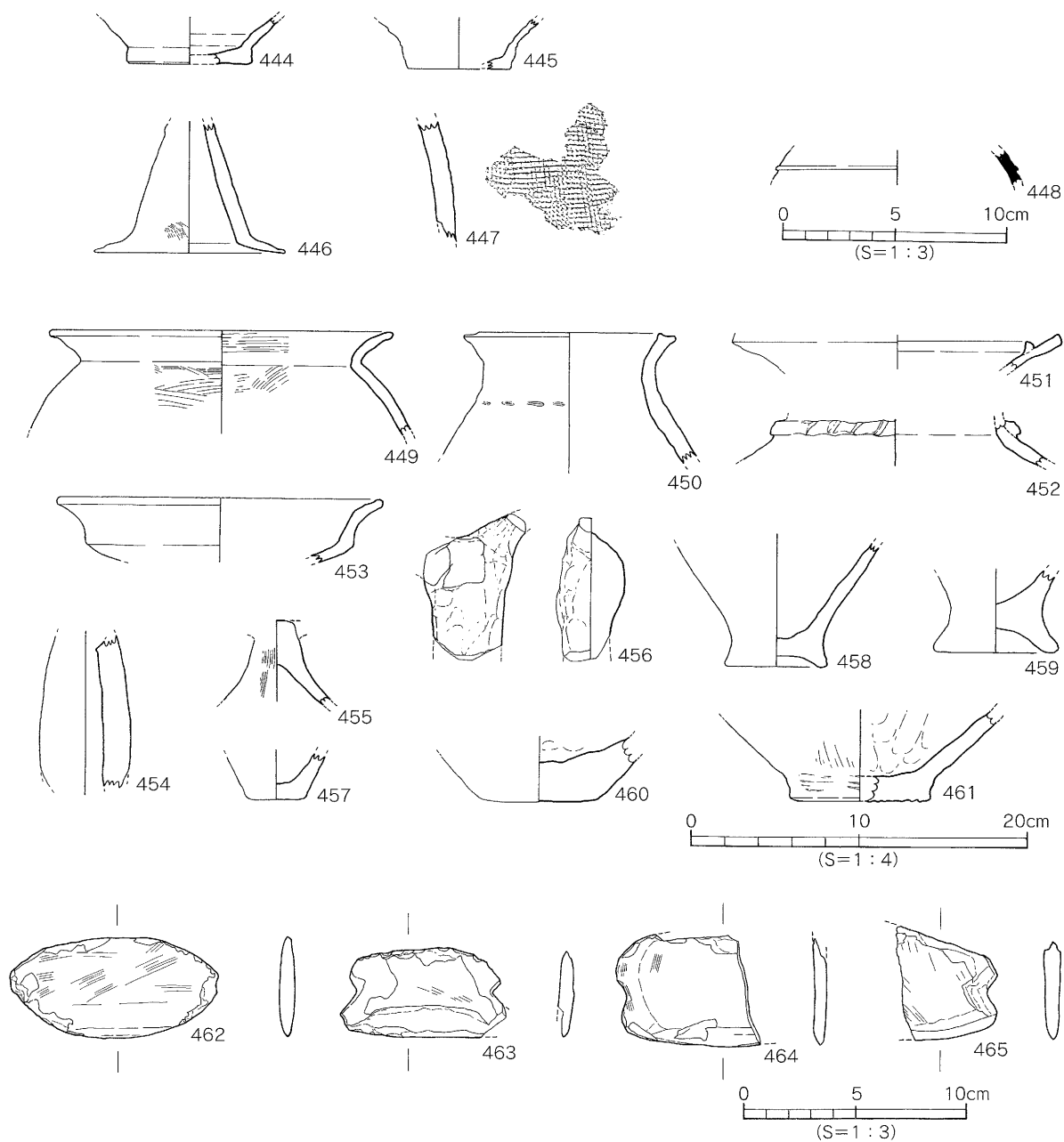


第391図 ピット出土遺物実測図

その他の遺構と遺物

460・461は壺形土器の底部である。462～465は石庖丁である。463～465は両側部に抉りをもつ。緑色片岩製。

第IV層出土遺物：466～468は広口壺。467・468は口縁端面に凹線文、468は頸部に押圧凸帯文を施す。469は複合口縁壺で櫛描き波状文を施す。470は広口壺の口縁部片で、口縁端部は面をもつ。471は高坏形土器、472は支脚形土器、473はミニチュア品である。474～476は甕形土器、477・478は壺形土器の底部である。

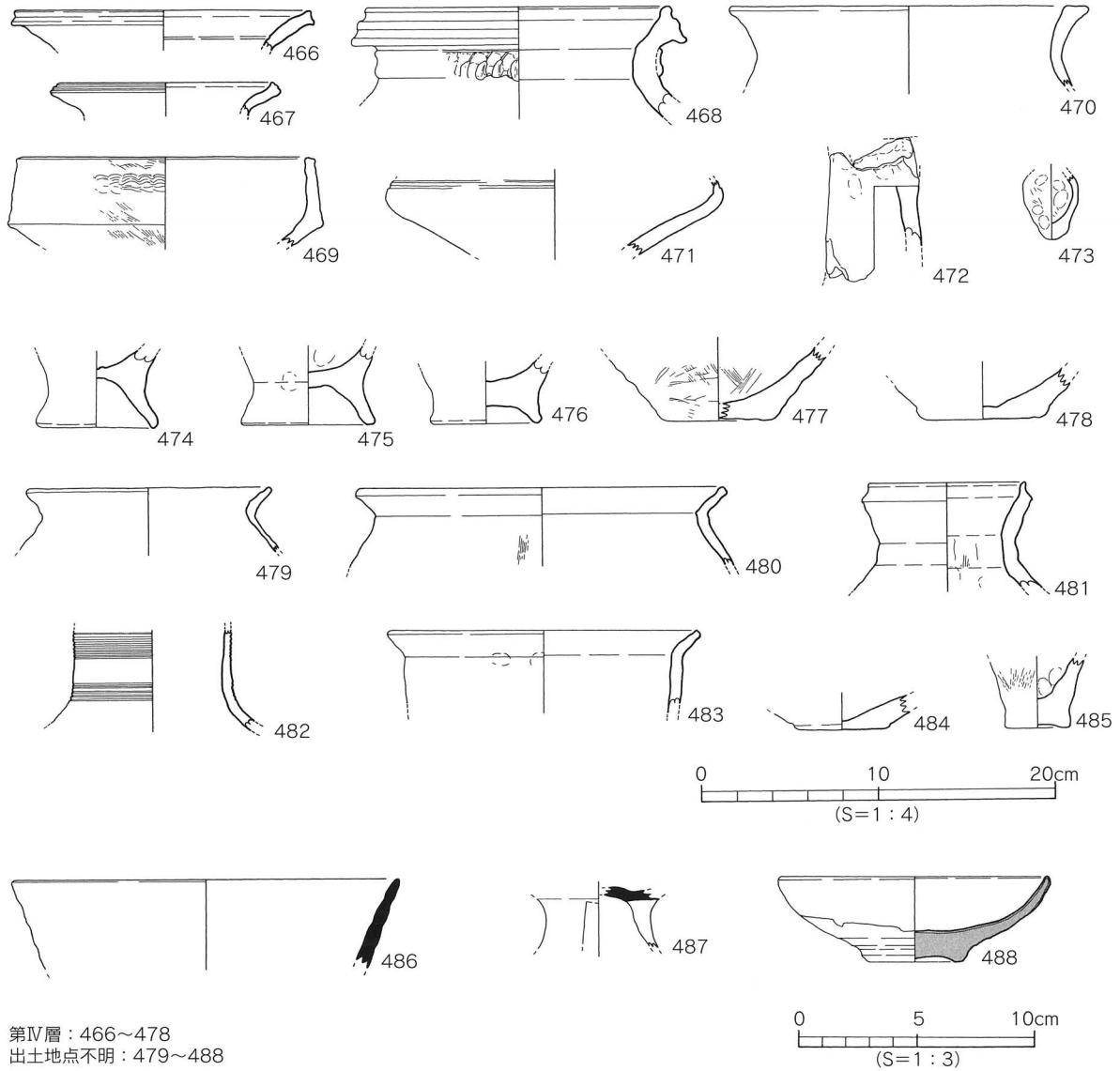


第II①層：444・445
 第III②層：446～448
 第III③層：449～465

第392図 包含層出土遺物実測図(1)

(3) 出土地点不明遺物 (第393図)

本調査では重機で掘削中や廃土中から出土した遺物がある。出土層位や地点が不明なため、地点不明出土遺物として報告する。479~485は弥生土器。479・480は甕形土器、481・482は壺形土器である。481は広口壺、482は長頸壺で頸部には櫛描き沈線文を施す。483は鉢形土器の口縁部、484は壺形土器の底部、485は甕形土器の底部である。486・487は須恵器。486は坏、487は高坏で、長方形の透かしをもつ。488は肥前系の碗で、体部は内湾気味に立ち上がり、施釉は全面に及ぶ。



第393図 包含層(2)・出土地点不明遺物実測図

7. 小 結

本調査では、弥生時代から中近世の遺構や遺物を確認した。ここでは、時期別にまとめを行う。

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構は、後期に時期比定されるものであり、竪穴式住居址、溝、土坑、井戸、土器棺墓他である。竪穴式住居址は1区と2区でそれぞれ1棟ずつを検出した。2区検出のS B 201は3.3×4 m前後の長方形住居址で、住居内からは弥生土器のほかに、軟質土器片や滑石製の有孔円板が出土している。次に井戸は、1区で4基、3区で1基の計5基を検出した。特に1区検出の3基の井戸（S E 101・102・104）は一部重複箇所がみられることや、出土遺物に時期差があまり認められないことから、短期間での掘削、埋戻が行われたものと考えられる。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模では径1.6～2.0mのもの（S E 101・102・104・301）と推定径3 mを超えるもの（S E 103）とに分かれる。深さは検出面下80～150cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、一部筒状もしくは袋状となる。堆積状況は水平または斜堆積をなすが、3基の井戸（S E 101～103）では埋土中位から上位にかけて再掘削された状況が認められた。また、完形品（完存品含む）が弧状に配置されたS E 301や、土器片が埋土上位にてレンズ状に折り重なって出土したS E 103などがあり、これらの状況から、井戸内にて土器の廃棄または祭祀行為が行われたものと推測される。注目される遺物には、S E 301から出土した線刻土器がある。完形または完存品の壺形土器9点の肩部に、幅2～3 mm、長さ2 cmほどの2本の線刻が施されている（記号）。線刻は焼成前に施されている。他の遺構や包含層中からは、このような線刻土器は出土していないことや、S E 301の遺物出土状況などから、祭祀行為に使用する目的のために付けられた目印ではないかと推測される。このほか、S E 103からは匙形土製品が2点出土した。両者共に体部は楕円形、皿状を呈している。また、S E 102・103及びS X 106・204からは、岡山県の影響を受けたと考えられる外来的要素の強い土器も出土している。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構は掘立柱建物址と溝、土坑である。調査地中央部2区で検出した掘立201は2×4間の建物址で、柱穴内からは土師器、須恵器のほか軟質土器と有孔円板、白玉が出土した。溝や土坑は検出されてはいるが、調査地全域に点在する状況であった。

(3) 中近世

中世の遺構は溝と土坑、土坑墓がある。このうち、土坑墓6基は1区中央部にて検出した。平面形態では、円形1基と長方形5基に分けられる。長方形のものは、幅1.0～1.6m、長さ1.9～2.6mを測る。土坑内からは木棺や人骨等は出土していないが、床面付近から完形の土師器坏や皿、鉄釘が出土したことから土坑墓と判断した。出土遺物の特徴から、概ね14世紀代の墓と考えられる。土坑墓以外の遺構は、調査地全域に点在しているが、少なくとも中世段階に調査地が一部墓域として利用されていたと判断される。近世では1区検出のS D 102内や、出土層位不明品ながら、肥前系の磁器碗が出土した。

(4) まとめ

本調査では、弥生時代から中近世までの遺構・遺物を確認することができた。弥生時代では住居址や溝、井戸などが検出され、後期集落が調査地全域に広く展開していることがわかった。また、古墳時代の遺構も少数ではあるが検出されており、弥生時代から継続して集落が営まれていたことが判明した。さらに、中世では調査地が墓域として土地利用されたことがわかり、弥生時代から中世にいたる複合遺跡であることが判明した。古代集落に関連する資料は得られなかったが、調査地北側に隣接する石井幼稚園遺跡より該期の遺構、遺物が検出されている。

今後は各時期の集落動態や様相を追求し、石井地区における弥生時代から中世までの集落構造や変遷及び古地形・古環境の復元につとめるものである。

第7章 自然科学分析

I. 西石井遺跡1次調査地1区における樹種同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、弥生時代終末の竪穴住居址S B 101から採取された炭化材33点である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果（第394図）

結果を表6に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

針葉樹 conifer

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかである。

放射断面：部分的ではあるが、放射柔細胞の分野壁孔は、やや小型のものが1分野に2個存在する。

なおその型は不明瞭である。

接線断面：仮道管と単列の放射組織が存在する。

以上の形質は、針葉樹のヒノキ、サワラに類似するが、本試料は小片で保存状態が悪く広範囲の観察が困難なため、針葉樹の同定にとどめた。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

シイ属 *Castanopsis* ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに

用いられる。

なお、シイ属にはスダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片で保存状態が悪く広範囲の観察が困難なため、シイ属の同定にとどめた。

ブナ科 Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管と、火炎状に配列する小道管が見られた。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科のクリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかに同定される。なお、本試料は小片で保存状態が悪く広範囲の観察が困難なため、ブナ科の同定にとどめた。

5. 所見

分析の結果、弥生時代終末の竪穴住居址 S B 101 から採取された炭化材は、シイ属 10、ブナ科 9、針葉樹 9、ツブラジイ 5 と同定された。ツブラジイとシイ属は、西南日本の暖温帯に分布する照葉樹林の主要な構成要素であり、高木で大きな材が採取でき、やや耐朽、保存性は低いが建築材によく用いられる。ブナ科もツブラジイやシイ属である可能性が高いことから、竪穴住居址 S B 101 の用材はツブラジイなどのシイ属が主体と考えられ、針葉樹も多く利用されていたと推定される。

文献

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。

木材の構造, 文永堂出版, p. 20-48.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。

木材の構造, 文永堂出版, p. 49-100.

島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土

土木製品総覧, 雄山閣, p. 296

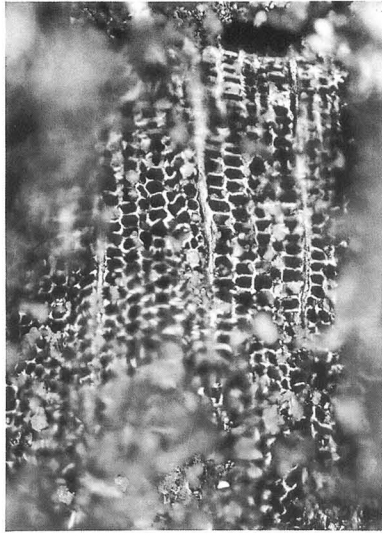
山田昌久 (1993) 日本列島における木質

遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別

第 1 号, 植生史研究会, p. 242

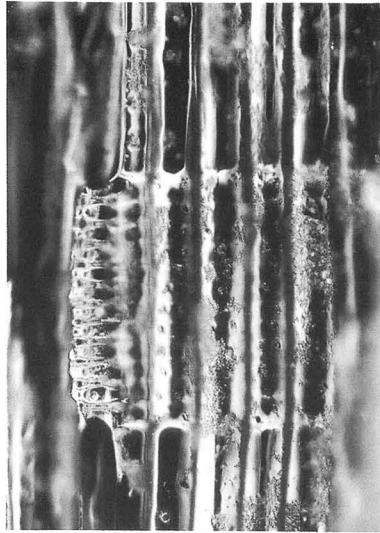
表 6 西石井遺跡 1 次調査地 1 区における樹種同定結果

No.	出土遺構・層位	取上No.	結果 (学名/和名)
1	SB101 1区 貼床土上面	1-1	conifer 針葉樹
2	SB101 1区 貼床土上面	1-2	conifer 針葉樹
3	SB101 1区 貼床土上面	1-3	Fagaceae ブナ科
4	SB101 1区 貼床土上面	1-4	Fagaceae ブナ科
5	SB101 1区 貼床土上面	1-5	Fagaceae ブナ科
6	SB101 1区 貼床土上面	1-6	Fagaceae ブナ科
7	SB101 1区 貼床土上面	1-7	Fagaceae ブナ科
8	SB101 2区 貼床土上面	1-8	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky ツブラジイ
9	SB101 2区 貼床土上面	1-9	Fagaceae ブナ科
10	SB101 2区 貼床土上面	1-10	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky ツブラジイ
11	SB101 2区 貼床土上面	1-11	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky ツブラジイ
12	SB101 2区 貼床土上面	1-12	conifer 針葉樹
13	SB101 2区 貼床土上面	1-13	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky ツブラジイ
14	SB101 3区 貼床土上面	1-14	<i>Castanopsis</i> シイ属
15	SB101 3区 貼床土上面	1-15	conifer 針葉樹
16	SB101 3区 貼床土上面	1-16	<i>Castanopsis</i> シイ属
17	SB101 3区 貼床土上面	1-17	Fagaceae ブナ科
18	SB101 4区 貼床土上面	1-18	<i>Castanopsis</i> シイ属
19	SB101 4区 貼床土上面	1-19	<i>Castanopsis</i> シイ属
20	SB101 4区 貼床土上面	1-20	conifer 針葉樹
21	SB101 4区 貼床土上面	1-21	Fagaceae ブナ科
22	SB101 4区 貼床土上面	1-22	conifer 針葉樹
23	SB101 4区 貼床土上面	1-23	conifer 針葉樹
24	SB101 3区 貼床土	2-1	<i>Castanopsis</i> シイ属
25	SB101 3区 貼床土	2-2	<i>Castanopsis</i> シイ属
26	SB101 3区 貼床土	2-3	<i>Castanopsis</i> シイ属
27	SB101 4区 貼床土	2-4	conifer 針葉樹
28	SB101 4区 貼床土	2-5	conifer 針葉樹
29	SB101 4区 貼床土	2-6	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky ツブラジイ
30	SB101 2区 床面	3-1	<i>Castanopsis</i> シイ属
31	SB101 3区 床面	3-2	<i>Castanopsis</i> シイ属
32	SB101 4区 床面	3-3	<i>Castanopsis</i> シイ属
33	SB101 4区 床面	3-4	Fagaceae ブナ科



横断面 ————— : 0.2mm

1. サンプルNo.28 針葉樹



放射断面 ————— : 0.1mm

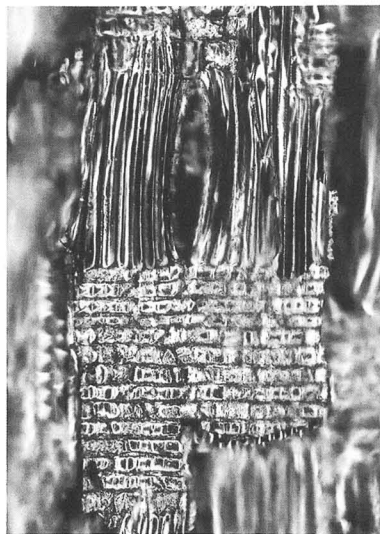


接線断面 ————— : 0.2mm

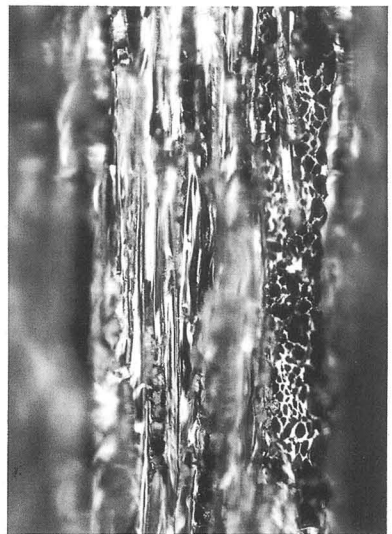


横断面 ————— : 0.4mm

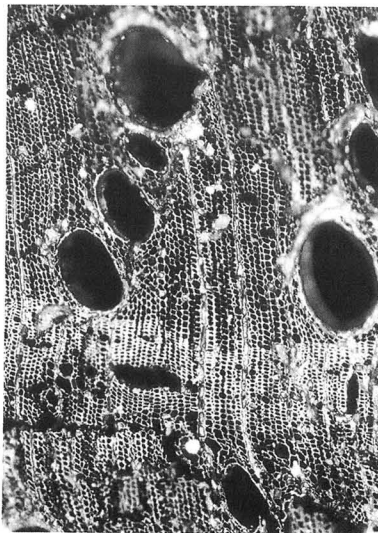
2. サンプルNo.29 ツブラジイ



放射断面 ————— : 0.2mm

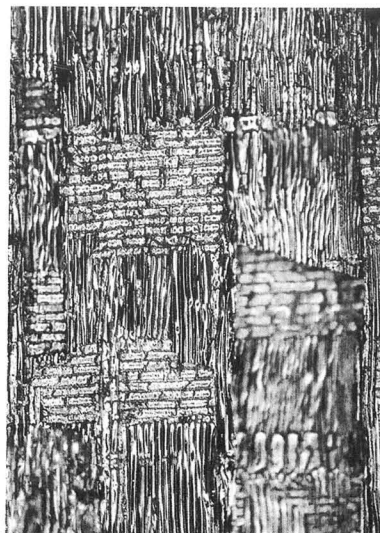


接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm

3. サンプルNo.30 シイ属



放射断面 ————— : 0.4mm



接線断面 ————— : 0.2mm

第394図 西石井遺跡1次調査地出土の炭化材

II. 西石井遺跡2次調査地における植物珪酸体（プラント・オパール）分析 株式会社古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山,2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山,1984）。

2. 試料

分析試料は、S E401、1区東壁、3A区東壁、3B区南壁、3B区検出面、およびS B201から採取された計29点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果（第395～400図）

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表7・8および第395～399図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型(おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、その他

5. イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネのみが検出された。

(1) イネ

イネは、S E 401の埋土(試料1、2、4、7)、1区東壁のⅡ①層(試料9)、3 A区東壁のⅣ層(試料16~18)、3 B区南壁のⅣ層(試料21)、およびS B 201の焼土No.4~No.6(試料27~29)から検出された。

このうち、中世とされる1区東壁のⅡ①層(試料9)では密度が4,900個/gと高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを上回っている。また、弥生時代後期~古墳時代とされる3 A区東壁のⅣ層(試料16)でも5,400個/gと高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

弥生時代後期初頭頃とされる3 B区南壁のⅣ層(試料21)では、密度が800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

弥生時代後期後半頃とするS E 401(井戸)の埋土(試料1、2、4、7)では、密度が700~800と低い値である。このことから、当時は調査区周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で井戸内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

弥生時代中期後半とするS B 201(焼失住居)の焼土では、密度が1,400~4,200個/gと比較的高い値である。このことから、同遺構では屋根材や敷物、燃料などとしてイネ藁が利用されていた可能性が考えられる。

弥生時代後期初頭頃の水田層の可能性が示唆されていた3 B区南壁のⅥ①層(試料22、23)および足跡状遺構(試料25、26)では、イネはまったく検出されなかった。

(2) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題とした。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

6. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

(1) S E401 (井戸) (第395図)

埋土底部の12層では、ネザサ節型が比較的多く検出され、イネ、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、および樹木(照葉樹)のブナ科(シイ属)やクスノキ科なども検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い。埋土中上部の5・7・9~11層では、メダケ節型やネザサ節型が増加しており、部分的にヨシ属も出現している。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ節型が優勢となっている。なお、同時期のその他の試料と比較して、植物珪酸体の密度や組成に特に明瞭な特徴は認められなかった。

以上のことから、弥生時代後期後半頃とするS E401(井戸)の埋土の堆積当時は、メダケ属(おもにネザサ節)を主体としてウシクサ族なども見られるイネ科植生であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、遺跡周辺にはブナ科(シイ属)やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられる。なお、前述のように当時は調査区周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で井戸内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

(2) 1区東壁(第396図)

Ⅲ①層からⅧ層にかけては、ネザサ節型が比較的多く検出され、メダケ節型も検出された。また、部分的にヨシ属、ウシクサ族A、クスノキ科なども検出された。Ⅱ①層(試料9)では、前述のようにイネが多量に検出された。おもな分類群の推定生産量によると、Ⅲ①層~Ⅷ層ではネザサ節型が優勢であり、Ⅱ①層ではイネが優勢となっている。

以上のことから、弥生時代中期以前と考えられるⅥ①層から古墳時代以降とされるⅢ①層にかけては、メダケ属(おもにネザサ節)を主体としたイネ科植生であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。また、中世とされるⅡ①層では、前述のように稲作が行われていたと推定される。

(3) 3A区東壁(第397図)

Ⅷ層およびⅥ①層では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、メダケ節型、クスノキ科なども検出された。Ⅳ層では、ネザサ節型やメダケ節型が増加しており、前述のようにイネが多量に検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ節型が優勢であり、Ⅳ層ではイネも多くなっている。

以上のことから、Ⅷ層から弥生時代後期とされるⅣ層にかけては、メダケ属(おもにネザサ節)を